九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
—53—

朝倉郡朝倉町大字菱野所在原の東遺跡の調査Ⅱ

1999

福岡県教育委員会

原の東遺跡Ⅱ　語句訂正

p250～289、311に記載した切断は、折断である。

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
—53—

朝倉郡朝倉町大字菱野所在原の東遺跡の調査Ⅱ

平成10年度

原の東遺跡俯瞰

銅線入りガラス玉顕微鏡写真（約25倍）

巻頭図版 2

石組炉俯瞰

II 区石組炉群

序

本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和62年～63年度に実施した九州横断自動車道建設に伴う、福岡県朝倉郡朝倉町に所在する原の東遺跡の埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

原の東遺跡の調査では、主に古墳時代から旧石器時代までの大規模な複合遺跡であることが分かり、特に縄文時代早期の石組炉群と数多くの旧石器の出土は、今後の縄文時代や旧石器時代の研究に大きく寄与するものと思われます。

九州横断自動車道に係る発掘調査は、昭和54年から始まり、平成２年の大迫遺跡の調査で完了しました。実に11年の歳月を要しました。その後、調査結果の整理・報告作業を実施してきましたが、平成10年度ですべての事業を終了しました。

調査ならびに報告書の作成にあたりましては、地域の方々をはじめ数多くの皆様方にご協力を賜り、多大の成果を得ることができましたことを深謝いたします。

なお、本報告書をとおして文化財愛護思想の普及ならびに遺跡研究の一助となれば幸甚に存じます。

平成11年３月31日

福岡県教育委員会
教育長　光安常喜

例　言

1　本書は、昭和62年・63年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて発掘調査を実施した原の東遺跡の調査報告書で、九州横断自動車道関係文化財調査報告の53冊目にあたる。

2　遺構実測は、調査担当者の他、小田和利（南筑後教育事務所）・武田光正（遠賀町教育委員会）・日高正幸（小石原村教育委員会）・佐土原逸男・高瀬セツ子・本石セツ子・後藤カミヨ・牟田サエ子の協力を得た。

3　遺構写真は、各担当者が撮影し、空中写真はフォト・大塚に委託した。また、顕微鏡写真は九州歴史資料館の横田義章学芸二課長が撮影し、その他の遺物写真は文化財保護課整理指導員の北岡伸一が九州歴史資料館と甘木事務所で撮影した。

4　遺物の整理作業は、文化財保護課甘木事務所・太宰府事務所・九州歴史資料館で実施し、実測は木下　修（県立美術館）・佐々木隆彦・森井啓二（文化財保護課）・水ノ江和同（北九州教育事務所）・杉原敏之（九州歴史資料館）・原富子・岡泰子・丸山小夜子・久富美智子・松崎卓郎が行い、製図作業は、木下・水ノ江・杉原・今井涼子（文化財保護課）・豊福弥生・塩足里美が分担した。また、鉄器処理は九州歴史資料館で行った。

5　自然科学の分野での遺跡の古環境復元・石材分析は、パリノサーヴェイ株式会社と委託契約し、また、C－14試料による年代測定については日本アイソトープ協会に委託した。

6　挿図方位は座標北である。

7　本書の執筆は、木下・佐々木・水ノ江・杉原が分担し、文末に明記した。

8　本書の編集は、木下・水ノ江・杉原と協議し佐々木が担当した。

本 文 目 次

頁

Ⅰ　発掘調査の経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と周辺の環境 …… 6

Ⅲ　発掘調査の記録 …… 9

1　遺跡の概要 …… 9
2　Ⅱ区の遺構と遺物 …… 12
1）層　　序 …… 12
2）古墳時代以降の遺構と遺物 …… 16
（1）竪穴住居跡 …… 16
（2）土　　坑 …… 17
（3）出土遺物 …… 19
3）古墳時代の遺構と遺物 …… 22
（1）古　　墳 …… 24
（2）土 壙 墓 …… 57
（3）出土遺物 …… 57
4）弥生時代の遺構と遺物 …… 79
（1）竪穴住居跡 …… 81
（2）貯 蔵 穴 …… 92
（3）土　　坑 …… 95
（4）出土遺物 …… 102
5）縄文時代の遺構と遺物 …… 133
（1）調査区と遺構の概要 …… 133
（2）土　　坑 …… 133
（3）石 組 炉 …… 138
（4）集石遺構 …… 158
（5）遺構出土遺物 …… 162

（6）5層出土の遺物 ……170
（7）6層出土の遺物 ……195
（8）7層出土の遺物 ……197
（9）その他の遺物 ……197
6）旧石器時代の遺物……235
3　Ⅲ区の遺構と遺物 ……236
1）遺構の概要と調査区の設定 ……236
2）層　　序 ……236
3）古墳時代以降の遺構と遺物 ……238
（1）掘立柱建物跡 ……238
（2）土　　坑 ……238
（3）溝 ……239
4）縄文時代（5層）の遺構と遺物……239
（1）5層の地形 ……239
（2）石　組　炉 ……240
（3）土　　坑 ……242
（4）5層出土の遺物 ……242
5）縄文時代（6層）の遺構と遺物……246
（1）6層の地形 ……246
（2）土　　坑 ……246
（3）6層出土の遺物 ……247
6）その他の遺物 ……249
7）旧石器時代の遺構と遺物 ……250
（1）9a層の遺構と遺物 ……250
（2）9b層の遺構と遺物 ……263
（3）10a層の遺物 ……268
（4）10b層の遺物 ……271
（5）10c層の遺構と遺物 ……275
（6）その他の遺物 ……283

Ⅳ　自然科学の調査 ……290
1　原の東遺跡の古環境復元 ……290
はじめに ……290
1　周辺の地形・地質概観 ……290
2　試　料 ……291
3　分析方法 ……292
4　結　果 ……292
5　考　察 ……294
2　原の東遺跡出土遺物の自然科学分析 ……296
はじめに ……296
1　安山岩製石器の薄片作製鑑定 ……296
2　黒曜石製石器の成分分析（蛍光X線分析） ……301
3　C－14試料による年代測定 ……303
Ⅴ　総　　括 ……305
1　古墳の築造と変遷 ……305
2　弥生時代の遺構について ……306
3　石組炉と集石遺構 ……307
4　原の東遺跡出土の縄文土器 ……309
5　旧石器時代の石器群について ……311
6　おわりに ……312

図 版 目 次

巻頭図版１（１）原の東遺跡俯瞰
（２）銅線入りガラス玉顕微鏡写真
巻頭図版２（１）石組炉俯瞰
（２）Ⅱ区石組炉群

本文対照頁

図 版 1　原の東遺跡俯瞰（気球写真より）……9
図 版 2（１）原の東遺跡Ⅱ・Ⅳ区俯瞰（気球写真より）……9
（２）原の東遺跡Ⅱ区西側俯瞰（気球写真より）……9
図 版 3（１）１号竪穴住居跡（北から）……16
（２）４号竪穴住居跡（東から）……17
図 版 4（１）１号・２号土坑（北から）……17
（２）３号土坑（北から）……18
図 版 5（１）１号墳俯瞰（気球写真より）……24
（２）１号墳主体部（南東から）……25
図 版 6（１）１号墳周溝内土器出土状態……26
（２）２号墳俯瞰（気球写真より）……27
図 版 7（１）２号墳主体部（南東から）……28
（２）２号墳主体部細部……28
図 版 8（１）３号墳俯瞰（気球写真より）……29
（２）３号墳主体部（南から）……29
図 版 9（１）３号墳主体部遺物出土状態（南から）……31
（２）３号墳主体部鉄器出土状態……32
図 版 10（１）３号墳主体部鉄器出土状態……32
（２）３号墳主体部鉄器出土状態……32
図 版 11（１）３号墳主体部東隅鉄器出土状態……32
（２）３号墳周溝内土器出土状態……31
図 版 12（１）４号墳俯瞰（気球写真より）……32
（２）４号墳主体部（南から）……33
図 版 13（１）５号・８号墳、４号土坑俯瞰（気球写真より）……34

（2）5号墳主体部（北から）……34
図　版　14（1）5号墳周溝内土器出土状態……35
（2）5号墳周溝内勾玉出土状態……35
図　版　15（1）5号墳周溝内土器出土状態……35
（2）6号墳俯瞰（気球写真より）……35
図　版　16（1）6号墳主体部（北から）……36
（2）6号墳主体部鉄器出土状態……37
図　版　17（1）6号墳主体部鉄器出土状態……37
（2）7号墳俯瞰（気球写真より）……37
図　版　18（1）7号墳主体部（南から）……39
（2）7号墳主体部西側小口部……39
図　版　19（1）7号墳主体部側壁と小口部……39
（2）8号墳主体部（南から）……40
図　版　20（1）9号墳俯瞰（気球写真より）……41
（2）9号墳主体部（南から）……43
図　版　21（1）9号墳主体部鉄鋤出土状態……43
（2）10号墳主体部（北から）……44
図　版　22（1）10号墳主体部鉄器出土状態……44
（2）10号墳主体部鉄器出土状態……44
（3）10号墳主体部鉄器出土状態……44
図　版　23（1）11号墳俯瞰（気球写真より）……45
（2）11号墳主体部（南から）……46
図　版　24（1）12号墳俯瞰（気球写真より）……47
（2）12号墳主体部（南から）……47
図　版　25（1）13号・14号・16号墳俯瞰（気球写真より）……49
（2）13号墳主体部（南東から）……49
図　版　26（1）13号墳周溝内土器出土状態……49
（2）14号墳主体部（東から）……50
図　版　27（1）15号墳主体部（西から）……52
（2）15号墳主体部閉塞状態……53
図　版　28（1）16号墳（南東から）……54
（2）16号墳主体部（南東から）……54
図　版　29（1）17号墳俯瞰（気球写真より）……54

（2）12号土壙墓（南から）……57
図　版 30　1号竪穴住居跡、2号・3号土坑、2号・3号墳出土と採集遺物……58
図　版 31　3号～5号・7号・13号墳出土遺物……59
図　版 32　1号～3号・6号・9号・10号・14号・15号墳、表採出土鉄器……66
図　版 33　3号墳出土鉄器……70
図　版 34　3号・6号・10号墳出土鉄器……71
図　版 35　3号・5号・7号・9号墳出土玉類……75
図　版 36（1）2号竪穴住居跡、10号墳俯瞰（気球写真より）……81
（2）2号竪穴住居跡石皿出土状態……81
図　版 37（1）3号竪穴住居跡、12号墳俯瞰（気球写真より）……81
（2）5号竪穴住居跡（東から）……84
図　版 38（1）6号竪穴住居跡、16号土坑（西から）……85
（2）10号竪穴住居跡俯瞰（気球写真より）……85
図　版 39（1）11号・12号竪穴住居跡俯瞰（気球写真より）……87
（2）12号竪穴住居跡俯瞰（気球写真より）……88
図　版 40（1）12号竪穴住居跡中央土坑遺物出土状態……89
（2）1号貯蔵穴（北から）……92
図　版 41（1）2号貯蔵穴（南東から）……92
（2）3号貯蔵穴（北から）……94
図　版 42（1）4号貯蔵穴、14号土坑（西から）……94
（2）5号貯蔵穴（西から）……94
図　版 43（1）6号貯蔵穴（西から）……95
（2）4号土坑（北から）……96
図　版 44（1）5号土坑（北から）……96
（2）6号土坑遺物出土状態（南東から）……96
図　版 45（1）6号土坑遺物除去後の状態……96
（2）7号土坑（東から）……96
図　版 46（1）8号土坑（東から）……98
（2）9号土坑（南から）……98
図　版 47（1）10号・11号土坑遺物出土状態（南から）……98
（2）10号・11号土坑遺物除去後の状態（北から）……98
図　版 48（1）15号土坑（北から）……100
（2）17号土坑（東から）……101

図 版 49（1）20号土坑（北から）……101
（2）22号土坑（東から）……101
図 版 50 2号・3号・6号竪穴住居跡出土遺物……102
図 版 51 12号竪穴住居跡、1号・2号貯蔵穴出土遺物……104
図 版 52 3号・4号貯蔵穴、1号・5号・6号土坑出土遺物……106
図 版 53 6号・7号・11号・15号～17号・22号土坑出土遺物……109
図 版 54 2号・3号・11号・12号竪穴住居跡、3号貯蔵穴とその他の出土石器・土製品 128
図 版 55 原の東遺跡下層グリッド俯瞰（気球写真より）……133
図 版 56（1）34号土坑（東から）……137
（2）石組炉群（北から）……138
図 版 57（1）1号石組炉（北から）……138
（2）2号・3号石組炉（東から）……138
図 版 58（1）4号石組炉（北から）……141
（2）5号・6号・29号石組炉（北から）……141
図 版 59（1）7号石組炉（北から）……142
（2）8号石組炉（西から）……142
図 版 60（1）9号石組炉（東から）……142
（2）10号石組炉（南から）……145
図 版 61（1）11号石組炉（東から）……145
（2）12号石組炉（北西から）……146
図 版 62（1）13号石組炉（北から）……146
（2）14号石組炉（北東から）……147
図 版 63（1）15号石組炉（北から）……147
（2）16号石組炉（北西から）……147
図 版 64（1）17号石組炉（北から）……147
（2）18号石組炉（西から）……147
図 版 65（1）19号石組炉（東から）……147
（2）20号石組炉（北から）……149
図 版 66（1）21号石組炉（南東から）……149
（2）22号石組炉（北から）……150
図 版 67（1）23号石組炉（北から）……150
（2）24号石組炉（北東から）……150
図 版 68（1）25号石組炉上層（西から）……151

（2）25号石組炉下層（南から）……151
図　版　69（1）26号石組炉（北から）……151
（2）27号石組炉（南から）……152
図　版　70（1）28号石組炉と有孔石器（西から）……152
（2）有孔石器出土状態……152
図　版　71（1）30号石組炉（南東から）……154
（2）31号・33号石組炉（南東から）……154
図　版　72（1）31号石組炉土層堆積状態……154
（2）32号石組炉（南東から）……155
図　版　73（1）34号石組炉（北から）……155
（2）35号石組炉（東から）……155
図　版　74（1）36号石組炉（南東から）……155
（2）1号集石遺構（北東から）……158
図　版　75（1）2号集石遺構（南西から）……158
（2）4号集石遺構（北西から）……158
図　版　76（1）5号集石遺構（東から）……159
（2）6号集石遺構（南から）……159
図　版　77（1）7号集石遺構（西から）……159
（2）8号集石遺構（南東から）……159
図　版　78（1）9号集石遺構（東から）……159
（2）10号集石遺構（北から）……159
図　版　79（1）Ⅲ区上層俯瞰（気球写真より）……236
（2）Ⅲ区下層俯瞰（気球写真より）……239
図　版　80（1）37号石組炉（北から）……240
（2）11号集石遺構（西から）……263
図　版　81（1）12号集石遺構（南東から）……275
（2）13号集石遺構（西から）……275
図　版　82（1）Ⅲ区1Ｔｒｅ9ａ層遺物出土状態……236
（2）Ⅲ区Ｍ9区土層堆積状態……275
図　版　83　Ⅲ区遺物出土状態……250
図　版　84　土坑・炉跡・集石出土縄文土器……222
図　版　85　集石、Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器……222
図　版　86　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器……223

図　版　87　Ⅱ・Ⅲ区５・６層、包含層出土縄文土器．１ ……224
図　版　88　Ⅱ・Ⅲ区５・６層、包含層出土縄文土器．２ ……227
図　版　89　Ⅱ区出土石器１ ……230
図　版　90　Ⅱ区出土石器２ ……232
図　版　91　Ⅱ区出土石器３ ……233
図　版　92　Ⅱ区出土石器４ ……233
図　版　93　Ⅱ・Ⅲ区出土石器 ……234
図　版　94　Ⅲ区９ａ層出土石器 ……251
図　版　95　Ⅲ区９ａ層出土石器 ……253
図　版　96　Ⅲ区９ｂ・10ａ層出土石器 ……264
図　版　97　Ⅲ区10ｂ・10ｃ層出土石器 ……271
図　版　98　Ⅲ区10ｃ層出土・その他の石器 ……282

（自然科学の調査）

図　版　1　砂分の状況および火山ガラス ……292
図　版　2　植物珪酸体 ……293
図　版　3　岩石薄片顕微鏡写真 ……296
図　版　4　岩石薄片顕微鏡写真 ……297
図　版　5　岩石薄片顕微鏡写真 ……298
図　版　6　岩石薄片顕微鏡写真 ……298
図　版　7　岩石薄片顕微鏡写真 ……299
図　版　8　岩石薄片顕微鏡写真 ……300

挿 図 目 次

第１図　九州横断自動車道路線図（約1/840,000）……2
第２図　原の東遺跡周辺地形図（1/10,000）……5
第３図　原の東遺跡周辺主要遺跡分布図（1/25,000）……7
第４図　原の東遺跡地形図（1/2,000）……8
第５図　地区割図（1/1,200）……10
第６図　原の東遺跡土層堆積図（1/40）……11
第７図　Ⅱ区土層図（1/40）……13
第８図　古墳時代以降の遺構配置図（1/500）……15
第９図　１号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/40）……16
第10図　４号竪穴住居跡実測図（1/60）……17
第11図　２号・３号土坑実測図（1/80）……18
第12図　１号・４号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……19
第13図　２号・３号土坑出土土器実測図（1/3）……20
第14図　溝１・その他の出土土器実測図（1/3）……21
第15図　古墳群分布図（1/500）……23
第16図　１号墳実測図（1/100）……24
第17図　１号墳墳丘土層断面実測図（1/40）……25
第18図　１号墳周溝土層断面実測図（1/30）……25
第19図　１号墳主体部実測図（1/40）……26
第20図　２号墳実測図（1/80）……27
第21図　２号墳周溝土層断面実測図（1/30）……28
第22図　２号墳主体部実測図（1/40）……28
第23図　３号墳実測図（1/100）……折り込み
第24図　３号墳周溝土層断面実測図（1/30）……29
第25図　３号墳主体部実測図（1/40）……30
第26図　４号墳実測図（1/80）……31
第27図　４号墳周溝土層断面実測図（1/30）……32
第28図　４号墳主体部実測図（1/40）……32
第29図　５号墳実測図（1/100）……33
第30図　５号墳周溝土層断面実測図（1/30）……34

第31図　5号墳主体部実測図（1/40）……35
第32図　6号墳実測図（1/80）……36
第33図　6号墳主体部実測図（1/40）……37
第34図　7号墳実測図（1/100）……38
第35図　7号墳周溝土層断面実測図（1/30）……39
第36図　7号墳主体部実測図（1/40）……40
第37図　8号墳実測図（1/80）……41
第38図　8号墳主体部実測図（1/30）……41
第39図　9号墳実測図（1/80）……42
第40図　9号墳周溝土層断面実測図（1/30）……43
第41図　9号墳主体部実測図（1/40）……43
第42図　10号墳主体部実測図（1/40）……44
第43図　11号墳実測図（1/80）……45
第44図　11号墳主体部実測図（1/40）……46
第45図　12号墳実測図（1/80）……47
第46図　12号墳主体部実測図（1/40）……47
第47図　13号・16号墳実測図（1/80）……48
第48図　13号墳主体部実測図（1/30）……49
第49図　14号墳実測図（1/80）……50
第50図　14号墳主体部実測図（1/40）……51
第51図　15号墳墳丘土層断面実測図（1/40）……52
第52図　15号墳主体部実測図（1/40）……53
第53図　16号墳主体部実測図（1/30）……54
第54図　17号墳（旧溝2）実測図（1/120）……55
第55図　12号・19号・21号土壙墓実測図（1/30）……56
第56図　1号～3号墳出土土器実測図（1/3）……58
第57図　3号・4号墳出土土器実測図（1/3）……59
第58図　5号墳出土土器実測図（1/3）……60
第59図　7号・9号墳出土土器実測図（1/3）……61
第60図　13号・17号墳、ピット出土土器実測図（1/3）……62
第61図　1号～3号墳出土鉄器実測図（1/2）……67
第62図　3号墳出土鉄器実測図（1/2・1/4）……69
第63図　3号・10号墳出土鉄器実測図（1/3・1/6）……70

第64図　5号・6号・9号～11号・14号・15号墳と表採鉄器実測図（1/2）……72
第65図　3号・5号墳出土滑石製品、ガラス小玉実測図（1/1・1/2）……74
第66図　5号・7号・9号墳、表採玉類実測図（1/1）……79
第67図　弥生時代遺構配置図（1/500）……80
第68図　2号竪穴住居跡実測図（1/60）……82
第69図　3号竪穴住居跡実測図（1/60）……83
第70図　5号竪穴住居跡実測図（1/60）……84
第71図　6号・10号竪穴住居跡実測図（1/60）……85
第72図　11号竪穴住居跡実測図（1/60）……86
第73図　11号竪穴住居跡中央土坑実測図（1/30）……87
第74図　12号竪穴住居跡実測図（1/60）……88
第75図　12号竪穴住居跡中央土坑実測図（1/30）……89
第76図　13号竪穴住居跡実測図（1/60）……89
第77図　14号・15号・17号竪穴住居跡実測図（1/60）……90
第78図　16号竪穴住居跡実測図（1/60）……91
第79図　1号～4号貯蔵穴実測図（1/40）……93
第80図　5号・6号貯蔵穴実測図（1/20・1/40）……94
第81図　1号・5号土坑実測図（1/40）……95
第82図　4号・6号～8号土坑実測図（1/60・1/30）……97
第83図　9号・11号・13号～15号土坑実測図（1/30・1/60）……99
第84図　16号・17号・20号・22号土坑実測図（1/30）……100
第85図　2号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……102
第86図　3号・5号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……103
第87図　5号・6号・10号～12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……104
第88図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……105
第89図　1号～3号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……106
第90図　3号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……107
第91図　3号・4号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……108
第92図　1号・4号～6号土坑出土土器実測図（1/4）……109
第93図　6号・7号・9号・11号・14号土坑出土土器実測図（1/4）……110
第94図　14号～18号・22号土坑出土土器実測図（1/4）……111
第95図　ピット出土土器実測図（1/4）……112
第96図　古墳周溝内及び掘方内出土土器実測図（1/4）……113

第97図　その他の出土土器実測図（1/4）……114
第98図　3号・11号・12号・15号竪穴住居跡、3号貯蔵穴出土石器実測図（2/3）……129
第99図　2号・3号・12号竪穴住居跡出土石器実測図（1/4・1/2）……131
第100図　1号・7号・9号土坑、その他の石器・土製品実測図（1/2・1/4）……132
第101図　縄文時代遺構配置図（1/500）……134
第102図　10号・25号・34号土坑実測図（1/20）……135
第103図　23号・26号土坑実測図（1/20・1/40）……136
第104図　24号土坑実測図（1/40）……137
第105図　1号～3号石組炉実測図（1/20）……139
第106図　4号・5号・29号石組炉実測図（1/20）……140
第107図　6号石組炉実測図（1/20）……141
第108図　4号～6号・15号・29号石組炉配置図（1/30）……142
第109図　7号～9号石組炉実測図（1/20）……143
第110図　10号～12号石組炉実測図（1/20）……144
第111図　13号・14号石組炉実測図（1/20）……145
第112図　15号・34号石組炉実測図（1/20）……146
第113図　16号～18号石組炉実測図（1/20）……148
第114図　19号・20号石組炉実測図（1/20）……149
第115図　21号・22号石組炉実測図（1/20）……150
第116図　23号・24号石組炉実測図（1/20）……151
第117図　26号・27号石組炉実測図（1/20）……152
第118図　25号石組炉実測図（1/20）……折り込み
第119図　28号・30号石組炉実測図（1/20）……153
第120図　31号・32号石組炉実測図（1/20）……154
第121図　33号・35号・36号石組炉実測図（1/20）……156
第122図　1号・2号・4号集石遺構実測図（1/20）……157
第123図　5号・6号集石遺構実測図（1/20）……158
第124図　7号・8号集石遺構実測図（1/20）……160
第125図　9号・10号集石遺構実測図（1/20）……161
第126図　10号土坑出土縄文土器実測図（1/3）……162
第127図　10号・23号・34号土坑出土縄文土器実測図（1/3）……163
第128図　石組炉跡出土縄文土器実測図（1/3）……164
第129図　1号・2号・7号・9号集石遺構出土縄文土器実測図（1/3）……166

第130図　9号集石遺構縄文土器実測図（1/3）……167
第131図　9号・10号集石遺構出土縄文土器実測図（1/3）……168
第132図　10号土坑出土石器実測図（1/2）……169
第133図　5層出土押型文土器分布図（1/600）……171
第134図　5層出土石器分布図（1/600）……172
第135図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図1（1/3）……175
第136図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図2（1/3）……176
第137図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図3（1/3）……177
第138図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図4（1/3）……178
第139図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図5（1/3）……179
第140図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図6（1/3）……180
第141図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図7（1/3）……181
第142図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図8（1/3）……182
第143図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図9（1/3）……183
第144図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図10（1/3）……184
第145図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図11（1/3）……185
第146図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図12（1/3）……186
第147図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図13（1/3）……187
第148図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図14（1/3）……188
第149図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図15（1/3）……189
第150図　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器実測図16（1/3）……190
第151図　Ⅱ区6層出土押型文土器分布図（1/600）……193
第152図　Ⅱ区6層出土石器分布図（1/600）……194
第153図　Ⅱ・Ⅲ区6層出土縄文土器実測図（1/3）……196
第154図　Ⅱ・Ⅲ区6・7層出土縄文土器実測図（1/3）……197
第155図　Ⅱ区出土石器実測図1（2/3）……198
第156図　Ⅱ区出土石器実測図2（2/3）……199
第157図　Ⅱ区出土石器実測図3（2/3）……200
第158図　Ⅱ区出土石器実測図4（1/2）……201
第159図　Ⅱ区出土石器実測図5（1/3）……202
第160図　Ⅱ区出土石器実測図6（1/3）……203
第161図　Ⅱ区出土石器実測図7（1/3）……204
第162図　Ⅱ区出土石器実測図8（1/3）……205

第163図　Ⅱ区出土石器実測図９（1/3）……206
第164図　Ⅱ区出土石器実測図10（1/3）……207
第165図　Ⅱ区出土石器実測図11（1/6）……208
第166図　Ⅱ区出土石器実測図12（1/6）……209
第167図　Ⅱ区出土石器実測図13（1/3・1/6）……210
第168図　Ⅱ区出土石器実測図14（1/3）……211
第169図　Ⅱ区出土石器実測図15（1/3）……212
第170図　Ⅱ区出土石器実測図16（2/3）……213
第171図　Ⅱ区出土石器実測図17（1/3）……214
第172図　包含層出土縄文後晩期土器実測図１（1/3）……215
第173図　包含層出土縄文後晩期土器実測図２（1/3）……216
第174図　包含層出土縄文後晩期土器実測図３（1/3）……217
第175図　包含層出土縄文後晩期土器実測図４（1/3）……218
第176図　包含層出土縄文後晩期土器実測図５（1/3）……219
第177図　包含層出土縄文早期土器実測図１（1/3）……220
第178図　包含層出土縄文早期土器実測図２（1/3）……221
第179図　Ⅱ区旧石器時代の石器実測図（2/3）……235
第180図　Ⅲ区土層堆積図（1/40）……237
第181図　掘立柱建物、30号土坑実測図（1/30）……238
第182図　５層地形図実測図（1/400）……239
第183図　37号・38号石組炉実測図（1/20）……240
第184図　27号・28号土坑実測図（1/20）……241
第185図　５層出土押型文土器分布図（1/400）……242
第186図　５層出土石器分布図（1/400）……242
第187図　Ⅲ区出土石器実測図１（1/2）……243
第188図　Ⅲ区出土石器実測図２（1/3）……244
第189図　Ⅲ区出土石器実測図３（1/3）……245
第190図　６層地形実測図（1/400）……246
第191図　31号・32号土坑実測図（1/40）……247
第192図　６層出土押型文土器分布図（1/400）……248
第193図　６層出土石器分布図（1/400）……248
第194図　９ａ層地形実測図（1/400）……250
第195図　33号土坑実測図（1/20）……250

第196図　9 a 層出土石器分布図（1/200）……252
第197図　9 a 層出土石器実測図 1（2/3）……254
第198図　9 a 層出土石器実測図 2（2/3）……255
第199図　9 a 層出土石器実測図 3（2/3）……256
第200図　9 a 層出土石器実測図 4（2/3）……257
第201図　9 a 層出土石器実測図 5（2/3）……258
第202図　9 a 層出土石器実測図 6（2/3）……259
第203図　9 a 層出土石器実測図 7（2/3）……260
第204図　9 a 層出土石器実測図 8（2/3）……261
第205図　9 a 層出土石器実測図 9（1/3）……262
第206図　9 b 層地形実測図（1/400）……263
第207図　11号集石遺構実測図（1/40）……264
第208図　9 b 層出土石器分布図（1/200）……265
第209図　9 b 層出土石器実測図 1（2/3）……266
第210図　9 b 層出土石器実測図 2（2/3）……267
第211図　10 a 層地形実測図（1/400）……268
第212図　10 a 層出土石器分布図（1/200）……269
第213図　10 a 層出土石器実測図 1（2/3）……270
第214図　10 a 層出土石器実測図 2（2/3）……271
第215図　10 b 層地形実測図（1/400）……271
第216図　10 b 層出土石器分布図（1/200）……272
第217図　10 b 層出土石器実測図 1（2/3）……273
第218図　10 b 層出土石器実測図 2（2/3）……274
第219図　10 c 層地形実測図（1/400）……275
第220図　M 9 区土層断面実測図（1/80）……275
第221図　12号・13号集石遺構実測図（1/20・1/40）……276
第222図　10 c 層出土石器分布図（1/250）……277
第223図　10 c 層出土石器実測図 1（2/3）……278
第224図　10 c 層出土石器実測図 2（2/3）……279
第225図　10 c 層出土石器実測図 3（2/3）……280
第226図　10 c 層出土石器実測図 4（2/3）……281
第227図　10 c 層出土石器実測図 5（2/3）……282
第228図　その他の出土・採集石器実測図（2/3）……284

第229図　10号土坑出土縄文土器実測図（1/3）……284
第230図　Ⅱ・Ⅲ区の模式土層断面および分析層位……291

表　目　次

第１表　九州横断自動車道関係遺跡一覧表……折り込み
第２表　層序と遺構・遺物の対比……11
第３表　出土土器観察表……19
第４表　３号墳出土不掲載滑石製臼玉計測表……76
第５表　Ⅱ区５・６層主要石器グリッド別一覧……192
第６表　縄文土器観察表……222
第７表　Ⅱ区出土石器一覧表……230
第８表　Ⅲ区５・６層主要石器グリッド別一覧……243
第９表　Ⅲ区出土石器一覧表……285
第10表　９ａ層出土石器観察表……285
第11表　９ｂ層出土石器観察表……287
第12表　10ａ層出土石器観察表……288
第13表　10ｂ層出土石器観察表……288
第14表　10ｃ層出土石器観察表……289
第15表　原の東遺跡旧石器石材総重量……289
第16表　テラフ分析結果……292
第17表　植物珪酸体分析結果……293
第18表　ガラス質安山岩試料表……296
第19表　顕微鏡観察一覧表……297
第20表　黒曜石製石器の成分分析試料……301
第21表　原の東遺跡黒曜石成分分析結果……302
第22表　日本地質調査所（ＧＳＪ）岩石標準試料ＪＲ－１の主成分化学分析値（1995）……302
第23表　Ⅱ・Ⅲ区石組炉一覧表……308
第24表　Ⅱ区集石遺構一覧表……308

付　図

付　図　原の東遺跡遺構配置図（1/200）

Ⅰ　発掘調査の経過

原の東遺跡は、第１次調査から第３次調査まで実施し、調査は、便宜的にⅠ区～Ⅳ区に区分して行った。昭和58年に実施した第１次調査分（第Ⅰ区）と第２次調査分の一部（第Ⅳ区）については、平成９年度に実績報告書を刊行している。今回報告する分は、昭和62年６月９日～昭和63年３月26日の間実施した第２次調査（第Ⅱ区）と第３次調査（第Ⅲ区）分である。Ⅱ区については、昭和62年６月９日から調査を開始したが、50集で記述したように、文化層が５乃至６層の存在が確認された。層序では、最上層で７世紀代の竪穴住居跡、土坑等が検出され、その下層では５世紀前半から中頃と考えられる円墳や方墳を検出した。

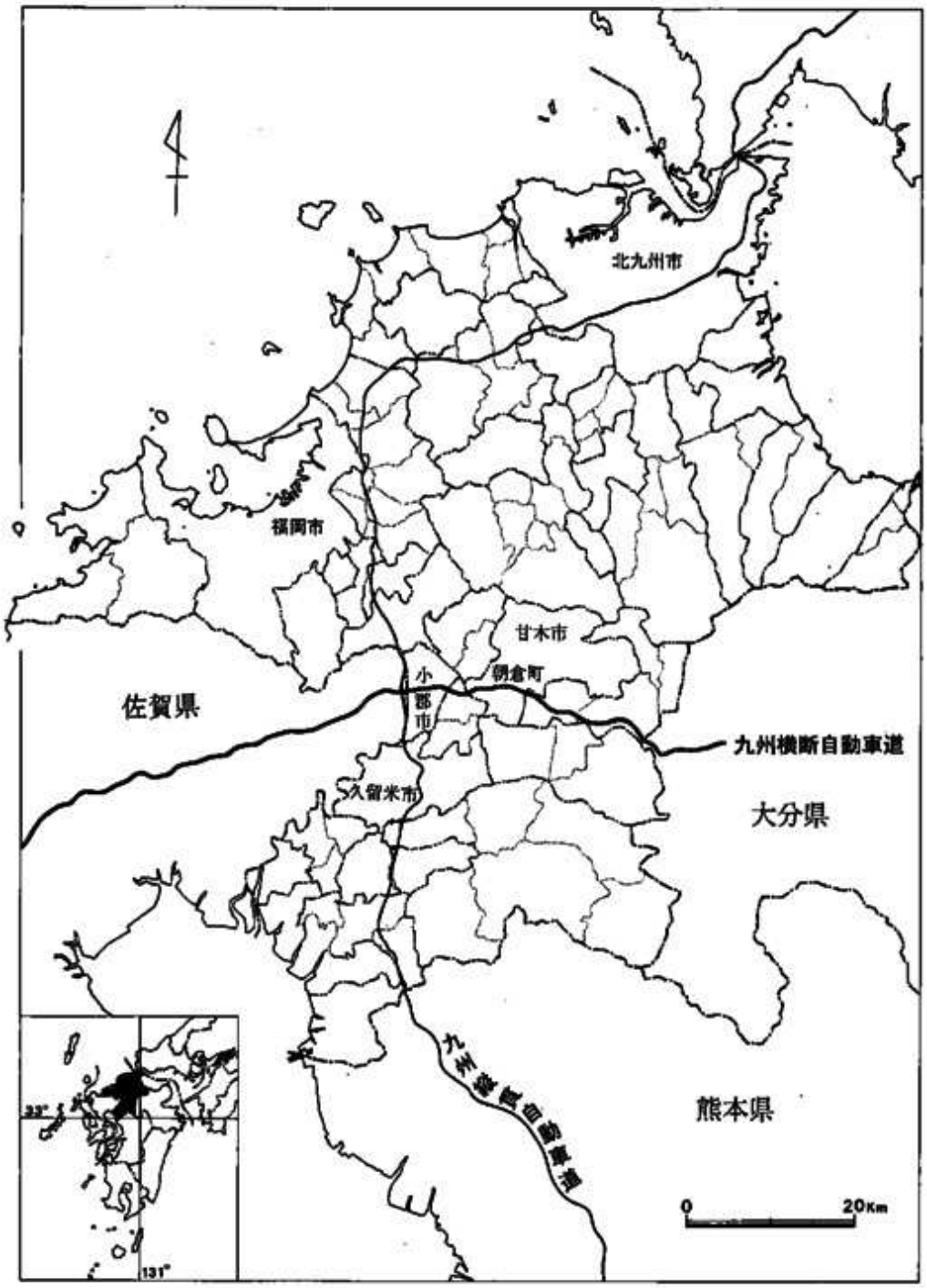
次の層では弥生時代前期末から中期前半にかけての竪穴住居跡や貯蔵穴、土坑等が分布していた。弥生時代の遺構を検出した層には河原石や縄文晩期と縄文草創期の土器片が各所に嵌入しており、弥生時代の遺構が終了した時点で、再度グリットを設定して下層の調査を実施したが、弥生時代の遺構を検出した面から20cm前後の縄文時代の包含層を除去し、不必要と思われる河原石を選別した結果、ほぼ前面にわたり早期の石組炉や集石遺構47基を検出した。これを受けて、別府大学の賀川光夫教授に指導を仰ぎ２月25日に現地にて記者発表を行った。

遺構の検出状況を見ると、最上層と次の層は調査区内が削平を受けていたためか、７世紀代と５世紀代の遺構を同一レベルで検出したが、弥生時代の竪穴住居の上層は10cm前後の包含層が堆積していたにも拘らず、古墳と重複するヶ所の竪穴住居の遺存状態が悪く、古墳を築造する段階で削平を受けたと推測される。

Ⅲ区については当初調査区から除外していたが、Ⅱ区で検出した石組炉や集石遺構の分布が東側のⅢ区にまで連続するような状況にあったため、急遽調査対象区に入れ調査したが、その結果、縄文早期の石組炉は２基と少なく石組炉群の東限を確認するとともに、その下層からは縄文時代早期から旧石器時代の包含層が深さ2.0mほど検出され、集石遺構３基、土坑１基の他、ナイフ形石器・台形石器・スクレパーなどが多数出土した。

出土遺構は下記の通りである。

古墳時代以降――竪穴住居跡２軒、掘立柱建物１棟、土坑３基、溝４条
古墳時代――――古墳17基、土壙墓３基
弥生時代――――竪穴住居跡12軒、貯蔵穴６基、土坑15基
縄文時代――――土坑10基、石組炉38基、集石遺構９基
旧石器時代――――集石遺構３基、土坑１基



第１図　九州横断自動車道路線図（約1/840,000）

第1表　九州横断自動車道関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	面積 ㎡	調査年度と面積 54年度	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H1	H2	備考	報告書
1	小郡正尻遺跡	小郡市大字小郡	弥生集落、歴史浦	11,200					5,000		560						完了	7集
2	前伏遺跡	〃　〃	弥生・古墳散布地	10,400						330	6,000						完了	11集
3	大板井遺跡	〃　大板井	弥生・古墳	5,400							3,000						小郡市教育委員会	15集
4	〃	〃　〃	大板井遺跡	9,200						3,500	5,000						小郡市教育委員会	15集
5	井上瓢箪塚遺跡	〃　井上	弥生・中世集落	8,800						4,500	3,700						完了	10・38集
6	瓢箪塚古墳遺跡	〃　瓢箪町	弥生・古墳散布地（貯水堰）	32,000					500	7,300	10,100						完了	13・16集
7		〃　今隈	弥生散布地	7,200					200		100						遺構なし	—
8	宮原遺跡	大刀洗町大字山隈	古墳遺跡遺構	4,000					3,600								完了	26集
9	春原遺跡	〃　〃	先土器・弥生・奈良・近世墓	10,800					100	6,700							完了	26集
10	十三塚遺跡	〃　甲牧本郷	古墳集落	34,400			700		300								完了	26集
11	立野・宮原遺跡	甘木市大字下浦	古墳・奈良集落、墓地	33,800			13,860	13,500	10,000	3,000							完了	2-5-8-14-17 46-51-52集
12	小石原川西条風	〃　上浦	中世	48,000			8,100										遺構なし	—
13	〃　東条風	〃　上浦馬田	〃	56,000	200	7,600											完了	1集
14	上々津遺跡	〃　上浦	弥生・古墳集落	18,600	200												完了	1集
15	西原・下原遺跡	〃　一ツ木屋永	〃　〃	54,800	AB地点 3,850			F地点 3,850	C地点 3,400								完了	1・2・3集
16	高原遺跡	〃　屋永	縄文・弥生・古墳集落	7,800					1,400	5,400							完了	31集
17	口の坪遺跡	〃　牛鶴	近世墓石	100						100							完了	31集
18		〃　〃	散布地	2,550					300								遺構なし	—
19－A	苧ノ上遺跡	〃　〃	奈良集落	30,000					700	8,200							完了	9集
19－B	大迫鴻遺跡	朝倉町大字石成	古墳集落、奈良墓地	20,000							6,400						完了	39集
19－C・D	石成久保遺跡	〃　〃	古墳集落	20,000							6,100						完了	39集
20	中迫遺跡	〃　大蔦	縄文・弥生・奈良集落	15,400					300		11,400						完了	39集
21－A	西法寺遺跡	〃　〃	奈良集落、中世	45,900							8,400						完了	47集
21－B	経塚遺跡	〃　〃	散布地					800	600		2,300						完了	47集
21－C	大蔦久保遺跡	〃　〃	弥生墓地、奈良集落								9,650						完了	36集
21－D	上の原遺跡	〃　〃	弥生集落・墓地、古墳集落								12,300						完了	18・27・33集
22－A・B	治部ノ上遺跡	〃　入地	縄文・弥生・古墳集落	5,400					300	4,800							完了	32集
22－C	馬場南遺跡	〃　〃	弥生・中世集落、溢地	5,000							3,400						完了	28集
23	座摩寺遺跡	〃　〃	弥生集落、古墳	2,600						2,600							完了	32集
24	才田遺跡	〃　〃	古墳～奈良・中世集落	5,400						1,050	6,650						完了	48集
25	東才田遺跡	〃　〃	〃　〃	4,000						1,300	4,400						完了	48集
26		〃　須川	散布地	1,600													遺構なし	—
27	長島遺跡	〃　〃	縄文・弥生・古墳・奈良集落	16,000				C地点 3,000	C地点 6,640			500	16,000				完了	34・55集
28	中妙見遺跡	〃　〃	縄文・歴史集落	2,400				200	458								完了	50集
29－A	原の東遺跡	〃　錦野	旧石器・縄文・弥生集落、墓地	16,800					600				5,240	2,100			完了	50・53集
29－B	妙見古城野	〃　〃	古墳、方形周溝墓										4,660				完了	29集
30	鎌塚遺跡	〃　錦野・山田	縄文・弥生集落	4,000									6,550				完了	22集
31	山ノ神遺跡	〃　山田	縄文	2,000									1,980				完了	22集
32		〃　〃	散布地	2,400				300									遺構なし	—
33	長田遺跡	〃　〃	縄文、弥生・古墳集落	2,000									5,500	2,000			完了	30集
34	金場遺跡	〃　〃	縄文、古墳	3,600									680	15,400			完了	54集
35－A	上ノ宿遺跡	〃　〃	弥生、散布地	2,600									880	2,900			完了	20集
35－B	恵蘇山遺跡	〃　〃	古墳集落										2,400				完了	20集
36	柳瀬遺跡	〃　〃	古墳散布地	3,000									3,980				完了	30集
37	大谷遺跡	〃　〃	奈良～平安火葬場・集落	2,400									5,410	9,900	700		完了	24集
38	外之園遺跡	〃　〃	弥生～中世、鞭式石室	125									5,150	12,600		1,200	完了	35・40集
39－A	杷木宮原遺跡	杷木町大字志波	弥生・古墳、中世散布地	22,000							320	3,400					完了	21集
39－B・C	中町遺跡	〃　〃	〃　〃									11,000					完了	21集
40	志波桑ノ木遺跡	〃　〃	中世・散布地	2,500							300	7,700					完了	45集
41	志波岡本遺跡	〃　〃	〃　〃	18,000							300	9,400					完了	45集
42	江栗遺跡	〃　〃	中世、鍛冶遺構	8,000							300	9,700					完了	45集
43	大谷遺跡	〃　菊市	古墳群	12,000								500	7,560				完了	41集
44		〃　久留宮	散布地	1,800									150				遺構なし	—
45	後谷遺跡	〃　〃	旧石器～中世、墓地・集落	2,400								400	3,710				完了	44集
46	夕月・天田遺跡	〃　古江	〃	1,800								300	2,210	225			完了	42集
47	上熊田遺跡	〃　熊田	弥生・古墳・中世散布地	4,000								3,200					完了	42集
48	畑田遺跡	〃　〃	縄文・弥生・中世集落、墓地	1,800								6,800					完了	56集
49		〃　林田	散布地	3,200								150					遺構なし	—
50		〃　〃	〃	2,400								200					遺構なし	—
51	仙田遺跡	〃　〃	縄文集落	5,200								6,500					完了	49集
52－A	小覚原遺跡	〃　〃	〃	2,000								1,000	1,250				完了	49集
52－B	二十谷遺跡	〃　〃	〃										1,550				完了	49集
53	陣内遺跡	〃　穂坂	中世	3,500								5,700					完了	49集
54	上野原遺跡	〃　〃	弥生、中世	1,800								2,700					完了	49集
55		〃　〃	散布地	1,600								100					遺構なし	—
56		〃　〃	〃	2,400								800					遺構なし	—
57	柿原遺跡群	甘木市大字柿原	古墳群、縄文・弥生集落	200,000	明治 14,700		900	8,300	15,000	18,500	4,400						土取場・完了	4-6-12 19-37-41集
58	山田古墳群	朝倉郡大字山田	古墳群	40,000	明治 4,450				2,500	2,500	8,710						土取場・完了	23集
杷木インターA	桜街遺跡	杷木町大字麻水	弥生・古墳集落									6,450					完了	25集
杷木インターB	前田遺跡	〃　〃	弥生集落									2,600					完了	25集
杷木インターC	西ノ迫遺跡	〃　〃	弥生高地性集落	100,000								1,270	1,270				完了	25集
杷木インターD	クリナラ遺跡	〃　〃	縄文・古墳集落										4,180				完了	43集
杷木インターE	若宮遺跡	〃　〃	〃										2,400	4,000			完了	43集
		計			8,685	22,300	20,470	29,570	48,498	69,780	115,810	8,340	82,710	49,125	700	1,200		

昭和62年度と63年度の横断道調査関係者は下記のとおりである。

		62年度	63年度
日本道路公団福岡建設局			
	局　長	杉田　美昭	杉田　美昭
	次　長	菱刈　庄二	吉田　康行
	総務部長	安元　富次	安元　富次
	管理課長	森　宏之	副島　紀昭
	管理課長代理	三野　徳博	三野　徳博
日本道路公団福岡建設局甘木事務所			
	所　長	風間　徹	風間　徹
	副所長	西田　功	
	〃（技術）	友田　義則	
	庶務課長	徳永　登	大河　尋光
	用地課長	松尾　伸男	松尾　伸男
	工務課長	後藤二郎彦	豊里　英吉
	朝倉工事区工事長	上野　満	上野　満
	杷木工事区工事長	小沢　公共	小沢　公共
福岡県教育委員会			
総　括	教育長	竹井　宏	竹井　宏
	教育次長	大鶴　英雄	大鶴　英雄
	指導第二部長	大平　岩男	大平　岩男
	文化課長	窪田　康徳	薬石　勲
	課長補佐	平　聖峰	平　聖峰
	課長技術補佐	宮小路賀宏	宮小路賀宏
	参事補佐		中矢　真人
	庶務係長	加藤　俊一	池原　脩二
	事務主査	竹内　洋征	
	主任主事		沢田　俊夫
調　査	調査班総括	柳田　康雄	柳田　康雄
	総括補佐		井上　裕弘
	技術主査	井上　裕弘	木下　修
	〃	木下　修	中間　研志

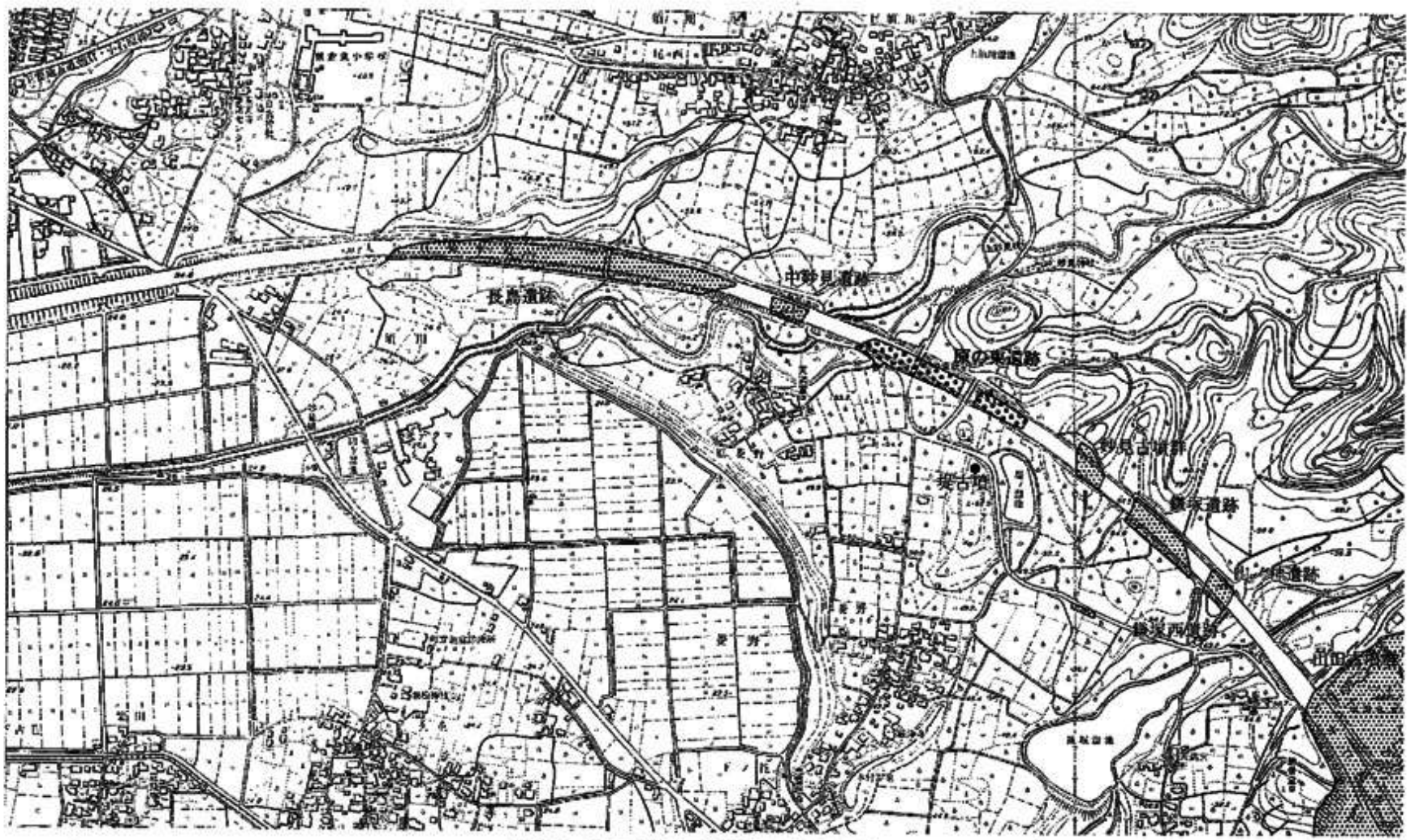
調　査		62年度	63年度
	主任技師	中間　研志	伊崎　俊秋
	〃	佐々木隆彦	
	〃	小池　史哲	
	技　　師	伊崎　俊秋	小田　和利
	文化財専門員		木村幾多郎
	〃		日高　正幸
	調査補助員	高田　一弘	高田　一弘
		武田　光正	武田　光正
		佐土原逸男	
	整理指導員	岩瀬　正信	岩瀬　正信

なお、本報告書に係る平成10年度の関係者は下記のとおりである。

福岡県教育委員会

総　括	教育長	光安　常喜	
	教育次長	藤吉純一郎	
	総務部長	富永　　勲	
	文化課長	石松　好雄	
	参　事	柳田　康雄	
	参事兼課長技術補佐	井上　裕弘	
	課長補佐兼管理係長	角　　伸幸	
	参事補佐兼調査第二係長	佐々木隆彦	（執筆担当）
庶　務	管理係事務主査	鵜我　哲夫	
	〃　主任主事	田中　利幸	
整　理	県立美術館普及課長	木下　　修	（執筆担当）
	北九教育事務所主任技師	水ノ江和同	（執筆担当）
	九州歴史資料館主任技師	杉原　敏之	（執筆担当）
	文化課整理指導員	岩瀬　正信	
	〃	北岡　伸一	
	〃	塩足　里美	

また、賀川光夫（別府大学）・柴田喜太郎（広島大学）・伊藤晴明・時枝克安（島根大学）・岡本東三（文化庁）・木戸道男（大川高校）・平田昌之（朝羽高校）・下川達彌（長崎県立美術館）・山口譲治（福岡市教育委員会）の各氏に助言をいただいた。　（佐々木）



第2図　原の東遺跡周辺地形図（1/10,000）

Ⅱ　遺跡の位置と周辺の環境

原の東遺跡は、福岡県朝倉郡朝倉町大字菱野字原の東に所在する。遺跡は、朝倉山塊から南西に派生した丘陵の先端部に位置し、丘陵の両側には妙見川と奈良谷川とで開析された狭隘な谷間をなしている。遺跡の南側は筑後川の低位段丘状をなして、距離にして300mで段丘崖を形成している。

周辺の低丘陵から段丘上にかけては、遺跡が形成される地理的な好条件を備えており、九州横断自動車道建設用地内から旧石器時代から鎌倉時代頃にかけての数多くの遺跡が検出されたことからもいえるとともに、横断道建設により、この地域が調査以前に一部の遺跡が確認されてはいたものの、空白部分を埋める好資料を得られたことが指摘できよう。

当該遺跡で検出した遺構は、7世紀後半頃の竪穴住居をはじめ、5世紀代の古墳群、弥生時代前期末から中期中頃の竪穴住居跡や貯蔵穴、土坑、甕棺墓、縄文晩期の土坑、早期の石組炉、集石遺構、旧石器時代の集石遺構や土坑、包含層などで、大規模な複合遺跡であることが判明した。路線内でこれほどの時期幅のある複合遺跡の検出は初めてである。

5世紀代の古墳群については、昭和40年に果樹園造成のため福岡県立朝倉高等学校史学部が調査した、調査区の東側に隣接する低丘陵上に築造された6世紀代の古墳群に先行することが判明し、しかも、昭和62年に同じ丘陵上で調査した4世紀代の妙見墳墓群とをあわせると4世紀代から6世紀代にかけて連綿と続いた同一集団の奥津城の可能性が指摘できよう。

遺跡の南東約700mには三段築成で円筒埴輪をともない周辺で唯一の前方後円墳である剣塚古墳が築造されており、古墳の規模から推察すると当該地域の盟主的存在を彷彿させるとともに、当古墳群を包括した形で周囲に数多くの古墳群が形成されていたのであろう。

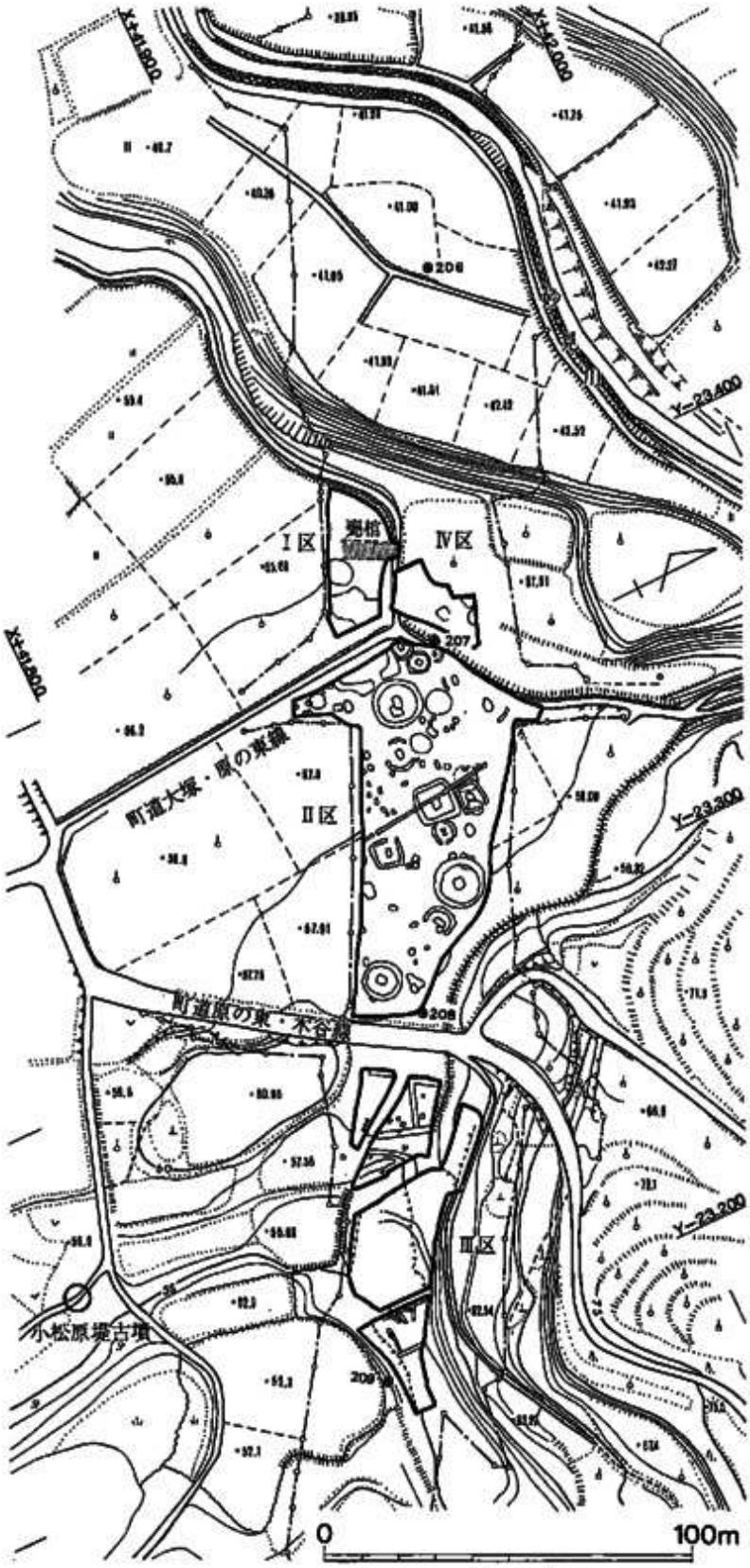
弥生時代中期初頭から前葉頃には、原の東遺跡（Ⅰ区）の第1次調査で検出した甕棺墓群に伴う形で集落の一部を検出し、竪穴住居、貯蔵穴と墓地群が共伴する形で確認されたことは意義深い。

周辺の調査された遺跡も原の東遺跡に似たような複合遺跡が点在し、当該地が古くから生活するための諸条件が具備されていたことが分かる。例えば、遺跡の西約500mに所在する長島遺跡は、縄文時代から奈良時代までの集落が確認され、東側500mに位置する鎌塚遺跡からは、奈良時代を中心とした集落の他、縄文早期、晩期、弥生時代前期などの遺構が出土し、いずれも複合遺跡であることが判明している。

この他周辺の遺跡の状況については、横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書第50集に詳細に記述されており参照されたい。　（佐々木）

1原の東遺跡　2妙見古墳群　3妙見墳墓群　4塩古墳　5鎌塚遺跡
6山ノ神遺跡　7山田古墳群　8長田遺跡　9金場遺跡　10上ノ宿遺跡
11恵蘇山遺跡　12稗畑遺跡　13大迫遺跡　14外之隈遺跡　15長島遺跡
16中妙見遺跡　17剣塚古墳　18恵蘇八幡宮古墳　19本陣古墳
20山田長田古墳群　21須川古墳群

第3図　原の東遺跡周辺主要遺跡分布図（1/25,000）



第4図　原の東遺跡地形図（1/2,000）

Ⅲ　発掘調査の記録

1　遺跡の概要

原の東遺跡の調査は、昭和58年に実施した工事専用仮設道路部分の第１次調査（Ⅰ区）と昭和62年から63年にかけて実施した本線部分の第２次調査（Ⅱ区～Ⅳ区）とに分けて行った。

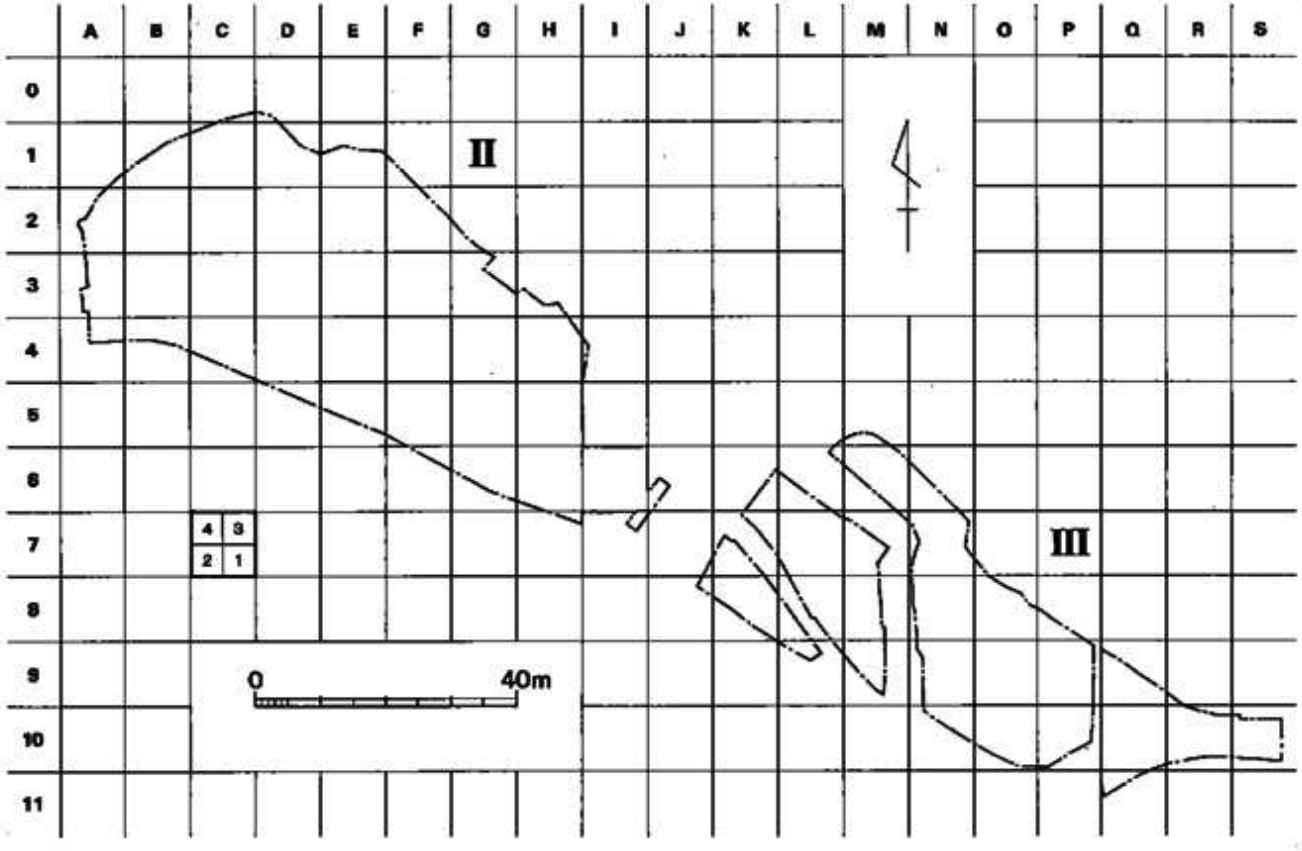
第１次調査のⅠ区では、縄文時代は早期・中期・晩期の遺物などが出土し、遺構が検出されたのは縄文時代晩期の土坑と埋甕があるに過ぎない。Ⅰ区の中心となる遺構は、弥生時代中期初頭から中頃にかけての甕棺墓を中心とした墓地群で、この墓地群に関連する集落の一部をⅡ区とⅣ区（平成10年に報告済）とで検出した意義は大きく、同じく九州横断自動車道建設で発掘調査した大庭久保遺跡と上の原遺跡との関係と同様、甘木・朝倉地方の弥生時代の集落と墓地形成の様相が解明できる格好の資料と言える。この他、古墳時代後期と中世の遺構が若干検出された。

今回報告するⅡ・Ⅲ区については、標高57.0mの朝倉山塊から派生する中位段丘上にあり、既に調査済のⅠ区よりも1.0m前後高く、全域的には南西方向へ緩く傾斜している。Ⅱ区・Ⅲ区は遺跡を分断する町道原の東・木谷線で区分する。Ⅲ区の東側は細い谷が入り込み、古墳時代前期の墳墓群の妙見墳墓群が形成された丘陵に続く。さらに、Ⅳ区はⅠ・Ⅲ区に比して4.00m前後の比高差があり遺構が遺存しており、当該区が段丘の縁辺部にあたる。

第６図で示したように文化層は12層にわたって堆積しており、上層から飛鳥時代→古墳時代中期→弥生時代後期中頃→弥生時代中期初頭～中頃→弥生時代前期末→縄文時代晩期→縄文時代早期→縄文時代草創期→旧石器時代順で文化層が確認された。

土層名と出土遺構・遺物を対比させると、２層の黒褐色土層からは７世紀後半頃の竪穴住居と土坑、３ａ層の黒色土層では５世紀代の古墳群、３ｂ層の暗褐色粘質土層では弥生時代前期末から中期初頭ごろの住居群・貯蔵穴・土坑、４層の暗黄褐色粘質土層からは縄文晩期の貯蔵穴・土坑、５層の黄褐色粘質土層では押型文土器を伴う早期の石組炉群と集石遺構群、６層の茶灰褐色粘質土層からは押型文土器、７層の黒紫色粘質土からは縄文草創期の土器片、８ａ層～10ｃ層にかけては旧石器時代の土坑・集石、石器群を検出し、最深部は現地表面から2.0mを測るなど、当該地が長期間先人達の足跡を残した格好の生活の場であったことが分かる。

個別時期的に概観すると、Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅳ区で若干の飛鳥時代と中世の遺物があるものの、集落としては７世紀代が最も新しい。しかし、遺構としては少なく、集落の縁辺部に相当するのかも知れない。

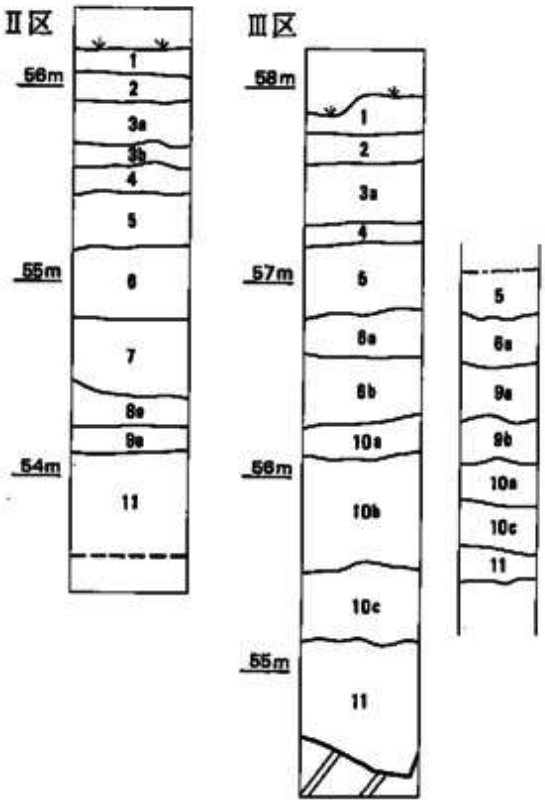


第5図　地区割図（1/1,200）

古墳時代中期になると、Ⅱ区を中心に墓地群として利用される。総数17基を数えるが、この古墳群は北東側の低丘陵上に４世紀代から６世紀代に築造された墳墓群及び古墳群と一連のもので、約300年間にわたり当該地域が奥津城として利用されていたことが分かる。調査した古墳群の形状は円墳・方墳・方形周溝墓状のもので、主体部は箱式石棺・石棺系竪穴式石室・竪穴式石室・竪穴系横口式石室などがあり、新しい古墳ほど削平が激しく、大半の主体部が後世の畑耕作で破壊されたり盗掘を受けており旧状を保った古墳は皆無であった。

弥生時代後期の明瞭な遺構は確認していない。周辺から若干の土器が出土していることから古墳の築造時に削平された可能性がある。

弥生時代前期末から中期前半にかけての竪穴住居は全区域内で９軒を確認しているが、１号墳・４号墳と重複した竪穴住居は、削平が激しく出土遺物も皆無で時期の決め手に欠くが、弥生時代前期末頃の竪穴住居の可能性が高い。この時期には、Ⅰ区で検出した墓地群が形成されており、集落と墓地群の在り方が明瞭に把握できる資料である。また、集落に付随する貯蔵穴や土坑も僅かではあるが検出している。



第６図　原の東遺跡土層堆積図（1/40）

第２表　層序と遺構・遺物の対比

層序	土層名	出土遺構・遺物	時　代
１層	表土		
２層	黒褐色土	住居跡・土坑・溝	７世紀後半
３ａ層	黒色土（クロボク）	古墳	５世紀前～中
３ｂ層	暗褐色粘質土	住居跡・貯蔵穴・土坑	弥生前～中期
４層	暗黄褐色粘質土	貯蔵穴・土坑	縄文時代晩期
５層	黄褐色粘質土	石組炉・集石・土坑・押型文土器	縄文時代早期
６ａ層	茶灰色粘質土	土坑・押型文土器	↓
６ｂ層	茶褐色粘質土		↓
７層	淡黄褐色粘質土	条痕文土器	縄文草創期
８ａ層	黒紫色粘質土	細石刃	旧石器時代
９ａ層	黄灰色砂質土	土坑・ナイフ形石器・台形石器	↓
10ａ層	暗茶褐色粘質土	ナイフ形石器	↓
10ｂ層	茶褐色粘質土	ナイフ形石器	↓
10ｃ層	暗黄褐色土	集石・ナイフ形石器・剥片尖頭器	↓
11層	黄褐色粘質土		

4層以下の縄文時代の調査にあたっては、Ⅱ・Ⅲ区全域に亘って10mグリットを設定した。グリットは東西方向にアルファベットでA～S列、南北方向は0～11列である。また、グリット内をさらに5m方眼で4分割した（第5図）。従って、Ⅱ区西端の33号石組炉はA3－2区に検出されたということになる。なお、Ⅱ区の調査区はA～I列まで、Ⅲ区はK～S列までである。

縄文晩期の遺構は貯蔵穴と土坑が若干出土しているが、この他に数多くの土器片や晩期の所産と考えられる石器類が多数あることから遺構が破壊されたことが考えられる。

この遺跡の特徴のひとつに縄文時代早期の石組炉群が挙げられる。石組炉は主にⅡ区とⅢ区で出土している。その総数は38基を数え、そのうちの大半がⅡ区に集中し、集石遺構を加えると50基を検出した。また、調査区外の存在を考慮すれば、これほどの石組炉の集中度は全国的にも稀有な例であろう。

縄文時代草創期については、Ⅱ区西端のA3区7層より条痕文土器が数点出土したのみである。

旧石器時代の遺構・遺物は、Ⅱ区では東端の8a層から細石刃が、Ⅲ区9a層では土坑、ナイフ形石器、10層では集石遺構や小型ナイフ形石器を主体とする良好な石器群が層位的に出土した。

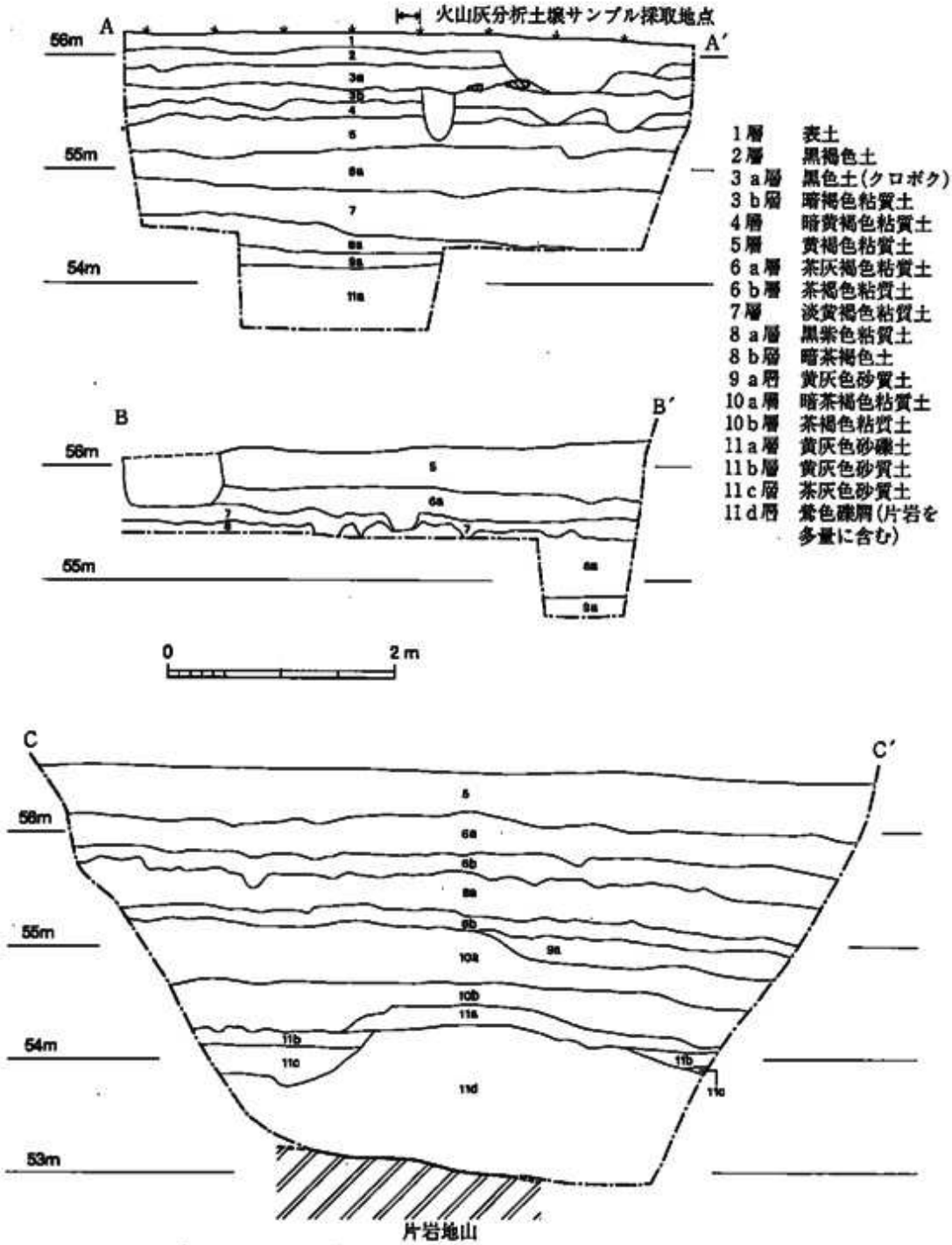
（木下・佐々木）

2　Ⅱ区の遺構と遺物

1）層　序（第7図）

Ⅱ区に堆積する土層として3ケ所を図示した。A—A′は調査区の西端A3－3区西壁、B—B′は中央部のC2－1区北壁、C—C′は調査区東端のJ6－2区東壁で、2・3の4層以上は調査段階で削平されている。各層の時期及び検出遺構などについては前述しているので参照されたい。

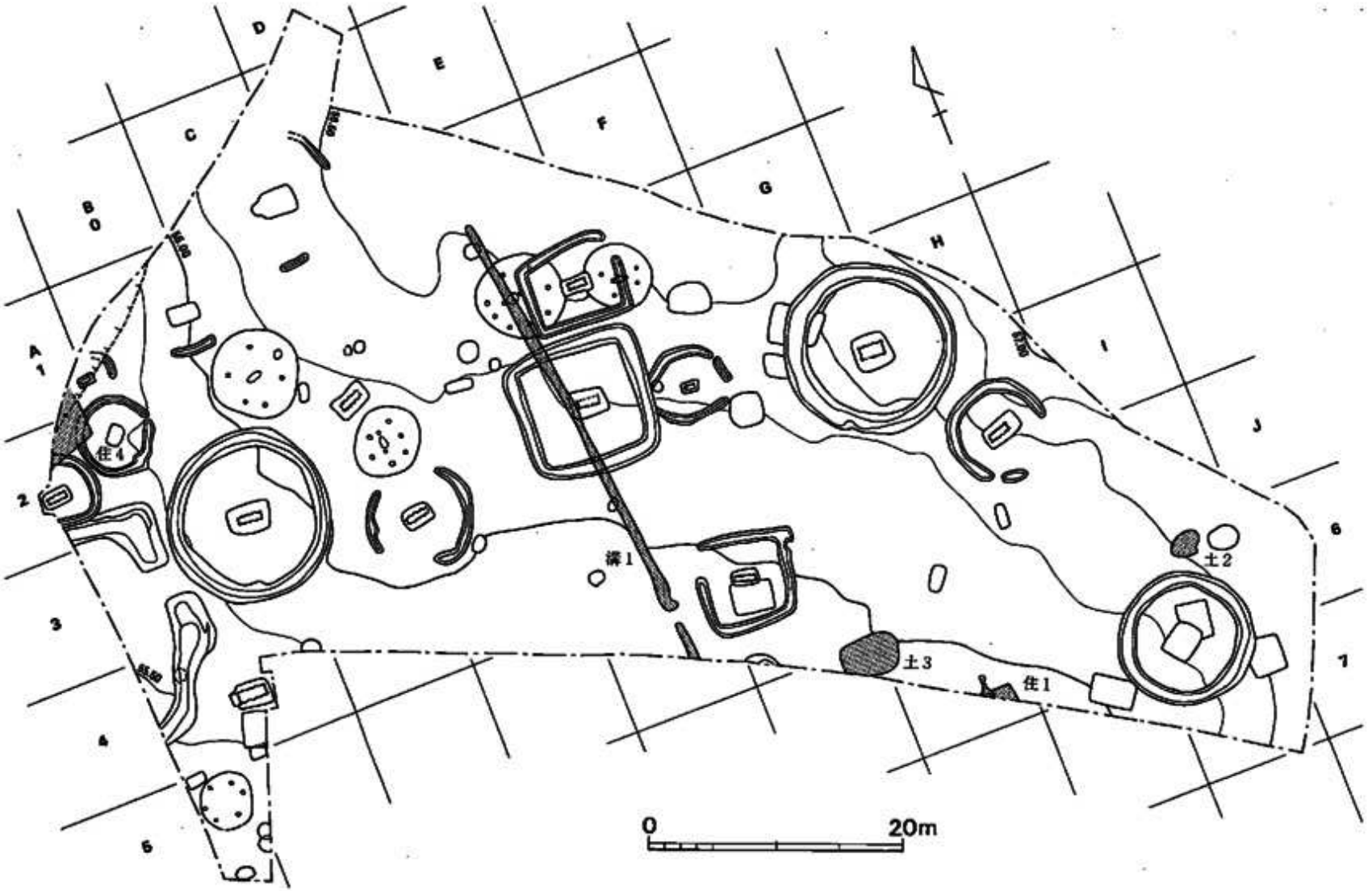
1層は表土で近世の耕作土で、層厚20cm内外。2層は黒褐色土で、層厚10～15cm。3a層は通称クロボクと呼ばれる黒色土で、層厚15～20cm。若干南側に傾斜する。3b層は暗褐色粘質土で、層厚10～20cmで4層との境界は不陸面。弥生時代前期から中期の遺構が検出されたが、層位的には分離できない。4層は暗褐色粘質土で、層厚15cm。5層は黄褐色粘質土で、ほぼ平坦に堆積する。調査区の中央から東側に厚く40～50cm、西側は20～30cmを測る。5層下面のレベルは西側55.2m、中央55.7m、東側56.1mである。この層からは縄文早期の石組炉36基や多量の押型文土器・石鏃・スクレパー・磨石等の遺物が出土した。6a層は茶灰褐色粘質土で層厚25～40cm。調査区東側になると黒味が強くなり、6b層（茶褐色粘質土）として分離できる。



第7図　Ⅱ区土層図 (1/40)

層厚は10～20cmで、下層は砂質になる。7層は淡黄褐色粘質土で、調査区の西側に厚く30～50cm、中央部になると10～20cmと薄くなり東側からⅢ区には認められない。堆積状況は北、東側に若干傾斜する。縄文時代草創期の条痕文土器が西端部から数点出土した。8a層は黒紫色粘質土で、層厚17～50cm。東側に厚く堆積するが、Ⅲ区には認められない。遺物は調査区東側で、細石刃が出土した。8b層は暗茶褐色土で、東側のみに堆積する。層厚13～18cm。やはり、Ⅲ区には認められない。Ⅱ区では8b層以下には出土遺物はない。9a層は黄灰色砂質土で、層厚9～25cm。10a層は東側のみに堆積する暗茶褐色粘質土で層厚22～60cm。10b層も東側のみに堆積し、茶褐色を呈する粘質土。層厚は22～46cm。11層は基本的に礫層であるが、地区によって異なる。11a層は黄灰色砂礫層で、層厚23cm以上。11b層は鶯色礫層で片岩片を多量に含む。東端部では層厚1.4mを測り、標高53.2mで片岩層に達する。（木下）

土層剥ぎ取り風景



第8図　古墳時代以降の遺構配置図（1/500）

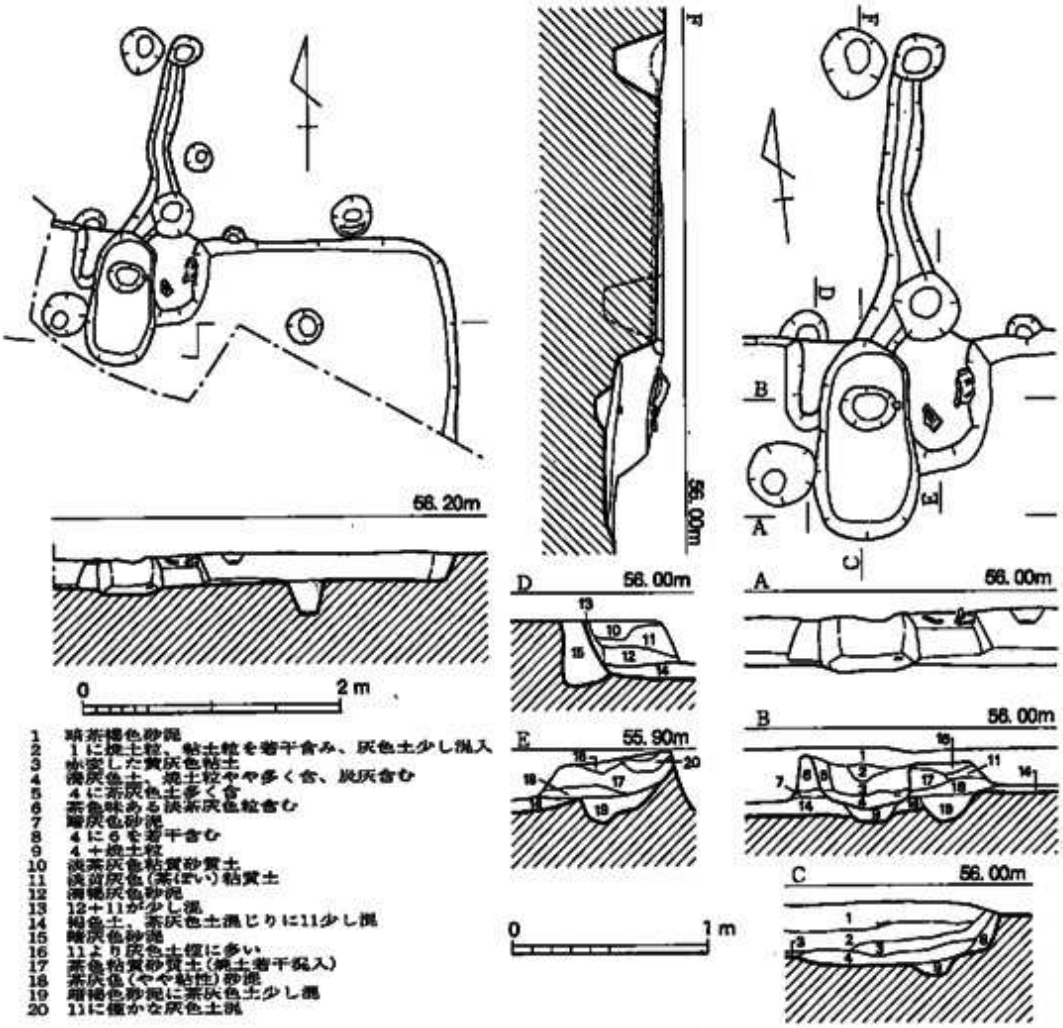
2）古墳時代以降の遺構と遺物

（1）竪穴住居跡

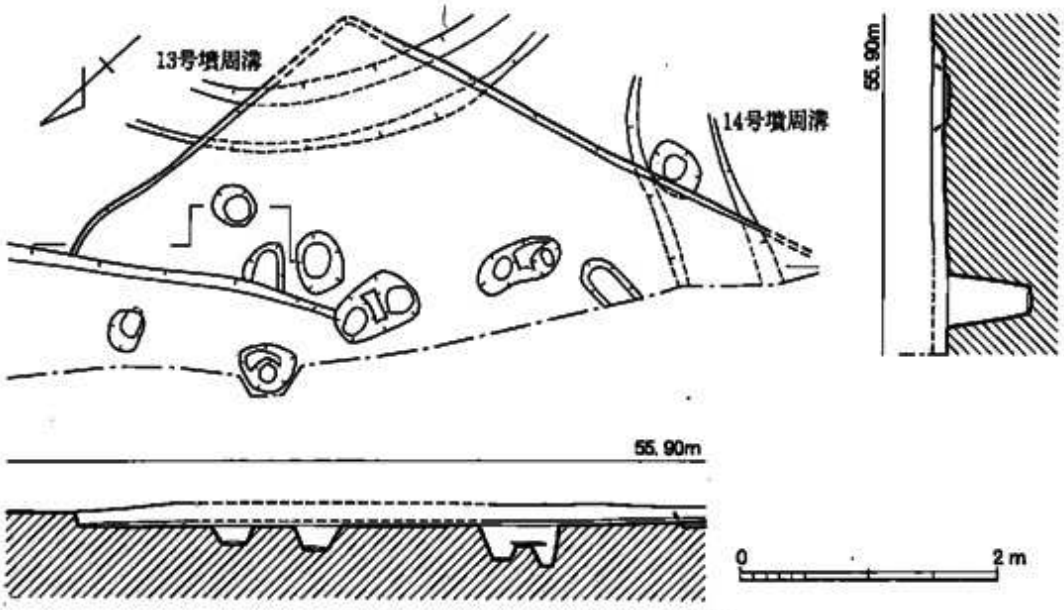
1号竪穴住居跡（図版3―(1)、第9図）

調査Ⅱ区の南西側、1号墳の10m西側で検出した竪穴住居跡であるが、大半が調査区外のため北壁の一部と北壁の中央部に付設したカマドを検出したに過ぎない。壁高は13.0cmほどで、支柱は4本柱の内の1本を検出した。

カマドは「U」字状の取り付けタイプで、西側の袖は新しいピットで一部破壊され、東側は掘り過ぎの感がある。袖には淡黄褐色粘質土、茶褐色粘質土、茶灰色砂泥を積みあげている。床は浅く楕円形に掘り込み、奥の支脚のある部分には浅いピットが掘られている。掘り込みの



第9図　1号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/40）



第10図　4号竪穴住居跡実測図（1/60）

最下層には焼土粒や炭、灰が堆積していた。カマドの奥壁には深さ5.0cm、長さ1.35mの煙道が蛇行状に付設され、先端には浅いピットが掘られている。

破壊されたカマドの右袖上に土師器の甕と支脚に使用されたと考えられる小型甕片が出土し内部には須恵器の坏蓋片が出土している。出土遺物は７世紀後半頃である。

４号竪穴住居跡（図版３―(2)、第10図）

Ⅱ区の西端で検出した竪穴住居跡である。重複関係は13号・14号墳があるが、遺存状態が悪く調査当初古墳から掘り下げ途中から住居の存在に気づいたため、切り合い関係が逆になったが住居の方が新しい。住居の大半が調査区外にあり撹乱されていることもあって全容は不明である。

支柱は４本と思われ、断面で示した柱穴がそのうちの１本であろう。壁高は7.0cm前後を測る。出土遺物は少なく、７世紀後半頃の土師器の甕の口縁部片が２点あるに過ぎない。

（2）土　坑

２号土坑（図版４―(1)、第11図）

調査Ⅱ区の東側で１号墳の北東隣で検出した土坑で、不整形の大きな落ち込みの中に一段と深い掘り込みが２個所あり、一方は弥生中期初頭頃の遺物が出土しているが、西側の土坑から中世頃の遺物が出土したので土坑として扱った。

平面形状は楕円形で、長軸を復原すると2.80m前後、短軸で1.70m、深さは0.24mを測る。周辺に同時期の遺構がなく用途が不明。

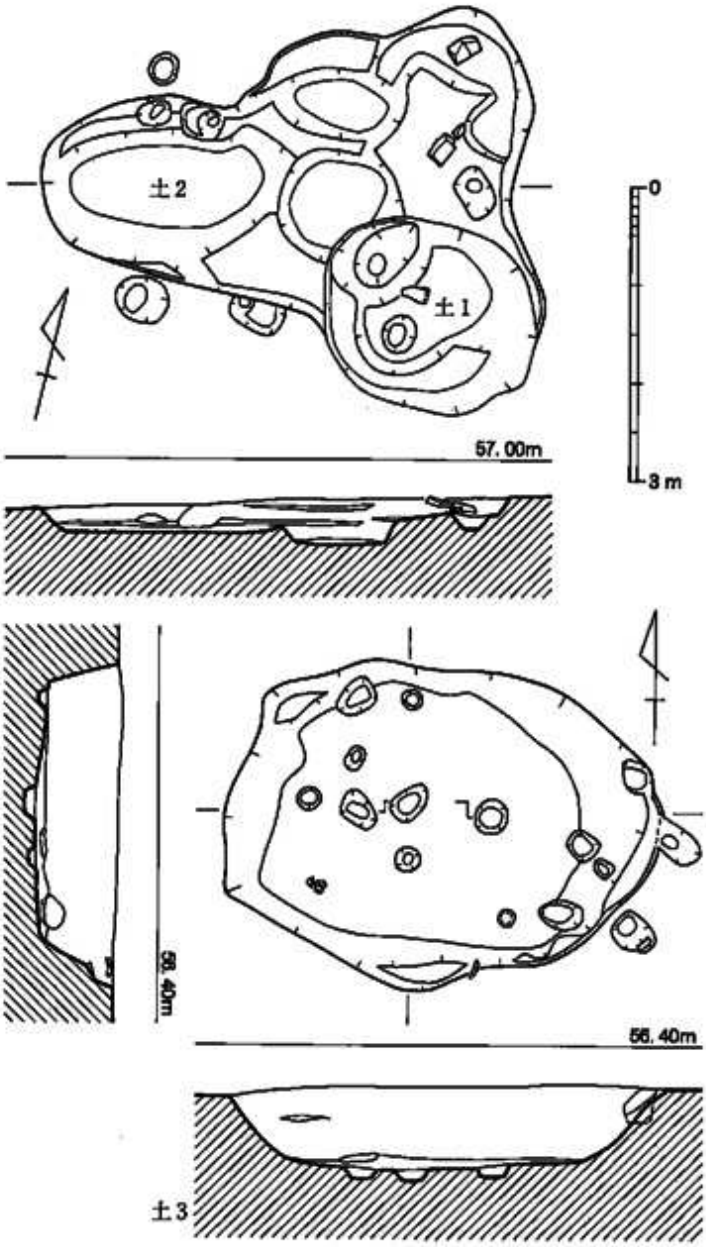
出土遺物は、土師器の皿、小型甕の口縁部片と12世紀代の白磁皿がある。

3号土坑(図版4-(2)、第11図)

Ⅱ区の東南側で同一時期の1号住居の7.0m西側に位置する土坑で、一部調査区外にあるもののほぼ全容が分かる。

1号住居と当土坑の他は周辺に同じ時期の遺構はなく、ひとつのグループでの7世紀後半頃の集落の北縁部に相当すると考えられ、Ⅳ区で検出した同時期の竪穴住居とはグループを別にすると推測される。西端で検出した4号住居は寧ろⅣ区の竪穴住居群に伴うものであろう。

平面形態は不整円形で、断面形は逆台形を呈する。床面には数個のピットがあるが柱を立てるには浅すぎる。



第11図　2号・3号土坑実測図（1/80）

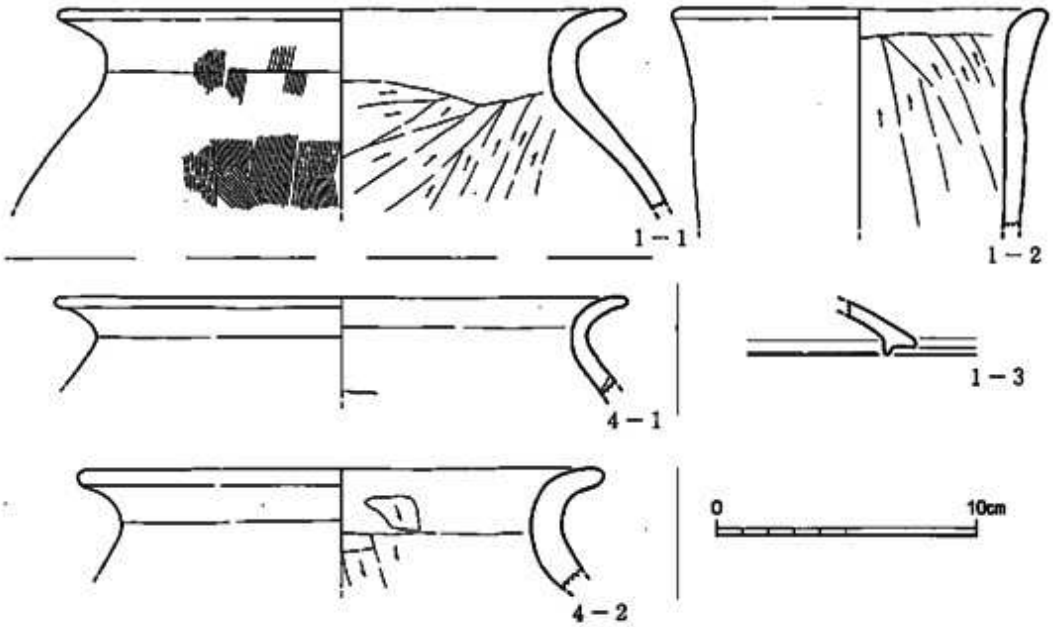
土坑の規模は長軸で4.40m、短軸で3.30m、深さは0.9mを測る。

遺物の出土状態は、覆土の上層で土師器、下層から須恵器が集中した状態で出土した。器種としては、土師器の甕の口縁部片、須恵器の高台付椀・坏（椀）蓋の他、混入土器である弥生時代の高坏の坏部片がある。

（佐々木）

（3）出土遺物

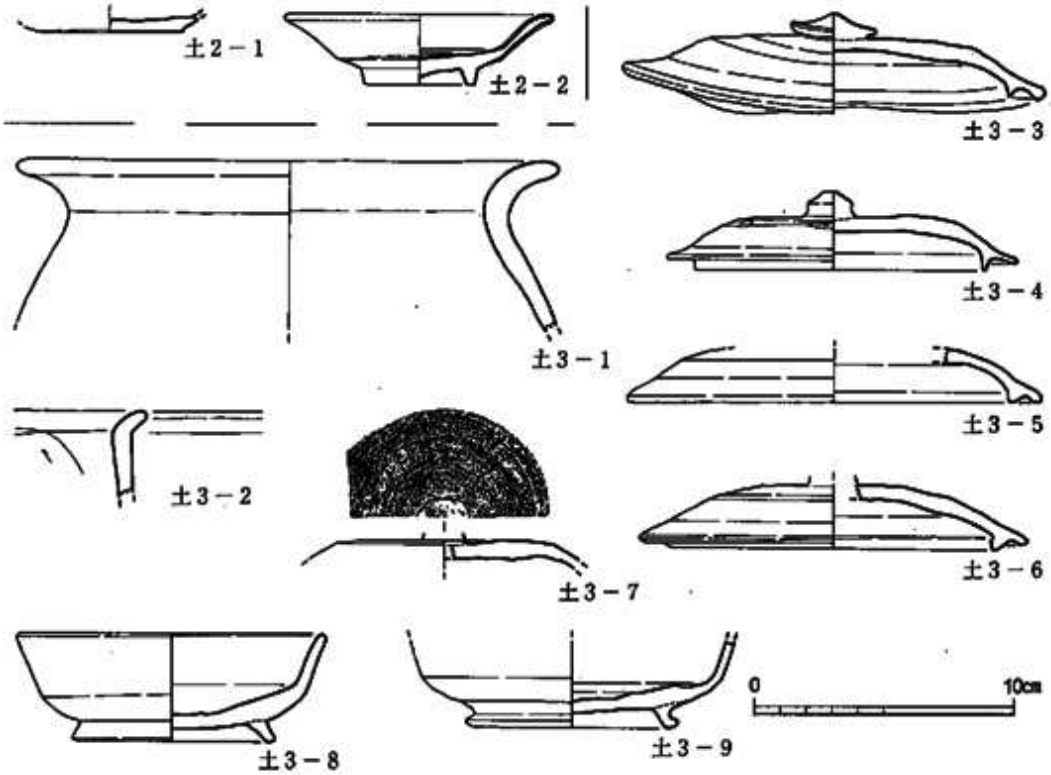
土　器（図版30、第12～14図）



第12図　1号・4号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

第3表　出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第12図1－1	1号住居跡	土師器 甕	①29.0 ② ③	口縁は鋭く反り、肩部がやや張る。肩部下欠損。	外－ハケとナデ 内－ヘラ削り	カマド内出土 1/2残存 色調－橙褐色
第12図1－2	1号住居跡	土師器 小型甕	①14.5 ② ③	口縁端部を若干外反させ肥厚する。肩部は膨らまず、器壁が厚い。支脚に再利用か。	外－ナデ 内－ヘラ削り	カマド内出土 1/8残存 色調－暗橙褐色
第12図1－3	1号住居跡	須恵器 坏蓋	① ② ③	見受けのあるタイプで小片。		カマド内出土 色調－暗灰色
第12図4－1	4号住居跡	土師器 甕	①22.2 ② ③	口縁部が鋭く外反するタイプで、器壁が薄い小破片。	外－ヨコナデ	覆土中から出土 1/8残存 色調－茶褐色
第12図4－2	4号住居跡	土師器 甕	①20.4 ② ③	1－1と同タイプの口縁部片で、器壁が厚い。二次火熱で赤変。	外－ヨコナデ 内－ヘラ削り	覆土中から出土 1/5残存 色調－赤褐色
第13図2－1	2号土坑	土師器 皿	① ② 5.6 ③	糸切り底で体部は欠損。	内－ナデ	色調－白黄茶色
第13図2－2	2号土坑	陶磁器 高台付皿	①10.4 ② 4.3 ③ 2.7	体部から大きく開く白磁の皿で、やや高い高台がつく。見込み部に1.1cmの掻き取り。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	釉調－緑灰色で発色が悪い 胎土－灰白色

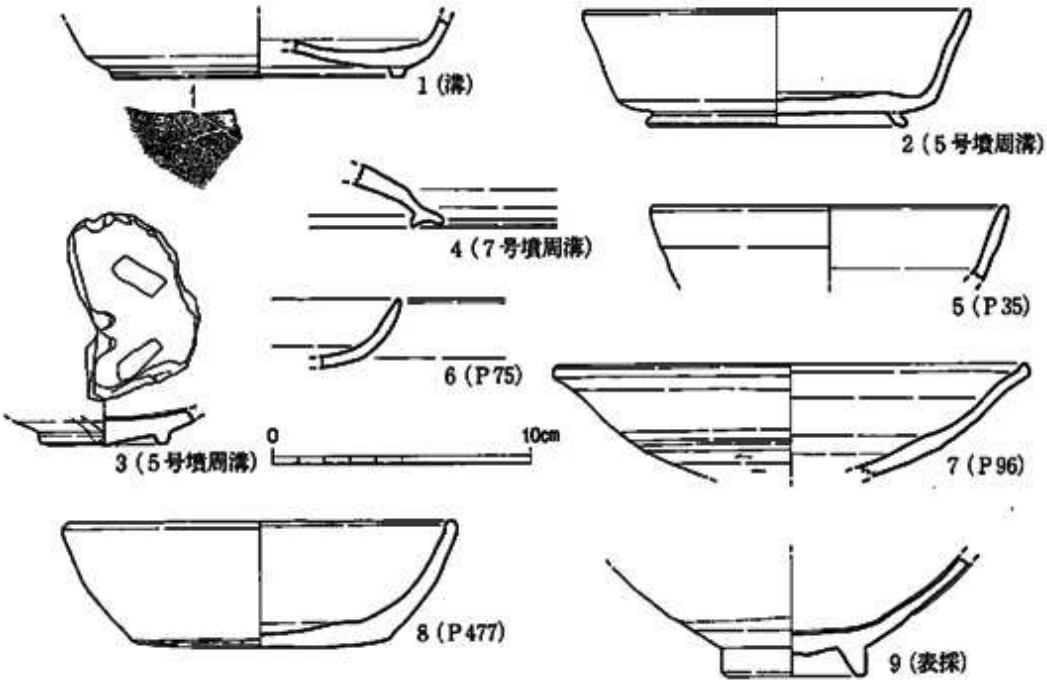


第13図　2号・3号土坑出土土器実測図（1/3）

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第13図3－1	3号土坑	土師器 甕	①21.0 ② ③	住1－1と同タイプの甕の小片。肩部の張りが鈍い。	外－磨耗 内－磨耗	1/10残存 色調－橙褐色
第13図3－2	3号土坑	土師器 小型甕	① ② ③	短い口縁部が僅かに外反するタイプの小片。	外－磨耗 内－ヘラ削り	二次火熱で茶色に変色 色調－茶褐色
第13図3－3	3号土坑	須恵器 坏蓋	①16.4 ② ③ 3.8	偏平な摘みで天井部が緩く屈折し、見受けの返りをもつ。焼成時の焼き歪みがある。	外－回転ヘラ削りとナデ 内－ヨコナデ	完形品 色調－暗褐色～黒色
第13図3－4	3号土坑	須恵器 坏蓋	①13.5 ② ③ 3.0	擬宝珠の摘みで緩く湾曲する体部をもち、薄い見受けの返りをなす。	外－回転ヘラ削りとナデ 内－ヨコナデ	完形品 外全面に灰が被る 色調－黒灰色
第13図3－5	3号土坑	須恵器 坏蓋	①16.0 ② ③	低い見受けの返りをもつ小片	外－回転ヘラ削りとナデ 内－ヨコナデ	色調－黄茶色で焼きが甘い



第14図　溝1、その他の出土土器実測図 (1/3)

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高 (cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項 (備考)
第13図3－6	3号土坑	須恵器 坏蓋	①15.0 ② ③	摘みを欠損する。緩い曲線を描く天井部で、見受けの返りを有す。	外－回転ヘラ削りとナデ 内－ヨコナデ	色調－灰色
第13図3－7	3号土坑	須恵器 坏蓋	① ② ③	天井部の小破片。	外－回転ヘラ削りとナデ 内－ヨコナデ	天井部に「×」印のヘラ記号 色調－黄味灰色
第13図3－8	3号土坑	須恵器 高台付椀	①11.9 ② 7.8 ③ 4.1	体部が僅かに屈折し、口縁は上方に延びる。高台は「ハ」状に開く。	外－回転ヘラ削りとナデ 内－ナデ	完形品 色調－黒灰色
第13図3－9	3号土坑	須恵器 高台付椀	① ② 8.2 ③	口縁部を欠損。体部から底部の境の屈折はやや鋭く、高台は低く、端部は欠損。	外－ヨコナデと回転ヘラ削り 内－ヨコナデ	色調－茶灰色
第14図1	溝1	須恵器 高台付椀	① ②11.3 ③	低い高台で、底部に焼き歪みがある。同部は欠損。	外－ヨコナデと回転ヘラ削り 内－ヨコナデ	底部外面にヘラ記号あり 色調－灰黄褐色
第14図2	5号墳周溝	須恵器 高台付椀	①15.0 ②10.0 ③ 4.4	体部から口縁にかけては直に開き、鋭く屈曲して平らな底部に低く肥厚した高台貼付	外－ヨコナデと回転ヘラ削り 内－ヨコナデ	混入土器 色調－灰黄褐色

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第14図3	5号墳周溝付近	陶磁器 高台付椀	① ② 4.9 ③	低い削り出し高台で胴部を欠く。内面に目跡がつく。		胎土ー精製粘土 釉調ー緑灰色 遺構検出時
第14図4	7号墳周溝	須恵器 坏　蓋	① ② ③	身受けの返りのある小片。	外ーヨコナデ 内ーヨコナデ	色調ー灰黄褐色
第14図5	P−35	須恵器 高台付椀	①13.8 ② ③	口縁部の小片。	外ーヨコナデ 内ーヨコナデ	1/10残存 色調ー緑灰色
第14図6	P−75	土師器 皿	① ② ③	口縁部の小破片。	外ーヨコナデと ヘラ削り 内ーヨコナデ	色調ー橙褐色
第14図7	P−96	瓦質土器 高台付椀	①18.4 ② ③	器高の低い椀で底部を欠損。口縁部を肥厚。	外ーヨコナデと 回転ヘラ削り 内ーヨコナデ	1/8残存 色調ー緑灰色
第14図8	P−477	土師器 坏	①15.2 ②10.0 ③ 4.8	口縁部を若干内湾し体部は丸みを有す。平底をなす。	外ーヨコナデ 底ーヘラ削り 内ーヨコナデ	1/4残存 色調ー橙褐色
第14図9	南側遺構検出	陶磁器 高台付椀	① ② 5.6 ③	削り出し高台で体部上半を欠く。外面底部付近は露胎。	外底部ーヘラ削り	釉調ー鈍い黄緑色

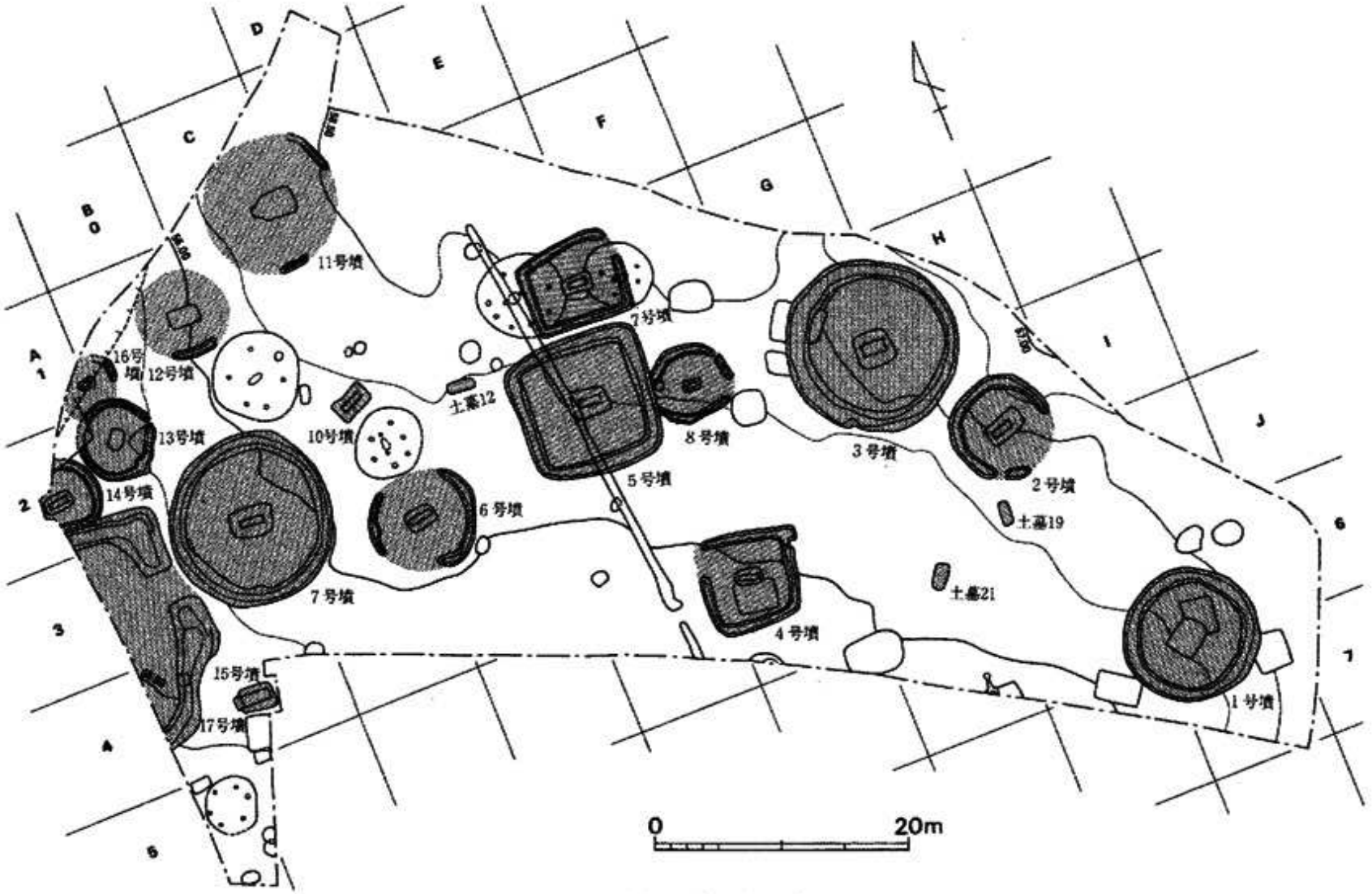
3）古墳時代の遺構と遺物

Ⅱ区の主たる遺構として古墳群が挙げられる。検出した古墳は大小含めて17基で、その墳丘の形状内訳は円墳９基、方墳１基、方形周溝状墓（方墳）３基、不明４基である。

各主体部はバラエティーに富んでおり、箱式石棺・石棺系竪穴式石室・竪穴式石室・竪穴系横口式石室などがあり、規模の大きい古墳に小さめの古墳が接する形で設営される。古墳群の築造は殆どに重複がなく、唯一切り合っている古墳には14号墳と17号墳がある。17号墳は既設の農道で主体部形態が不明であり、周溝内からは弥生時代中期初頭頃の土器片が多数出土し、唯一古墳時代の遺物としては須恵器の高坏片があり、７号墳と接近し過ぎているものの５世紀代中頃の所産と考えられ、当該古墳と14号墳とは５号墳と８号墳との関係と同様であろう。

とまれ、Ⅱ区における古墳の築造は５世紀代の中での流れがあり、周囲の妙見古墳群を概観すると４世紀代から６世紀代まで連綿と続く一集団の奥津城であることは確かであろう。

（佐々木）

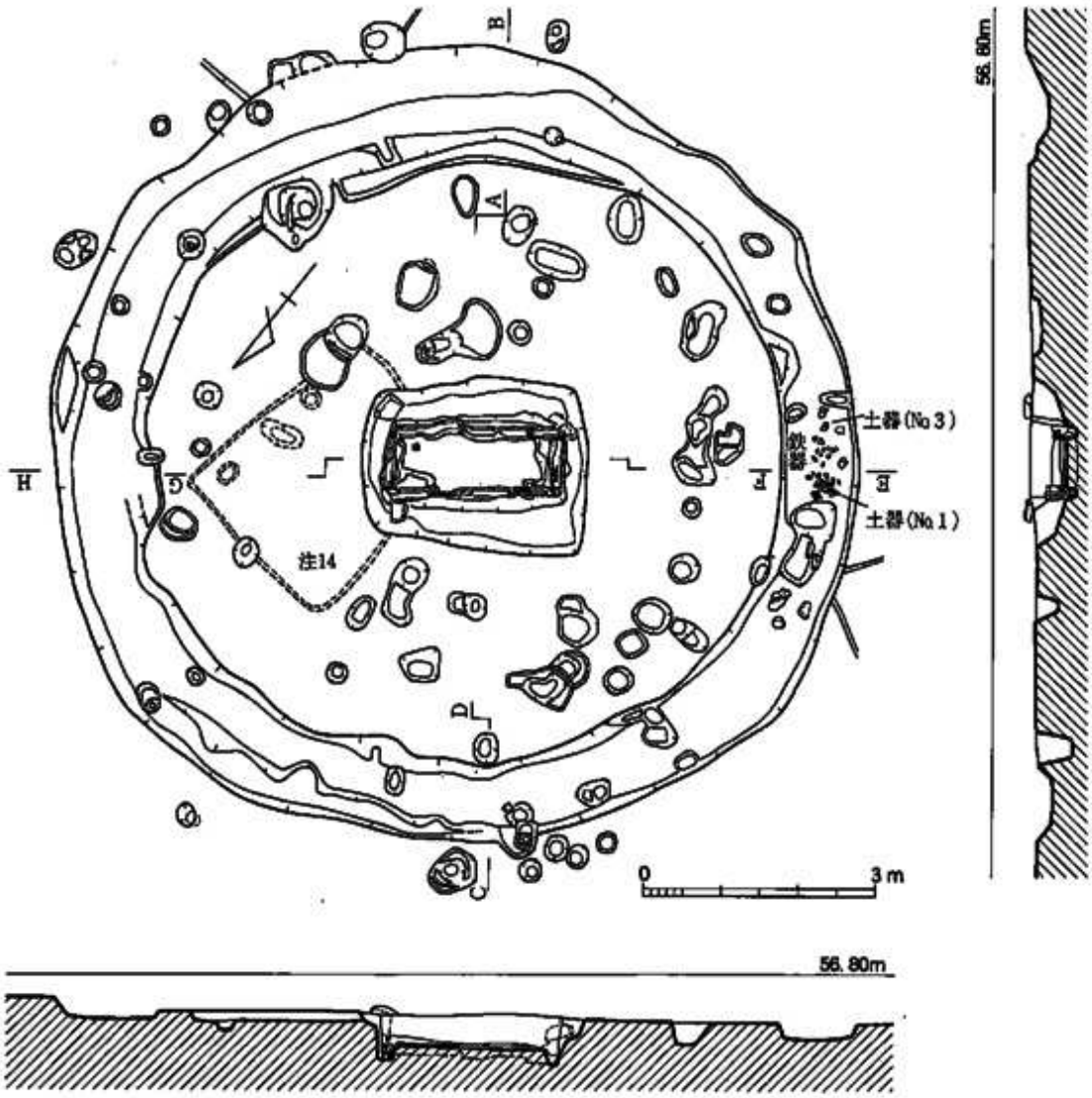


第15図　古墳群分布図（1/500）

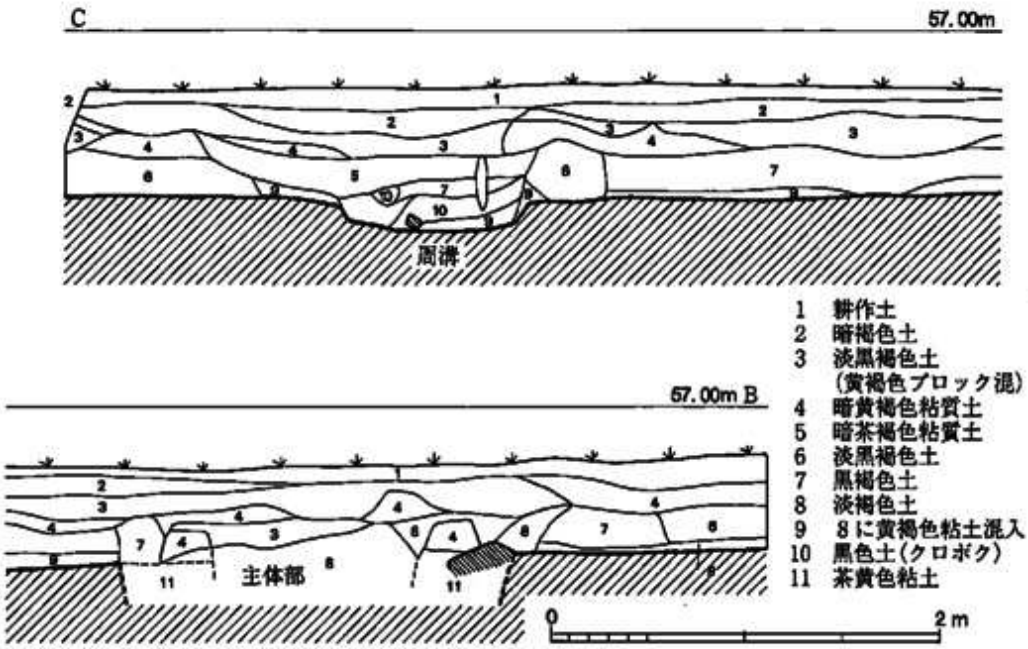
(1) 古　墳

1号墳（図版5―(1)・6―(1)、第16～18図）

Ⅱ区の東端で検出した円墳で、古墳の東に設置されている農道を境に緩斜面をなしており、路線内に限ってはこれより東側には古墳は築造されていない。古墳の墳丘断面図で示すように現表土下には墳丘の盛土は若干残っており、地山の直上に黄褐色粘土の混入した淡褐色を薄く盛り、黒褐色系と黄褐色系土を盛っているが、その上層は明瞭な盛り土は認められない。墳丘下には時期が明らかでなく遺存状態の悪い竪穴住居が埋没していた。恐らく古墳築造時点で削



第16図　1号墳実測図（1/100）



第17図　1号墳墳丘土層断面実測図（1/40）

平されたと推測される。

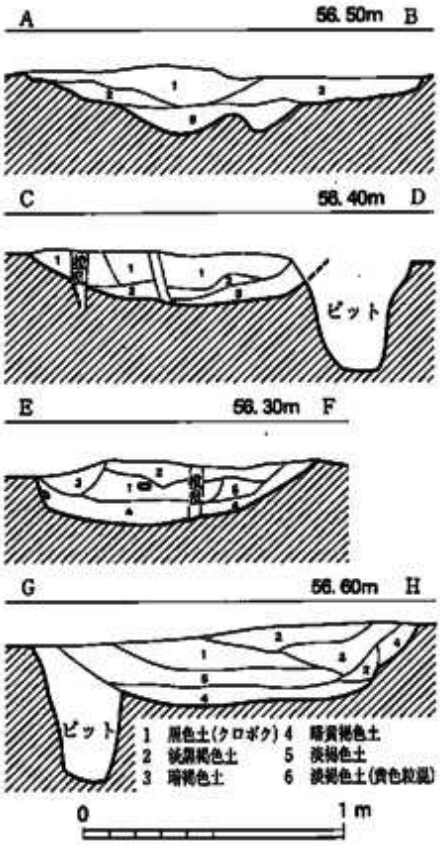
古墳の規模は周溝までの直径が10.4m、墳丘部分では8.0m×7.8m、周溝の幅は1.0m～1.5m、深さは0.2m～0.3mを測り、周溝内には黒色系、黄褐色系の覆土で埋まっていた。

内部主体（図版5―(2)、第19図）

内部主体はやや歪な隅丸長方形の墓壙を有する箱式石棺と推察され、墓壙内からは板石の抜去痕が残り、殆どの石材（緑泥片岩）が持ち去られていた。

墓壙の三か所の隅には石塊が配され、その一個は裏込め内に埋められていた。墓壙内の埋土はかなり乱れており、徹底的な盗掘が行われたことを示している。

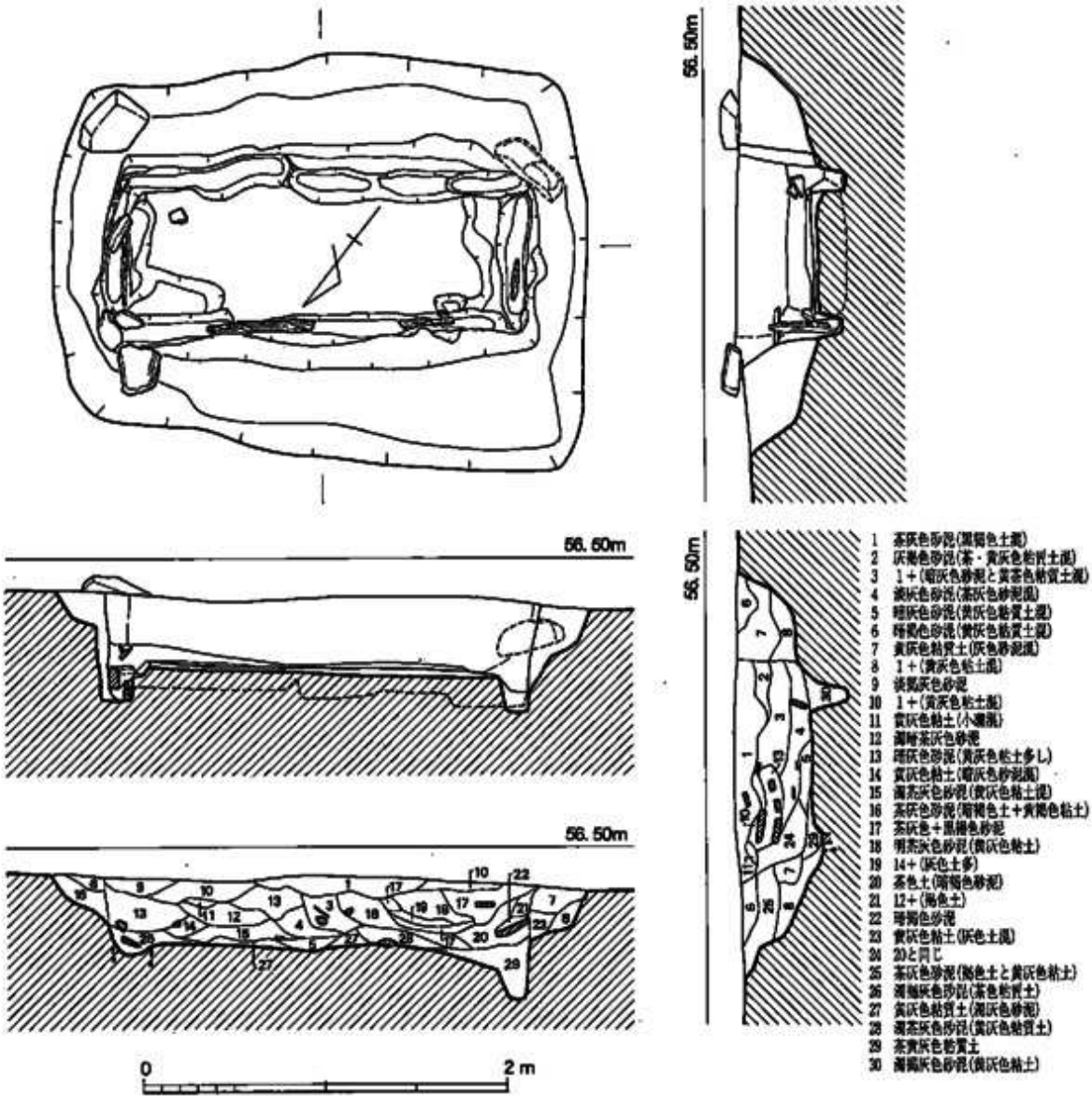
墓壙の法量は、長軸が2.95m短辺側は1.80mと2.17m、現存での深さは0.4m前後を測る。棺の内法は長軸で2.0m、短軸は0.6mと0.65mで北東側が若干広く、



第18図　1号墳周溝土層断面実測図（1/30）

床が若干高位にあることから頭位がこの方向にあったと推測される。また、底面には薄く茶褐色土を敷いており、若干朱が認められた。主軸方位はN51°Eを示す。

遺物は棺内からは皆無で、周溝の東側で集中して出土した。器種は古式土師器の小型壺1・坏7・鉢1の他、円錐形をした鉄器が1点ある。この鉄器については、一見石突のように看取されるが目釘穴がなく全体に薄手造りで、造りが鉄鏃でもなく、我々が数年前に使用していた測量ポールの先端金具に酷似しており、出土場所も疑問視され判断に苦慮する。



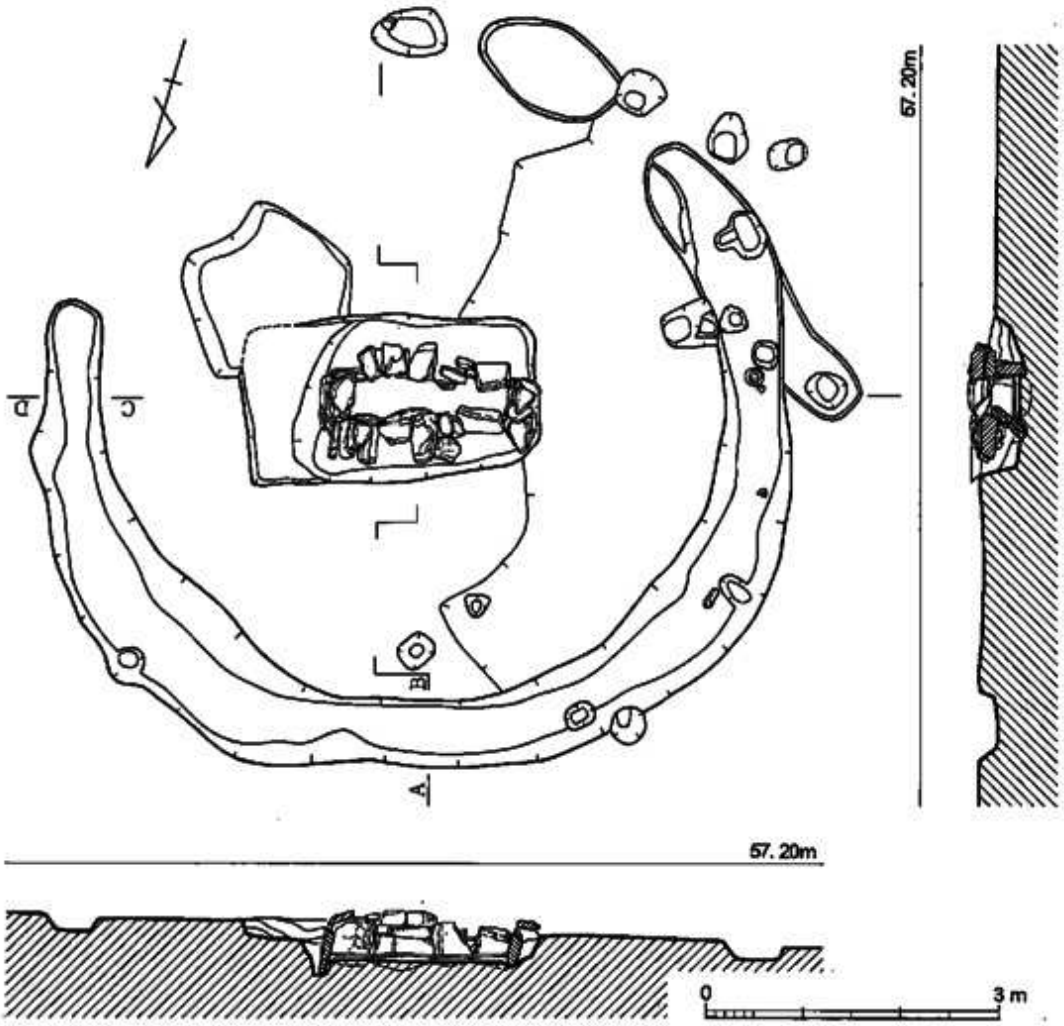
第19図　1号墳主体部実測図（1/40）

２号墳（図版６―(2)、第20～22図）

３号墳の南隣に築造された小形の円墳で、墳丘は完全に削平されていた。地形も北から南側に緩斜面をなし、南側の周溝は消滅し主体部の周囲を半月状に巡る。

古墳の規模は、周溝を含めると直径が7.60m、墳丘部の径は6.40mを測り、周溝の幅は広い所で1.00m、深さは0.20mで覆土は黒褐色土と褐色土で埋まっていた。また、墳丘部分の西側の基盤は削平により一段低く下げられている。

当該古墳は古墳群の中では大形の古墳である３号墳に隣接していることから、３号墳の被葬者との近接した関係の被葬者が埋葬されたと推測される。



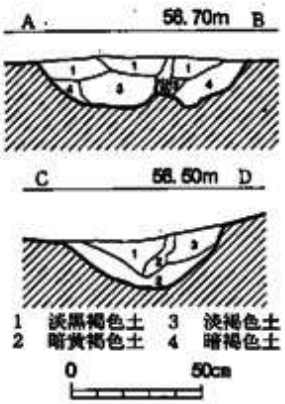
第20図　２号墳実測図（1/80）

内部主体（図版７―(1)・(2)、第22図）

内部主体は石棺系竪穴式石室であるが、墓壙に対して石室の設置場所が若干ずれている。つまり、石室を墓壙の中心に構築せず東側にずらした形で造る。墓壙の西小口側は深さ0.2m、長さ0.6mのテラスを設け、内部には暗茶灰色砂泥と黄茶色粘質土が西側から流れ込んだ形で堆積していた。

石室は石棺系竪穴式石室で、両小口と側壁の一段目に緑泥片岩を立て、二段目以上は花崗岩質の石材を積んでいるが、三段以上は破壊され側壁は倒壊し、天井石はまったく遺存していない。

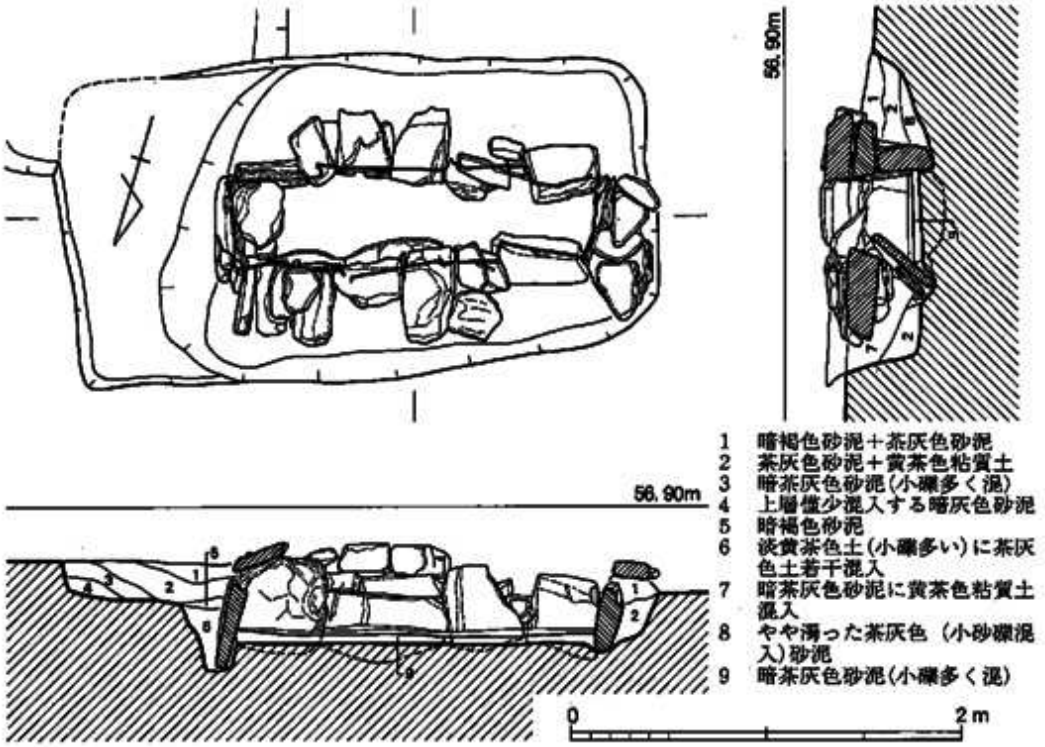
床面には小礫を多く含む暗茶灰色砂泥を5.0cmの厚さで敷き、一部床面に淡黄灰色粘土を目張りに使っていた。



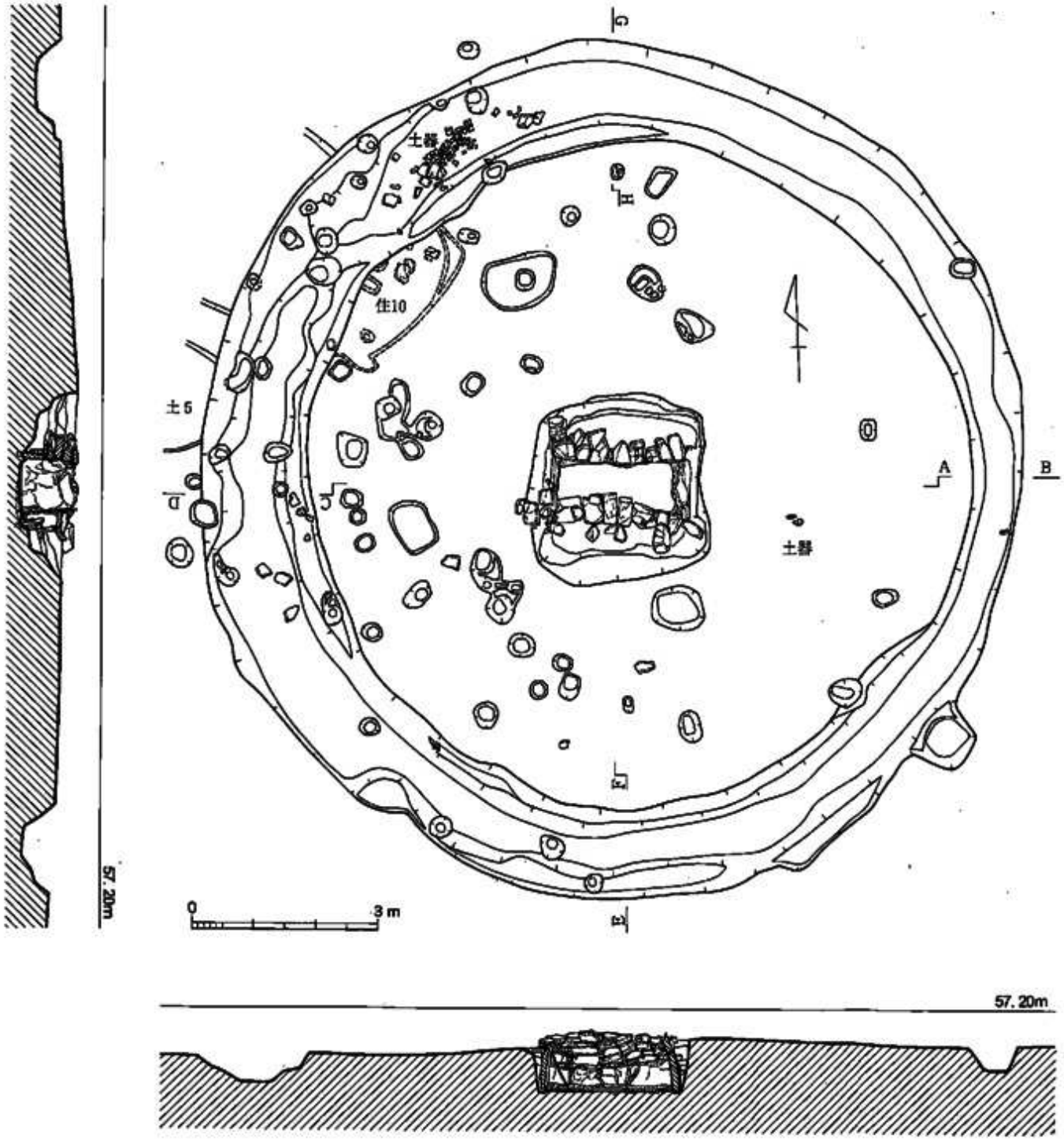
第21図　２号墳周溝土層断面実測図（1/30）

石室の法量は、長さ1.80m、幅は西側で43.0cm、東で38.0cmを測り、西側の床面が若干高位にあり、現状では西側が頭位であろう。主体部の主軸方位はＳ61°Ｗである。

出土遺物は、周溝内から土師器の甕片、石室内の南側壁傍の床面から刀子１があるが、刀子は床面から若干浮いた状態で出土し、本来の位置を保っていないようだ。



第22図　２号墳主体部実測図（1/40）



第23図　3号墳実測図（1/100）

3号墳（図版8—(1)・11—(2)、第23・24図）

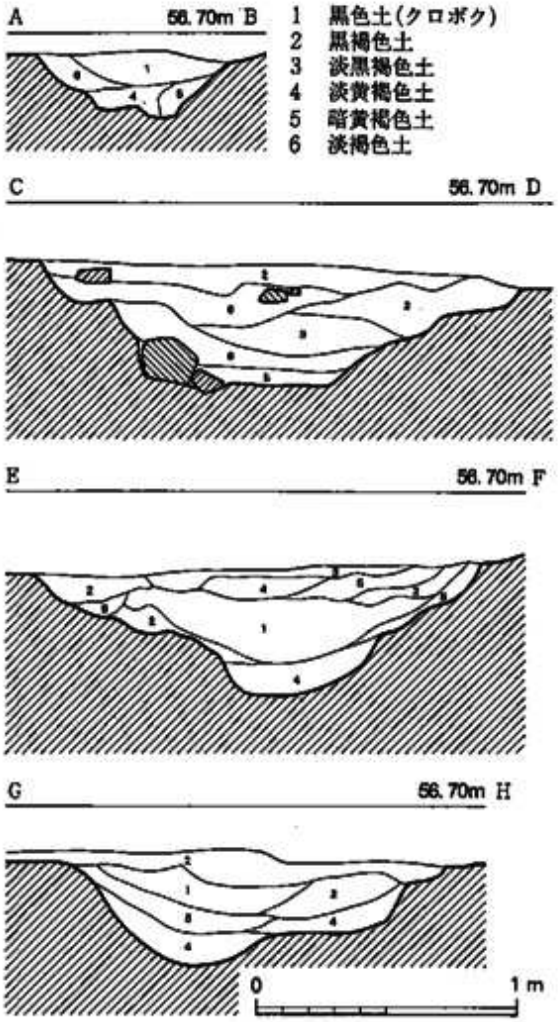
2号墳の北西傍で検出した円墳で、東側に展開する妙見古墳群が築造された丘陵裾部に位置し、調査区内で検出した古墳の中で最も規模の大きな古墳である。

妙見古墳群との関係と古墳全体の削平状態から観ると、Ⅲ区とⅣ区の間は丘陵から続く高まりがありそこに古墳群が形成されたと推測される。

また、古墳の北西の周溝で弥生時代前期末頃の竪穴住居と5号土坑を破壊している。さらに2号墳との位置関係から当該古墳の被葬者は2号墳の被葬者とは近親的な関連性が窺える。

古墳の規模は、墳丘が激しく削平され東側の周溝の遺存状況が悪く幅細となり、周溝を含めた東西軸で13.4m、南北では14.0m、墳丘部分では10.8m、11.1mを測る。周溝の幅は、東側で0.8m、最も広い西側では1.70m～1.90m、最深部で0.5mである。

周溝内は黒色土系と黄褐色土系の覆土がレンズ状に堆積し、断面は逆台形と「U」字状の個所があり一様ではない。

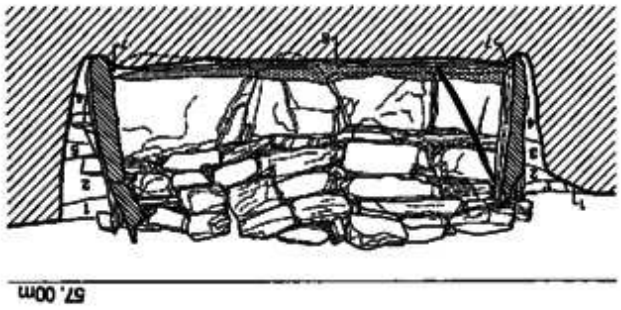


第24図　3号墳周溝土層断面実測図（1/30）

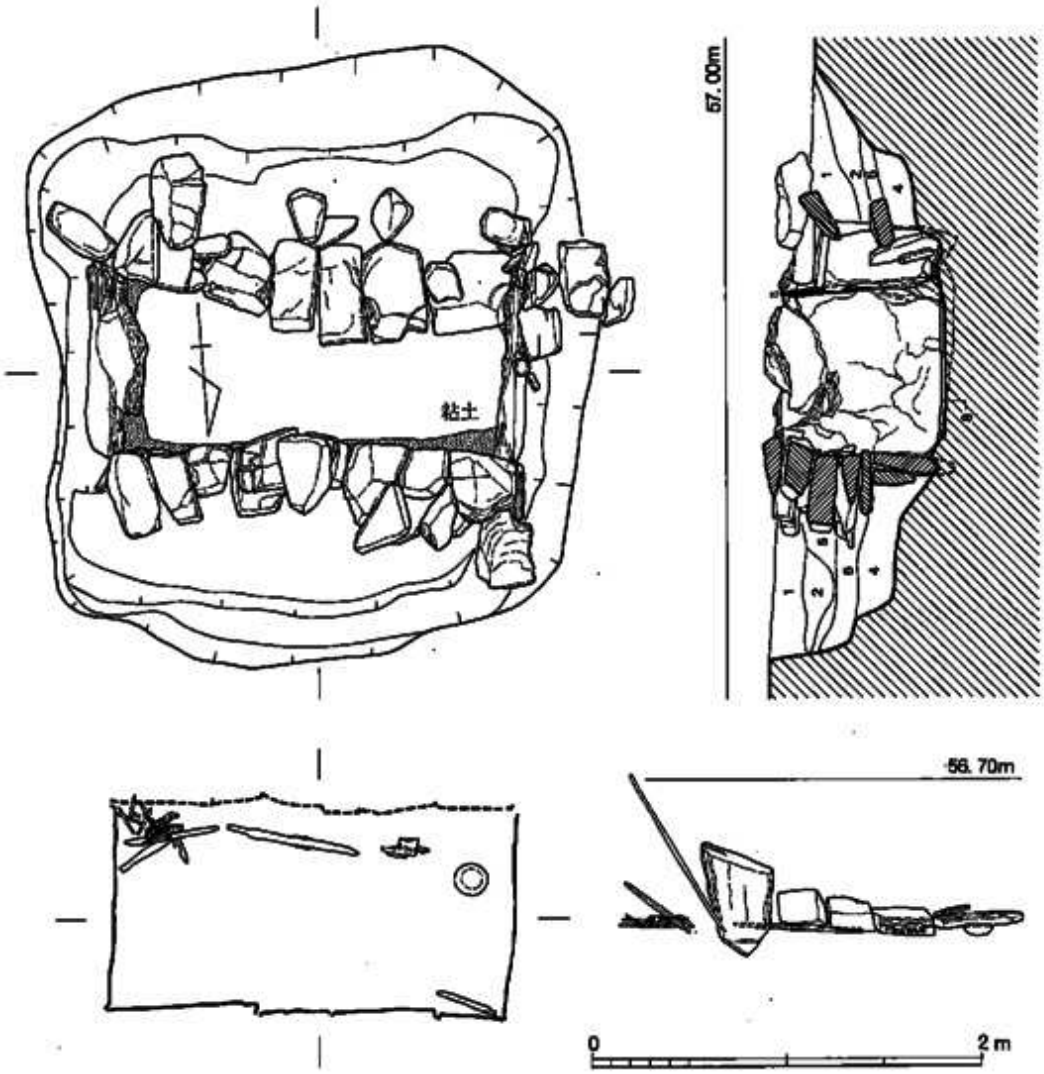
内部主体（図版8—(2)・9—(1)・(2)、10—(1)・(2)、11—(1)、第25図）

地山を0.65mの深さに掘り込んで、平面がほぼ方形の墓壙を有す石棺系竪穴式石室である。墓壙は地山の直上の茶灰色粘質土（淡黄灰色粘質土混じり）盛土から掘り込み、東・西の小口部には幅1.05mの緑泥片岩の板石を立て、それを挟む形で側壁に緑泥片岩板石一枚を立てた後に花崗岩質の石材を積んでおり、現状では北側の側壁で四段ほど残っているが、天井石は激しい盗掘でまったく遺存しておらず、南側壁の棺材も大半が抜去されている。

積石の裏込めには茶灰色粘質土と淡灰褐色砂泥、黄灰色粘質土を交互に充填し、一部版築状に敲き締めている。床面には暗灰色土の混ざった明茶色土が薄く敷かれ、棺材に添う形で淡黄灰色粘土が残っていた。石室の法量は長さが2.05m、幅は1.05mを測り、主軸はN85°Wを示



1　茶灰色やや粘質土に淡黄灰色粘質土混入
1′　1に暗灰色土が若干混入
2　淡灰褐色砂泥
3　淡茶灰色砂泥
4　3＋暗灰色砂泥
5　黄灰色粘質土
6　暗褐色砂泥に5が薄く版築状に混入
7　淡黄灰色粘質土に暗灰色土混じり
8　暗茶色土、暗灰色土僅少混入

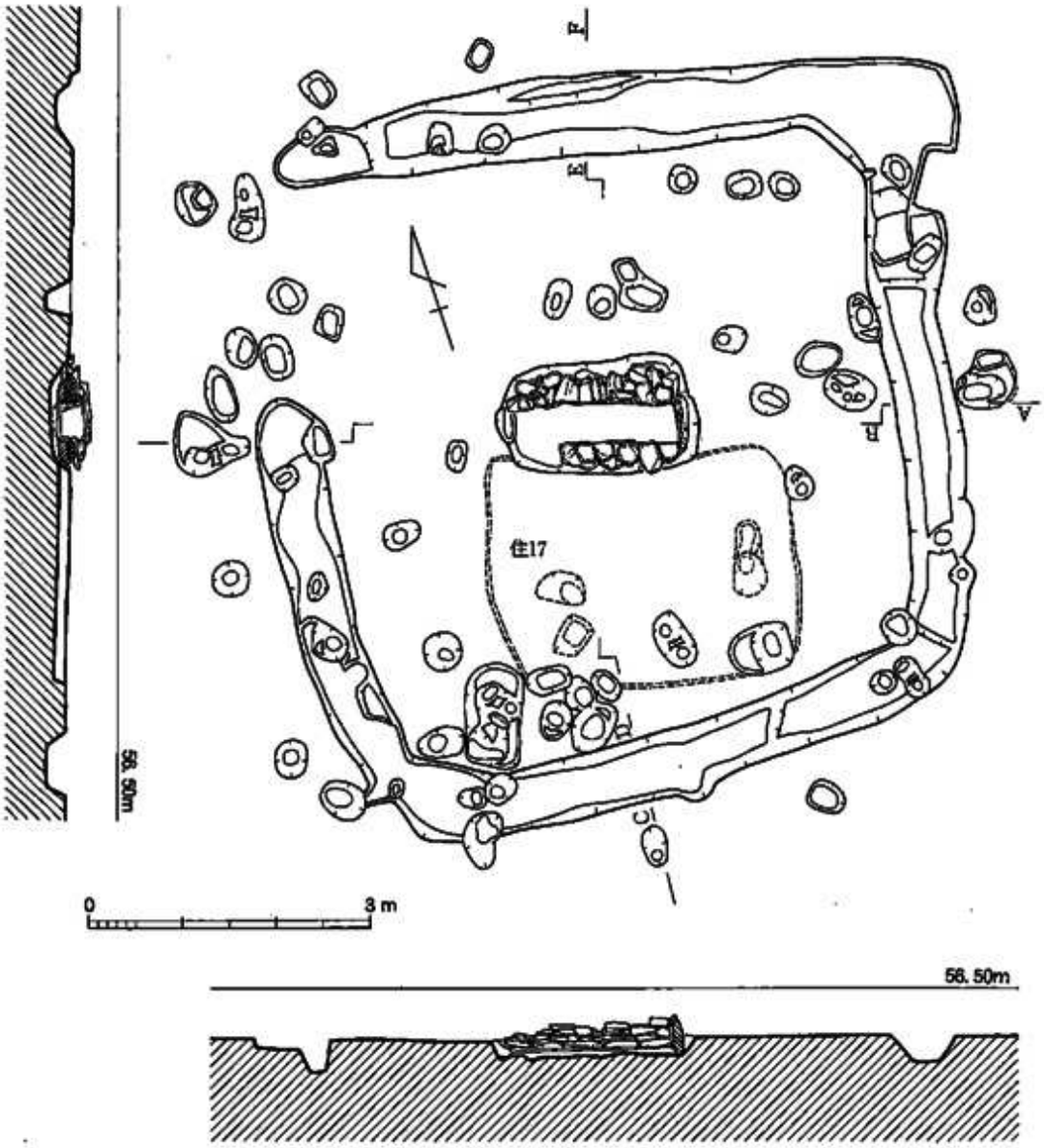


第25図　3号墳主体部実測図（1/40）

しほぼ東西に向いているが、頭位が不明瞭である。

遺物は周溝の北側で土器が集中して出土し、南側と東側から若干出土した。また石室の1，2m東の地山に密着した状態（墳丘下か）で甕が出土しており、築造時の祭祀に使用された可能性がある。出土した器種は、土師器の壺・甕・高坏、須恵器の甕・甑・高坏などがある。

石室内の出土遺物は、激しい盗掘により元位置を保ったものは少なく、元の位置と思われるものは石室の南東隅で集中して出土した鉄器類と南側壁基底部の板石の下から出土した鉄剣・



第26図　4号墳実測図（1/80）

鉄斧及び土師器の坏が可能性がある他は、元位置を保った遺物はなく、２本の大刀は両小口部の板石に立て掛けた状態で、装身具類は攪乱された覆土下層から層位を違えて出土している。

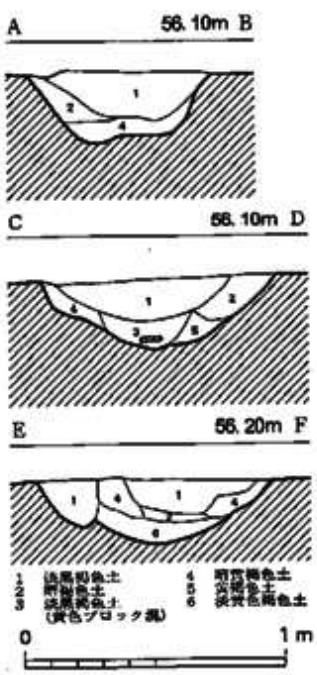
鉄器の種類は、大刀・鉄剣・短刀・刀子・鏃・鉄斧・鉄鏃があり、装身具類には、ガラス小玉・滑石製臼玉多数がある。この中のガラス小玉２個には孔の中に緑錆をふいた銅線が残っておりこのような出土例は非常に稀である。刀装具などの飾りに使用した玉類かも知れない。

４号墳（図版12―(1)、第26・27図）

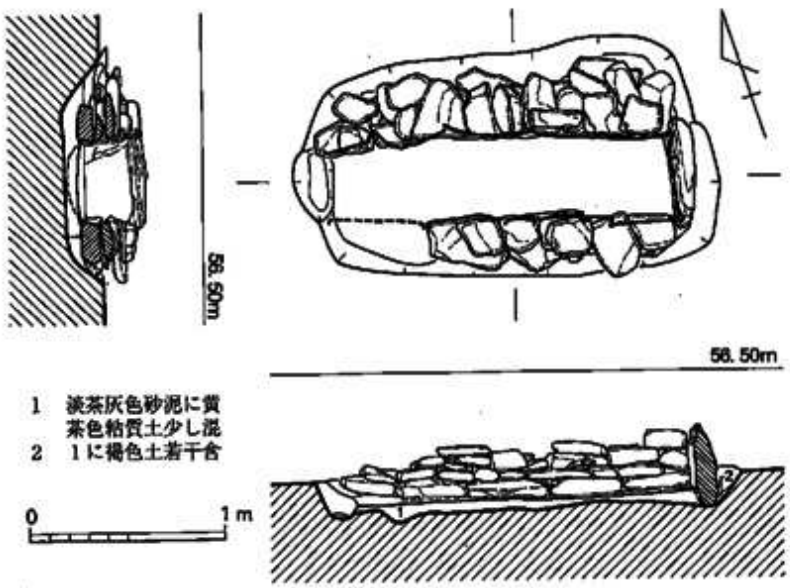
３号墳の南西側10.0mに築造された古墳で、平面の形状はやや歪な方形周溝墓状を呈しているが、小形の方墳であろう。墳丘下には方形に近い17号竪穴住居跡があるが、築造時に削平を受け遺存状況は良くない。Ⅱ区全体の古墳の分布を概観し古墳の規模から推測すると近親者の古墳が南側の調査区外に存在すると考えられる。

古墳の規模は、北側辺で7.30m、東辺で6.80m、南辺で6.20m、西辺で7.50mを測り、墳丘部分は一辺5.50mである。北東隅には幅が2.20mの陸橋部を形成しているが、この部分が削平を受けてできたのか元々陸橋として造られたのかは分からない。

現状での周溝幅は0.6m～0.8m、深さは0.1m～0.3mを測り、覆土は黒褐色系が上層に、黄褐色系が下層にレンズ状に堆積していた。



第27図　４号墳周溝土層断面実測図（1/30）

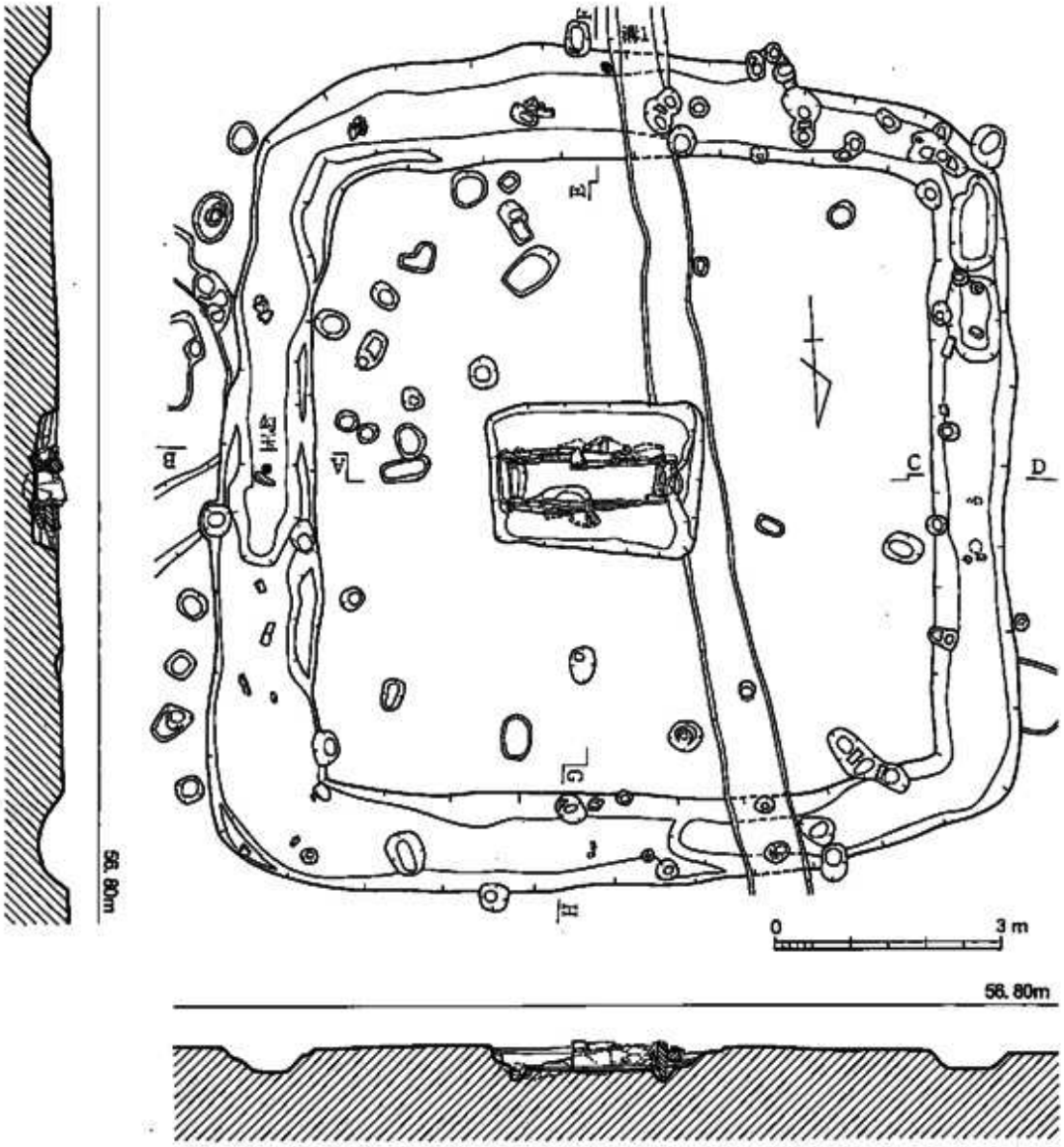


第28図　４号墳主体部実測図（1/40）

内部主体（図版12—(2)、第28図）

形態的には石棺系の竪穴式石室であるが、盗掘により天井石・西側小口石・南側壁の一部が抜去されている。石室の主軸と北側周溝とは平行に構築されるが、南側と西側の辺は石室に対してやや歪に巡る。

墓壙は隅丸長方形を呈し、墓壙内いっぱいに石室を構築している。東側小口には緑泥片岩の板石を立てており、西側も同じ石材を立てていたと思われる。両側壁は墓壙の底面に黄茶色粘



第29図　5号墳実測図（1/100）

質土混じりの淡茶灰色砂泥を敷きその上に花崗岩質（河原石）の石材を小口積みし、現状では四段ほど残っている。

石室の床面には茶灰色粘質土を5.0cm敷き詰め、法量は長さが1.75m、幅が0.45mを測り、東側の床面が若干高いことから頭位は東側にあったと推測される。石室の主軸方位はS73°Eを示す。

出土遺物は盗掘のためか石室内にはなく、周溝内から土師器の小型壺が1点ある。

5号墳（図版13—(1)・14—(1)・(2)、15—(1)、第29・30図）

3号墳の西側10.0mに位置する古墳で、南北に走る細く浅い古墳時代以降の溝1に一部切られているが破壊は僅かである。激しい盗掘及び削平を受け墳丘は遺存しない。

古墳の形状は方形で、東側の周溝に接するように小形の8号墳が築造されている。一応の重複があるが同時併存で当該古墳の被葬者との近親関係が推測される。また、北側に隣接する形で9号墳が築造されており、この古墳も5号墳との関連性が考えられる。

墳丘の規模は、周溝を含めると北側辺が10.7m、南側辺が9.70m、東側辺が10.0m、西側辺が9.0mで、墳丘部分は8.0m前後を測る。

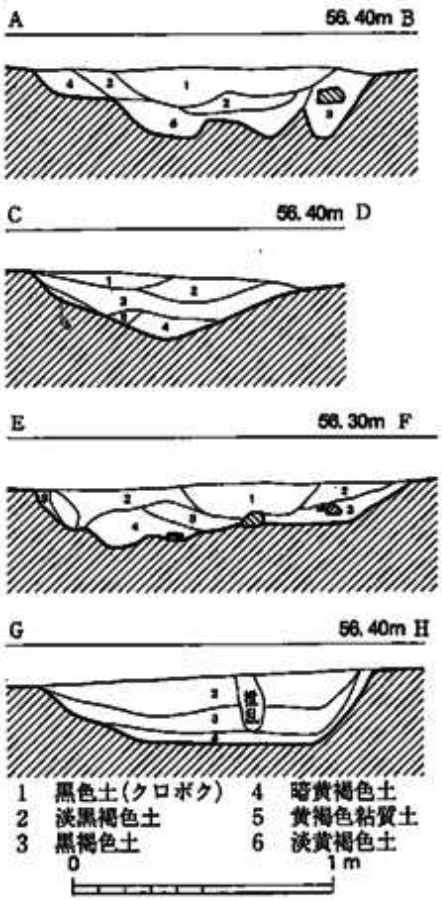
周溝は幅広の個所で1.50m、狭い所で1.00m、深さは0.3m前後を測る。

内部主体（図版13—(2)、第31図）

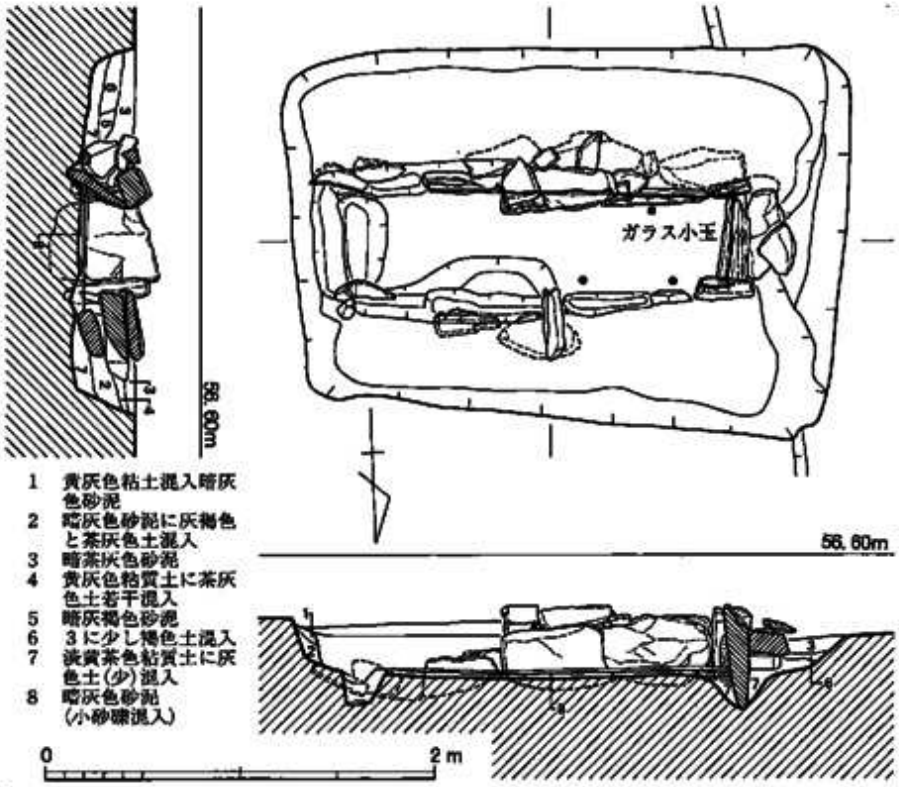
周溝に囲繞された中央部に隅丸長方形の墓壙を掘り込み、内部には石槨系竪穴式石室を築造している。墓壙の規模は、長軸で2.85m、短辺の東側が1.65m、西側で1.95mを測り、西側が幅広になる。

墓壙に対して石室の側壁は余裕のある設置をし、小口部は西側にやや空間をなす。裏込めには灰色砂泥と黄褐色系の粘質土を交互に充填し、その中には基底部の板石を支えるための裏込め石を埋め込んでいる。

石室は盗掘が激しく天井石と大半の石材が抜かれていたが、両小口部には緑泥片岩の板石を立て、基底部の立石は緑泥片岩を使い、その上に花崗岩質片岩を積上げていたと考えられる。



第30図　5号墳周溝土層断面実測図（1/30）



第31図　5号墳主体部実測図（1/40）

床面には、小礫の混ざった暗灰色砂泥を薄く敷き詰め、全体に薄く朱が撒かれていた。内法は長さが1.75m、幅は東側が若干広く0.47m、西側は0.40mを測り、頭位は東側であろう。主軸方位はS88°Eを示し、ほぼ東西方向に向いている。

遺物は西側床面の若干上層でガラス玉と刀子が出土したが、盗掘によりかなり乱れていた。この他、周溝内から土師器の小形壺・甕・鉢・坏、須恵器の二重口縁壺、滑石製の勾玉などがある。

6号墳（図版15―(2)、第32図）

5号墳と7号墳の間に位置する小形の円墳で、位置的には7号墳の東側3.0mにあり、7号墳と近親関係かそれに近い関係にあると推測される。当該古墳の下層には押型文土器に伴う石組炉が密集している。

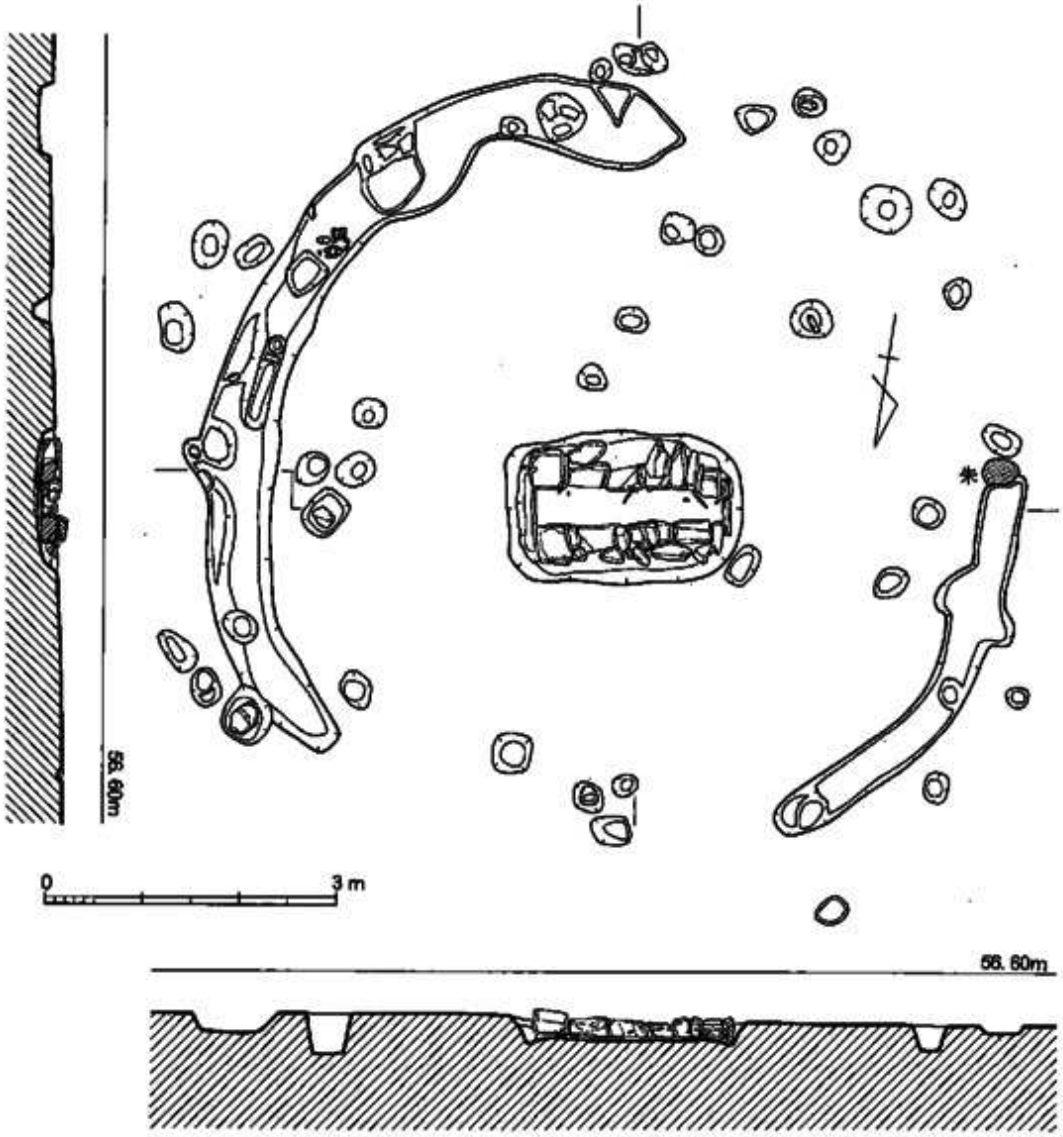
古墳の削平が激しく、本来巡っている周溝の北側と南西側が消失しており、遺存する周溝の残りも悪い。古墳の規模は、周溝を含めると直径が8.40m前後で、墳丘部分は直径7.20mを測り、周溝は幅広の個所で0.65mである。

内部主体（図版16―(1)・(2)、17―(1)、第33図）

墓壙の形状は隅丸長方形で、規模は長軸で2.40m、短軸で1.55mを測る。石室の裏込めには砂礫混じりの暗灰色砂泥を充填している。

内部主体は石棺系竪穴式石室で、周溝同様削平が激しく、西側小口部の板石は上半が破壊されており、東側は抜去されている。側壁は基底部の石材のみが遺存している。石材は小口部に緑泥片岩の板石を使い、側壁には雲母片岩、花崗岩質片岩、砂岩など積み上げている。

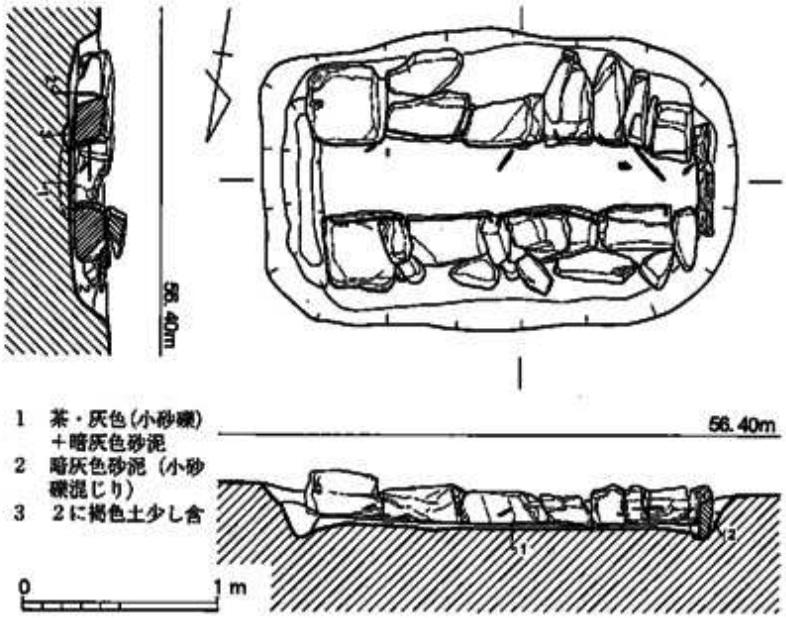
床面には茶灰色に小礫を混ぜて敷き詰め、内法は長さが1.95m、幅は西側が0.4m、東側で



第32図　6号墳実測図（1/80）

は0.25mを測り、東側が幅広で頭位方向であると推測される。

遺物出土状態は、周溝内からは土器類はなく、西側の周溝が削平を受けた部分から朱が土と混ざって検出された。恐らく石室内にも散布されていたのであろうが、盗掘の際の撹乱で消失したのであろう。石室内の副葬品には短刀・刀子・錐・鉋・鉄鏃などがあるが、盗掘で石室内が撹乱を受け床面から浮いた状態で、しかも散乱した形で出土しており元位置を保っているものはない。



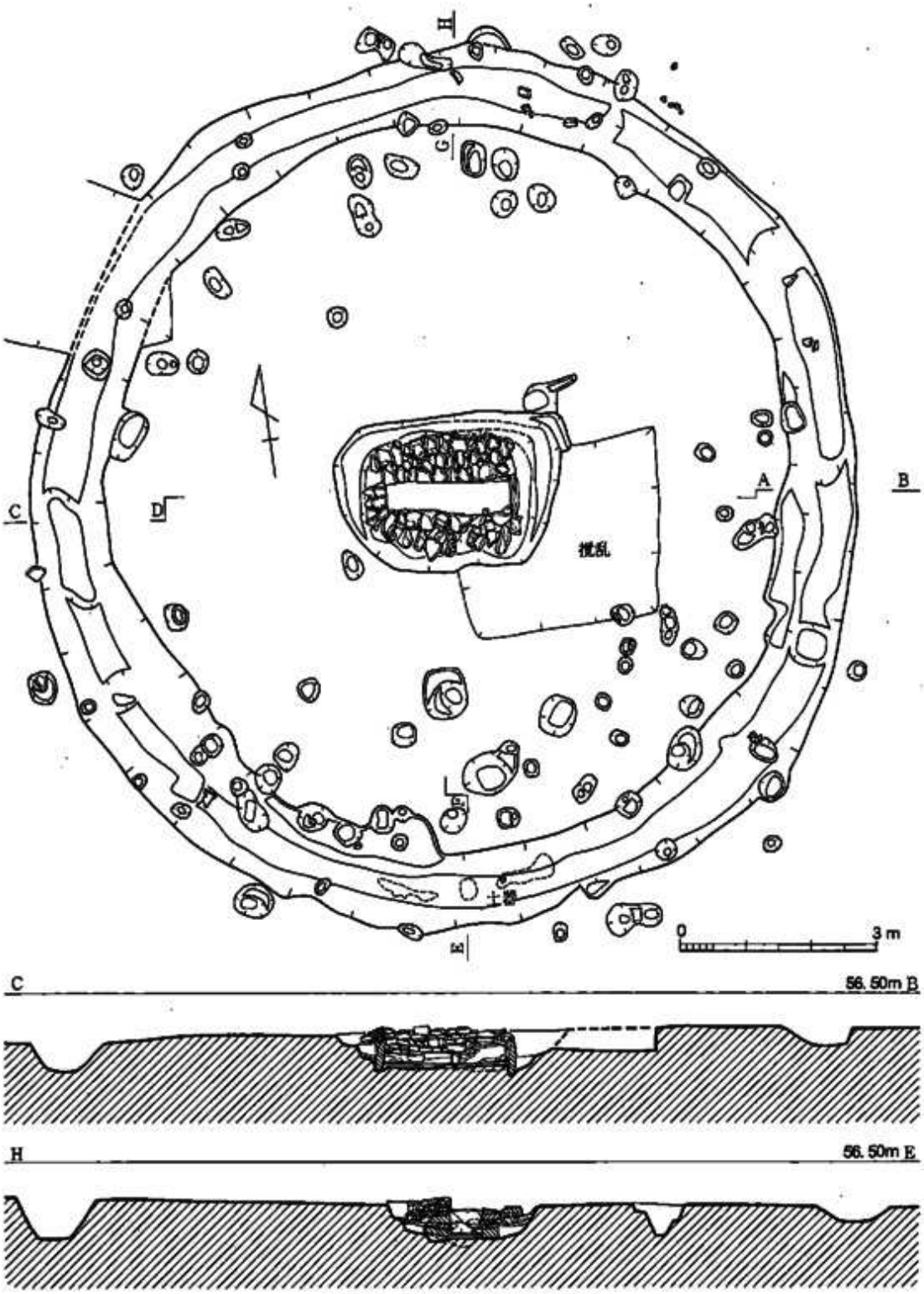
第33図　6号墳主体部実測図（1/40）

7号墳（図版17—(2)、第34・35図）

調査区内で検出した古墳の中で3号墳に次いで規模の大きな円墳で、他の遺構との重複はない。周囲に6号墳と13号墳、周溝が完全に削平された10号墳の小円墳が分布しており、6号墳の石室の主軸は東西方向でほぼ一致するが、10号墳の石室の主軸とは若干の齟齬があり、7号墳に付随する古墳であるか否かははっきりしないが、構築する位置的な関係から観ると可能性が強い。

13号墳については当該古墳に付随する可能性はあるものの、主体部の主軸方位が異なりその可能性は薄いと考えられる。また、西側に隣接する17号墳（旧溝2）との関係は17号の主体部が不明なため断言できない。

古墳の規模は、周溝を含めると東西方向で12.7m、南北方向で13.5m、墳丘部の直径は東西軸で10.5m、南北では11.1mを測り正円ではない。主体部の天井石が完全に抜かれていることからかなりの削平を受けていると考えられるが、現状では幅広の個所で1.60m、狭い所で0.9m前後、底面は西と東で部分的に高低があり、深い所で0.6m、浅い個所で0.3mを測る。西側の周溝の一部は耕作時の構造物で破壊されている。



第34図　7号墳実測図（1/100）

内部主体（図版18―(1)・(2)、19―(1)、第36図）

南側を除いて二段掘りの不整楕円形の墓壙をなし、東側は耕作時点でかなりの削平を受けている。墓壙の規模は、現状で3.60m、短軸では2.30m、深さは0.6mを測る。

墓壙内には余裕を持って石棺系竪穴式石室を構築している。裏込めには茶灰色砂泥と同色の粘質土を充填していた。

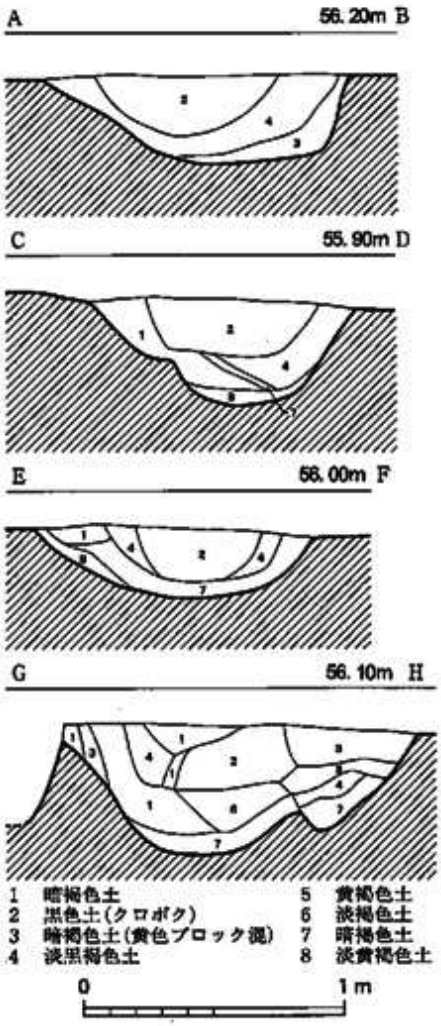
石室の両小口は緑泥片岩の板石を立て、北側壁は一部板石を立てるものの、大半は花崗岩質片岩と砂岩を小口積みし、やや広めに控え積みしている。

西側の小口板の上にも三段ほどの小口積みがあるが、東側の小口積石は墓壙が削平される時点で抜去されたのであろう。

側壁の石材の間には黄灰色粘土で目張りを施している。床面には小礫の混ざった暗灰褐色粘土を敷き詰めている。

石室の法量は、長さが1.95m、幅は0.5mほどで、東側が若干幅広で石材も大きめのものを使用していることから頭位は東であろう。主軸方位はS82°Eを示す。

石室内からの副葬品は盗掘を受けたためか滑石製白玉があるのみで、出土状態も攪乱された覆土中からである。この他、周溝の南側に集中して破砕された土師器の壺・甕・高坏・鉢の他、須恵器の甕などが出土した。

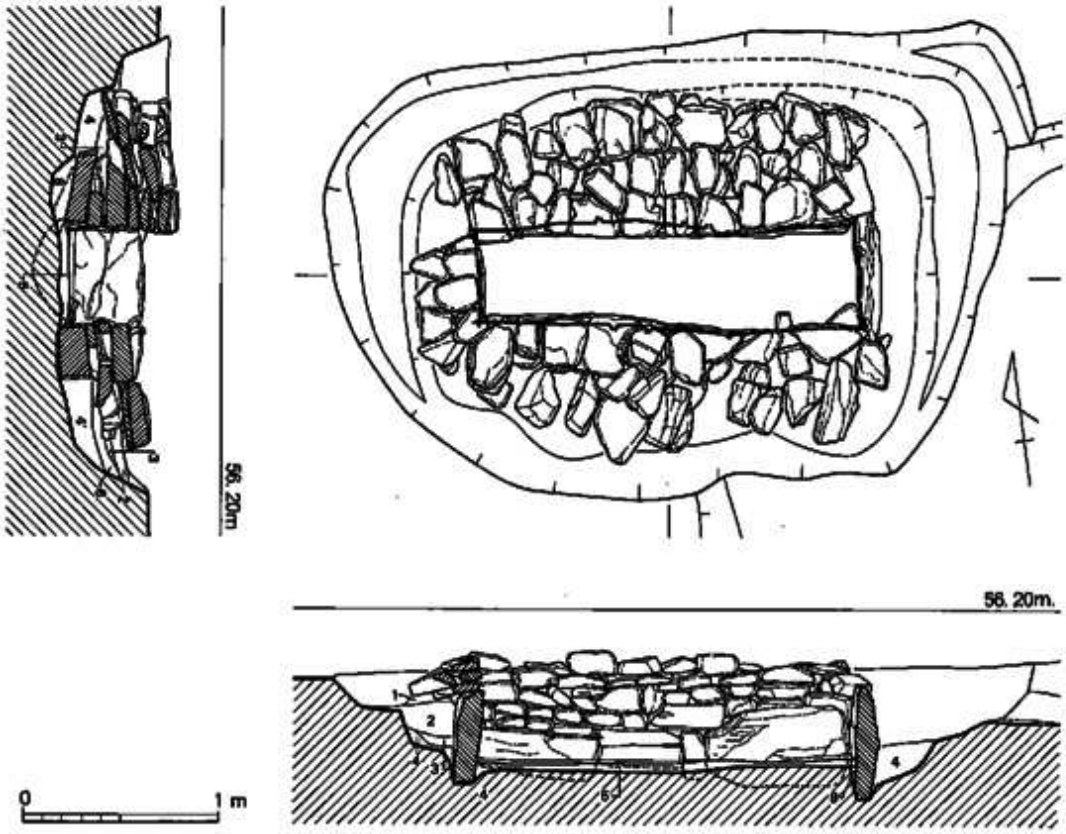


第35図　7号墳周溝土層断面実測図（1/30）

8号墳（図版13―(1)、第37図）

5号墳（方墳）の東側に位置する小形の円墳で、周溝の一部を5号墳と共有しており、周溝を共有する例は5号墳と8号墳のみでほぼ同時併存と考えられる。また、前述したように両者は近親関係にあると推測される。

平面形状はやや歪な円墳で墳丘は完全に消滅している。削平が激しいためか東側の周溝は途切れ、一見陸橋部を造り出しているかに看取できる。



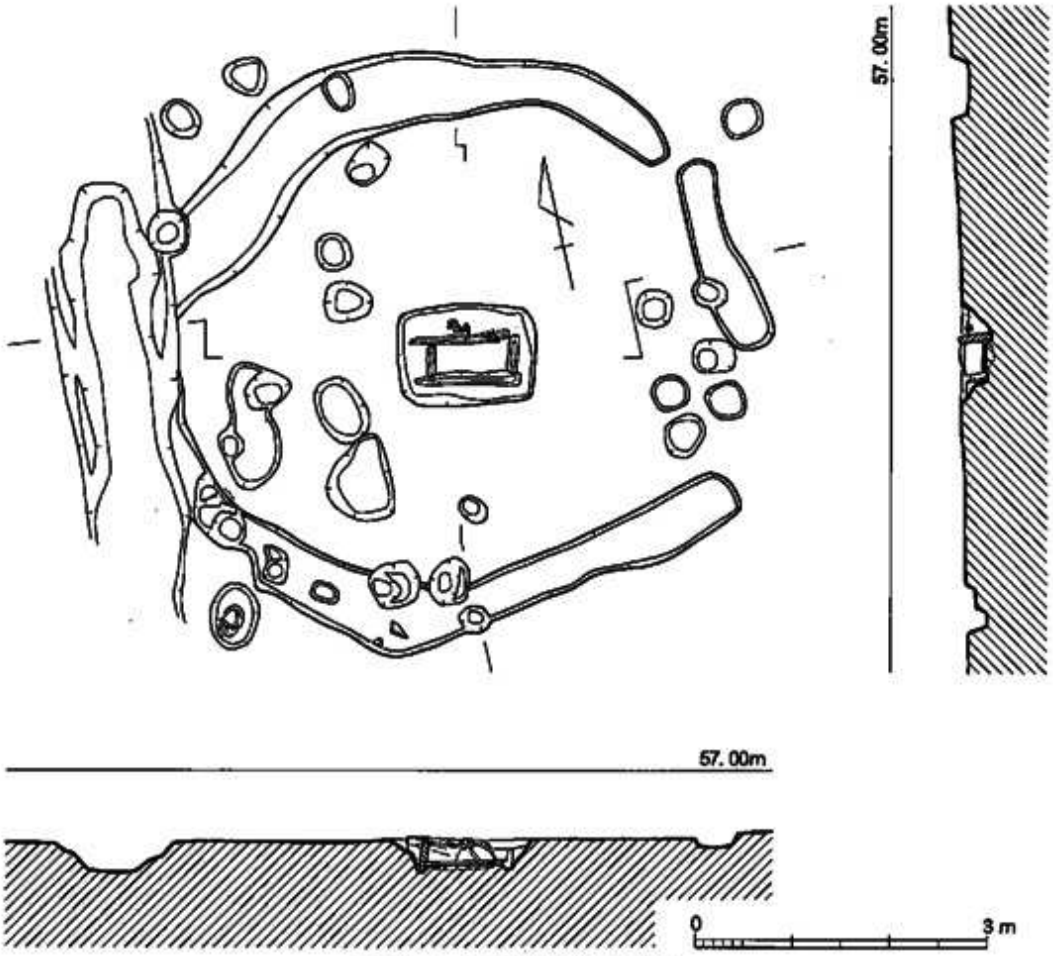
第36図　7号墳主体部実測図（1/40）

周溝を含めた古墳の規模は、東西方向で約6.8m、南北軸で6.1m、墳丘部分で東西軸で5.5m、南北方向が4.7mを測り正円ではない。周溝は幅広の部分で0.8m、狭い個所で0.4m、深さは0.2mを測る。

内部主体（図版19―(2)、第38図）

古墳の中央部の地山を長方形に掘り込んだ墓壙をなし、その規模は長軸で1.40m、短軸が1.0mを測る。内部主体は箱式石棺であるが、天井石と東側小口及び南側板石が耕作の撹乱で完全に抜去され板石の掘方のみが遺存する。北側板石も部分的に破壊されている。

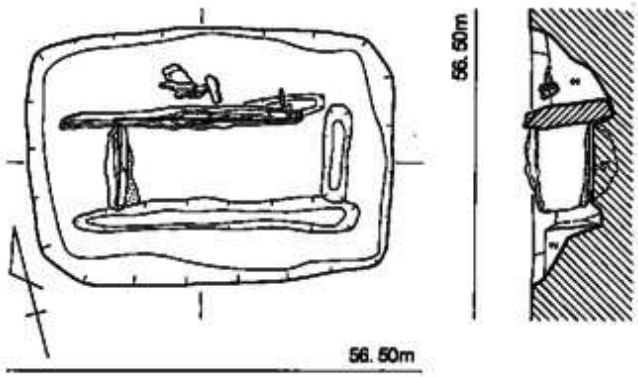
石棺の形態は両側板が小口板石を挟み込むタイプのもので、側板は一枚の板石で構築している。残る石材はすべて緑泥片岩である。裏込めには暗茶灰色砂泥と暗灰色砂泥で充填し、床面には暗茶灰色砂泥を薄く敷き詰めていた。石棺の法量は、長さが0.8m、幅が0.3m強を測り、東側が幅広で頭位方向と考えられる。

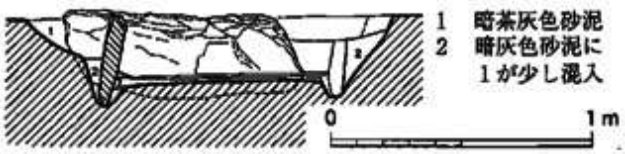


第37図　8号墳実測図（1/80）

内法の長さが0.8mと短いことから被葬者は子供の可能性が考えられ、接して築造された5号墳とは親子関係が推測される。

棺内が荒らされていたので副葬遺物は分からない。周溝内から弥生時代の甕の小破片があるが、直接古墳に係る遺物はない。

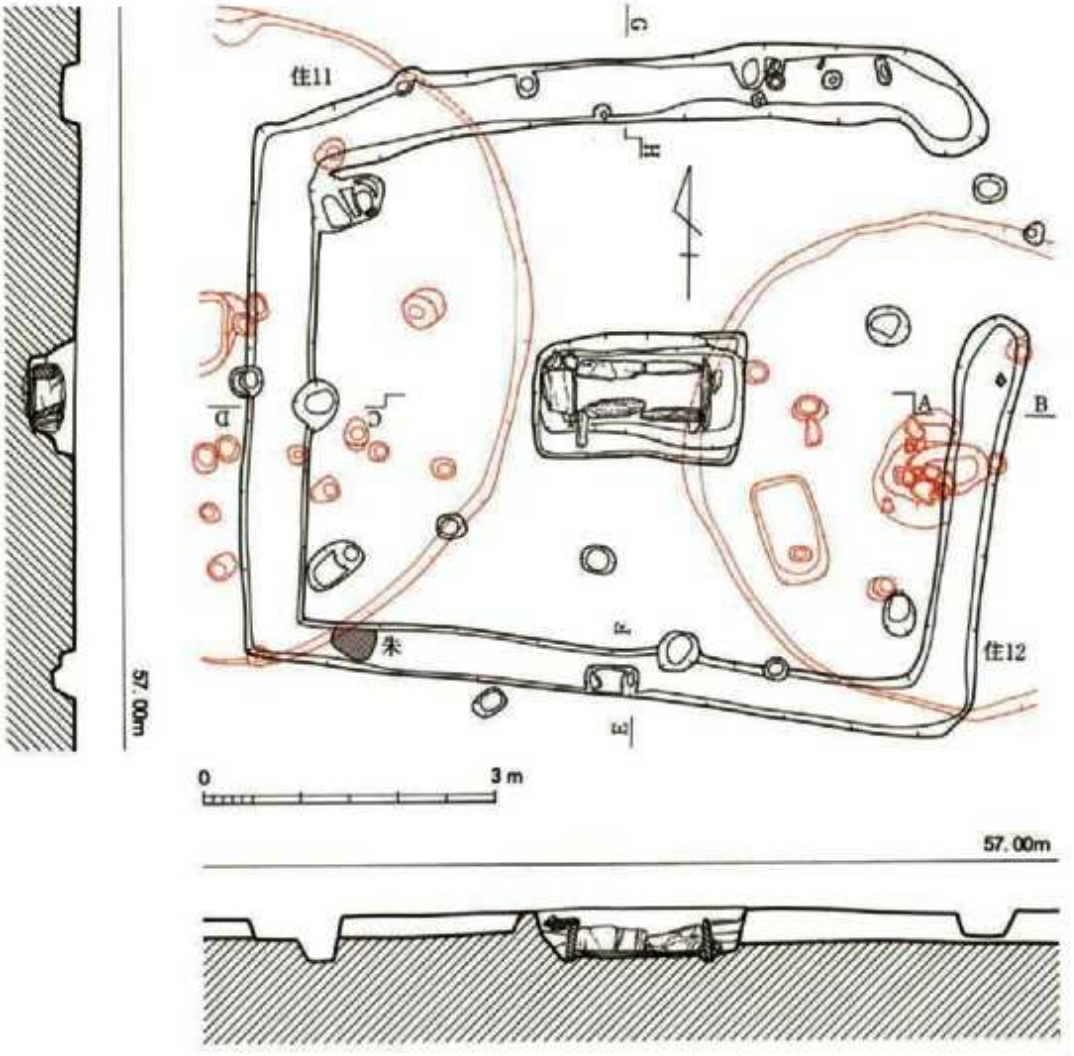




第38図　8号墳主体部実測図（1/30）

9号墳（図版20―(1)、第39・40図）

5号墳の北側傍に築造された古墳で、形態状は方形周溝墓状であるが、



第39図　9号墳実測図（1/80）

時期的な観点から方墳（長方形に近い形状）とするのが妥当であろう。

築造場所は恰も5号墳を意識したかのように並列している。前述したように、5号墳の被葬者と密接な関連があると推測される。古墳の下層には弥生時代前期末と中期初頭頃の竪穴住居跡を検出した。

墳丘の規模は、周溝を含めると南・北辺で7.5m、西辺が5.5m、東辺は陸橋部（幅1.7m）を含めると7.0mを測り、やや不整形な造りである。墳丘部分は6.6mと5.4mである。周溝の幅は0.5m～0.7mで、深さは0.2m前後を測り、削平を受けていると思われるが、主体部の遺存状況から観ると著しく削平されていないようで、本来低墳丘であったと推測される。周溝内

には、上層に黒褐色土がやや厚めに、下層には黄褐色土がレンズ状に堆積していた。恐らく、下層に堆積した黄褐色土が墳丘盛土に使われていたのであろう。

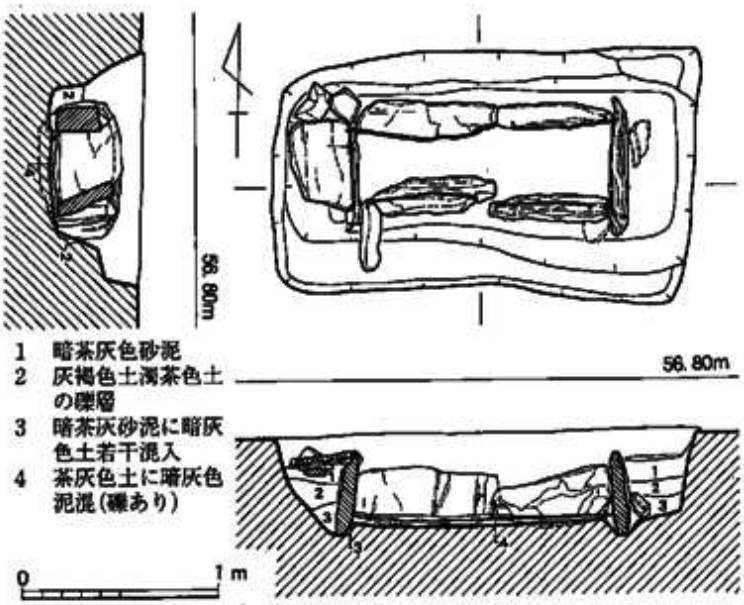
内部主体（図版20—(2)・21—(1)、第41図）

主体部は、長方形の墓壙内に小形の部類に入る箱式石棺を納めている。墓壙の大きさは、長軸で2.15m、短軸で1.2m，床面までの深さは0.45mを測る。石棺の裏込めは茶灰色砂泥を充填し、一方の小口石は支え石を埋め込んでいる。

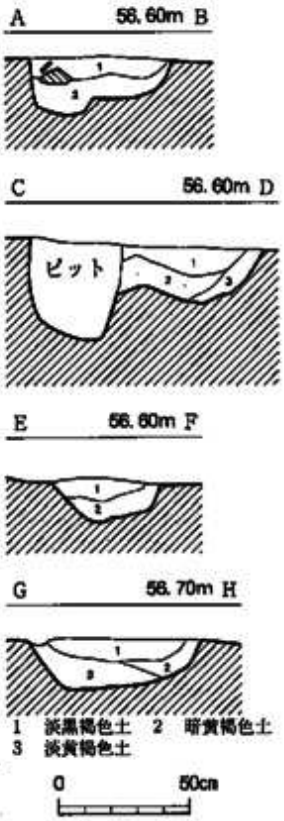
箱式石棺は、側板を小口石が挟むタイプで、石材は東小口と南側板が緑泥片岩を使い、他は花崗岩質の板石を使用している。西側の小口石の上には一枚の板石が残っており、傍には控え積み石が遺存していて、石棺系竪穴式石室の可能性もあるが天井石の大半が盗掘で除去されていてはっきりしない。墓壙の深さからこの板石は天井石の一部かも知れない。

床面には、茶灰色に暗灰色と礫混じりの土が敷かれており、一部朱が残っていた。石棺の内法は、長さが10.33m、幅は東側で0.4m、西側で0.35mを測り、東側が幅広になりこの方向が頭位であろう。主軸方位はN87°Eを示し、ほぼ東西に埋葬していて５号墳と主軸方位が同じである。

棺内からの出土遺物は、被葬者の右側から遊環をもつ鉄製釧とガラス玉がある。この他、近世陶磁器のぐい飲みが出土しており、盗掘時の遺物の可能性がある。周溝内からは口縁部を欠損した初期須恵器の胴部片の他、周溝南側から朱の塊を検出した。



第41図　９号墳主体部実測図（1/40）



第40図　９号墳周溝土層断面実測図（1/30）

10号墳

7号墳の東北側4.0mに位置する古墳であるが、耕作による削平が激しく周溝が完全に消滅している。前述したように、築造場所から7号墳に付随すると考えられるが、5号墳と8号墳のように接する形なのか、近接するのかが不明である。

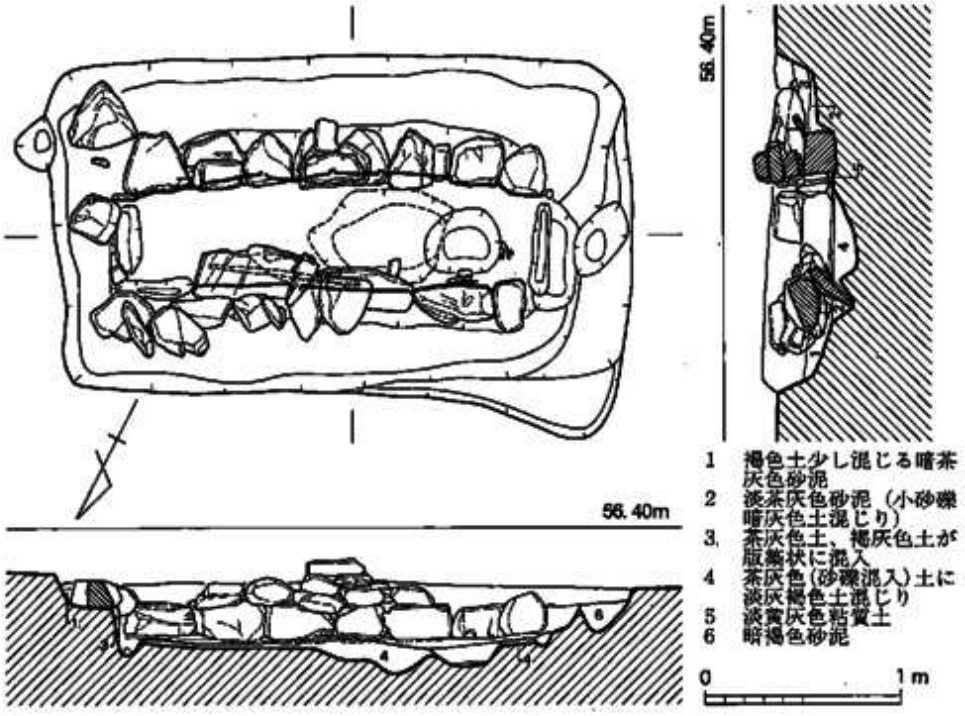
内部主体（図版21—(2)・22—(1-3)、第42図）

主体部は著しく削られ遺存状態は悪い。墓壙は、長さが2.95m、幅が1.70m、深さは0.35mを測る。裏込めには、暗茶灰色砂泥の下層に茶灰色土と灰褐色土を版築状に土固めている。

石材は花崗岩質片岩が主で、砂岩質と緑泥片岩の石材を若干使っている。両小口石は抜かれているが、他の例から緑泥片岩を立てていた可能性が強い。構築方法は、南側壁が花崗岩質のやや大きめの角石を据え、その上に砂岩質の石を積む。北側壁は緑泥片岩の板石を立て、上に砂岩質の石材を載せている。この築造方法から石棺系竪穴式石室であろう。

床面には茶灰色土と小礫が敷かれていたが、盗掘時に荒らされ凹凸があり砂礫は掻き出されており、西側床面に若干残っていた。

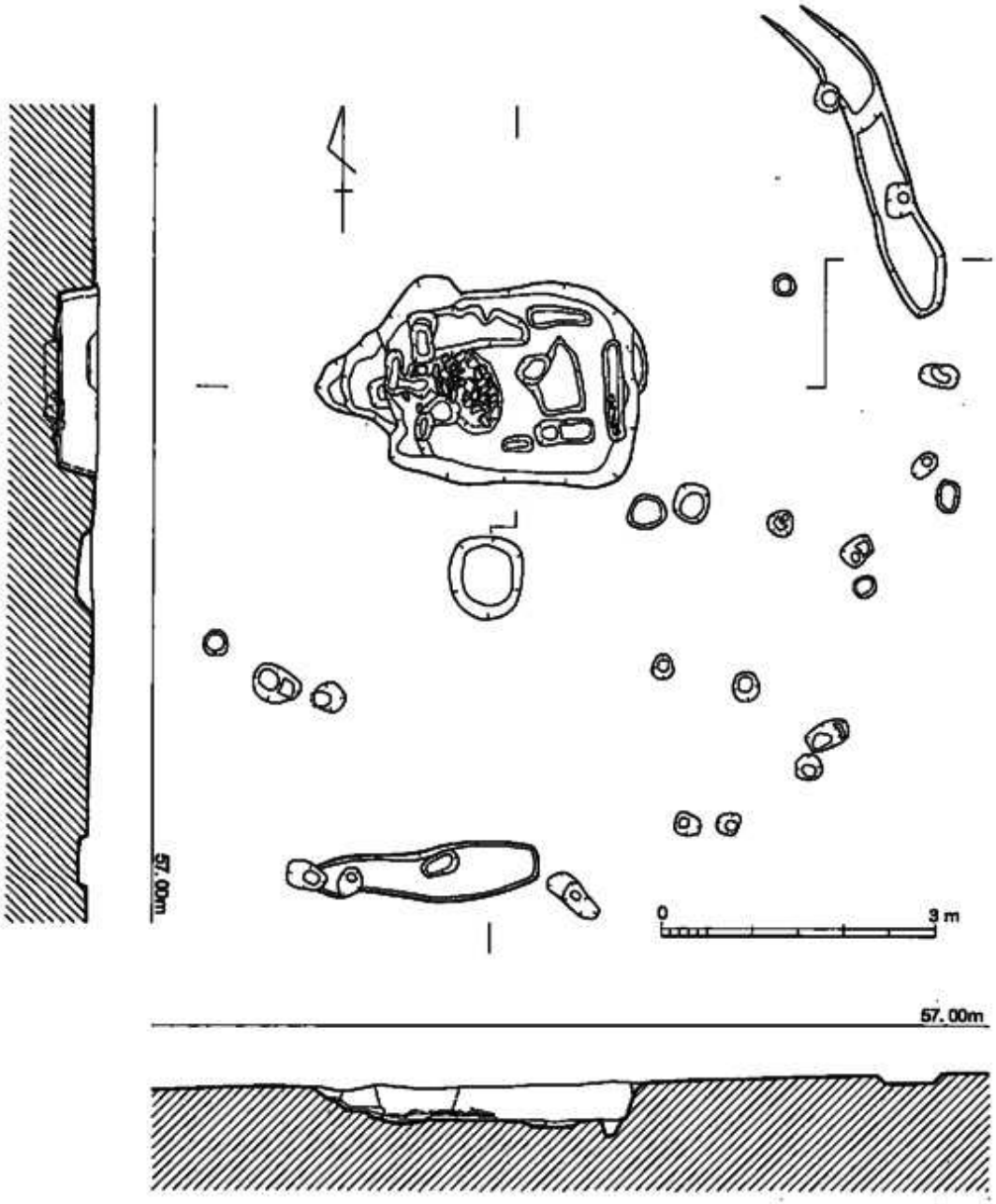
供献土器はないが、石室内の倒れた南側壁下から大刀・刀子・鉄鏃などの鉄器が床面上から出土した。



第42図　10号墳主体部実測図（1/40）

11号墳（図版23—(1)、第43図）

調査区の北側に位置する古墳で、後世の削平が激しく周溝、主体部とも遺存状況が非常に悪い。周囲の古墳では12号墳が南西側に隣接しているが、この古墳も削平が著しく不明瞭である



第43図　11号墳実測図（1/80）

が、付随する可能性がある。

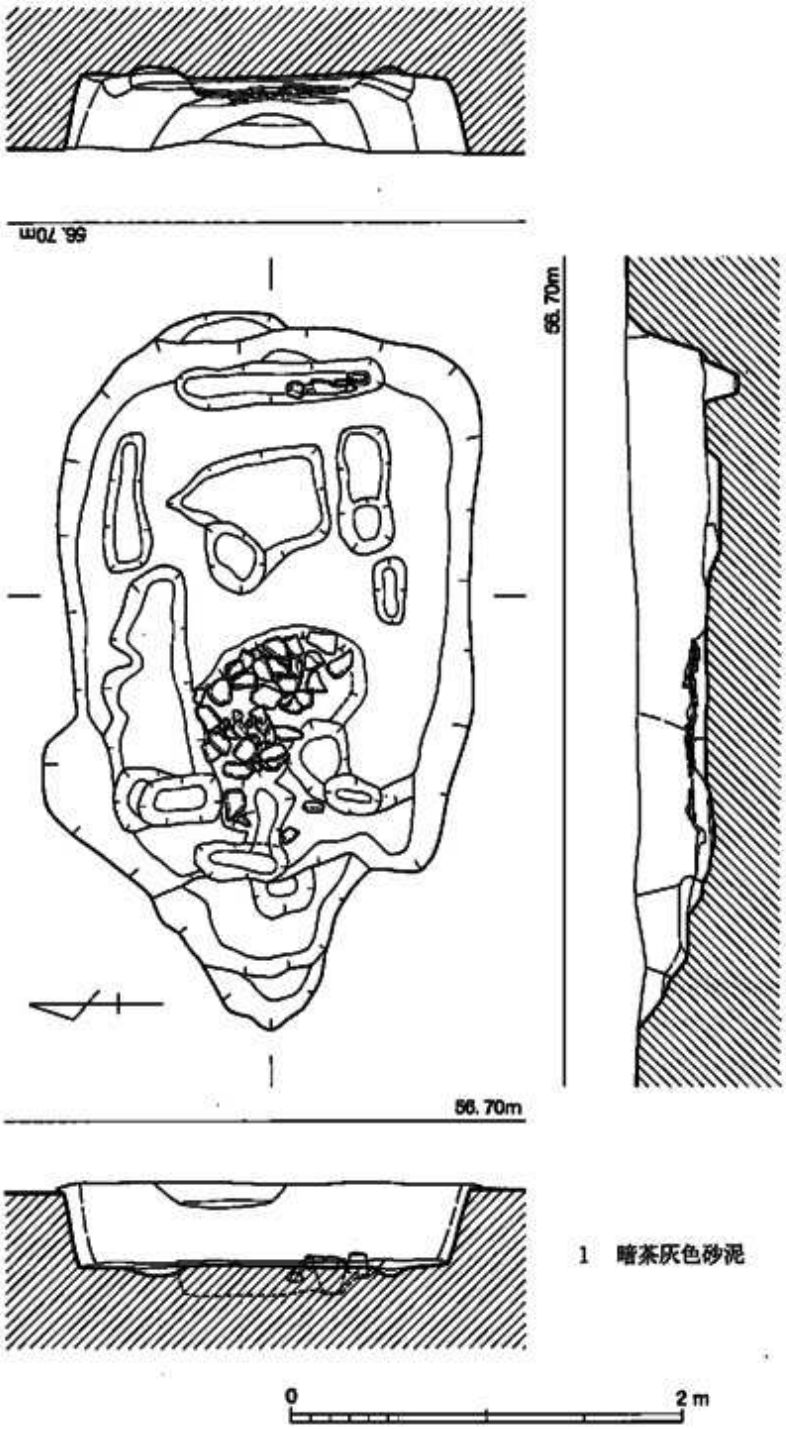
墳丘の形状は現状の遺存する周溝から判断すると円墳であろう。周溝を含めた直径は不明であるが、現状で復原すると10.0m前後になろう。

遺存している周溝の幅は0.6m前後、深さは0.1mを測る。

内部主体（図版23—(2)、第44図）

内部主体は徹底的に荒らされていた。墓壙の形状は不整隅丸長方形で、石材の抜去痕から判断すると奥壁と側壁の基底部には板石を立て、部分的に小口積みするタイプの竪穴式石室であるが、西側に突出した階段状の掘方が認められることから竪穴系横口式石室と考えられ、調査区内の古墳群では最も新しい古墳であろう。

墓壙の規模は、長軸で3.60m、幅は2.10m、現存での深さは0.40m



第44図　11号墳主体部実測図（1/40）

を測る。

床面は激しい撹乱で凹凸があり部分的に小板石の敷石が残っていた。敷石と地山間には暗茶灰色砂泥が充填されていた。

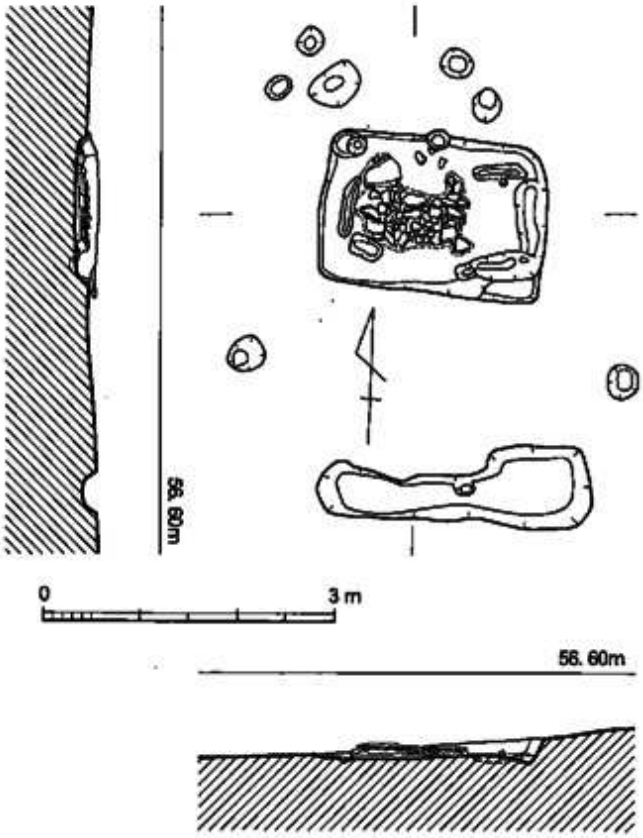
周溝内と主体部からの出土遺物は皆無である。

12号墳（図版24—(1)、第45図）

調査区の北西側、11号墳の南西側9.0mに位置する古墳であるが、この古墳も11号墳と同様著しく削平を受け遺存状態は悪い。

主体部の南側2.0mの所に古墳の周溝と考えられる一部が残っているが、古墳の形態が円墳か方墳かは不明である。

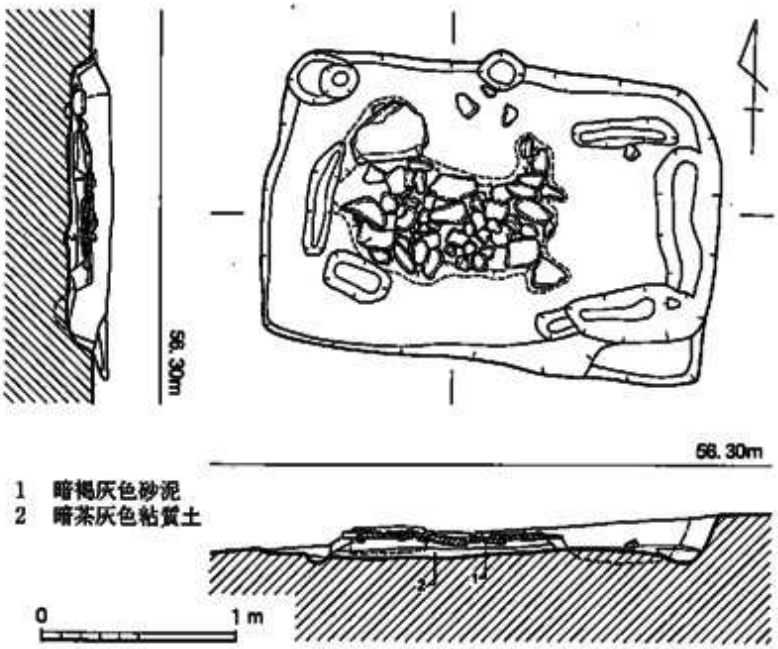
周溝の幅は0.4m～0.8mで深さは0.1mと浅い。



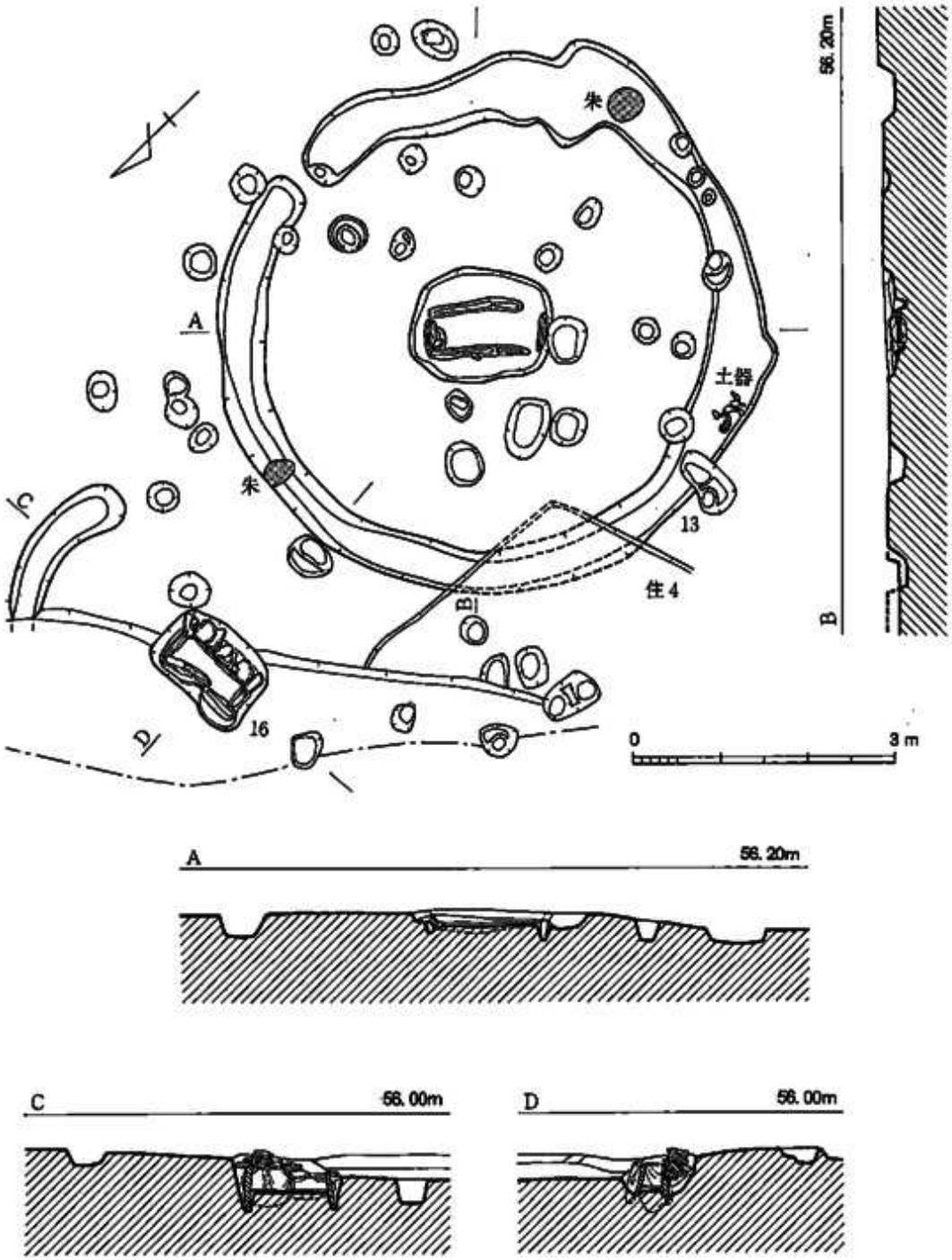
第45図　12号墳実測図（1/80）

内部主体（図版24—(2)、第46図）

長軸が2.35m、短軸が1.55mの長方形の墓壙を有す主体部であるが、大半の石材が抜き去られている。唯一北側壁に一枚の緑泥片岩が残り、この石材は小口積みした棋石で他の抜き跡から、両小口に板石を立てた石棺系竪穴式石室と推測される



第46図　12号墳主体部実測図（1/40）

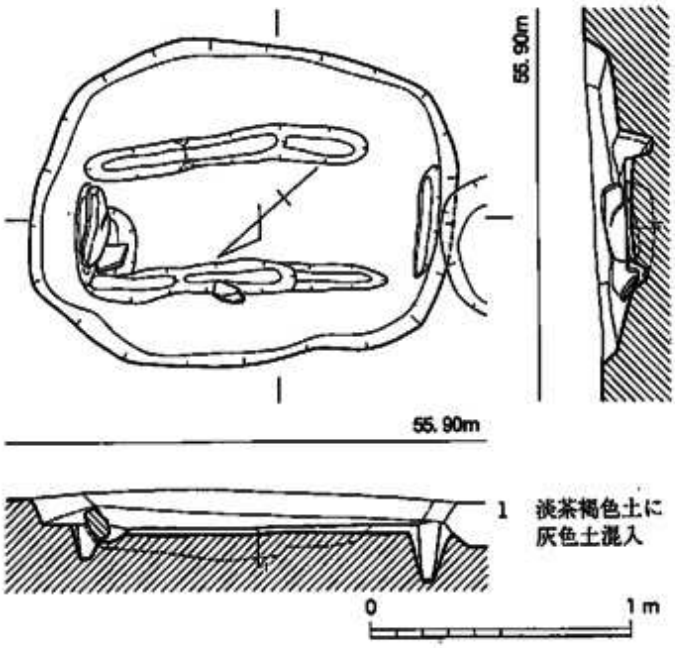


第47図　13号・16号墳実測図（1/80）

が、西小口側が若干の空間があり掘り込み面が床面より下位にあることから横口部が削平されている可能性がある。

中央床面には11号墳同様砂岩質の板石が残り、地山と敷石の間には暗灰色砂泥と暗茶褐色粘質土が充填されていた。

出土遺物は皆無である。



第48図 13号墳主体部実測図（1/30）

13号墳（図版25-(1)・26-(1)、第47図）

13号墳のある周辺は14号・16号古墳が錯綜している。14号墳との重複はないものの、16号墳は激しく削平され周溝の一部が遺存していて位置関係から重なりがあるか接する形で築造されていると考えられるが、現状では判断できない。また、周溝の西側で７世紀後半頃の４号竪穴住居跡と重複している。

古墳の規模から、大形の古墳に付随するものと推測されるが、７号墳乃至17号墳との関連が考えられるが推測の域をでない。

周溝を含めた規模は、6.30mと6.00m、周溝の幅は狭い個所で0.4m、幅広の所で0.7m、深さは0.2m前後を測る。墳丘の大きさは5.10mと4.90mである。周溝は東側で一部が途切れているが、本来は一周していたと思われる。

内部主体（図版25-(2)、第48図）

墓壙は不整楕円形を呈し、長軸で1.63m、短軸で1.25m、床面までの深さは0.1m強を測る。墓壙内には、小口板を挟む形の箱式石棺を埋置していたが、すべての棺材が抜き去られ棺材の掘方のみが確認された。

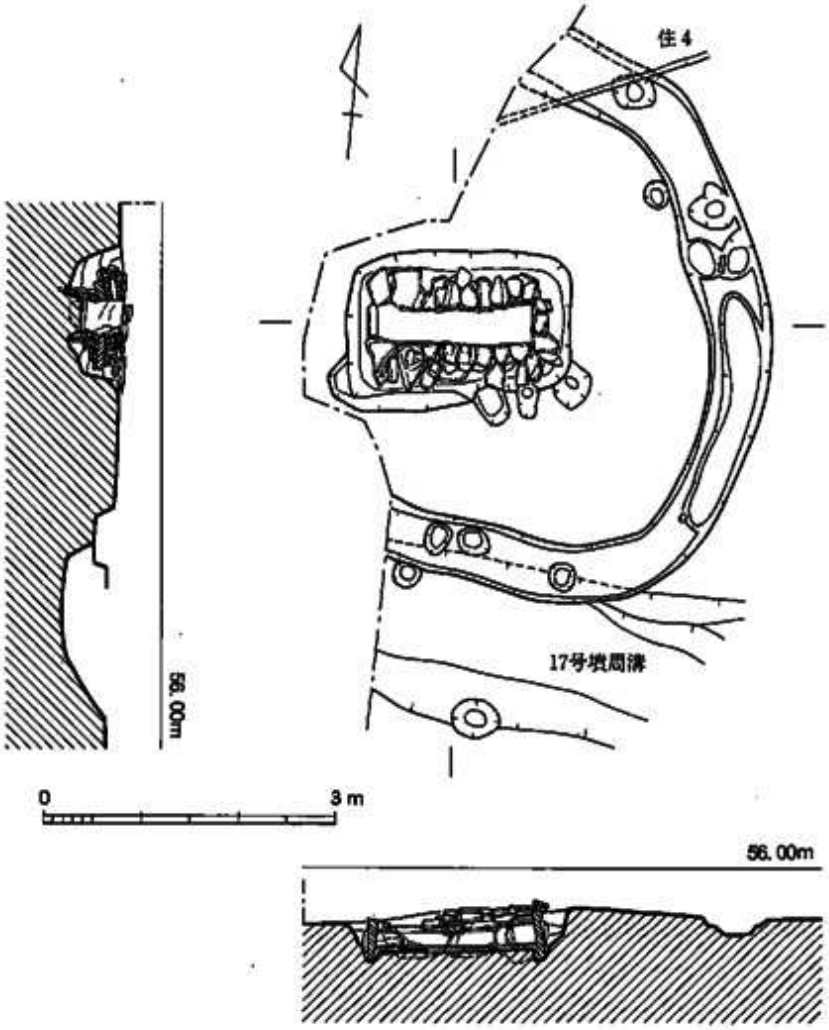
南西側の小口板石と両側壁との間に透き間があり、この部分には石材を小口積みしていたと推測される。石棺の内法は、長さが1.20m、幅は南西側が0.45m、北東側で0.35mを測り、南西側が幅広であり頭位であろう。床面には灰色土の混入した淡茶褐色土を3.0cmの厚さで敷いていた。主軸方位はS41°Eを示す。

盗掘で棺内からの副葬品はないが、周溝内からは土師器の小型壺・高坏坏部、須恵器の横形瓶片の他、南・北の２個所から砂泥混じりの朱塊が出土している。

14号墳（図版25—(1)、第49図）

Ⅱ区の北東隅で検出した古墳であるが、主体部は確認したものの周溝の約半分が農道の下にあり未掘である。東傍にある13号墳とは接しているものの重複はない。南側の周溝と17号墳の周溝の一部に重複があり、調査時点では14号墳が新しいことを確認しているが、本来は17号墳に付属する古墳で両者は近親関係にある可能性が考えられる。

現状でのプランはやや歪な円墳状を呈し、周溝を含めた直径は5.70m、墳丘部分は4.50mを測る。周溝の幅は0.5m～0.7m、深さは0.2m前後を測る。



第49図　14号墳実測図（1/80）

内部主体（図版26—(2)、第50図）

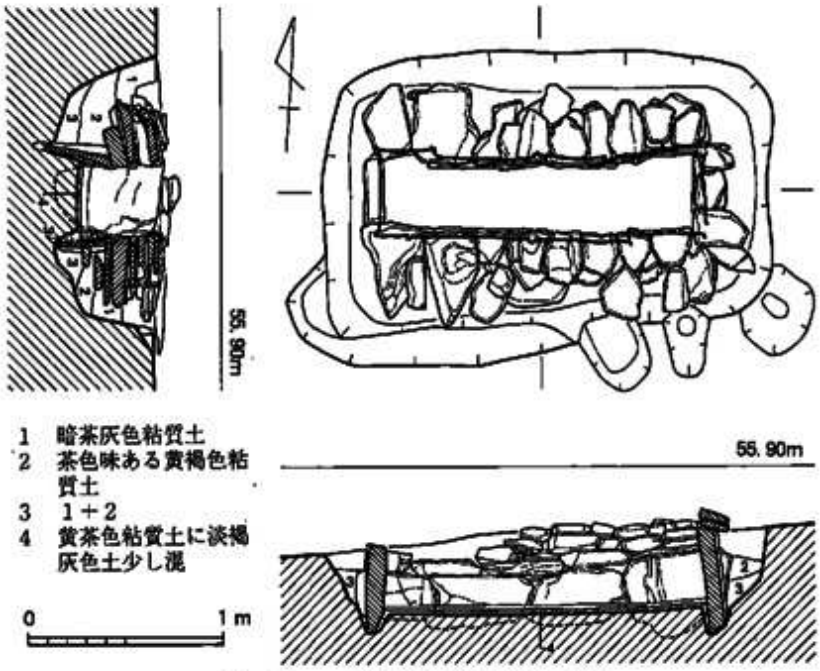
内部主体は石棺系竪穴式石室である。墓壙は隅丸長方形で、長軸が2.30m、短軸は1.50m、底面までの深さは0.45mを測る。石室は東小口板に緑泥片岩、西小口に結晶片岩の板石を立てて側壁の基底部はすべて緑泥片岩の板石を小口部を挟み込む形で構築している。

現存では基底部の上に三段乃至五段の花崗岩質と砂岩を小口積みし、東小口部の上にも積み上げ、遺存状況から天井石と側壁の一部が除去されていると考えられる。

側壁の板石の間には黄灰色と茶色の粘土で目張りをしている。

裏込めには茶灰色と黄茶褐色の粘質土を充填している。

床面は暗茶灰色粘質土を薄く貼り砂礫などは検出されていない。石室の内法は、長さが1.65m、幅は0.4m～0.43mで、東西の幅が同じで頭位が不明瞭であるが、東側小口部の板石が大きく頭を東に向けて埋葬していた可能性がある。石室の主軸方位はN86°Eを示し、ほぼ東西方向に築造している。



第50図　14号墳主体部実測図（1/40）

内部は盗掘されたためか副葬された刀子が覆土の下層から出土した他は主だった副葬遺物はない。

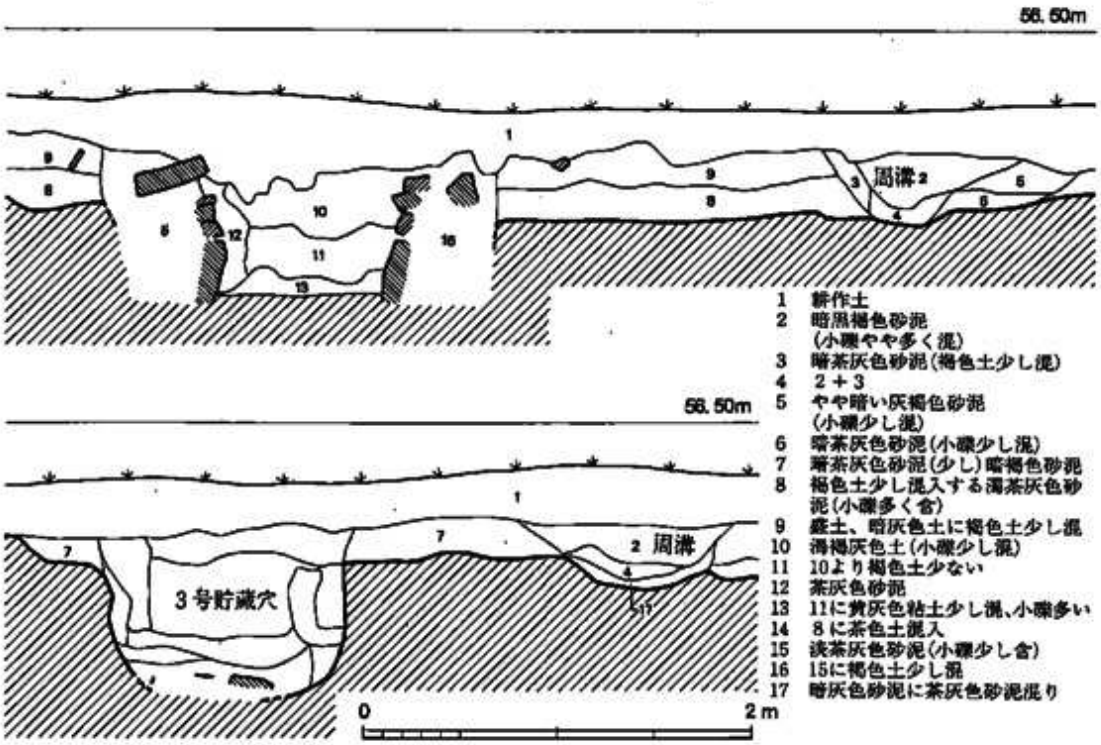
15号墳（第51図）

調査区の南西側で検出した古墳であるが、主体部は調査区内で全掘したものの周溝は調査区境の土層断面で確認した。

周囲の古墳との関係では、石室の構造から最も新しい形態であり、それに伴う古墳がはっきりしない。単独の古墳なのか、調査区外に近親関係にある古墳が築造されている可能性も推測される。

図示した土層断面図は、石室を中心に東西・南北断面で、古墳の形状は円墳と考えられる。古墳の規模は南北断面図で観る限り、石室中心部から周溝の外側までの半径で約4.0mを測ることから直径が8.0mほどと考えられ、6号墳に近い規模となる。

断面図では1層（耕作土）が厚く堆積し、東西土層で示した弥生時代中期初頭頃の3号貯蔵穴の掘り込み面と古墳周溝と石室掘方の掘り込みレベルが同一層であることから、旧地形が激しく削平を受けていることが理解できる。



第51図　15号墳墳丘土層断面実測図（1/40）

耕作土下から地山面までの間は濁茶灰色砂泥（小礫多く混入）と暗灰色土（褐色土若干混）の盛土下層部が残り、現状では９層から掘方及び周溝が切り込んでおり、周溝内には、黒褐色砂泥、暗灰色砂泥などが自然堆積の状態で確認される。

石室内は褐灰色土と灰色土に小砂礫の多い土が水平堆積し、故意に埋められた様相を示しており、恐らく盗掘時の痕跡であろう。

内部主体（図版27—(1)・(2)、第52図）

隅丸長方形の墓壙に突出部を有す所謂竪穴系横口式石室である。墓壙の長軸は2.80m、幅が2.10m、現状での床面までは0.7mを測り、横口部の長さは0.5m、幅が1.10mを測る。石室の裏込めには、暗茶灰色砂泥と小礫混じりの暗灰色砂泥を充填している。

石室は、整美な長方形の造りで、奥壁と北側壁の奥基底部の石材が緑泥片岩の他は花崗岩質が主で砂岩と結晶片岩も使って構築している。側壁の基底部の石材は角石を根石にし上に板石を小口積みしており、明らかに他の主体部より新しい形状をなす。側壁の石材間には黄灰色粘土で丁寧に目張りをしている。

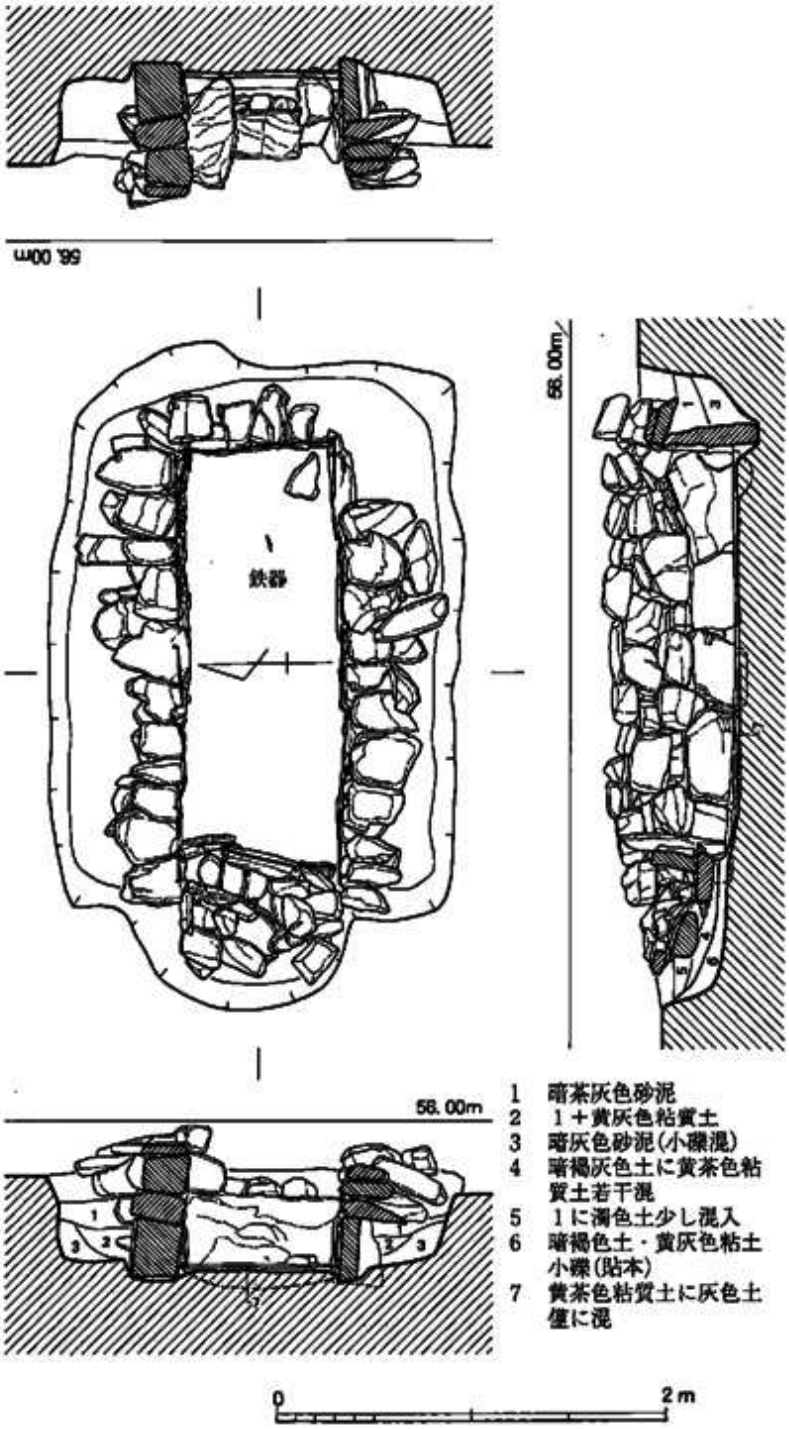
西側の閉塞石は結晶片岩の板石を三枚たて、その手前には石塊を不規則に積み上げる。閉塞

石が若干乱れていることから追葬が行われた可能性がある。

床面の状態は黄灰色粘土の混ざった暗褐色土と小礫で薄く貼り床し、横口部は石室床面から緩斜面をなし墓壙掘削時点では段差をなさないが、閉塞の時点で、最下層に石室床面と同じ土、その上層に黄茶色粘土混じりの暗褐灰色土を5.0cm程度積み上げその上に閉塞石を載せている。

石室の内法は、奥壁から閉塞石までの長さが2.10m、幅 が0.8mを測り、人骨が遺存していないが頭位は東側であろう。主軸方位はN90°Eを示し、主軸を東西に向けている。

出土遺物は、天井石や南奥の側壁が除去されており、盗掘の激しさを示していて刀子1本が出土したに過ぎない。



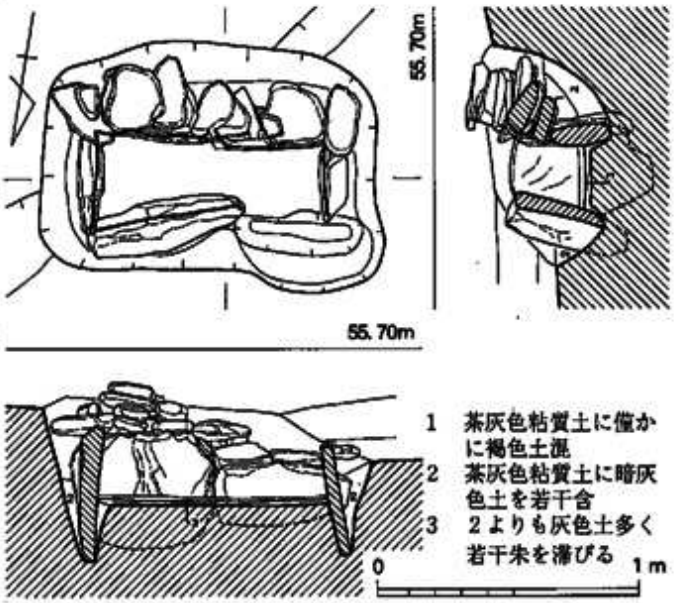
第52図　15号墳主体部実測図（1/40）

16号墳（図版28—(1)、第47図）

13号古墳の北側傍に築造された小形の円墳で、北側が一段削平され主体部は遺存しているものの周溝が削平され、東側の一部に周溝が残っている。

遺構の重複関係は、出土遺物の新しい4号竪穴住居跡より古いが13号古墳との関係がはっきりしなく、同時併存の可能性も考えられる。

古墳の規模は現存する周溝と石室の中心の計測から復原すると直径が5.00mほどになる。遺存する周溝の幅は0.4m～0.5m、深さは0.15mを測る。



第53図　16号墳主体部実測図（1/30）

内部主体（図版28—(2)、第53図）

小型の石棺系竪穴式石室で、天井石と両小口部、北側壁の小口積石及び北側壁の板石1枚が除去されている。

墓壙の形状は隅丸長方形で、墓壙内いっぱいに石室を築いている。墓壙の規模は、長さが1.28m、幅が0.87m、両小口の石材床面から0.2mと深く埋め込んでいる。裏込めには茶灰色粘質土を充填していた。

使用した石材は、基底部すべてが緑泥片岩で立石上の小口積みの石材が砂岩質である。床面には茶灰色粘質土を敷き詰め、内部に若干の朱が認められた。石室の内法は、長さが0.88m、幅は、西側が0.25m、東側は幅広で0.35mを測り、頭位は東側と推測される。石室の主軸方位はN81°Eを示す。

出土遺物は、盗掘されたためか皆無である。

17号墳（図版29—(1)、第54図）

Ⅱ区の西端で検出した周溝状遺構で、調査時点で溝2と呼称していたものである。前述したように、14号墳との重複があるが両者の切り合いは時期差ではなく、14号墳が17号墳に付属する近親者の関係にあると推測したのが妥当であろう。

古墳として捉えるならば、調査区内で最大級の規模を有す古墳であるが、残念ながら主体部

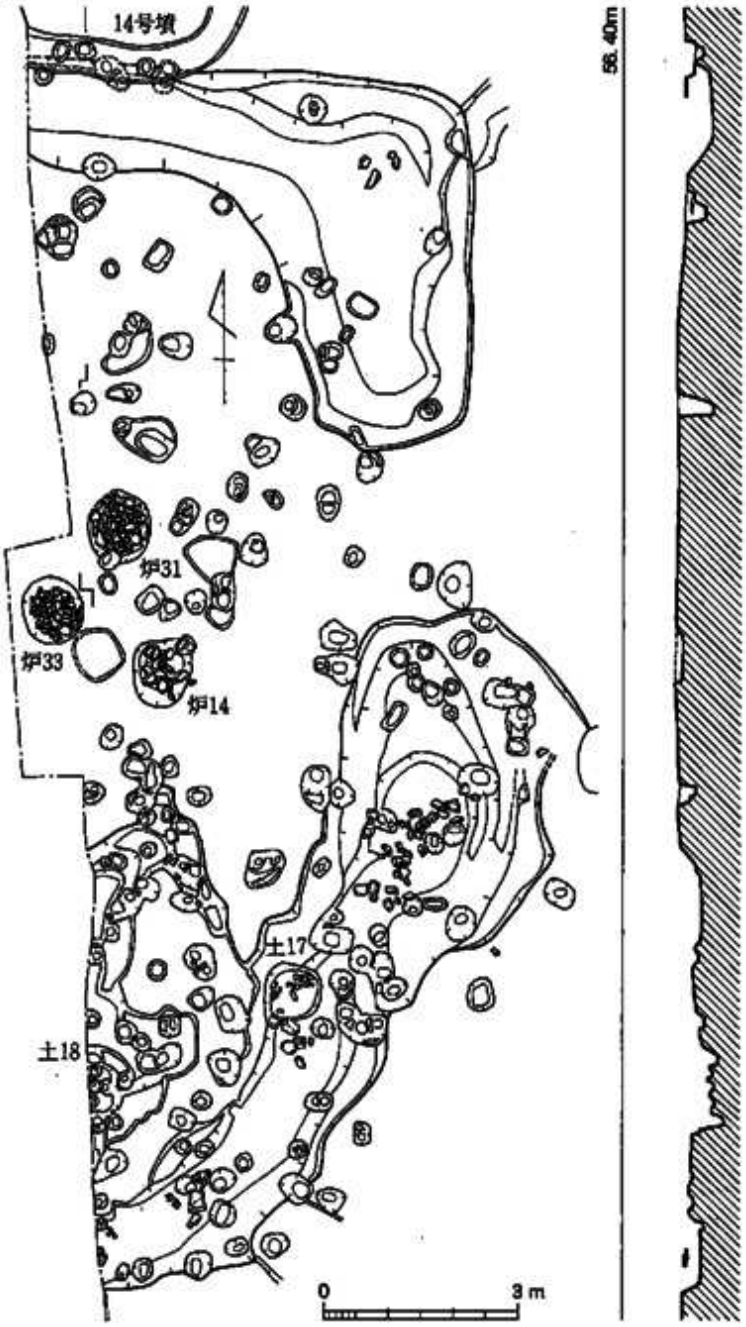
が構築されたと考えられる部分は農道下にあり調査不可能であった。

現状での墳丘の形態はやや歪な方墳と考えられるが、東側に幅2.50mの陸橋部を造り出していてこの状況からすると方形状に巡る一辺の中央部に設置している。

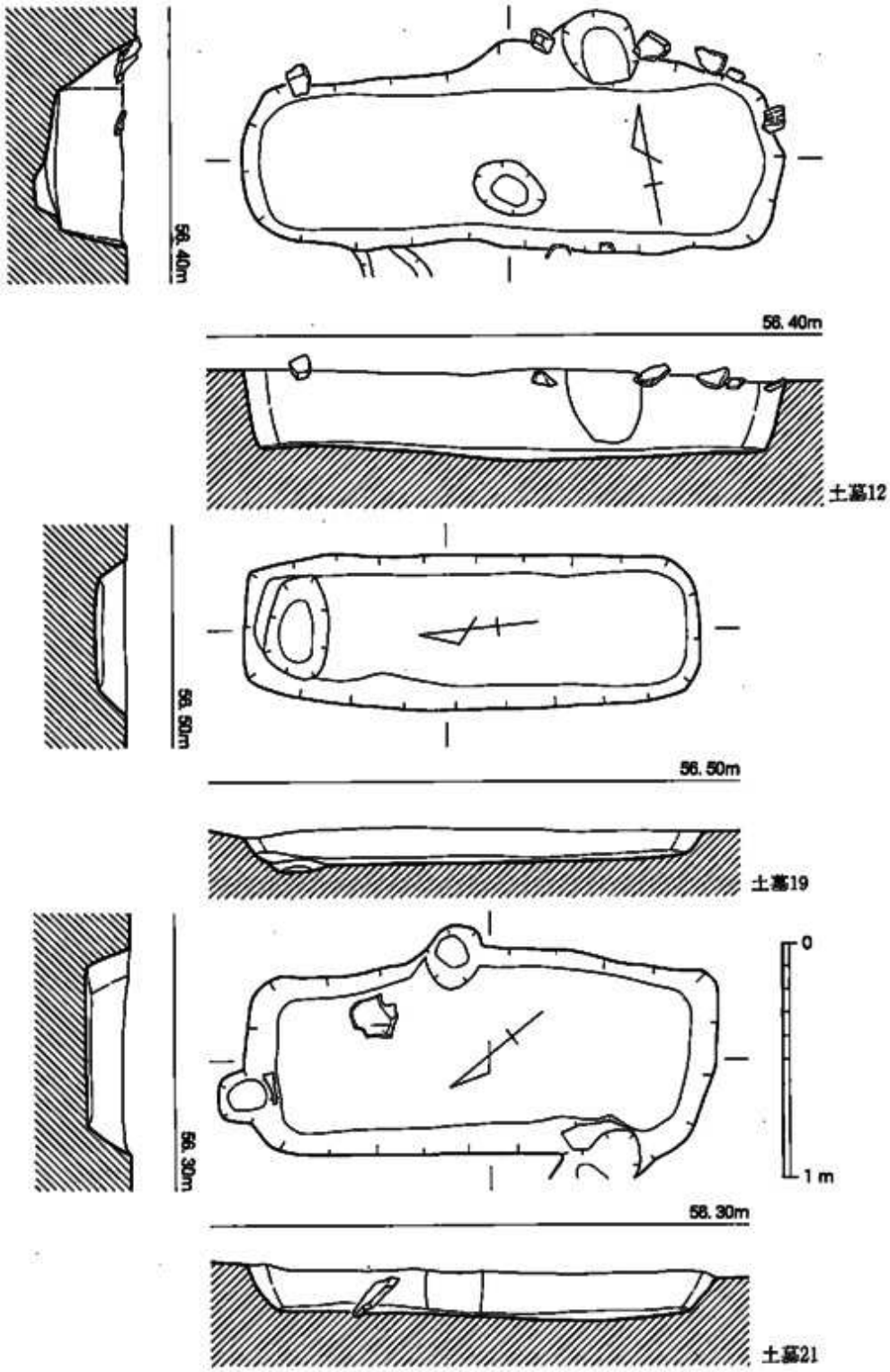
農道を挟んで北側の周溝の続きが調査Ⅰ区の東端の大溝の一角で検出されているようであるが、その続きは遺構が錯綜し不明瞭である。

古墳の規模は計測しづらいが、調査区の境部分での規模は約19.0m、周溝幅は、広い個所で3.50m、狭い個所で1.60m、深さは0.4m前後を測る。

周溝内からの出土遺物は、緑泥片岩、絹雲母片岩などの板石の大小片や河原石、弥生時代中期初頭から中期前葉頃の壺・甕・高坏などの破片が多数混入しており、片岩や河原石は石室に使った片割れと推測される。古墳に伴う遺物としては、土師器の甕と須恵器の高坏の破片があるが、土師器の甕は形状的にやや時期が下るかも知れない。



第54図　17号墳（旧溝２）実測図（1/120）



第55図　12号・19号・21号土壙墓実測図（1/30）

（2）土 壙 墓

土壙墓については墓と位置付ける根拠に乏しいが、単なる土坑にしては形状が整っており、調査した古墳に埋葬されない地位者の墓と捉えて土壙墓とした。以下個別について説明する。

12号土壙墓（図版29―(2)、第55図）

5号古墳の西傍で検出した土壙墓で、調査時点では12号土坑として捉えていた遺構である。ピットとの重複はあるものの主だった遺構との重なりはない。

墓壙の平面プランは楕円形状を呈し、長軸上面で2.33m、底面では2.15m、上面幅は北側が崩壊している部分があるが0.75m、底面幅は東側で0.64m、西側が0.55m、深さは0.4m弱を測り、東側が幅広で頭位と推測される。長さから成人を埋葬したのであろう。

北側壁の上面には、緑泥片岩の小振りの板石が数個並んだ状態で検出されたが、配石墓とするには根拠に乏しい。主軸方位はS80°Eを示す。

出土遺物はない。

19号土壙墓（第55図）

2号墳の南側2.0mに位置する土壙墓で重複する遺構はない。平面形状は隅丸長方形を呈し、土坑の規模は、上面の長さが1.95m、底面は1.85m、幅は南側で0.63mと0.50m、北側では0.55mと0.45m、深さは0.15mを測る。現状での深さからかなりの削平を受けていると考えられる。長さから判断すると成人を埋葬したのであろう。北側の底面には浅いピットが掘られており、土壙墓に伴う可能性がある。主軸方位はS5°Wを示す。

出土遺物はない。

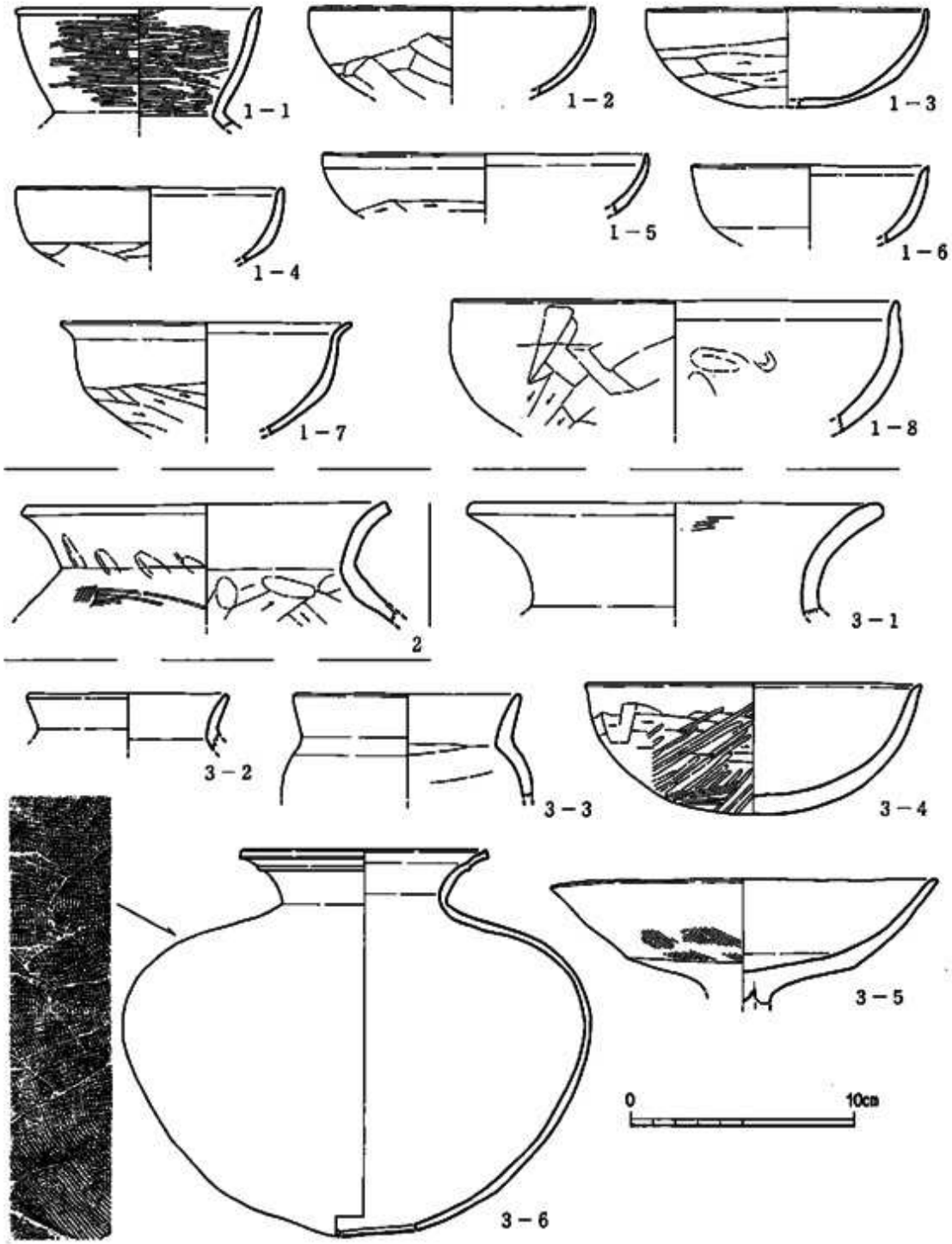
21号土壙墓（第55図）

19号土壙墓の南西側6.0mで検出した土壙墓で、平面形態が隅丸長方形を呈する。大きさは、上面長軸で2.0m、底面では1.77m、上面幅は0.9m、両小口の底面は南西側が幅広で、頭位を南西側に向けた成人を埋葬したのであろう。北東側の床面には落下した状態で緑泥片岩の破片が認められた。主軸方位はS39°Wを示す。

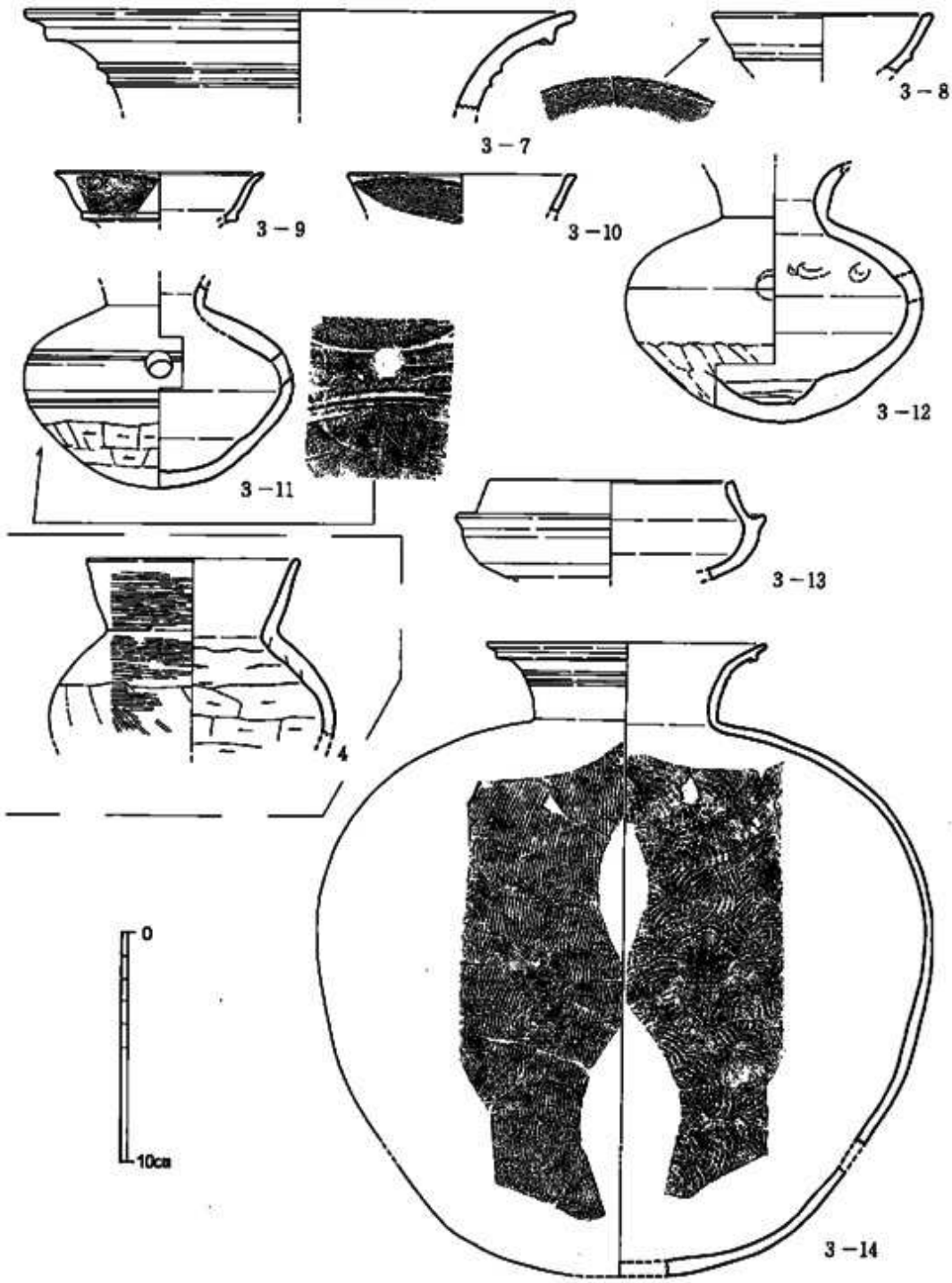
出土遺物はない。

（3）出土遺物

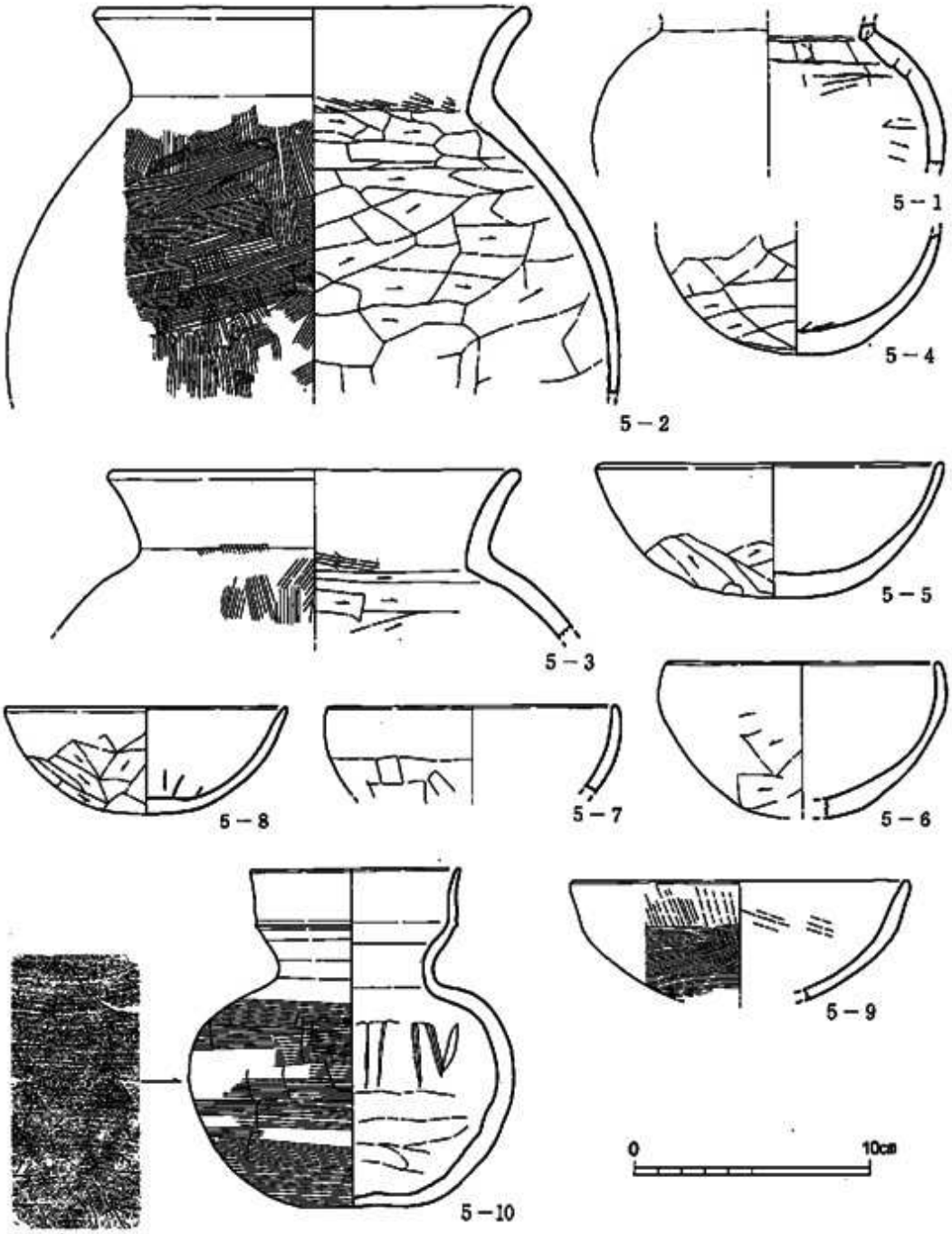
土 器（図版30・31、第56図～第60図）



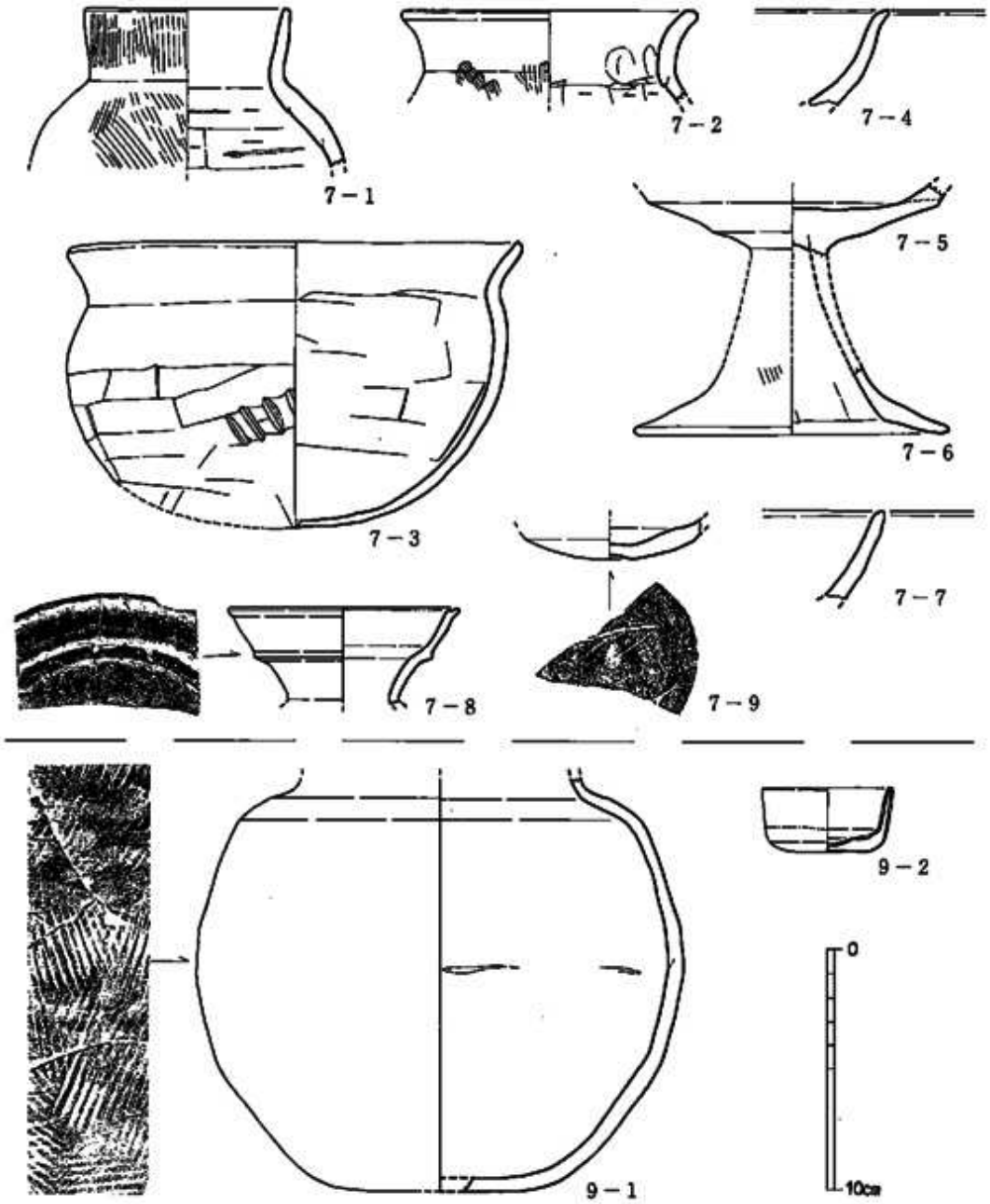
第56図　1号～3号墳出土土器実測図（1/3）



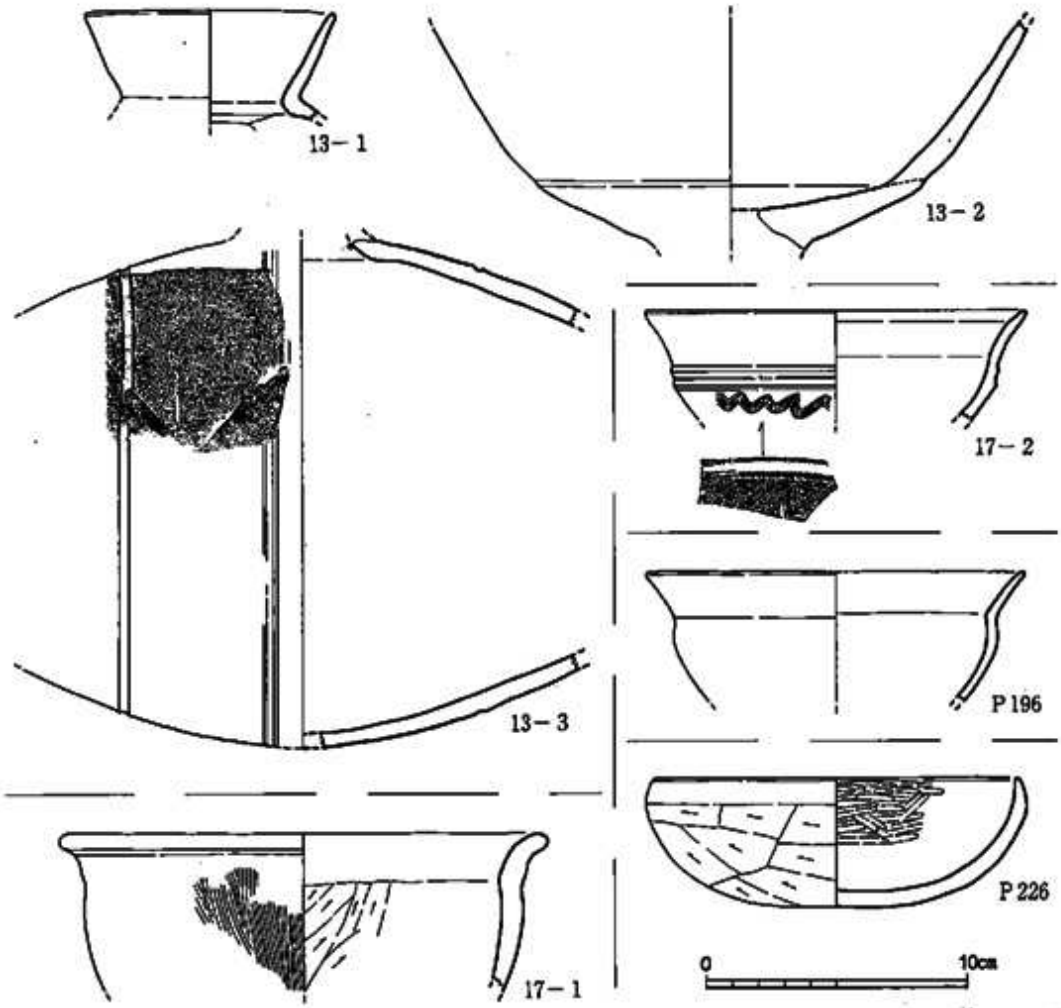
第57図　3号・4号墳出土土器実測図（1/3）



第58図　5号墳出土土器実測図（1/3）



第59図　7号・9号墳出土土器実測図（1/3）



第60図　13号・17号墳、ピット出土土器実測図（1/3）

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第56図1－1	1号墳周溝内	土師器 壺	①11.0 ② ③	精製壺の口縁部片で若干内湾する。肩部以下欠損。	外－横ヘラ磨き 内－横ヘラ磨き	取り上げNO1 色調－橙褐色
第56図1－2	1号墳周溝内	土師器 坏	①12.9 ② ③	器壁の薄い坏で口縁部が僅かに内湾する精製品で、底部欠損。	外－ナデとヘラ削り 内－丁寧なナデ	取り上げNO3 色調－黄茶褐色
第56図1－3	1号墳周溝内	土師器 坏	①12.6 ② ③ 4.4	口縁部を内湾させる坏の精製品。	外－ナデとヘラ削り 内－丁寧なナデ	取り上げNO1 色調－暗黄茶褐色
第56図1－4	1号墳周溝内	土師器 坏	①12.0 ② ③	口縁部が直立するタイプで、口唇部が尖る精製品。やや器壁が厚い。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	取り上げNO3 色調－淡黄褐色
第56図1－5	1号墳周溝内	土師器 坏	①14.6 ② ③	口縁部が尖り、上方に延びる口縁部タイプで、口径の大きな精製品。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	取り上げNO1 色調－暗黄茶褐色
第56図1－6	1号墳周溝内	土師器 坏	①10.6 ② ③	器壁が厚く口唇部が尖るタイプで底部欠損。精製粘土を使用。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	取り上げNO1 色調－淡黄褐色
第56図1－7	1号墳周溝内	土師器 鉢	①13.0 ② ③	口縁部が微かに外反し器高の高いタイプで底部を欠損。精製品。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	取り上げNO1 色調－黄茶褐色
第56図1－8	1号墳周溝内	土師器 鉢	①20.0 ② ③	口唇部をやや尖らせ体部に丸みのあるタイプで器壁が厚く精製粘土を使用。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	周溝内西南出土 色調－黄茶褐色
第56図2	2号墳周溝内	土師器 甕	①16.4 ② ③	浅い「く」字状に外反する口縁部で、肩部の張りは鈍い。	外－ナデとハケ指頭痕 内－ヘラ削り	取り上げNO231 色調－黄茶褐色
第56図3－1	3号墳周溝内	土師器 壺	①18.6 ② ③	長く反り気味に外反する口縁部。肩部以下欠損。	外－ナデ 内－ナデ一部ハケ残る	取り上げNOB 色調－黄茶褐色
第56図3－2	3号墳西側	土師器 小型甕	① 9.0 ② ③	上方に緩く開く口縁部で肩部以下欠損。	外－ナデ 内－ヨコナデとヘラ削り	西側遺構検出時 色調－茶褐色
第56図3－3	3号墳周溝内	土師器 小型甕	①10.2 ② ③	上方に緩く開く器壁の厚い口縁部で肩部が張る。	外－磨耗 内－ヨコナデとヘラ削り	色調－淡茶褐色
第56図3－4	3号墳石室内	土師器 坏	①15.0 ② ③ 5.8	口唇部を若干外反し、全体が半球形で器壁が厚い。精製粘土を使用。	外－ナデと削り後ヘラ磨き 内－ナデ	床面出土NO1 色調－橙褐色
第56図3－5	3号墳周溝内	土師器 高坏	①17.3 ② ③	底部から体部の屈折は鈍く体部から口縁部は張らない。脚との接合部はでべそ。	外－ハケ後ナデ 内－ヨコナデ	色調－橙褐色
第56図3－6	3号墳周溝内	須恵器 甕	①22.4 ② ③34.5	口縁部を摘み上げ肥厚。口縁下に1条の凸帯。最大径は胴部上半で玉葱形。	外上半－擬格子 外底部－平行叩 内－ナデ消し	底部焼成後の穿孔 色調－灰色

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第57図3－7	3号墳周溝内	須恵器 甕	①23.8 ② ③	口縁下に1条、頸部に2条の三角凸帯を巡らす口縁部片。	外－回転ナデ 内－回転ナデ	外口縁部と内面自然釉 色調－黒色
第57図3－8	3号墳周溝内	須恵器 甕	① 9.5 ② ③	口縁部は僅かに内湾し、口唇部が肥厚。口縁下に1条の三角凸帯。	外－波状文と横ナデ 内－ヨコナデ	内面灰かぶり 色調－暗灰色
第57図3－9	3号墳周溝内	須恵器 甕	① 9.0 ② ③	緩く外反する口縁部に口唇部が段をなす。頸部との屈折部には1条の三角凸帯を付す。	外－鋭い波状文 内－ヨコナデ	内外面自然釉 色調－灰色
第57図3－10	3号墳墳丘下	須恵器 甕	① 9.8 ② ③	8と同タイプの甕で口唇部が肥厚。	外－波状文 内－回転ナデ	内面自然釉 色調－灰色
第57図3－11	3号墳周溝内	須恵器 甕	最大径 11.6	頸部上半を欠損。頸部は細く波状文が巡る。最大径の間中央に波状文の両側に凹線。	外－回転ナデと波状文、ヘラ削り	径1.1cmの整美な孔。胴下半にヘラ記号。色調－灰色
第57図3－12	3号墳周溝内	須恵器 甕	最大径 12.7	細い頸部で上半を欠損。体部が張り玉葱形で底部は尖りみで孔部分は遺存していない。	外－回転ナデとヘラ削り 内－ナデ	底部内面には当具痕。 色調－灰色
第57図3－13	3号墳周溝内	須恵器 高坏	①10.5 ② ③	口縁部は長く、肥厚し、内傾する。体部は張りがある。底部と脚部は欠損。器壁は厚い。	外－回転ナデとヘラ削り 内－回転ナデ	色調－暗灰色
第57図3－14	3号墳周溝内	須恵器 大甕	①24.0 ② ③54.5	7と同タイプか同一個体。胴部は大きく張り球形。	外－平行叩き 内－青海波を一部ナデ消す	色調－灰味黄色
第57図4	4号墳周溝内	土師器 小型壺	① 9.2 ② ③	頸部から口縁部は僅かに内湾し体部は玉葱状か。下半は欠損。精製土器。	外－ヨコナデと削り後磨き 内－ナデと削り	色調－黄茶褐色
第58図5－1	5号墳周溝内	土師器 小型壺	胴最大径 15.0	頸部上半と胴下半欠損。胴部は球形。精製土器。	外－ナデ 内－ナデと削り	取り上げNOC 色調－茶褐色
第58図5－2	5号墳周溝内	土師器 甕	①18.6 ② ③	「く」字状に外反の口縁部で肩部が張る。胴下半は欠損。器壁が厚い。	外－ナデとハケ 内－ナデとヘラ削り	取り上げNOA 色調－茶褐色
第58図5－3	5号墳周溝内	土師器 甕	①17.6 ② ③	2と同タイプの甕で肩部が張り以下欠損。器壁は厚い。	外－ナデとハケ 内－ナデとヘラ削り	色調－茶褐色
第58図5－4	5号墳周溝内	土師器 壺か鉢	① ② ③	壺の底部か。器壁が厚い。胴部上半欠損。	外－ヘラ削り 内－ナデ	取り上げNOB 色調－茶褐色
第58図5－5	5号墳周溝内	土師器 鉢	①14.8 ② ③ 5.7	体部から口縁部にかけて若干丸みがあり、底部器壁が厚く椀に分類できるかも。	外－ナデと削り 内－ナデ	取り上げNOB 色調－茶褐色
第58図5－6	5号墳周溝内	土師器 鉢	①11.5 ② ③ 6.6	口縁部が内湾し、器高が高く最大径が口縁下にある。	外－ナデと削り 内－ナデ	取り上げNOB 色調－淡い茶色

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第58図5－7	5号墳周溝内	土師器 鉢	①12.4 ② ③	体部上半のみ遺存し6と同タイプ。	外－ナデと削り 内－ナデ	色調－灰味茶褐色
第58図5－8	5号墳周溝内	土師器 坏	①12.0 ② ③ 4.5	上方に直に開く口縁部で体部の張りは少ない。	外－ナデと削り 内－ナデ、工具痕あり	取り上げNOB 色調－白黄褐色
第58図5－9	5号墳周溝内	土師器 坏	①13.4 ② ③	口縁部は直に開き、体部は削りで僅かに屈折し削り痕をハケで消す。	外－ハケを一部ナデ消す 内－ナデ	色調－橙褐色
第58図5－10	5号墳周溝内	須恵器 二重口縁壺	① 9.0 ② 4.8 ③14.4	口縁が若干外反。口縁下は1条の三角凸帯を付し二重口縁状。器壁が厚く平底状。	外－回転ナデとカキ目風ナデ 内－ヨコナデ	取り上げNODと周溝西出土が接合 色調－灰色
第59図7－1	7号墳周溝内	土師器 壺	① 8.6 ② ③	口縁が若干内湾するが直口壺に近く体部が球形か。器壁が厚い。	外－粗いハケ 内－ナデと削り	取り上げNO1 色調－黄茶褐色
第59図7－2	7号墳周溝内	土師器 壺	①12.3 ② ③	器壁の厚い反り気味に外反する口縁部。肩部以下欠損。	外－粗いハケ 内－ナデと削り	口縁外面に煤付着 色調－暗黄茶褐色
第59図7－3	7号墳周溝内	土師器 鉢	①18.2 ② ③11.8	口縁部が緩く外反し口唇部が僅かに内湾。体部は偏平で底部は削りで器壁が厚い。	外－ナデと削り 内－ナデと削り	取り上げNO3 色調－黄茶褐色
第59図7－4	7号墳周溝内	土師器 高坏	① ② ③	体部に丸みがあり僅かに外反する口縁部片。5・6と同一個体。	外－ナデ 内－ナデ	取り上げNO2 色調－茶褐色
第59図7－5	7号墳周溝内	土師器 高坏	① ②12.0 ③	坏部の底部片で器壁が厚い。体部と底部の屈折は鋭い。坏部は4が接合。	外－ナデ 内－ナデ	取り上げNO2 色調－茶褐色
第59図7－6	7号墳周溝内	土師器 高坏	① ②13.0 ③	脚柱状部はないがスカート状に開き裾部で大きく開脚し内面は屈折する。	外－ハケ後ナデ 内－ナデとヘラ削り	取り上げNO2 色調－茶褐色
第59図7－7	7号墳周溝内	土師器 高坏	① ② ③	4とはタイプの異なる坏部片で口縁が外反せず坏部が浅いタイプ。	外－ナデ 内－ナデ	取り上げNO2 色調－茶褐色
第59図7－8	7号墳周溝内	須恵器 甕	① 9.6 ② ③	口唇部が有段をなし屈折部に1条の三角凸帯。頸部が短く9が底部か。	外－回転ナデと鋭い波状文 内－ナデ	色調－灰色
第59図7－9	7号墳周溝内	須恵器 甕？	① ② ③	やや器壁の厚い底部片で中央が凹面をなす。精製粘土を使用。	外－ナデ 内－ナデ	外面にヘラ記号を刻む 色調－灰茶褐色
第59図9－1	9号墳周溝内	須恵器 甕	頸部最大径 20.2	頸部から口縁部を欠く。肩部が張り、底部は平底気味。精製粘土を使用。	外－平行叩キ 内－ナデ	色調－灰黄褐色
第59図9－2	9号墳主体部	近世陶磁 杯	① 5.4 ② 3.3 ③ 2.6	体部から口縁は直に延び、底部は糸切り。釉は内面と体部下半までで底部付近は露胎。	外－回転ナデ 内－回転ナデ	盛土時の所産か。 胎土－橙褐色 釉調－黄土色

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第60図13－1	13号墳周溝内	土師器 小型壺	① 9.6 ② ③	長い口縁部で若干内湾気味のタイプ。肩部以下欠損。精製土器。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデと削り	色調－明橙褐色
第60図13－2	13号墳周溝内	土師器 高坏	① ②15.0 ③	大型の高坏の坏部片で、坏部が深い。体部と底部の屈折が弱く僅かに段をなす。	外－磨耗 内－磨耗	色調－淡橙褐色
第60図13－3	13号墳周溝内	須恵器 樽形壺	胴部径 19.3 に復原	胴部の小破片で全容が不明。回線間に鋭い櫛歯波状文が密に巡る。	外－波状文と回転ナデ 内－回転ナデ	取り上げNO 1 色調－黄味灰色
第60図17－1	17号墳周溝内	土師器 甕	①18.9 ② ③	緩く外反する口縁部で器壁の厚い浅めの甕で体部以下を欠損。残存1/6の小片。	外－ハケ 内－ヘラ削り	外面煤付着 色調－暗灰色
第60図17－2	17号墳周溝内	須恵器 高坏	①14.7 ② ③	反り気味の口縁に先端が若干外反。口縁下は2条の三角凸帯。体部には6条の櫛歯文。	外－ヨコナデと波状文 内－ヨコナデ	胎土－精製粘土 色調－灰色
第60図P－196	ピット内	土師器 浅鉢	①14.6 ② ③	口縁部が上方に開き肩部がやや張る。底部は欠損し器壁が薄い。精製品で残存1/8。	外－磨耗 内－磨耗	色調－淡橙色
第60図P－226	ピット内	土師器 坏	①14.1 ② ③ 4.9	口縁部が内湾し体部に丸みあり。1/4残存。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－磨きとナデ	色調－橙褐色

鉄　器

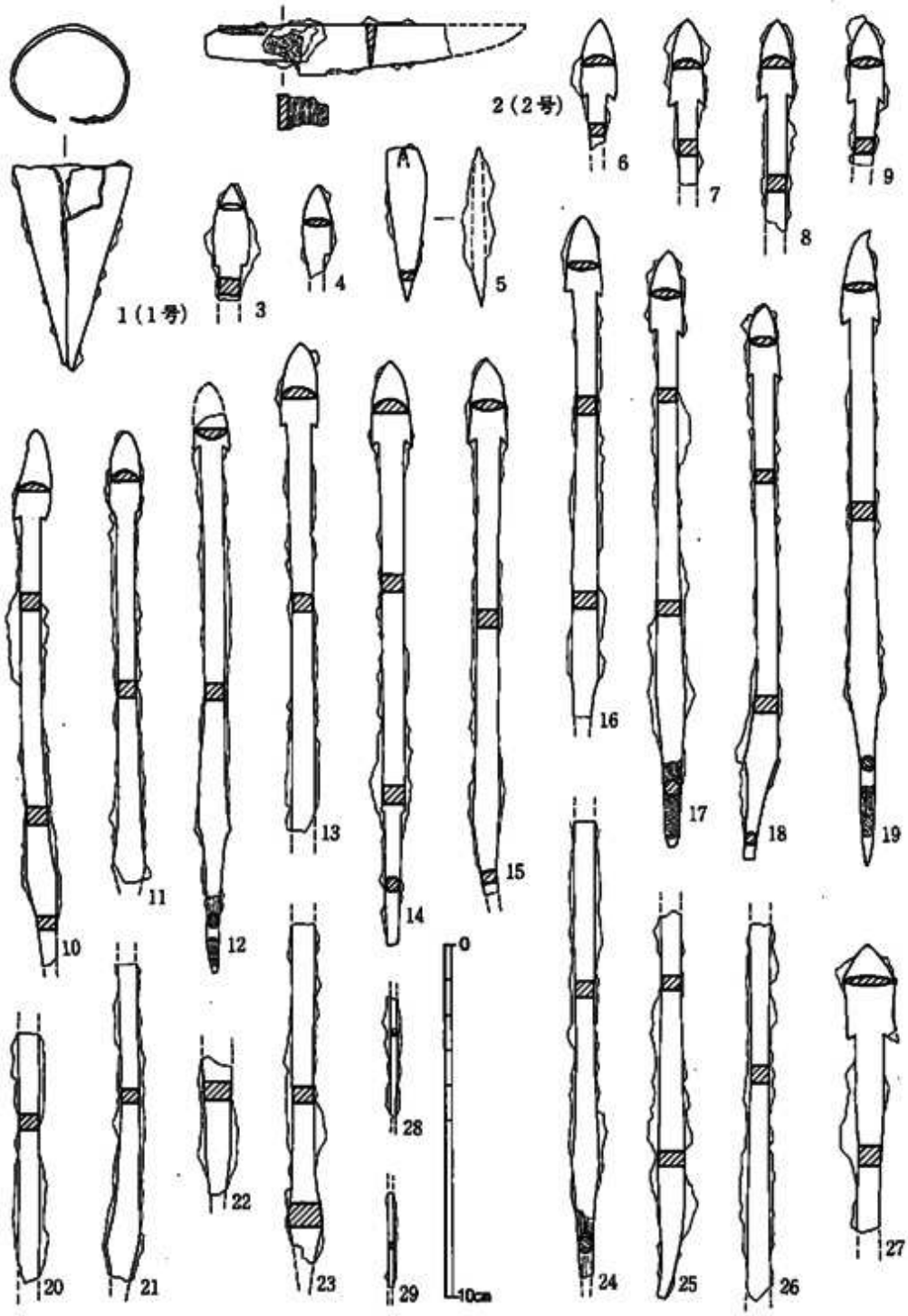
1号墳出土鉄器（図版32、第61図）

不明鉄器（1）　1号墳の南西側周溝のNO1とNO3の供献土器群内に混ざって出土し、NO2として取り上げた遺物で、遺構の項でも説明したように、数年前に測量時に使用していたポールの先端金具に酷似した鉄器で肩形の薄い鉄板を円錐形に折り曲げたものである。

鉄器は形状から石突か鉄鐸の可能性があるものの、石突にしては厚さが2.0mmと薄く、目釘穴がない。重量も軽く石突とするには躊躇される。また、鉄鐸にしては頂部の孔が2.0mmと小さく疑問が残る。長さは5.7cm、径が3.8cm、重さは15.3gで、ここでは石突あるいは鉄鐸としておく。

2号墳出土鉄器（図版32、第61図）

刀　子（2）　石室の床面から出土した刀子で鋒部を欠損している。恐らく盗掘時に欠損したのであろう。柄の部分には僅かに鹿角が残っており、刃部は全体に研ぎ減りしている。刃基部幅1.4cm、背厚が0.3cm、柄の長さ2.7cm、幅は1.0cm、厚さは0.35cmを測る。



第61図　1号～3号墳出土鉄器実測図 (1/2)

3号墳出土鉄器（図版32～34、第61・62・63図）

古墳群の中で3号墳が最も多くの鉄器が副葬されていた。遺構の説明で前述したように、石室内は盗掘が激しく、原位置を保った鉄器は床面南東隅の一群で、2本の大刀は石室の壁に立て掛けた形で出土するなどかなり乱れて出土した。種類は鉄剣2、大刀2、短刀2、鉄鏃28以内などの武器類、刀子1、鉋1、鑿1、鉄斧2などの工具類の他、針などがある。

鉄　剣（1・38）　2振の鉄剣は南側壁の倒れた根石の下と元位置を保った可能性のある鉄器の一群内で出土したもので、1は根石下の床面から出土した完形の鉄剣である。剣身には錆がなく一部に鞘の木質が残っている。鞘口は鹿角で装飾し大半が破損していたが表面の一部に直弧文の装飾が認められる。その表面には朱が付着していた。

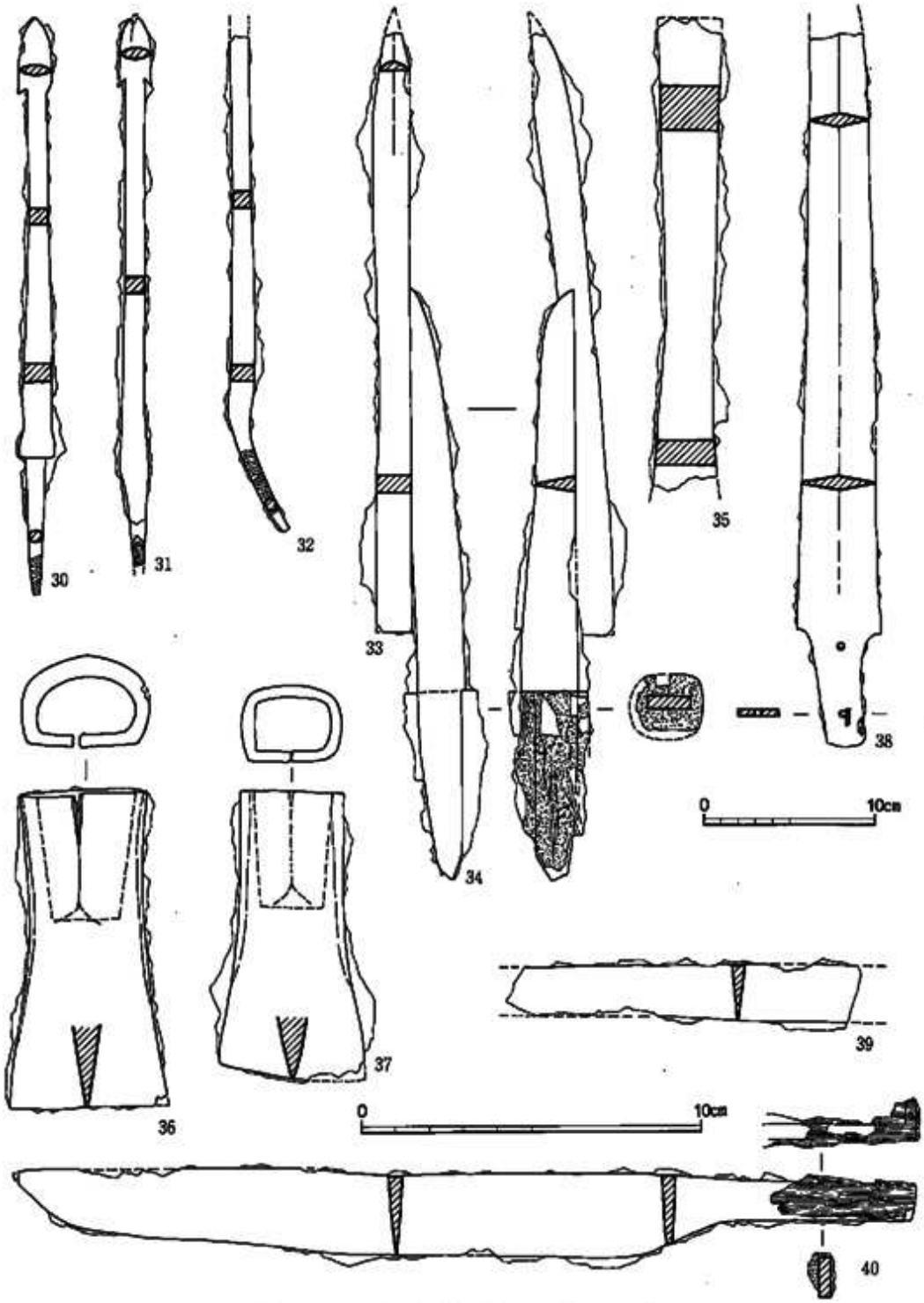
茎は木質が覆い二か所に目釘穴が穿たれ、一方には釘が残っている。全長は69.5cm、刃部長が56.1cm、茎長13.4cm、刃部幅は4.0cm、厚さ0.8cm、茎幅は基部で2.3cm、先端が1.8cm、厚さ0.4cmを測る。38は床面の南東隅からの床面から出土した鉄剣で1の鉄剣よりは小振りである。前者が装飾された儀式用の剣とすれば、この剣は実用品とも考えられる。鋒部が欠損し、刃部には不明瞭な鎬が造られ、鞘の木質は残らない。関部は緩やかな弧を描き、柄は幅広で短く造り二か所に目釘穴を穿ち一部に木質が残る。現長は41.3cm、刃部幅は先端部で3.2cm、関付近で5.0cm、厚さは0.8cm、柄は長さが6.8cm、幅は2.3cm、厚さが0.4cmを測る。

大　刀（2・3）　2は石室の北西木口石に鋒部を下にして立て掛けた状態で出土したやや小振りの大刀である。鋒部は盗掘時に欠損したらしく断面が新しい。全体が若干内反りで、復原すると65.0cm前後の長さになる。背部の中央付近に鞘の木質が残る他は、鞘や柄は残っていない。現存での刃部の長さは47.7cm、刃部幅は基部で3.1cm、先端で2.0cm、背厚は0.6cm、茎長は14.4cm、幅は2.0cm～5.0cm、厚さは0.2cm～0.5cmを測る。茎部の目釘穴は現状では不明瞭である。

3は2と対峙する南東側の小口石に鋒を下にして立て掛けられて検出されたやや大振りの大刀で、盗掘時に立て掛けたのであろう。若干内反りの刃部をなし、中央部の刃が凹面をなし刃が潰れ背部も薄くなる。何かを叩いたものと推測される。刃部には鞘の一部が残っているが、茎部には木質は遺存しておらず先端部が欠損している。刃部の長さは86.7cm、茎部は4.8cm、刃部幅は先端部が2.9cm、中央付近で3.4cm、基部で3.7cm、背厚0.8cmを測る。

短　刀（39・40）39は石室内の攪乱された覆土下層から出土し、40は鉄器が集中して検出された中にあった。39は盗掘時に破損した刃部片で、幅が1.7cm、背厚が0.4cmである。40は完形品で、関部は緩い傾斜をなし、茎には木質が残るが目釘穴がなく端部を「L」字状に折り曲げて固定している。全長は26.4cm、刃部幅は2.3cm、背厚は0.4cmを測る。

鉄　鏃（3～32）個体数としては28本を数えるが、この内、完形か完形に近い鏃は11本で、



第62図　3号墳出土鉄器実測図（1/2・1/4）

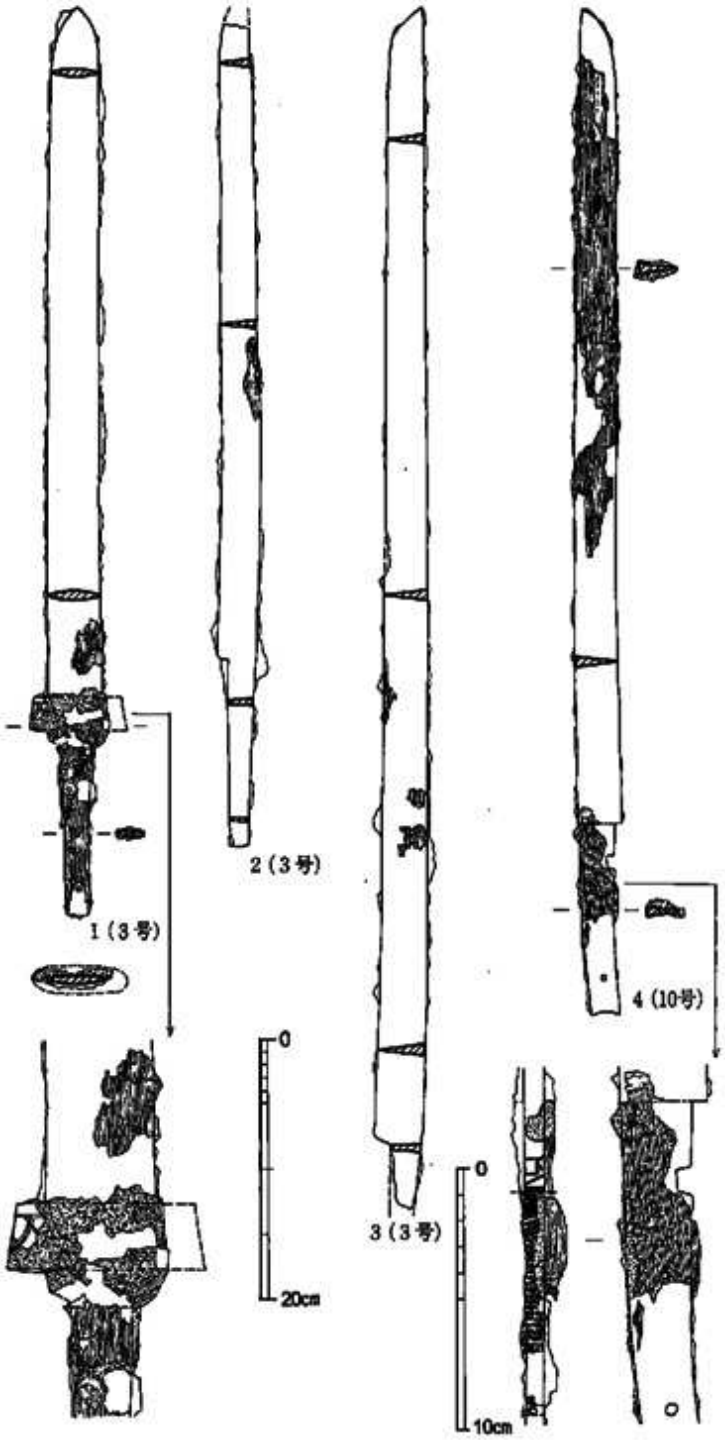
個別を説明しないが、刃部の造りは片丸造り８本、両丸造りが11本で大半が腸抉三角形式、若干鑿箭式と鑿頭式及び広根平造腸抉式があり、その他は刃部が遺存せず不明である。

箆被は明瞭でなく「く」字状に屈折するタイプの鏃や明瞭な両関をなすものがあり、茎基部が尖るタイプとそうでないものとがある。

また、基部には矢柄の竹の痕跡を残すものと巻き糸の痕跡が認められるもの、樹皮が見られるものなどがある。

法量は、刃部長が2.0cm～2.7cm、幅は三角形式が0.9cm～1.1cm、広鋒平造式が1.4cm、鑿頭式が1.0cmを測り、完形品鏃の全長は三角形式が15.6cm～18.0cmと幅があり、鑿頭式は4.4cmを測る。

刀　子（34）　南側壁の倒壊した基底部石材のしたから出土したもので鉈と鉄斧とが錆着した状態で検出した。完形品の刀子で、刃部中央部が研



第63図　3号・10号墳出土鉄器実測図（1/3・1/6）

ぎ減りしている。柄には鹿角を装着し、断面が隅丸方形に加工されている。全長が17.0cm、刃部が11.6cm、背厚0.4cm、茎部は5.4cmを測る。これも元位置を保っていると考えられる。

鉋（33）　鋒が僅かに欠損した鉋で、復原長は18.1cm、刃部幅は1.0cm、茎幅1.0cm、厚さは0.5cmである。

鑿（35）　副葬鉄器が集中した個所で出土した鉄鑿で刃部を完全に失い頭部も欠けている。柄部は断面方形で幅が1.8cm、厚さは1.3cmを測る。柄下半で最も細くなり、撥形に開くと思われる。欠損先端部は幅が1.9cm、厚さは0.7cmである。

鉄　斧（36・37）　両者とも南側壁傍に副葬された造りの整美な鍛造鉄斧で刃部が撥状に広がる。36の袋部は断面蒲鉾状で、合わせ目側を平らに造り袋部内には木質がない。全長が9.3cm、袋部幅は3.7cm、厚さは2.6cm、袋部深さは3.7cm、刃部幅は4.6cmを測る。

37は36より若干小形の袋状鉄斧で、袋の合わせ目が殆ど判別できないくらいに造りが良好である。袋部の断面は隅丸方形を呈し、内面の角は一方が丸くもう一方は角ばる。刃部は鋭利に研がれ、片方が研ぎ減りする。全長が8.3cm、袋部幅は3.0cm、厚さは2.2cm、深さは3.3cm、刃部幅は4.2cmを測り、袋内には木質はない。

針（28・29）　28は鉄器が集中して出土した個所から出土し、29は石室内の撹乱土からの出土である。両者とも破片で前者の長さが3.4cm、径が0.15cm、後者の長さは2.7cm、径は同じである。

5号墳出土鉄器（図版34、第64図）

刀　子（41）　石室の床面から出土したもので盗掘のため破損し鋒部のみ遺存している。刃部幅が1.3cm、背厚が0.4cmを測る。

6号墳出土鉄器（図版32、第64図）

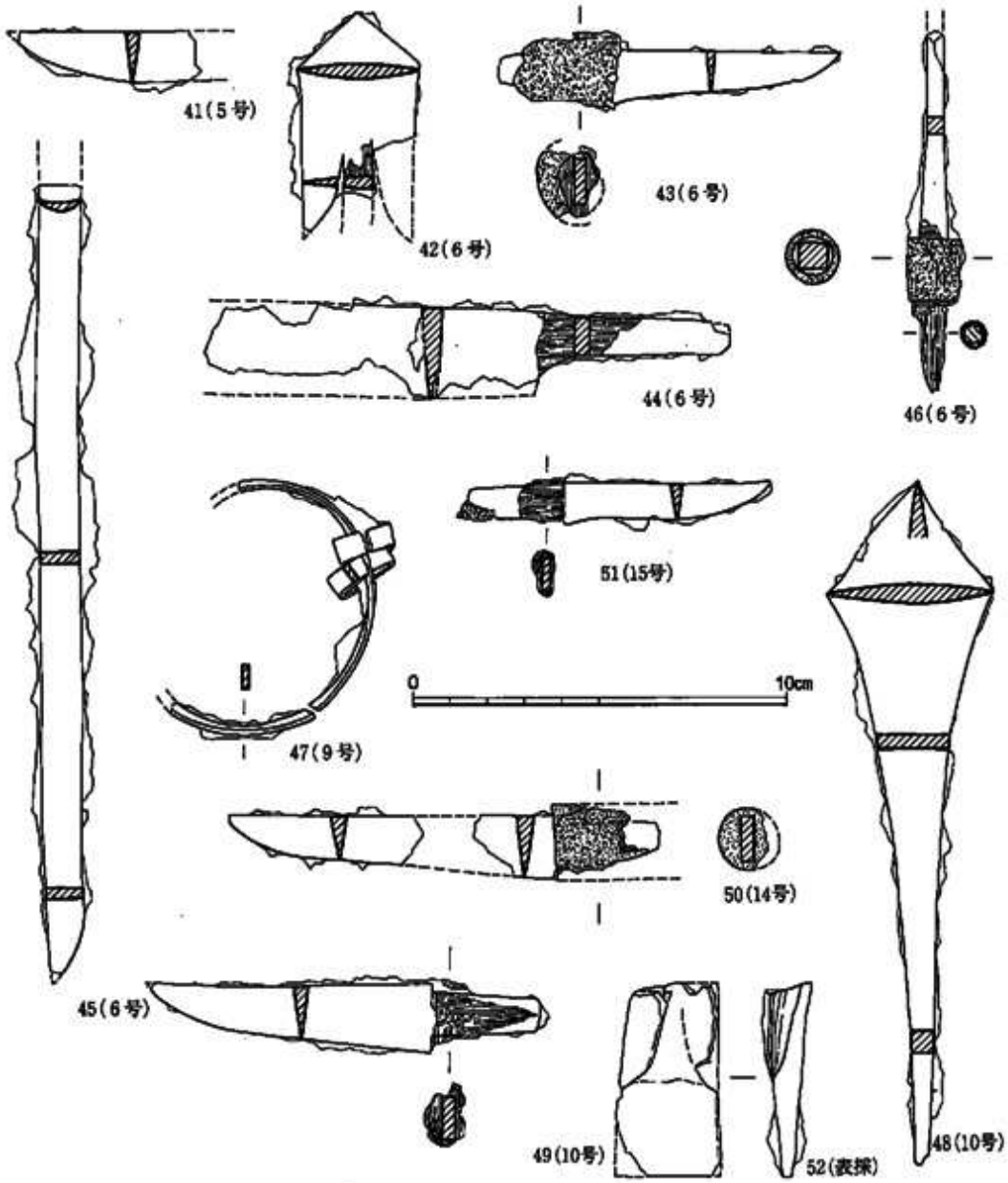
鉄　鏃（42）　盗掘で撹乱され元位置を保っていないと思われるが、西側床面のやや上層から出土した。整美な五角形両翼有茎鏃で右側の翼と茎の一部を欠いている。茎には矢柄の痕跡が若干残る。翼までの長は6.0cm、最大幅3.3cm、厚さは0.4cm、茎幅は0.8cm、厚さが0.4cmを測る。

刀　子（43）　西側小口石の傍で床面から若干上層で出土した完形品の刀子である。刃部は使用頻度が激しく研ぎ減りしている。茎には木質の柄を差し込みその上から鹿角を装着しておることから、関部ははっきりしない。全長が9.2cm、刃部長は6.1cm、背幅0.2cm、茎幅は1.3cm、厚さは0.4cmを測る。

短　刀（44）　南側壁傍の床面から15cmほど上層で出土した。刃部の破損が激しく、鋒は遺存していない。関部は緩い曲線を描き、茎には若干の木質が残る。刃部幅は2.4cm、背厚は0.6

cm、茎長は5.0cm、幅が1.0cm、厚さは0.4cmを測る。

鉈（45）　床面から浮いた状態で出土した鉈であるが、鋒部を欠損している。刃部は蒲鉾状で鎬は見られない。茎の先端が尖るが研ぎ出していない。現存長は21.1cm、刃部幅は1.1cm、厚さは0.3cm、茎幅が1.0cm、厚さが0.4cmを測る。



第64図　5号・6号・9号～11号・14号・15号墳と表採鉄器実測図（1/2）

錐（46）　石室の東側床面から出土した鉄器で、先端部が遺存せず器種がはっきりしない。茎部は0.5cmの方形で徐々に太くなり柄との境には樹皮を巻いた後、鹿角を筒状に加工し差し込んでいる。鹿角装の径は1.4cm、長さは1.7cmを測り、柄には木質が残っている。

9号墳出土鉄器（図版32、第64図）

鉄　鋲（47）　石棺の北側壁傍の床面から出土した2個の遊環付の鉄製鋲である。元位置を保っているとすれば被葬者の右手に装着していたと推測される。鋲は約2/3ほど遺存しており、復原すると径が6.5cm前後で、鋲幅は0.6cm～0.7cm、厚さは0.2cm、遊環は直径が1.6cm前後、幅が0.6cm、厚さは0.2cmを測る。遊環を有す鋲の出土例は甘木市の古寺墳墓群の16号墓があるが、この鋲は銅製である。

10号墳出土鉄器（図版34、第63・64図）

大　刀（4）　石室の北側壁の根石下から鋒を西に向けて出土した大刀の完形品で、出土状態から元位置を保っているか否かは分からない。傍からは並んだ状態で鉄鏃が出土している。

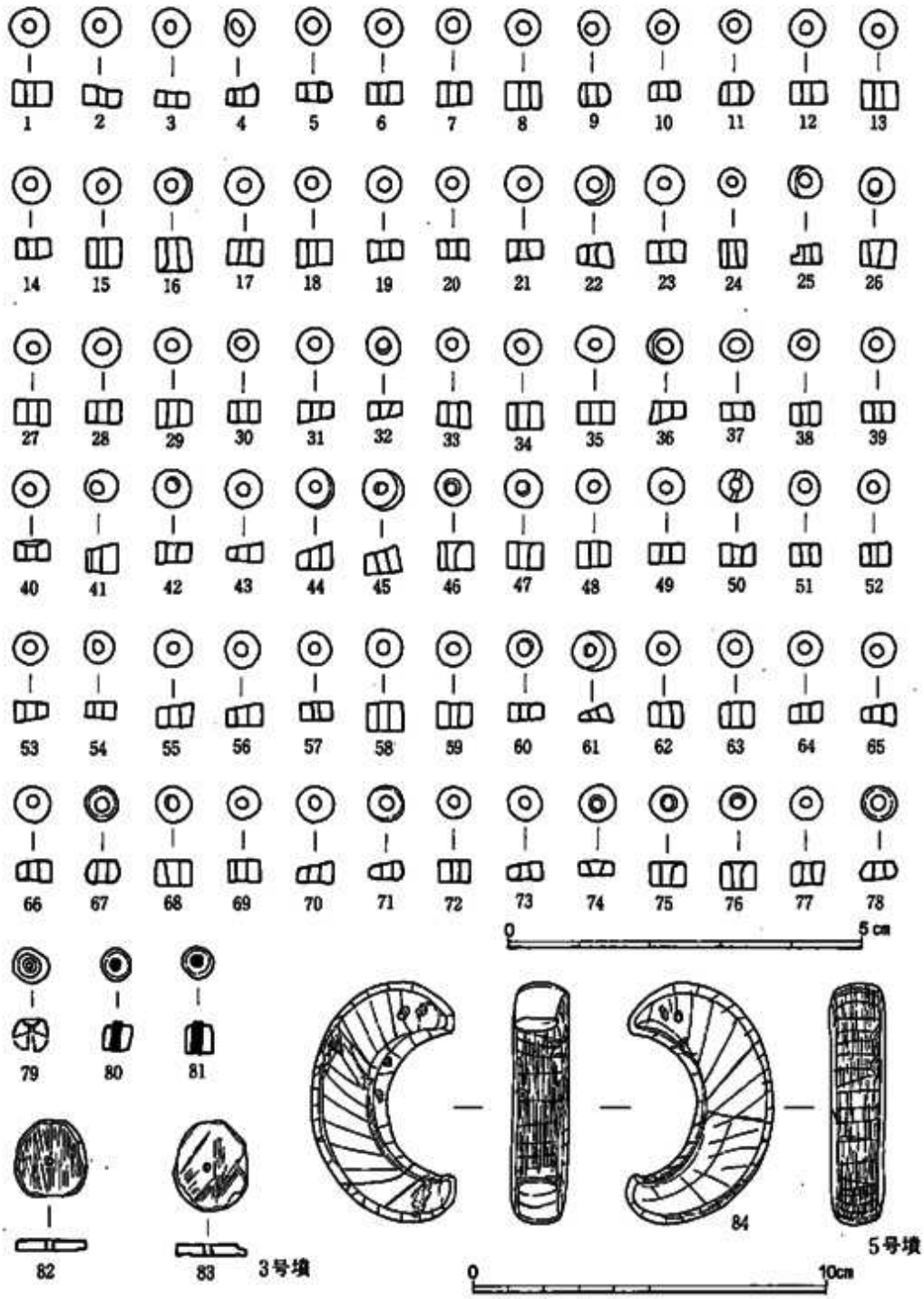
内反りの大刀で、全長が77.3cm、刃部長62.4cm、幅が先端付近で2.9cm、基部で3.4cm、背厚が0.8cmを測り、片面にのみ鞘の木質が残る。茎長は14.9cm、幅は基部で2.7cm、先端で2.2cm、厚さは上で0.6cm、下厚で0.3cmである。目釘穴は5.0cmの間隔で穿たれ、内部には釘が残っている。

関部付近には木質の上に不明の付着物があり、柄及び鞘口の装飾と考えられるが腐食が激しく判断できない。茎の約1/2ほどに柄の木質が残り、関に近い茎の下端には腰巻ベルトを装着するための幅1.0cm、奥行き0.5cmの「コ」字状の抉りがある。この抉りの延長上の背部には装飾がなされ、ベルトを縛る紐は残っていない。

装飾を境に先端方向には、縦糸を横糸で巻いた紐（撚り紐ではない）で木装の柄を巻きつけており、茎の先端は凹状をなし、腰巻ベルトの一方の端は、遺存していない木装部に縛っていたのであろう。いずれにしろ、柄部は5世紀特有の木装大刀の特徴を示している。

鉄　鏃（48）　北側壁の石材下の床面から出土した菱形圭頭斧箭式の大形の鉄鏃で完形品である。茎には篦被のないタイプで矢柄の痕跡もない。長さは18.3cm、刃部幅は4.5cm、厚さは0.5cmを測る。

刀　子（49）　南東側壁傍の床面から出土した鹿角装刀子の完形品である。刃部は幅広にしては短く7.6cm、関付近の幅は1.8cm、両関をなし茎長が2.9cmを測る。茎には木質の柄を差し込みその上から鹿角を装着している。



第65図　3号・5号墳出土滑石製品、ガラス小玉実測図（1/1・1/2）

石製品・装身具

3号墳出土滑石製品・装身具（図版35、第65図）

臼　玉（1～78）　石室内に堆積していた撹乱土の下層から散らばった形で出土した。本来は滑石製有孔円盤とセットで床面にまとまって副葬されていたのであろうが、調査時点ではその痕跡は留めていなかった。石材は良質の滑石は少なく、径は0.45cm～0.55cmの範囲内で厚さは様々である。図示した玉で断面が臼状に仕上げたものは5個と少ない。図示していないものについては計測表を参照されたい。

ガラス小玉（79～81）　出土したガラス小玉は3個に過ぎない。この他、3号墳の北側周溝1.0mの所で2個採集しており、盗掘時に大半が持ち出された可能性が強い。出土した小玉も石室下層の撹乱土中からのものである。

79の小玉は色調が黒色を呈しており不純物を多く含んでいる。玉は約1/2ほどが剥がれたような欠損をしており、その断面を観察すると薄い層をなしている。

80・81はスカイブルー色の小玉である。両者とも径が0.4cm、厚さは0.3cmと0.4cmを測るが、特記すべきことは両者の孔に緑錆をふいた0.13cmの銅線が残っており、このような例は知らない。繋ぎに銅線を使うことから刀飾などの用途が考えられる。

滑石製有孔円盤（82・83）　撹乱土中から出土したもので、両者とも造りがやや粗い。82の石材は黄灰色を呈し不純物を多く含む。大きさは2.1cm×2.0cm、厚さは0.3cm、中央の孔は0.2cmである。83も不純物の多い石材で赤茶色を呈する。径は2.1cm×2.4cm、厚さは0.3cm、孔径は0.1cmを測る。

5号墳出土装身具（図版35、第65・66図）

滑石製勾玉（84）　古墳の東側周溝底面から出土した大形の勾玉で造りの整美なものである。出土場所の傍には石塊が置かれた状態で、周囲には他の遺物の出土はなく、単独の出土で盗掘の結果と考えるには周溝の底面出土であり一種の祭祀的側面を考える必要があろう。

勾玉全体の2/3が黒い光沢があり、全面に黒漆を塗布したと考えられる。また、頭部を除いて全面に線刻がなされ線刻内には黒漆がないことから塗布した上から線刻したのであろう。穿った孔の上部両面は若干摩耗しており紐づれの痕跡であろう。法量は長さが6.8cm、頭部幅は2.0cm、厚さは1.5cm、尾部幅は1.5cm、厚さは1.4cm、孔径は0.3cm～0.4cmを測る。

ガラス小玉（1～15）　石室内の床面から若干上層で盗掘により散乱した状態で出土した。小さいものは径が0.3cmから大きい玉は0.6cmまでのものがある。色調は大きく7色に分れ、1・2が青味緑色、3～8・10・11・14が不純物の多い青緑色、9・15が濃紫色、12が気泡が多いコバルトブルー、13はスカイブルーである。

第4表　3号墳出土不掲載滑石製臼玉計測表　(単位mm)

NO	径	厚さ	孔径	NO	径	厚さ	孔径	NO	径	厚さ	孔径
1	4.2	2.3	1.4	40	4.1	2.4	1.3	79	4.3	2.0	1.7
2	3.8	1.3	1.3	41	4.2	1.7	1.6−1.9	80	4.0	2.4	1.3
3	3.9	1.2	1.3	42	4.2	1.6	1.4	81	4.0	1.3−1.7	1.3
4	3.9	1.2	1.4	43	4.2	1.8	1.6−1.9	82	4.6	0.9−2.3	1.4−2.0
5	4.4	1.2−1.4	1.4	44	4.7	1.6−2.3	1.8	83	4.5	1.2−2.2	1.5
6	4.2	1.0	1.3	45	4.2	1.5−2.3	1.5−1.8	84	4.3	1.8	1.6−1.8
7	4.0	1.2	1.2	46	4.1	2.4	1.5	85	3.9	2.3	1.4−1.6
8	4.3	1.8	1.5	47	4.3	1.7−2.4	1.5−1.8	86	4.3	1.3	1.5−1.8
9	4.1	1.4	1.3	48	4.9	3.3	1.5−1.8	87	3.9	1.6	1.4
10	4.9	1.1−1.9	1.4	49	4.2	2.0	1.3	88	4.8	2.2	1.4
11	4.0	1.7−2.3	1.4	50	4.2	1.5−2.1	1.5	89	4.2	2.2	1.3−1.5
12	4.0	2.2	1.3	51	4.2	1.3−1.6	1.5−1.7	90	4.1	1.6−2.0	1.7
13	4.0	1.4	1.7	52	4.1	1.7	1.3−1.7	91	4.0	1.3−1.6	1.4
14	4.1	1.6	1.4	53	4.3	2.1−2.5	1.5	92	4.8	2.2	1.4
15	4.4	1.6	1.5−1.9	54	3.9	2.4	1.5−1.7	93	4.1	2.5	1.4
16	4.2	0.7−1.1	1.5	55	4.4	2.0	1.7	94	4.4	1.8−2.2	1.4
17	4.2	0.9−1.5	1.5	56	4.7	1.2−2.3	1.4−1.6	95	4.2	2.1	1.4−1.7
18	4.2	1.6	1.6−1.8	57	4.3	2.6	1.6	96	4.6	1.8	1.5−1.8
19	4.4	1.4	1.6	58	4.4	1.8−2.1	1.6−1.8	97	4.6	2.9	1.6−1.8
20	4.7	0.8−1.3	1.3−1.6	59	4.3	1.6−2.3	1.4	98	4.0	2.0	1.4
21	4.3	1.7	1.6	60	4.0	2.5	1.3−1.6	99	4.1	2.6	1.3−1.6
22	4.2	1.5	1.5	61	4.1	2.1	1.4	100	5.0	2.6	2.0−2.5
23	4.2	1.6−2.3	1.3	62	4.7	1.5−1.8	1.4−1.6	101	4.9	2.2	1.6
24	4.9	1.0−2.1	1.5	63	5.2	1.4−1.8	1.4−1.6	102	4.1	2.9	1.3−1.5
25	4.5	2.1	1.4	64	4.1	2.5	1.4	103	4.0	1.0−1.5	1.5
26	4.8	1.9	1.5−1.8	65	4.4	1.7	1.6	104	4.0	2.2	1.6
27	4.2	1.7	1.7	66	4.5	1.5−1.8	1.5	105	3.9	2.2	1.4
28	3.8	2.1	1.3	67	4.5	1.9	1.7	106	4.1	1.9−2.3	1.3
29	4.0	1.9	1.4−1.6	68	4.8	1.0−1.6	1.8	107	4.0	1.7	1.3
30	4.2	1.3−1.8	1.4	69	4.5	1.9	1.5	108	4.6	1.6−2.3	1.3−1.5
31	3.9	1.5	1.2	70	4.3	2.3	1.3−1.5	109	4.1	1.9	1.4
32	4.1	1.5−2.0	1.3	71	4.1	2.0	1.5	110	4.8	2.7	1.3−1.5
33	4.2	1.4	1.4	72	4.3	1.9	1.7−2.0	111	4.2	2.1	1.5
34	4.1	1.2	1.5	73	4.9	2.0	1.5−1.7	112	4.8	1.8−2.5	1.5
35	4.5	2.0	1.7	74	4.4	3.0	1.9	113	4.2	2.2	1.3
36	3.9	1.5	1.4	75	4.5	2.0	1.5	114	4.2	2.1	1.4
37	4.8	2.6	1.6	76	4.1	2.2	1.6−2.1	115	4.1	1.4−1.7	1.3−1.5
38	4.3	2.6	1.3	77	4.5	3.5	1.4−1.6	116	4.2	2.2	1.6−1.9
39	4.3	2.1	1.6	78	4.0	2.2	1.3	117	4.2	2.1−2.6	1.4

NO	径	厚さ	孔径	NO	径	厚さ	孔径	NO	径	厚さ	孔径
118	4.5	1.8−2.0	1.4−2.1	157	4.6	3.0	1.7−2.0	196	4.4	1.7−2.0	1.6−1.8
119	4.1	2.1−2.4	1.5−2.0	158	4.5	2.8	1.4	197	5.0	1.7−2.3	1.7−2.1
120	4.6	1.6−2.4	1.5	159	4.8	2.0	1.4	198	4.5	2.8	1.7−2.1
121	4.0	2.2	1.7−2.0	160	4.1	1.9	1.3	199	4.2	3.0	1.4
122	4.4	3.7	1.5−1.8	161	4.3	1.1−1.6	1.6	200	4.2	2.6	1.4
123	4.3	2.1−2.6	1.6	162	4.2	1.9−2.5	1.3	201	4.6	2.6	1.4−1.7
124	4.2	2.0	1.4	163	4.4	1.8−2.6	1.5	202	4.6	3.3−3.7	1.5
125	4.1	1.8	1.7	164	4.2	2.3	1.4−1.6	203	4.4	1.9	1.5−1.7
126	4.1	1.5−2.3	1.3	165	4.7	1.7−2.0	1.5	204	4.7	2.4	1.5−1.8
127	4.5	2.4	1.5	166	4.6	2.8	1.4	205	4.6	2.2−2.7	1.4−1.6
128	3.8	1.3−2.0	1.5	167	4.5	1.7−2.1	1.4−1.6	206	3.9	1.5−2.7	1.4
129	4.2	2.2	1.7	168	4.3	1.7−2.3	1.4	207	4.1	2.0−2.5	1.3−1.5
130	4.6	1.4−2.0	1.7	169	4.0	2.1	1.4	208	5.0	2.0−2.5	1.5−1.7
131	4.1	3.1	1.7	170	5.8	2.1−2.8	1.4	209	4.7	1.2−1.7	1.4
132	4.8	1.2−1.6	1.3	171	4.8	2.0−2.5	1.7	210	4.2	2.0	1.6−1.8
133	4.4	2.4	1.7	172	4.4	1.7−2.0	1.4	211	4.1	2.4	1.4
134	4.8	2.9	1.7	173	5.0	1.1−2.3	1.4−1.8	212	4.5	2.6	1.8
135	4.5	2.6	1.8	174	4.0	2.0	1.5	213	4.7	2.7−3.6	1.6
136	3.3	3.0	1.6	175	4.3	2.7	1.7−2.0	214	4.9	3.3	1.5
137	3.9	2.3	1.5	176	4.7	2.5−2.7	1.5−1.7	215	4.6	3.0	1.5
138	4.4	2.8	1.5	177	4.9	3.2−3.6	1.5	216	4.7	2.9	1.5−1.7
139	5.0	3.0−3.7	1.5	178	4.3	2.4	1.3−1.5	217	4.5	1.8−2.6	1.5
140	4.0	2.0−2.5	1.5	179	4.3	2.4	1.6	218	4.6	2.2−2.5	1.5−1.8
141	4.1	2.4−2.9	1.3	180	4.7	2.9	1.8−2.0	219	4.6	2.4	1.6
142	4.3	2.3	1.7	181	4.5	2.4−2.7	1.4	220	4.3	2.3	1.4−1.6
143	4.4	1.2−2.1	1.8	182	4.2	1.6−2.2	1.3−1.5	221	4.3	2.6	1.6
144	5.0	2.6−3.0	1.5−1.7	183	4.2	1.5−1.7	1.7−2.0	222	4.6	2.1	1.7−2.0
145	4.6	3.2	1.5	184	4.2	2.2	1.5	223	4.7	2.1−2.4	1.5
146	4.6	2.9	1.6−2.0	185	4.3	2.2	1.4	224	4.2	2.5	1.4
147	4.8	2.2	1.5	186	4.5	2.5	1.6	225	4.2	2.2	1.3
148	4.7	2.1	1.5	187	4.1	1.5−1.7	1.3−1.5	226	4.0	1.4−1.9	1.3
149	4.1	2.4	1.4	188	4.8	1.5−2.5	1.6	227	4.4	1.9−2.2	1.5
150	4.2	2.9	1.8	189	4.4	2.1−2.8	1.5−2.0	228	4.1	1.4	1.6
151	4.9	2.9	1.8−2.0	190	4.8	3.2	1.7−2.0	229	4.2	2.6	1.3−1.6
152	4.4	1.3−1.9	1.7	191	4.6	2.4−3.3	1.8−2.1	230	5.0	1.2−1.8	1.4
153	4.5	2.3−2.8	1.5	192	4.3	2.8	1.7−1.9	231	4.2	2.2−2.4	1.8
154	4.8	3.5	1.4	193	4.9	2.2−2.5	1.5−1.9	232	4.1	1.9−2.4	1.3
155	4.2	2.8	1.4−1.7	194	3.8	2.6	1.3−1.5	233	4.7	2.0−2.3	1.6−1.9
156	4.4	1.7	1.9	195	4.3	2.7	1.6−2.0	234	4.3	2.1−2.4	1.3

NO	径	厚さ	孔径	NO	径	厚さ	孔径	NO	径	厚さ	孔径
235	4.0	3.1	1.5−1.7	274	4.8	2.3	1.4−1.6	313	4.9	2.3	1.5
236	4.9	1.4−1.7	1.5	275	4.3	2.0−2.4	1.4	314	4.1	1.0−2.9	1.2
237	4.3	2.5−3.1	1.4−1.6	276	4.6	2.0	1.7	315	4.8	2.5	1.7−1.9
238	4.5	1.0−1.6	1.3	277	4.1	2.6	1.8	316	4.2	2.0	1.3
239	4.6	2.6	1.6	278	4.4	2.7	1.7−1.9	317	4.7	3.9	1.7
240	4.2	2.1	1.5	279	4.1	2.9	1.4	318	4.2	2.2	1.4
241	4.9	2.9	1.5−1.7	280	4.6	2.3	1.6−1.8	319	4.9	1.8	1.4
242	5.1	3.2−3.6	1.6−2.2	281	4.9	3.4	1.4−1.6	320	4.9	2.4	1.5
243	5.1	2.8	1.6	282	4.2	2.5	1.6−2.0	321	4.4	1.6	1.3
244	4.3	2.2	1.3	283	4.5	2.4	1.5	322	5.0	3.6	1.6
245	4.8	2.2	1.5	284	5.0	2.8	1.6	323	4.0	1.6−2.1	1.3
246	4.7	1.7−2.5	1.4	285	4.5	3.2	1.6−2.2	324	4.1	2.1	1.4
247	5.0	2.5−2.9	1.5	286	5.0	3.8	1.6−1.8	325	4.9	1.9	1.3−1.5
248	4.1	2.2	1.3−1.5	287	5.1	2.2−3.1	1.6−1.8	326	5.0	3.0	1.8−2.1
249	4.9	2.2−2.7	1.5	288	4.7	2.8	1.4	327	4.2	2.9	1.8
250	4.7	2.7	1.5−1.7	289	4.9	3.4	1.4−1.6	328	5.1	3.0	1.6−1.8
251	4.2	2.3	1.8	290	4.8	2.0	1.6−2.2	329	4.2	1.9	1.7
252	5.2	2.7	1.7−2.1	291	4.6	2.7	1.6	330	4.3	1.9	1.7
253	4.2	2.8−3.0	1.3−1.5	292	4.2	2.8	1.7	331	4.3	1.2−1.9	1.8
254	4.4	2.4	1.3	293	4.0	2.2	1.4	332	4.5	1.4−2.3	1.6−1.8
255	4.8	2.5	1.5−1.7	294	5.0	2.9	1.4	333	4.1	1.6	1.3
256	4.2	2.6	1.8	295	4.1	2.6	1.4	334	4.8	1.3	1.5−1.7
257	4.9	1.7	1.4	296	4.9	1.5−1.7	1.3−1.5	335	4.8	2.3	1.6
258	4.1	2.2	1.3−1.5	297	4.6	2.4−2.7	1.6	336	4.3	1.3−1.8	1.7
259	4.4	2.0−2.2	1.4	298	4.7	3.2	1.7−2.0	337	4.2	2.1	1.8
260	4.1	2.7	1.4	299	5.0	1.9−2.4	1.6	338	4.4	2.0	1.4
261	4.8	2.5	1.6	300	4.5	2.7	1.6−1.9	339	4.6	2.8	1.5
262	4.7	1.5−2.0	1.4−1.9	301	4.8	1.9	1.5	340	4.4	1.5−2.2	1.5
263	4.8	2.3−2.6	1.5−1.7	302	4.2	2.2	1.3	341	4.1	2.5	1.3
264	4.6	2.9	1.6−1.8	303	5.0	2.9	1.5−1.8	342	4.0	1.3−2.4	1.3
265	4.3	2.6−2.9	1.3	304	5.0	3.5	1.5	343	5.0	3.0	1.4
266	4.2	2.1	1.8	305	5.0	2.8	1.6−2.1	344	4.2	3.2	1.4
267	5.0	2.0	1.8−2.2	306	4.8	3.0	1.6−2.1	345	4.4	2.6	1.4
268	4.2	1.0−1.8	1.4−1.6	307	4.1	2.2	1.3	346	4.8	2.9	1.5−2.0
269	4.0	2.0	1.4	308	5.0	2.8	1.6−2.0	347	4.2	2.4	1.3−1.5
270	5.1	3.1	1.6	309	4.1	2.5	1.4				
271	5.1	3.6	1.4−1.6	310	4.3	2.0	1.6−2.0				
272	4.1	2.5−2.7	1.3	311	4.2	1.8	1.6−1.8				
273	3.9	1.6	1.5	312	4.3	2.0	1.3				

7号墳出土装身具（図版35、第66図）

臼　玉（16～32）

石室内の撹乱された覆土中から出土した滑石製の臼玉が17点ある。

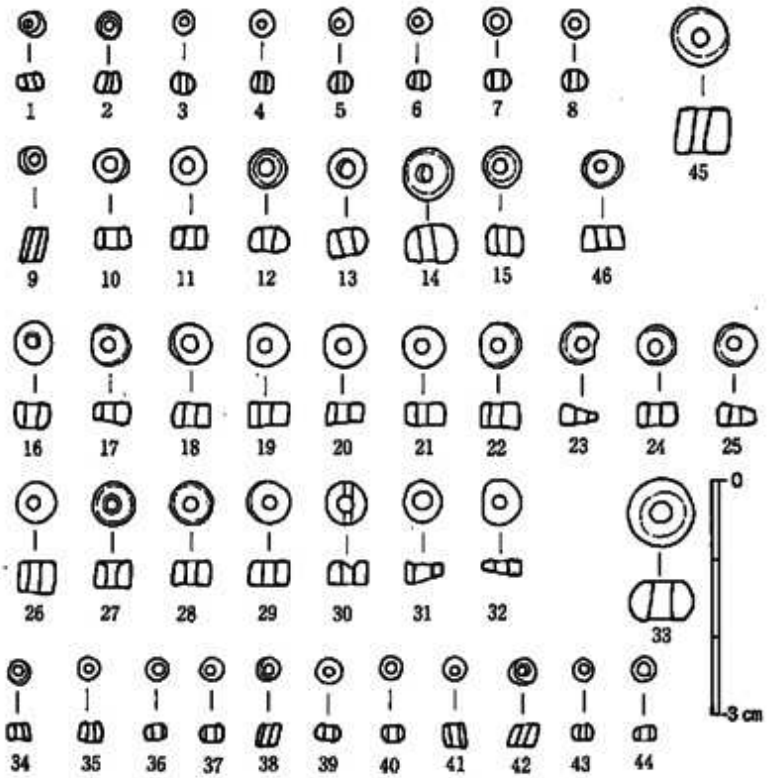
法量は径が0.5cmで厚さが0.2cm～0.3cmを測る。

9号墳出土装身具（図版35、第66図）

ガラス玉（33～44）

石棺内の床面近くの堆積土から撹乱された状態で出土した33のガラス玉1個と34～44のビーズ玉11個がある。

33は紺色の玉で孔径が0.8cm、厚さは0.5cmを測る。



第66図　5号・7号・9号墳、表採玉類実測図（1/1）

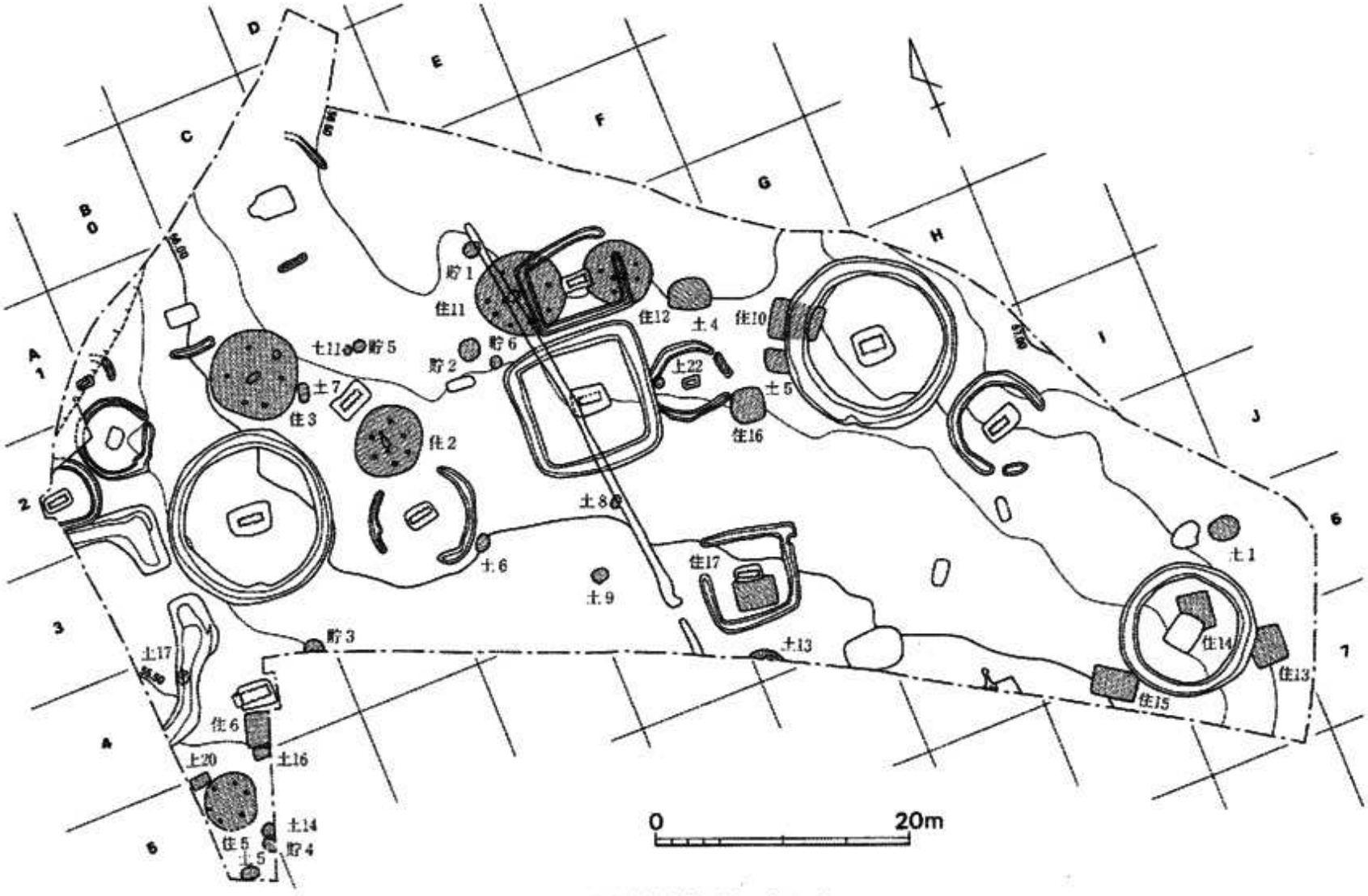
ガラスビーズ玉はすべて黄色で、最大径は0.3cm、最小径は0.28cm、孔径は0.1cm～0.15cmを測り、断面が方形四辺形のものもある。

表採装身具（第66図）

45・46は3号墳周溝北側1.0mの所で採集したガラス玉で、恐らく3号墳が盗掘を受けた時点での結果であろう。45は断面が方形の青緑色で気泡が多く、径が0.7cm、厚さが0.6cm、46は明青緑色で断面が扁平な玉で径が0.5cm、厚さ0.3cmである。

4）弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構はⅠ区・Ⅱ区・Ⅳ区で検出した。遺構の種別はⅠ区が甕棺墓・土壙墓・木棺墓などの中期初頭から前葉にかけての縦列埋葬の墓地群が主で南側に続くと推測される。この他、中期初頭から前葉の円形住居跡、貯蔵穴などが検出されている。



第67図　弥生時代遺構配置図（1/500）

Ⅱ区の弥生時代の遺構は、古墳の築造及び後世の畑作によりかなりの削平を受けており遺存状態は良くない。検出した遺構の種類は、弥生時代前期末から中期初頭頃の竪穴住居跡と中期前葉頃の竪穴住居跡、この竪穴住居に伴う貯蔵穴並びに土坑、出土遺物がないため時期が不明であるが前期末～中期初頭の範疇に含まれると推測される竪穴住居跡などがある。報告済であるⅣ区でも中期前半頃の竪穴住居を確認している。

竪穴住居の設営状況は重複するものはないものの、11号住居と12号住居との間が2.0mと狭く時期的にも同時併存ではないと考えられるが、Ⅱ区で検出した集落とⅠ区で検出した墓地群との関係が刮目される。恐らく、両者は関連深く集落と墓地形成を如実に物語る好資料と考えられる。しかし、Ⅰ区で検出した中期初頭から前葉の竪穴住居と墓地群との位置関係が近接し過ぎたきらいがあり、住居もやや大形であり単独で設置されたのであれば墓地群との関連性が指摘できるが、狭い調査区で全容を把握できないため憶測は避けたい。

（1）竪穴住居跡

2号竪穴住居跡（図版36―(1)・(2)、第68図）

6号墳と10号墳との間で検出した竪穴住居跡で、当該住居よりやや古い弥生時代前期末から中期初頭ごろの3号竪穴住居とは6.0m南東側に位置する。

住居の平面プランは若干歪な円形を呈し、その規模は5.70m×5.10m、床面までの深さは0.15m～0.30mを測る。床面上の支柱穴はプランに対してやや歪ではあるがＰ１～Ｐ６が配置状況から適合していると考えられ、各柱間はＰ１－Ｐ２が1.90m、Ｐ２－Ｐ３が1.40m、Ｐ３－Ｐ４が1.50m、Ｐ４－Ｐ５が1.20m、Ｐ５－Ｐ６が1.20m、Ｐ６－Ｐ１が1.65mを測る。柱穴の深さは0.25mから0.62mである。

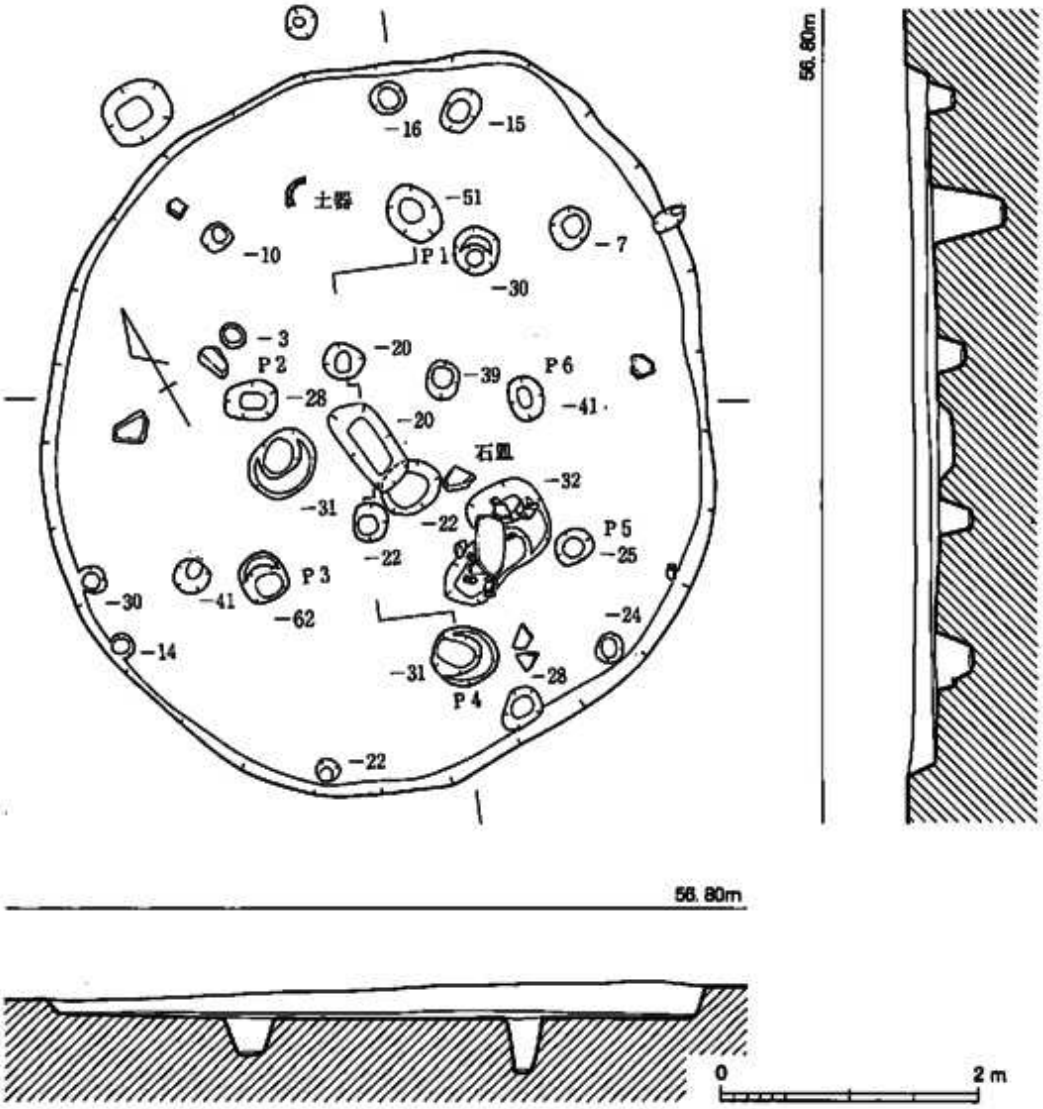
床面の中央には0.7m×0.35m、深さが0.1mの中央ピットが掘られ、それを挟む形でＰ７－Ｐ８が配されている。その柱間は1.25mで所謂松菊里形住居の系譜に繋がるタイプである。

出土遺物は、弥生時代中期初頭から前葉頃の壺・甕・器台の他、中央土坑の傍からは絹雲母片岩製の石皿１、軽石３、絹雲母片岩の不明石器１がある。

3号竪穴住居跡（図版37―(1)、第69図）

2号竪穴住居跡の北西6.0mに位置する平面プランが円形の竪穴住居跡である。主だった遺構との重複はなく、南西側の壁が攪乱と思われる落ち込みで削平されている。

住居の規模は7.00m×6.70m、壁高は0.2m～0.3mを測り、円形住居では大形の部類に入る。床面上の規則的な柱穴としてはＰ１－Ｐ６があり、各柱間はＰ１－Ｐ２が2.70m、Ｐ２－Ｐ３が2.40m、Ｐ３－Ｐ４が1.90m、Ｐ４－Ｐ５が2.70m、Ｐ５－Ｐ６が2.00m、Ｐ６－Ｐ１が

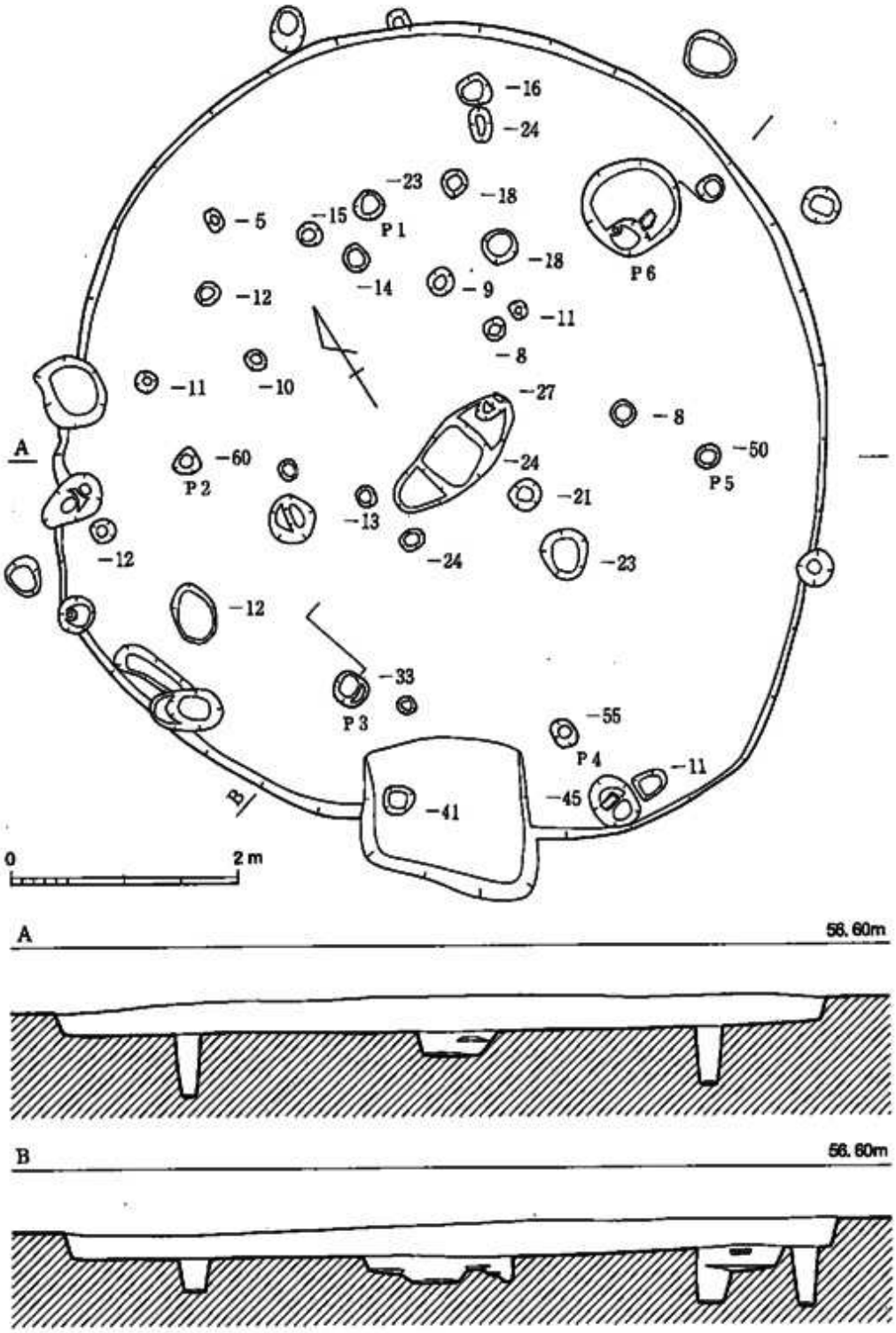


第68図　2号竪穴住居跡実測図（1/60）

2.25mを測る。柱穴の深さは0.23m～0.60mを測りやや不揃いである。床面中央には長さ1.30m、幅0.5mの楕円形の土坑が掘られているが、2号住居のような土坑を挟む形でピットは配されていない。中央土坑には炉のような焼痕は認められず、周囲の床面上にも炉の痕跡はない。

床面の東側にはＰ６を取り込むような形で円形の深さ0.20mの土坑様の掘り込みがあり、上面に貼床を施していたことから住居より古い縄文晩期頃のものと思われる

出土遺物は、壺片・甕片・器台片（混入か）などの破片が大半で、如意状口縁の甕が多く一部如意状から逆「L」字状に移行する形態のものが混入しており、弥生時代前期末から中期初頭頃の時期が付与できよう。この他、重弧文を線刻した蓋形土器と軽石１点・石鏃７点・縦長



第69図　3号竪穴住居跡実測図（1/60）

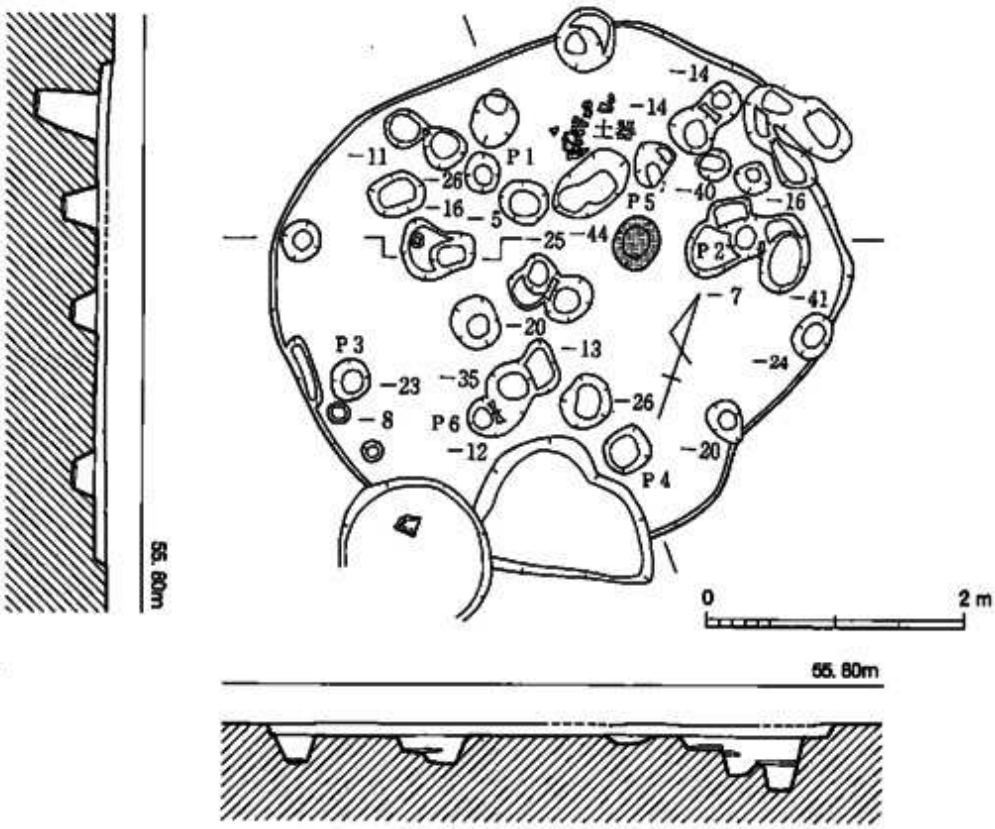
剥片１点などがある。

５号竪穴住居跡（図版37―(2)、第70図）

Ⅱ区の南西端で検出した小形の不整円形竪穴住居跡で南側は時期不明の土坑様の掘り込みで破壊されている。住居の南側1.50mには共存すると思われる16号土坑が付属している。

住居の規模は、東西方向で4.50m、南北方向で3.90m、深さは削平が激しく0.10m前後しか遺存していない。床面上には多数のピットがあるが、支柱穴になるピットは、Ｐ１（−50cm）、Ｐ２（−31cm）、Ｐ３（−22cm）、Ｐ４（−19cm）の４本かＰ５（−31cm）、Ｐ６（−12cm）を加えて６本になると考えられる。東側寄りの床面には径40cmの炉が掘られ著しい焼痕が見られる。炉跡が確認された住居は当該住居のみである。

出土遺物は、北側の床面から集中して検出されたが、器種としては甕のみである。甕の形状から住居の時期は、弥生時代中期前葉でも新しい頃に比定されよう。



第70図　５号竪穴住居跡実測図（1/60）

6号竪穴住居跡(図版38-(1)、第71図)

5号竪穴住居跡の北東側2.0mに位置する竪穴住居跡で、南壁が16号土坑と重複し住居の方が新しい。

住居は約1/2が調査区外のため未掘である。現状での平面プランは方形乃至長方形であろう。西壁辺は2.80m、深さは0.10mを測り極めて遺存状況が悪い小形の住居と考えられる。柱穴や炉跡は不明である。

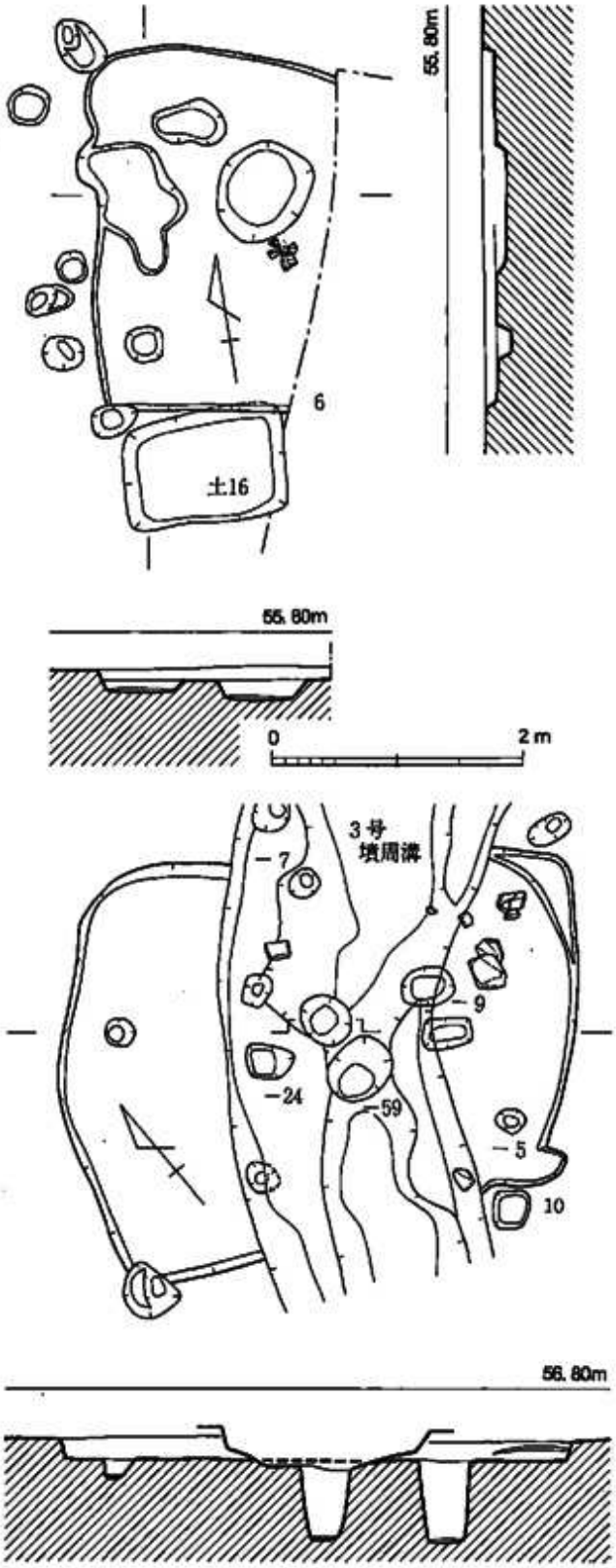
出土遺物は床面中央付近に集中しているが個体数としては少ない。器種は壺の底部片・甕の口縁部片・器台か支脚片の他、二次火熱を受けた不明土製品が2点ある。

10号竪穴住居跡(図版38-(2)第71図)

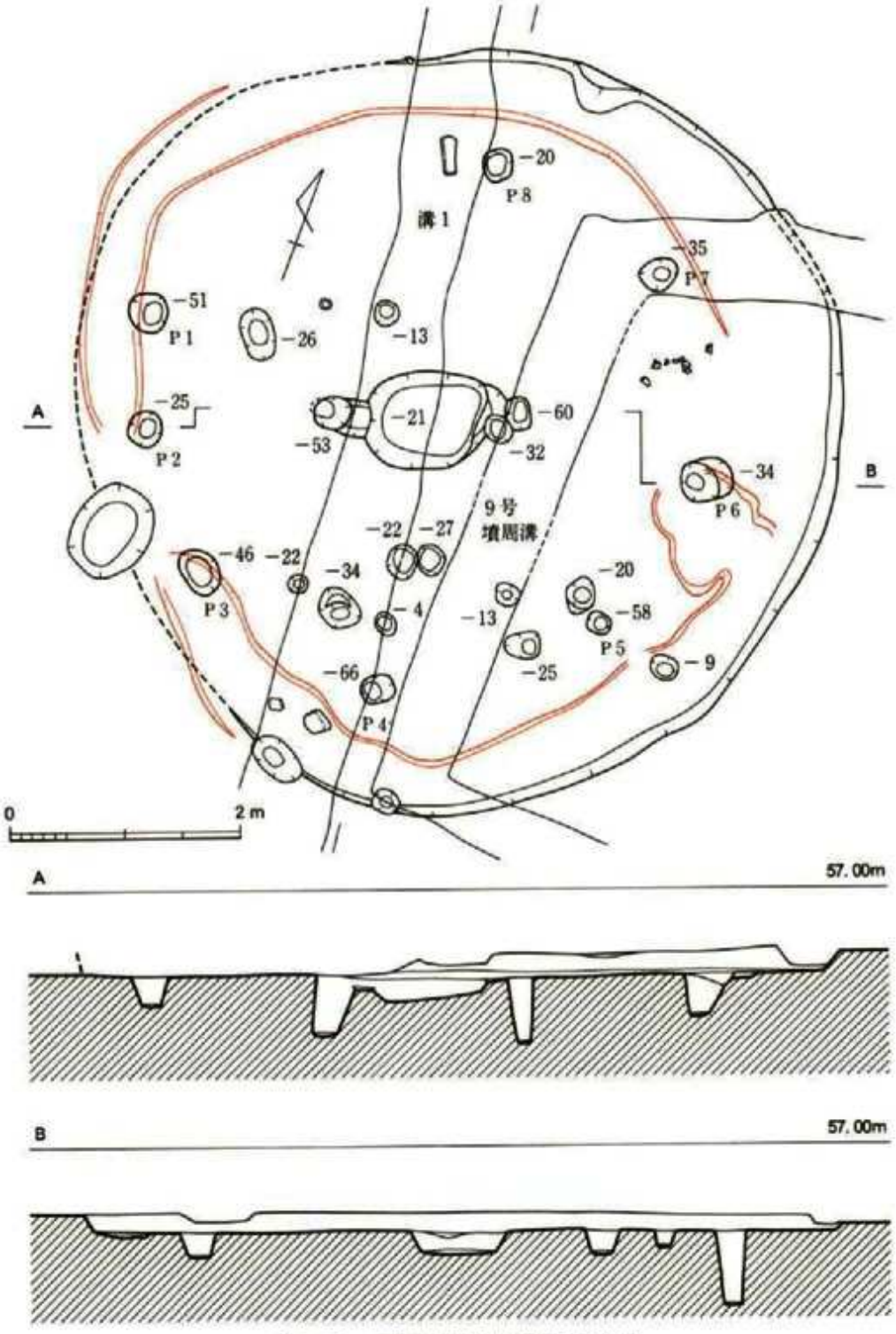
12号住居の東南側10.0m、同時期の11号住居とは16.0m離れた位置にある竪穴住居跡で、住居の中央部を3号墳の周溝で破壊されている。住居の南傍には同時期の5号土坑が付属しているが、これも東側を周溝によって削平されている。

住居の平面プランは長方形に近い形状で、規模は長辺が3.80mと3.50m、短辺が2.60mと3.10mを測り、やや歪な形状をなす。深さは15cmで古墳築造時にかなりの削平を受けていると推測される。

支柱穴は規則的なものはなく、断面図に示したP1とP2が60cm前後と深くP3が24cmP4が14cmを測る



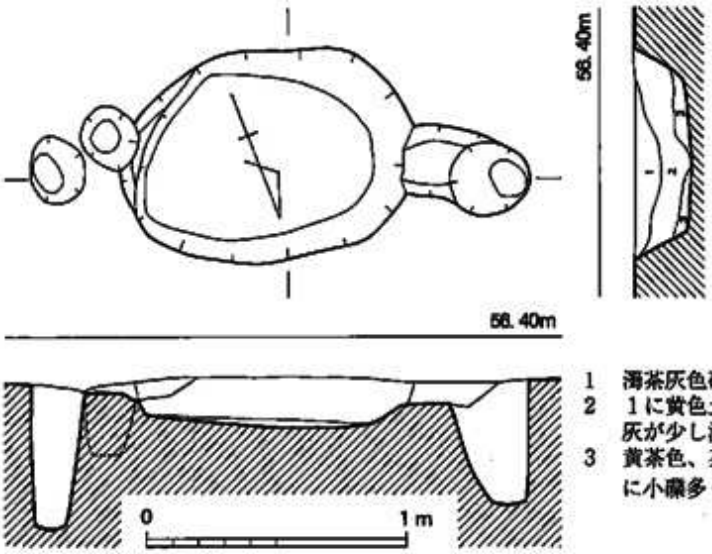
第71図　6号・10号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第72図　11号竪穴住居跡実測図（1/60）

が支柱穴になるピットは不明である。炉跡は周溝に削平されている可能性がある。

出土遺物は、弥生時代前期末頃の壺の破片が1点あり、床面には絹雲母片岩と緑泥片岩があるが製品ではない。



第73図　11号竪穴住居跡中央土坑実測図（1/30）

11号竪穴住居跡（図版39—(1)、第72・73図）

ほぼ同時期と考えられる12号住居の西側2.0mに位置するやや大形の円形竪穴住居跡で、南西側1.50mにある2号貯蔵穴と北側1.50mに位置する1号貯蔵穴が付属している。住居は溝1と9号墳に一部破壊されており、西側壁は殆ど遺存していない。

住居の大きさは東西・南北方向で6.70m前後、遺存状況の良好な壁高部分で0.20m前後を測る。支柱穴は床面上の規則的な柱穴を拾い上げると2案が考えられる。第1案は深く掘られたピットを結び付けたP1(−51cm)−P2(−25cm)−P3(−46cm)−P4(−66cm)−P5(−58cm)−P6(−34cm)−P7(−35cm)−P8(−20cm)の8本が考えられ、第2案はP6−P7−P8−P9(−26cm)−P10(−34cm)−P11(−25cm)の6本柱が考えられる。配置としては第2案が妥当のように思え、床下の壁沿いにやや幅広で浅い掘り込みが巡っているがP2−P3間は貼床しておらず、住居の出入り口の可能性を示唆している。しかも、住居の出入り口の方向に2号貯蔵穴があることも補完する資料であろう。1案の各柱間はP1−P2が1.00m、P2−P3は1.30m、P3−P4は1.80m、P4−P5は2.05m、P5−P6は1.50m、P6−P7は1.85m、P7−P8は1.70m、P8−P1は3.30mで、2案の柱間はP8−P9が2.60m、P9−P10が2.50m、P10−P11が1.70m、P11−P6が2.00mを測る。

住居の覆土は、暗褐灰色砂泥と茶灰色砂泥がレンズ状堆積し、床面は灰色土粘質土で貼床している。床面の中央には1.0m×0.8m、深さ0.2mの土坑が設置され、内部には上層に濁茶灰色砂泥、中層に黄色土と炭、灰が、下層は小礫混じりの茶灰色土が堆積していることから、炉跡の可能性が指摘できるが焼痕はない。それを挟む形で内側に傾斜した小ピットが掘られ、所謂松菊里型の系譜を引くタイプであるが、松菊里型の住居の中央土坑は炉として使った形跡がなく、わが国に伝播し発展的に機能分化した結果であろう。

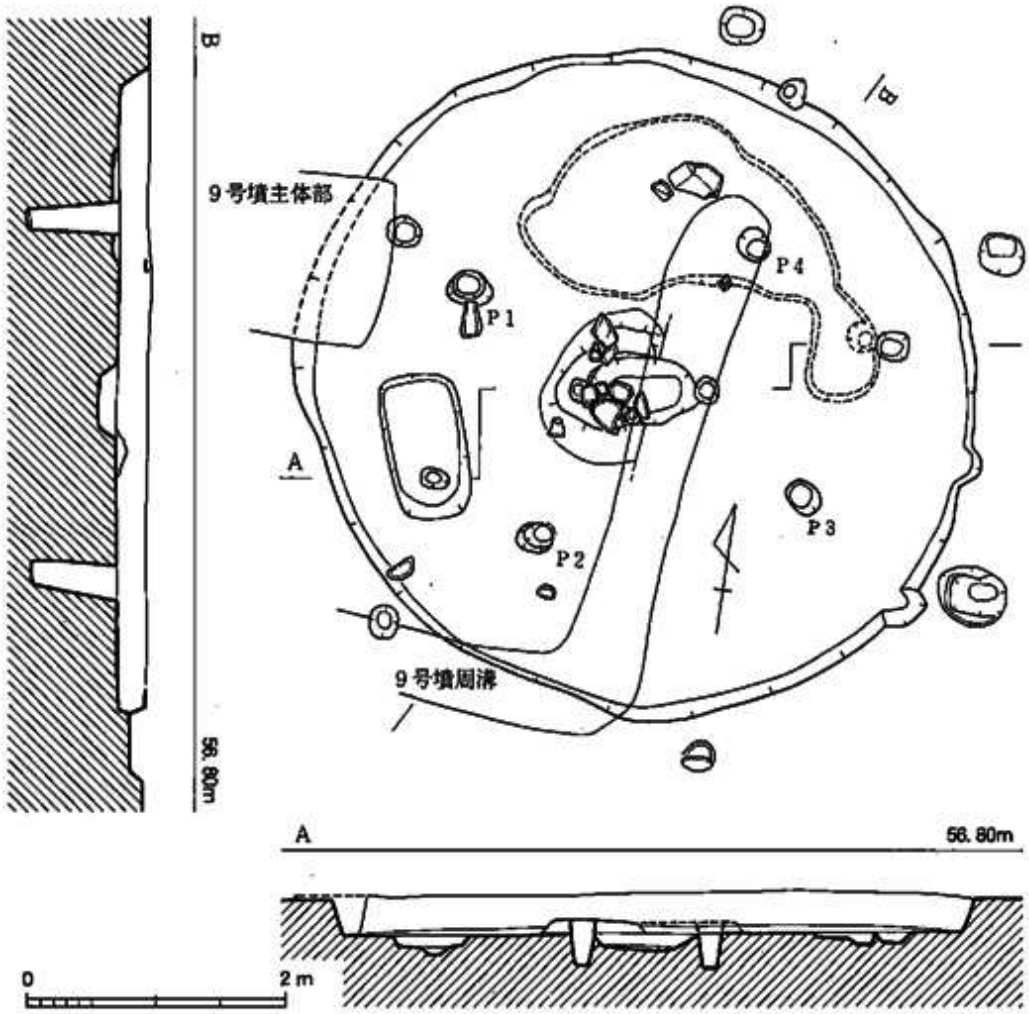
出土遺物は、弥生時代前期末頃の壺・甕の他、黒曜石製の石鏃が1点ある。

12号竪穴住居跡（図版39―(1)・(2)、40―(1)、第74・75図）

11号住居と４号土坑に挟まれた所に位置する竪穴住居跡で９号墳に一部が破壊されている。東南側1.50mにある４号土坑とは出土した土器に若干の時期差があり、必ずしも共伴する遺構ではないようである。

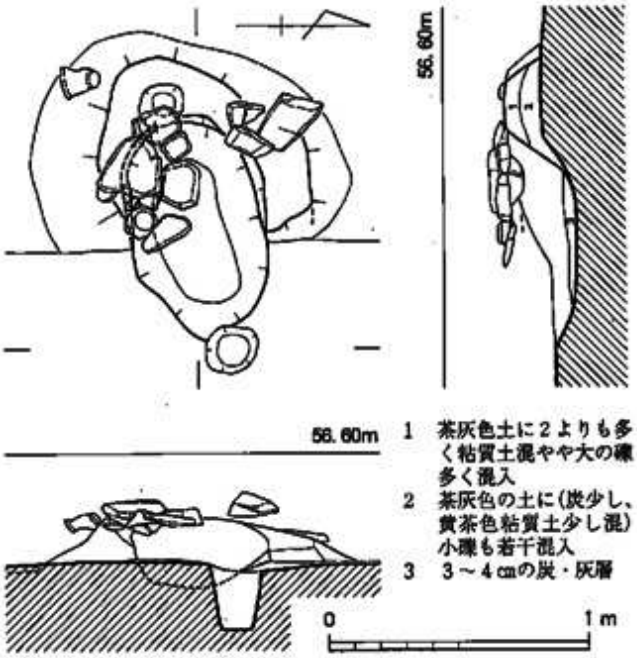
住居は小形の正円形プランで、規模は直径が5.20m、壁高は0.25m～0.30mを測り、他の住居に比較して遺存状態がよい。住居内の覆土は茶褐色砂泥と茶灰色粘質土がレンズ状堆積しており、床面北側には不整形の掘り込みがあり、小礫混じりの黄灰色砂泥で貼床している。

床面にはＰ１－Ｐ４の規則性のある柱穴が配され、各柱間はＰ１－Ｐ２が2.00m、Ｐ２－Ｐ３が2.00m、Ｐ３－Ｐ４が1.95m、Ｐ４－Ｐ１が2.25mを測る。



第74図　12号竪穴住居跡実測図（1/60）

床面の中央には11号住居同様小ピットを挟んで長さが80cm、幅50cm、土手から底面までの深さ28cmの楕円形の土坑が設置されている。この土坑は1/2が9号墳の周溝で削られているが、西側は茶灰色粘質土と黄茶色粘質土と炭の混じった茶灰色土で幅30cm、高さ15cmの土手状の高まりを巡らしていることが判明した。この土手状の遺構は上部に土器に混じって板石が残っていたことで偶然に発見したもので、板石がなかったならば調査時点で削っていたと思われる。本来このタイプの中央土坑には周囲に土手状の高まりが巡っていることが考えられる。



第75図　12号竪穴住居跡中央土坑実測図（1/30）

土坑の底には3.0cm～4.0cmの厚さで炭と灰が堆積しており炉跡と考えられるが、土手上に散乱していた板石で石組みしていた可能性が考えられる。今後の類例を待ちたい。

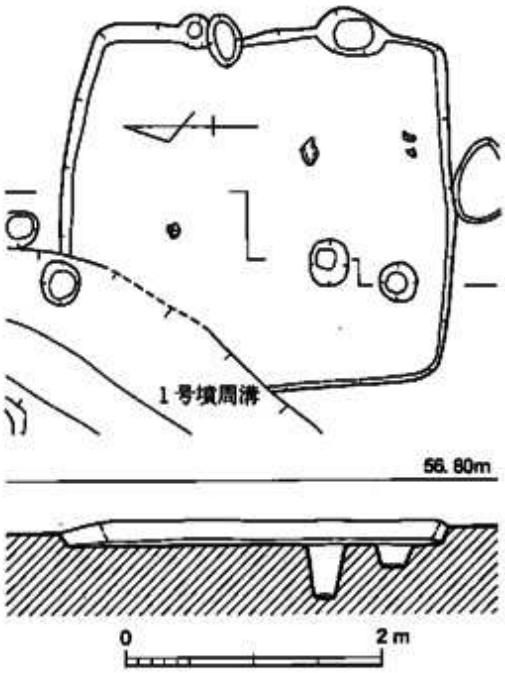
出土遺物は、壺・甕・鉢の他、床面から凹石と磨石兼用石器と石鏃などがある。

13号竪穴住居跡（第76図）

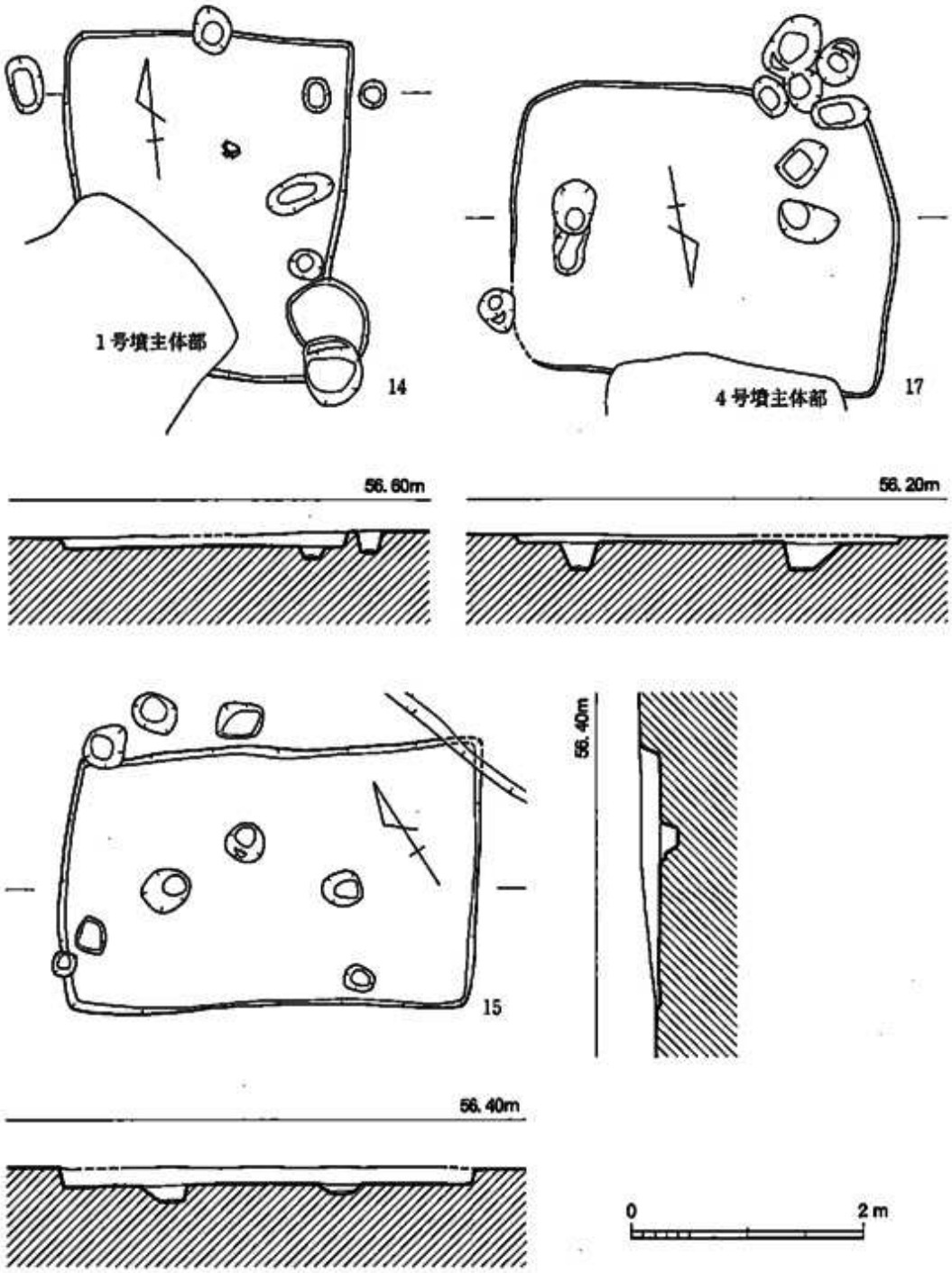
1号墳の東側周溝に接する形で検出した竪穴住居跡で、北西側を古墳の周溝に破壊されている。平面プランは方形で、規模は2.70m×2.60m、深さは0.15mを測る。

規則的な支柱穴はなく、断面に図示した柱穴がその内の1本であろう。炉跡は検出していない。

出土遺物は土器の小片があるものの図示できず時期が不明である。



第76図　13号竪穴住居跡実測図（1/60）



第77図　14号・15号・17号竪穴住居跡実測図（1/60）

14号竪穴住居跡（第77図）

１号墳丘下から検出した竪穴住居跡で、南西壁を１号墳の主体部で破壊されている。また、古墳の築造時にかなりの削平を受けているらしく遺存状態も悪い。

平面プランはやや歪な長方形に近い形状で、規模は長辺が2.90m、短辺が2.40m、深さは0.10mを測る。支柱穴ははっきりせず、炉も設置されていない。

出土遺物は、土器の小破片があるが図示できるものはない。破片から観る限り住居の時期は弥生時代前期末～中期初頭であろう。

15号竪穴住居跡（第77図）

１号墳の南西傍で検出した竪穴住居跡である。住居の東隅を古墳の周溝で一部破壊されている。この住居も13号・14号住居と同様古墳検出面から若干下層で検出したもので、遺跡の概要の項でも示したように３ｂ層の暗褐色粘質土層の文化層に含まれる遺構である。この文化層は新しい順に弥生時代後期中頃→中期中頃から初頭頃→前期末頃の遺構が含まれており、13号～15号住居は同一時期の可能性が強い。このように考えると３軒の住居の時期は弥生時代前期末から中期初頭頃と推測される。

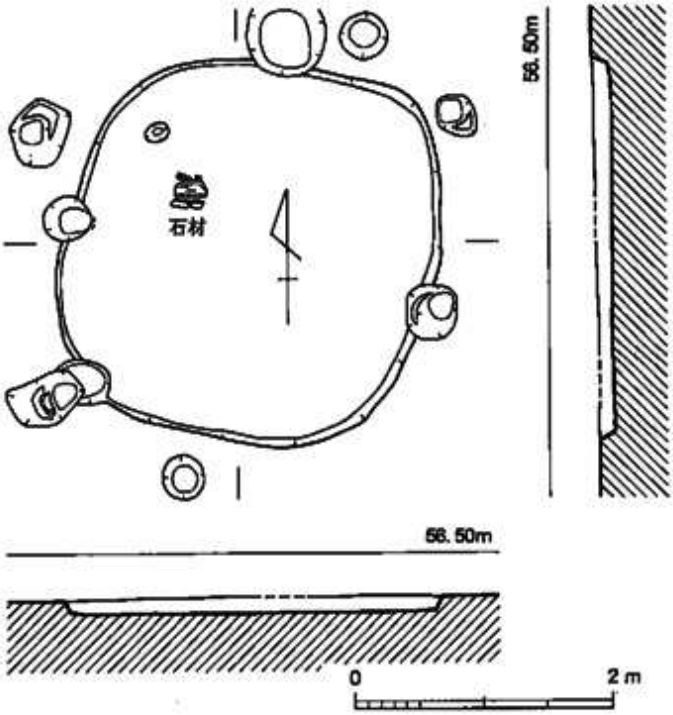
当該住居の平面プランは長方形を呈し、規模は短辺で2.15m・2.30m、長辺で3.45m・3.30m、深さは0.15mを測る。床面には規則的な２本のピットがあり、一見後期の住居形態を示しているがいずれのピットも浅く支柱穴にはなり得ない。

出土遺物は殆どなく、僅かに石鏃１点があるに過ぎない。

16号竪穴住居跡（第78図）

この住居も検出した古墳群より10cm下層で検出したもので、出土遺物が殆どないが時期的にも弥生時代前期末から中期初頭頃に比定される住居であろう。

平面形状は円形に近く、規模は2.90m×2.80m、壁高は0.10m前後を測る。その他は不明である。



第78図　16号竪穴住居跡実測図（1/60）

17号竪穴住居跡（第77図）

4号墳の墳下で検出した竪穴住居跡で、北壁を4号墳の主体部で破壊されている。平面形態は長方形で、規模は長辺が2.90m・3.20m、短辺で2.30m前後、深さは0.05mを測り、古墳築造時に激しく削平を受けていると思われる。

床面上には2本のピットがあるが、15号住居より確りしており支柱穴の可能性がある。柱間は1.90mを測る。

主だった出土遺物はない。

（2）貯蔵穴

Ⅱ区の弥生時代の貯蔵穴は総数6基を検出した。Ⅰ区では2基確認しているものの数多くが群をなすようなタイプではないようである。Ⅱ区の貯蔵穴は調査区の北西側に集中しており、南西側でも2基出土していて、いずれも竪穴住居に付属する形で掘られ住居とセットになるタイプである。また3号住居の東側にある10号土坑（縄文晩期）も貯蔵穴であり、1基のみで対応する竪穴住居跡が見当たらない。

1号貯蔵穴（図版40—(2)、第79図）

11号竪穴住居跡の北側1.50mに位置する断面袋状の貯蔵穴である。ほぼ南北に延びる溝1に上部が破壊されているものの旧状を良く保っている。

平面プランは上面・底面とも不整円形で、上面径は1.18m×1.10m、底面で1.32m×1.40m、深さは1.10mを測る。内部には上層から下層にかけて若干の土器に混じって数多くの石塊や板石が投棄されており、貯蔵穴の機能を失った段階で石を投げ込んだものであろう。

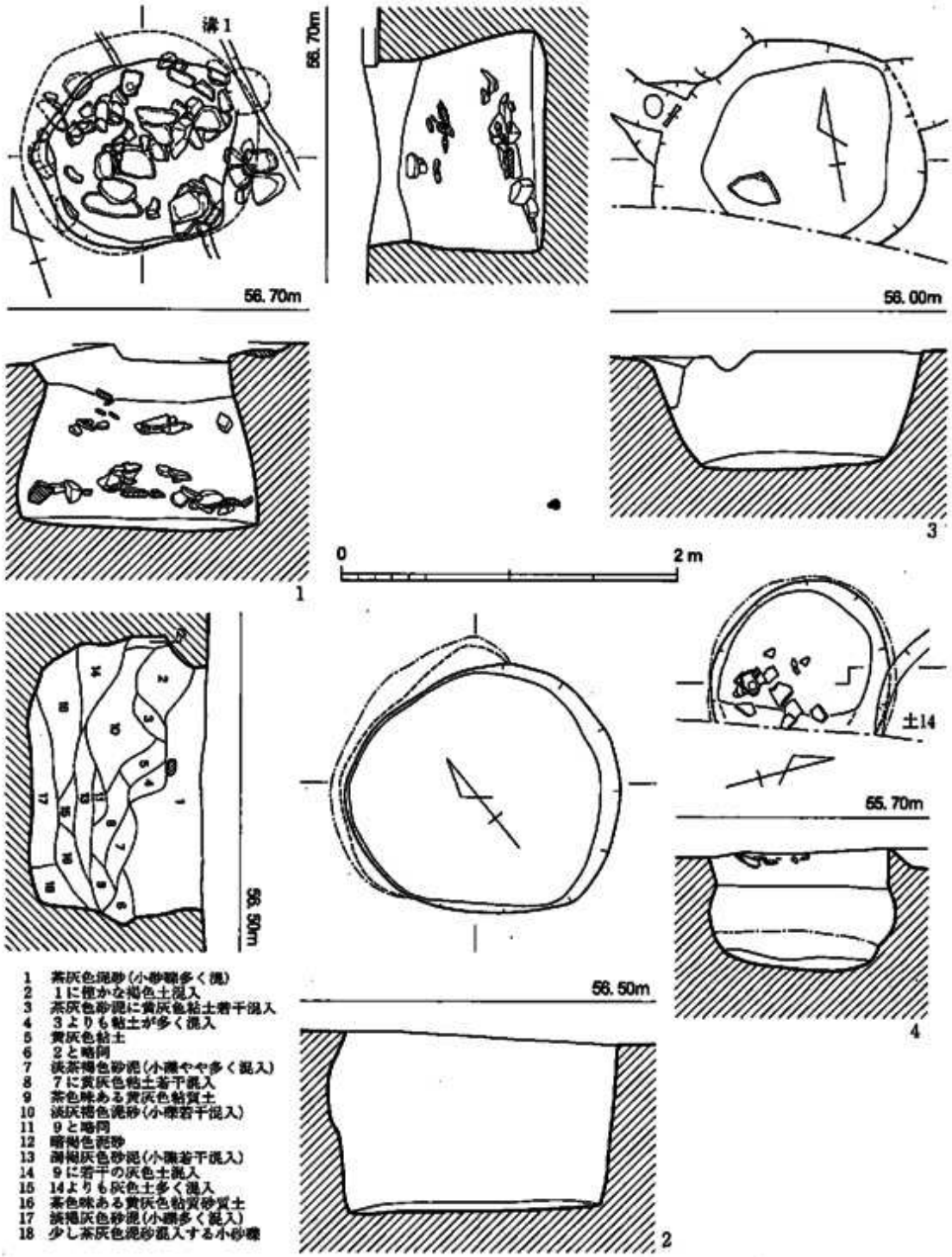
出土遺物は、壺破片・甕破片・甑の他、石鏃が1点あるに過ぎない。時期は弥生時代前期末頃である。

2号貯蔵穴（図版41—(2)、第79図）

この貯蔵穴も11号竪穴住居跡の南西側2.00mに位置するもので、11号住居は2基の貯蔵穴を所有していたと推測される。

平面形状は円形であるが断面が袋状ではなく、上部が崩壊したと考えられる。また、北側の中央壁が大きく抉れこの部分も崩壊している。現状での規模は上面で1.65m×1.45m、底面で1.50m×1.35m、深さは1.05mを測る。内部には茶灰色砂泥と黄灰色粘質土、褐灰色砂泥がレンズ状堆積している。

出土遺物は少なく、壺・甕の破片があるに過ぎない。



第79図　1号～4号貯蔵穴実測図（1/40）

3号貯蔵穴（図版41―(2)、第79図）

調査区の南西側、15号墳の東側で検出した貯蔵穴である。他の遺構との重複はないが、南側が一部調査区外になる。現状での平面プランは不整円形で、断面が逆台形になることからかなり削平されており袋状にはならない。

大きさは東西軸上面で1.60m、底面では1.10m、深さは0.70mを測る。地山が砂質で内部も砂質層が堆積しており、底面直上で弥生時代中期前葉頃の土器片が多数検出されたが、降雨により元位置が失われたため図示できなかった。

出土遺物は、壷・甕・器台などの他、石鏃が1点出土している。

4号貯蔵穴（図版42―(1)、第79図）

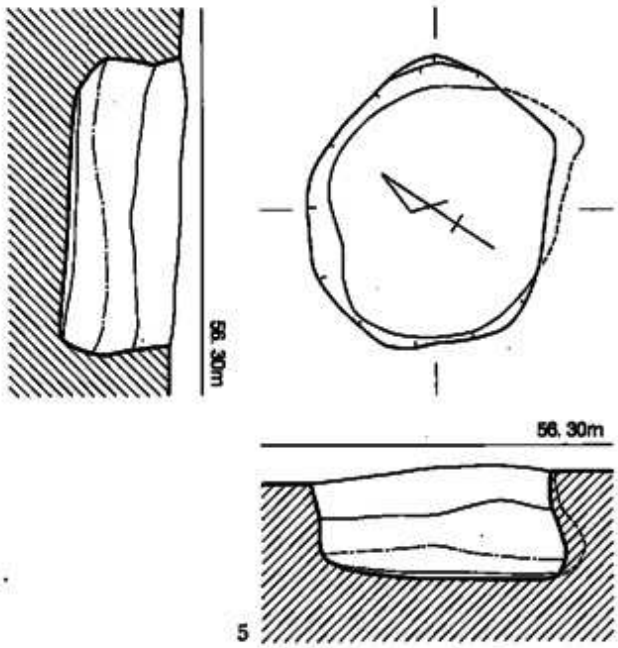
調査区の南西側、5号竪穴住居跡の南2.00mで検出した貯蔵穴で、14号土坑に上面の一部が破壊されている。また、東側は調査区外で未掘である。平面プランは円形で、断面がやや袋状になる。

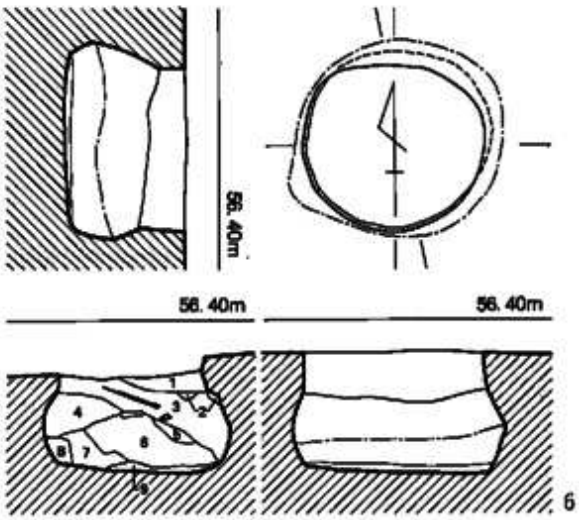
規模は、上面で1.05m、底面で0.9m、深さは0.7mを測る。

出土遺物は、壷底部・甕片・高坏裾部片などがある。

5号貯蔵穴（図版42―(2)、第80図）

3号竪穴住居跡の東側5.0mに位置する貯蔵穴で、平面形状が不整円





1　茶灰色砂泥混入黄灰色粘質土
2　黄灰色粘質土少し混入茶灰色砂泥
3　暗茶灰色砂泥鉄化物（多量）黄色粘土粒（若干）混
4　やや暗い茶灰色泥砂混と黄灰色粘土粒若干混
5　淡茶灰色砂泥に灰・黄灰色粘土粒若干混
6　4に黄茶色粘質土若干混入小礫少し混
7　淡茶褐色砂泥に黄灰色粘土粒若干混
8　2と略同
9　茶色粘質土・茶灰色砂泥混じり

0　1m

第80図　5号・6号貯蔵穴実測図（1/20・1/40）

形を呈する。規模は、0.6m×0.73m、深さは0.3m弱を測り、断面が若干袋状を呈する浅く小形の貯蔵穴である。

出土遺物は磨石の破片が1点あるに過ぎない。

6号貯蔵穴（図版43—(1)、第80図）

下層の石組炉の検出時に確認した貯蔵穴で本来は弥生時代の層から掘り込んでいたと推測される。

平面形状は円形で、断面が袋状を呈するタイプである。上面は削られているが旧状を良く保っている。

大きさは、直径が0.9m×0.85m、深さは0.6m強を測る。内部の土層堆積状況はやや不自然な堆積を示しており、大きめのブロックを一方から投棄したような堆積状況である。堆積土は茶灰色砂泥が中心で多くの炭化物を含んでいる。最後には廃棄場として使われたのであろう。

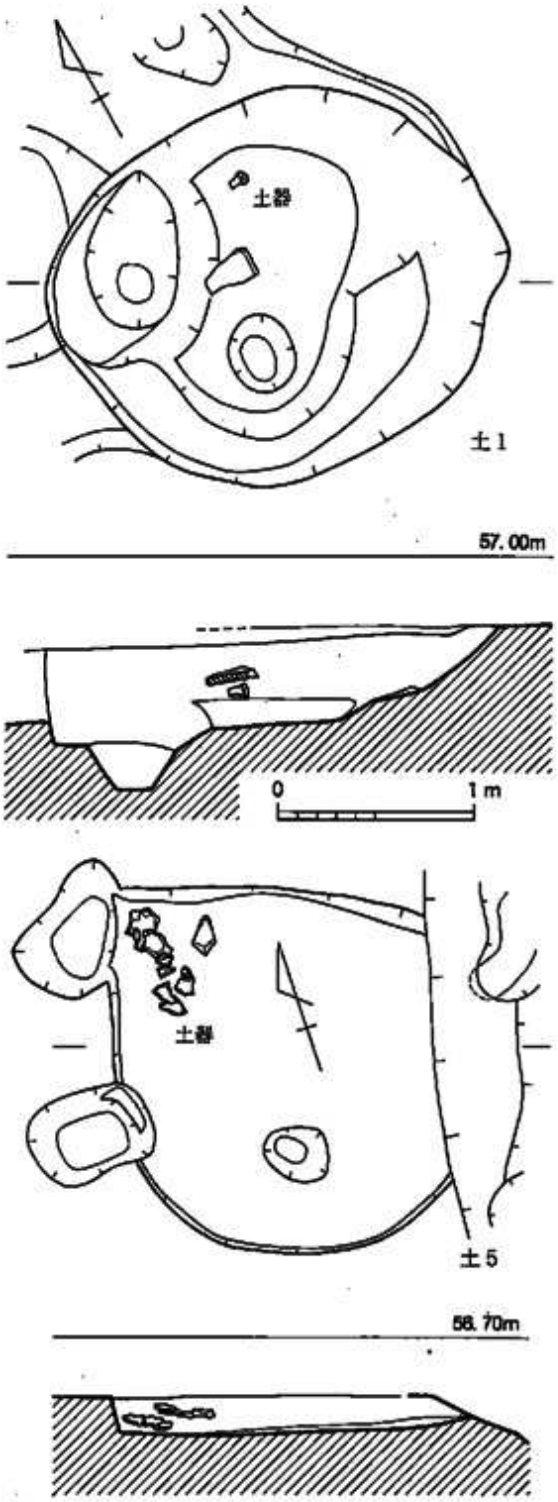
出土遺物はない。

（3）土　坑

1号土坑（図版4—(1)、第81図）

1号墳の北東側で検出した土坑で、大形の不整形の土坑内で一段深く掘られた部分から柱状をなす弥生時代の甕の底部が出土したことから、この掘り込みを弥生時代の土坑としたが、全体が錯綜していて不明瞭である。

現状でのプランは円形で二段掘りを呈し、テラス部分から緑泥片岩板石と土器が出土している。規模は径が2.30m×2.05m、最深部



第81図　1号・5号土坑実測図（1/40）

で0.7mを測る。

出土遺物は、前述の土器の他、磨石か石弾と思われる球状石がある。

4号土坑（図版43—(2)、第82図）

12号竪穴住居の南東側2.0mに位置する土坑で、当初12号竪穴住居に付属すると考えていたが出土土器に時期差がありやや土坑が新しいことから単独の土坑であろう。

平面プランは、不整の隅丸長方形に近い形状で、断面でも分かるように数段のテラスを設けている。機能的には貯蔵穴かも知れない。規模は長さが3.05m、幅が2.60m、底面には浅いピットが掘られており、底までの深さは1.40mを測る。ピット内には4個の石が密着した状態で出土している。

内部には褐色土と黄色土系の土が南から流れ込んだような堆積を示しているが故意に投げ込まれたような堆積状況ではない。

出土遺物は少なく、口縁部を穿孔した小形の甕の他、石核が1点あるに過ぎない。

5号土坑（図版44—(1)、第81図）

10号竪穴住居の南西傍で検出した土坑で、出土遺物から住居に付随する土坑と考えられる。土坑の東壁は3号墳の周溝で破壊されている。平面プランは不整形で、南北の幅は1.87m、深さは0.2m弱を測る。

遺物は北西隅の床面から若干上層から弥生時代前期の甑に使用した甕の完形品が潰れた形で出土した。

6号土坑（図版44—(2)・45—(1)、第82図）

6号墳の南東傍で検出した土坑で、群集する石組炉との重なりはあるが直接の重複ではなく他の遺構とは切り合っていない。関連する遺構としては出土した土器から2号住居と同じで2号竪穴住居に付属する土坑の可能性が推測される。

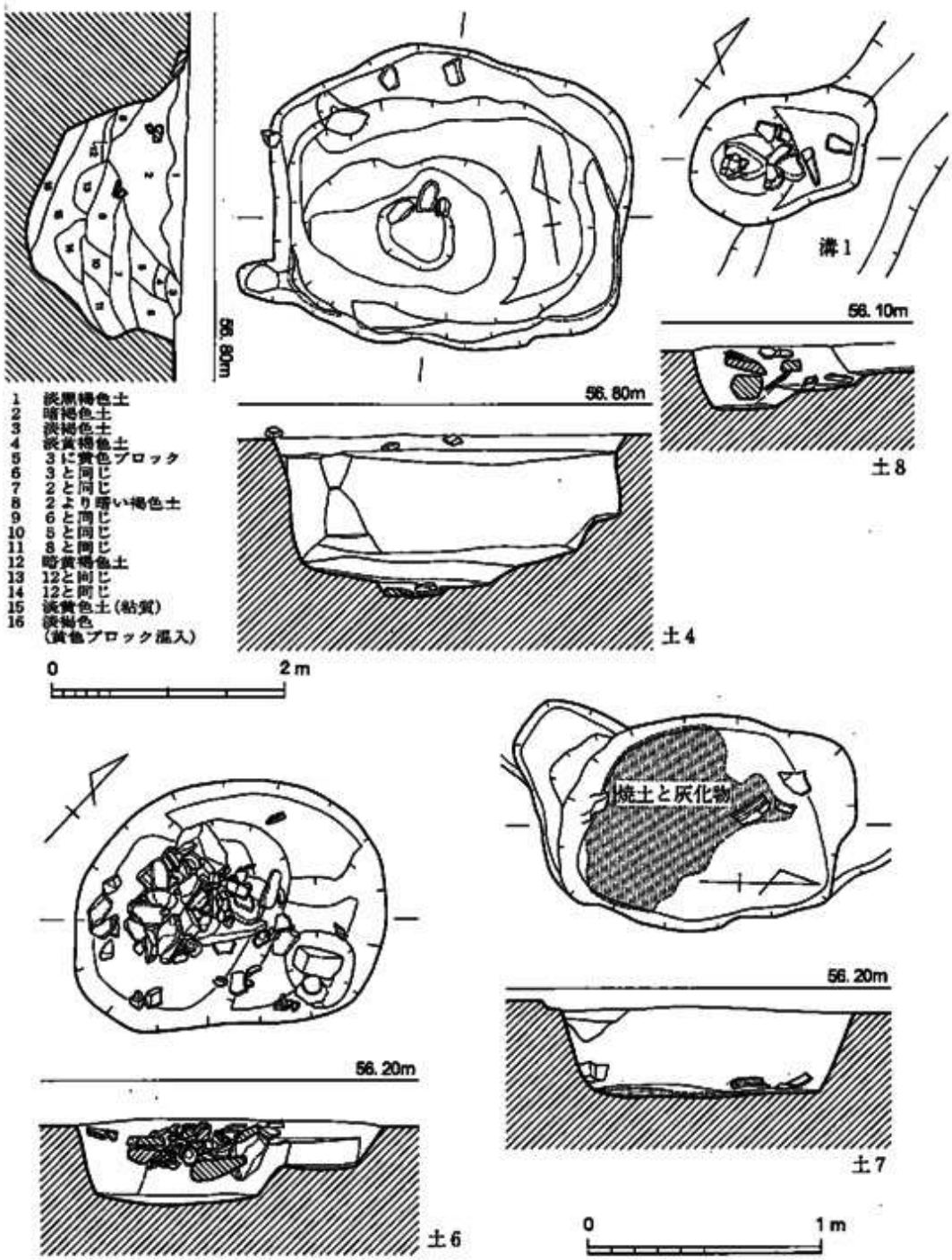
平面プランは不整円形を呈し、その大きさは1.35m×1.05m、底面は三段掘りで北東側にテラスを設けている。床までの深さは0.35mを測る。

内部には底面から10cm上層から検出面まで多数の石塊と土器が詰まっており、ある段階で投棄されたと考えられる。

出土遺物は、壺・広口壺・小壺型・甕・高坏・器台・蓋などがある。

7号土坑（図版45—(2)、第82図）

3号竪穴住居の南東傍で検出した土坑であるが、3号住居よりは時期が新しく、付属土坑で



第82図　4号・6号～8号土坑実測図（1/60・1/30）

はない。平面プランは不整形で、断面が長方形を呈する。

土坑の規模は、長さが1.25m、幅が0.93m、深さは0.4mを測り、南半分の底面には焼土と炭化物が厚い個所で5.0cmほど堆積していた。周囲の壁面は煤けていることと出土土器に二次火熱を受けたものがあることから土坑内で火を使ったと考えられる。

出土遺物は、甕と器台の破片の他、軽石が1点ある。

8号土坑（図版46—(1)、第82図）

5号墳の南側に位置する小形の土坑で、調査区内を南北に延びる溝1に東側を破壊されている。平面形状は不整形で、底面は二段掘りとなる。内部には河原石や板石が埋まっており、1点弥生土器の破片が出土したが図示できるものではない。規模は、0.7m×0.55m、深い所で0.25mを測る。

9号土坑（図版46—(2)、第83図）

溝1の西側で6号土坑の南東8.0mに位置し平面プランが隅丸方形に近い形状の土坑である。大きさは東西方向で1.30m、南北方向で1.05m、深さは0.35mを測り、断面逆台形を呈する。

出土遺物は、広口壺の口縁部片と焼けた粘土塊がある。

11号土坑（図版47—(1)・(2)、第83図）

3号竪穴住居跡の4.0m東側で検出した土坑で、縄文晩期の10号土坑（貯蔵穴）と重複している。しかし、調査時点で重複に気づかず一緒に調査したため、土坑の1/2を掘り過ぎた。この土坑からは、弥生時代中期初頭の甕が底面近くから出土しており、10号土坑より新しい。復原するとプランは円形で、径が0.5m、深さが0.18mに復原できる。

出土遺物は、甕・精製鉢型土器がある。

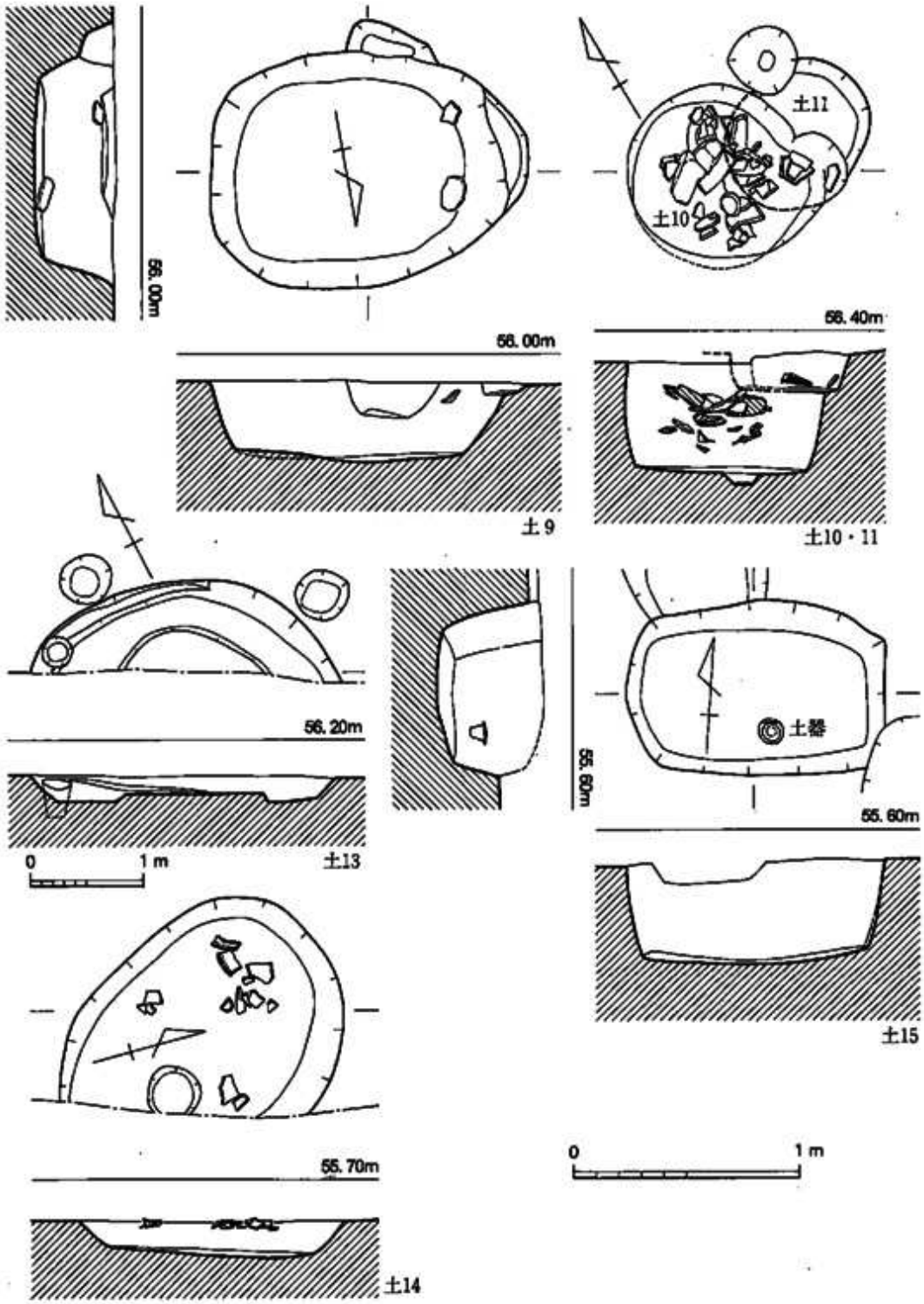
13号土坑（第83図）

4号墳の南で検出した土坑であるが、大半が調査区外のため全容が分からない。検出箇所は弧を描き壁際に幅0.3m、深さ0.1mの溝が巡り、底面中央は若干高くなる。

出土遺物もなく用途が分からない。

14号土坑（42—(1)、第83図）

調査区の南西隅で検出した土坑で一部調査区外になるが、平面プランが楕円形に近い形状になろう。出土土器から5号竪穴住居に付随すると推測され、重複する4号貯蔵穴より新しいが時期差はあまりない。幅は1.10m、深さは0.15mを測る。

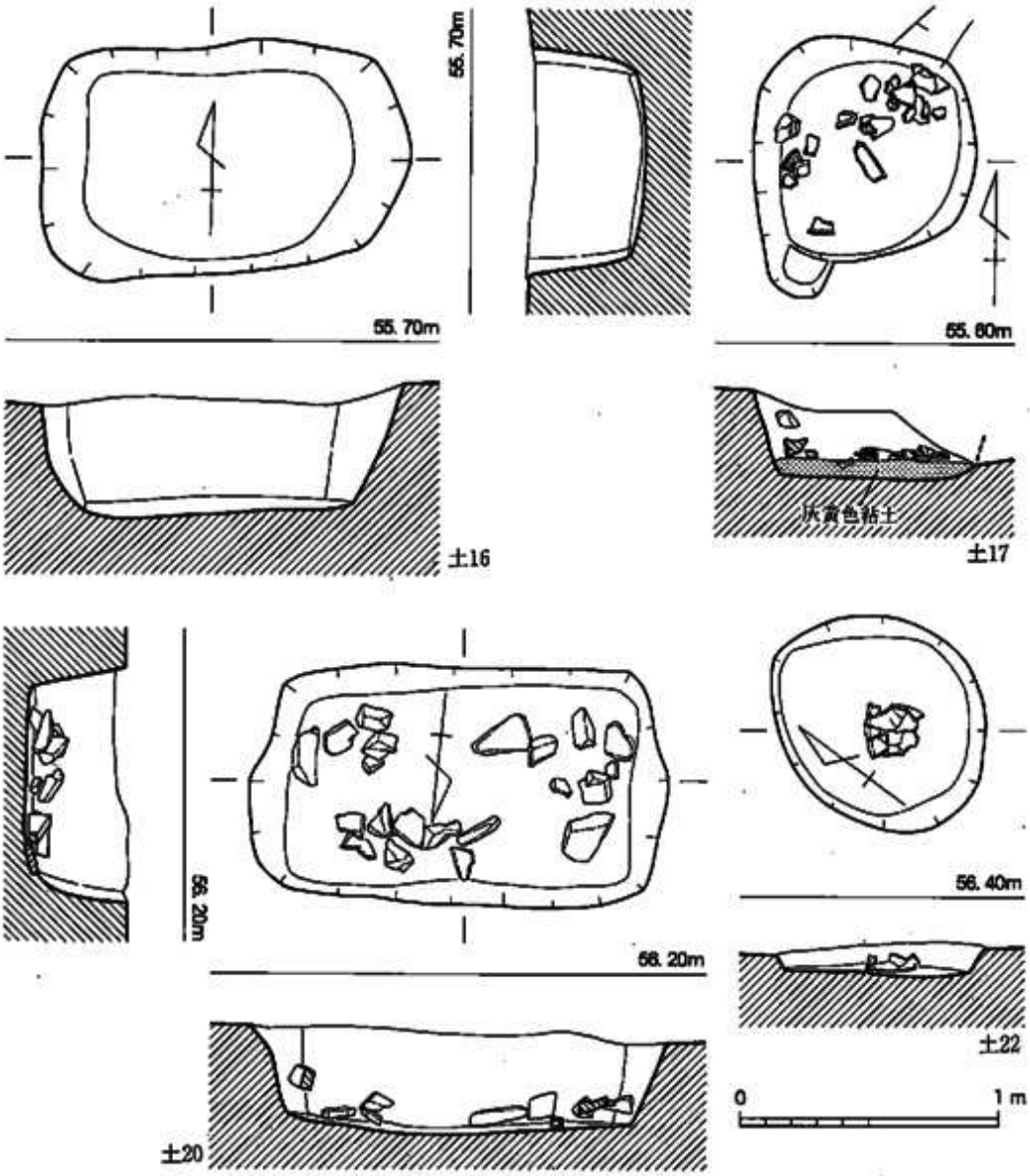


第83図　9号・11号・13号～15号土坑実測図（1/30・1/60）

遺物は底面より10cm上層から壷・甕・高坏が出土している。

15号土坑（図版48—(1)、第83図）

調査区の南西隅で検出した土坑で、５号竪穴住居と同時期であるが14土坑と５号住居の関係及び住居の1.50m北東に位置する16号土坑との関係を考えると別の住居に伴う可能性が強いと言える。



第84図　16号・17号・20号・22号土坑実測図（1/30）

平面プランは長方形で、長さが1.15m、幅が0.77m、深さが0.45mを測り、主軸を東西に向ける。出土遺物は、小型の甕の完形品が底面より10cm上層で出土している。

16号土坑（図版38—(1)、第84図）

調査区の南西側、6号竪穴住居との重複があり遺構の遺存状況が非常に悪いため新旧関係が把握できないが、出土土器の比較から住居が新しい。

平面プランは隅丸長方形に近い形状で、規模は長さが1.42m、幅が0.87m、深さは0.45m前後を測る。

出土遺物は弥生時代中期前葉の甕と甕の底部か蓋型土器の摘みの破片がある。

17号土坑（図版48—(2)、第84図）

17号墳（旧溝2）の周溝内で検出した土坑で、上部の約1/2が周溝で削平されている。平面プランは不整円形で、大きさは径が0.85m、現存での深さは0.35mを測る。

土坑の底面には厚さ5.0cmの灰黄色粘土を充填しており、直上に土器片と石塊が散在していた。底面に敷き詰めた粘土が何であるかは不明であるが、土器には二次火熱を受けたものがあり粘土には焼痕がないものの火を使ったことも考えられる。

出土遺物には、壺・甕がある。

18号土坑（付図）

17号墳の墳丘下で検出した不整形の浅い掘り込みで、調査時点で土器の出土があり土坑として扱ったが、形が整っていないことから遺構は図示していない。

出土遺物は、時期の異なる甕があり、ひとつは中期中頃のものである。

20号土坑（図版49—(1)、第84図）

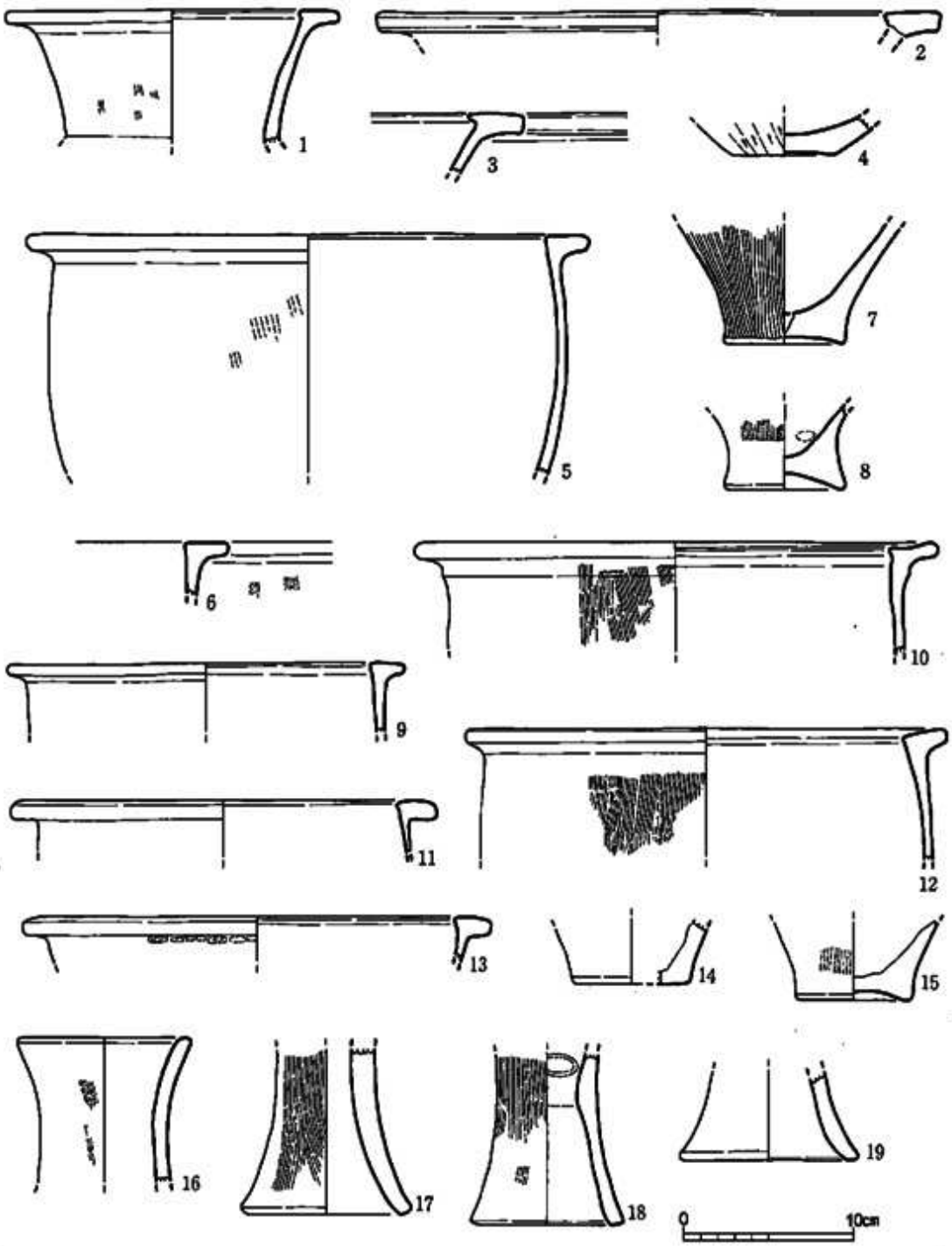
調査区の南西隅で検出した5号竪穴住居の北隣に位置する土坑で、平面形状が長方形を呈する。規模は長さが1.62m、幅は0.92m、底面の長さは1.32m、幅が0.75m、深さは0.4m前後を測る。

底面直上にはほぼ全面に石塊が散在しているが出土土器はなく、土坑の用途が不明であるが墓の可能性もある。

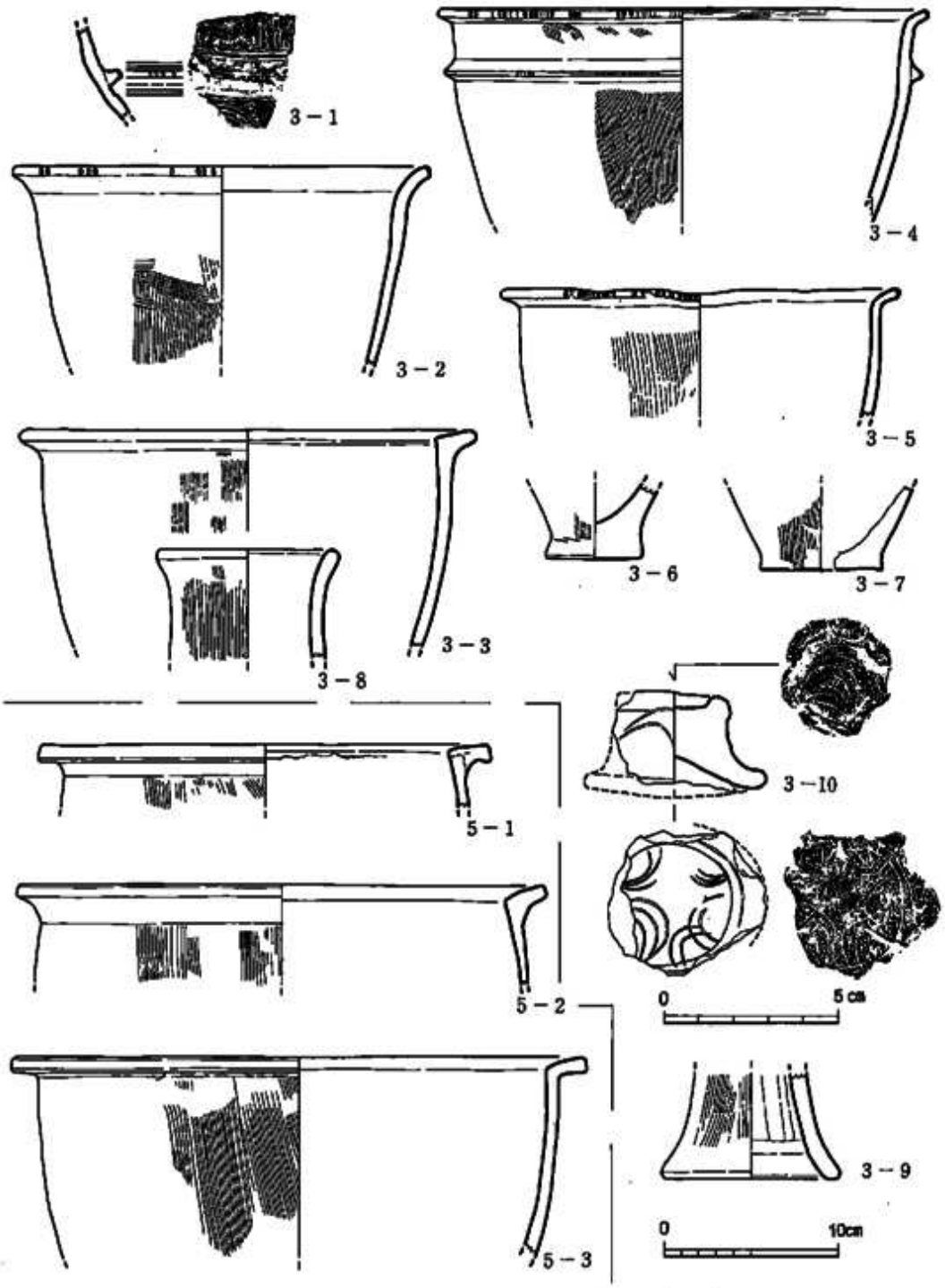
22号土坑（図版49—(2)、第84図）

8号墳の墳丘下で検出した小形の円形プランの土坑である。大きさは径が0.8m、深さは0.1m前後を測る。底面中央から弥生時代前期の甕が横たわっていた。（佐々木）

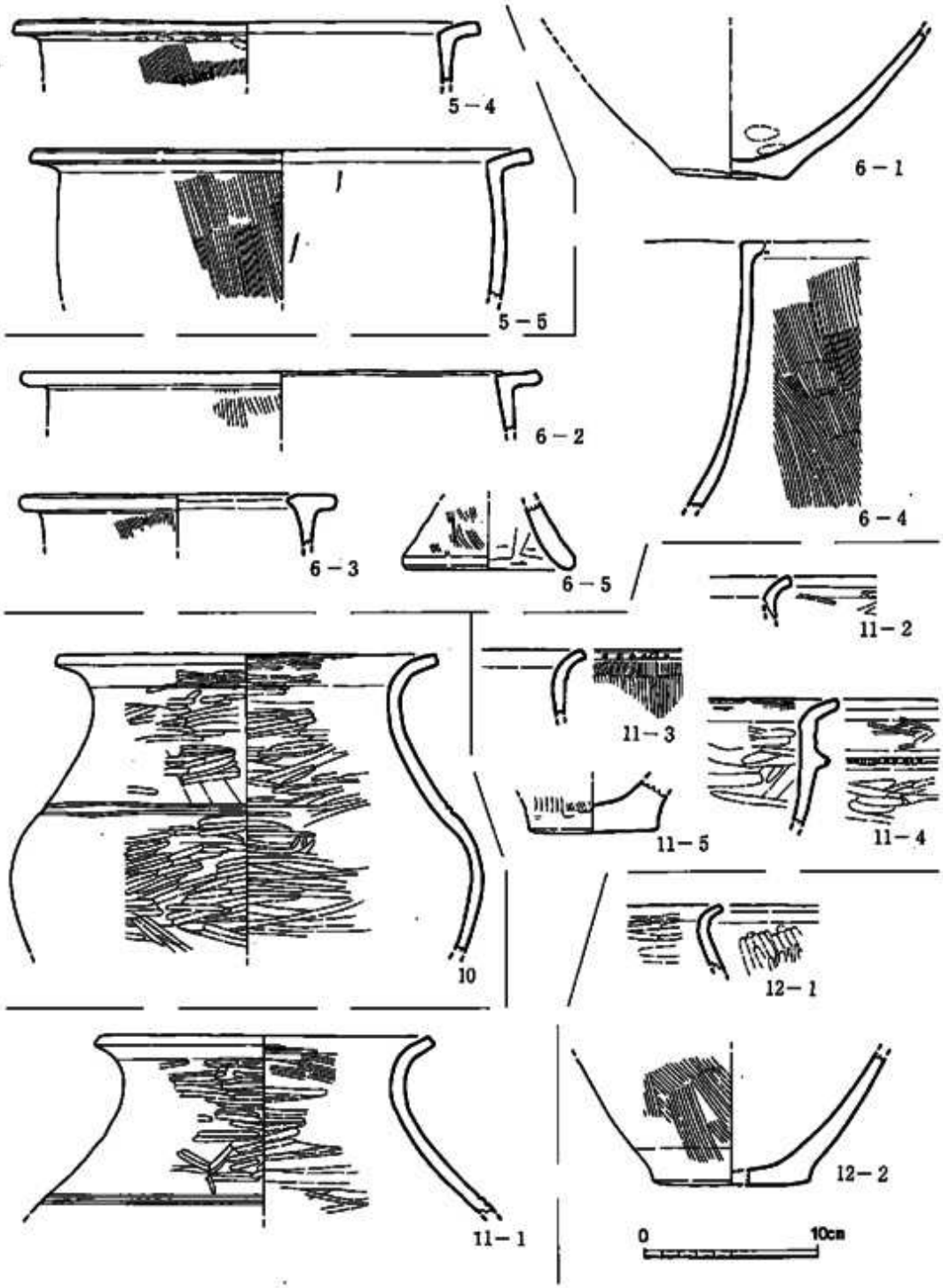
（4）出土遺物



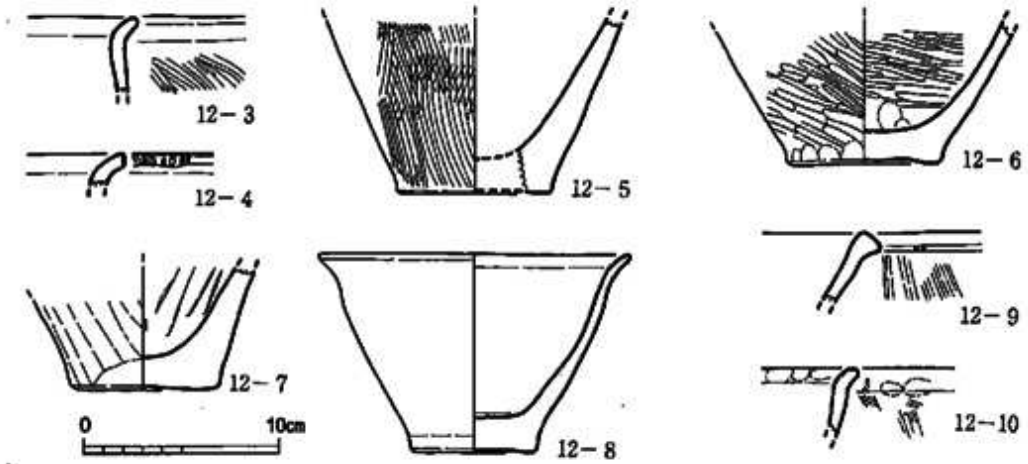
第85図　2号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第86図　3号・5号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第87図　5号・6号・10号～12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



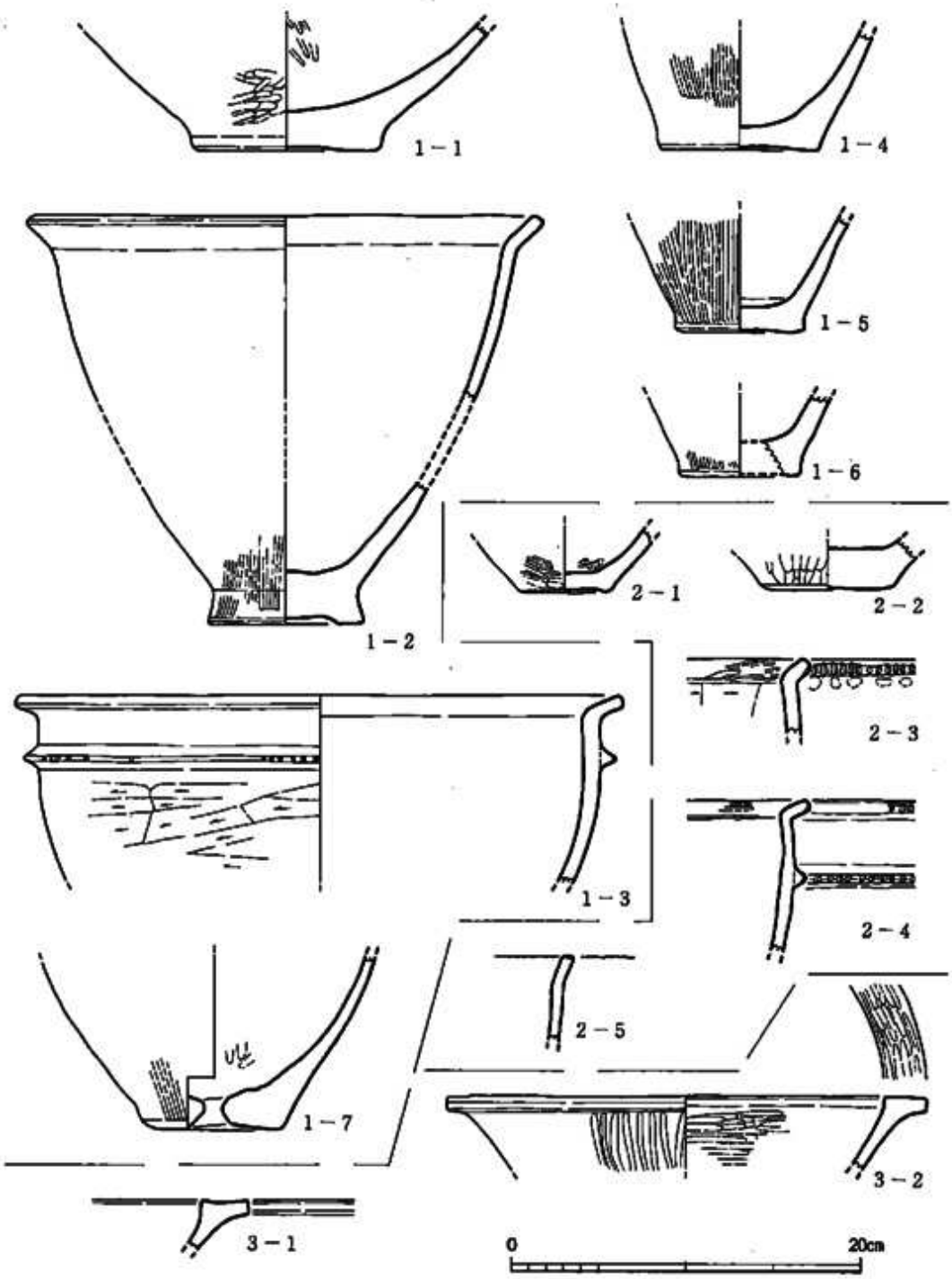
第88図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

土　器（図版50～53、第85～97図）

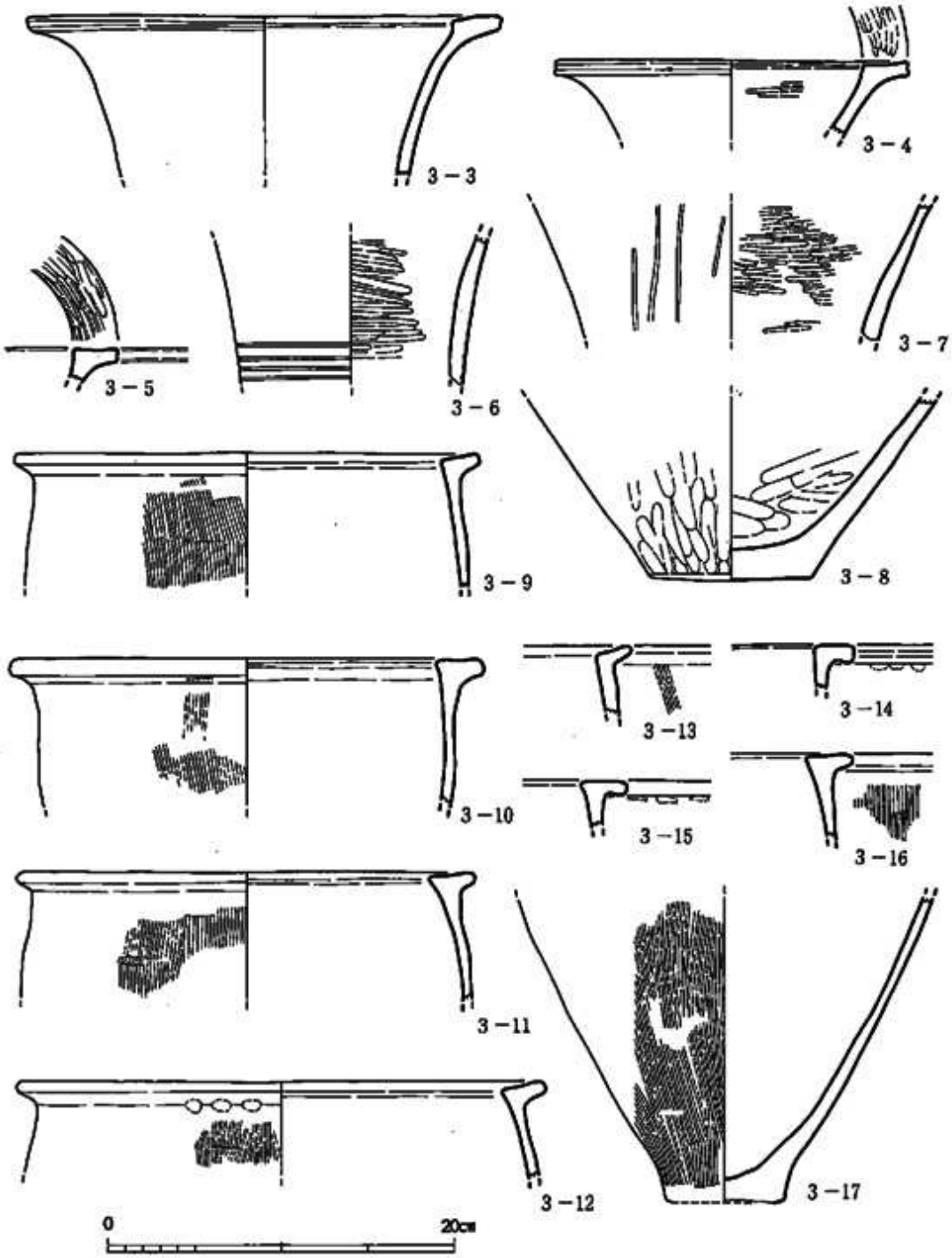
出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

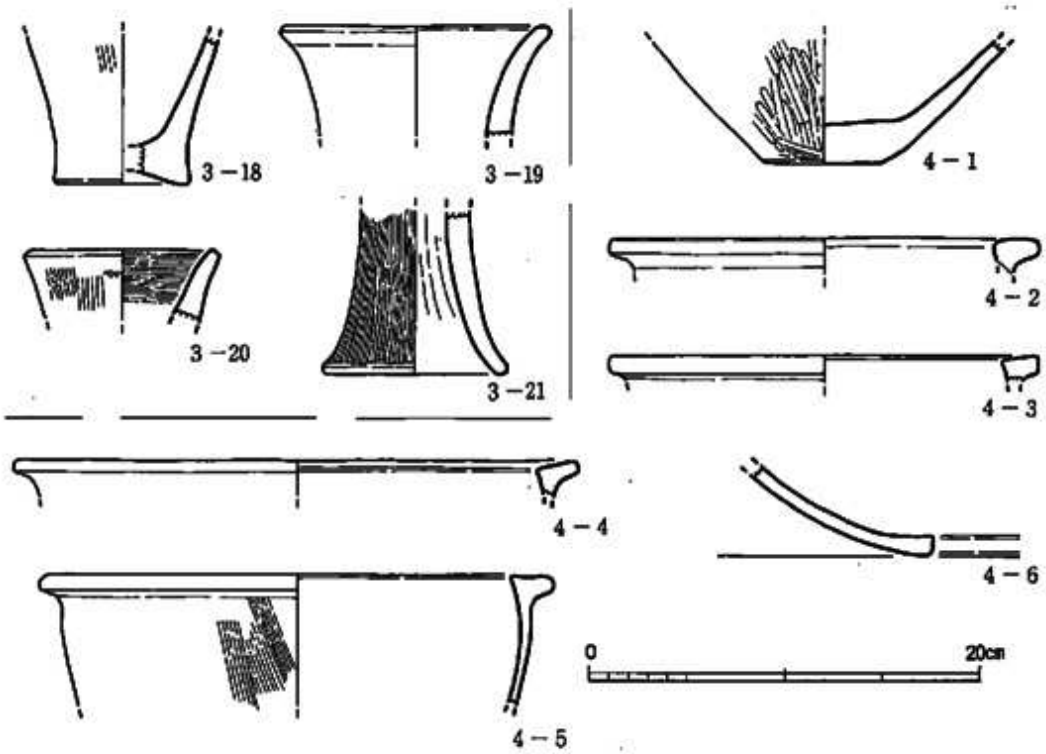
挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第85図1	2号住居跡	弥生土器 壺	①19.5 ② ③	未発達の鋤先口縁部で頸部は外反しない。肩部以下欠損。	外－ハケ後ナデ 内－ナデ	色調－淡橙褐色
第85図2	2号住居跡	弥生土器 壺	①33.2 ② ③	未発達の鋤先口縁部の小片。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	色調－暗茶橙褐色
第85図3	2号住居跡	弥生土器 壺	① ② ③	鋤先口縁部の小片。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	色調－淡橙褐色
第85図4	2号住居跡	弥生土器 壺	① ② 6.0 ③	やや器壁の厚い上げ底で精製粘土使用。	外－擦過 内－ナデ	色調－茶褐色 覆土下層から出土
第85図5	2号住居跡	弥生土器 甕	①33.0 ② ③	逆「L」字状口縁部で頸部が若干内傾し胴部がやや張る。胴下半は欠損。	外－ハケが磨耗 内－ナデ	色調－淡橙褐色
第85図6	2号住居跡	弥生土器 壺	① ② ③	逆「L」字状の口縁部片。	外－ハケ後ナデ 内－ナデ	色調－淡橙褐色
第85図7	2号住居跡	弥生土器 壺	① ② 7.2 ③	やや上げ底の底部片。	外－ハケ 内－ナデ	取り上げNO 1 色調－淡橙色
第85図8	2号住居跡	弥生土器 壺	① ② 7.1 ③	抉れるような上げ底で上部は器壁が薄い。	外－ハケ 内－ナデ	床面出土 色調－淡橙褐色
第85図9	2号住居跡	弥生土器 壺	①23.3 ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部で頸部は直上。	外－ハケ後ナデ 内－ナデ	色調－淡橙褐色



第89図　1号～3号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）



第90図　3号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

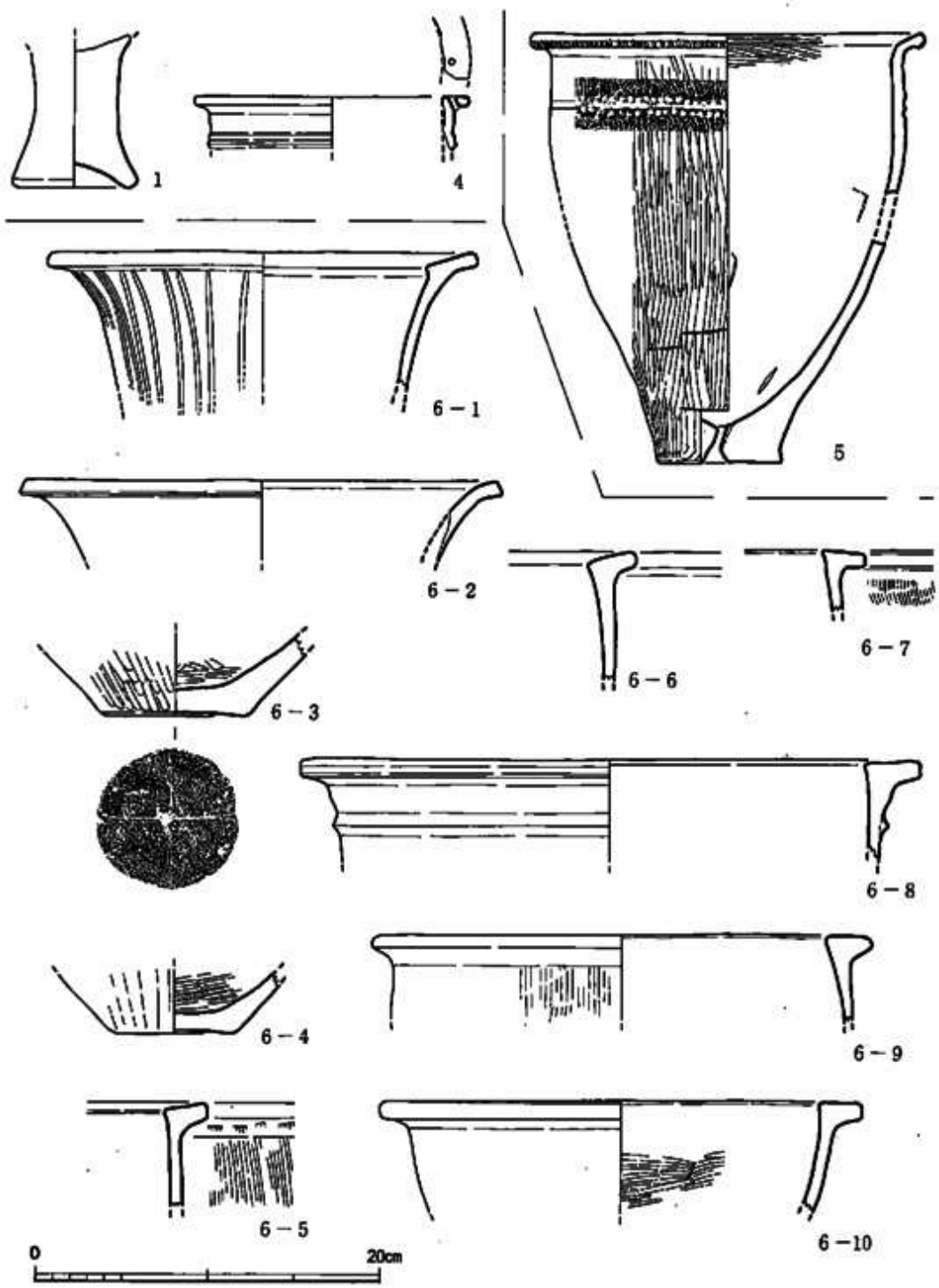


第91図　3号・4号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

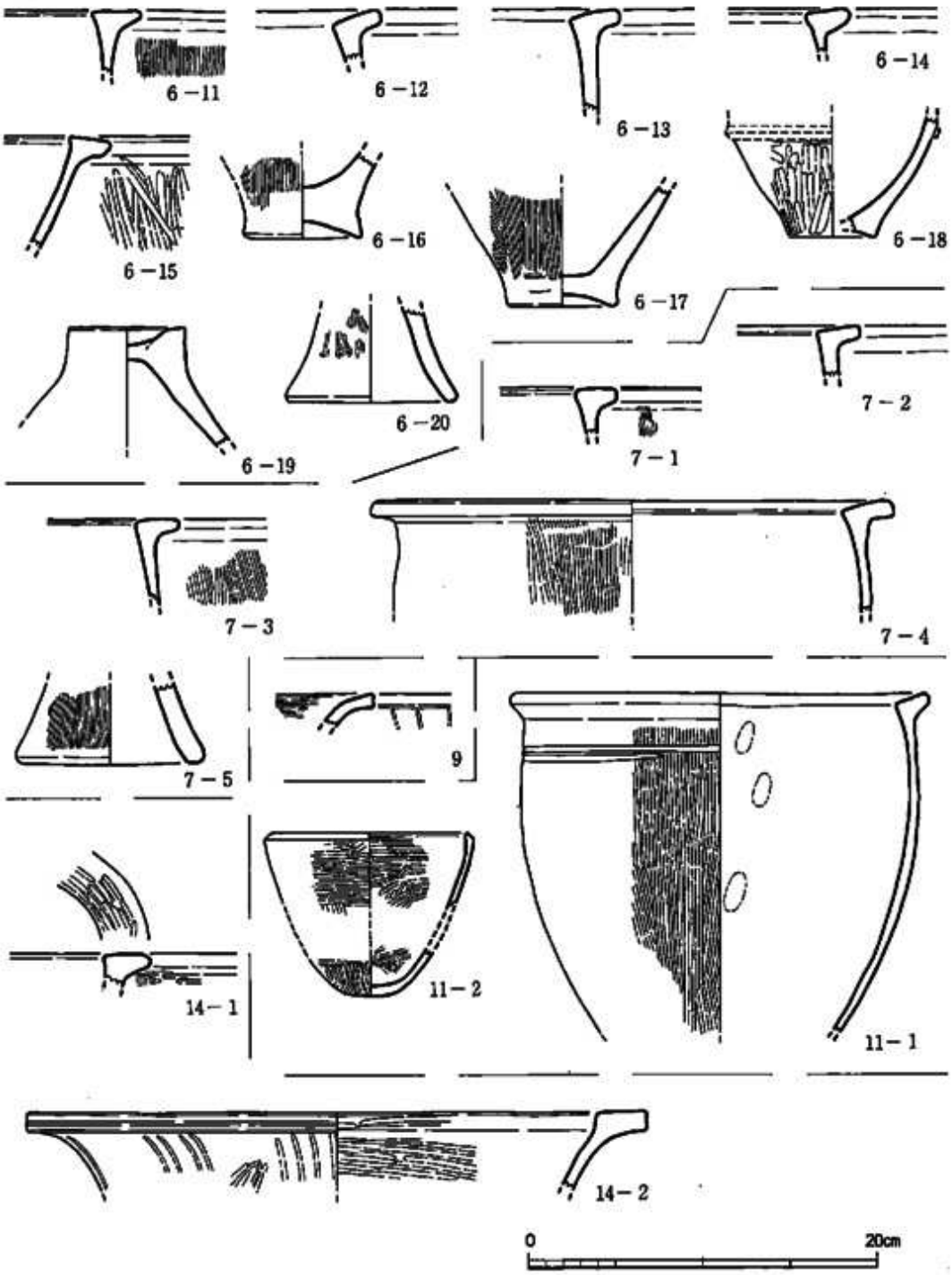
出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

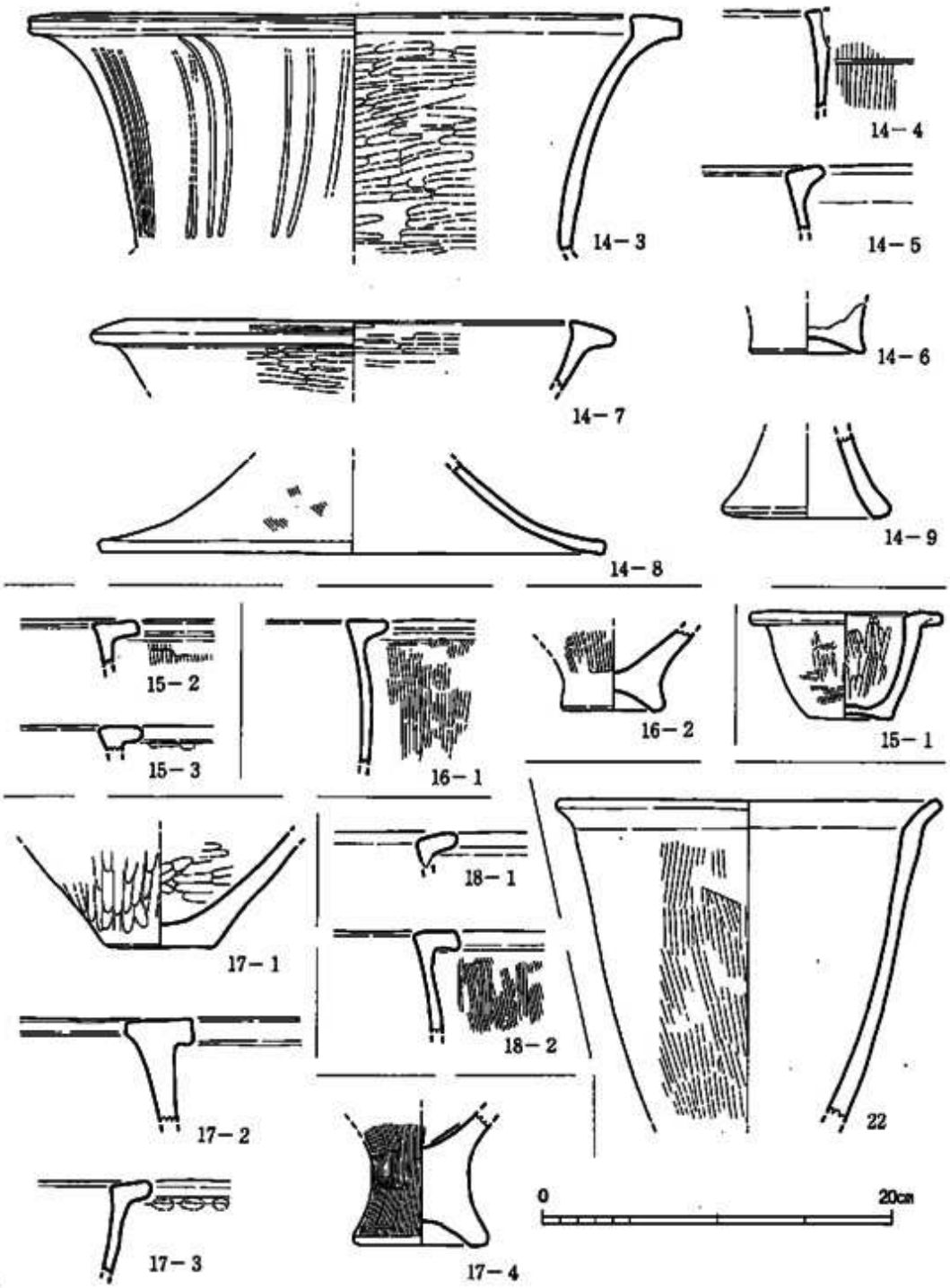
挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第85図10	2号住居跡	弥生土器 甕	①30.7 ② ③	発達した逆「L」字状の口縁部で平坦面が僅かに内傾。頸部は直上。	外ーハケ 内ーナデ	色調ー淡橙褐色
第85図11	2号住居跡	弥生土器 甕	①25.0 ② ③	逆「L」字状に肥厚する口縁部で内傾する頸部の器壁は薄い	外ーハケ 内ーナデ	取り上げNO4 色調ー橙褐色
第85図12	2号住居跡	弥生土器 甕	①28.2 ② ③	逆「L」字状の口縁部で口縁上面が内傾するタイプ。頸部も内傾。	外ーハケ 内ーナデ	色調ー淡橙褐色
第85図13	2号住居跡	弥生土器 鉢か高坏	①27.5 ② ③	肥厚する逆「L」字状の口縁部片。	外ーナデ 内ーナデ	色調ー淡橙褐色
第85図14	2号住居跡	弥生土器 甕	① 6.9 ② ③	煮炊きに使用されたためか器面が剥離し灰色に変色。	外ー磨耗 内ー磨耗	
第85図15	2号住居跡	弥生土器 甕	① 6.8 ② ③	上げ底の底部で、二次火熱を受け器面が剥離と緑灰色に変色。	外ーハケ 内ー磨耗	



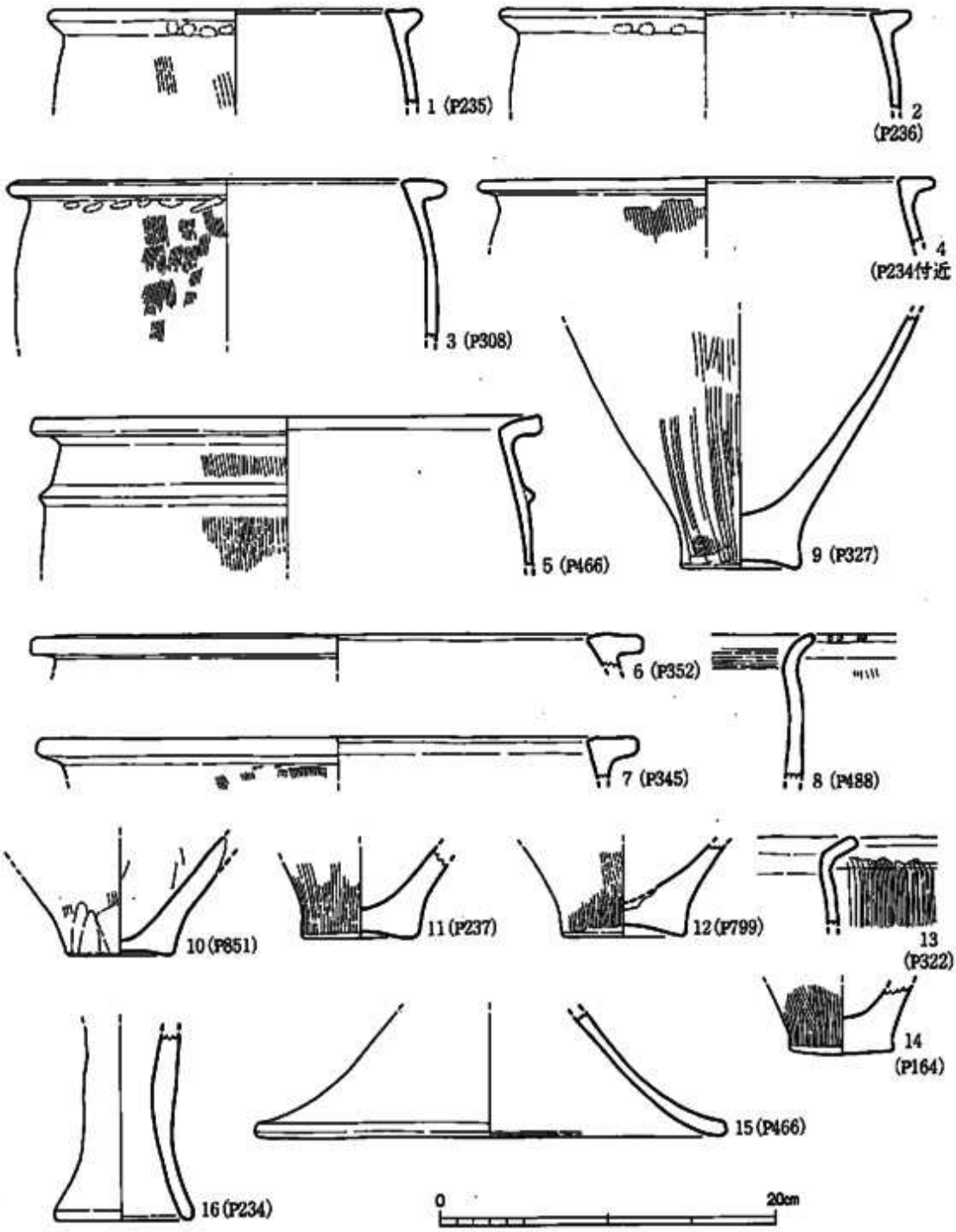
第92図　1号・4号～6号土坑出土土器実測図（1/4）



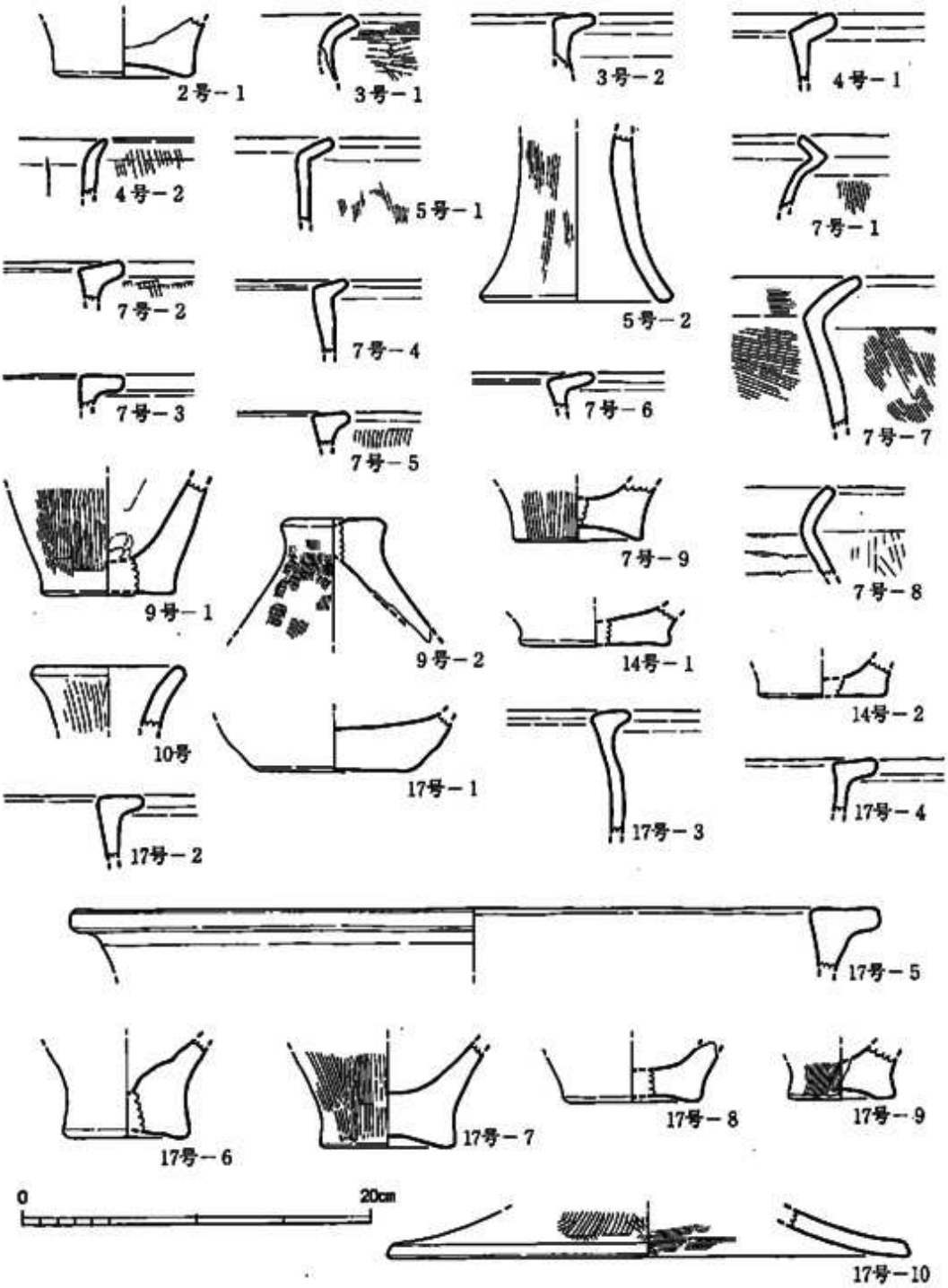
第93図　6号・7号・9号・11号・14号土坑出土土器実測図（1/4）



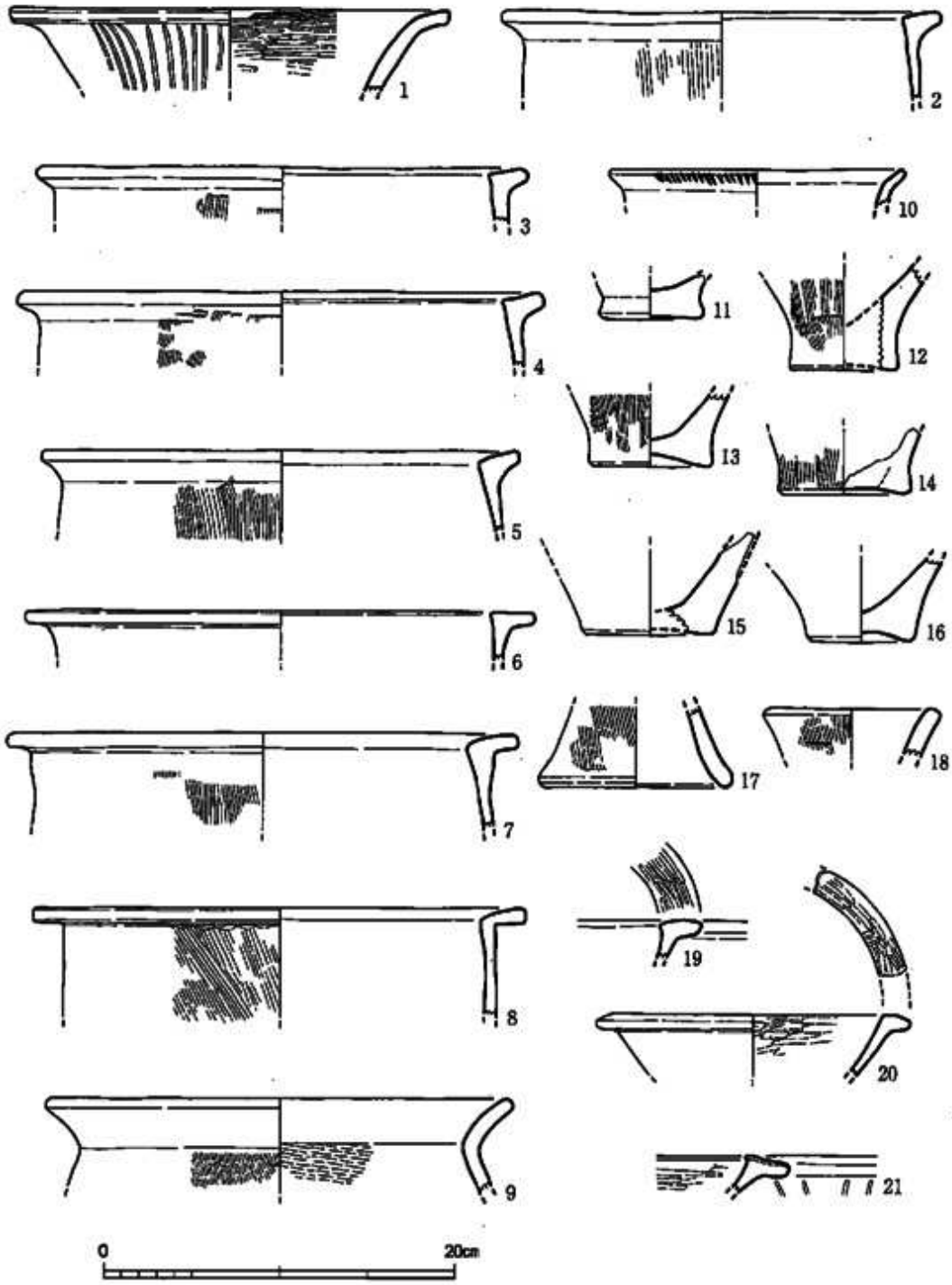
第94図　14号～18号・22号土坑出土土器実測図（1/4）



第95図　ピット出土土器実測図（1/4）



第96図　古墳周溝内及び掘方内出土土器実測図（1/4）



第97図　その他の出土土器実測図（1/4）

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第85図16	2号住居跡	弥生土器 器　台	①10.2 ② ③	受け部と裾部が同径のタイプの器台。	外－ハケが磨耗 内－ナデ	二次火熱 色調－橙褐色
第85図17	2号住居跡	弥生土器 器　台	① ②10.0 ③	細みのタイプで器壁が厚い。	外－ハケ 内－ナデ	二次火熱 色調－淡橙褐色
第85図18	2号住居跡	弥生土器 器　台	① ② 9.0 ③	細みでスマートなタイプで内側が強いナデで器壁を薄く作る。	外－ハケが磨耗 内－ナデ	外面二次火熱 色調－淡橙褐色
第85図19	2号住居跡	弥生土器 器　台	① ②10.2 ③	細みの器台の裾部片。	外－ナデ 内－ナデ	色調－淡橙色
第86図3－1	3号住居跡	弥生土器 壺	① ② ③	刻みのある1条の断面台形凸帯を挟んで2条の沈線と4条縦沈線、複線山形文の装飾。	外－ナデ 内－ナデ	精製粘土使用 色調－灰黄色 覆土出土
第86図3－2	3号住居跡	弥生土器 甕	①24.0 ② ③	如意状口縁部で胴下半が欠損。口唇部に不揃いの刻み。	外－ナデとハケ 内－ナデ	色調－暗橙茶褐色 二次火熱か
第86図3－3	3号住居跡	弥生土器 甕	①26.2 ② ③	未発達の「L」字状口縁部で上面が内傾。胴下半欠損。	外－ハケとナデ 内－ナデ	色調－淡橙茶褐色から黒色。二次火熱、覆土出土
第86図3－4	3号住居跡	弥生土器 甕	①28.2 ② ③	如意状口縁部で口唇部に不揃いの刻み。口縁下にも不揃いの刻みの凸帯。胴部下半欠損。	外－ハケとナデ 内－口唇部ハケ ナデ	色調－暗橙褐色 覆土から出土
第86図3－5	3号住居跡	弥生土器 甕	①22.9 ② ③	如意状口縁部で口唇部に不揃いの刻み。胴部下半欠損。	外－ハケとナデ 内－ナデ	色調－暗橙茶褐色から黒色。二次火熱、覆土出土
第86図3－6	3号住居跡	弥生土器 甕	① ② 5.4 ③	細みで厚手の底部片。	外－ハケ後ナデ 内－ナデ	色調－茶橙褐色 二次火熱、覆土出土
第86図3－7	3号住居跡	弥生土器 甕	① ② 7.0 ③	底部に焼成後の穿孔（径1.8cm）し瓶に使用。	外－ハケ 内－熱で剥離	色調－橙褐色 覆土出土
第86図3－8	3号住居跡	弥生土器 器　台	①10.5 ② ③	細みの器台で下半欠損。	外－ハケ 内－ナデ	色調－淡橙褐色 覆土から出土
第86図3－9	3号住居跡	弥生土器 器　台	① ②10.2 ③	緩く開脚し内面に稜をなす細みの器台で上半を欠損。	外－ハケ 内－縦ナデ	色調－淡橙褐色 覆土から出土
第86図3－10	3号住居跡	弥生土器 蓋形土器	① 3.2 ② 5.2 ③ 3.0	天井と内面に複数の山形文。内面は二重の円内に不揃いの配置。側面にも不明線刻。	外－ナデ 内－ナデ	色調－淡茶褐色 覆土出土 精製粘土
第86図5－1	5号住居跡	弥生土器 甕	①26.0 ② ③	厚くやや未発達の逆「L」字状口縁部片で上面が若干内傾し頸部の内傾。	外－ハケとナデ 内－ナデ	色調－白黄褐色

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第86図5－2	5号住居跡	弥生土器 甕	①30.4 ② ③	上面の内傾度の強い逆「L」字状の口縁部で頸部との接合部が厚い。	外－ハケとナデ 内－ナデ	色調－淡白黄褐色
第86図5－3	5号住居跡	弥生土器 甕	①31.0 ② ③	逆「L」字状の口縁に上面が内傾。肩部は直上。胴部下半は欠損。	外－ハケ 内－ナデ	色調－黄茶褐色
第87図5－4	5号住居跡	弥生土器 壺	①27.0 ② ③	上面が内傾し長い逆「L」字状の口縁部の小片。	外－ハケ 内－ナデ	色調－白黄褐色
第87図5－5	5号住居跡	弥生土器 甕	①29.0 ② ③	上面が内傾し長い逆「L」字状の口縁部で肩部が若干内傾。	外－粗いハケ 内－ナデ	色調－黄茶褐色
第87図6－1	6号住居跡	弥生土器 壺	① ② 6.4 ③	上げ底の壺の胴部下半片で精製粘土を使用。	外－ナデ 内－ナデ	取り上げNo.1 色調－焦げ茶色
第87図6－2	6号住居跡	弥生土器 甕	①30.0 ② ③	発達した逆「L」字状の口縁部片。	外－ハケ 内－ナデ	色調－淡白黄褐色
第87図6－3	6号住居跡	弥生土器 甕	①18.2 ② ③	〔T〕字状の口縁部の小片。	外－ハケ 内－ナデ	色調－赤褐色 二次火熱
第87図6－4	6号住居跡	弥生土器 甕	① ② ③	発達した逆「L」字状の口縁部で先端部は欠損し胴部は張らない。	外－ハケ 内－ナデ	色調－焦げ茶色 二次火熱
第87図6－5	6号住居跡	弥生土器 文　脚	① ②10.0 ③	器壁の厚い脚部片で作りが粗い。	外－粗いハケ 内－ナデ	色調－淡灰黄色 二次火熱
第87図10	10号住居跡	弥生土器 壺	①22.0 ② ③	所謂前期末の壺で肩部に2条の沈線が巡る。胴部上半に最大径がある。	外－ヘラ磨き 内－ヘラ磨き	色調－焦げ茶色 二次火熱 覆土下層出土
第87図11－1	11号住居跡	弥生土器 壺	①19.6 ② ③	10よりも口径の小さなタイプで外反度も鈍く肩部以下欠損。肩部に2条の沈線。	外－ヘラ磨き 内－ヘラ磨き－部ハケ	取り上げNO.2 色調－焦げ茶色
第87図11－2	11号住居跡	弥生土器 壺	① ② ③	器壁の薄い小型壺の口縁部小破片。	外－ヘラ磨き	色調－茶褐色
第87図11－3	11号住居跡	弥生土器 甕	① ② ③	如意状口縁部で口唇部に工具小口の刻み。	外－ハケ 内－ナデ	色調－焦げ茶色 二次火熱
第87図11－4	11号住居跡	弥生土器 甕	① ② ③	如意状口縁部で口縁下に刻みを有す三角凸帯。	外－ヘラ磨き 内－ヘラ磨き	色調－黄茶褐色
第87図11－5	11号住居跡	弥生土器 甕	① ② 7.4 ③	やや厚手の底部。	外－ハケ 内－ナデ	色調－淡茶褐色 二次火熱

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第87図12－1	12号住居跡	弥生土器 壺	① ② ③	前期の小型壺の小片。	外－ヘラ磨き 内－ヘラ磨き	色調－白黄褐色 覆土から出土
第87図12－2	12号住居跡	弥生土器 壺	① ② 9.0 ③	壺の胴下半の破片。	外－ハケ 内－ナデ	色調－灰白茶色 内面こげ茶で二次火熱
第88図12－3	12号住居跡	弥生土器 甕	① ② ③	如意状の甕の口縁部片で口唇部には刻みはない。	外－ハケ 内－ナデ	色調－焦げ茶色 二次火熱
第88図12－4	12号住居跡	弥生土器 甕	① ② ③	口唇部に不規則な刻みを付ける如意状口縁甕の小片。		色調－黄茶褐色
第88図12－5	12号住居跡	弥生土器 甕	① ② 8.0 ③	胴部から底部にかけて直に細まる前期の底部片。	外－ハケ 内－ナデ	色調－茶～焦げ茶 覆土中から出土 二次火熱
第88図12－6	12号住居跡	弥生土器 甕か壺	① ② 8.0 ③	若干上げ底でやや丸みがあり器面調整から壺の可能性がある。	外－ヘラ磨き 内－ヘラ磨き	色調－焦げ茶色 覆土中から出土
第88図12－7	12号住居跡	弥生土器 甕	① ② 7.6 ③	やや細みで器壁の厚い底部。	外－擦過 内－ナデ	色調－淡灰黄褐色
第88図12－8	12号住居跡	弥生土器 鉢	①16.0 ② 6.5 ③10.1	僅かに外反する口縁に張りの鈍い胴部、分厚い底部の鉢で1／2残存。	外－磨耗 内－ナデ	取り上げNo 2 色調－橙褐色
第88図12－9	12号住居跡	弥生土器 鉢	① ② ③	三角口縁部の小片。甕の可能性がある。	外－ハケ 内－ナデ	色調－白黄褐色 覆土中から出土
第88図12－10	12号住居跡	弥生土器 鉢	① ② ③	如意状口縁の鉢の小片。	外－ハケと指圧痕 内－ナデ	色調－白黄褐色 覆土から出土
第89図1－1	1号貯蔵穴	弥生土器 壺	① ②10.7 ③	若干上げ底の前期の壺片。	外－ヘラ磨き 内－ヘラ磨き	色調－暗茶褐色 覆土下層出土 内外面煤付着
第89図1－2	1号貯蔵穴	弥生土器 甕	①29.5 ② 8.9 ③23.4	上方に若干開く口縁部で復原すると胴部は僅かに張る。底部は厚く上げ底。	外－ハケか 内－ナデ	色調－茶褐色で外面煤付着 覆土下層出土
第89図1－3	1号貯蔵穴	弥生土器 甕	①34.8 ② ③	如意状口縁の器高の低いタイプの甕で口縁下に不規則の刻みを配する凸帯。胴部丸み。	外－ナデと擦過 内－ナデ	色調－明橙茶褐色 覆土下層出土
第89図1－4	1号貯蔵穴	弥生土器 甕	① ② 9.3 ③	若干上げ底で胴下半は僅かに丸み。	外－ハケとナデ 内－ナデ	色調－暗茶褐色 二次火熱 下層覆土出土
第89図1－5	1号貯蔵穴	弥生土器 甕	① ② 7.4 ③	若干上げ底で胴部下半の器壁は直に作る。	外－粗いハケ 内－ナデ	色調－淡橙褐色

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第89図1－6	1号貯蔵穴	弥生土器 壺	① ② 7.0 ③	やや径の小さな底部片で、器壁が厚い。	外－ハケ後ナデ 内－ナデ	色調－茶褐色 覆土下層出土
第89図1－7	1号貯蔵穴	弥生土器 甕	① ② 8.4 ③	底部器壁が厚く、焼成前に孔を穿つ。胴部には丸みがある。	外－ハケが磨耗 内－ナデ	色調－淡灰橙褐色 二次火熱
第89図2－1	2号貯蔵穴	弥生土器 壺	① ② 7.7 ③	若干上げ底の壺底部で精製品。	外－ヘラ磨き 内－ナデ	色調－灰茶色
第89図2－2	2号貯蔵穴	弥生土器 壺	① ② ③	器壁の厚い壺の底部片。	外－ヘラ磨き 内－ナデ	色調－暗黄茶褐色
第89図2－3	2号貯蔵穴	弥生土器 甕	① ② ③	如意状口縁の口唇部に刻みを密に配する小破片。	外－一部ナデ 内－ヘラ磨きと擦過	色調－暗茶褐色 二次火熱で煤が付着
第89図2－4	2号貯蔵穴	弥生土器 甕	① ② ③	如意状口縁部で、口唇部に不揃いの刻みを配する。口縁下に刻みのある三角凸帯貼付。	外－ナデ 内－ナデ 口内－ヘラ磨き	色調－暗橙茶褐色 二次火熱で外面煤付着
第89図2－5	2号貯蔵穴	弥生土器 甕	① ② ③	僅かに外反する如意状口縁部の小片で口唇部に浅い刻み。	外－ナデ 内－ナデ	色調－暗橙茶褐色 二次火熱で外面煤が付着
第89図3－1	3号貯蔵穴	弥生土器 壺	① ② ③	未発達の鋤先口縁部片で上面がやや窪む。	外－ナデ 内－ナデ	色調－淡橙褐色
第89図3－2	3号貯蔵穴	弥生土器 壺	①27.5 ② ③	未発達の鋤先口縁部片。精製品。	外－ヘラによる暗文 内－ヘラ磨き	色調－暗灰色
第90図3－3	3号貯蔵穴	弥生土器 壺	①27.4 ② ③	鋤先口縁部に移行する初源的な形態の口縁部で粘土貼りつけ。	外－ナデ 内－ナデ	色調－白赤褐色
第90図3－4	3号貯蔵穴	弥生土器 壺	①20.5 ② ③	未発達の鋤先口縁部で上面が若干内傾。小破片のため口径が不明瞭。	外－ヘラ磨きか 内－ヘラ磨き	色調－淡橙褐色
第90図3－5	3号貯蔵穴	弥生土器 壺	① ② ③	未発達の鋤先口縁部の小片。	外－ヘラ磨き 内－？	色調－淡茶褐色
第90図3－6	3号貯蔵穴	弥生土器 壺	① ② ③	未発達の鋤先口縁壺の頸部破片で下半に4条の沈線。精製土器。	外－ナデ 内－ヘラ磨き	色調－淡橙褐色
第90図3－7	3号貯蔵穴	弥生土器 壺	① ② ③	未発達の鋤先口縁壺の頸部片で精製土器。	外－ヘラの暗文 内－ヘラ磨き	色調－淡橙褐色
第90図3－8	3号貯蔵穴	弥生土器	① ② 9.5 ③	やや器壁の厚い壺の底部。	外－ヘラ磨き 内－ヘラ磨き	色調－暗茶褐色～黒色 黒塗りか

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第90図3－9	3号貯蔵穴	弥生土器 甕	①26.9 ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部で上面が内傾し頸部も内傾する。	外－ハケ 内－ナデ	色調－白橙褐色
第90図3－10	3号貯蔵穴	弥生土器 甕	①27.4 ② ③	逆「L」字状の口縁部で口縁の器壁が厚い。	外－ハケ 内－ナデ	色調－淡橙褐色 外面二次火熱で煤が付着
第90図3－11	3号貯蔵穴	弥生土器 甕	①25.5 ② ③	頸部の内傾する逆「L」字状口縁部。	外－ハケ 内－ナデ	色調－白橙茶色 二次火熱
第90図3－12	3号貯蔵穴	弥生土器 甕	①30.6 ② ③	上面が内傾する逆「L」字状口縁部片で肩部が張る。17と同一個体か。器壁が薄い。	外－ハケ 内－ナデ	色調－淡橙褐色
第90図3－13	3号貯蔵穴	弥生土器 甕	① ② ③	未発達の逆「L」字状の口縁部の小片で上面が内傾。	外－ハケ 内－ナデ	色調－淡橙褐色
第90図3－14	3号貯蔵穴	弥生土器 甕	① ② ③	口縁部の器壁が厚い逆「L」字状の口縁部の小片。		色調－淡橙褐色
第90図3－15	3号貯蔵穴	弥生土器 甕	① ② ③	やや発達した逆「L」字状口縁部片。		色調－暗橙茶褐色 二次火熱か
第90図3－16	3号貯蔵穴	弥生土器 甕	① ② ③	逆「L」字状口縁部の小片。	外－ハケ 内－ナデ	色調－淡橙褐色
第90図3－17	3号貯蔵穴	弥生土器 甕	① ② 6.8 ③	径の小さな底部で、全体に器壁が薄い。	外－ハケ 内－ナデ	色調－淡橙褐色 外面全体に煤が付着
第91図3－18	3号貯蔵穴	弥生土器 甕	① ② 7.0 ③	径の小さな細みの底部で上げ底。	外－ハケ後ナデ 内－ナデ	色調－淡橙褐色
第91図3－19	3号貯蔵穴	弥生土器 器　台	①13.8 ② ③	細みの器台の口縁部片。	外－ナデ 内－ナデ	色調－暗黄茶褐色 二次火熱か
第91図3－20	3号貯蔵穴	弥生土器 器　台	①10.0 ② ③	細みで外反度の鈍い口縁部の器台片。	外－ハケ 内－ハケ	色調－淡橙褐色
第91図3－21	3号貯蔵穴	弥生土器 器　台	① ② 9.5 ③	緩く開脚する器台の下半部でやや器壁が厚い。	外－ハケ 内－タテナデ	
第91図4－1	4号貯蔵穴	弥生土器 壺	① ② 5.9 ③	未発達の鋤先口縁壺の底部で底部は厚く作る。	外－ヘラ磨き 内－ナデ	色調－淡橙褐色
第91図4－2	4号貯蔵穴	弥生土器 壺	①22.0 ② ③	短い逆「L」字状の口縁部。	外－磨耗 内－磨耗	色調－黄茶褐色

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第91図4－3	4号貯蔵穴	弥生土器 甕	①22.0 ② ③	2と同タイプの口縁部片で上面が若干内傾する。	外－磨耗 内－磨耗	色調－黄茶褐色
第91図4－4	4号貯蔵穴	弥生土器 甕	①29.0 ② ③	口縁上面の傾斜が著しく未発達の逆「L」字状の口縁部。		色調－茶色
第91図4－5	4号貯蔵穴	弥生土器 甕	①26.4 ② ③	未発達の逆「L」字状の口縁部で肩部が僅かに内傾。		
第91図4－6	4号貯蔵穴	弥生土器 高　坏	① ② ③	裾部が大きく開脚したタイプで裾端部が肥厚。精製土器。	外－磨耗 内－磨耗	色調－淡橙褐色
第92図1	1号土坑	弥生土器 甕　か	① ② 7.3 ③	柱状の抉ったような底部で器台の可能性もある。	外－磨耗	色調－淡茶褐色 二次火熱か
第92図4	4号土坑	弥生土器 甕	①16.0 ② ③	逆「L」字状の口縁下に「M」字状凸帯。口縁に整美で斜めの孔を穿ち孔の数は不明。	外－磨耗 内－磨耗	色調－淡茶褐色
第92図5	5号土坑	弥生土器 甕（甑）	①22.8 ② 7.2 ③24.6	如意状口縁で肥厚口唇部は刻み。肩部は沈線を挟んで刺突文。焼成前0.5cmの穿孔	外－粗いハケ 内－ナデ	色調－暗黄茶褐色 口縁から胴下半に煤が付着
第92図6－1	6号土坑	弥生土器 壺	①25.0 ② ③	口縁内面に粘土紐を貼付し肥厚。精製土器。	外－ヘラの暗文 内－磨耗	色調－淡茶褐色
第92図6－2	6号土坑	弥生土器 広口壺	①28.0 ② ③	口縁部は朝顔状に外反し口唇部を肥厚。精製土器。	外－ナデ 内－磨耗	色調－茶褐色
第92図6－3	6号土坑	弥生土器 壺	① ② 8.8 ③	若干上げ底で外面に「＋」字のヘラ記号。	外－ヘラ磨き 内－ナデとヘラ磨き	色調－茶褐色
第92図6－4	6号土坑	弥生土器 壺	① ② 6.7 ③	僅かに上げ底。	外－掠過 内－ヘラ磨き	色調－淡橙褐色
第92図6－5	6号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部で上面内傾し、肩部は直に作る。	外－ハケ 内－ナデ	色調－淡茶褐色 覆土下層出土
第92図6－6	6号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	逆「L」字状の口縁で上面が内傾し肩部も内傾。	外－磨耗 内－ナデ	色調－白黄茶褐色 覆土下層出土
第92図6－7	6号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	逆「L」字状の口縁部で上面が外傾するタイプ。	外－ハケ 内－ナデ	色調－淡茶褐色 覆土下層出土
第92図6－8	6号土坑	弥生土器 甕	①36.0 ② ③	逆「L」字状の口縁部で口縁直下は器壁が厚く、肩部に三角凸帯を巡らす。	外－ナデ 内－ナデ	色調－白黄茶褐色

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第92図6－9	6号土坑	弥生土器 甕	①29.0 ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部で肩部は内傾。	外－ハケ 内－ナデ	色調－淡茶褐色 二次火熱か
第92図6－10	6号土坑	弥生土器 高坏か	①28.0 ② ③	逆「L」字状の口縁部で坏部の深いタイプ。	外－磨耗 内－ヘラ磨き	色調－茶褐色
第93図6－11	6号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	未発達の逆「L」字状の口縁部片。	外－ハケ 内－ナデ	色調－淡茶褐色
第93図6－12	6号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	上面が内傾する逆「L」字状の口縁部片。		色調－白黄茶色
第93図6－13	6号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	12と同タイプの口縁部片。	外－磨耗 内－ナデ	色調－褐色
第93図6－14	6号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	肥厚する三角口縁部で口縁下の器壁が薄い。	外－ナデ 内－ナデ	色調－焦げ茶色 二次火熱 覆土下層出土
第93図6－15	6号土坑	弥生土器 甕か高坏	① ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部で上面が外傾し器壁が薄い。高坏の可能性が高い。	外－ヘラ磨き 内－ナデ	色調－淡茶褐色
第93図6－16	6号土坑	弥生土器 甕	① ② 6.8 ③	器壁の厚い抉ったような細みの底部。	外－ハケ 内－ナデ	色調－茶褐色
第93図6－17	6号土坑	弥生土器 甕	① ② 6.4 ③	器壁の薄い上げ底。	外－ハケ 内－ナデ	色調－赤茶色 二次火熱
第93図6－18	6号土坑	弥生土器 小型壺	① ② 4.9 ③	上げ底の脚下半の破片で脚部の凸帯が剥離。	外－ヘラ磨き 内－ナデ	色調－茶灰色
第93図6－19	6号土坑	弥生土器 壺	天井部 6.7	天井部が抉れる破片で壺の可能性もある。		
第93図6－20	6号土坑	弥生土器 器台	① ② 9.8 ③	細みの器台の裾部片。	外－ハケ磨耗 内－ナデ	色調－淡橙褐色 二次火熱
第93図7－1	7号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部の小破片で口縁の器壁が厚い。	外－ハケ 内－ナデ	色調－淡茶褐色 二次火熱か
第93図7－2	7号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	上面が内傾する逆「L」字状の口縁部片。	外－ナデ 内－ナデ	色調－茶灰色
第93図7－3	7号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	逆「L」字状の口縁部片で肩部が若干内傾。	外－ハケ 内－ナデ	色調－淡茶褐色

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第93図7－4	7号土坑	弥生土器 甕	①30.0 ② ③	発達した逆「L」字状口縁部片で上面は内傾。	外－ハケ 内－ナデ	色調－黒褐色 二次火熱
第93図7－5	7号土坑	弥生土器 器　台	① ②10.8 ③	細みの器台の裾部片でやや器壁が厚い。	外－ハケ 内－ナデ	色調－黄茶褐色
第93図9	9号土坑	弥生土器 壺	① ② ③	広口口縁壺の口縁部小片で精製土器。	外－ヘラの暗文 内－ヘラ磨き	色調－黄茶褐色
第93図11－1	11号土坑	弥生土器 甕	①24.0 ② ③	如意状から逆「L」字状口縁に移行段階のもの。口縁下に1条の沈線が巡り一部重複。	外－ハケ 内－ナデと指頭圧痕	色調－暗橙茶褐色
第93図11－2	11号土坑	弥生土器 鉢	①12.0 ② ③ 9.5	口縁部を肥厚させ口唇部が尖る鉢で、底部が丸底で1の変に伸うか不明。精製土器。	外－ヘラ磨き 内－ヘラ磨き	色調－黒褐色
第93図14－1	14号土坑	弥生土器 壺	① ② ③	働先口縁部に移行する直前の形態の口縁部小片。	外－ヘラ磨き 内－ナデ	色調－淡橙褐色
第93図14－2	14号土坑	弥生土器 壺	①35.6 ② ③	未発達の働先口縁部片。	外－4本一単位のヘラ暗文 内－ヘラ磨き	色調－暗黄褐色
第94図14－3	14号土坑	弥生土器 壺	①37.4 ② ③	未発達の働先口縁部で粘土紐を重ね肥厚。精製土器。	外－4本一単位のヘラ暗文 内－ヘラ磨き	色調－暗黄茶褐色
第94図14－4	14号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	口縁部の大半が剥離した破片で、未発達の逆「L」字状であろう。口縁下に1条の沈線。	外－ハケ 内－ナデ	色調－灰黄褐色
第94図14－5	14号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	上面が内傾する逆「L」字状の口縁部片。	外－磨耗 内－磨耗	色調－淡茶褐色 二次火熱か
第94図14－6	14号土坑	弥生土器 甕	① ② 6.6 ③	抉ったような上げ底で内面が大きく剥離。	外－磨耗 内－剥離	色調－灰黄褐色 強い二次火熱
第94図14－7	14号土坑	弥生土器 高　坏	①30.0 ② ③	未発達の働先口縁部片。体部上半に丸みがあり高坏とした精製土器。	外－ヘラ磨き 内－ヘラ磨き	色調－淡茶褐色
第94図14－8	14号土坑	弥生土器 高　坏	① ②29.0 ③	大きく開脚した裾部片。精製土器。	外－ハケ後ナデ 内－ナデ	色調－橙褐色
第94図14－9	14号土坑	弥生土器 器　台	① ② 9.6 ③	細みの器台の裾部片でやや器壁が厚い。	外－ナデ 内－ナデ	色調－黄茶褐色 二次火熱か
第94図15－1	15号土坑	弥生土器 小型甕	①11.0 ② 4.8 ③ 6.1	逆「L」字状の口縁部に上げ底の底部。	外－ヘラ磨き 内－ヘラ磨き	色調－暗黄茶褐色

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第94図15－2	15号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	逆「L」字状の口縁部片で上面が若干内傾。	外－ハケ 内－ナデ	色調－暗灰黄色
第94図15－3	15号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	やや未発達の逆「L」字状口縁部小片。		色調－淡橙褐色
第94図16－1	16号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	逆「L」字状の口縁部で肩部が若干内傾。	外－ハケ 内－ナデ	色調－暗灰茶褐色 二次火熱
第94図16－2	16号土坑	弥生土器 甕	① ② 6.0 ③	抉ったような上げ底の底部片。	外－ハケ 内－ナデ	色調－赤味茶色 二次火熱
第94図17－1	17号土坑	弥生土器 壺	① ② 6.2 ③	平底の底部片でやや器壁が厚い。	外－ヘラ磨き 内－ヘラ磨き	色調－淡橙褐色
第94図17－2	17号土坑	弥生土器 大　甕	① ② ③	通常甕棺に使用されるもので「T」字状の口縁部片。	外－磨耗 内－ナデ	色調－茶褐色
第94図17－3	17号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	逆「L」字状の口縁部片で肩上半部がすぼまるタイプで器高の浅い甕。	外－ナデ指圧痕 内－ナデ	色調－赤味茶色 二次火熱か
第94図17－4	17号土坑	弥生土器 甕	① ② 7.8 ③	細みで器壁の厚い抉ったような底部片。	外－ハケ 内－ナデ	色調－黄茶色 二次火熱で内面煤付着
第94図18－1	18号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	未発達の逆「L」字状口縁小破片。		色調－淡橙褐色
第94図18－2	18号土坑	弥生土器 甕	① ② ③	逆「L」字状の器壁の厚い口縁部片。	外－粗いハケ 内－ナデ	色調－茶褐色 二次火熱か
第94図22	22号土坑	弥生土器 甕	①22.0 ② ③	口縁部をやや薄く作る如意状口縁部で肩部は張らず底部を欠損。	外－ナデと粗いハケ 内－ナデ	色調－茶褐色 二次火熱で口縁部煤付着
第95図1	P－235	弥生土器 甕	①22.2 ② ③	三角口縁部で頸部が内傾。	外－磨耗一部ハケ残る 内－ナデ	色調－淡橙褐色
第95図2	P－236	弥生土器 甕	①24.4 ② ③	三角口縁部で頸部が内傾。	外－ナデ 内－ナデ	色調－暗橙茶褐色
第95図3	P－308	弥生土器 甕	①26.0 ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部で頸部が内傾。	外－ハケと指圧痕 内－ナデ	色調－暗橙茶褐色 二次火熱か
第95図4	P－234	弥生土器 甕	①27.1 ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部で頸部が内傾。	外－ハケ 内－ナデ	色調－灰茶褐色

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第95図5	P−466	弥生土器 甕	①30.3 ② ③	逆「L」字状の口縁部で上面が内傾し口唇部が肥厚。肩部に1条の三角凸帯。	外ーハケ 内ーナデ	色調ー淡橙褐色
第95図6	P−352	弥生土器 甕	①36.4 ② ③	逆「L」字状の口縁部のやや大型の破片。	外ーナデ 内ーナデ	色調ー白黄褐色
第95図7	P−345	弥生土器 甕	①35.8 ② ③	逆「L」字状の口縁部でやや厚く作る。	外ーハケ 内ーナデ	色調ー白灰褐色
第95図8	P−488	弥生土器 甕	① ② ③	如意状口縁部で口唇部に不規則な刻みを配する。	外ーハケをナデ消す 内ーナデとハケ	色調ー淡橙茶褐色
第95図9	P−327	弥生土器 甕	① ② 7.2 ③	細みで厚手の上げ底で胴部上半を欠損。	外ー粗いハケ 内ーナデ	色調ー赤茶色 二次火熱
第95図10	P−851	弥生土器 甕	① ② 6.4 ③	細みの底部で若干上げ底。	外ーハケが磨耗 内ーナデ	色調ー淡赤褐色 二次火熱
第95図11	P−237	弥生土器 甕	① ② 7.0 ③	厚手で若干上げ底。	外ーハケ 内ーナデ	色調ー淡橙褐色
第95図12	P−799	弥生土器 甕	① ② 7.4 ③	抉ったような上げ底で二次火熱で内面剥離。	外ーハケ 内ーナデ	色調ー橙褐色 二次火熱
第95図13	P−322	弥生土器 甕	① ② ③	如意状口縁部片。	外ー粗いハケ 内ーナデ	色調ー焦げ茶色 二次火熱
第95図14	P−164	弥生土器 甕	① ② 6.2 ③	細い不安定な底部片。	外ーハケ 内ーナデ	色調ー暗黄茶褐色
第95図15	P−466	弥生土器 高　坏	① ②28.0 ③	大きく開脚する裾部片で精製土器。	外ー磨耗 内ー磨耗 内外ナデか磨き	色調ー橙褐色
第95図16	P−234	弥生土器 器　台	① ② 8.3 ③	細みの器台で口縁部が欠損。	外ー磨耗 内ーナデ	色調ー淡橙褐色
第96図2−1	2号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② 8.0 ③	上げ底で二次火熱のためか内面が剥離。	外ー磨耗 内ー剥離	取り上げNo.A 色調ー黄茶褐色二次火熱
第96図3−1	3号墳墳丘下	弥生土器 壺	① ② ③	前期末の口縁部小片。	外ーヘラ磨き 内ーナデ	色調ー暗黄茶褐色 外面煤付着
第96図3−2	3号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② ③	逆「L」字状の口縁部で上面が内傾。口縁下に凸帯貼付か。	外ー磨耗 内ー磨耗	色調ー灰味茶褐色

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第96図4－1	4号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② ③	逆「L」字状に近い口縁部片で上面の内傾度が強い。	外－ナデ 内－ナデ	色調－白黄褐色 周溝南西側出土
第96図4－2	4号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② ③	如意状口縁部の小破片。	外－ハケ 内－ナデ	色調－黄茶褐色
第96図5－1	5号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② ③	如意状口縁から逆「L」字状口縁に移行する段階の口縁部片で器壁が薄い。	外－ハケ 内－ナデ	色調－白黄褐色
第96図5－2	5号墳周溝内	弥生土器 器　台	① ②11.0 ③	細みの器台で上半部を欠損。	外－ハケ 内－ナデ	色調－淡茶褐色 二次火熱
第96図7－1	7号墳周溝内	弥生土器 壺	① ② ③	袋状口縁壺の破片で数少ない後期の資料。遺構は古墳で削平。	外－ハケ 内－ナデ	色調－茶褐色
第96図7－2	7号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部片で上面は内傾する。	外－ハケ 内－ナデ	
第96図7－3	7号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② ③	逆「L」字状口縁部の小片。	外－磨耗 内－磨耗	色調－灰黄褐色
第96図7－4	7号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部片で器壁が厚い。	外－磨耗 内－磨耗	色調－淡橙褐色
第96図7－5	7号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部小破片。	外－ハケ 内－ナデ	色調－黄茶褐色
第96図7－6	7号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② ③	器壁が薄く長く延びた逆「L」字状口縁部片。	外－磨滅 内－磨滅	色調－淡黄褐色
第96図7－7	7号墳周溝内	弥生土器 壺	① ② ③	「く」の字状に外反した後期中頃の資料で遺構は遺存しない。	外－ハケ 内－ハケ	色調－黄茶色
第96図7－8	7号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② ③	7と同タイプの甕で器壁が薄い。内面に粘土紐の接合面が明瞭。	外－ハケ後ナデ 内－ナデ	色調－暗黄茶褐色
第96図7－9	7号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② ③	上げ底の小片。	外－粗いハケ 内－ナデ	色調－淡茶褐色 二次火熱
第96図9－1	9号墳周溝内	弥生土器 甕	① ②7.7 ③	器壁の厚い底部片。	外－粗いハケ 内－ナデ	色調－灰黄褐色 二次火熱で煤付着
第96図9－2	9号墳周溝内	弥生土器 壺	天井径 6.0	天井部が若干抉れた壺の破片。	外－ハケ 内－ナデ	二次火熱で器面剥離

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第96図10	10号石室裏込	弥生土器 器　台	① 8.8 ② ③	細みの器台の口縁部片。	外ー粗いハケ 内ーナデ	色調ー黄茶褐色
第96図14－1	14号石室裏込	弥生土器 壺	① ② 8.6 ③	円盤貼りつけの前期の底部片。		色調ー茶褐色
第96図14－2	14号石室裏込	弥生土器 甕	① ② 7.3 ③	細みの底部の小片。		色調ー黄茶褐色
第96図17－1	17号墳周溝内	弥生土器 壺	① ② 8.4 ③	器壁の厚い底部片で甕棺片の可能性あり。	外ー磨滅 内ーナデ	色調ー灰黄褐色
第96図17－2	17号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部片。	外ー磨耗 内ーナデ	色調ー橙褐色
第96図17－3	17号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部片で頸部が内傾。	外ーナデ 内ーナデ	色調ー暗黄茶褐色
第96図17－4	17号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② ③	逆「L」字状口縁部片。	外ーナデ 内ーナデ	色調ー淡橙褐色
第96図17－5	17号墳周溝内	弥生土器 甕	①46.6 ② ③	器壁の厚いやや大型の逆「L」字状口縁部片。	外ーナデ 内ーナデ	色調ー淡橙褐色
第96図17－6	17号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② 7.2 ③	器壁の厚い細みの底部片で若干上げ底。	外ー磨滅 内ー磨滅	色調ー白黄褐色 二次火熱で器壁剥離
第96図17－7	17号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② 7.8 ③	やや厚手の抉ったような上げ底で細み。	外ー粗いハケ 内ーナデ	色調ー淡茶褐色
第96図17－8	17号墳周溝内	弥生土器 甕	① ② 8.0 ③	若干上げ底の底部片。	外ーナデ 内ーナデ	色調ー淡橙褐色
第96図17－9	17号墳周溝内	弥生土器 甕か壺	① ② 6.1 ③	細く中央が抉ったような底で器壁が厚いことから壺の可能性がある。	外ーハケ 内ー	色調ー黄茶褐色
第96図17－10	17号墳周溝内	弥生土器 高　坏	① ②30.0 ③	大きく開脚する裾部片で端部が尖る。	外ーハケ 内ーハケ	色調ー灰茶褐色
第97図1	Ⅰ区拡張区	弥生土器 広口壺	①25.0 ② ③	朝顔状に外反する口縁部片。精製土器。	外ーヘラの暗文 内ーヘラ磨き	色調ー茶褐色
第97図2	Ⅱ区拡張区	弥生土器 甕	①25.0 ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部で口縁部が厚く作られる。	外ーハケ 内ーナデ	色調ー黄茶色

出土土器観察表

①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第97図3	Ⅱ区拡張区	弥生土器 甕	①28.0 ② ③	短い逆「L」字状の口縁部で上面が内傾。	外ーハケ 内ーナデ	色調ー淡橙茶褐色
第97図4	Ⅱ区拡張区	弥生土器 甕	①30.0 ② ③	上面が内傾する逆「L」字状の口縁部。	外ーハケ磨耗 内ーナデ	色調ー淡茶褐色 二次火熱
第97図5	Ⅱ区拡張区	弥生土器 甕	①27.2 ② ③	逆「L」字状口縁部で上面が内傾し頸部も内傾する。	外ー粗いハケ 内ーナデ	色調ー黄茶色
第97図6	Ⅱ区拡張区	弥生土器 壺	①29.0 ② ③	逆「L」字状口縁部片。	外ー磨耗 内ーナデ	色調ー淡茶褐色
第97図7	Ⅱ区拡張区	弥生土器 甕	①28.1 ② ③	上面が内傾する逆「L」字状口縁部で頸部に粘土帯を貼付し厚く作る。	外ーハケ 内ーナデ	色調ー暗橙茶褐色
第97図8	Ⅱ区遺構検出	弥生土器 甕	①28.0 ② ③	口唇部を肥厚する逆「L」字状口縁部で器壁が薄い。	外ー粗いハケ 内ーナデ	色調ー茶褐色
第97図9	Ⅱ区遺構検出	弥生土器 甕	①26.6 ② ③	「く」字状に外反する口縁部片。	外ーハケ 内ーハケ	色調ー暗橙褐色
第97図10	3号墳西側	弥生土器 甕	①16.8 ② ③	如意状口縁部小片で口唇部に細い刻みを密に配する。	外ーナデ 内ーナデ	色調ー黒色 二次火熱
第97図11	Ⅱ区拡張区	弥生土器 甕	① ② 5.9 ③	底部の中位が細まるタイプ。	外ーナデ 内ーナデ	色調ー橙褐色
第97図12	16号墳付近	弥生土器 甕	① ② 6.2 ③	器壁の厚い柱状の底部片。	外ーハケ 内ーナデ	色調ー茶褐色 二次火熱か
第97図13	16号墳付近	弥生土器 壺	① ② 7.0 ③	上げ底の底部片。	外ーハケ 内ーナデ	色調ー黄茶褐色
第97図14	Ⅱ区表採	弥生土器 壺	① ② 7.6 ③	若干上げ底。	外ーハケ 内ー剥離	色調ー暗橙茶褐色 二次火熱で器面剥離
第97図15	15号墳付近	弥生土器 甕	① ② 7.5 ③	底部から胴下半にかけて直線的に作る底部片。	外ー磨滅 内ーナデ	色調ー灰茶褐色
第97図16	Ⅱ区表採	弥生土器 甕	① ② 6.1 ③	組みで上げ底の底部片。	外ー磨滅 内ー磨滅	色調ー橙褐色
第97図17	包含層	弥生土器 器　台	① ②11.0 ③	組みの器台の裾部片。	外ーハケ 内ーナデ	色調ー暗橙茶褐色

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	特記事項（備考）
第97図18	3号墳南側	弥生土器 器　台	①10.0 ② ③	細みで外反度の鈍い器台の口縁部片。	外ーハケ 内ーナデ	色調ー黄茶褐色
第97図19	Ⅱ区表採	弥生土器 高　坏	① ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部片。	外ーヘラ磨きか 内ー磨耗	色調ー焦げ茶色 二次火熱か
第97図20	16号墳付近	弥生土器 高　坏	①17.8 ② ③	未発達の逆「L」字状口縁部で口唇部が垂れ下がる。体部の張りは少ない。	外ーヘラ磨きか 内ーヘラ磨き	色調ー黄茶褐色
第97図21	3号墳西側	弥生土器 壺	① ② ③	一見高坏状にみえるが外面に暗文があり鋤先口縁壺の小破片。	外ーヘラ暗文 内ーヘラ磨き	色調ー淡茶褐色

石　器

2号竪穴住居跡出土石器（図版54、第99図）

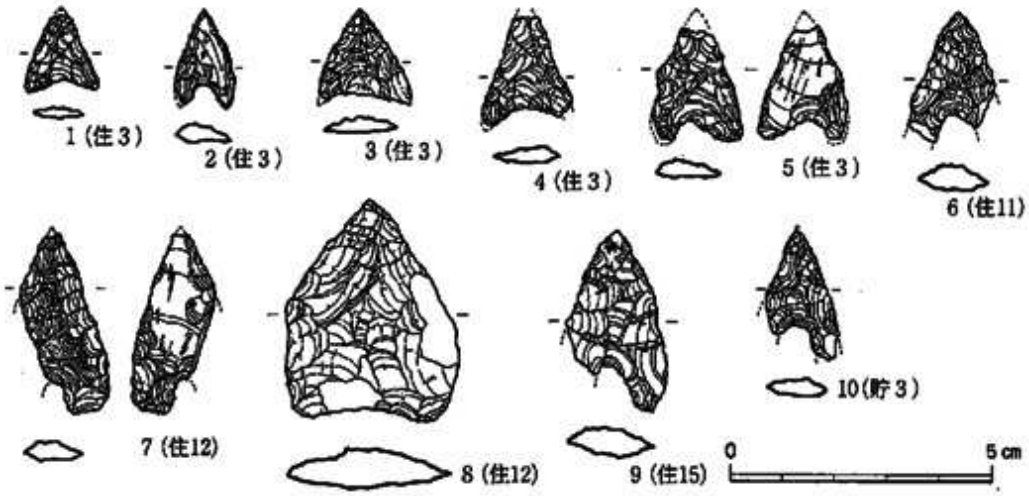
石　皿（11）　床面直上の覆土内から出土した絹雲母片岩製の石皿である。形状が三角形を呈し、一辺と部分とに自然面を残すがあとの二辺は鋭利な刃物で切ったような痕跡を残す。使用面は1面で、使用頻度が激しく著しく凹面をなす。

軽　石（12～14）　不定形の軽石が3点ある。いずれも覆土中から出土したもので、2と3は片面を摩って平滑にしている。すべてに緊縛痕が認められず浮子に使用したものではなかろう。　（佐々木）

3号竪穴住居跡出土石器（図版54、第98・99図）

石　鏃（1～5）　1～5はいずれも凹基無茎式の石鏃で、1・3・4は浅い抉りを、2・5は短い脚部を有す。1は二等辺三角形を呈し先端を欠く。残長1.5cm、幅1.4cm、厚0.25cm、重さ0.3g。2はほぼ完形品。横長剥片を素材とし、一側縁に細かな調整を施す。長1.9cm、幅1.8cm、厚0.35cm、重さ0.6g。3は正三角形に近い。長1.8cm、幅1.75cm、厚0.3cm、重さ0.7g。4は先端部と両脚端を欠く。調整は全体に荒い。残長1.9cm、幅1.8cm、厚0.35cm、重さ0.9g。5は縦長剥片を素材とし、主要剥離面側の周辺は細かな調整を施す。残長2.15cm、幅1.3cm、厚0.35cm、重さ1.3g。石材は1・2・5が黒曜石、3は赤鐵、4は安山岩である。図示してないが、他に黒曜石製の石鏃・石核・縦長剥片が出土。　（木下）

不明石器（15）　扁平な絹雲母片岩で、現状では側面の2ケ所に摩った痕跡が残る。片面の半分強に焼痕が見られるが用途がはっきりしない。厚さは1.0cmである。



第98図　3号・11号・12号・15号竪穴住居跡、3号貯蔵穴出土石器実測図（2/3）

軽　石（16）　砲弾形の軽石で長5.5cm、幅4.5cm、厚3.0cm、緊縛痕はない。覆土中出土。

（佐々木）

11号竪穴住居跡出土石器（図版54、第98図）

石　鏃（6）　両脚を欠く石鏃で、両面とも荒い調整剥離である。残長2.5cm、幅1.7cm、厚0.5cm、重さ1.3gを量る良質な黒曜石製。

12号竪穴住居跡出土石器（図版54、第98・99図）

石　鏃（7・8）　7は縦長剥片の素材で、主要剥離面は脚部を除き未調整で、背面稜部は自然面。残長3.4cm、幅1.6cm、厚0.45cm、重さ2.1g。黒曜石製。8は五角形の大型品で、平基に近い基部を有す。長4.2cm、幅3.4cm、厚0.8cm、重さ10.6g。安山岩製で、他に半欠の石鏃1点出土。（木下）

磨　石（17）　竪穴住居跡の支柱穴P2の南側床面から出土した。片面には2ケ所に窪んだ箇所があり、左肩と裏面は研磨し、右下側面には敲き痕が残る。ひとつの石器を3種類の用途に使っている。石材は凝灰岩製で、径が9.5cm×10cm、厚さは5.1cm、重さ810.6gを量る。

（佐々木）

15号竪穴住居跡出土石器（図版54、第98図）

石　鏃（9）　黒曜石製の分厚な石鏃で、片脚を欠く。横長剥片を素材とし荒い調整を施す。長3.4cm、幅1.9cm、厚0.6cm、重さ2.5g。

3号貯蔵穴出土石器（図版54、第98図）

石　鏃（10）　黒曜石製の石鏃で両脚を欠く。左側縁は大きな剥離により内湾する。長2.5cm、幅1.4cm、厚0.35cm、重さ1.1g。（木下）

1号土坑出土石器（図版54、第100図）

石　弾（1）　正球状の磨石で大きさから石弾とした。大きさは4.0cm×3.7cm、重さは61.3gを量る。弥生時代中期初頭頃の所産であろう。

7号土坑出土石器（第100図）

軽　石（2）　不整形で図示した左上と右下に凹面がありこの部分が緊縛痕の可能性がある。大きさは長さが9.7cm、最大幅が8.2cm、厚さは4.7cmを測る。浮子に使われたのであろう。

3号墳周溝出土石器（図版54、第100図）

不明石器（4）　周溝の東側から出土した絹雲母片岩製の未製品と考えられ、扁平形をしており、1ケ所に孔の痕跡がある。石包丁の未製品の可能性が強く、古墳に伴わない遺物である。

5号墳石室周辺採集石器（図版54、第100図）

砥　石（5）　緑泥片岩製で使用面が3面。裏面は全面を使用しておらず鋭い使用痕が4本走る。採集箇所から古墳築造時の攪乱か石室内の盗掘時に持ち出された可能性がある。

石　斧（6）　風化の著しい玄武岩製の蛤刃石斧がある。刃部付近のみで体部と頭部が欠損している。風化度から古墳築造時点で弥生時代の住居のものが移動したのであろう。

表採石器（図版54、第100図）

扁平石斧（3）　絹雲母片岩製の石斧で頭部と刃部の大半を欠損している。表面は平滑に磨かれ残りの刃部は鋭い。幅は5.3cm、厚さは1.4cmを量る。

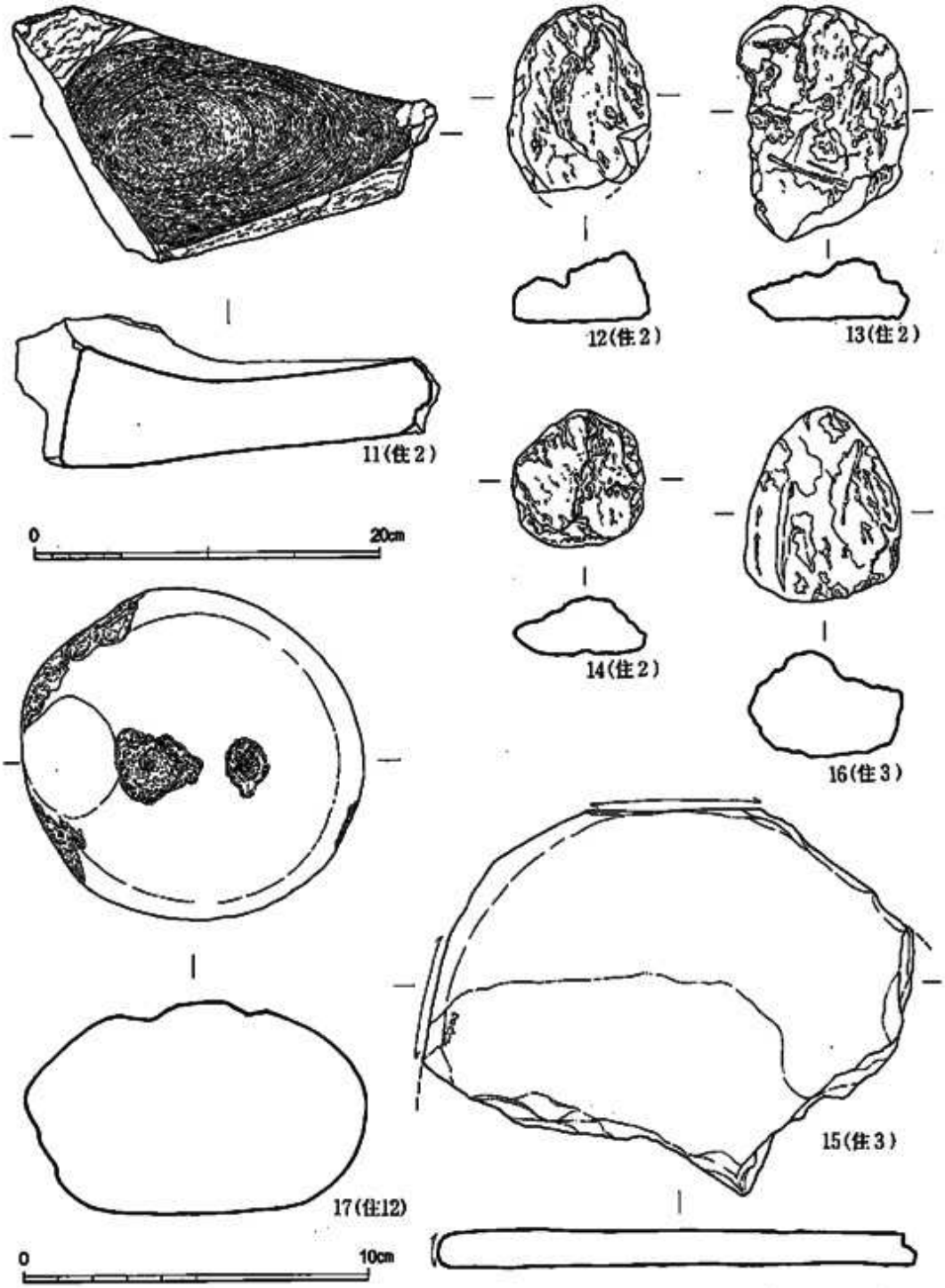
土製品

9号土坑出土土製品（第100図）

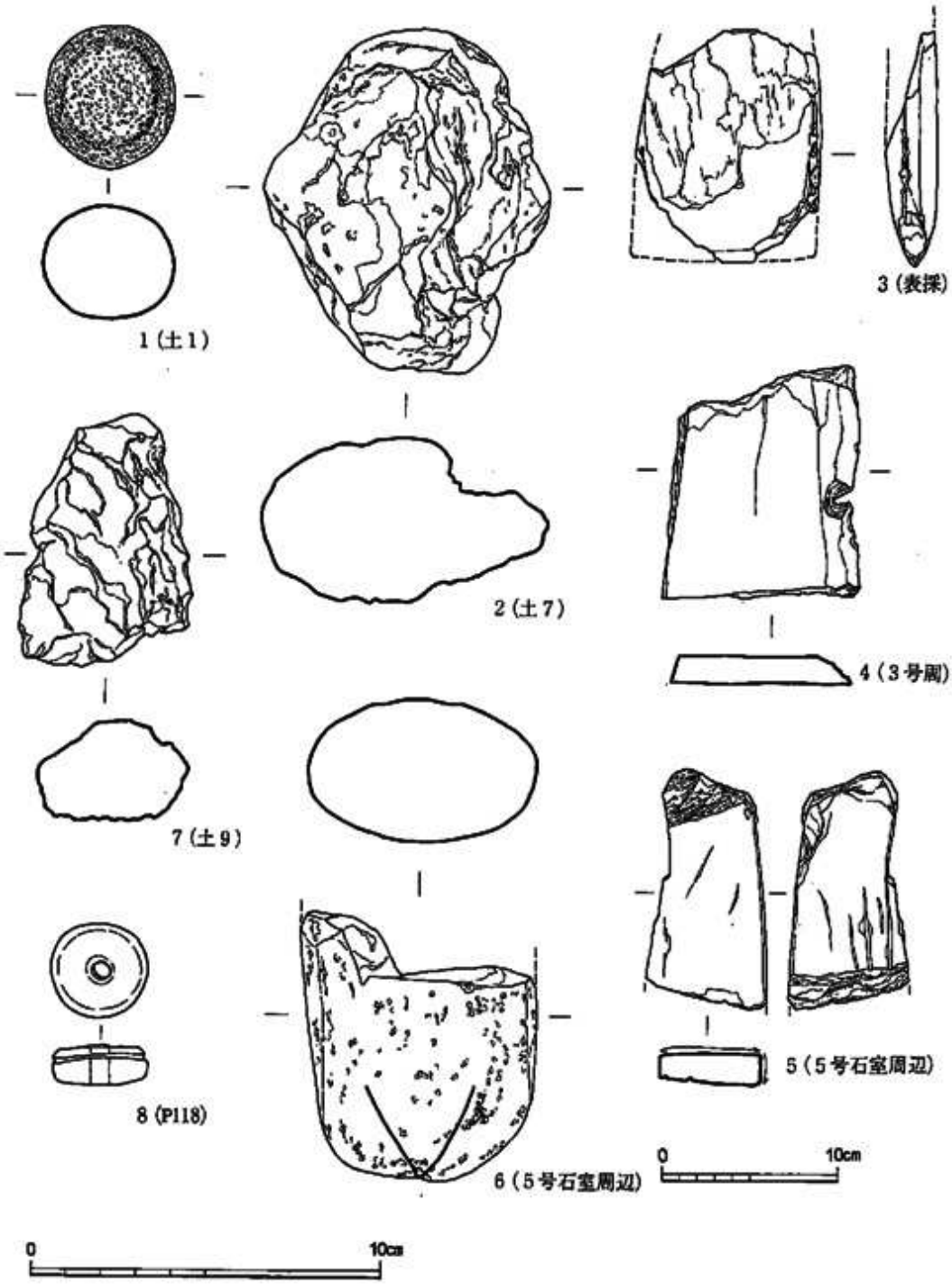
土　塊（7）　不整形土塊で灰白色。焼成は固く胎土も良好で何に使われたのかが不明。

ピット出土土製品（図版54、第100図）

紡錘車（8）　小型の土製紡錘車で側面に浅い沈線が一周する。大きさは径が2.6cm×2.8cm、厚さが1.1cm、中央の孔は0.5cm、重さは87gである。（佐々木）



第99図　2号・3号・12号竪穴住居跡出土石器実測図（1/4・1/2）



第100図　1号・7号・9号土坑、その他の石器・土製品実測図（1/2・1/4）

5）縄文時代の遺構と遺物

（1） 調査区と遺構の概要

古墳・弥生時代の調査中に多くの押型文土器が出土したので、4層以下の縄文時代については10mグリットを設定し、内部を4分割し調査を実施した。調査区は東西がA～J列、南北は0～6列の3,000㎡である。

第101図は5層下面の地形図である。等高線は東端のH6区に最も高く56.75mが、西端のA4区に最も低く55.25mが巡り、80mの間で1.25m下がる緩傾斜の地形で、全体的には北から南、西方向に傾斜するが、東端では既に片岩の地山が現れる。この5層には大きく2カ所の地形変換線が観察される。E・F区からD4区にかけては、幅4～7m、深さ10cmの溝上の落ち込みがあり、F～H－3・4区にも浅いが幅の広い流路状の落ち込みがある。したがって、この部分の等高線は複雑な様相を示す。また、3号墳、2・3号住居の掘り込みが5層まで達している。

一方、6層では調査区の中央から西側にかけて広範囲に礫層が分布する。特にD・E1区からC4区にかけては幅6.5m、厚さは40cmに達する。その他ではB3、C1、E1・3、F2、H6区に集中部が見られるが、前述した溝上の落ち込みや流路には礫層は見られない。縄文時代の遺構は、4層で晩期の土坑3基、5層から早期の土坑3基、石組炉36基、集石遺構9基を検出したが、いずれの遺構も礫層の分布しない箇所に築かれていることが解る。特にD2区に位置する21号石組炉は、わずか3mと極めて狭い礫層未堆積地に築かれ、当時の人々の石組炉を中心とする居住環境を彷彿とさせる。（木下）

（2） 土 坑

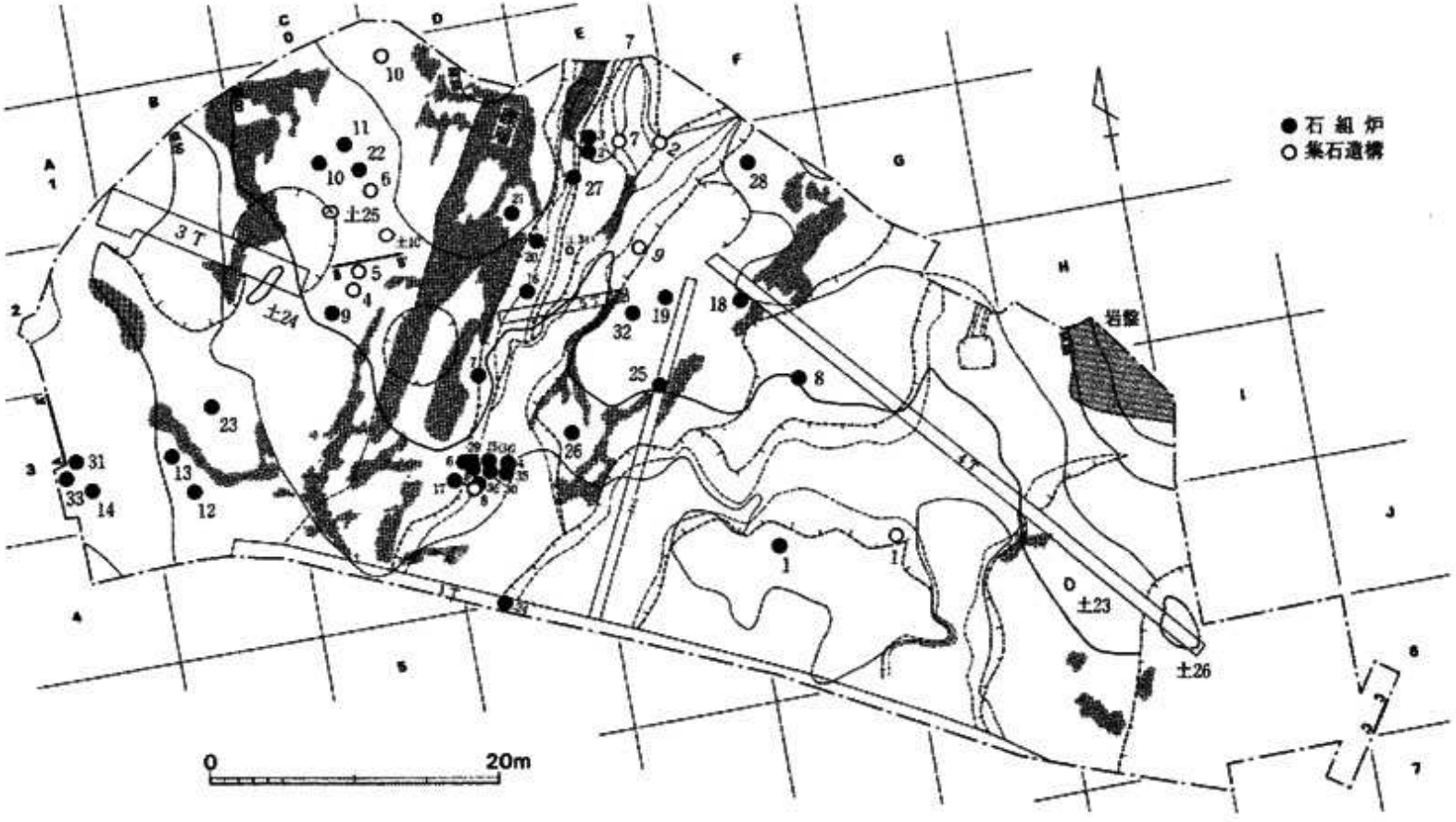
晩期3基、早期3基の計6基である。晩期の土坑（10・25・34）はC・D2区に並んで位置し、早期の土坑はH5区（23・26）、C2区（24）と東西に分かれる。

10号土坑（図版47―(1)・(2)、第102図）

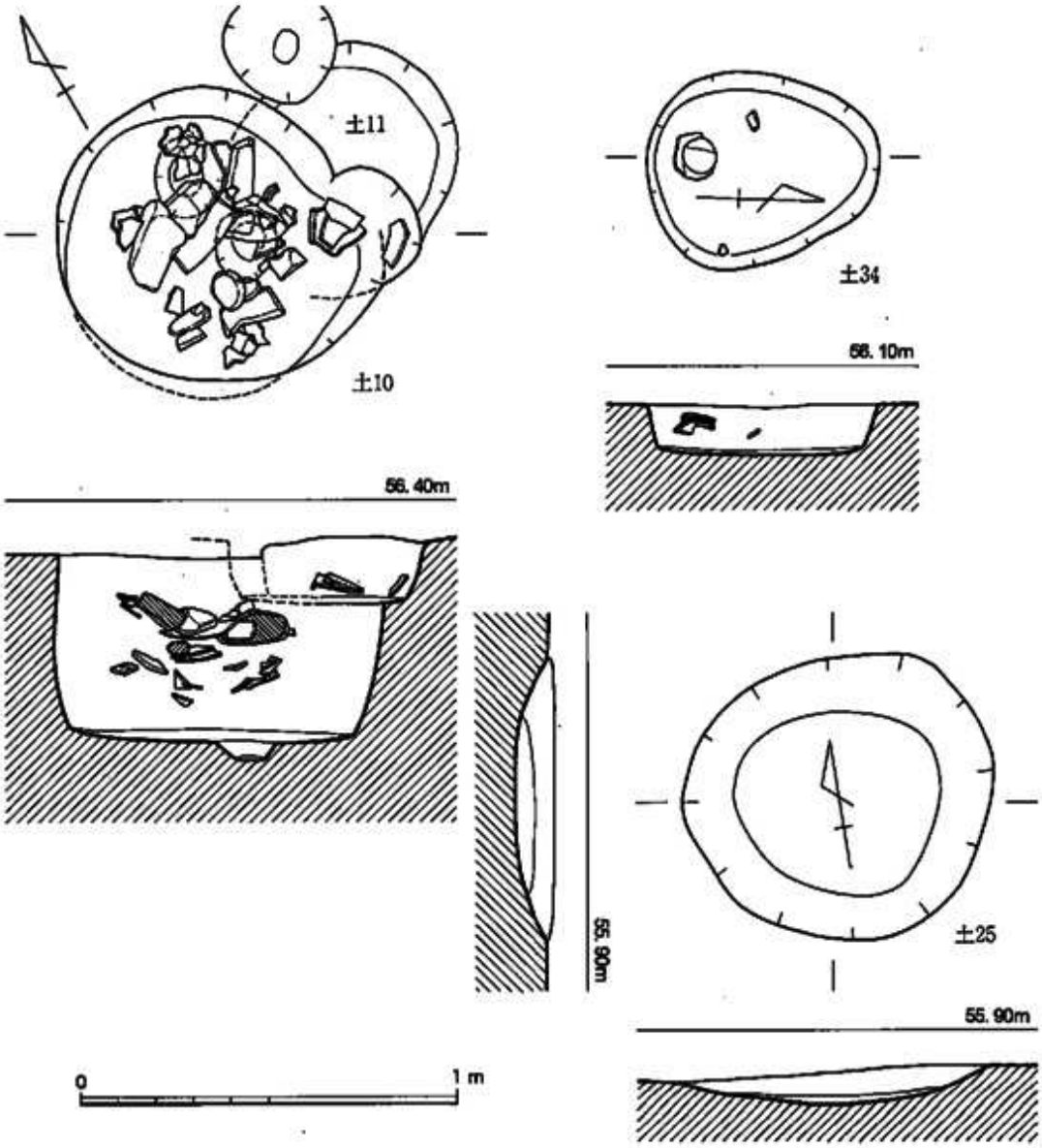
弥生時代前期末から中期初頭頃に比定される3号竪穴住居跡の東側3.5mに位置する土坑で、調査時点で10号土坑としていたが形状から貯蔵穴の機能を果たしていたと考えられる。しかし縄文晩期の貯蔵穴はこの1基のみで、これに対応する竪穴住居も発見されていない。

土坑は弥生時代中期初頭頃の11号土坑との重複があり、当初両者はひとつの遺構と考えて一緒に掘り下げ、11号土坑の一部を破壊したきらいがある。

土坑の平面プランは円形で、壁面はほぼ垂直に掘り込まれているが南西側が一部オーバーハングしている。上面の規模は0.75m×0.8m、深さは0.5mを測る。底面は0.75mである。底面



第101図　縄文時代遺構配置図（1/500）

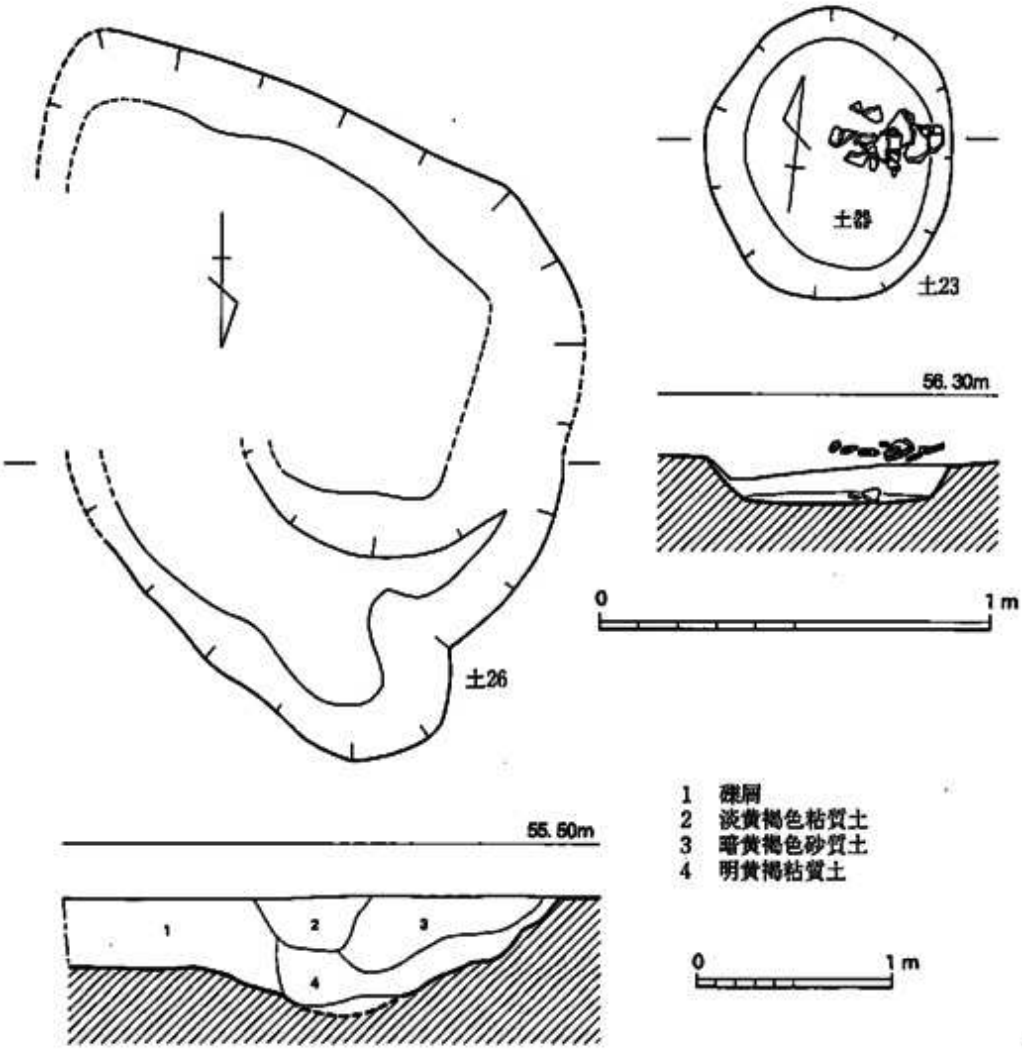


第102図　10号・25号・34号土坑実測図（1/20）

には径が15cm、深さが5.0cmのピットが掘られている。内部の覆土の中間層には、河原石や石に混じって晩期の深鉢片や打製石斧・磨石と凹石を併用した石器が出土している。　（佐々木）

23号土坑（第103図）

Ｈ５－２区に位置する。南北73cm、東西63cmの不整円形を呈し、深さ12cmの床面はほぼ平坦である。遺構確認面で、無文土器が出土。



第103図　23号・26号土坑実測図（1/20・1/40）

24号土坑（第104図）

Ｃ２－２区に位置する。東西は5.2m。南北1.5mの不整長円形を呈す。床面は西側に深くなり80cmを測る。土坑の中央中位に1.65m×0.65m、厚さ12～30cmの焼土層がある。埋土は１層がフカフカした黄褐色土、２層は黄灰色砂質土。

出土遺物は、焼土内より石鏃２点がある。

25号土坑（図版、第102図）

3号竪穴住居跡の床面下層から出土した不整円形の浅い土坑で、覆土の上面に貼床が施されており住居に削平されたと考えられる。

出土遺物はないが、第5層から掘り込んでおり縄文晩期頃の可能性が強い。

26号土坑（第103図）

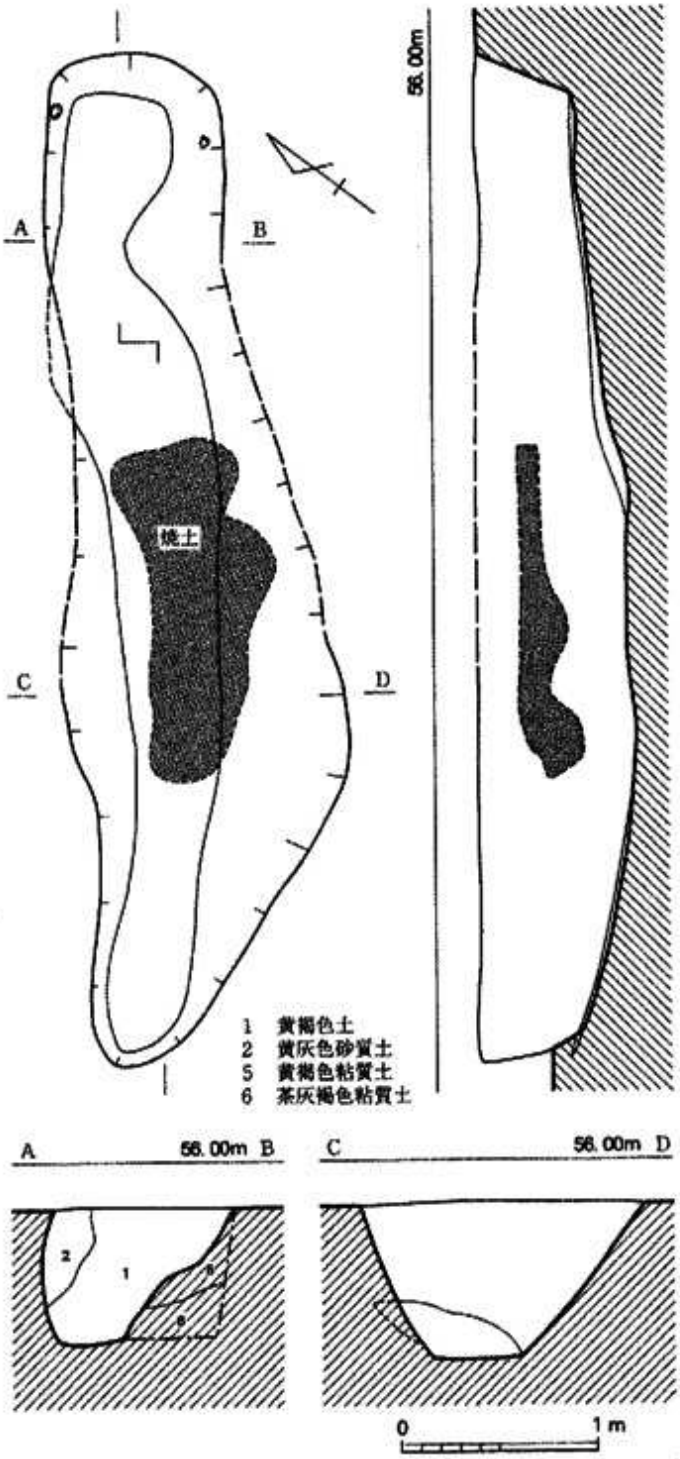
H5－1区に位置し、5層土を埋土に持つ土坑。東側は未掘で不整形プランを呈し、南北3.75m、東西2.6m、北側にテラス面を有す。深さは東に深く55cmを測る。埋土は1層が礫層、2層は淡黄褐色粘質土、3層は暗黄褐色砂質土、4層は明黄褐色粘質土。出土遺物はない。

34号土坑（図版56—(1)、第102図）

E2—2区に位置し、5層を掘り込んだ小型の不整円形の土坑で、大きさは0.62m×0.52m、深さは0.13mと浅く、削平を受けたと考えられる。

底面の5.0cmで縄文晩期の深鉢底部が倒立した状態で出土した。

（木下）



第104図　24号土坑実測図（1/40）

（3）石　組　炉

A～F列にかけて36基検出された。特に中央部の溝状の落ち込み内に16基が集中し、その中でもD3・4区に10基（4～6・15・17・29・30・34～36号）が切り合いながら築かれる。また、C1区に3基（10・11・22号）、A3区に3基（14・31・33号）、E1・2区にやはり3基（2・3・27号）がグループを構成する。第108図はD3・4区に検出された4・15・29・5・6号石組炉である。29・5・6号石組炉は切り合い関係にあり、古い順に5→29→6号となる。いずれも5層上部で、15号と4号間は35cm、15号と29号間は20cmと極めて近接する。等高線を考慮してみると、55.25m～55.50m間に3基、55.50m～55.75m間に4基、55.75m～56.0m間に12基、56.0m～56.25m間に13基、そして56.25m～56.5m間に4基である。層位的には34～36号石組炉が5層下部に属する以外は5層中位から上位である。

石組炉はその形態から4種類に分類される。敷石状を呈するものをA類、床石を有し、花弁状を呈するものをB類、花弁状を呈すが床石を持たないものをC類、深い掘り込みをもち、内部に多量の石材が見られるものをD類とした（第23表）。

1号石組炉（図版57―(1)、第105図）

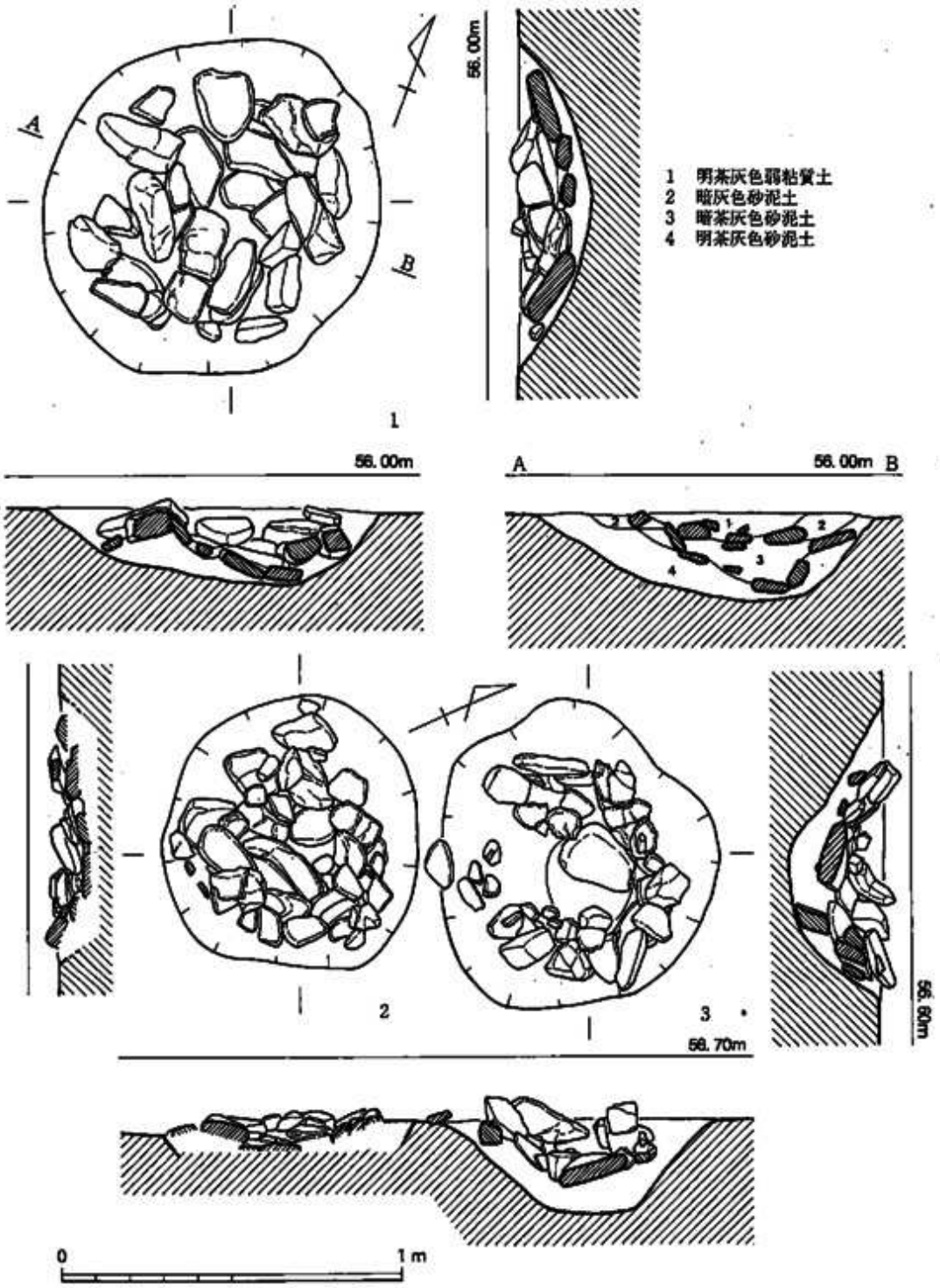
F4－2区に単独で位置する。96×99cm、深さ22cmのほぼ円形の掘方で、炉は上端径63cm、床面径33cmを測るB類で整った花弁状を呈する。床面の石材は20cm大の長方形に近いものであるが、周囲のそれは6～8cmと厚みのある石材を用いる。石組炉内には、床面より10cmほど浮いた状態でやや小粒な石材が堆積する。1層は明茶褐色の弱粘質土、2層は暗灰色砂泥土、3層は暗茶灰色砂泥土、4層は暗茶灰色砂泥土である。炉に使用された石材は緑泥片岩、絹雲母石英片岩で、大部分に熱変化が認められるが灰・炭化物はない。

2号石組炉（図版57―(2)、第105図）

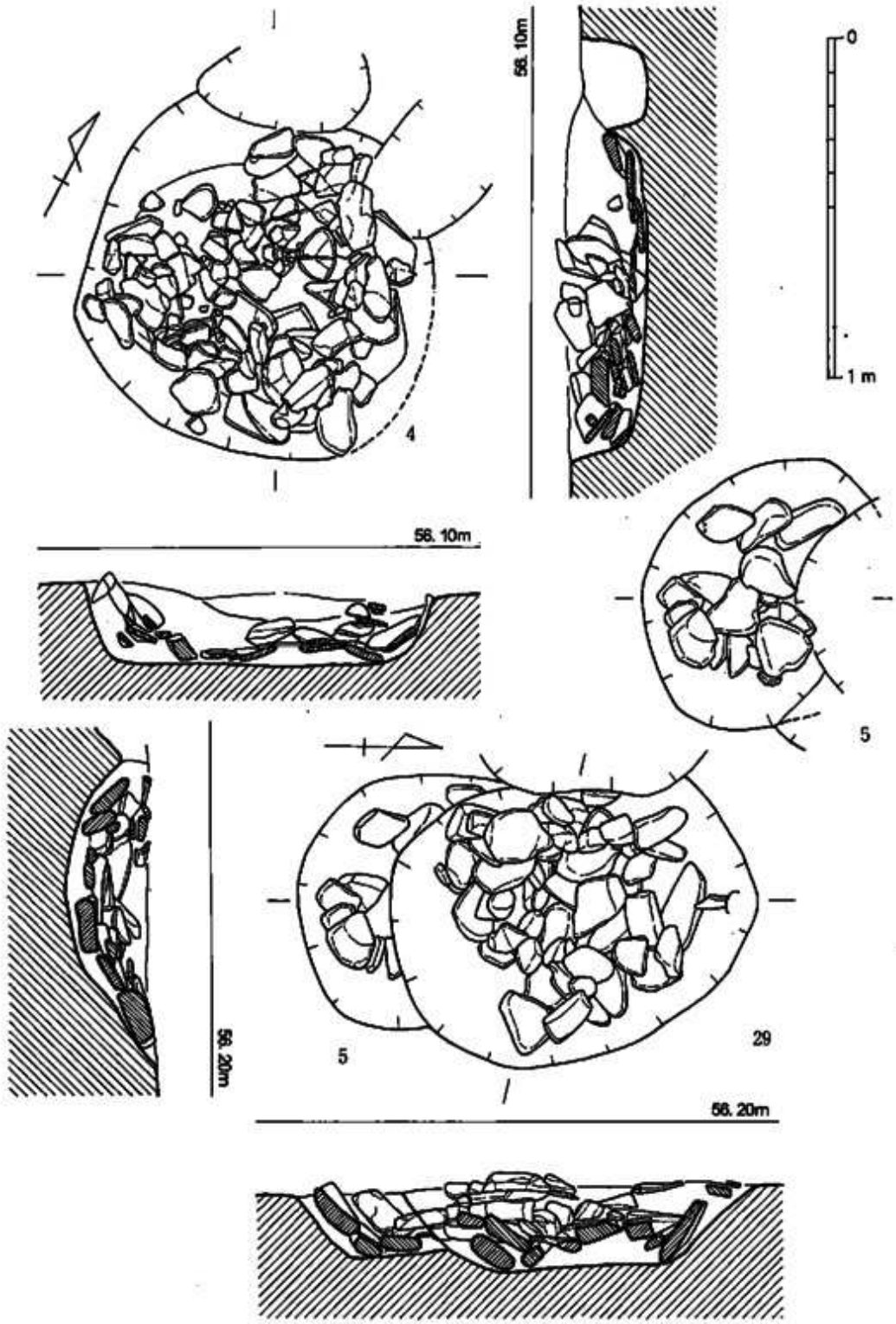
E1－2区に検出され、3・27号石組炉、2・7号集石と一群を構成する。北側の3号石組炉とは7cmと近接する。79×75cmと円形に近い掘方を有し、上端径52cm、床面径35cmを測る典型的なB類の石組炉である。15cm大と比較的小さな緑泥片岩、絹雲母石英片岩を周囲から床石に用いる。熱変化をしている石材は少ない。なお、この石組炉は取り上げ後、県立甘木歴史資料館に展示している。

3号石組炉（図版57―(2)、第105図）

2号石組炉の北、E1－2区に検出され、石組炉では最も北側に位置する。標高でも最高所にあり、56.5mを測る。掘方は89×73cm、深さは28cmの不整形で、南側の石材が抜かれている



第105図　1号～3号石組炉実測図（1/20）



第106図　4号・5号・29号石組炉実測図（1/20）

が本来はＢ類の石組炉と考えられる。炉は上端径52cm、床面径33cm、石材は緑泥片岩が多く、一部、花崗岩が用いられている。灰、炭化物は認められない。炉内より山形押型文土器が出土。

４号石組炉（図版58―(1)、第106図）

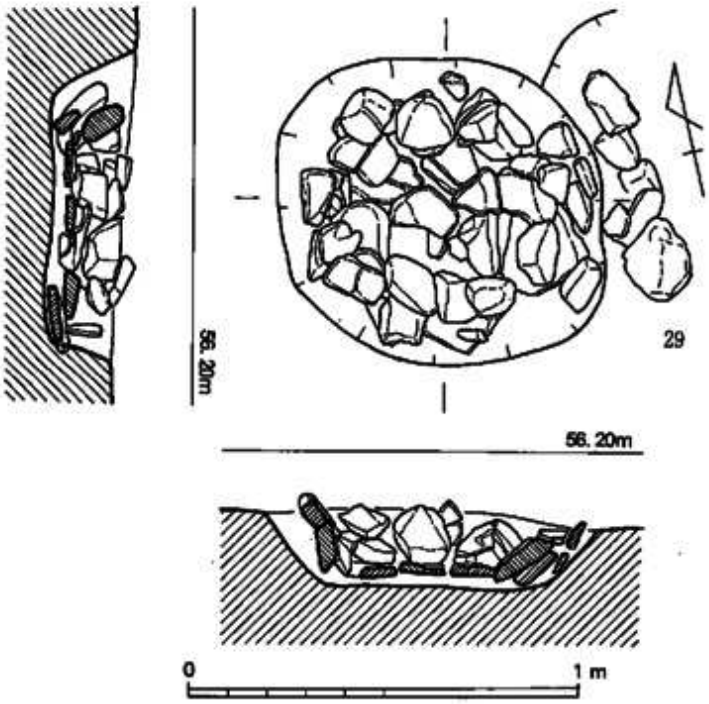
Ｄ４－４区に10基と集中する石組炉の東端に位置し35号石組炉を切るＢ類の石組炉。99×105cmのほぼ円形の掘方を有し、北側の２つのピットに切られる。炉は上端径90cm、床面径68cmを測るＢ類であるが、深さ25cmの掘方は直に近く立ち上がり、床面は平坦になる。床面から周囲の石材は厚さ１～３cmと薄い絹雲母石英片岩を用いる。石組炉内には輝石安山岩の石材が投入され、灰が若干検出された。山形押型文土器が出土。

５号石組炉（図版58―(2)、第106図）

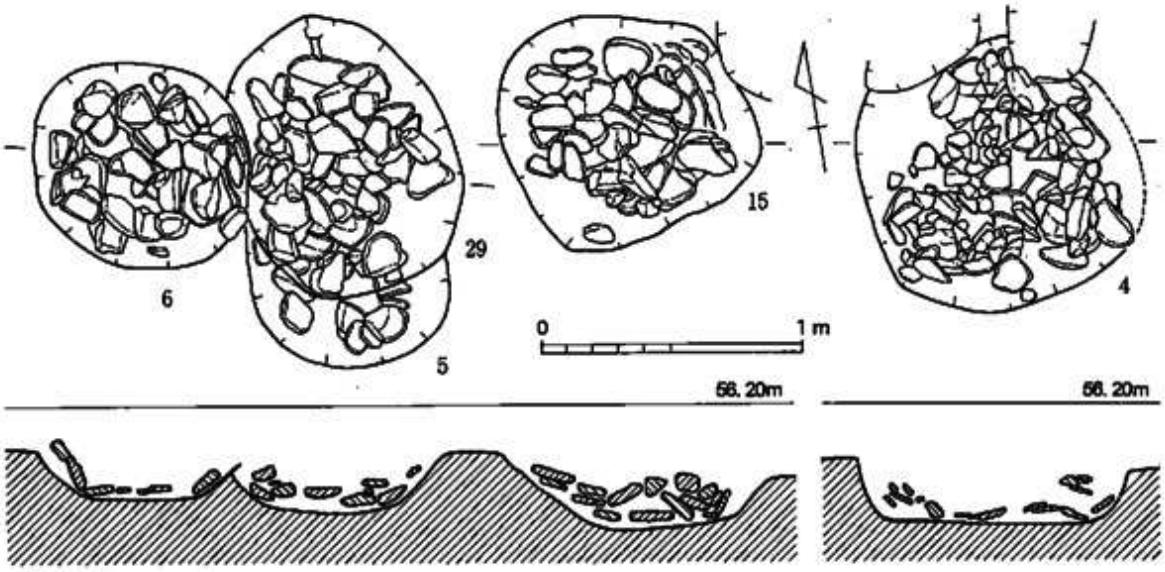
Ｄ４－４区の集中部中央に位置し、北側の29号石組炉に半分近くが切られるがＢ類に分類される。83cmの円形プランで掘方は45°に近く、深さ13cmの床面は平坦である。石材は厚さ５cm前後の緑泥片岩を用いる。

６号石組炉（図版58―(2)、第107・108図）

Ｄ４－４区の集中部西端に位置し、29号石組炉を切る。73×81cmとやや東西方向に長い掘方を有し、周囲の壁は直に立ち上がり、周囲の石材も直に近い。炉の上端径52cm、床面径41cmを測りＢ類に分類される。床面の石材は６石で絹雲母石英片岩を使用し、周囲は緑泥片岩・輝石安山岩もみられる。深さ19cmを測る。炉内より楕円押型文土器が出土。



第107図　６号石組炉実測図（1/20）



第108図　4号～6号・15号・29号石組炉配置図（1/30）

7号石組炉（図版59―(1)、第109図）

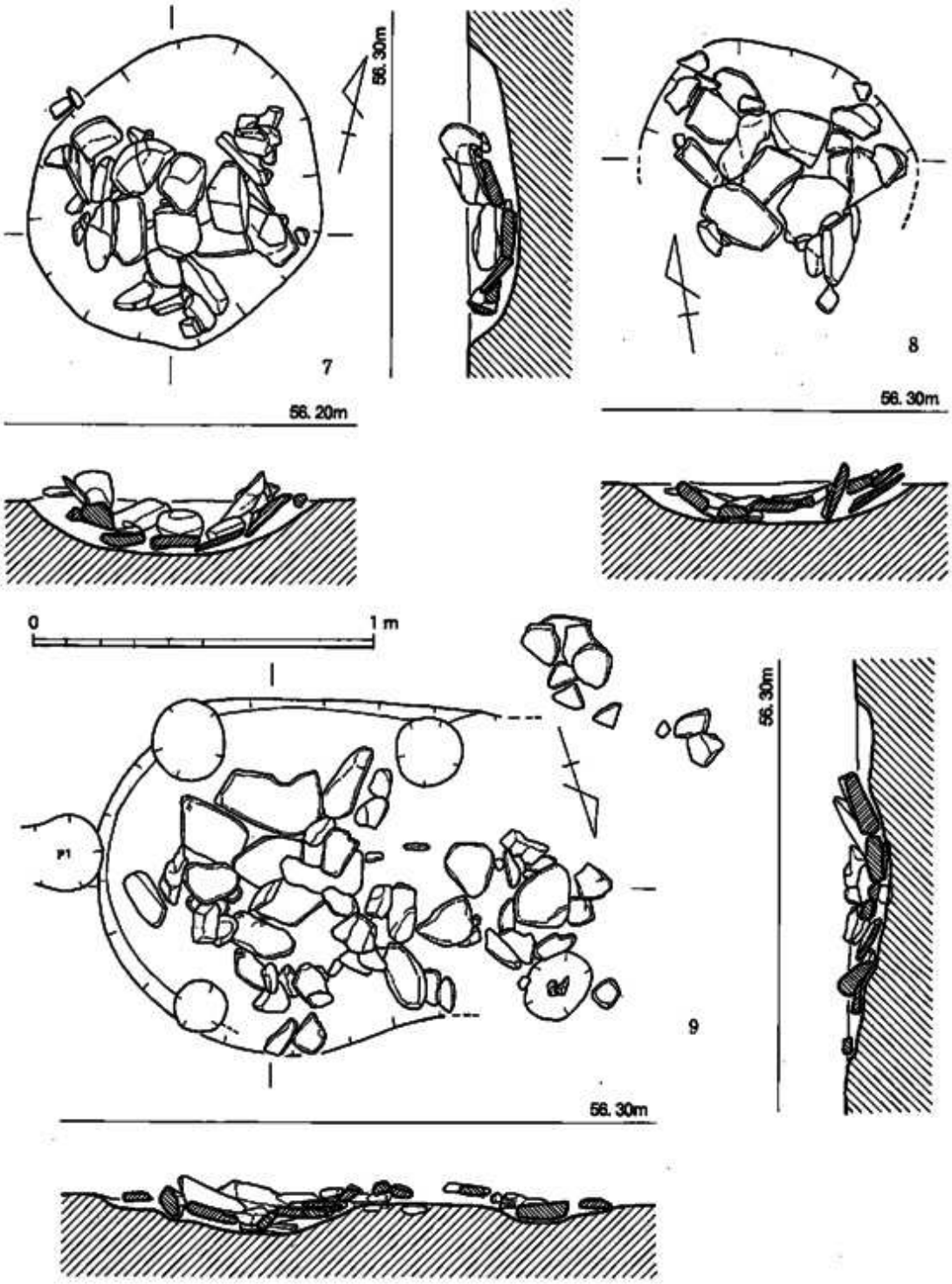
Ｄ３－４区溝状落ち込みの西肩部に単独で位置する典型的なＢ類の石組炉。90×78cmの不整形プランを呈し、炉の床面は浅いすり鉢状で上端径53cm、床面径40cm、深さ12cmを測る。石組炉内の北側は一部の石材が抜かれているが、使用された石材は２石の輝石安山岩を除いて他は絹雲母石英片岩。

8号石組炉（図版59―(2)、第109図）

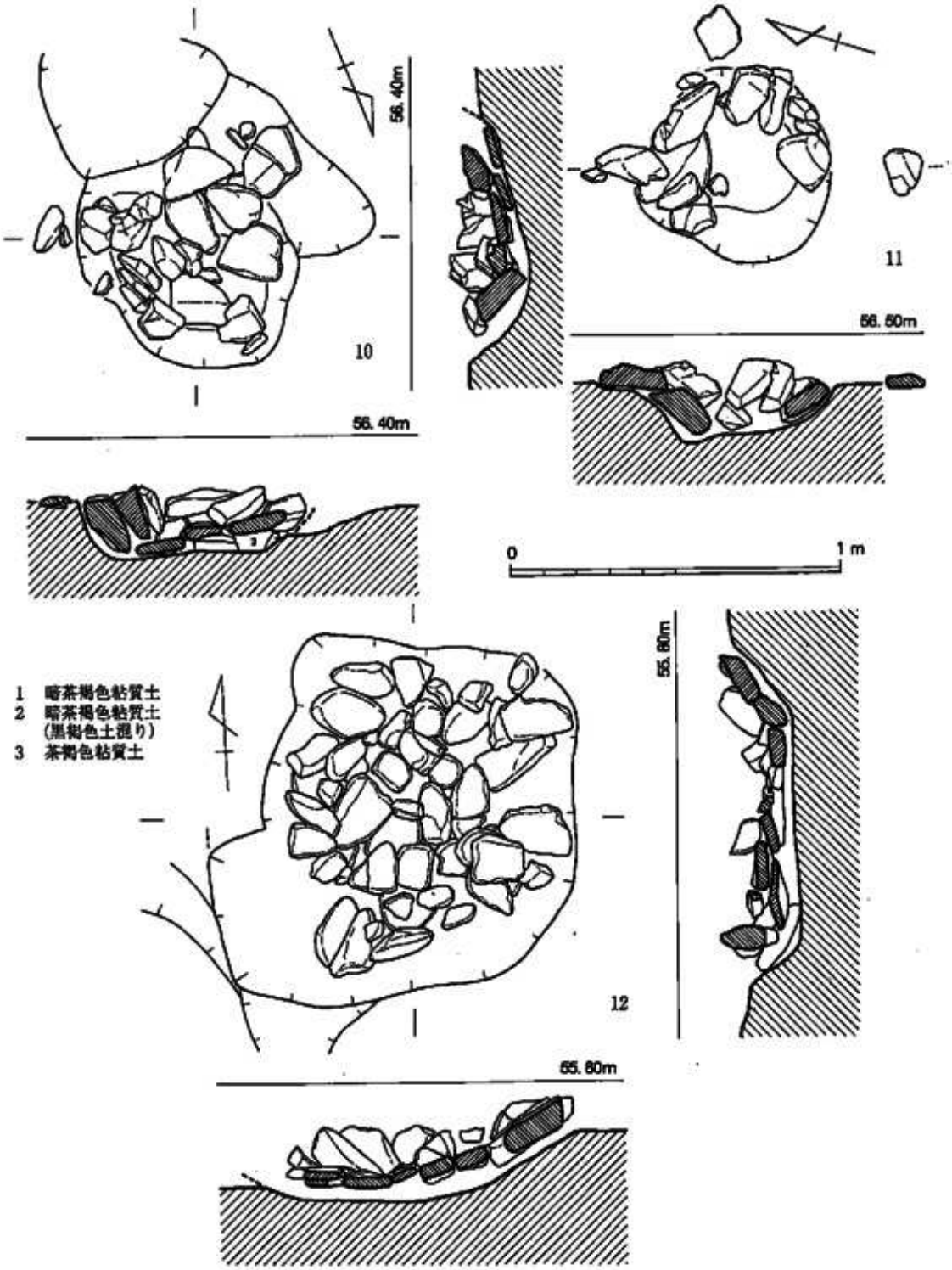
Ｆ３－１区に単独で検出された石組炉でⅡ区では最も東端に位置する。南半は削平されているがＢ類に属す。断面は浅いすり鉢状を呈し、上端径46cm、床面径35cm、深さ13cm。大半は絹雲母石英片岩であるが、一部、緑泥片岩を使用する。

9号石組炉（図版60―(1)、第109図）

Ｃ２－２区に４・５号集石と並んで検出された。東西105cm、南北105cmの範囲に石材が集中するが、石組炉は東側部分になる。浅く窪んだ掘方は80×105cmの円形を呈し、２段掘りである。炉の上端径58cm、床面径36cm、深さ10cm。Ｂ類に分類され、断面にかかる石材は４石である。炉内の石材間には炭を少量含んだ黒い灰が部分的に見られる。内部より摩滅した小さな土器片が出土。なお、石組炉の西側にも10数点からなる石材の集中部があり中央の石は浅い掘り込みの中に置かれることから、別の石組炉が破壊された可能性がある。石材はすべて絹雲母石英片岩である。また、９号石組炉を切るＰ１からは縄文晩期の土器が出土した。



第109図　7号～9号石組炉実測図（1/20）



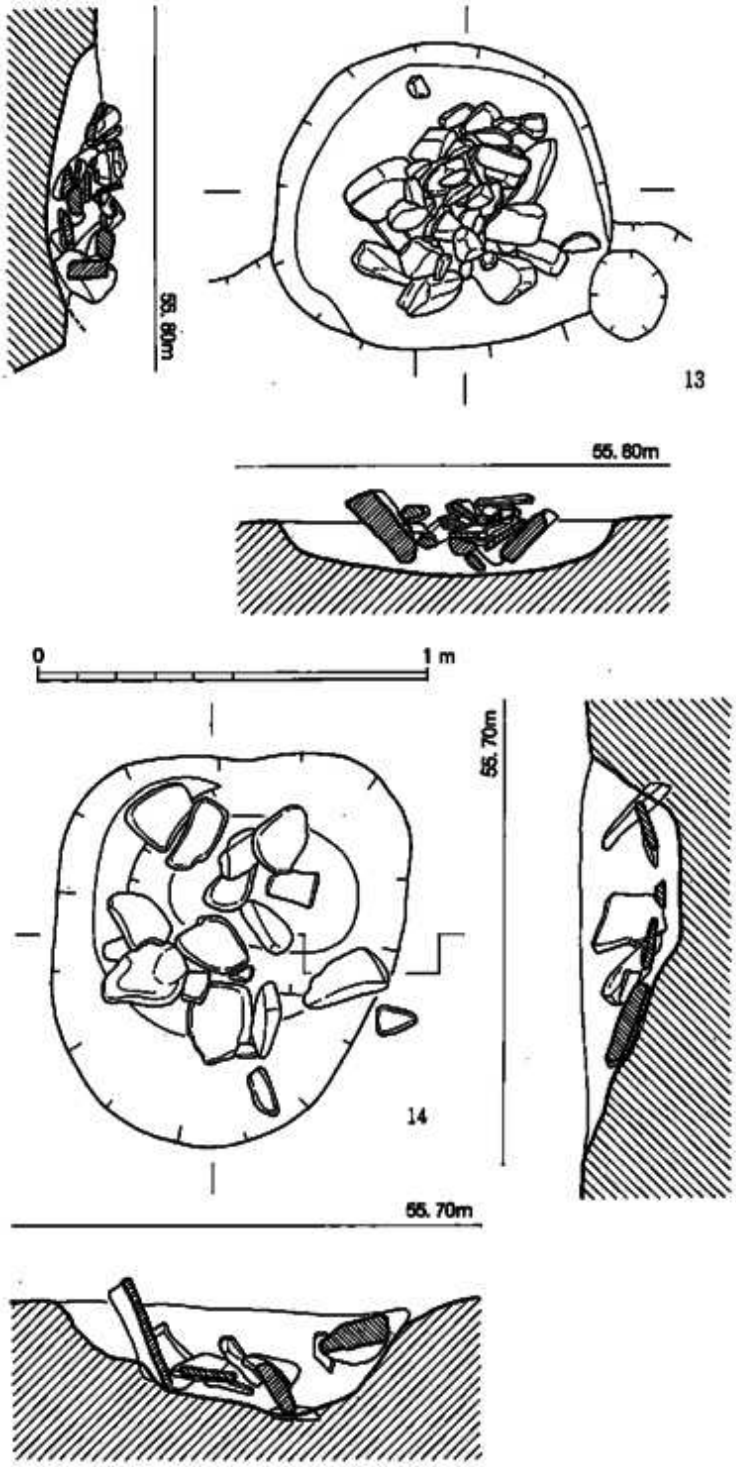
第110図　10号～12号石組炉実測図（1/20）

10号石組炉（図版60―(2)、第110図）

11・12号石組炉、6号集石の4基とグループをなし、その西端C1－1区に位置する。西側の掘方は新しい遺構によって破壊されているが、B類に属す。74×65cmの不整形を呈し、東側の周囲の石材は2石が立つ。上端径33cm、床面径23cm、床面の石材は熱を受けているものが多い。石組炉内の堆積土は1層は赤い灰が混入した暗茶褐色粘質土、2層は1層に黒褐色土が含まれる。3層は茶褐色土の粘質土。使用された石材は緑泥片岩が大半である。

11号石組炉（図版61―(1)、第110図）

10号石組炉の東側1m、C1－1区に位置する。63×63cmの円形の掘方を有し、炉は上端径40cm、床面径21cm、深さ15cm。西側の石材は抜かれているが、床石を持たずに周囲の壁石のみで構成される形態の炉でC類に分類



第111図　13号・14号石組炉実測図（1/20）

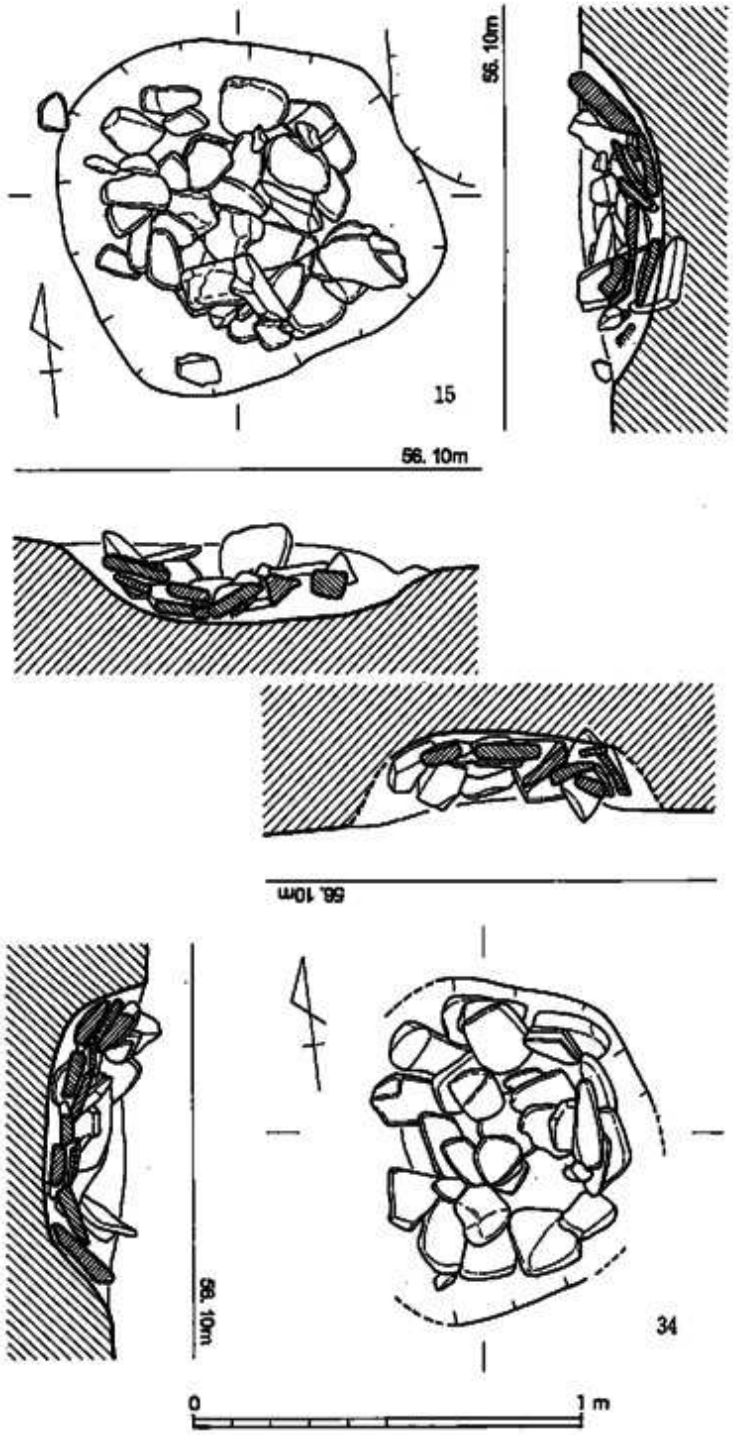
される。北側の石材間に一部灰の層が認められ、炉の内部には暗茶灰褐色粘質土が堆積する。使用された石材は輝石安山岩である。

12号石組炉（図版61―(2)、第110図）

調査区の西側、13・23号炉と3基で構成されるグループの南端、B3－2区に検出された。西側の一部が破壊されているが掘方は103×95cmの方形プランを有す。炉は上端径83cm、床面径70cm、深さ20cmを測る大型でB類の整った花弁状の石組炉であるが、南側の1石のみが直立する。床石の一部には強く熱を受けており、炭が少量検出された。山形押型文土器、無文土器が出土。

13号石組炉（図版62(1)、第111図）

B3－2区に位置し、東側の掘方は削平を受けている。85cmの円形に近い掘方内に築かれた炉は、上端径43cm、床面径23cm、



第112図　15号・34号石組炉実測図（1/20）

深さ13cmを測る。B類に属するが、床面の石材が3石であり、断面も浅鉢状になる小型の石組炉である。

14号石組炉（図版62—(2)、第111図）

調査区の最西端のⅡ区では、最も標高の低い位置に31・33号石組炉3基で一群を構成する。100×90cm、深さ26cmの不整形な掘方内にまばらに石材が残存する。B類で、炉の上端径65cm、床面径35cmを測る。石材はすべて絹雲母石英片岩である。文様不明の土器片が出土。

15号石組炉（図版63—(1)、第112図）

石組炉10基、集石1基が集中するD3－2区中央部に位置し、この炉の直下に重なって34号石組炉がある。88×93cmの隅丸方形の掘方は東側の一部が6号墳の周溝により削平を受けている。B類で、炉の上端径65cm、床面径43cmを測る。石材は一部に輝石安山岩を使用する他は絹雲母石英片岩である。

16号石組炉（図版63—(2)、第113図）

調査区の中央D2－1区に単独に位置する。半分以上は12号土坑で破壊を受けているが、B類であろう。石材は緑泥片岩である。

17号石組炉（図版64—(1)、第113図）

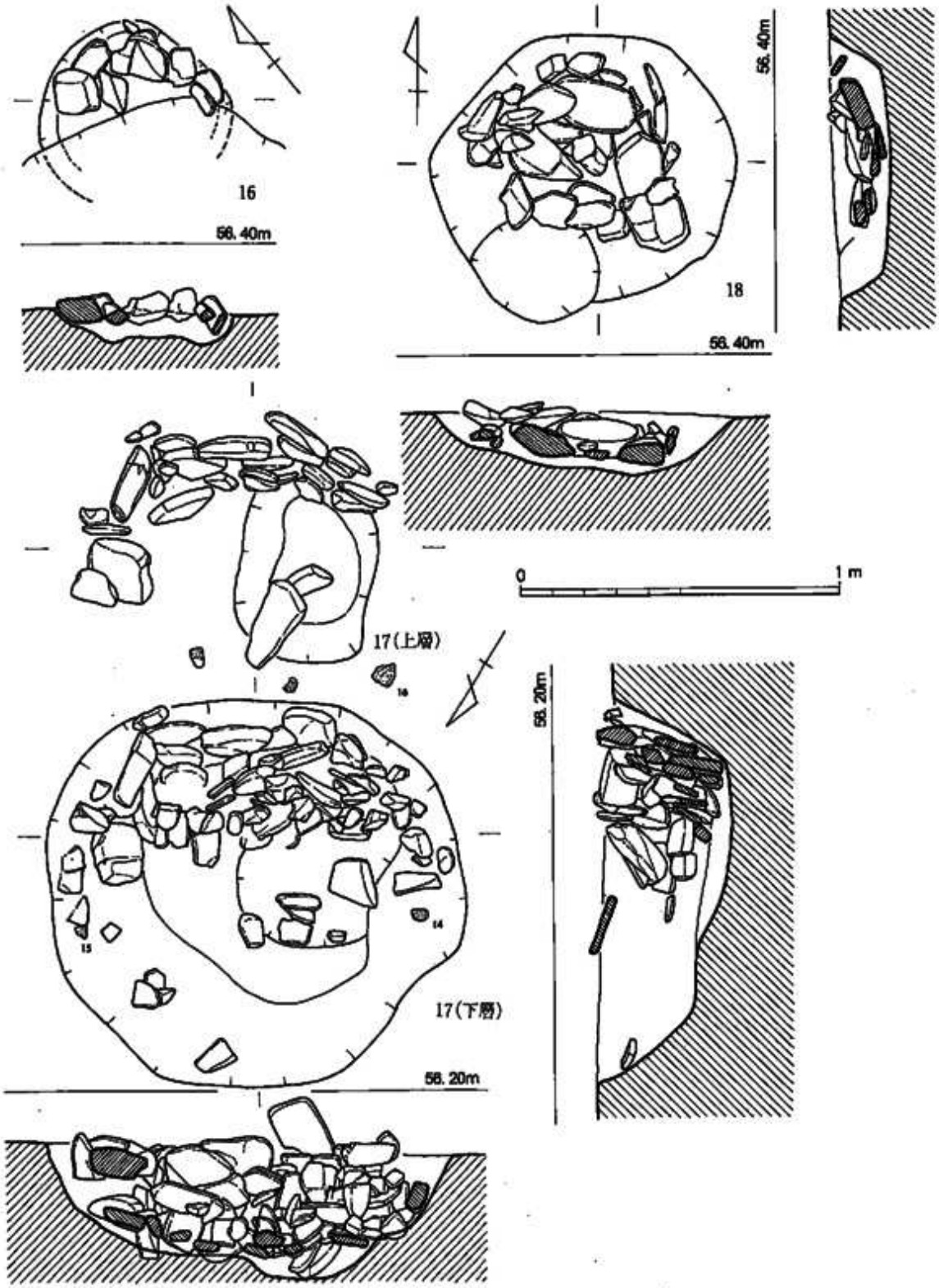
D4－4区に検出され、石組炉集中部の西端に位置する。掘方の上部は128×121cmの不整円形を、下部は110×80cmの隅丸方形を呈す。石組炉内の石材は南半に限られ、深さ40cmの掘方内に密集する。特に南壁では厚さ3cm前後の石材を2～3段積み上げ、3重になる。石組炉内より楕円押型文土器が出土。石材は絹雲母石英片岩。B・C類の炉と異なり床面や周囲の石材の纏まりがなく、多量の石が投げ込まれた状態である。D類として分類した。炉内より山形・楕円押型文土器、無文土器が出土。

18号石組炉（図版64—(2)、第113図）

F3－4区に単独で検出された。西南部は新しいピットにより破壊されている。掘方は95×85cmの円形に近く、炉の形態はB類に属す。上端径45＋αcm、床石径30cm、深さ10cmを測る。炉の下部には茶灰色砂泥土が堆積する。

19号石組炉（図版65—(1)、第114図）

32号石組炉と並んでE3－3区に検出された。84×88cmの円形の浅い掘方を有し、周囲の石



第113図　16号～18号石組炉実測図（1/20）

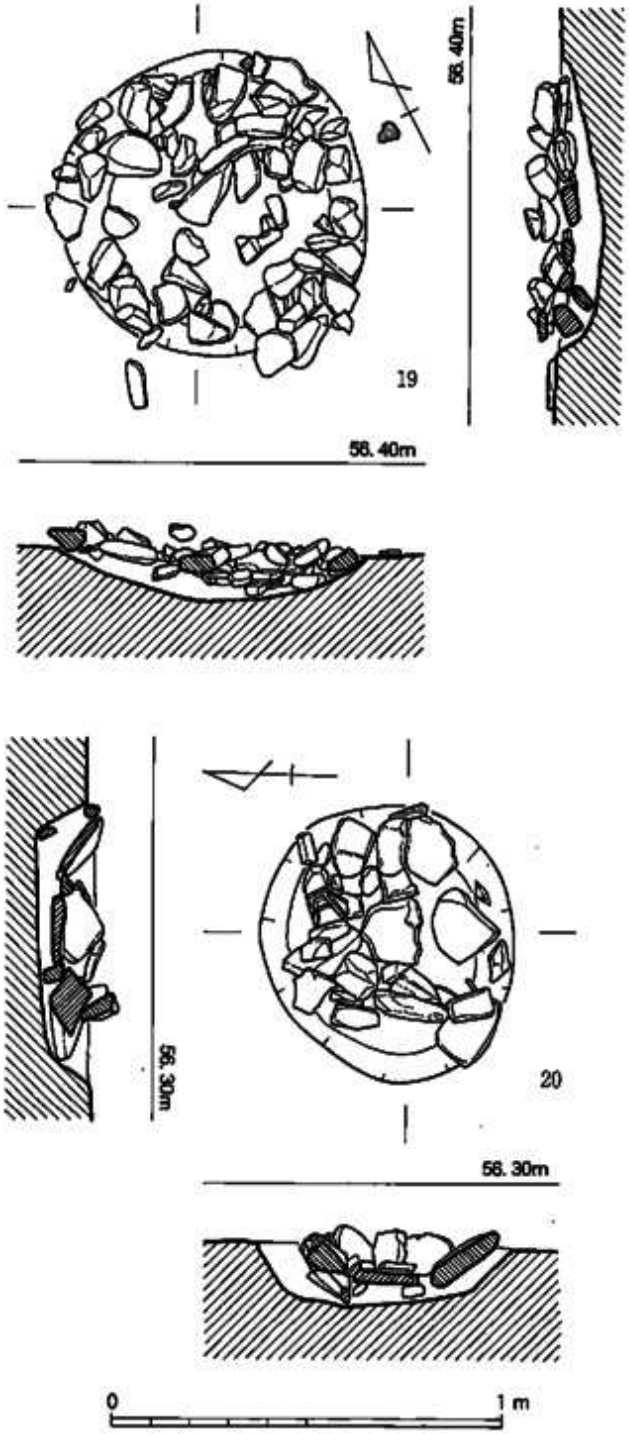
材に対して内部の石材は抜かれている。東西方向の断面は纏まらないがB類であろう。炉の上端径は65cmを測る。使用された石材は絹雲母石英片岩と緑泥片岩で、床面の石材は熱変している。内部からは押型文土器の小片が出土した。

20号石組炉（図版65―(2)、第114図）

調査区の中央北側、21号石組炉の南2mD2－1区に位置する。71×64cmを測る長円形の掘方内の炉は小型だが典型的なB類で、上端径45cm、床面径21cm。床面敷石は中央の1石（厚さ4cm、径15cm）で、その両端に壁石間を充填して小型の石材を置く。石材は絹雲母石英片岩である。

21号石組炉（図版66―(1)、第115図）

D2－3に検出されたB類の石組炉で、わずか3m範囲の礫層空白部に位置する。東西方向に長い80×55cmの掘方東側にテラス面を有す。炉の上端径43cm、床面径30cmを測る。石組炉の石材は抜かれているが、すべて絹雲母石英片岩である。この石組炉が3mの礫層空白部分に築かれたことは重要で、石組炉を中心とする居住行動範囲を想定する資料となろう。



第114図　19号・20号石組炉実測図（1/20）

22号石組炉（図版66—(2)、第115図）

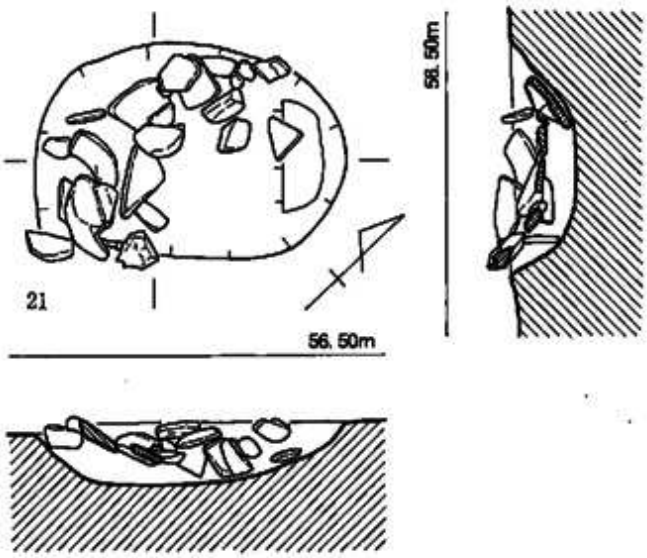
調査区の西北Ｂ３－３区に位置し、10・11号石組炉、６号集石と一群を構成する。78×72cmの不整形掘方を有し、内部には５～12cm大の扁平石や角礫が投げ込まれた状態で充る。明確な床石は認められないことから、Ｄ類であろう。炉内南側には一部灰が堆積する（１層）。石材は絹雲母石英片岩、輝石安山岩である。

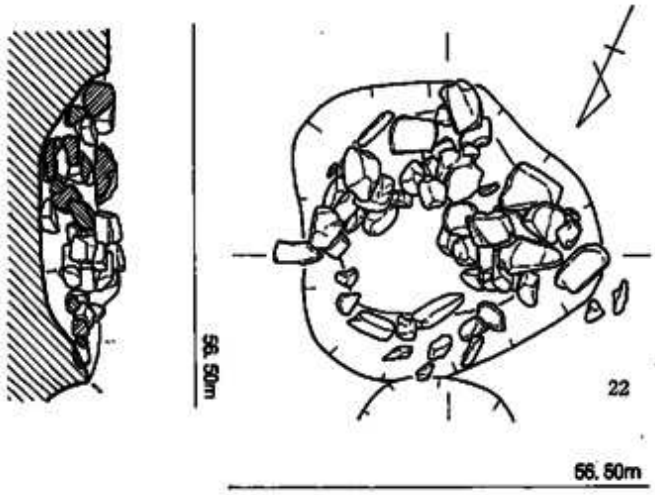
23号石組炉（図版67—(1)、第116図）

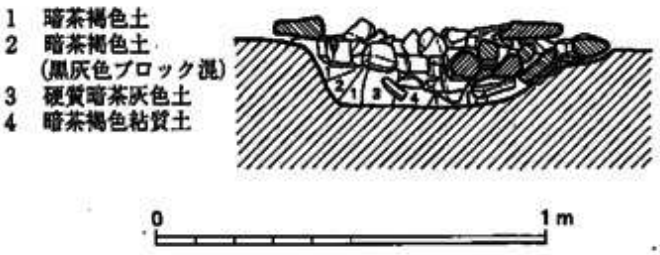
調査区の西側Ｂ３－３区で13号石組炉の北東４ｍに位置する。74×65cm、深さ14cmの掘方内に築かれたＢ類の石組炉で、上端径42cm、床面径25cmを測る。石材はすべて絹雲母石英片岩である。山形押型文土器、無文土器が出土。

24号石組炉（図版62—(2)、第116図）

調査区の中央南端のＤ５－４区に単独で検出され、掘方南側は一部調査区域外となる。石組炉の南から東側の壁石は立石であり、この内側の面、床石表面は熱を受け、脆くなっている。







第115図　21号・22号石組炉実測図（1/20）

B類で上端径47～70cm、床面径45cm。石材は絹雲母石英片岩、輝石安山岩、緑泥片岩が使用されている。

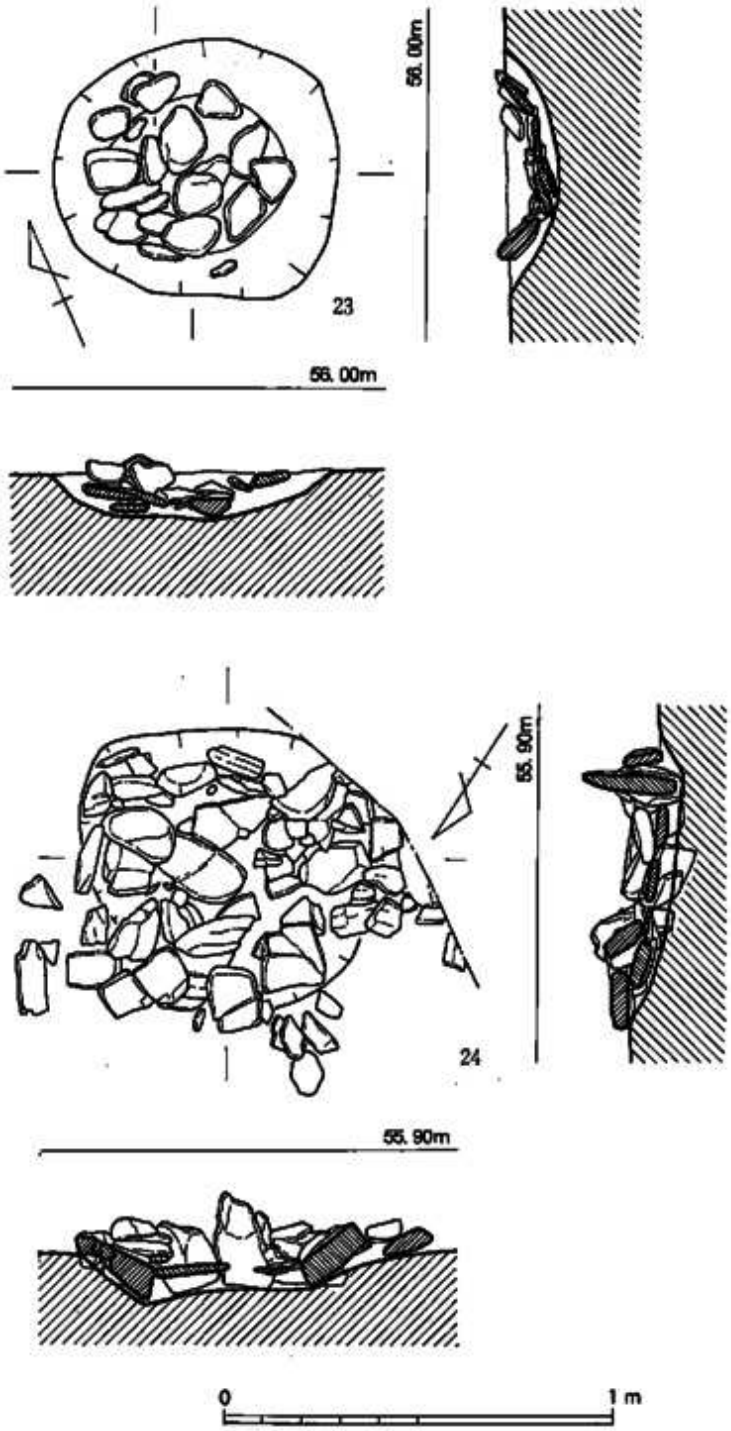
25号石組炉（図版68―(1)・(2)、第118図）

E３－１区に単独で検出されたD類の石組炉。東西153cm、南北115cmの不整形の掘方を有し、深さ55cmを測る。

床面には厚さ20cm、長さ40cm大の角石を含め大きな石材を配す。内部には10cm以下の石材が投げ込まれた状態ですき間なく埋まる。石材の変化は著しく、石材間および床石下部には灰が多く認められる。石材は緑泥片岩、輝石安山岩である。

26号石組炉（図版69―(1)、第117図）

調査区の中央部、D３－１区に単独で検出された。12cmと浅い掘方の西側底面に径30cmほどの掘り込みを有す。炉は10cm大の小さな石材は絹雲母石英片岩を用いて築かれ



第116図　23号・24号石組炉実測図（1/20）

B類である。炉内の埋土は黒灰色の軟らかい土をブロック状に含む淡灰茶褐色土。

27号石組炉（図版69—(2)、第117図）

2・3号石組炉、7号集石と一群を構成し、調査区中央北側のE2－4区に位置する。弥生時代前期末頃の11号住居により大半が削平を受けている。

床石は南北の断面からすると存在した可能性が強くB類であろう。石材は絹雲母石英片岩である。

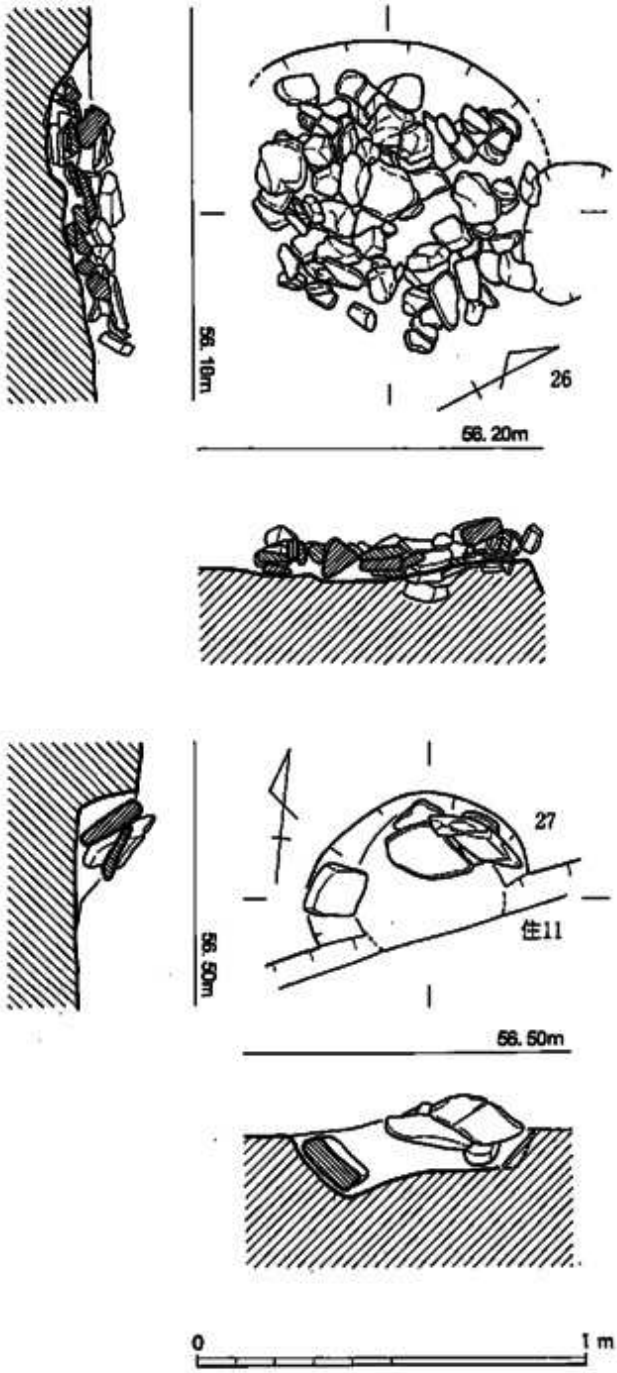
28号石組炉（図版70—(1)・(2)、第119図）

F2－4区に単独で検出された。東西方向に長い80×59cmの長円形プランの掘方を有す。床面には厚さ5cm前後のやや大きめの石材を水平に配し、その上位に扁平な石材が見られることからA類に分類される。

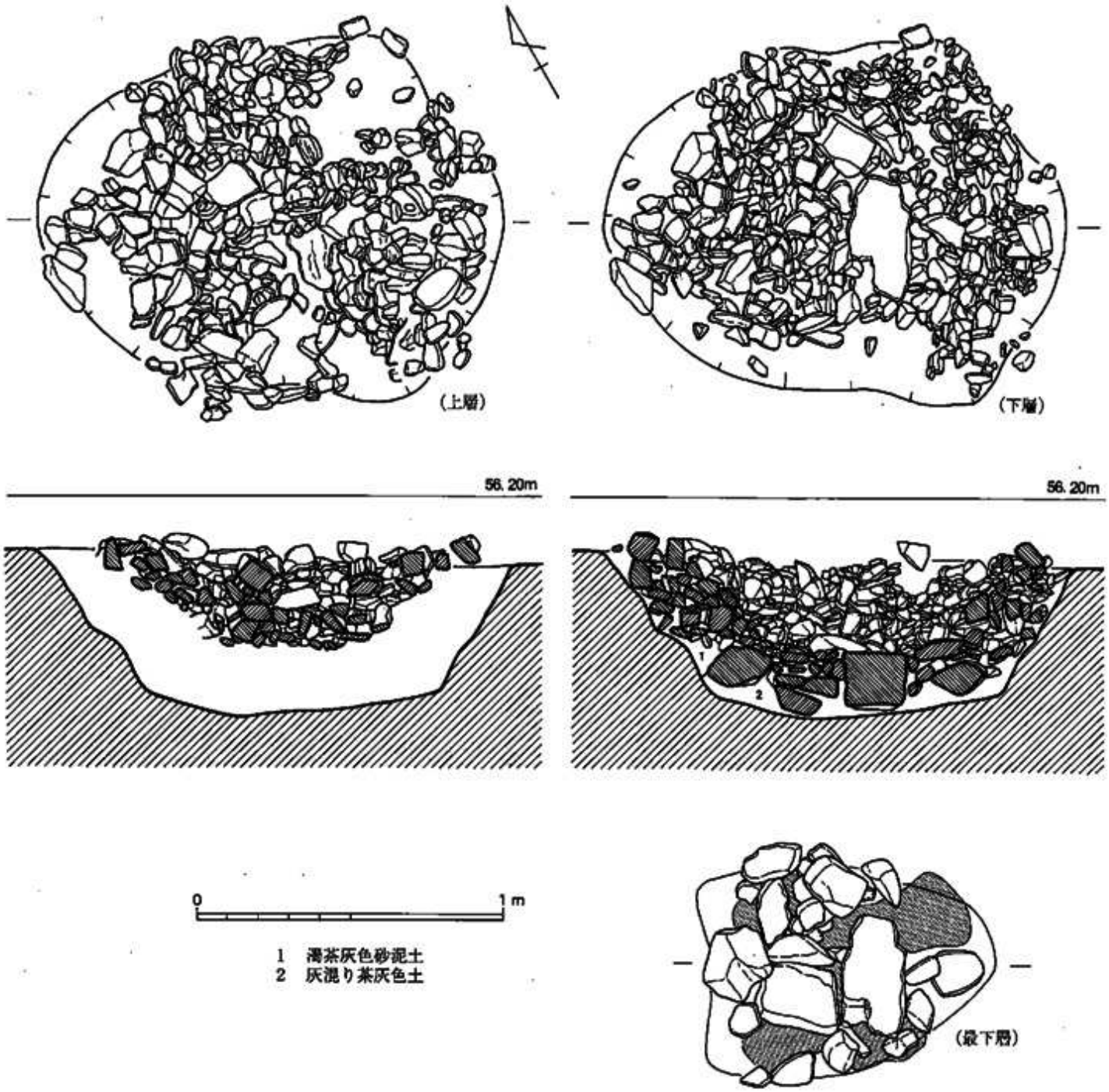
炉内上部から押型文土器、黒曜石剥片が、北側50cmから有孔石製品が出土した。石材は絹雲母石英片岩である。

29号石組炉（図版58—(2)、第106図）

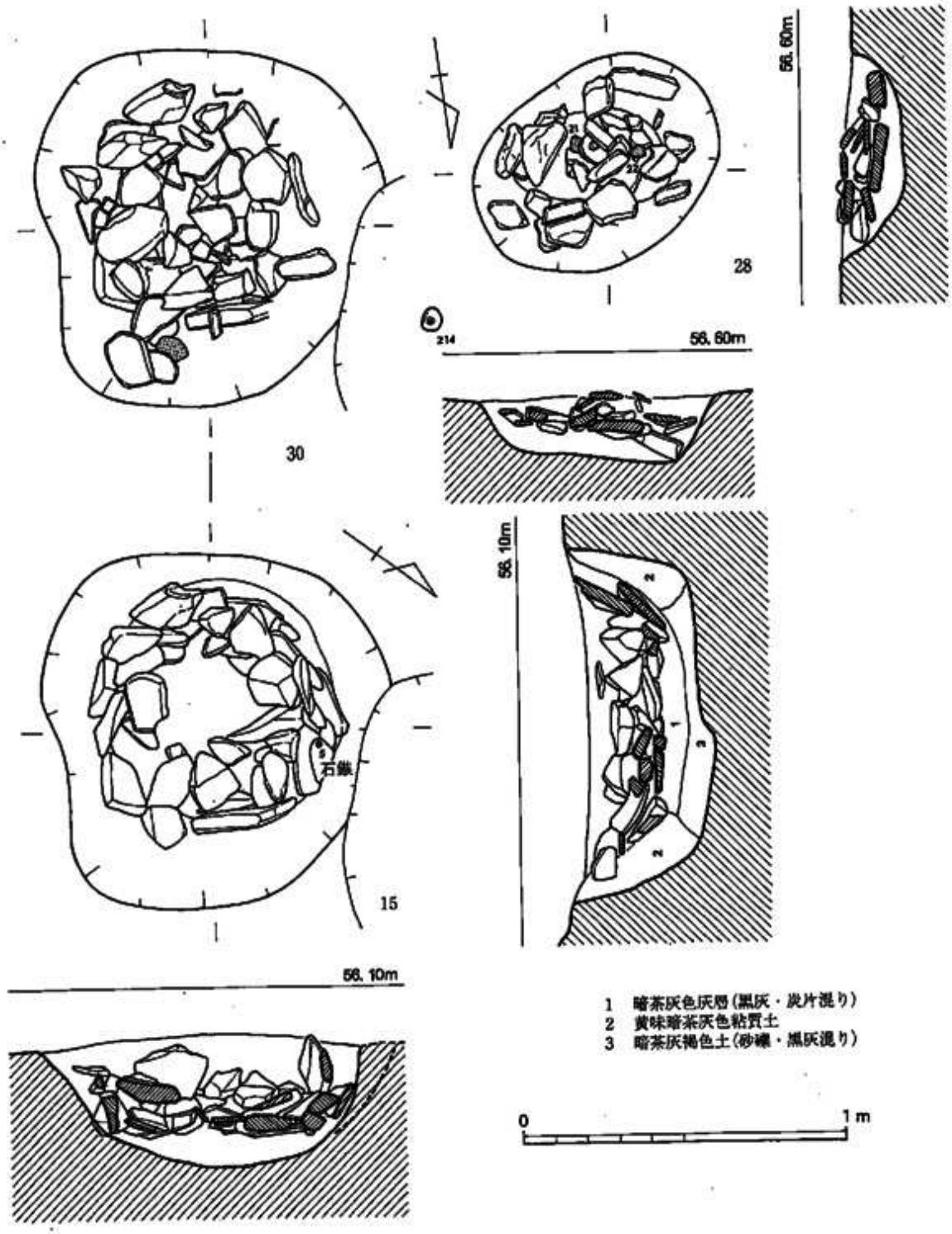
D2・3区の集中部に位置し、5号石組炉を切り、6号石組炉に切られている。南北108cm、東西78cmの長円形掘方内に築かれた炉は典型的なB類で、上端径74cm、床面径48cm、



第117図　26号・27号石組炉実測図（1/20）



第118図　25号石組炉実測図（1/20）



第119図　28号・30号石組炉実測図（1/20）

深さ16cmを測る。

炉内の堆積土は暗茶灰色土。用いられた石材は絹雲母石英片岩1石を除き、緑泥片岩である。

30号石組炉（図版71—(1)、第119図）

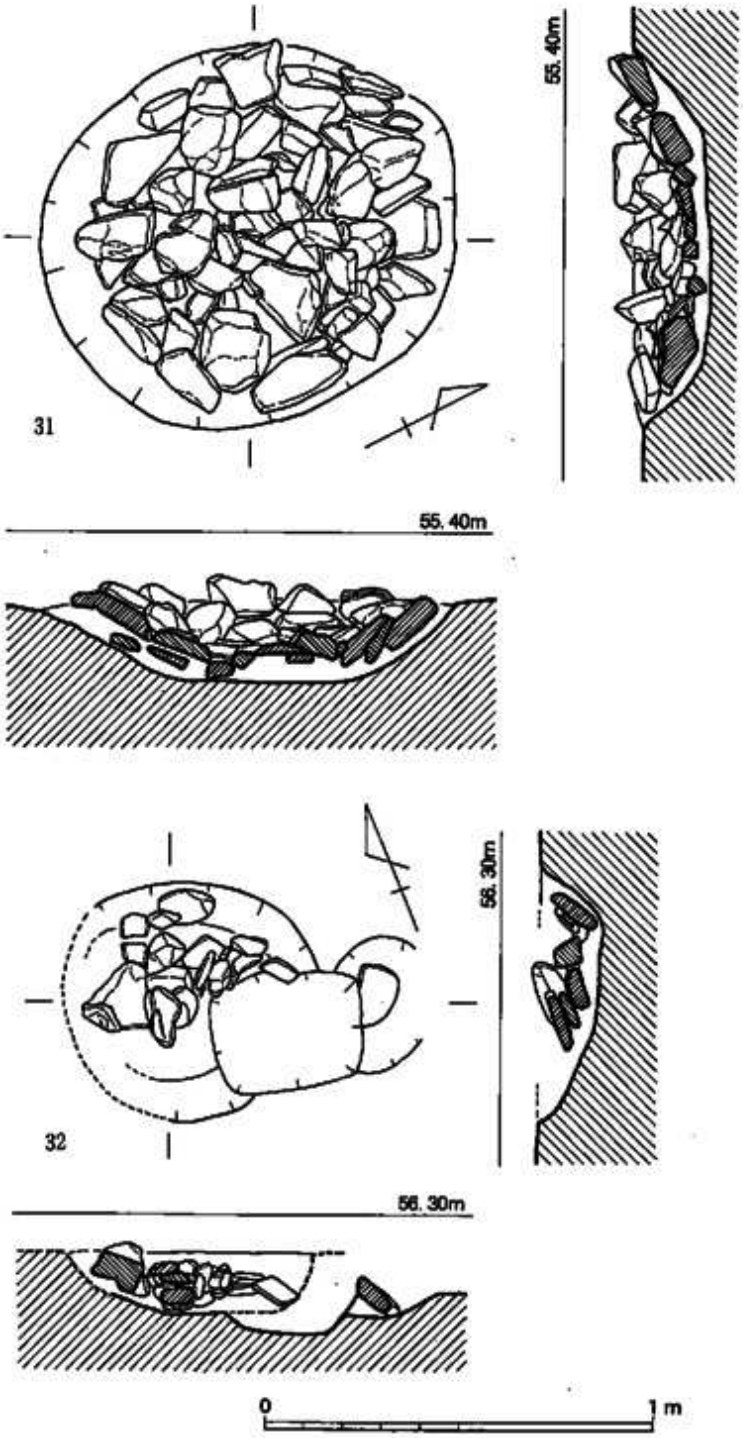
D4－4区に位置し、15号石組炉に切られる。109×92cm、深さ42cmの掘方を有す。床面の石材は中央部には敷かれないことから、C類の炉である。

上端径75cm、床面径55cmを測る。炉上位の石材間には灰が認められ、下層では10cm前後の暗茶灰色土中に灰、炭化物を含み、木の実考えられる植物遺体も検出された。

また、石材間の灰層から石鏃が出土したが、その出土状況からすると、獲物に突き刺さっていたまま蒸された可能性がある。石材はすべて絹雲母石英片岩である。他に無文土器が出土。

31号石組炉（図版71—(2)・72—(1)、第120図）

調査区の西端、14・33



第120図　31号・32号石組炉実測図（1/20）

号石組炉と一群を構成する最も整ったB類の炉である。107×96cmのほぼ円形の掘方内全体に炉が築かれる。

炉は上端径80cm、床面径40cm、深さ15cmを測り、床面の敷石は一部2段になる。炉石は熱を受けているものが目立つ。炉内の埋土は暗茶褐色の粘質土であるが、床面の下層には7cm前後の炭化物・灰・焼土を多く含んだ土層が堆積する。敷石の断面からすると炉を使用して堆積した土層とは考え難く、炉の構築にあたって床面下に意識的に敷いたものであろう。石材はすべて絹雲母石英片岩である。

32号石組炉（図版72—(2)、第120図）

E3－4区で、19号石組炉の西側2mに位置し、北側の掘方以外は削平され不明である。炉内の石材も倒壊しており、本来はB類の小型炉と考えられる。石材は緑泥片岩、絹雲母石英片岩を用いる。炉内より山形押型文土器が出土。

33号石組炉（図版71—(2)、第121図）

II区の石組炉では最西端に位置し、標高も55.25mと最も低い。102×92cmとほぼ円形の掘方を有す。炉内の石材は雑然としており、使用後に破壊された可能性があるが、炉の形態はB類。炉石は熱を受け赤変している。床面下には31号炉と同様に炭化種子、焼土、炭化材が堆積する。

34号石組炉（図版73—(1)、第112図）

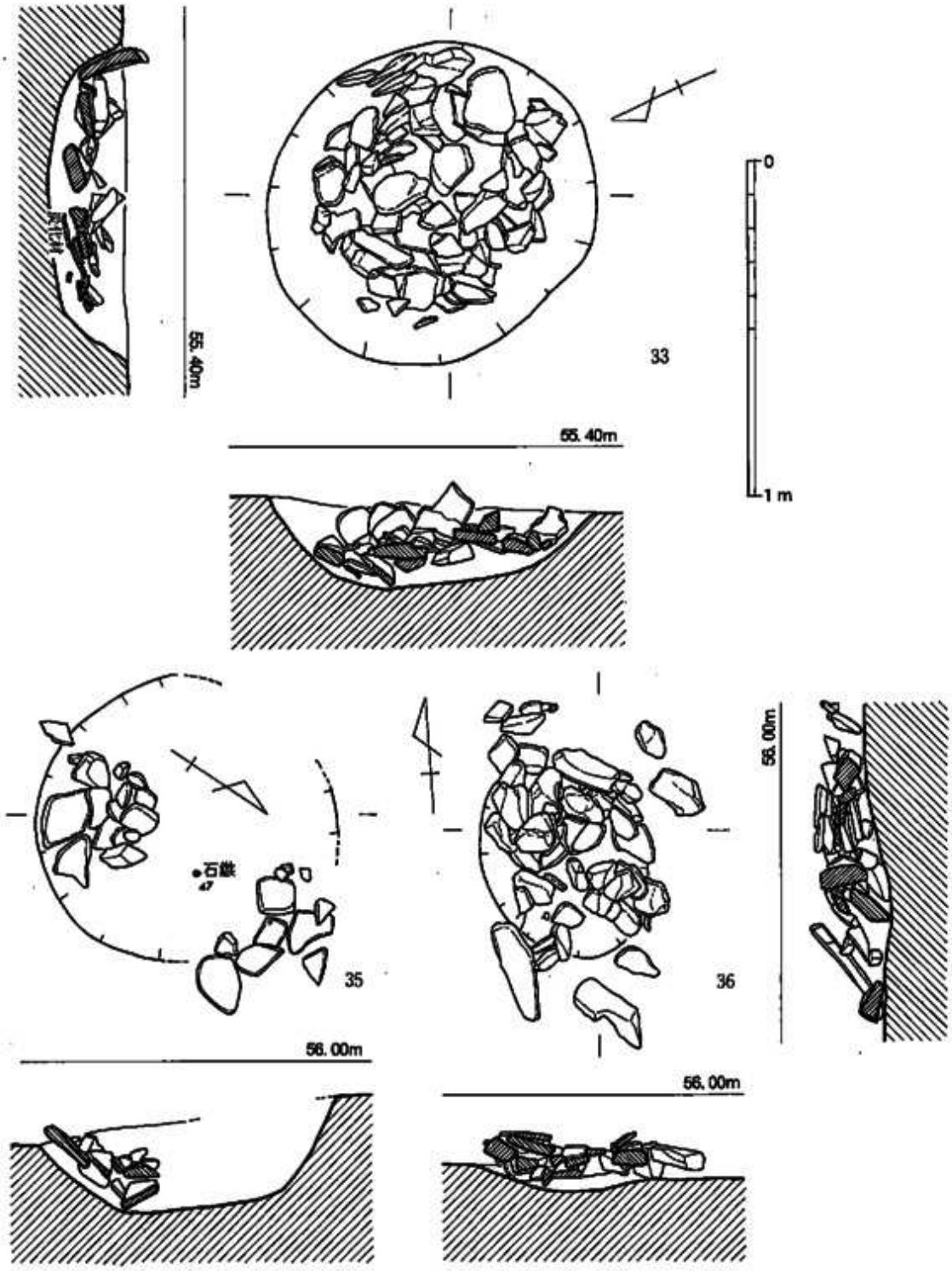
15号石組炉の下層（D4－3区）に重複して検出された。層位的には5層下部で、掘方は南北の一部を残すのみである。B類で、南北の断面は床石および周囲壁石が2重となる。炉の上端径67cm、床面径46cm、深さ14cmを測る。石材はすべて絹雲母石英片岩である。この石組炉は朝倉町に移築した。

35号石組炉（図版73—(2)、第121図）

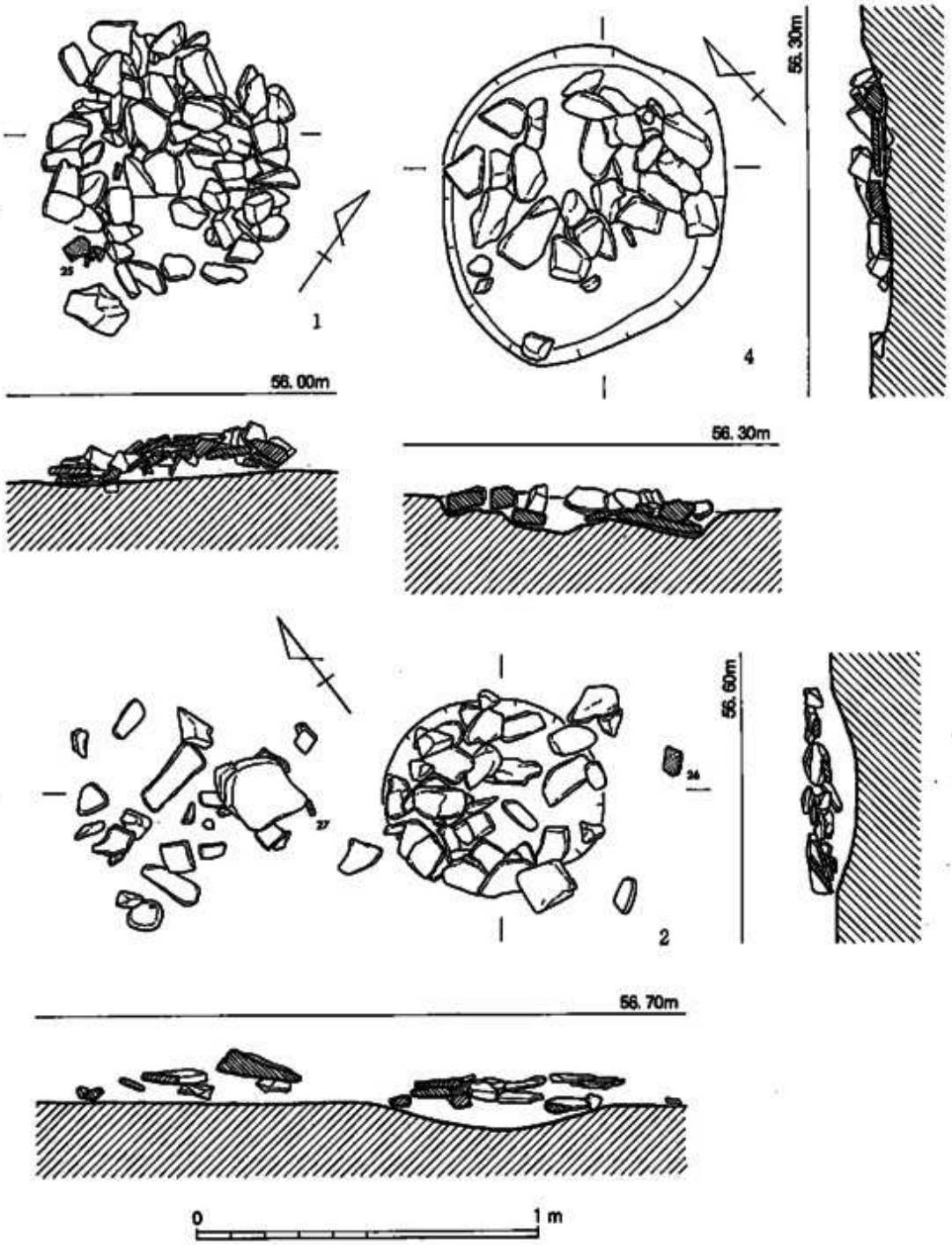
石組炉の集中部東側に位置する。4号石組炉に切られ、大半が破壊されている。炉内下層より山形押型文土器、石鏃が出土した。石材は絹雲母石英片岩である。

36号石組炉（図版74—(1)、第121図）

D4－4区に検出され、8号集石に切られる。浅い掘り込みの中に集石状に石材が纏まる。石材は雑然としており、ほとんど熱変化を受けていない。石材は緑泥片岩である。石組炉とするより集石と考えたい。内部からは黒曜石剥片が出土。



第121図　33号・35号・36号石組炉実測図（1/20）



第122図　1号・2号・4号集石遺構実測図（1/20）

（4）集石遺構

掘り込みをほとんど持たずに、石材が纏まる遺構を集石遺構とし、9基を検出した（第24表）。

1号集石遺構（図版74―(2)、第122図）

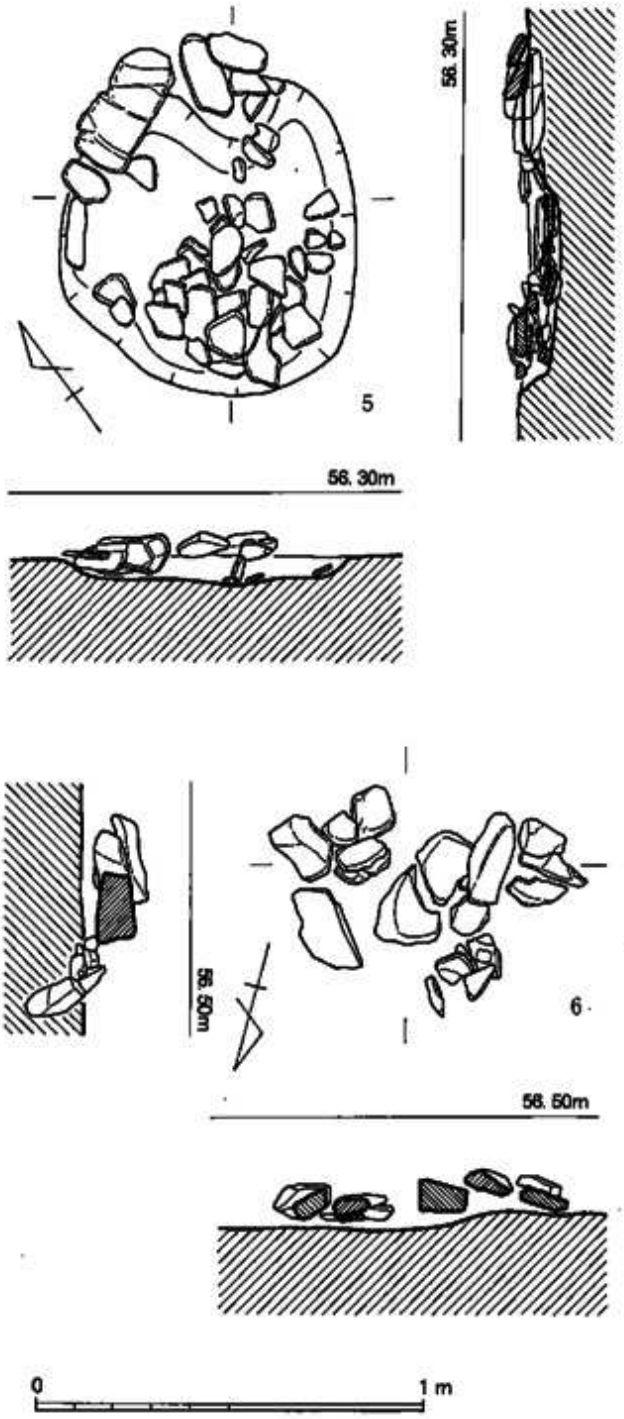
G5－4区に単独で検出された集石で、石組炉を含めて最東端に位置する。南北92m、東西78cmの範囲に円形状に拡がり、東西両端の石材に対して内側の石材は盛り上がっている。石材は熱変し、2石の輝石安山岩を除いて絹雲母石英片岩で構成される。集石の内部より無文土器が出土。

2号集石遺構（図版75―(1)、第122図）

調査区の中央北側で2・3・27号石組炉、7号集石と一群をなし、その東側E1－3区に位置する。東西185cm、南北70cmの範囲に拡がり、東側には径65cm、深さ6cmの浅い掘り込みがあり石材が円形に纏まる。掘方内の石材は下底面に敷かれることなく、上位に並ぶ状況である。山形押型文土器、無文土器が出土。

4号集石遺構（図版75―(2)、第122図）

9号石組炉、5号集石と一群を構



第123図　5号・6号集石遺構実測図（1/20）

成し、C２－１区に位置する。93×83cmの凹凸のある浅い掘方を有し、その北側に石材が纏まる。床面に水平に敷かれた石材の上にも、投げ込まれた状況の石があり、その間に灰が検出されたことから、A類に分類される石組炉の可能性が強い。石材は絹雲母石英片岩である。

５号集石遺構（図版76―(1)、第123図）

４号集石の北１m、C２－１区に位置する。93×76cmの範囲に絹雲母石英片岩が纏まる。掘方は石材を除去してから把握したもので、遺構検出時は不明である。

６号集石遺構（図版76―(2)、第123図）

C２－１区に位置し、10・11・22号石組炉と一群を構成する。82×60cmの範囲に絹雲母石英片岩の20石が纏まる。灰等は認められない。

７号集石遺構（図版77―(1)、第124図）

E１－１区、２号石組炉の東側２mに位置する。145×95cmの範囲に拡がり、南側に70cmほどの集中部分がある。深さ12cmの掘方があるが、平面プランは確認できていない。断面の石材の配置からするとB類の石組炉の可能性が強い。　絹雲母石英片岩・緑泥片岩の石材間に灰が一部観察された。楕円押型文土器のほか山形押型文土器も出土。

８号集石遺構（図版77―(2)、第124図）

調査区の中央南側で、石組炉10基と一群を構成する。36号石組炉の直上に位置する。径63cmの円形プランに拡がる石材は外周のみである。石材は砂岩・輝石安山岩・絹雲母石英片岩が使われている。

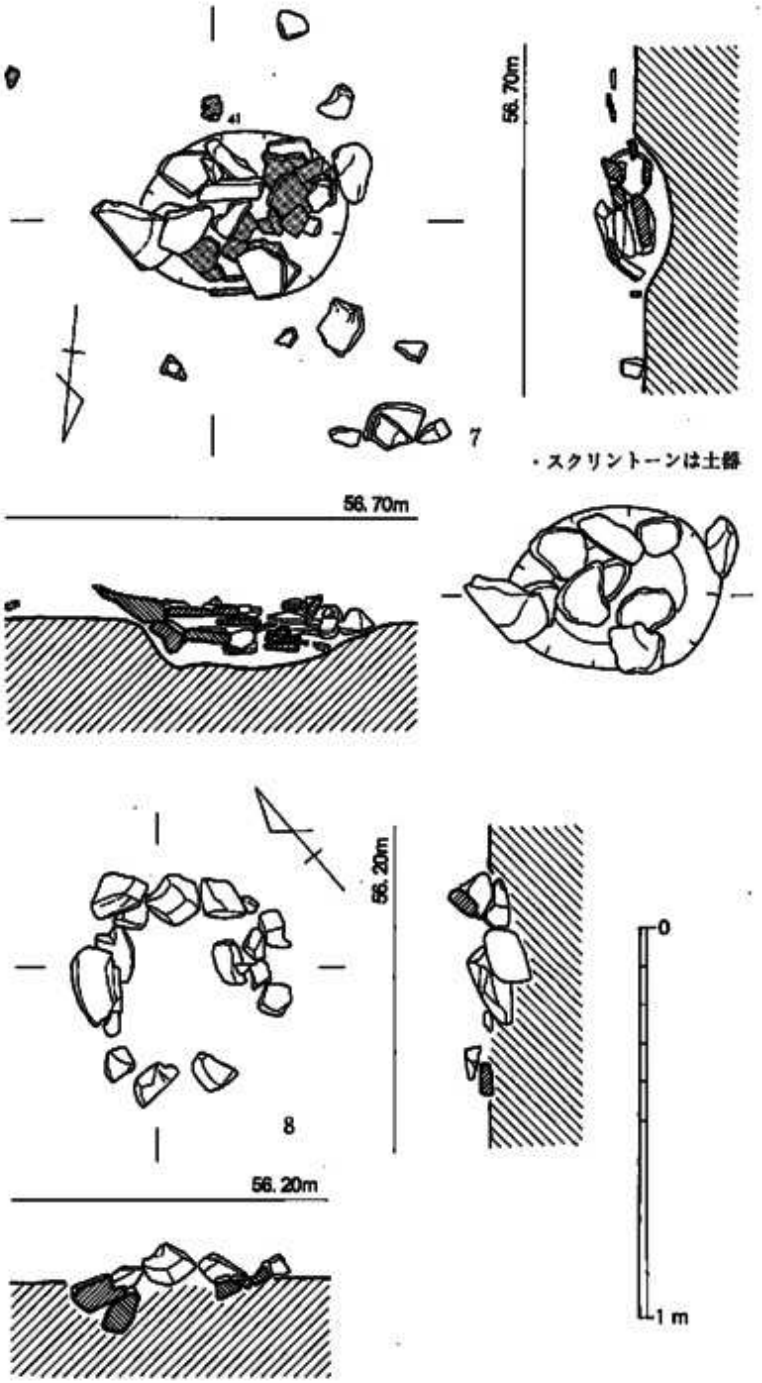
９号集石遺構（図版78―(1)、第125図）

E２－１区に単独で検出された。95×70cmの範囲に石材が散在し、その間に数個体の山形押型文土器、無文土器が重複し、投棄された状態で出土した。埋土は暗茶灰色砂泥土。石材はすべて緑泥片岩である。

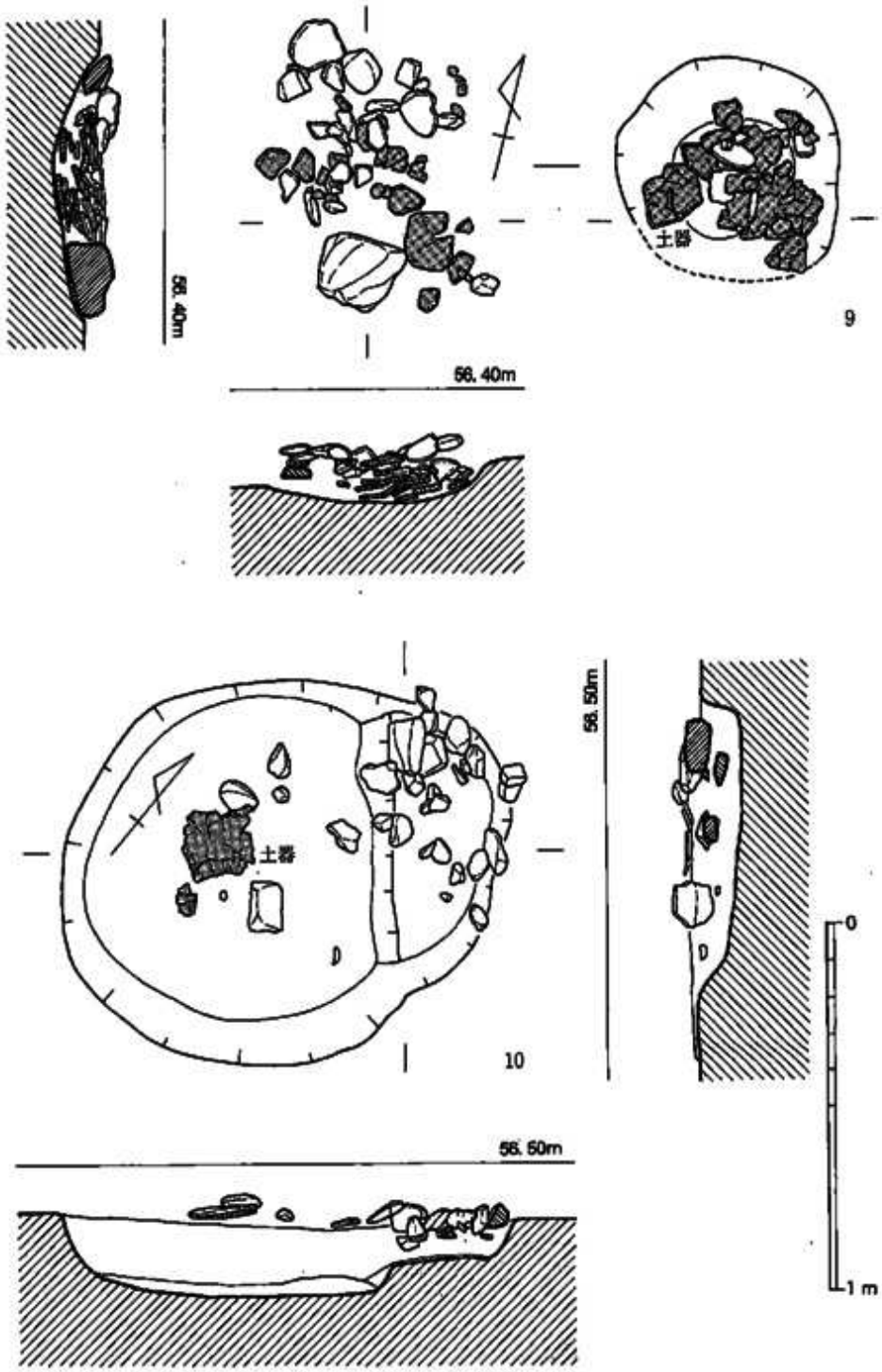
10号集石遺構（図版78―(2)、第125図）

D１－４区に単独で検出され、石組炉を含めて最も北側、高所に位置する。東西125cm、南北105cm、深さ20cmの円形に近い掘方を有し、東側に深さ10cmのテラス面を持ち、石材はこのテラス面に集中する。掘方上位から山形押型文土器が出土した。集石遺構としたが土坑である。

（木下）



第124図　7号・8号集石遺構実測図（1/20）



第125図　9号・10号集石遺構実測図（1/20）

（5）遺構出土遺物

10号土坑出土縄文土器（図版84、第126図0、第127図1～3、第229図502）

0は1/2程度が遺存する小型の深鉢で、復原口径は22cmを測る。器面調整は内外面ともに条痕。1は復原口径40cmの鉢で、器面調整は内外面ともに条痕の後にナデが施される。口縁部には幅3cmの突起が付く。2は鉢の胴部で、屈曲する部分に相当する。内外面ともに丁寧な研磨が施される。3の深鉢は内面のみ条痕の後にナデを施す。

第126図　10号土坑出土縄文土器実測図（1/3）

23号土坑出土縄文土器（第127図5・6）

5・6ともに縄文早期の土器である。本遺跡出土の他の縄文早期土器から判断して、5は押型文土器に伴う無文土器で、6は押型文土器の底部である可能性が高い。6の復原底径は10cm。

34号土坑出土縄文土器（第127図4）

4の底部は外側へ突出する特徴から、縄文晩期の深鉢の底部と考えられる。外面には炭化物が付着し、底部には原体不明の圧痕が残る。

3号石組炉跡出土縄文土器（図版84、第128図7）

7は内外面ともに山形文が施される押型文土器の口縁部で、外面は中央部が大きく剥落する。

4号石組炉跡出土縄文土器（図版84、第128図8）

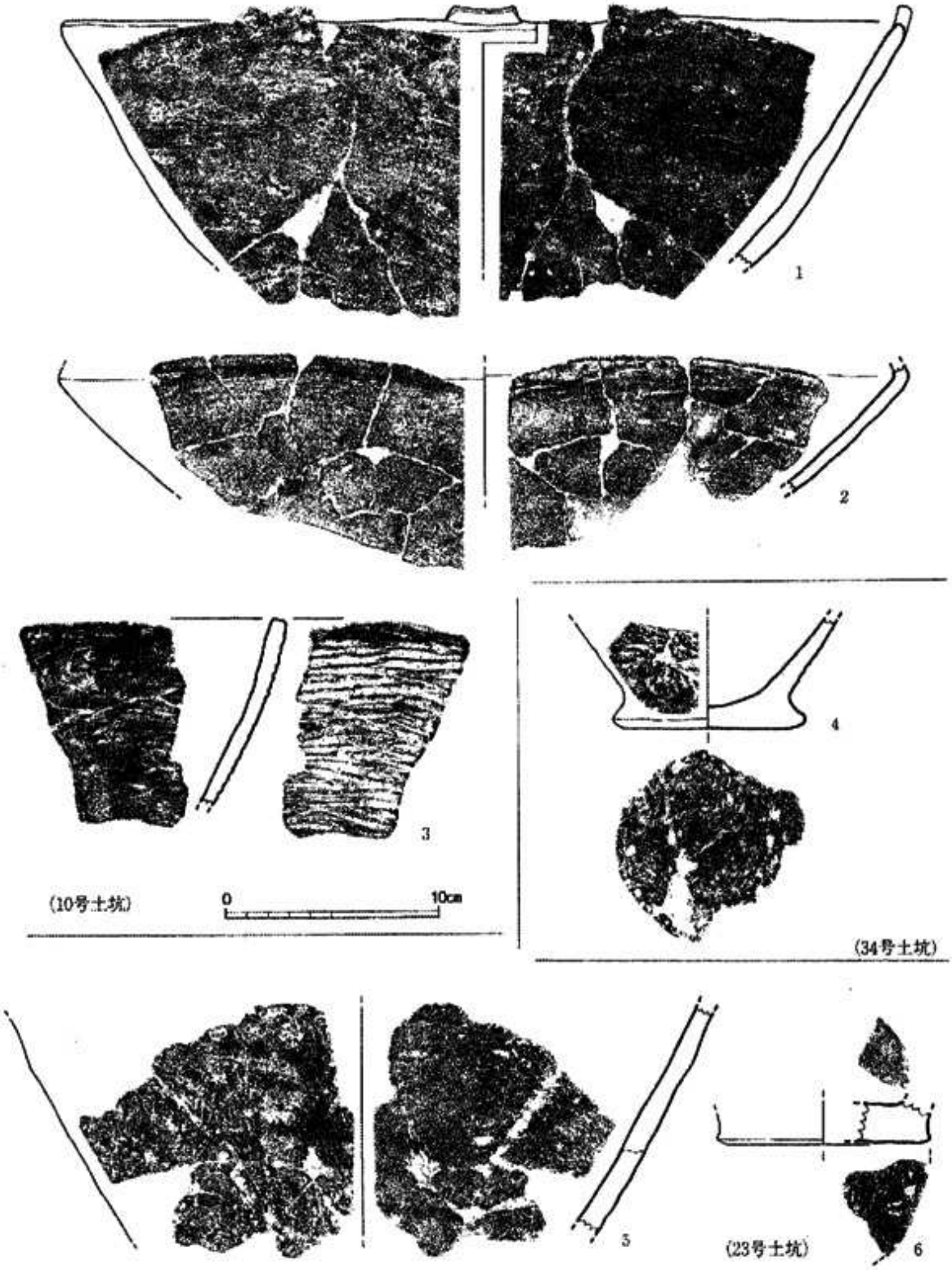
8は外面に山形文が施される押型文土器。

6号石組炉跡出土縄文土器（図版84、第128図9）

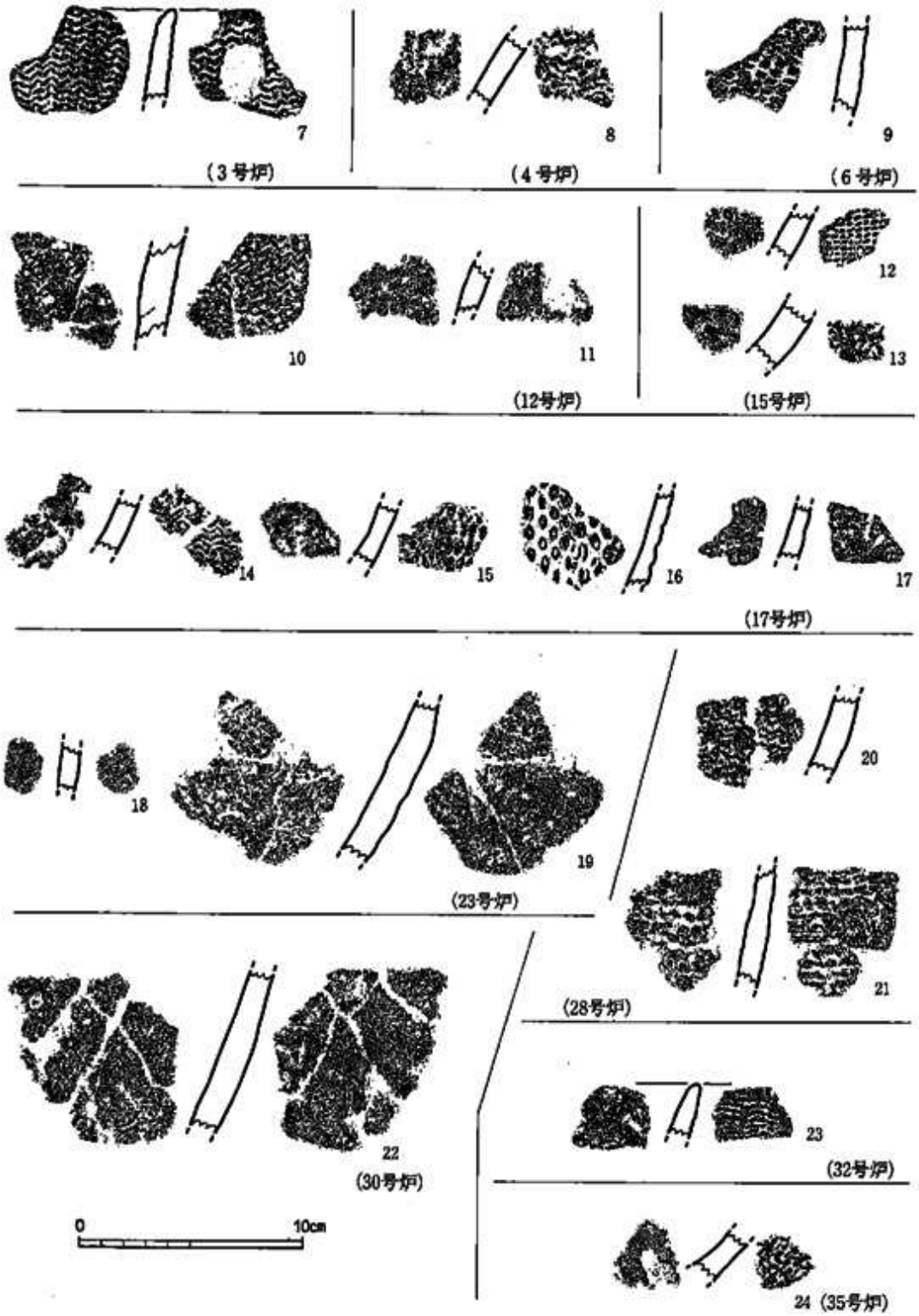
9は外面に楕円文が施される押型文土器。

12号石組炉跡出土縄文土器（図版84、第128図10・11）

10は口縁部ではないが、内外面に山形文が施される押型文土器。11は無文土器で外面が大き



第127図　10号・23号・34号土坑出土縄文土器実測図（1/3）



第128図　石組炉跡出土縄文土器実測図（1/3）

く剥落する。

15号石組炉跡出土縄文土器（図版84、第128図12・13）

12は外面に楕円文が施され炭化物も付着する押型文土器。13も楕円文の押型文土器であるが摩滅が著しい。

17号石組炉跡出土縄文土器（図版84、第128図14～17）

14は山形文が、15・16は楕円文が施される押型文土器。内面の調整はいずれもナデ。17は無文土器で、内外面ともにナデが施される。

23号石組炉跡出土縄文土器（図版84、第128図18・19）

18は外面に山形文が施される押型文土器。19は無文土器。

28号石組炉跡出土縄文土器（図版84、第128図20・21）

20は山形文が施される。21は口縁部の近くなのであろうか、内外面に楕円文が施される。

30号石組炉跡出土縄文土器（図版84、第128図22）

22は無文土器で、内外面ともにナデが施される。

32号石組炉跡出土縄文土器（図版84、第128図23）

23は山形文が施される押型文土器の口縁部であるが、内面は無文である。

35号石組炉跡出土縄文土器（図版84、第128図24）

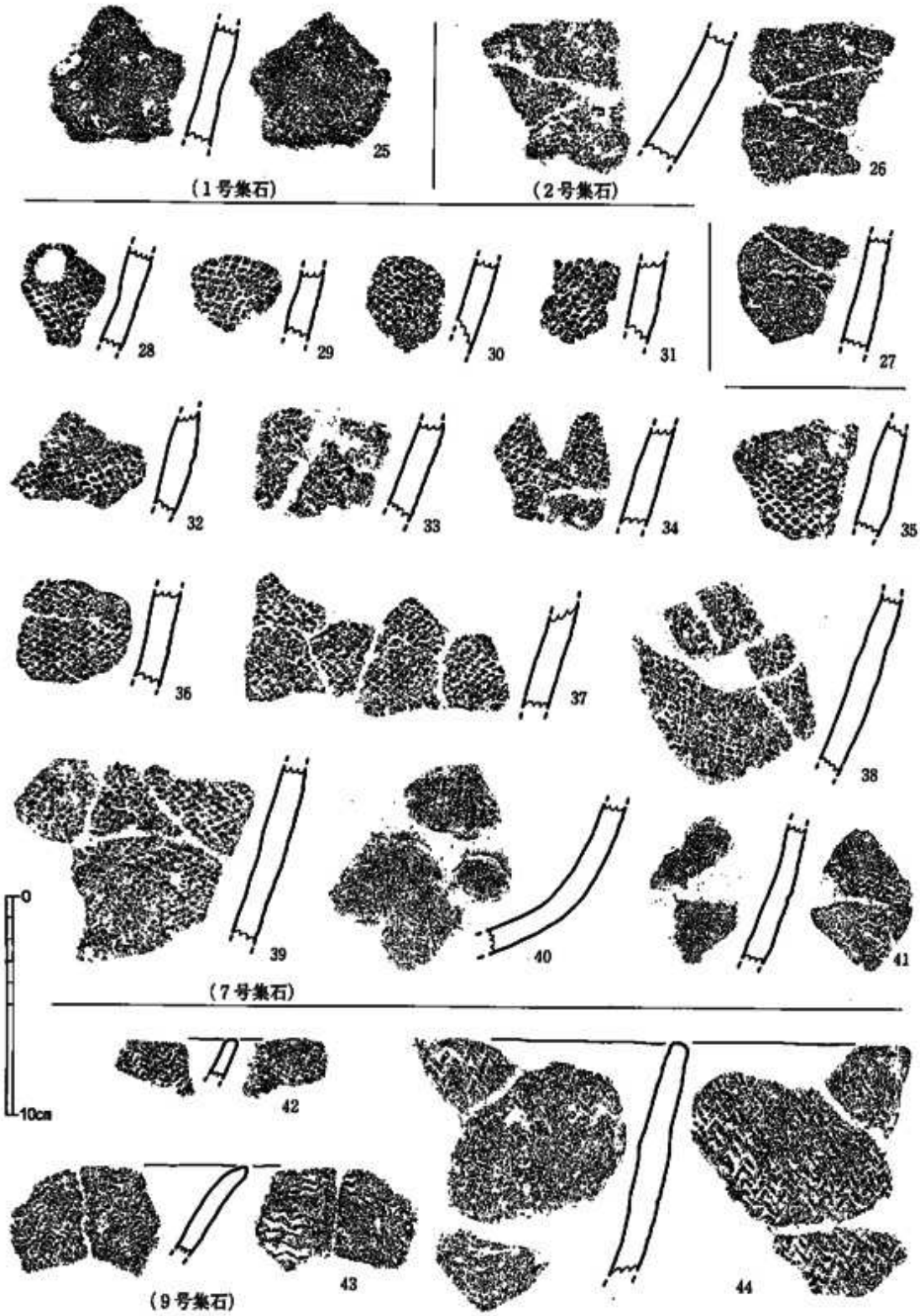
24は外面に山形文が施される押型文土器で、無文の内面は大きく剥落する。

1号集石遺構出土縄文土器（図版84、第129図25）

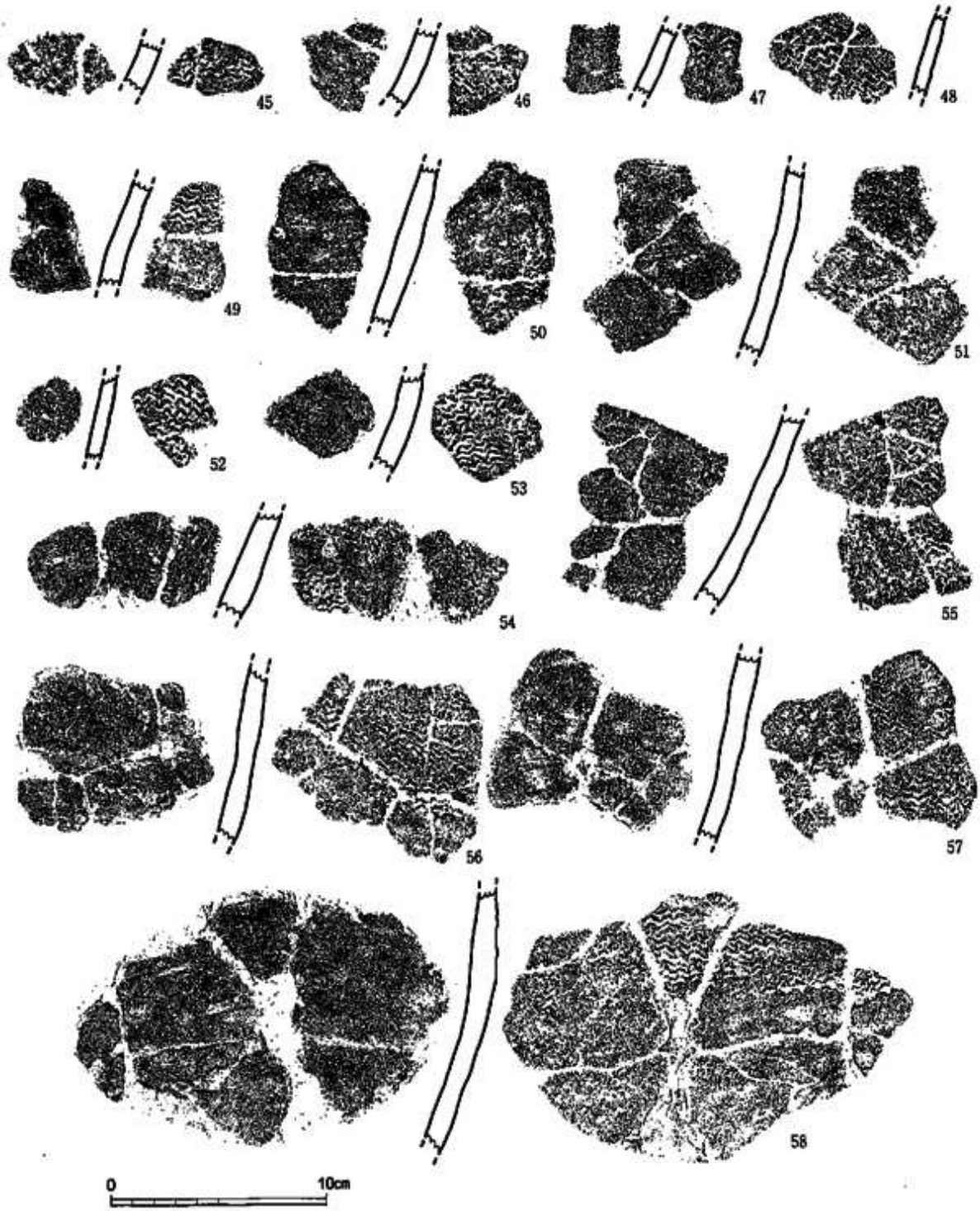
25は無文土器であるが、器面調整や胎土や器厚等から縄文早期の押型文土器に伴うものと考えられる。

2号集石遺構出土縄文土器（図版84、第129図26・27）

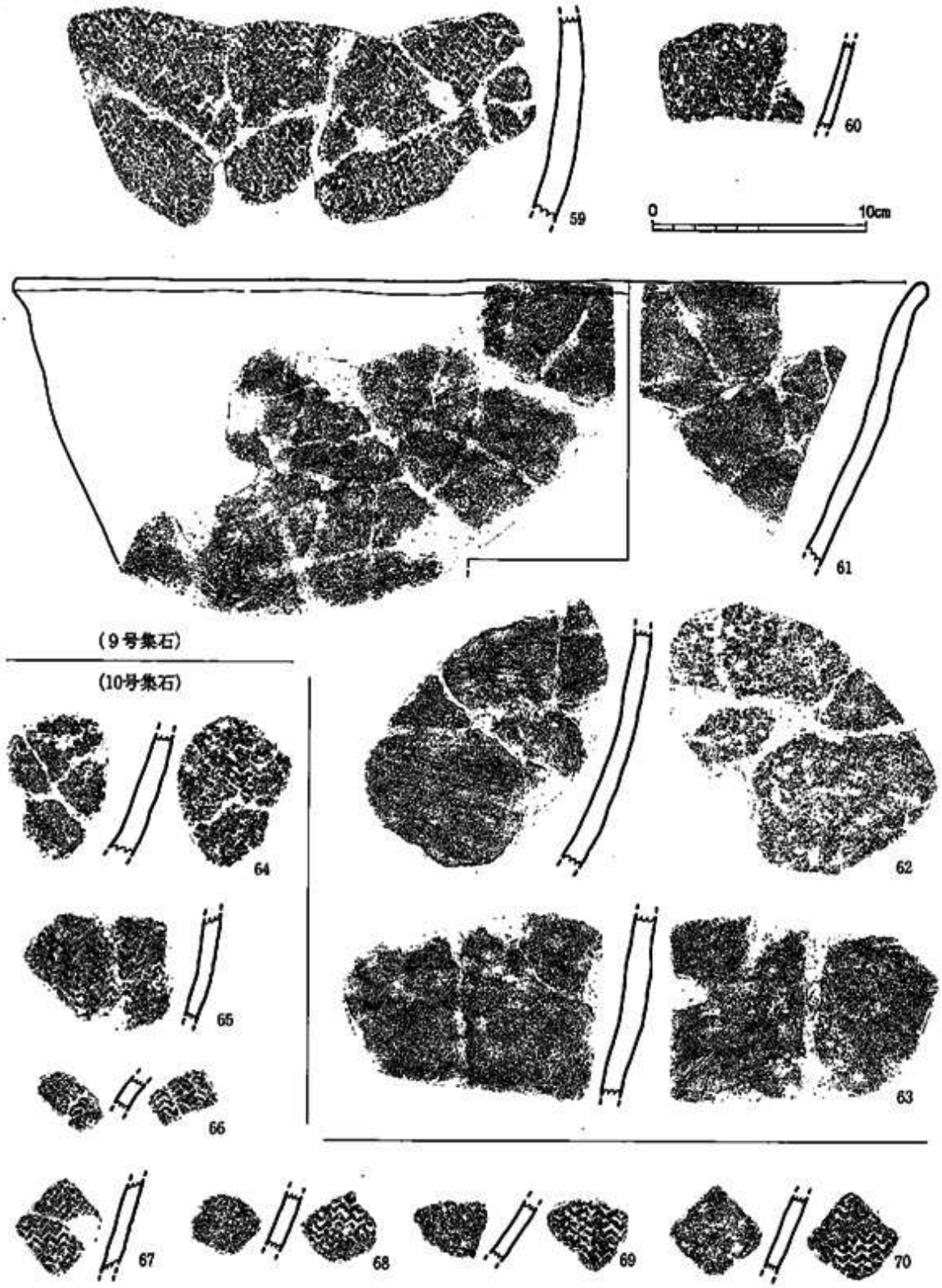
26は無文土器であるが、器面調整や胎土や器厚等から縄文早期の押型文土器に伴うものと考えられる。27は山形の押型文土器。



第129図　1号・2号・7号・9号集石遺構出土縄文土器実測図 (1/3)



第130図　9号集石遺構出土縄文土器実測図（1/3）



第131図　9号・10号集石遺構出土縄文土器実測図（1/3）

7号集石遺構出土縄文土器（図版84、第129図28～41）

28～39はこれ以上には接合しないが、同一個体の楕円文の押型文土器である。内面はナデで、口縁部の破片は存在しない。40は外面に楕円文が施される押型文土器で、尖底の底部に近い部位と考えられる。41は外面に山形文が施される。

9号集石遺構出土縄文土器（図版85、第129～131図42～63）

42・44は内外面に山形の押型文が施される口縁部で、ほぼ直線的に立ち上がる。43も口縁部であるが、内面には何も施されない。45～59・61は外面に山形文が施される押型文土器で、口縁部ではないためか内面にも押型文が施されるものは見当らない。47・49・58・61については外面に確実に無文の部分が存在する例であり、それらは山形文をナデ消したのではなく、施文がまったく行なわれなかった部分である。中でも61については、口縁部から下位へ14cmほど施文されずに、胴部中位付近からはじめて山形文が施されるという珍しい例である。復原口径は43cmを測る。56～58は同一個体。60の外面には楕円文が施される。62・63は無文土器であるが、61のような例を見ると、本当に無文土器なのかどうか疑わしい。

10号集石遺構出土縄文土器

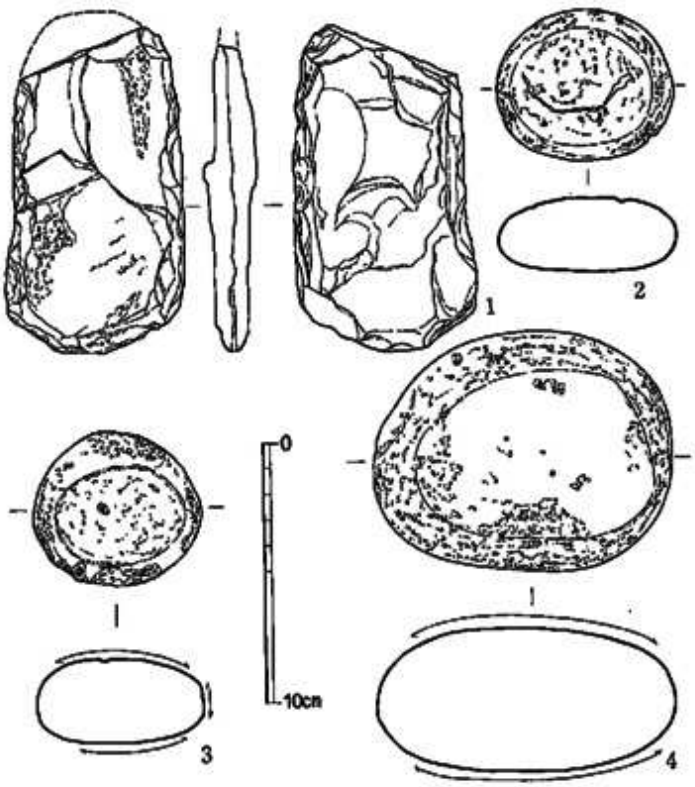
（図版84、第131図64～70）

64から70はいずれも山形の押型文土器で、66のみ口縁部に近いためか内面にも山形文が施される。68～70は同一個体。

（水ノ江）

10号土坑出土石器（図版89、第132図1～4）

1は緑泥片岩製の打製石斧で頭部を欠損している。側面は丁寧な階段状剥離を施し、刃部は摩耗し、使用痕が残る。現長12.5cm、幅6.9cm、厚さ2.0cmを測る。2は5.8×6.8cmのやや楕円形の磨石で、厚さ2.8cm、重さ159.6gを量る。3はおむすび形の磨



第132図　10号土坑出土石器実測図（1/2）

石で上・下部には敲痕が残る。6.5×6.0cmで厚さ2.3cm、重さ186.4gを量る。4は楕円形の磨石で、表裏面を特に研磨している。11.4×9.4cm、厚さ5.5cm、重さ862.5gを量る。（佐々木）

24号土坑出土石器（図版89、第155図3・4）

黒色透明な黒曜石製の石鏃。3は両脚部を欠損するが、長脚鏃である。残長2.0cm、幅1.4cm、厚さ0.45cm、重さ0.95g。4は浅い抉りを有し、大きめな剥離調整である。残長2.1cm、幅2.0cm、厚さ0.42cm、重さ1.65g。

30号石組炉出土石器（図版89、第155図5・164図196）

5は全長の3分の1に達する脚部を有す細みの石鏃。縦長剥片を素材とし、打面は脚部側である。背面稜部に自然面を大きく残す。長3.2cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ1.4g。黒曜石製。196は絹雲母石英千枚岩製の石皿片で、表面が浅く凹む。残長16.1cm、厚さ3.2～4.5cm、重さ981.2gを測る。

35号石組炉出土石器（第155図6）

黒曜石製の鍬形鏃の完形品。深い抉りは鏃の半分近くに達する。長2.4cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ1g。（木下）

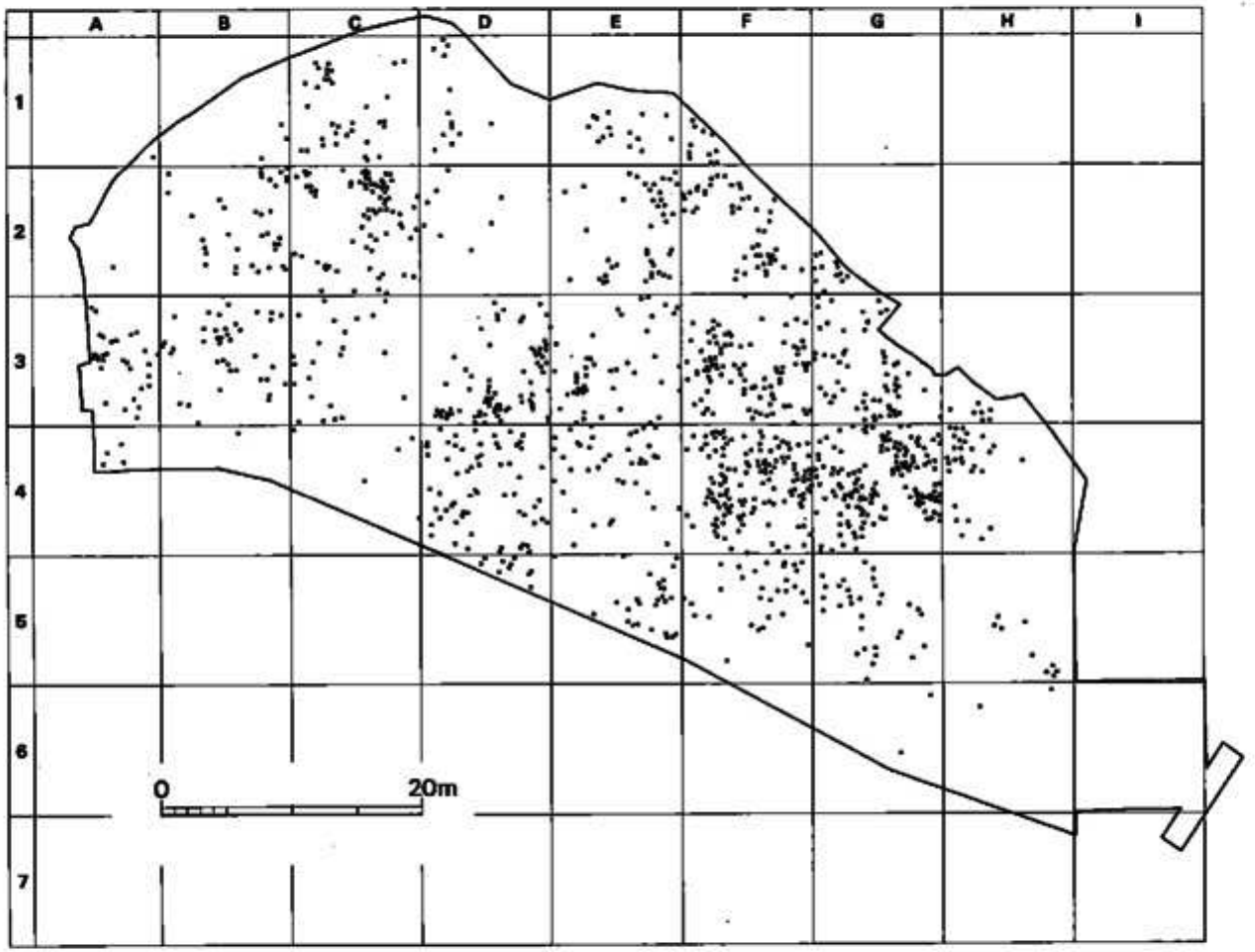
（6）5層出土の遺物

第133・134図は5層の縄文早期押型文土器及び石鏃、石皿・磨石・敲石、有孔石器の出土分布図である。分布図を見るとD・E1区からC4区にかけて斜め方向に幅10mほどの遺物空白部分が観察される。この部分は6層上面に達する礫層が分布し、5層に集中した石組炉、集石遺構が存在しなかった箇所に相当していることから、当時の人々にとって礫層の存在は居住空間として適していなかったことが再確認できる。

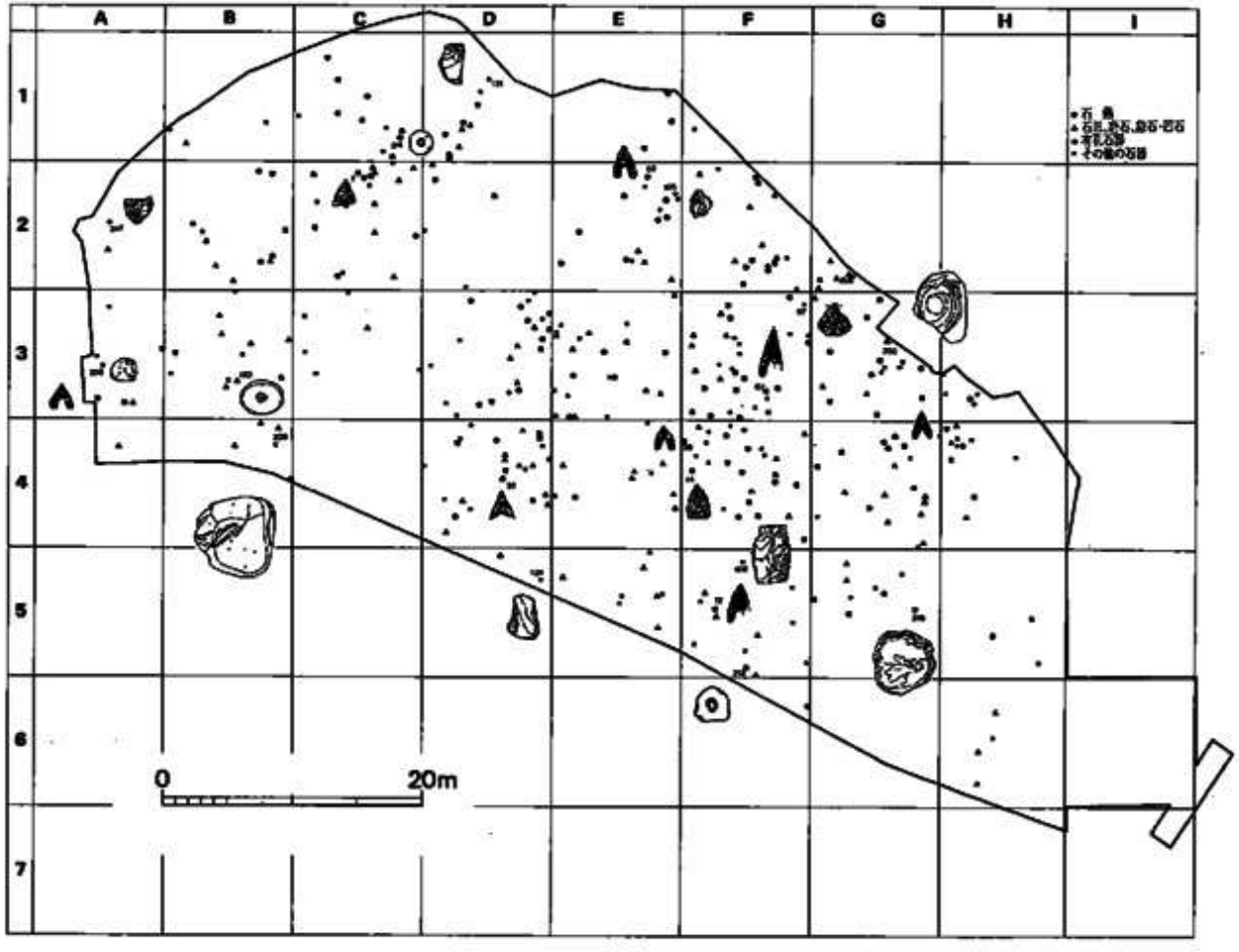
押型文土器、石器の分布は、大局的にみれば石組炉・集石遺構に取り囲まれた状況で出土している。しかし、周辺に集石遺構1基しか見られないG3～5区で多くの遺物が出土していることは炉を中心とした生活とは単純に割り切れない。炉と共存すると考えられる石皿の出土状況をみると、CD2区に出土した2点は22号石組炉の関連が考えられるが、他の出土状況は石組炉との結び付きが薄い。なお、土器、石器の観察ついては第6・7表を参照されたい。

縄文土器（図版85～88、第135～150図71～351）

ここはⅡ区の5層出土縄文土器についての説明であるが、編集の都合上、まったく同一層で



第133図　5層出土押型文土器分布図（1/600）



第134図　5層出土石器分布図（1/600）

あるⅢ区の５層出土縄文土器実測図も同時に割付・編集しているので御了承願いたい。なお、Ⅲ区出土の縄文土器は135～150図78・82・189・190・237・274・285・286・292・295・296・321・322・332・336・337・341・342・343・350・351であり、番号の前に「３－」を付した。

71～198は横位山形文のみを施した押型文土器である。71は復原口径36cmで、内面の口縁部にも山形文が施される。72は復原口径38cmを測る。外面の口縁部と内面全体は無文で、外面のやや膨らむ胴部にのみ横位山形文が施される。器厚の17～19mmという数値も押型文土器には珍しいほどの厚さである。やや膨らむ器形や器厚は押型文土器に伴う無文土器に酷似しており、あるいは本来無文土器を製作するつもりであった土器に、外面の胴部にのみ山形文を施した押型文土器であるかもしれない。73～123は口縁部もしくはそれに近い部位と考えられるものを集めてみた。口縁部71～100の30点のうち、内面にも横位の山形文が施されるものが圧倒的に主体を占め、無文のものはわずか４点しかない。端部は舌状にやや尖らすものもあれば、丸く仕上げるものもあるが、前者が器壁が薄く、後者が厚いという傾向が窺える。内面の施文は幅の狭いものから広いものまで様々であるが、いずれの場合も押型文原体を１回だけ回転させたものである。88の内面端部には約１cmの間隔で刻み目が施されるが、これだけを見ていると原体条痕とは明らかに異なる。124～199は外面にのみ横位山形文が施される胴部破片の一群である。施文が帯状になり無施文部ができるものや、無施文部ではないがナデ消すことによって無施文部と同じような意匠になるものもある。

200～247は横位の楕円文のみによって構成される押型文土器である。200～229は口縁部破片であるが、それら47点のうち内面にも楕円文を施すのは20点で、無文のものよりも少ないのが特徴。その中にあって、227は外面が無文で内面が楕円文という極めて珍しい例である。楕円文の場合も山形文の場合と同様で、施文が帯状になり無施文部ができるものや、無施文部ではないがナデ消すことによって無施文部と同じような意匠になるものもある。

248～268は格子目文のみによって文様が構成される一群。格子目文の口縁部の場合、すべての内面にも格子目文が施されており、内面が無文のものは１点も存在しない。249の内面は一見山形文のように見えるが、これは原体の端部が作りだしたものであり、全体的な文様自体は格子目文である。252の口縁部内面の端部には５mm間隔で刻みが施されるが、原体条痕とは明らかに異なる。258の内面には部分的に格子目文が施された珍しい例である。

269～271は内面に比較的短い原体条痕が施されているが、270には楕円文も併用されている。いずれも口縁部が大きく広がり、端部も舌状に尖っている。

272は外面が山形文で内面が楕円文、273は外面が楕円文で内面が山形文というように、内外面で文様が異なる例であるが、このようなものは押型文土器の中では少ない。

３－274～277は外面に撚糸文が施される一群である。３－274は尖底の底部に近い部分の破片である。278・279にはＬＲの縄文が施されるが、278の内面には条痕が、279の内面にはナデ

が器面調整になる。

280～294は条痕文土器で、内面には条痕文が施されるものもあるが、多くは無文である。口縁部の形態を見ている限りでは、押型文土器のそれと大差ない。なお、条痕文の原体については不明である。

3－295は摩滅が著しく文様が不鮮明であるが、沈線文と刺突文によって文様が構成され、3－296には2本単位の刺突文（押引文）が、297にはやはり2本単位の刺突文と沈線文が施される。これら3点は平格式であろうか。

298～320は無文土器であるが、これらはいずれも押型文土器に伴うものである。口縁部形態を見ると、ほぼ直立するもの、先端部が外反するものあるいは肥厚するもの、内傾するもの、強く外反するもの等、様々な形態がある。器壁は厚いものが多く13㎜前後が主流で、復原口径も320が最大で46㎝を測る。

3－321～3－342は押型文が縦位に施された一群で、横位に施された一群とは明らかに新しいという年代差が存在する。3－321は外面が縦位、内面が横位の山形文で、口縁部の外反の度合いからみて手向山式であろう。3－322と323は縦位の山形文に、対面に細くて短めの原体条痕が施される。原体条痕の状況からは、269～271とそれほど大差がないようにも見える。324～331の縦位の山形文はそれ自体が著しく大きく、器壁も厚い。3－332～3－342は縦位の楕円文で、334・335は比較的原体条痕が短く細いが、他の原体条痕は太くて長く、中には2段に施すことで文様帯の幅を広く見せるものもある。縦位の押型文土器では内面が無文なのは325の1点だけで、有文の場合も原体条痕が主流となる。

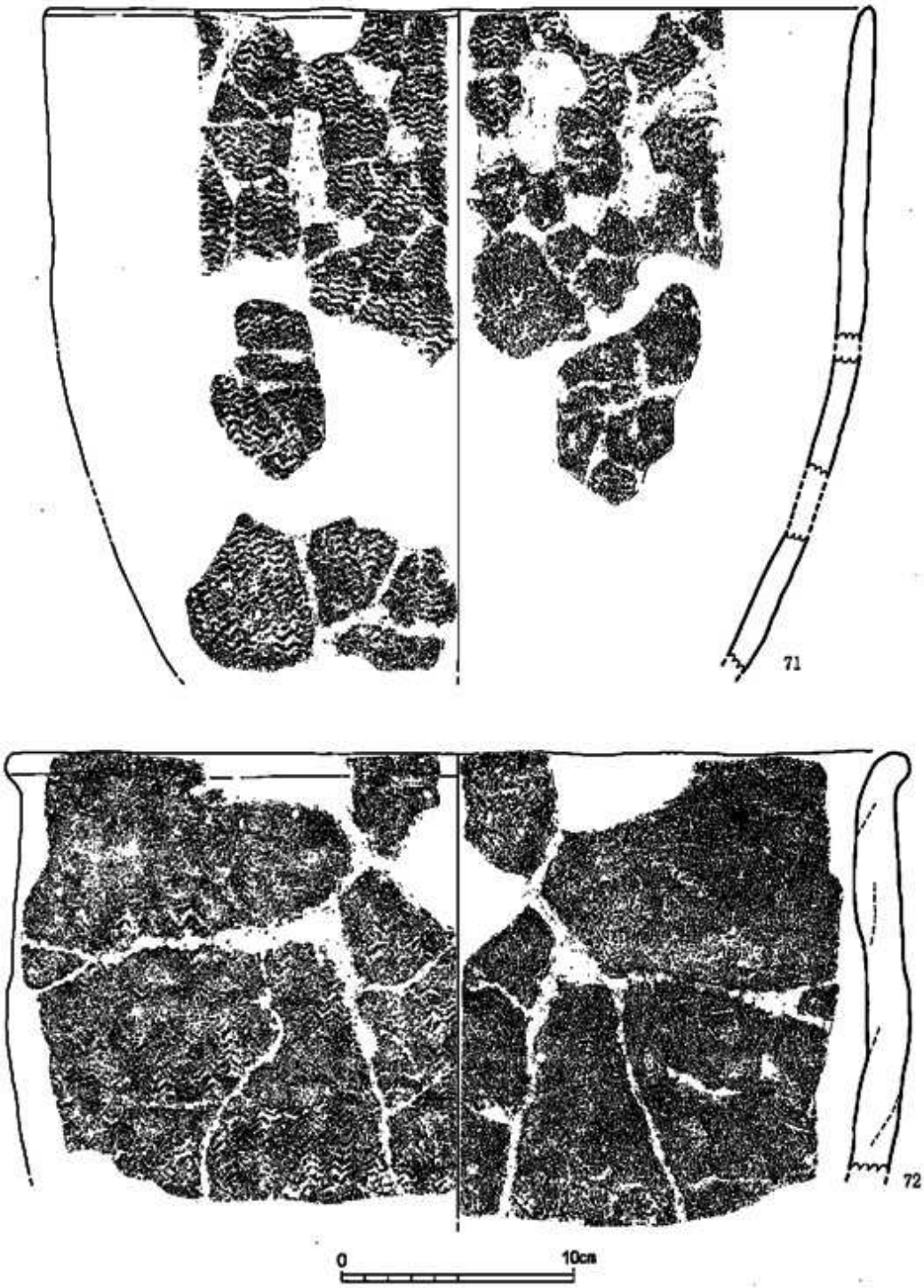
3－343～349は底部で、343～345のように平底のものもあれば、346～349のように尖底のものもある。ただし、両者が共伴するものなのか、あるいは年代差を有するものなのかは判然としない。

3－350と3－351は同一個体である。直線的に立ち上がるが、やや内傾する口縁部の先端部外面に深く刻まれた太めの隆帯文を貼り付ける。内面には二枚貝による貝殻条痕文らしき痕跡も見え、おそらくは草創期に属するものと考えられる。（水ノ江）

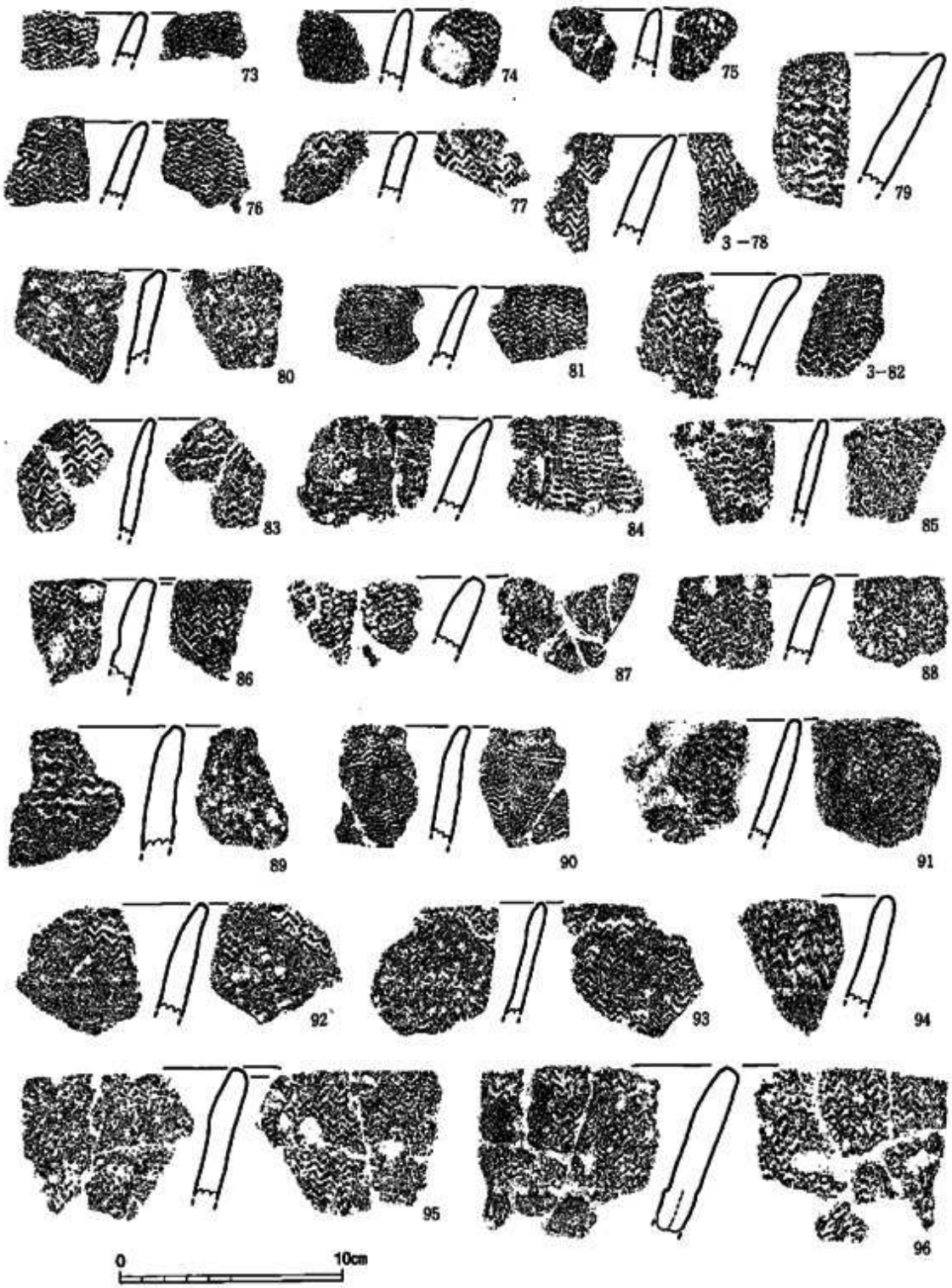
石　器（図 版89～93、第155～157図7～86・第158～169図96～114・118～173・177～241・243～248・250・251・253～256）

5層から出土した石器は、石鏃・ドリル・掻削器・石斧・礫器・磨石・敲石・石皿・台石・砥石・有孔石器・石錘・軽石・石核・使用痕のある剥片・原石・不明石器476点のほか多量の剥片、砕片が出土した。

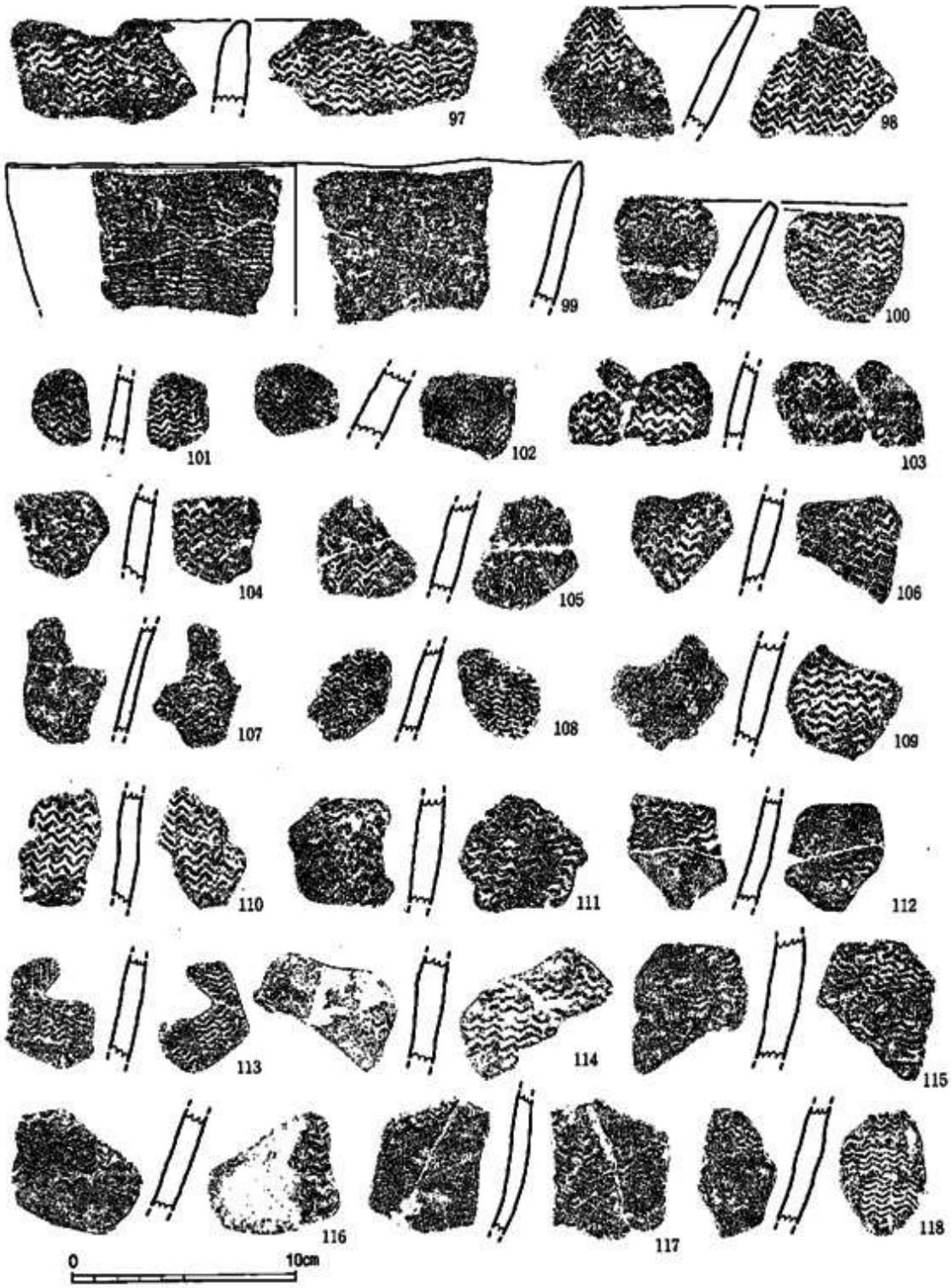
7～86は石鏃で、136点が出土し全器種の28.5%を占める。80点を図示した。出土分布は押型文土器の分布（第133図）と同様、特定の片寄りは見られない。石材の内訳は黒曜石145点、



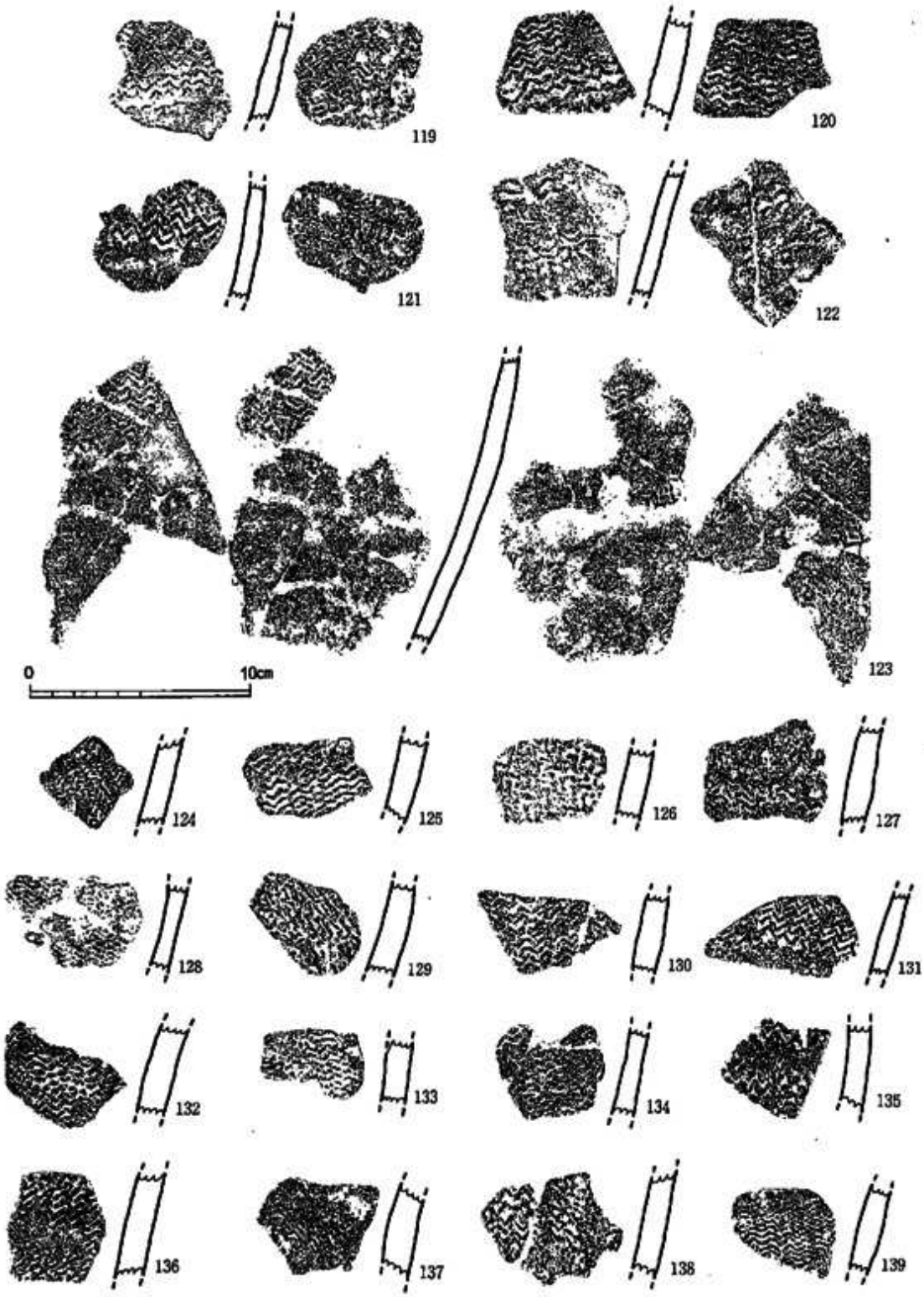
第135図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図１（1/3）



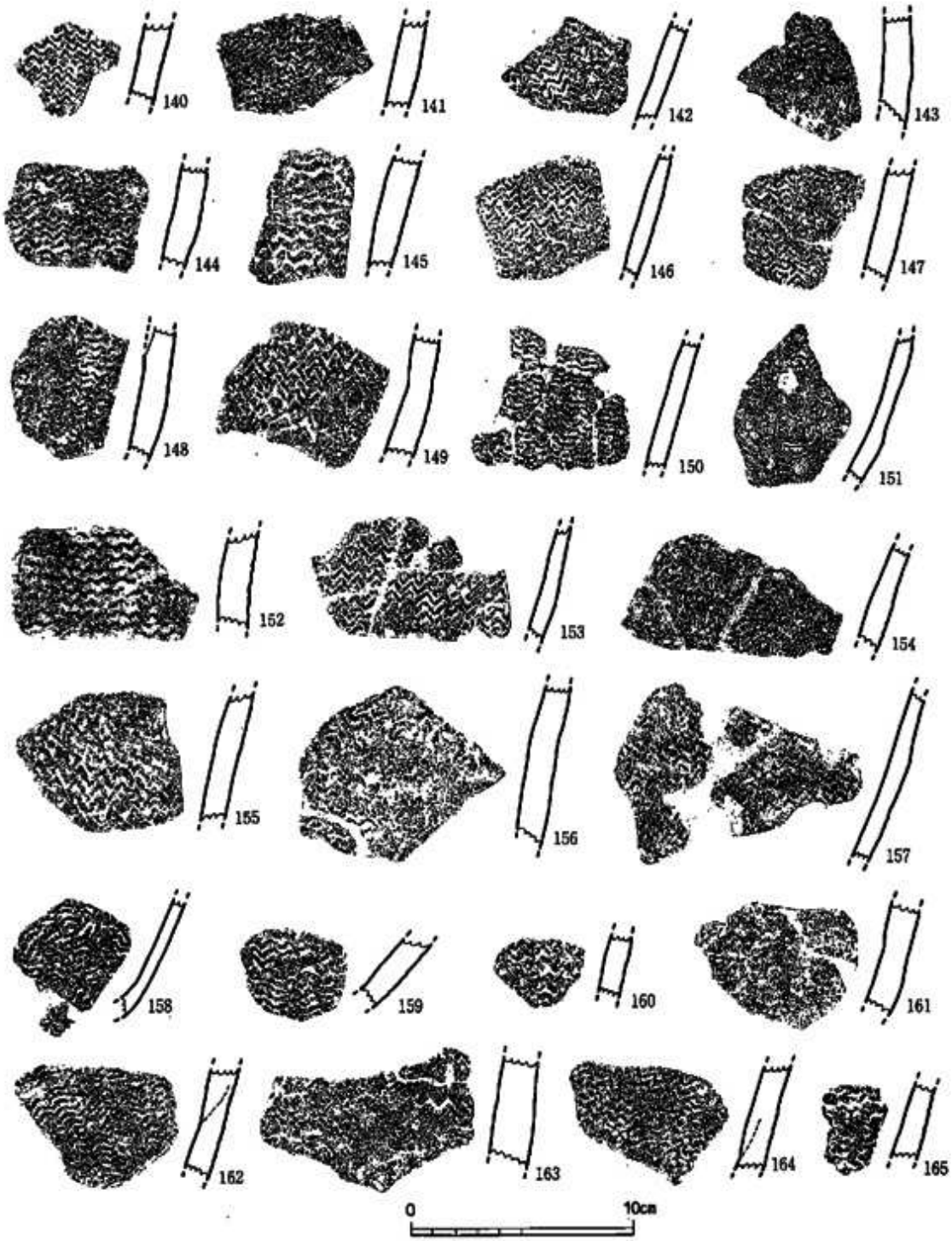
第136図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図２（1/3）



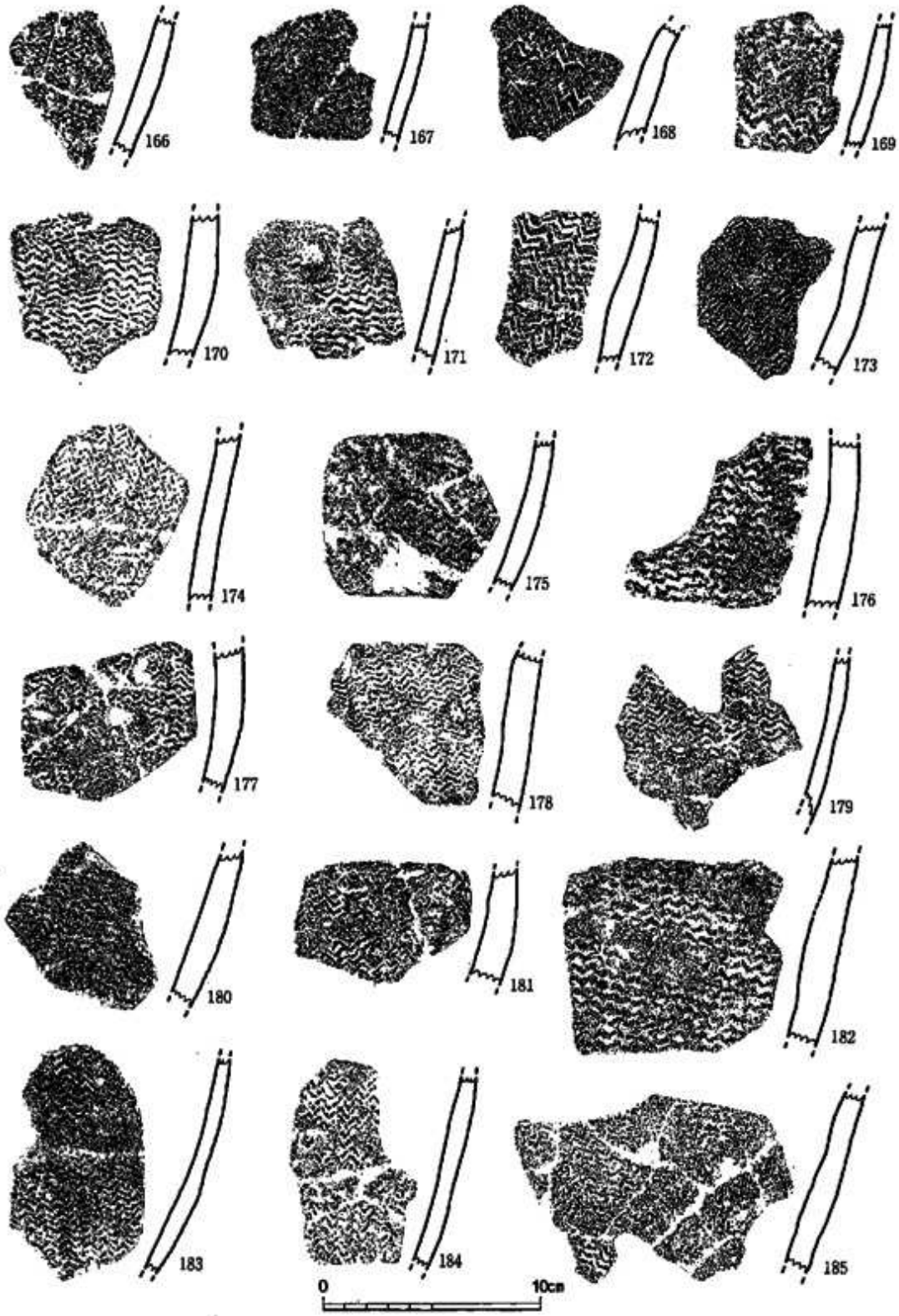
第137図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図３（1/3）



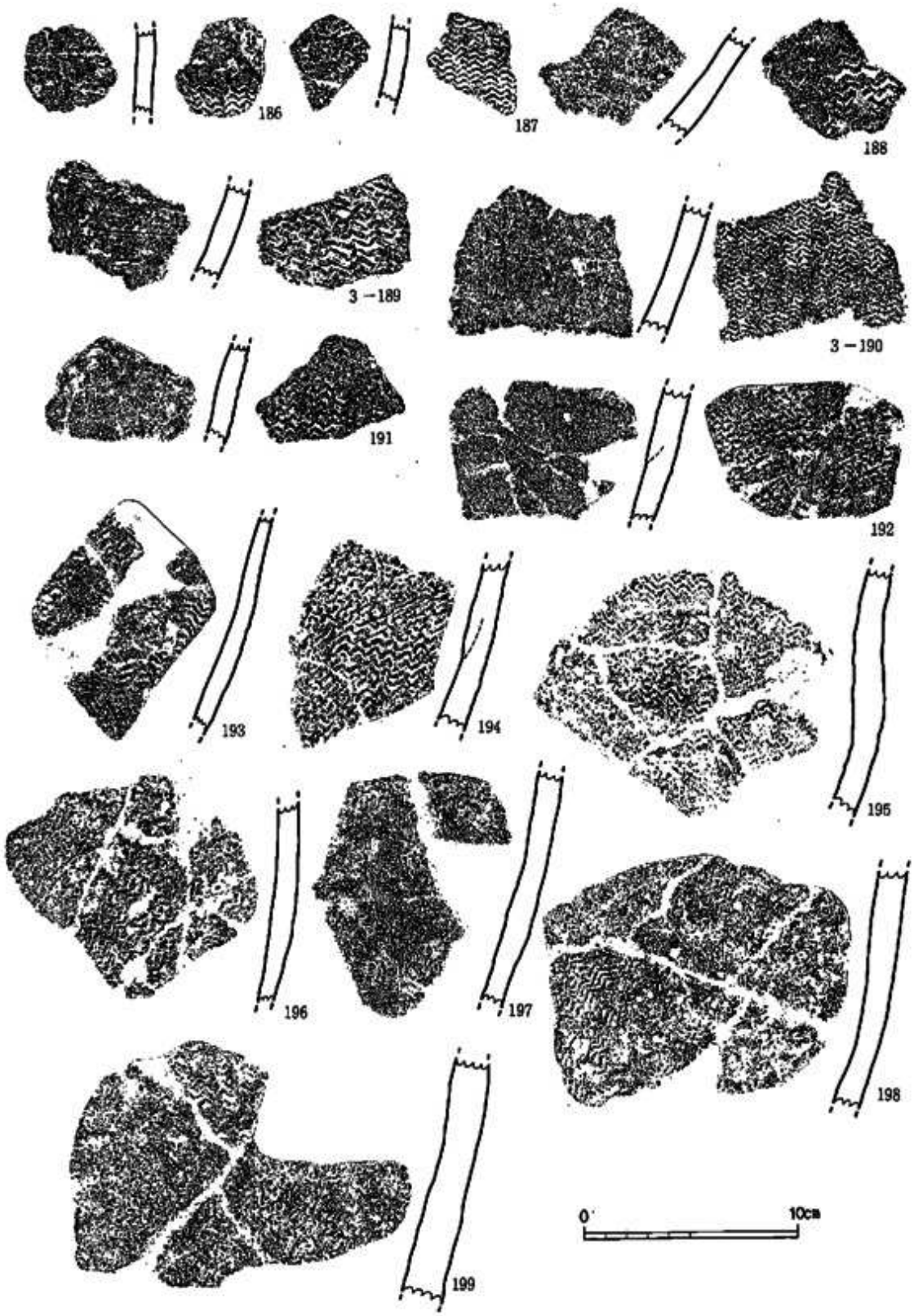
第138図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図４（1/3）



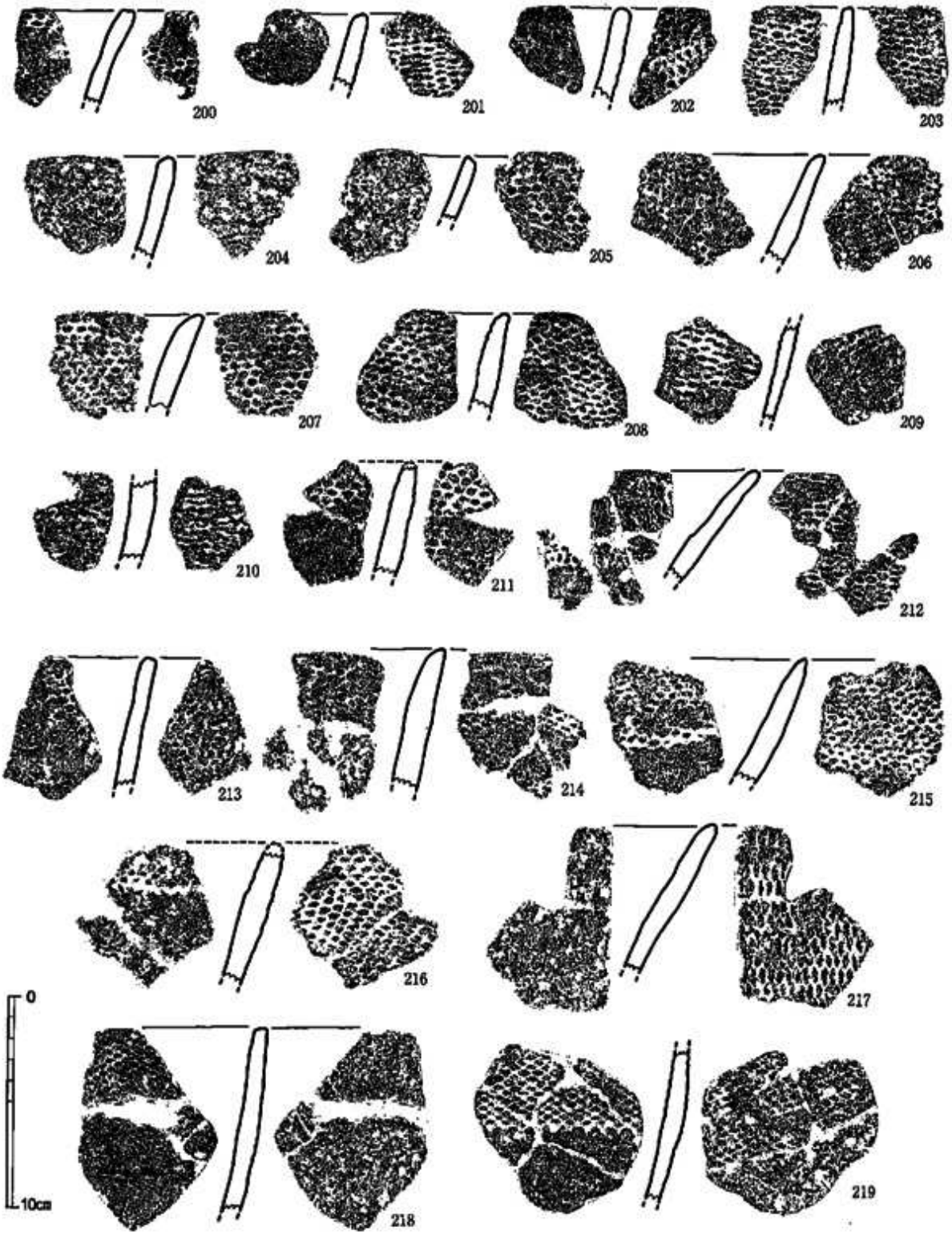
第139図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図５（1/3）



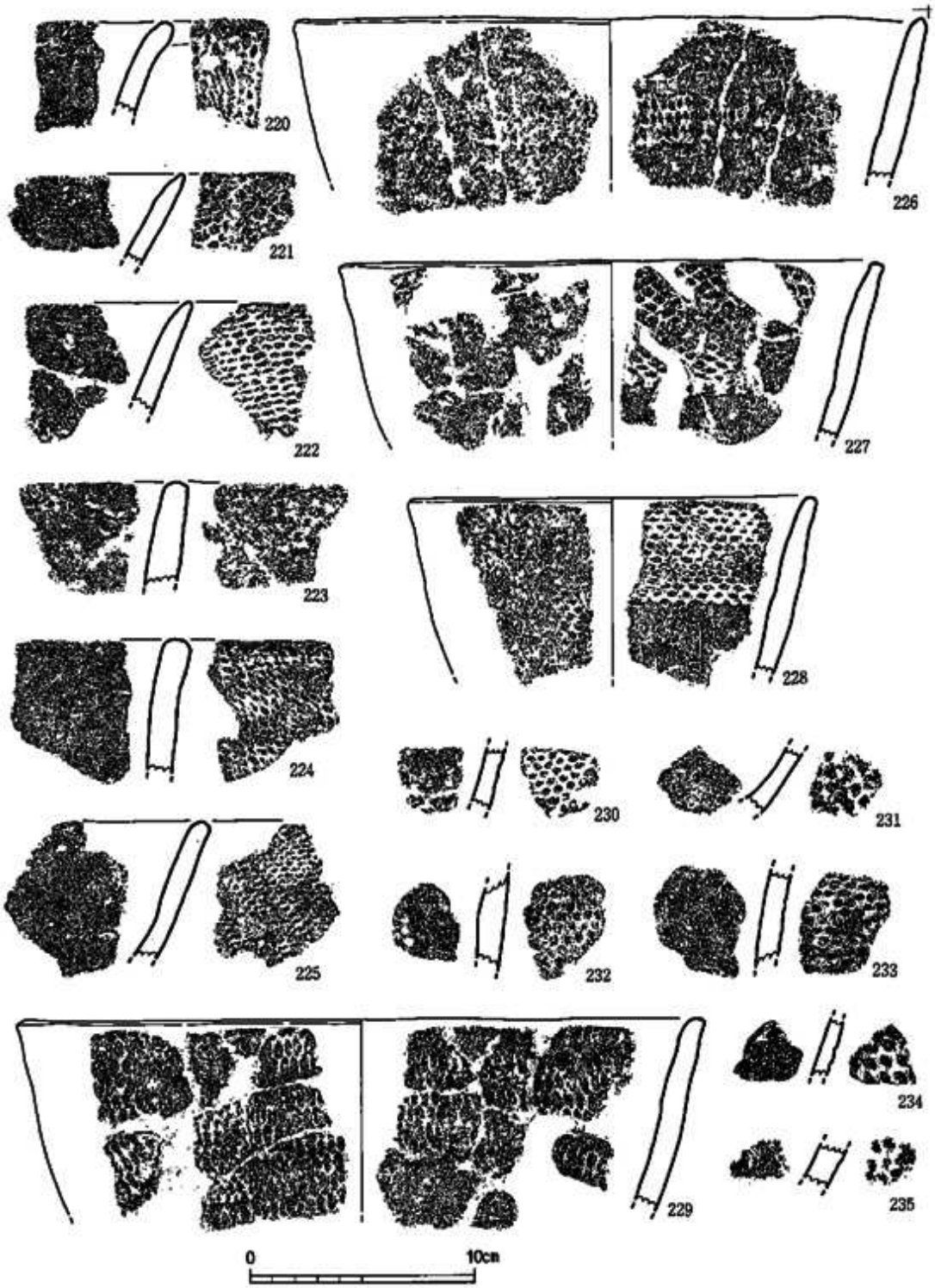
第140図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図６（1/3）



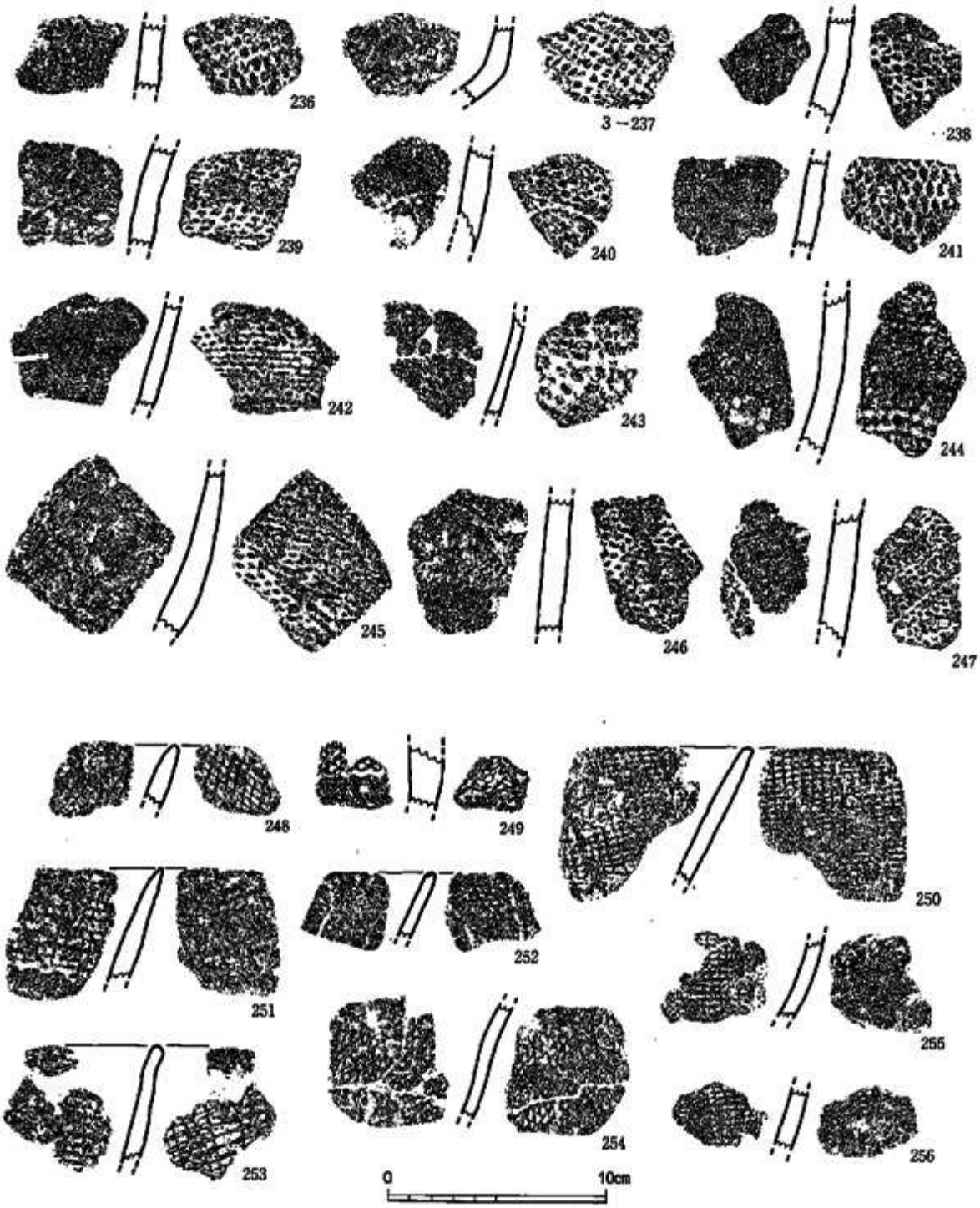
第141図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図７（1/3）



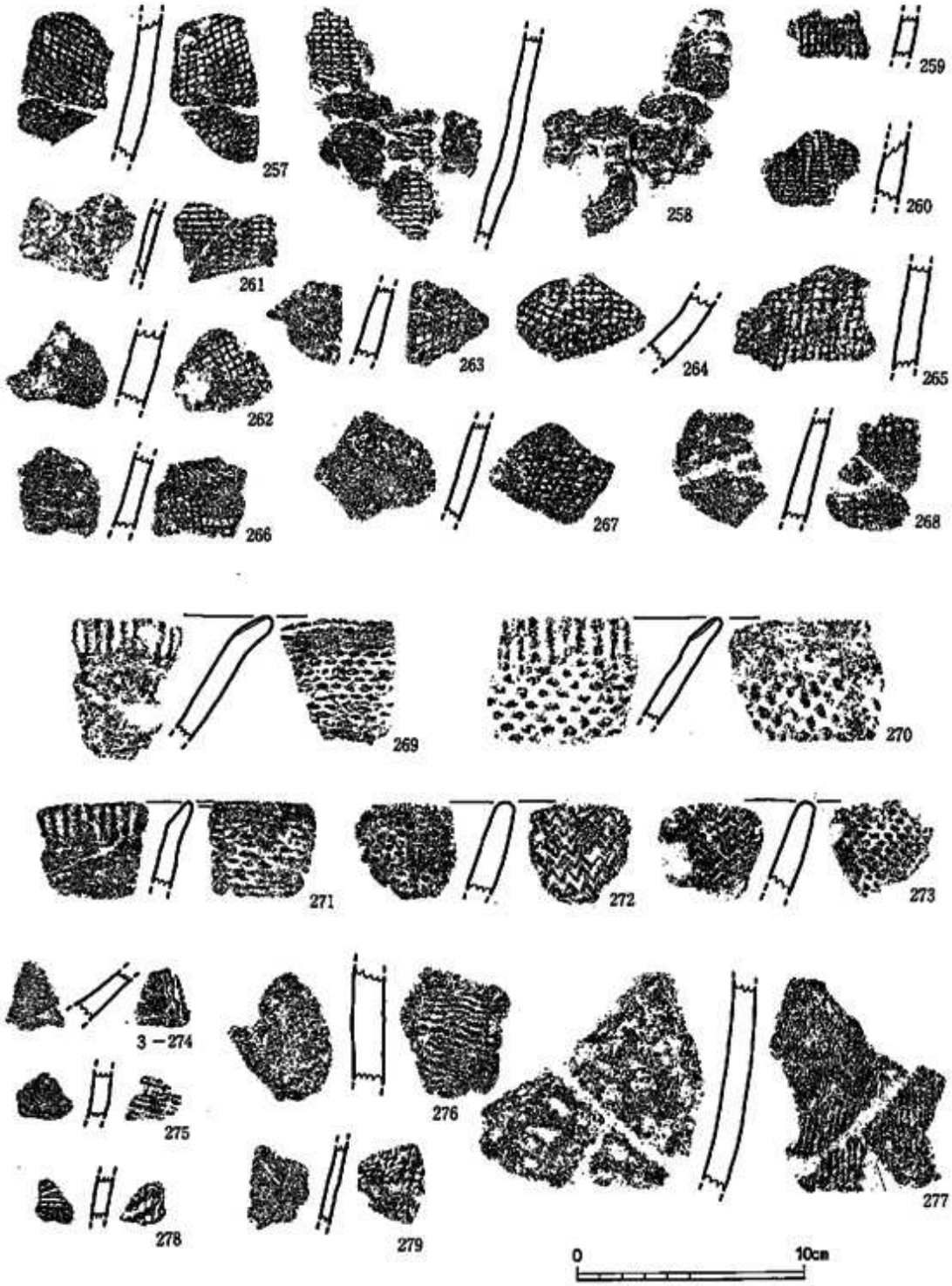
第142図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図８（1/3）



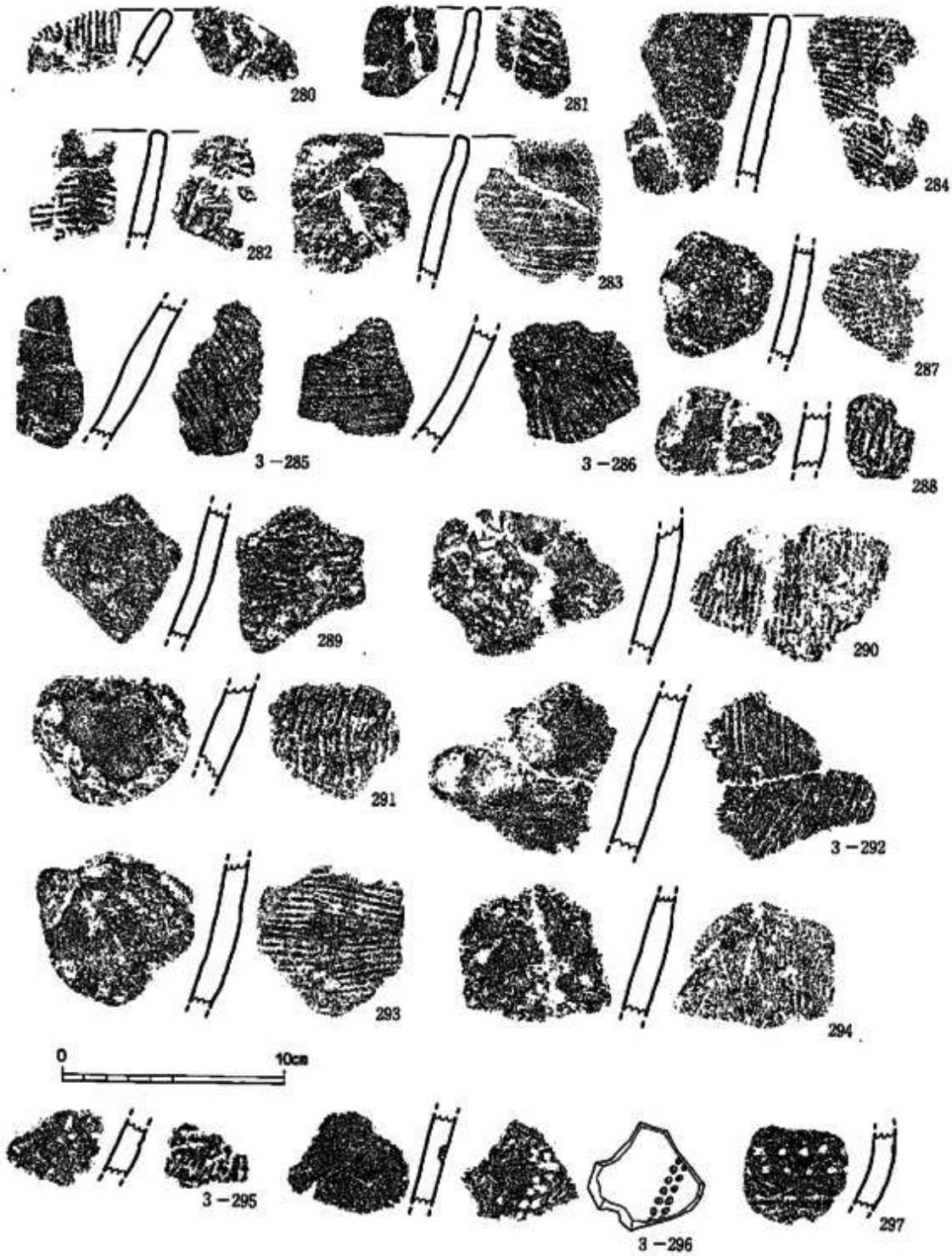
第143図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図９（1/3）



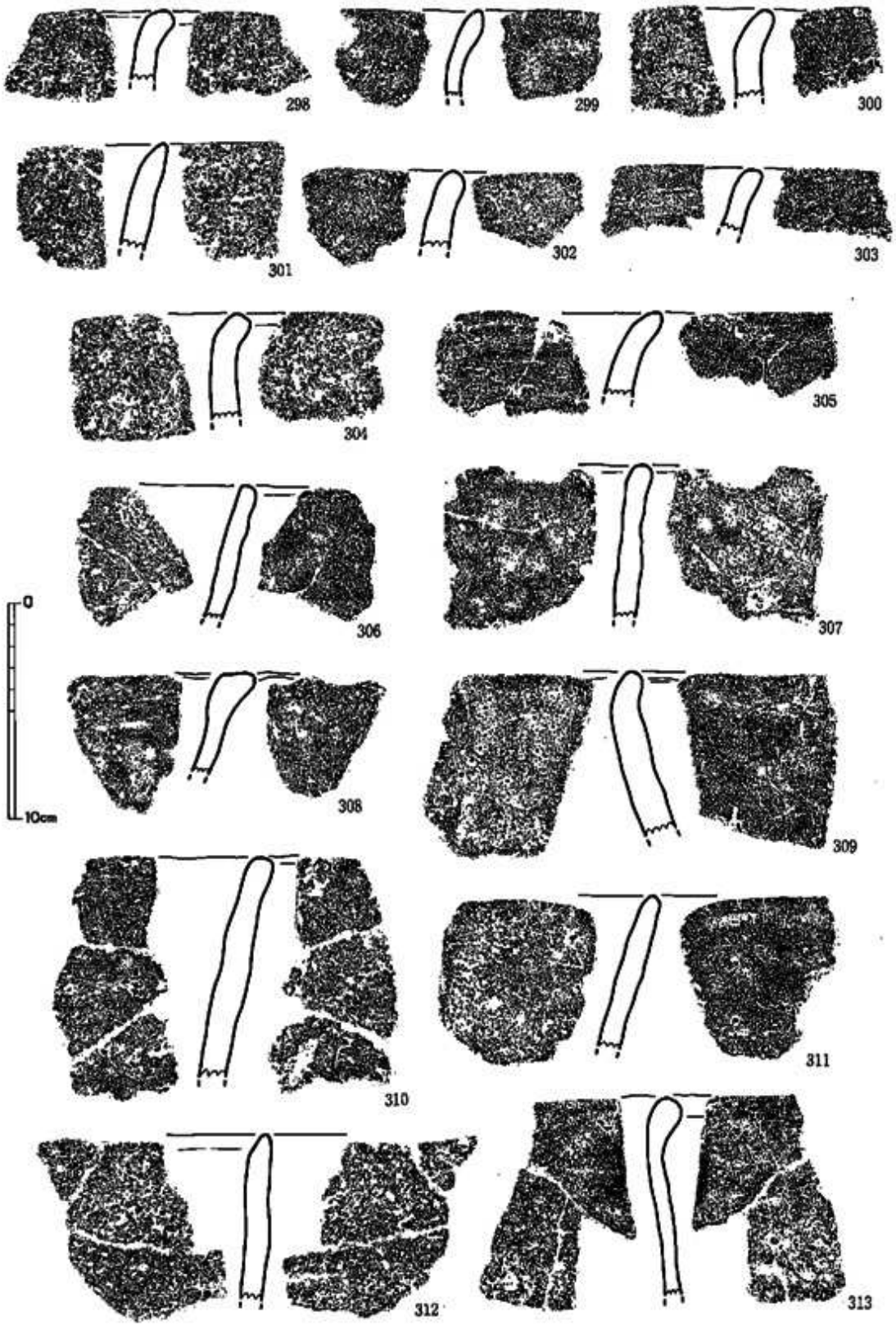
第144図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図10（1/3）



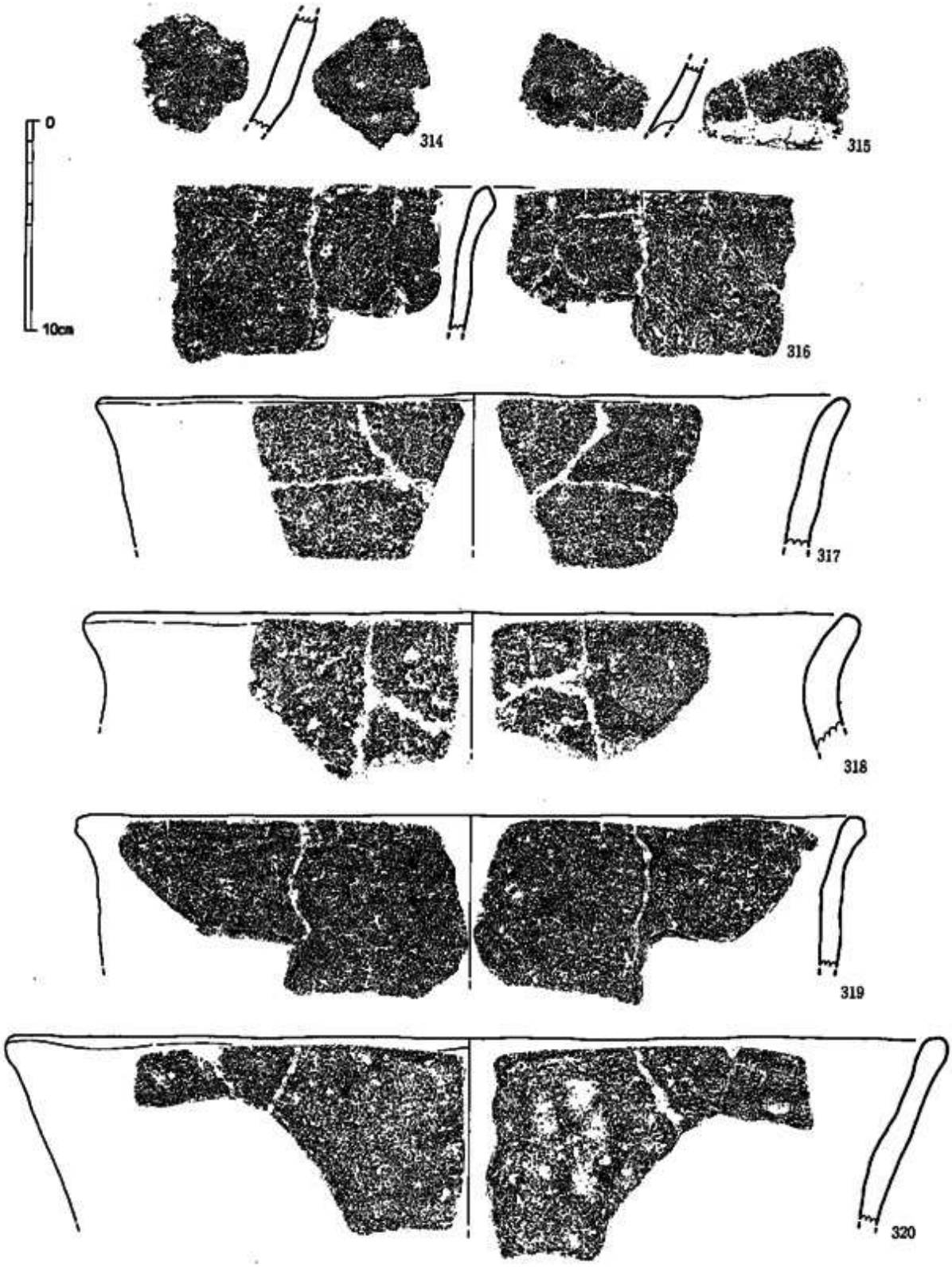
第145図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図11（1/3）



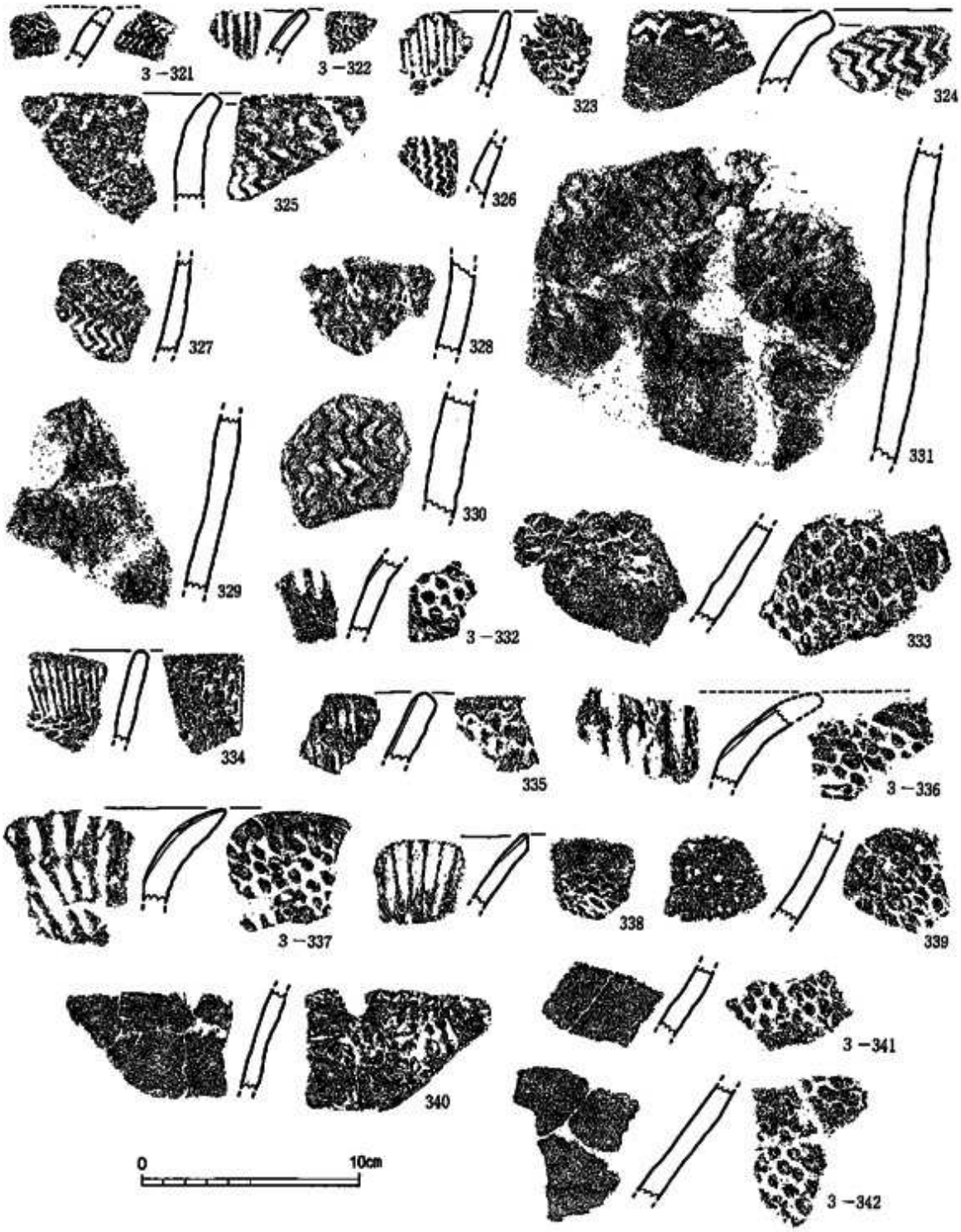
第146図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図12（1/3）



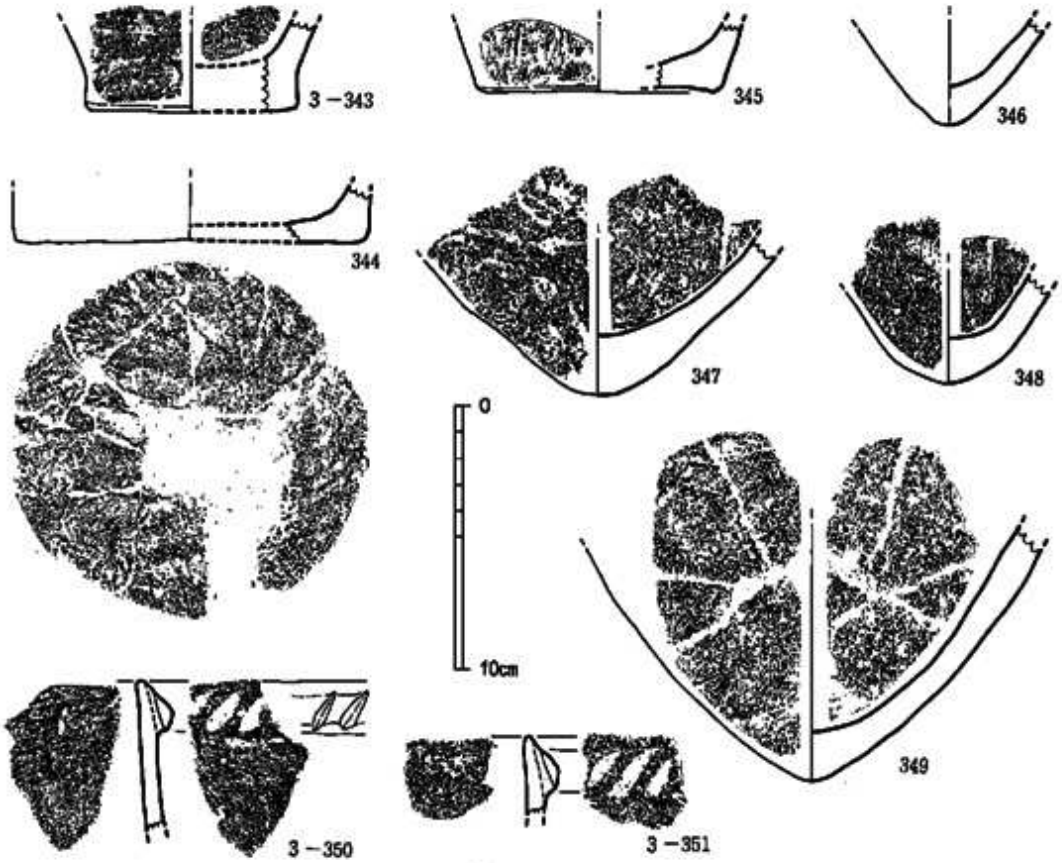
第147図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図13（1/3）



第148図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図14（1/3）



第149図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図15（1/3）



第150図　Ⅱ・Ⅲ区５層出土縄文土器実測図16（1/3）

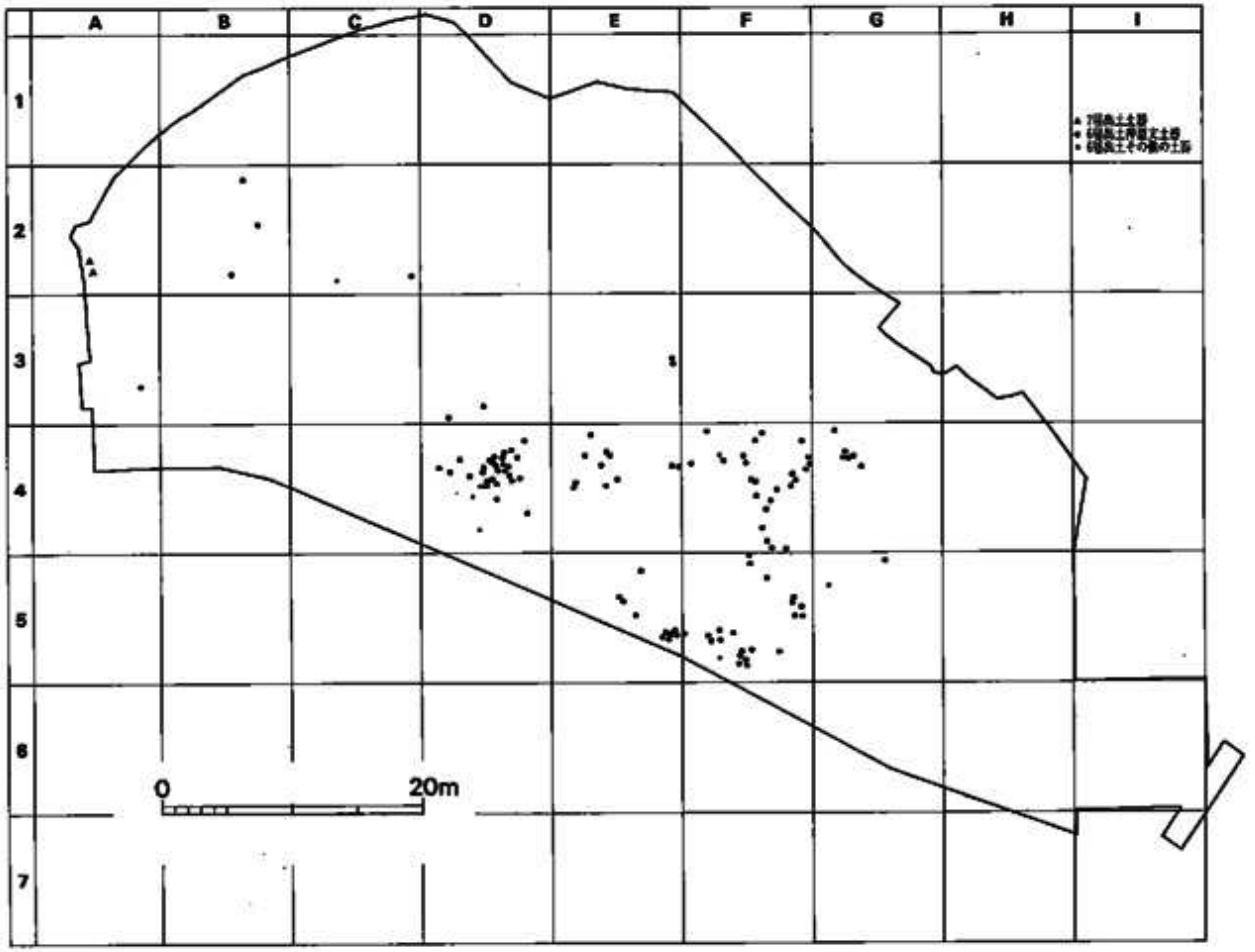
安山岩２点、玉髄１点で圧倒的に黒曜石が多い。形態から有茎式と、無茎式の平基と凹基に分類される。７は有茎式で、１点のみ出土。縦長剥片を素材とし、周辺及び茎部分に調整を加える。８～20は平基無茎式。二等辺三角形を呈し、調整剥離は周辺部のみで主要剥離面をそのまま残すものが多い。18～20は背面に自然面を有す。21～86は凹基無茎式。抉りの形状等に因って４種類に細分される。21～27は浅い抉りを有し、明瞭な脚部を持たないもので、25～27はその典型的な石鏃。28～32は短い脚部を有す。29の側縁は外湾する。33～75は長脚の石鏃で、37～40は三角形に近く外湾する。52は片脚鏃。54～75は長身の二等辺三角形を呈し深く内湾する脚部を有すことから鍬形鏃と称される。67は先端を破損した後再調整を施す。76～82は有歯鏃である。96・97はドリルで黒曜石製。穿孔部周辺に主要剥離面側から丁寧な調整を加える。98は掻器で不定形な剥片を素材とし一縁に急角度の調整を施す。99～114、120～122は削器で、100～103、106・107は縦長剥片を素材とし、他は不定形な剥片である。102・103の刃部は二縁に及び、他は一縁である。100・101・103は背面に自然面を大きく残す。99は折断した剥片の

一縁に急角度の調整を、104は背面からの調整を施す。106は幅広の自然面を打面とする。113はノッチドスクレパー。120は幅広の剥片を素材とし、一縁に荒い調整を加え刃部とする。長8.2cm。重さ64.4g。121は自然面を打面とする幅広の切断剥片の一縁に刃部を有す。長9cm、重さ76.9g。122は三縁に調整を加えるが、右縁は急角度である。106・121・122が安山岩で他は黒曜石製。118・119は不定形な剥片の一部に刃こぼれがみられる。123は珪化デイサイト製の乳棒状磨製石斧で刃部を欠損した後、再加工を施す。124は撥形の打製石斧。刃部は片刃である。長9.8cm、重さ75.2g。125～173は磨石で、5層からは93点が出土し、石鏃に次いで多い。形状は円形ないし長円形を呈すものが大半であるが、126・149・157は不整円形である。大きさは125の5cmに満たない小型の磨石から173の13cm以上に達する大型品まで様々あり、断面の厚さは4cm前後で、倒卵形を呈すものが最も多いが、127・136・155の厚さは3cmに達しない。また、使用により両側縁の断面が平坦に近く、明瞭な稜線を持つ特徴的な磨石（150・157・158・168）が存在する。155には条線が観察される。使用された石材は圧倒的に輝石安山岩が多く、他には安山岩、白雲母石英片岩、花崗岩、花崗閃緑岩、凝灰岩が若干用いられる。重量は125が97.4g、133は308.8g、149は417.9g、158は552.4g、167は723g、173は883.3gを測る。177～179は敲石。いずれも長円形を呈し、短縁に敲痕が見られる。180～185は凹石。180は小型品で中央に浅い凹み部を有す。181は円形を呈し、周辺は平坦に近く磨かれる。185はデイサイト製の7.6cmと部厚な凹石で、器面は風化が著しい。重さ951.2g。186は周辺に荒い剥離を施し、他は磨かれる。石斧の未製品の可能性もある。187は長球状を呈し表面には軽い磨き稜が走る。101.6gを測り、石弾であろうか。188～209は石皿で全て5層出土である。24点出土したうち、22点を図示した。188～190は小型の石皿で、あまり凹面は見られない。当初の姿を残しているのは200・203で、中央に円形の凹面が見られる。203は長37.2cm、重さ1.2kg、206は長34.5cm、幅34.8cm、厚さ11.5cm、重さ20.5kgを測る。191・200・201・203・205はかなり使用減りし、特に201は1cmの厚さになる。192～199、202・204・204・206～209はわずかに凹面が認められる。石材は絹雲母石英千枚岩8点、絹雲母石英片岩1点、白雲母石英片岩1点、砂質千枚岩3点、輝石安山岩9点、緑泥片岩1点、安山岩1点である。210は凝灰岩質砂岩製の台石。厚さ9.7cm以上で、上面は平坦である。211～219は有孔石器で当遺跡を特徴付ける石器である。5層に10点、表採品に1点の11点が出土した。押型文土器にたまに共伴するいわゆる環状石斧とは異なり、刃部を作り出さない。211は5.3×5.1cmの正円形に近く紡錘車状を呈し、全体は丁寧に研磨される。外孔径1.6cm、内径0.8cm、厚さ0.7cm、重さ27.3gを測る。212は五角形状を呈す。周辺には打ち欠き調整痕が若干残り研磨はあまり丁寧ではない。中央部の孔は内径1.1～1.6cmの長円形になる。213・214は台形状で、周辺の打ち欠き調整痕がそのまま残る。214は28号石組炉付近から出土した。213は中央に、214はやや片側に偏して穿孔されるが、孔の一部が狭まりその部分が摩耗する。215～218は孔が貫通していない資料で未

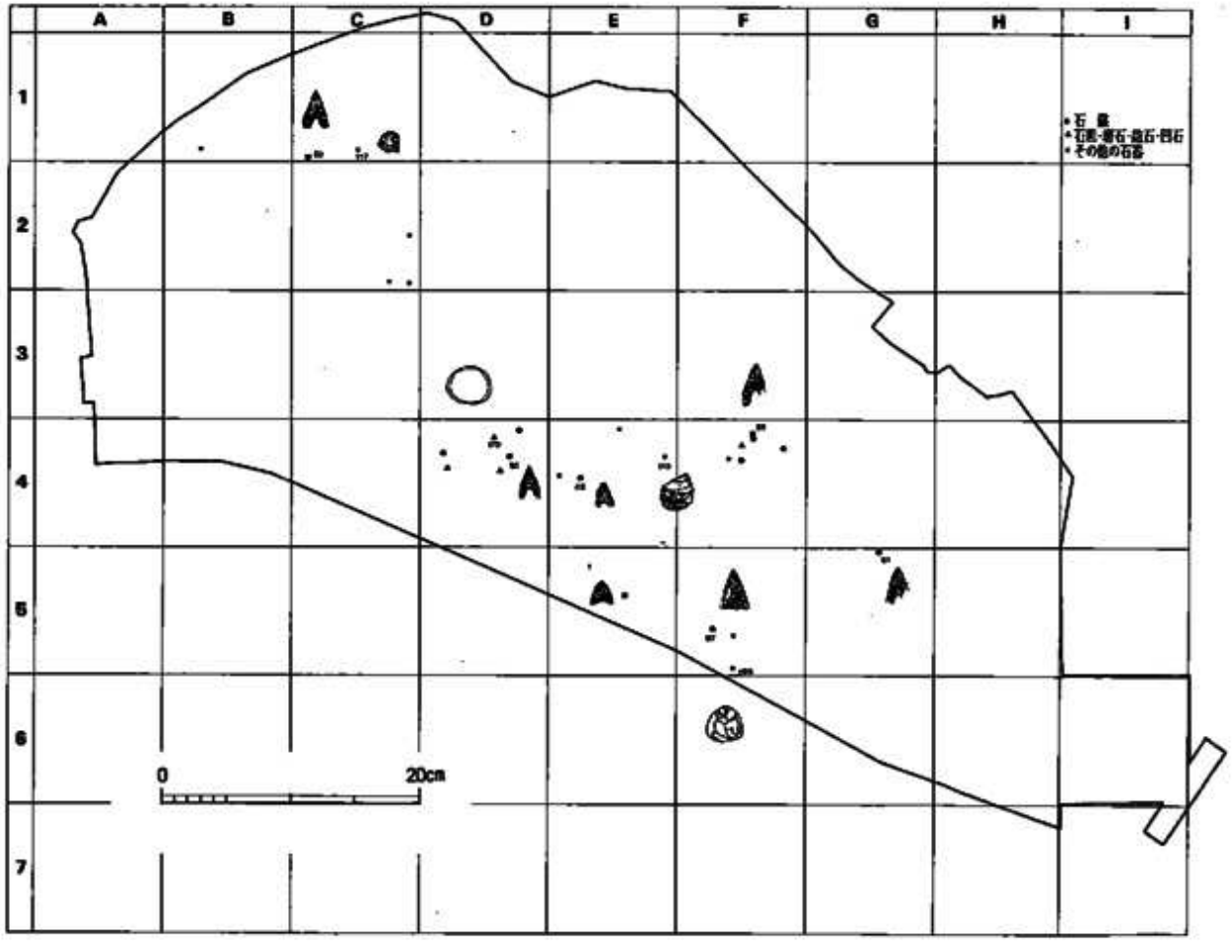
製品である。215は菱形状を呈し2.4cmと部厚い。上下から穿孔するが下面は母核から剥離したままの平坦面を持つ。216は欠損品で、片側に寄って小さな穿孔が見られる。217は15cm×15.7cmを測る大型品で、周囲は荒い打欠きをそのまま残す。孔径3.1cmと大きい穿孔は上下両方向から施される。厚さ1.7cm、重さ622.1gを測る。218は長円形の石材の上下に浅い凹みを有すもので、石材が白雲母石英片岩であるところから有孔石器としたが、厚みや凹みの状態から凹石と分類した方が妥当であろう。219は扁平な石材の周辺を打ち欠いた石器で、いまだ穿孔されていない有孔石器の未製品であろう。重さ572.7g。石材は216が絹雲母石英千枚岩、他は白雲母石英片岩である。220は板状の砂質千枚岩の一端に上端径6.5cmの穿孔部を有し、その部分から欠損している。周辺の一部は研磨される。221～223は長円形を呈する扁平な絹雲母石英千枚岩の周囲を一部磨いた石器である。224～233は剥片で、いずれも黒曜石。224～226、230～232は縦長剥片、227～229は幅広の剥片である。224・227・230・232は自然面の打面を持ち、230・231・233は角礫の稜を背面に有す。234～248は黒曜石の角礫を素材とする石核。打点が一方向のもの（236・240・243・244・246～248）、90度ずらすもの（234・237・239）、上下にもつもの（238・241・245）がある。これらのうち、大きく自然面を残す238・241・245・246等は石材原産地で原石の一部を剥離したのち搬入された石材の可能性があろう。250・251は打ち欠き石錘。250は扁平な白雲母石英片岩の両側に抉りを入れる。251は径9cmの大型品で、一部を打ち欠いている。253・254は砥石で、両者とも研砥面は1面である。253はかなり使い込まれ溝状になる。254は広い研ぎ面を有す砂岩製荒砥で、二次的に焼成を受けている。255・256は軽石。255は鶯色、256は暗茶褐色を呈す。（木下）

第5表　Ⅱ区　5・6層　主要石器グリッド別一覧

		A1	A2	A3	A4	B1	B2	B3	B4	C1	C2	C3	C4	C5	D1	D2	D3	D4	D5	E1	E2	E3	E4	E5	F1	F2	F3	F4	F5	F6	G2	G3	G4	G5	H3	H4	H5	合計
石鏃	5層	1		3		1	6	2	1	7	9				6	2				2	7	6	1		1	7			1	1		7	7	3	1	4	2	136
〃	6層									1								4			1		1					3	1					1				12
ドリル	5層												2														1						1					4
スクレパー	5層							1	1	1		2		1	1		4	1			2	5	1			1	2	2	3			1	2		1	3	1	36
〃	6層					1				1													2					1										5
石斧	5層																		1								1					1						3
磨石	5層		1	1	1		6	5	1	1					3		2	8	1	1	2	5	5	4	1	7	5	5	3		6	3		1		3		93
〃	6層																	2				1	1															5
敲石	5層										1						1					3				1	2											7
凹石	5層							1					1									1				1					1						1	6
石皿	5層						1		1		2	1				1	1	2			1		3	1			2	2	1			2	1	1		1		24
有孔石器	5層									1								1					1				1	1	1			1		1	1			9
石核	5層		1	1			1	1		2	2	1			1	1	4	3	1		3	2	1	2		1	2		3		1		1		3			38
〃	6層																	1					1															2
石錐	5層							1																										1				2
〃	6層																	1																				1
砥石	5層										1																					1						2
軽石	5層			1							1	2			1		1	1			1	2							1									11
	6層										2																		2									4



第151図　Ⅱ区６層出土押型文土器分布図（1/600）



第152図　Ⅱ区６層出土石器分布図（1/600）

（7）6層出土の遺物

石組炉、集石遺構等の生活遺構が見られないせいか、5層に比べて押型文土器、石器とも極端に減少する。遺物分布は第151・152図に図示したが、D～F 4～6区に集中部がある。早期の包含層である。土器・石器の観察は第6・7表を参照されたい。

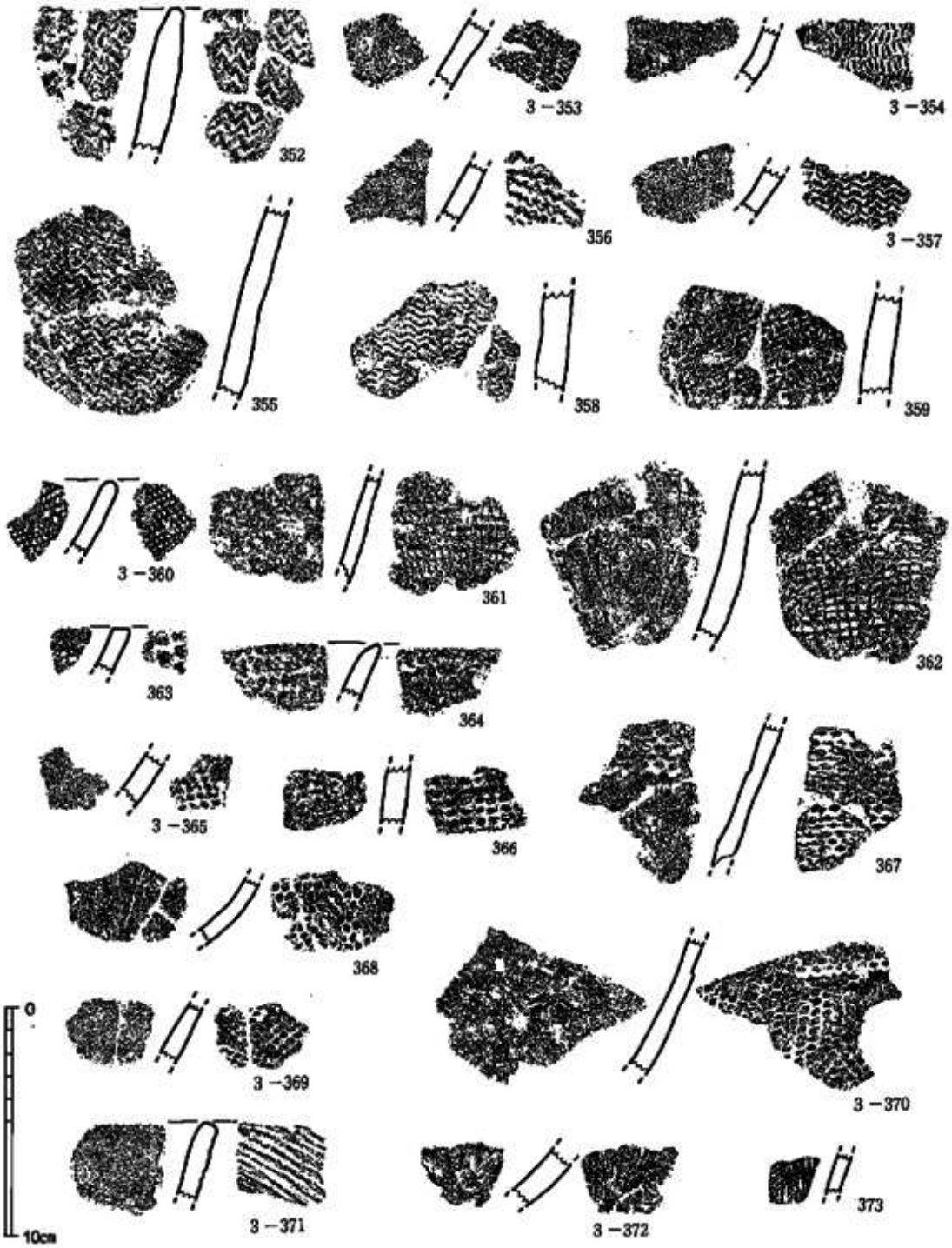
縄文土器（図版88、第153・154図352～382）

ここはⅡ区の6層出土縄文土器についての説明であるが、編集の都合上、まったく同一層であるⅢ区の6層出土縄文土器実測図も同時に割付・編集しているので御了承願いたい。なお、Ⅲ区出土の縄文土器は第153・154図353・354・357・360・365・369～372・374・375・377・379～382であり、番号の前に「3－」を付した。

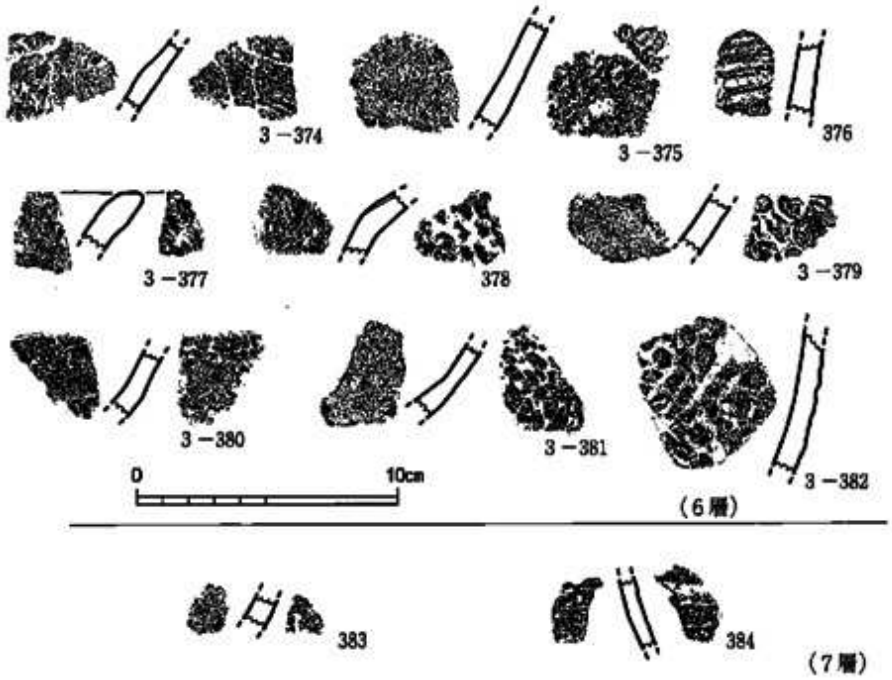
6層出土縄文土器については31点を図示したが、押型文土器を見る限りではやや年代幅が窺える。352～359は横位の山形文、3－360～362は格子目文、363～3－370は横位の楕円文である。3－354については縦位の山形文であるが、山形の文様が小さく年代的に古い一群として位置づけた。367のように接合面が残る例は、押型文土器では珍しい。3－371・3－374は撚糸文で、内面はナデ。3－372・3－375は無文土器。3－373・376は条痕文土器であるが、内面はいずれもナデ。3－377・3－382は縦位の楕円文の一群で、楕円文一粒一粒も大きく、横位の楕円文の押型文土器よりも年代的に新しい要素と見ることができる。（水ノ江）

石　器（図版93、第157図87～95、第158図115～117、第163図174～176、第169図242・249・252・257～259）

6層からは石鏃・削器・磨石・敲石・礫器・石核・原石・軽石等が出土した。87～95は石鏃で、13点出土したうち9点を図示した。石材の内訳は黒曜石10点、安山岩2点である。5層に比べると安山岩の比率が高い。87は平基式で、横長剥片を素材とする。88～95は凹基無茎式で、89は浅い抉りを有す。88は横長剥片を素材とし短い脚部を有し、90～95は二等辺三角形で、長脚の鏃。115は掻器。幅広で薄手の剥片端部に調整を施す。116・117は削器。寸づまりの剥片の一縁に刃部を有す。いずれも黒曜石製。174～176は磨石。174は倒卵形を呈す小型の完形品。175・176は長円形を呈す。242は黒曜石製の石核。角礫の上下両方向から幅広の剥片を剥出する。いずれも輝石安山岩製。249は黒曜石の円礫で、径5.1×5.2cm、厚さ4cm、重さ142g。252は長円形を呈す石錘で、長辺の両側を打ち欠く。257～259は軽石で、いずれも淡茶灰色を呈す。（木下）



第153図　Ⅱ・Ⅲ区６層出土縄文土器実測図（1/3）



第154図　Ⅱ・Ⅲ区6・7層出土縄文土器実測図（1/3）

（8）7層出土の遺物

縄文土器（第154図383・384）

7層から出土した縄文土器はA2区出土の2点だけである。383は無文土器、384は条痕文土器である。

（水ノ江）

石　器　（図版92、第169図260・261）

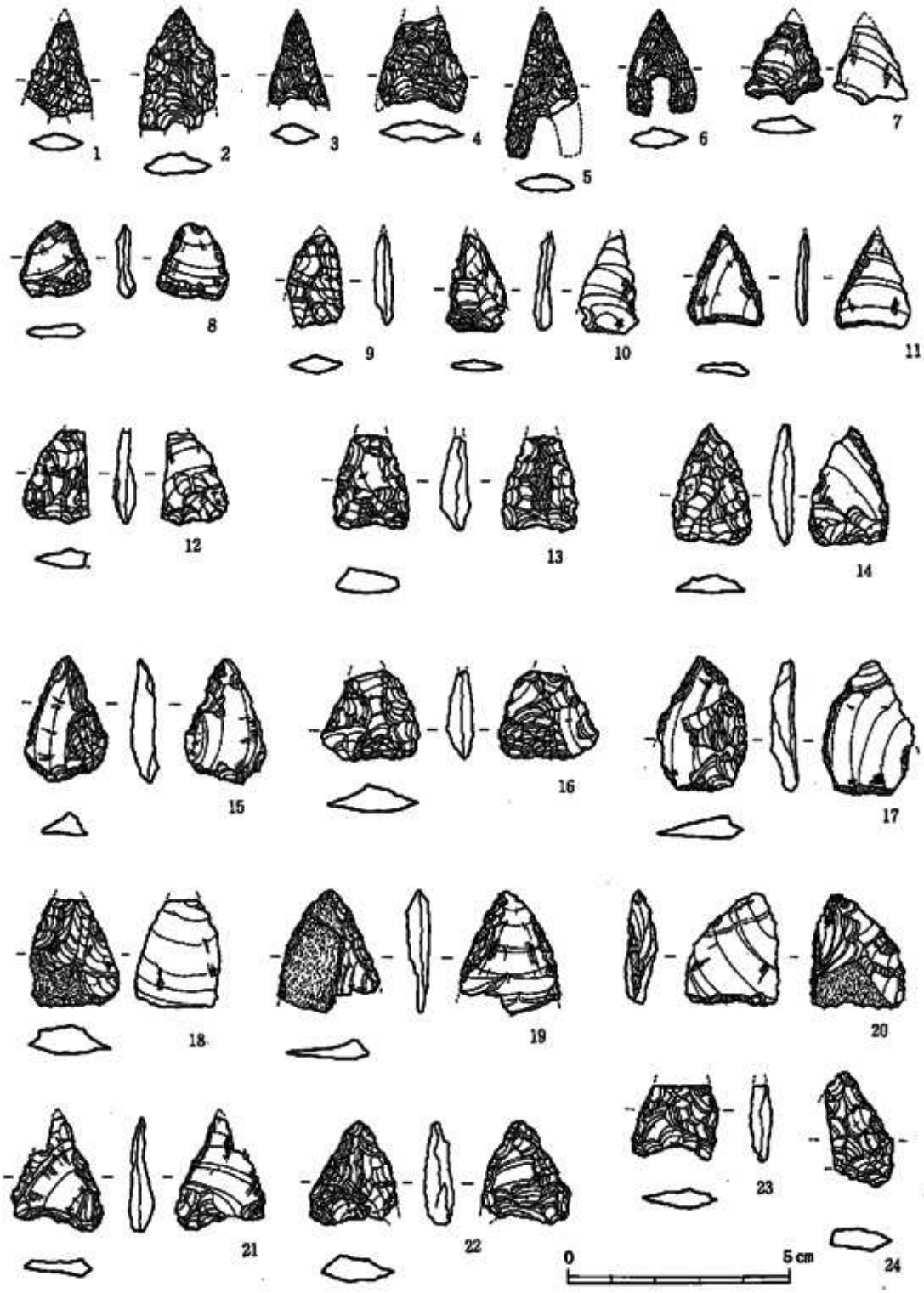
260・261は軽石。260は中央上部に浅い凹部を有す。261は指状を呈す破片。色調は両者とも淡茶褐色。（木下）

（9）その他の遺物

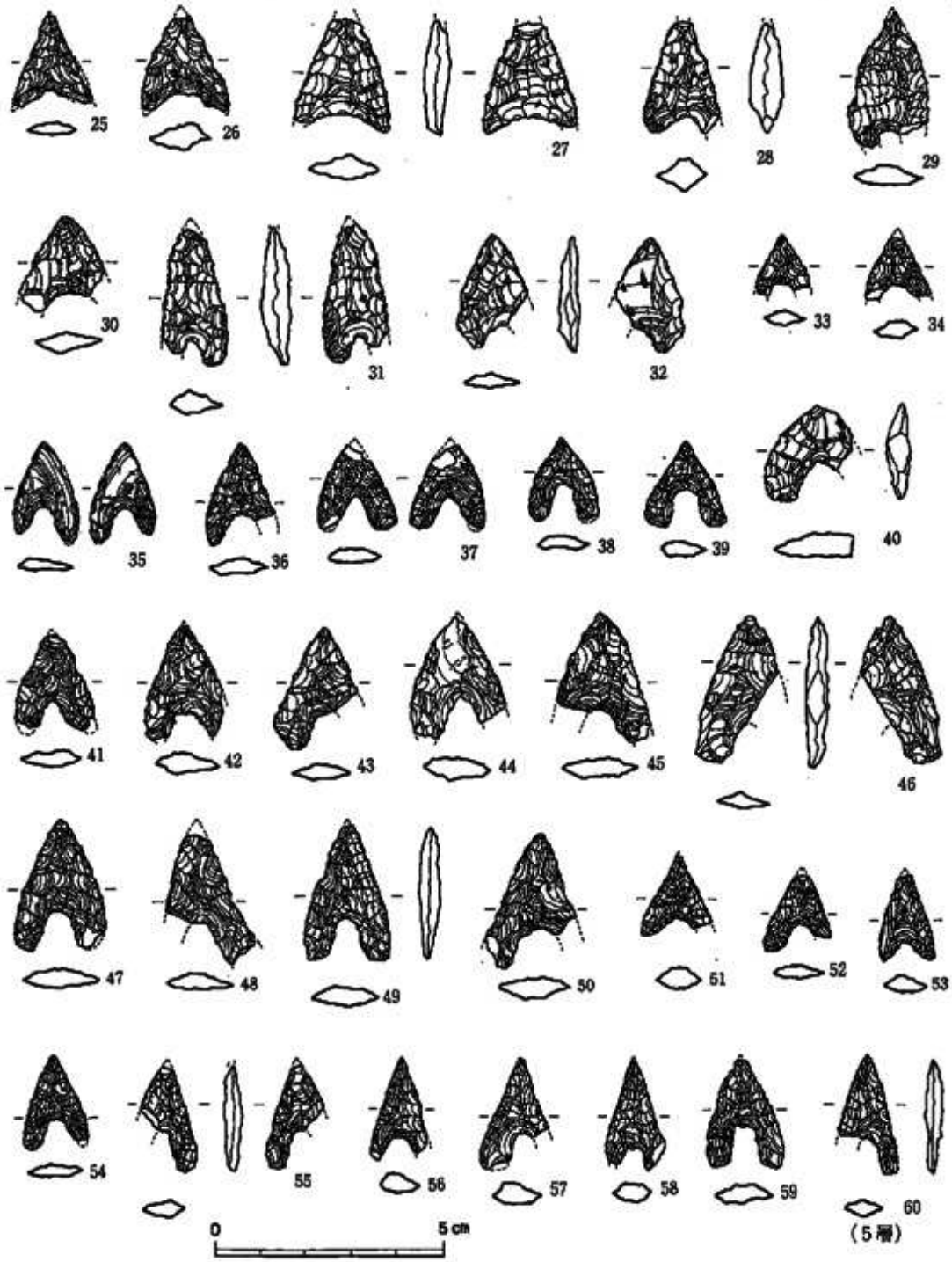
表土や時期のことなる遺構から出土した縄文時代の遺物である。

包含層出土縄文後晩期土器（図版88、第172～178図385～467）

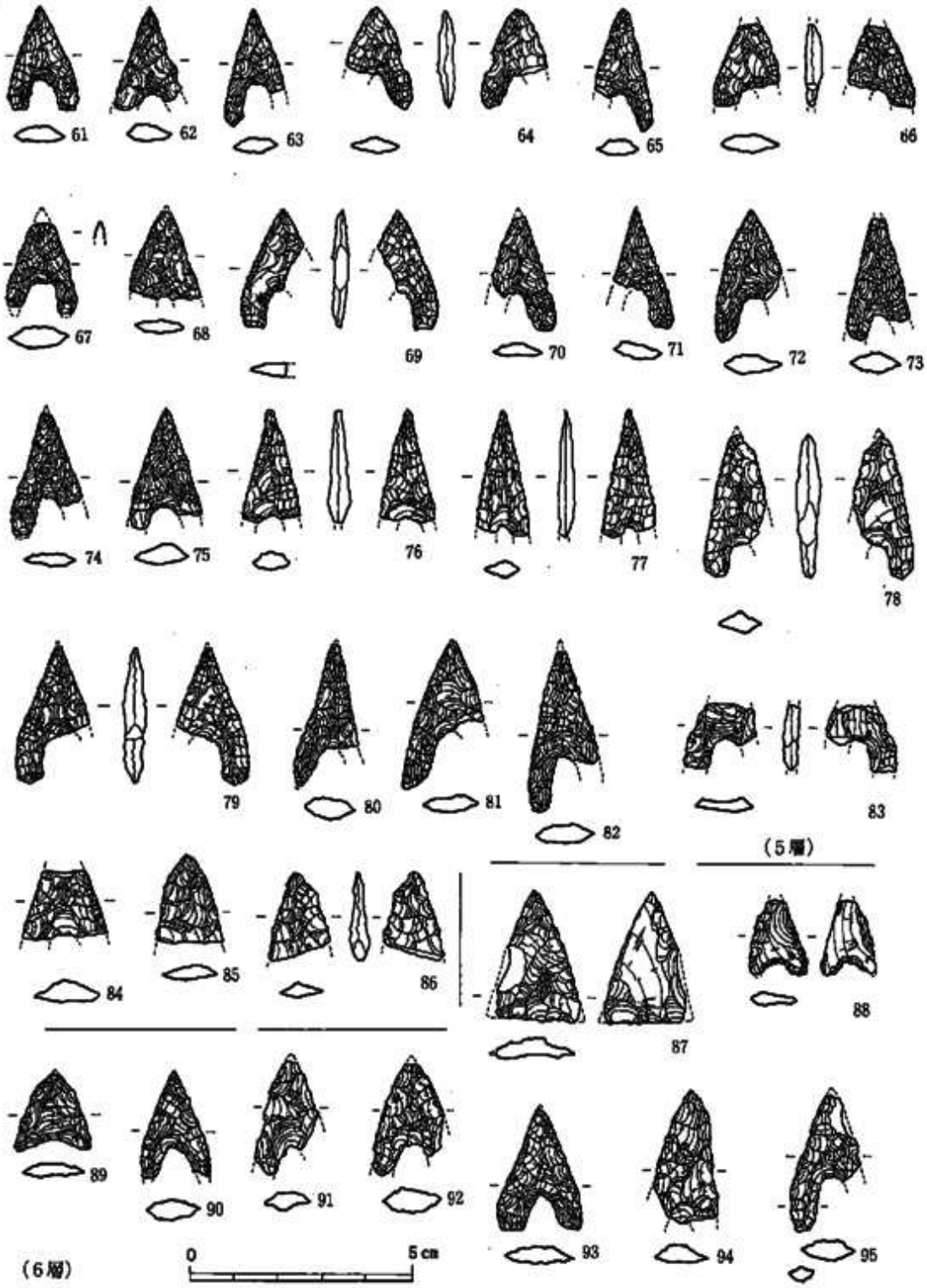
ここでは、4層より上位の包含層あるいは弥生時代以降の遺構に包含されていた縄文後晩期土器を纏めた。



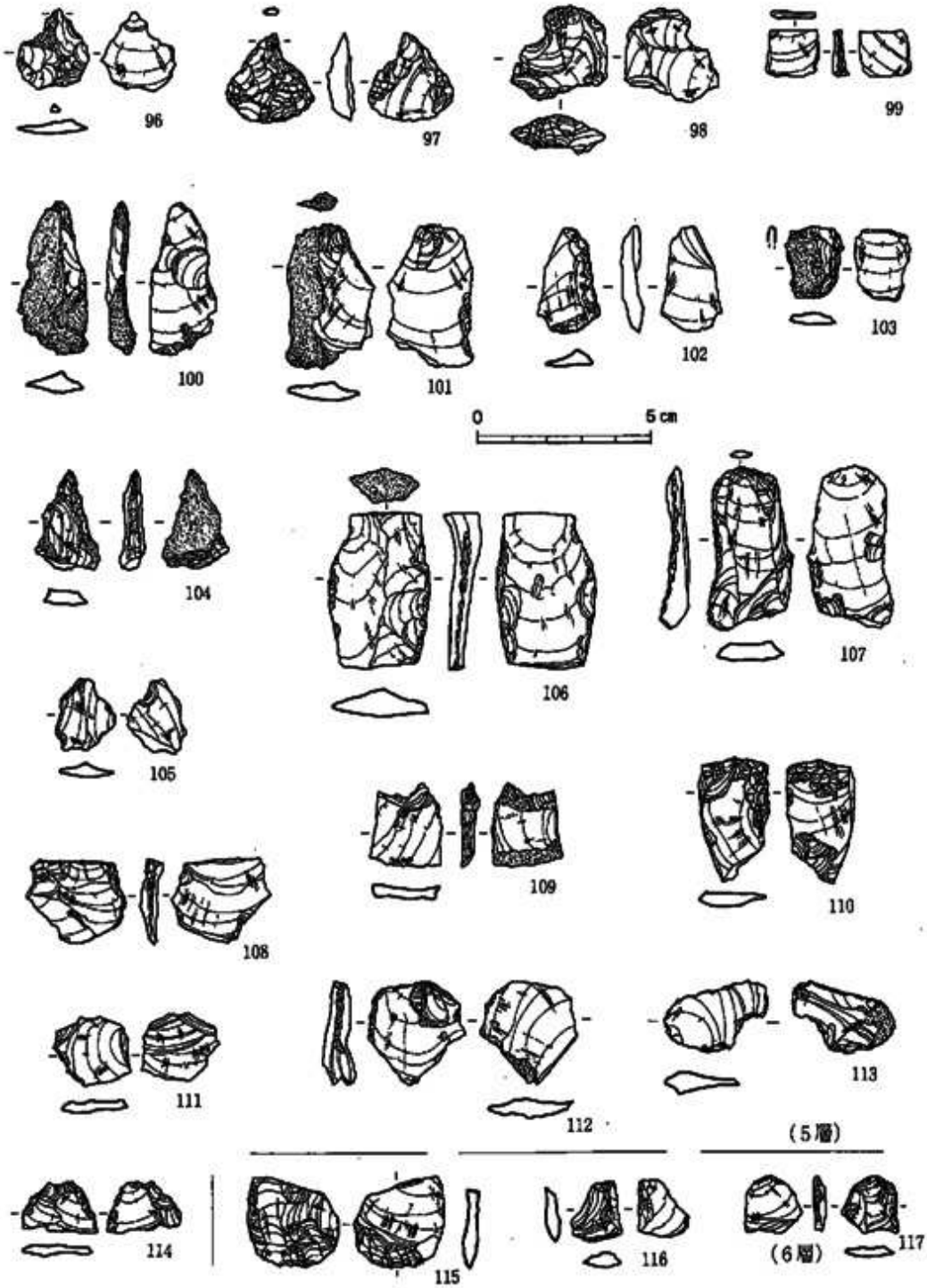
第155図　Ⅱ区出土石器実測図１（2/3）



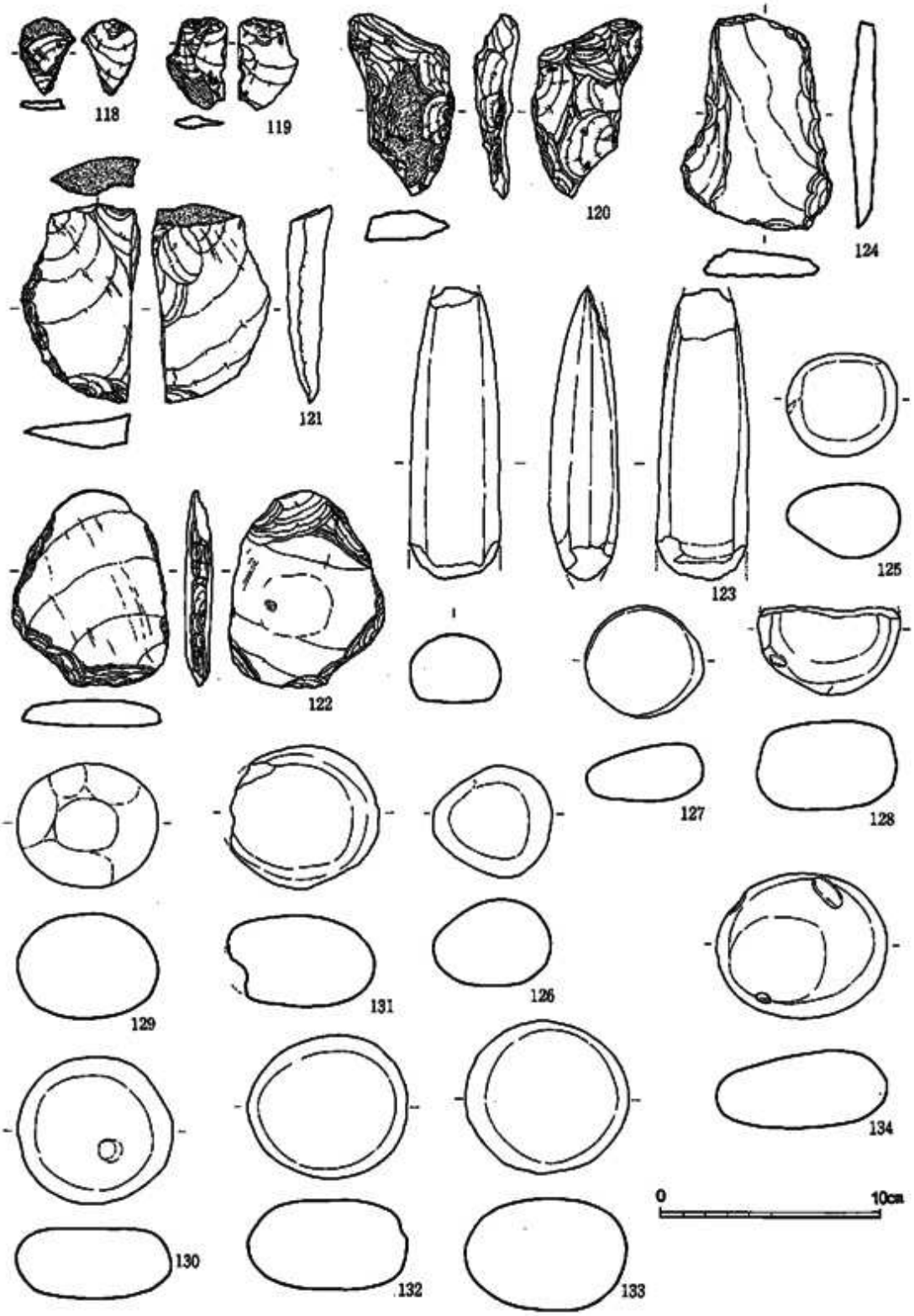
第156図　Ⅱ区出土石器実測図2 (2/3)



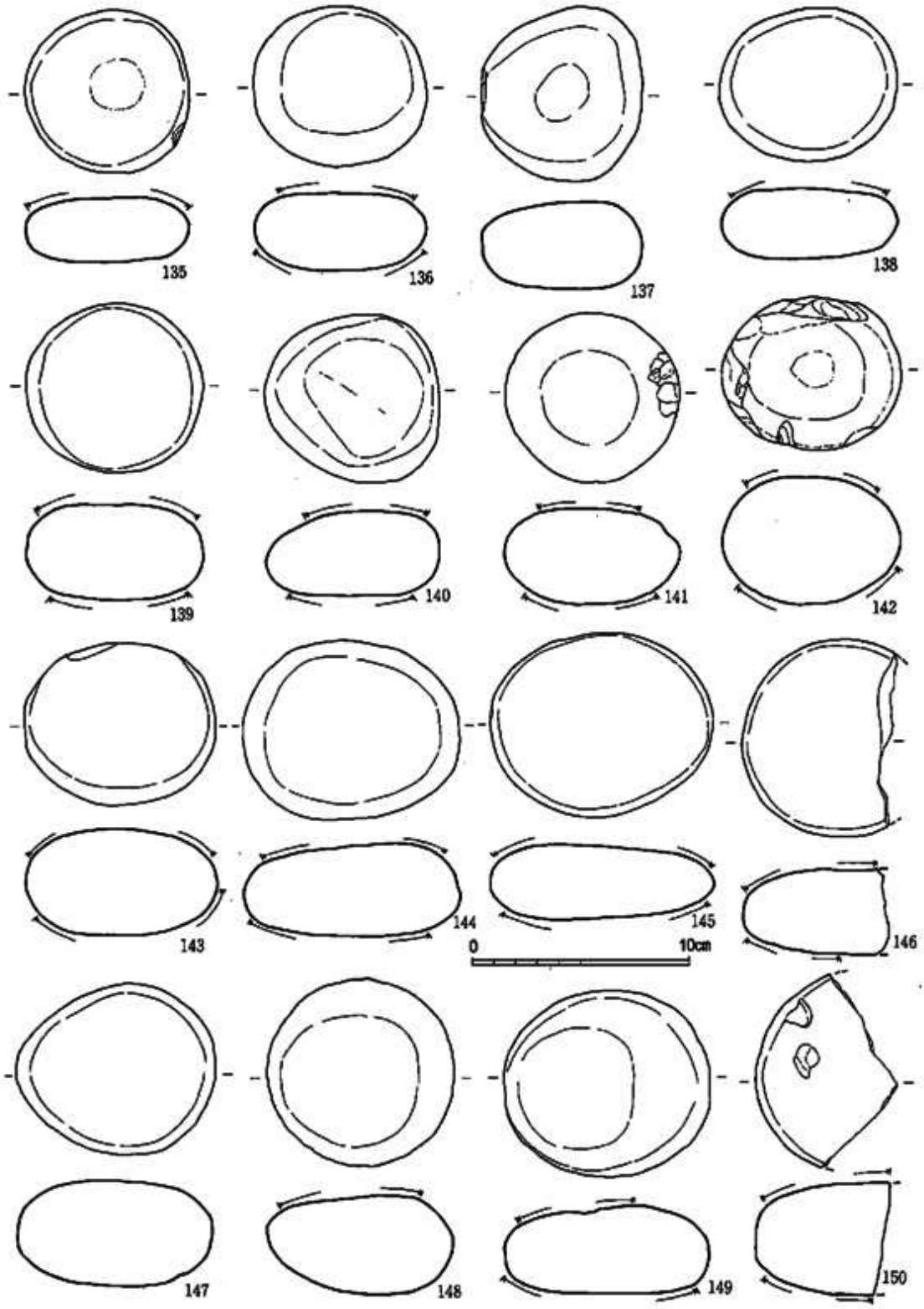
第157図　Ⅱ区出土石器実測図3 (2/3)



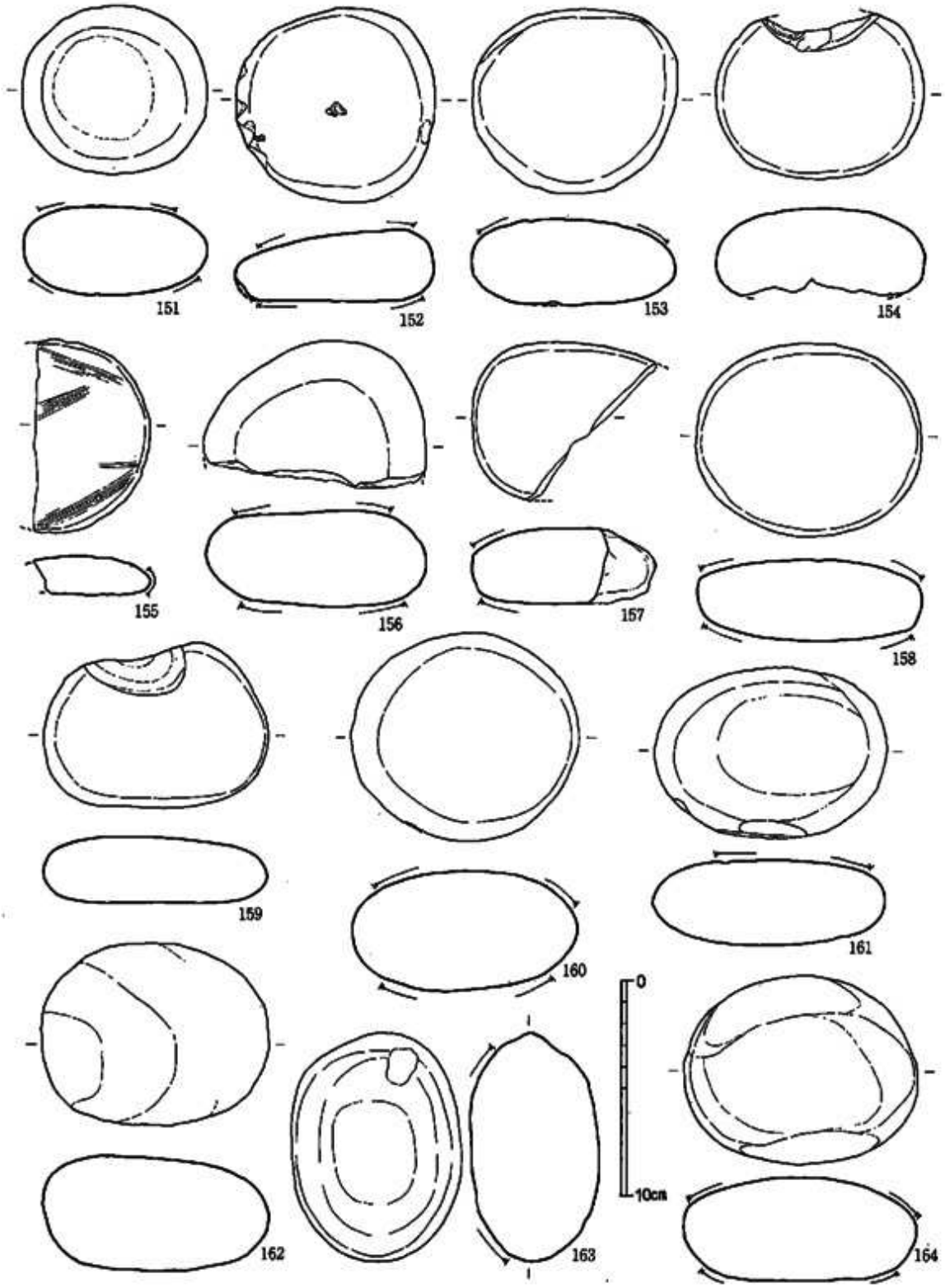
第158図　Ⅱ区出土石器実測図4（1/2）



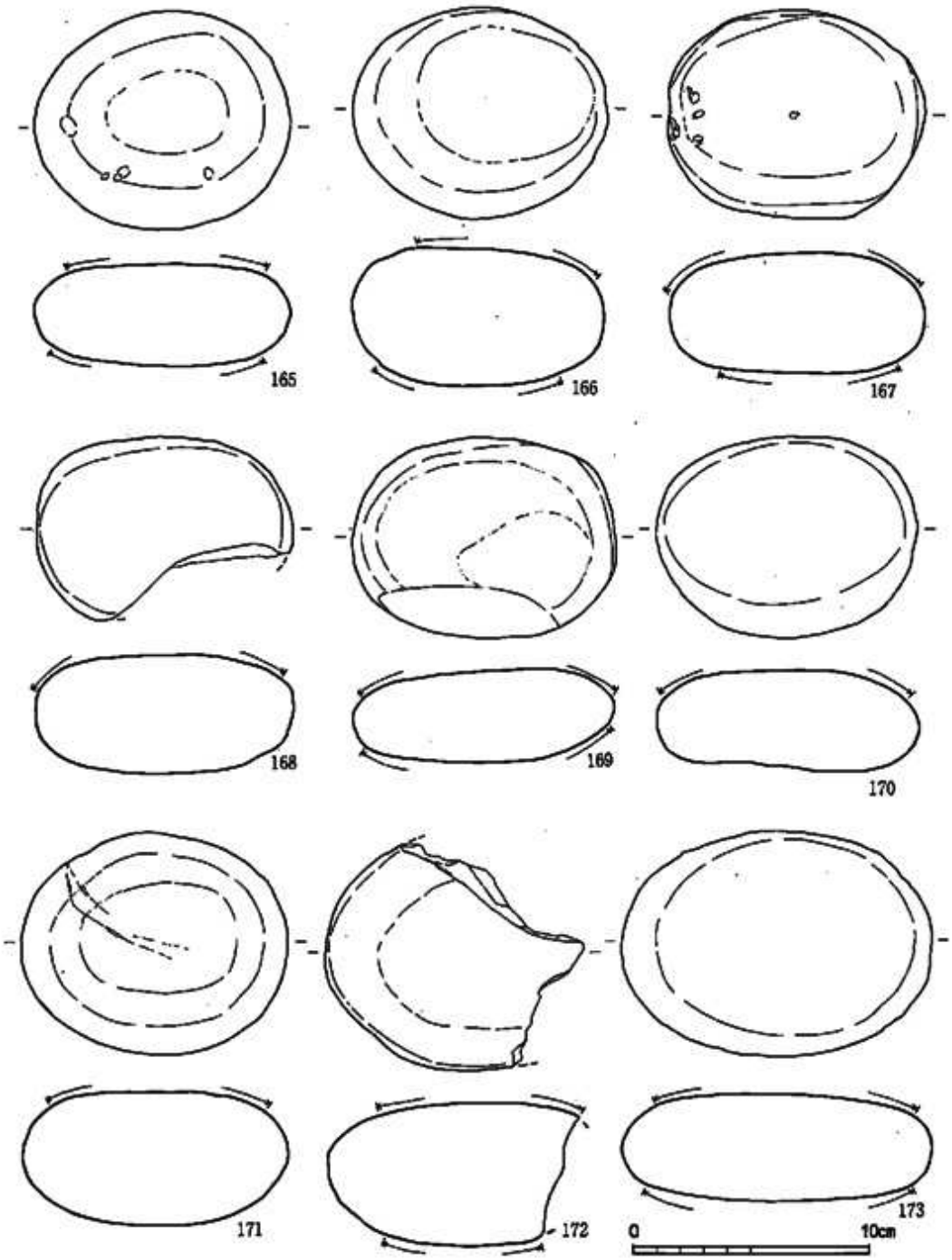
第159図　Ⅱ区出土石器実測図５（1/3）



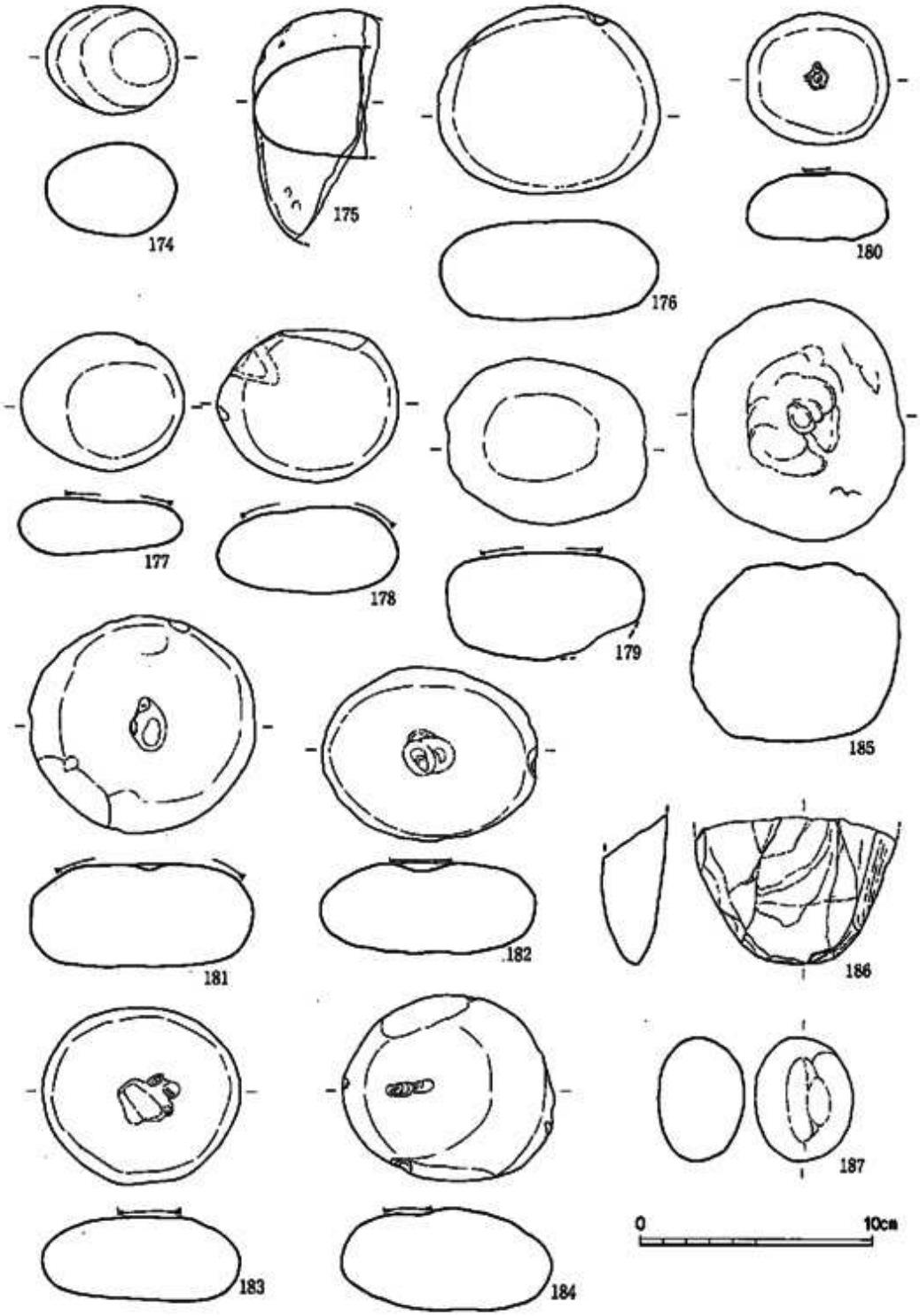
第160図　Ⅱ区出土石器実測図６（1/3）



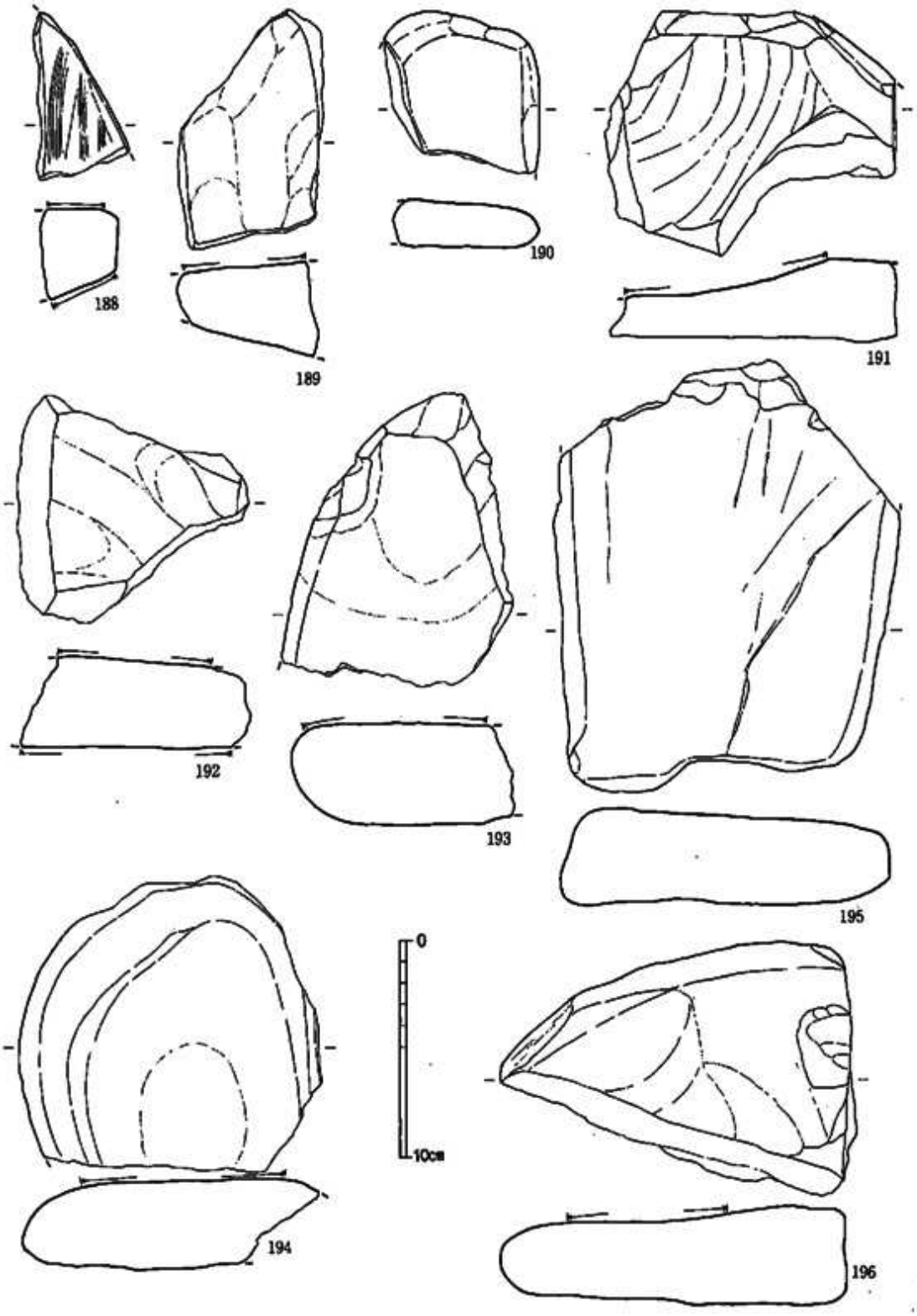
第161図　Ⅱ区出土石器実測図７（1/3）



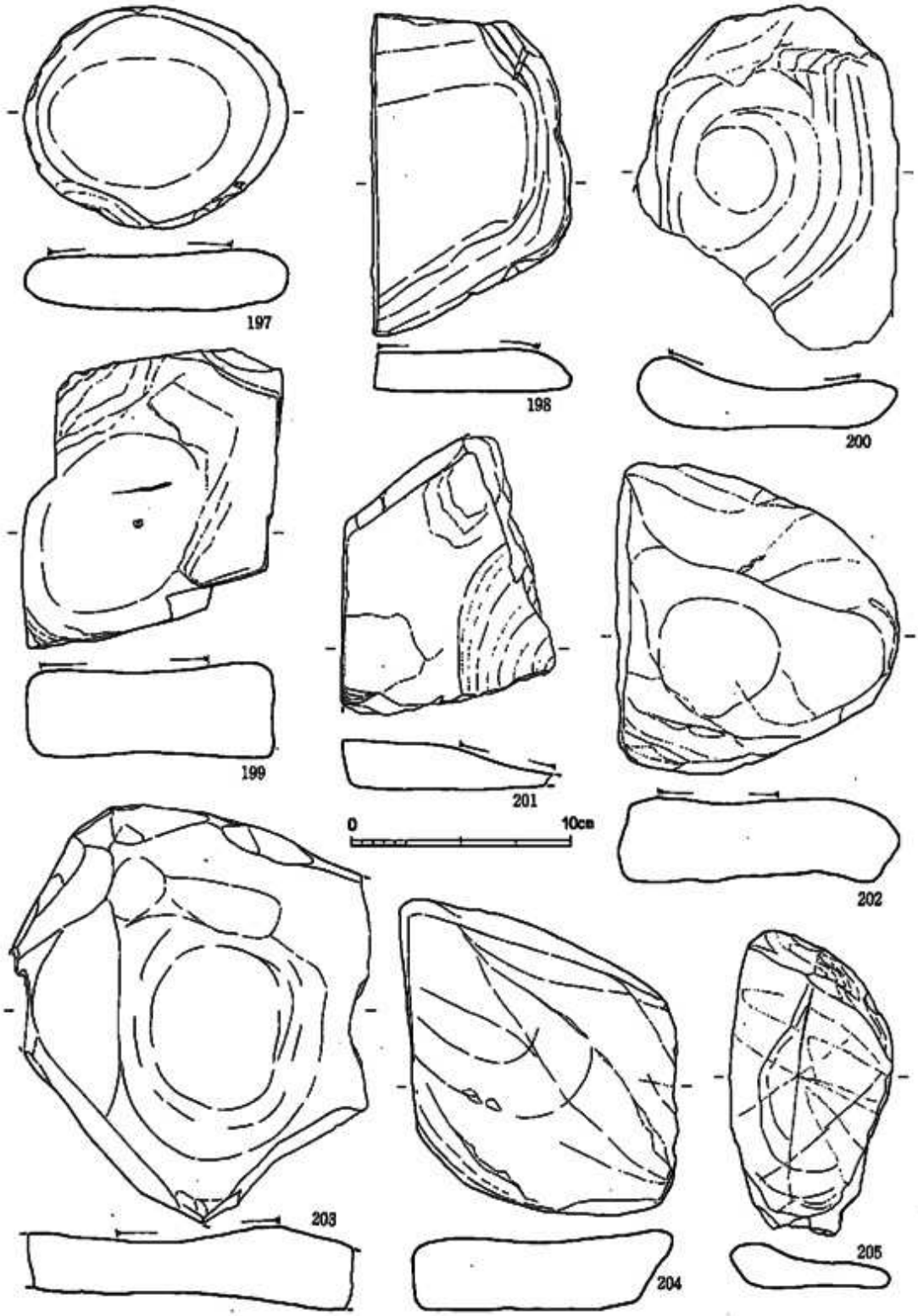
第162図　Ⅱ区出土石器実測図８（1/3）



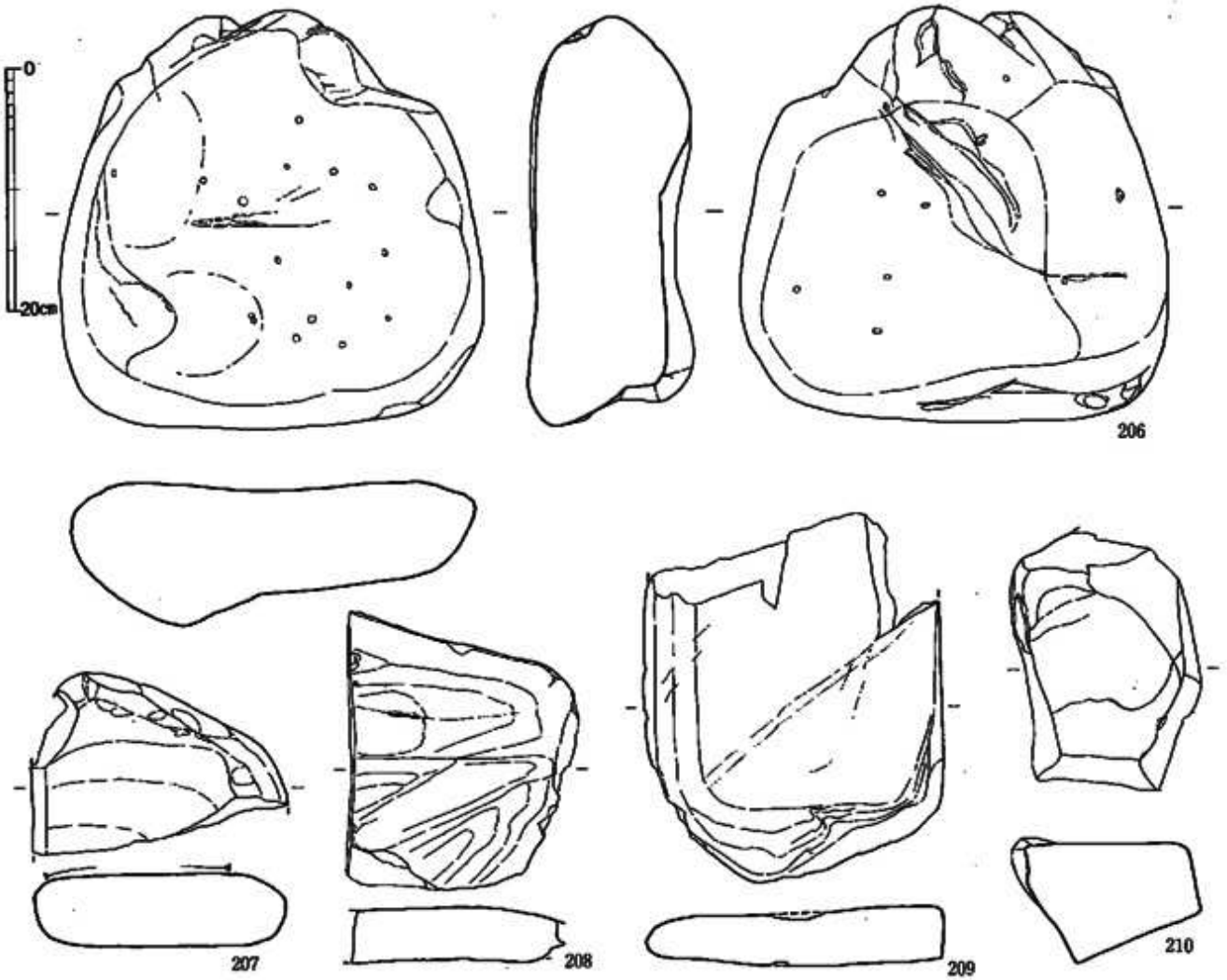
第163図　Ⅱ区出土石器実測図９（1/3）



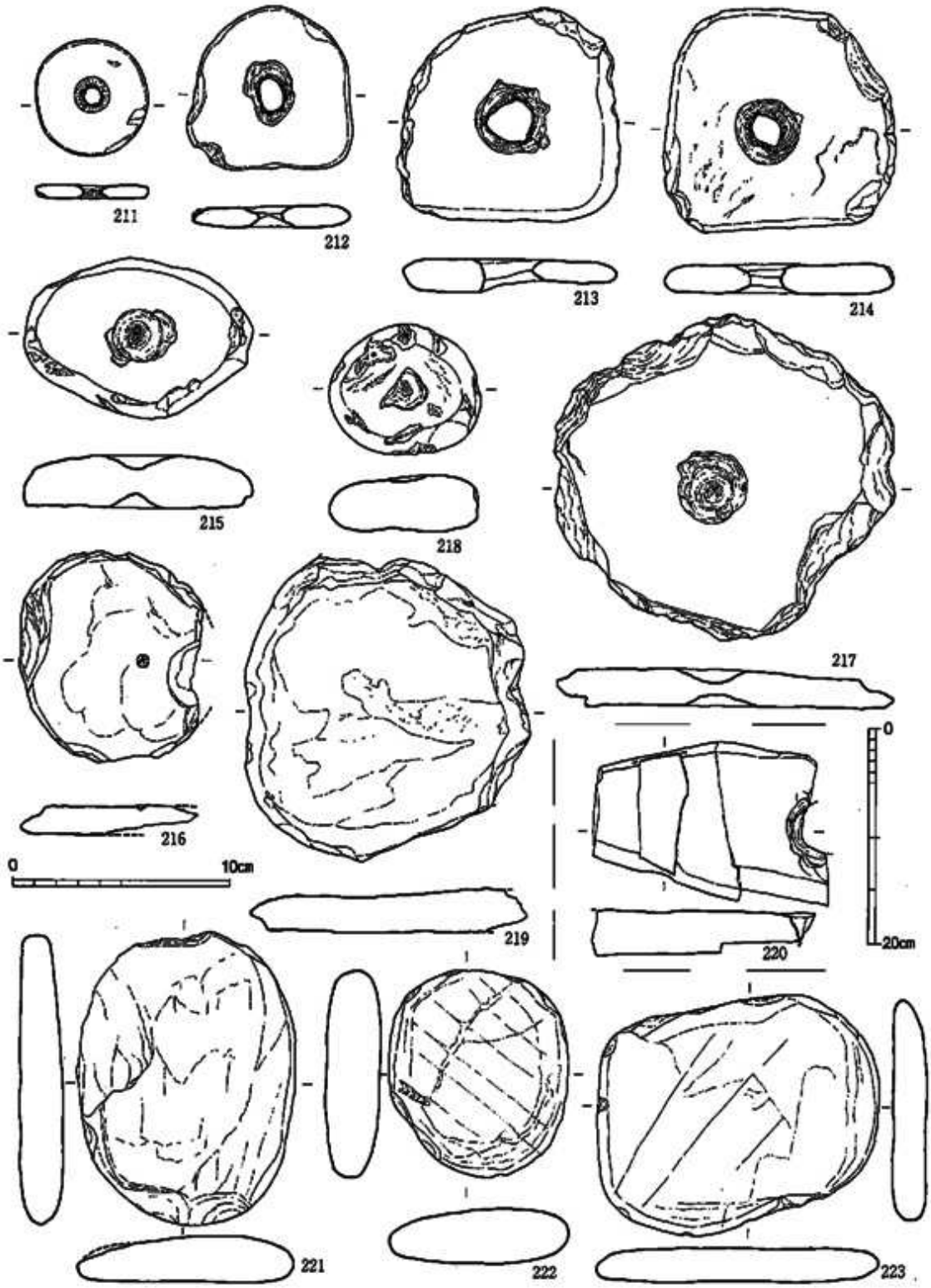
第164図　Ⅱ区出土石器実測図10（1/3）



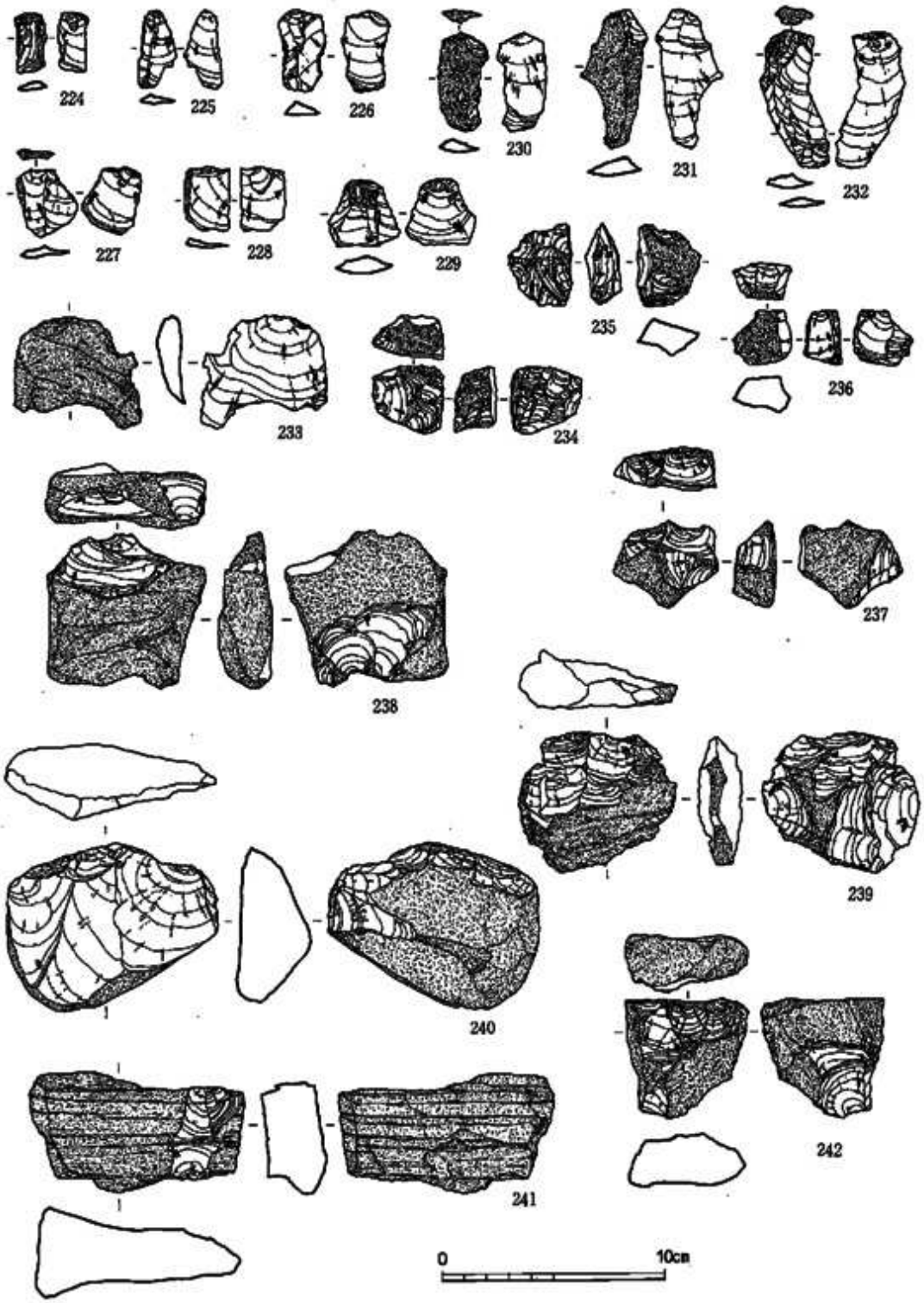
第165図　Ⅱ区出土石器実測図11（1/6）



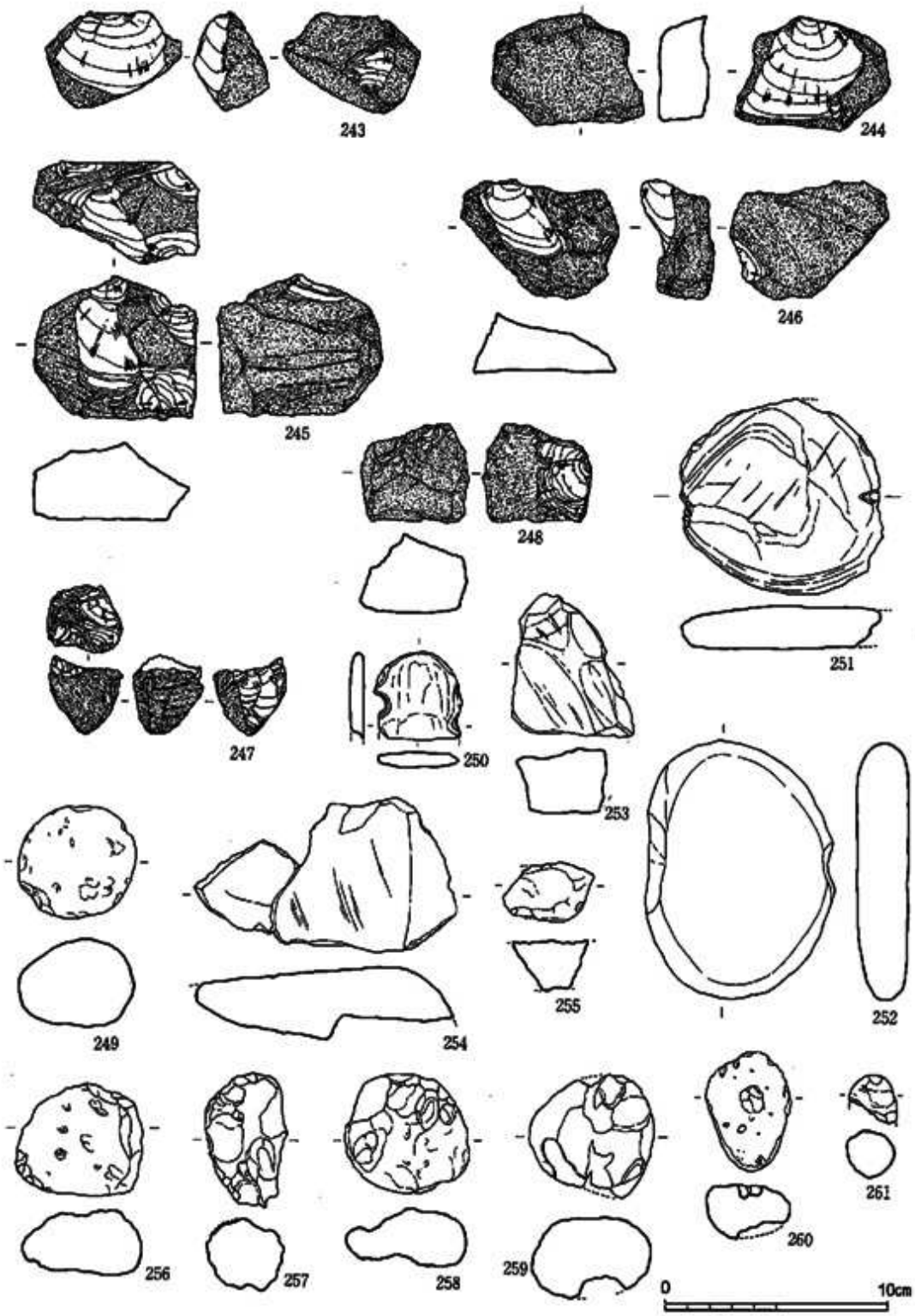
第166図　Ⅱ区出土石器実測図12（1/6）



第167図　Ⅱ区出土石器実測図13（1/3・1/6）



第168図　Ⅱ区出土石器実測図14（1/3）



第169図　Ⅱ区出土石器実測図15（1/3）

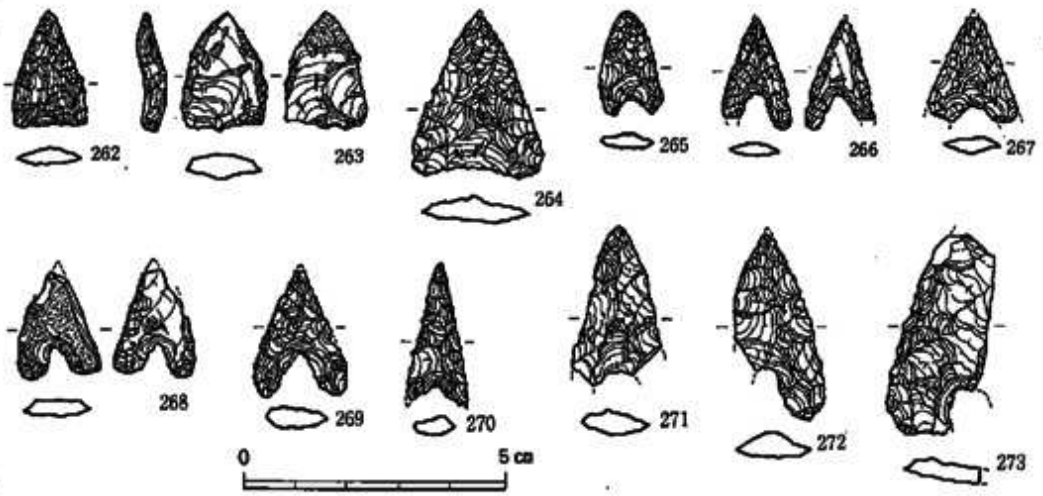
385・386は同一個体である。斜位の凹点文という特徴から、後期初頭に位置づけられる阿高式系（坂の下式）と考えられる。

387の磨消縄文は原体がＲＬで、無文部には研磨が施される。沈線文が細く、おそらくは後期でも初頭～前葉期ではなく、中葉頃のものと考えられる。３－388は小池原上層式の口縁部であるが、縄文を持たない鉢形になろう。中央部に焼成前に穿たれた貫通孔が１つある。３－389も小池原上層式の胴部に相当し、やはり縄文を持たない鉢形になろう。390は鐘崎式の新しい段階の鉢の胴部である。３－391はやはり鐘崎式の新しい段階の深鉢胴部で、内面には巻貝条痕が施される。392も鐘崎式の新しい段階の深鉢胴部であろうか。

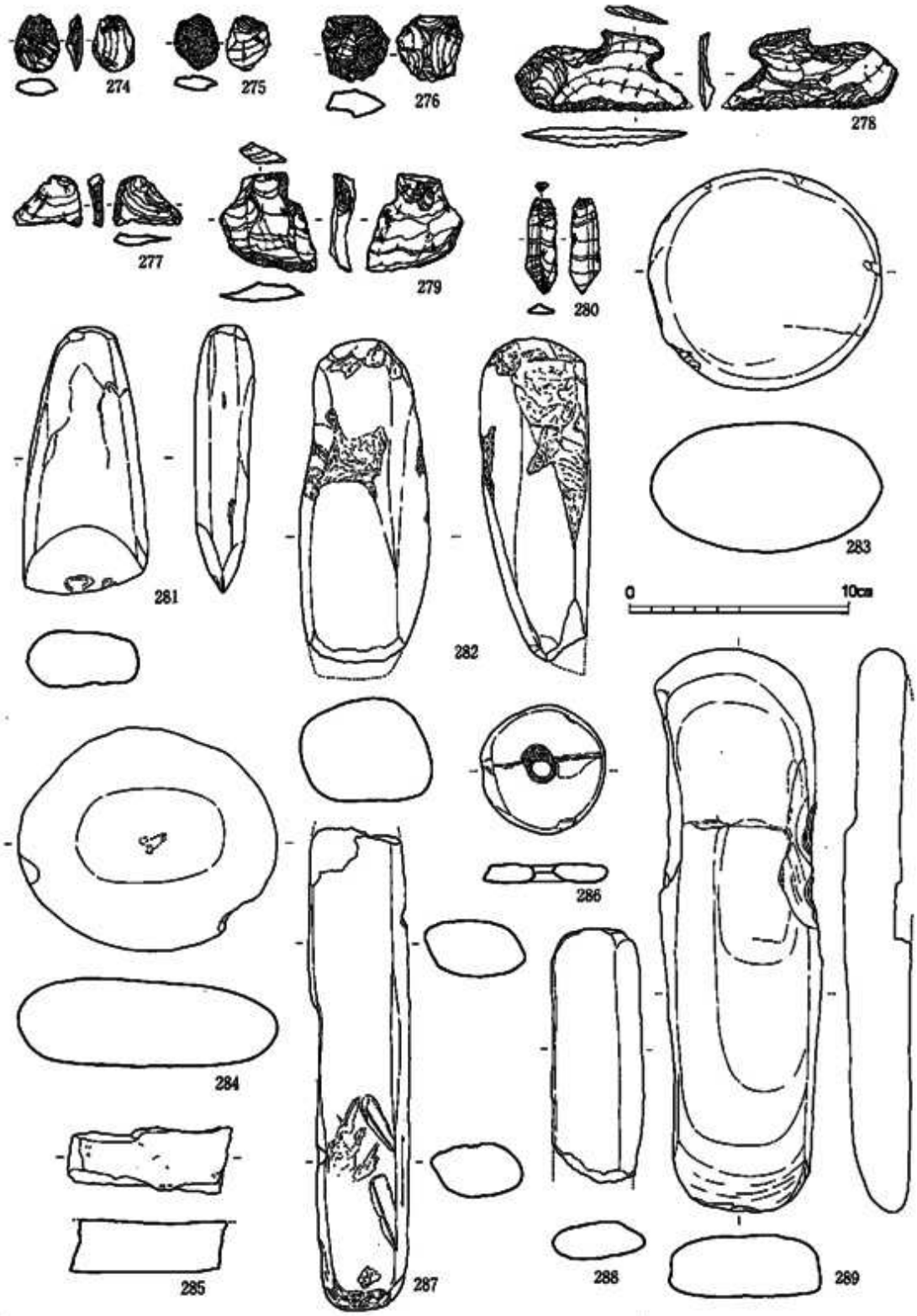
393～401は後期末の一群の鉢で、398は復原口径18cmを測る。内外面ともに沈線文と研磨が施される。397は小型の深鉢になるかもしれない。

402～426は晩期に属する一群で、402～421は鉢、422～426は深鉢になる。404のような突帯文を施すものは点数は少ないが、ほとんどの場合はボウル状の器形を呈する特徴的な要素である。405の復原口径は34cmで、内外面に丁寧な研磨を施す。407と410はいずれも屈曲部の接合面で剥離しており疑口縁となる。同一個体ではないが、本来はほぼ同じような器形になろう。409は復原口径26cm。413は４単位の波状口縁になる器形で、屈曲部がわずかに残る。414～418は後述する427～442の刻目突帯文土器に伴う鉢の可能性がある。422は口縁部を肥厚させ、その外面に巻貝条痕を施し文様的意匠を表現する深鉢。423はリボン状の突起を対面２方向に付ける深鉢。424は屈曲部の２方向にやはりリボン状の突起を付ける。425は口縁部を肥厚させ、無刻目突帯文的な意匠を表わす。426は口唇部に刻みを施し、穿孔は焼成前のものである。

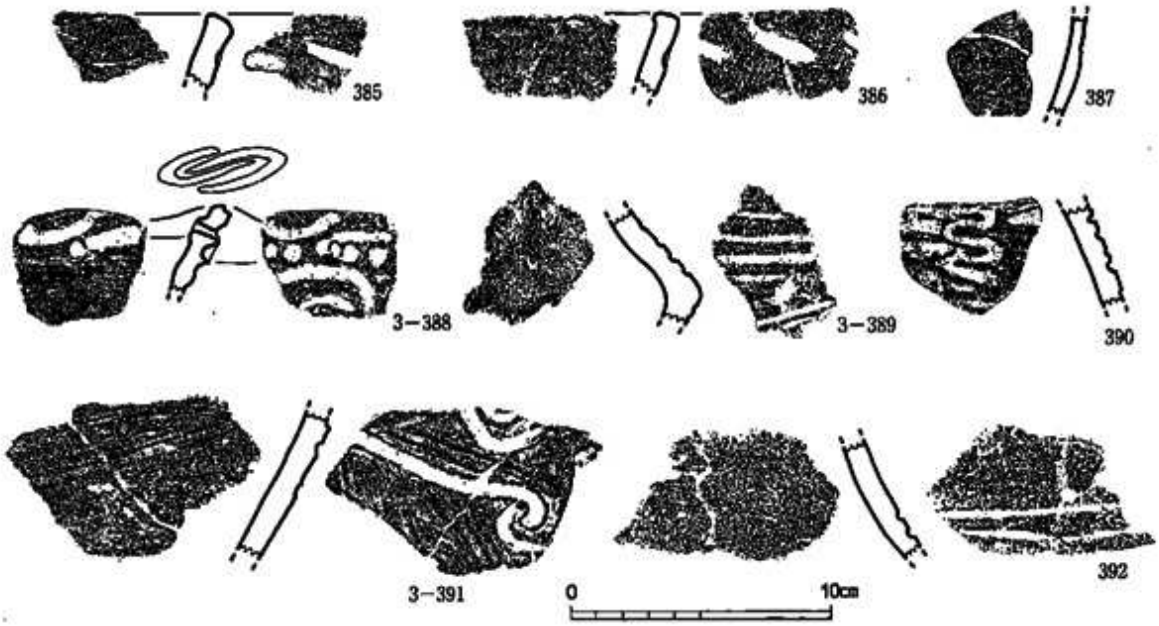
427～440は近年弥生早期ともされる刻目突帯文土器である。いずれも突帯文は口縁端部によ



第170図　Ⅱ区出土石器実測図16（2/3）



第171図　Ⅱ区出土石器実測図17（1/3）



第172図　包含層出土縄文後晩期土器実測図１（1/3）

り近い位置にあるのが特徴。430・438・440のように、胴部の屈曲部に同様の刻目突帯文が施されるものもある。器面調整にはナデるものもあれば、条痕もある。これら深鉢に伴う鉢は、先述したようにおそらくは414～418のような鉢であろう。441・442は口縁端部の外面に刻みを有した深鉢の口縁部で、刻目突帯文土器に伴うものか、あるいは晩期の土器群に伴うものか判然としない。

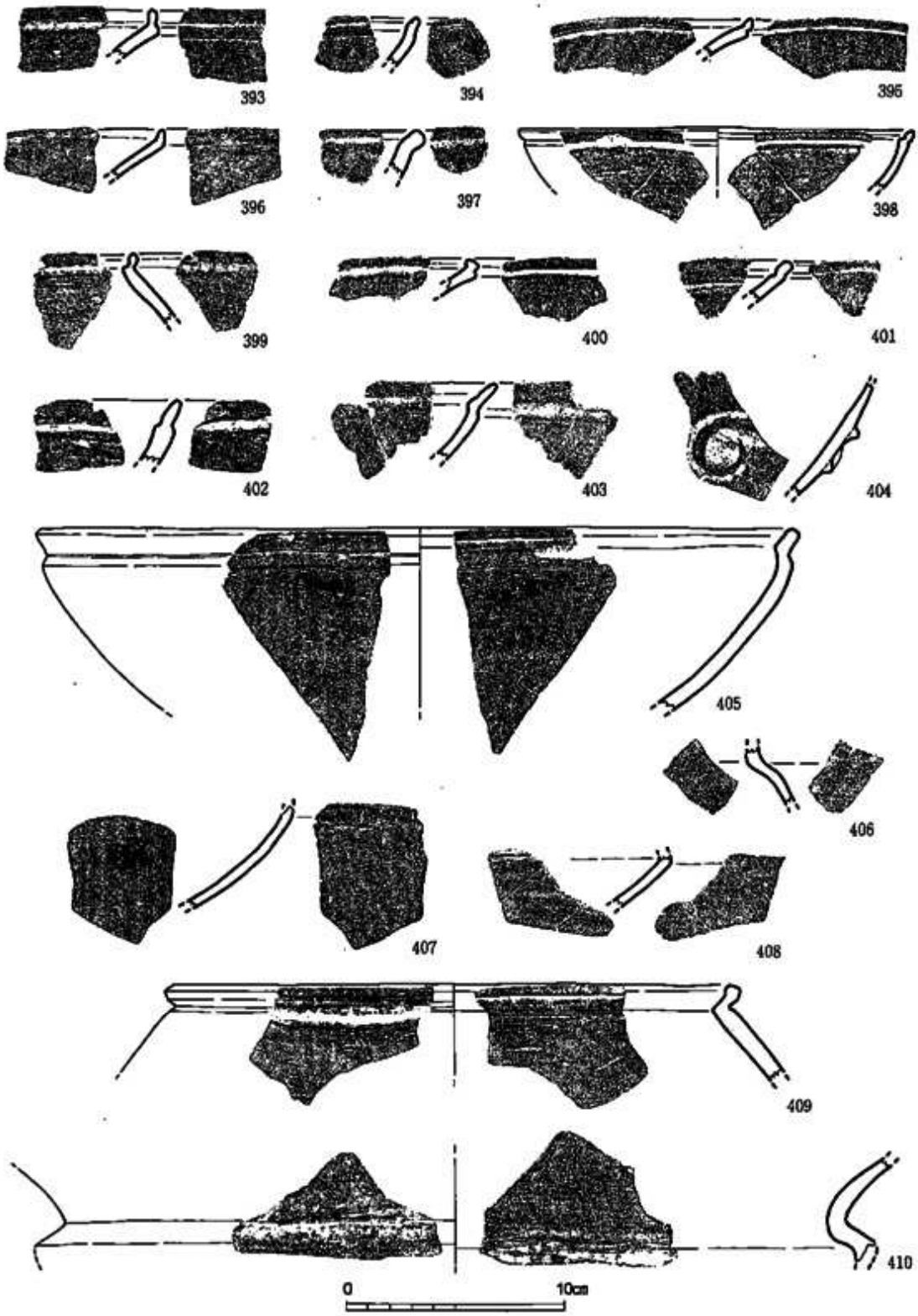
443～460は晩期もしくは弥生早期とされる刻目突帯文土器に伴うであろう無文の深鉢である。器面調整は多くがナデであるが、条痕を施すものもある。460の器面調整には巻貝条痕が施される。頸部付近が屈曲するようでもあるが、これらの特徴からは後期に属する可能性が窺われる。

461～467は端部が外側へ突出する底部で、これらは主に晩期に属する特徴である。461・464・467は器壁も薄くおそらくは鉢の底部であり、その他は器壁の厚さや器面調整から深鉢の底部と考えられる。

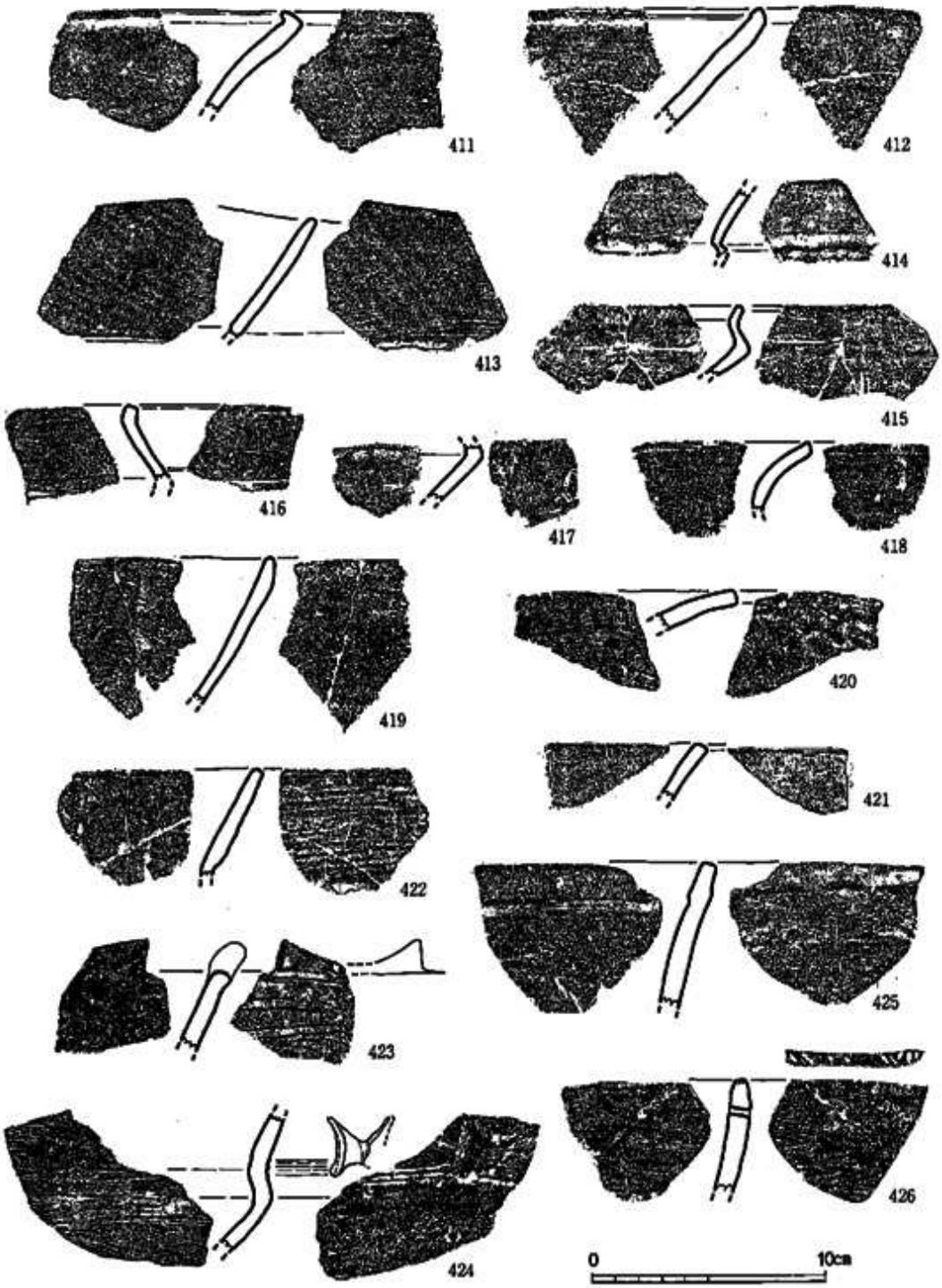
包含層出土縄文早期土器（第177・178図468～501）

ここでは、４層より上位の包含層あるいは弥生時代以降の遺構に包含されていた縄文早期土器を纏めた。

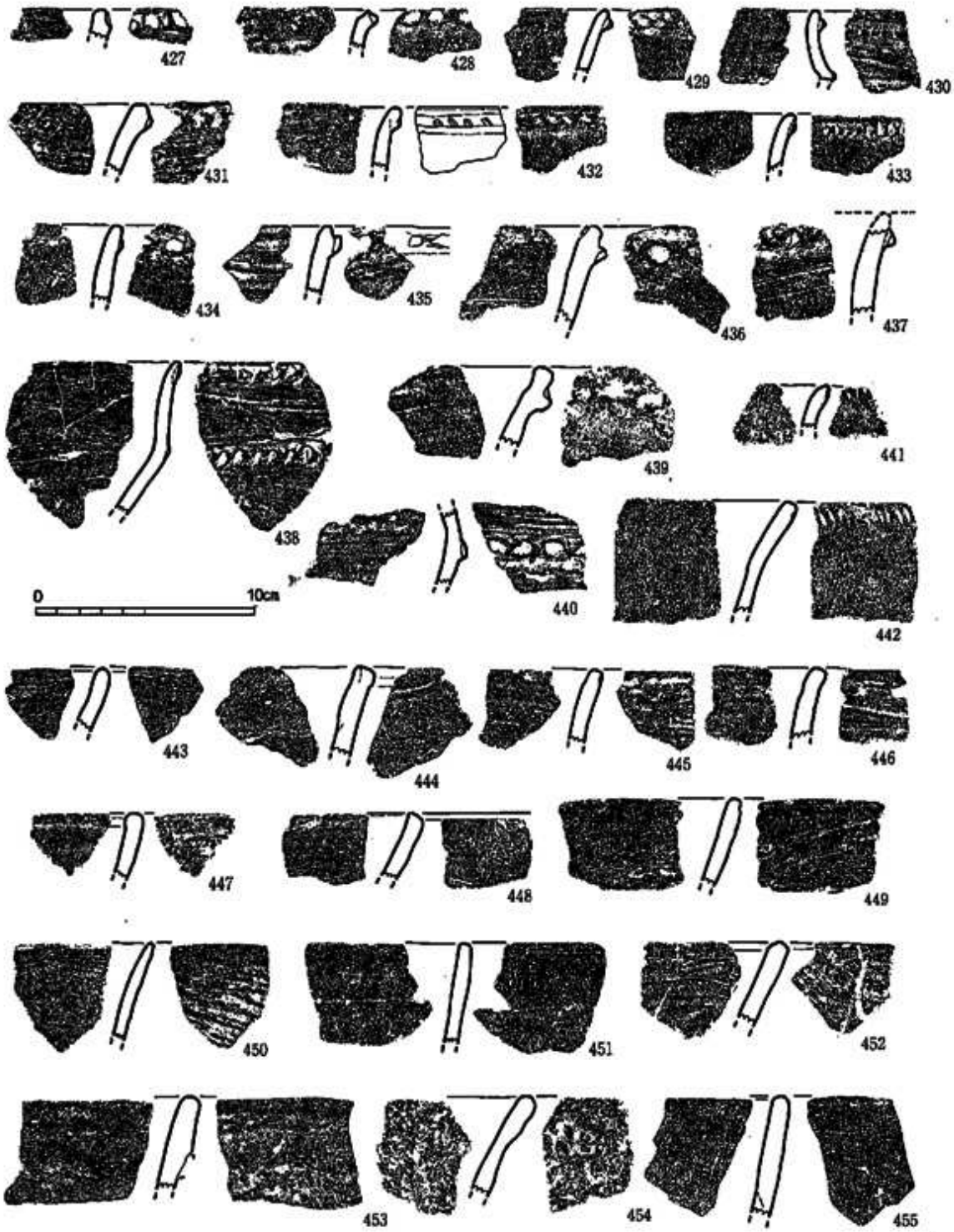
468～484は横位の山形文が施された押型文土器である。口縁部の破片については、すべて内面にも外面と同一の原体による山形文が施される。475・478・481のように、明らかに外面に無施文部が存在するものも見られる。485～489は横位の楕円文を施す押型文土器であるが、488



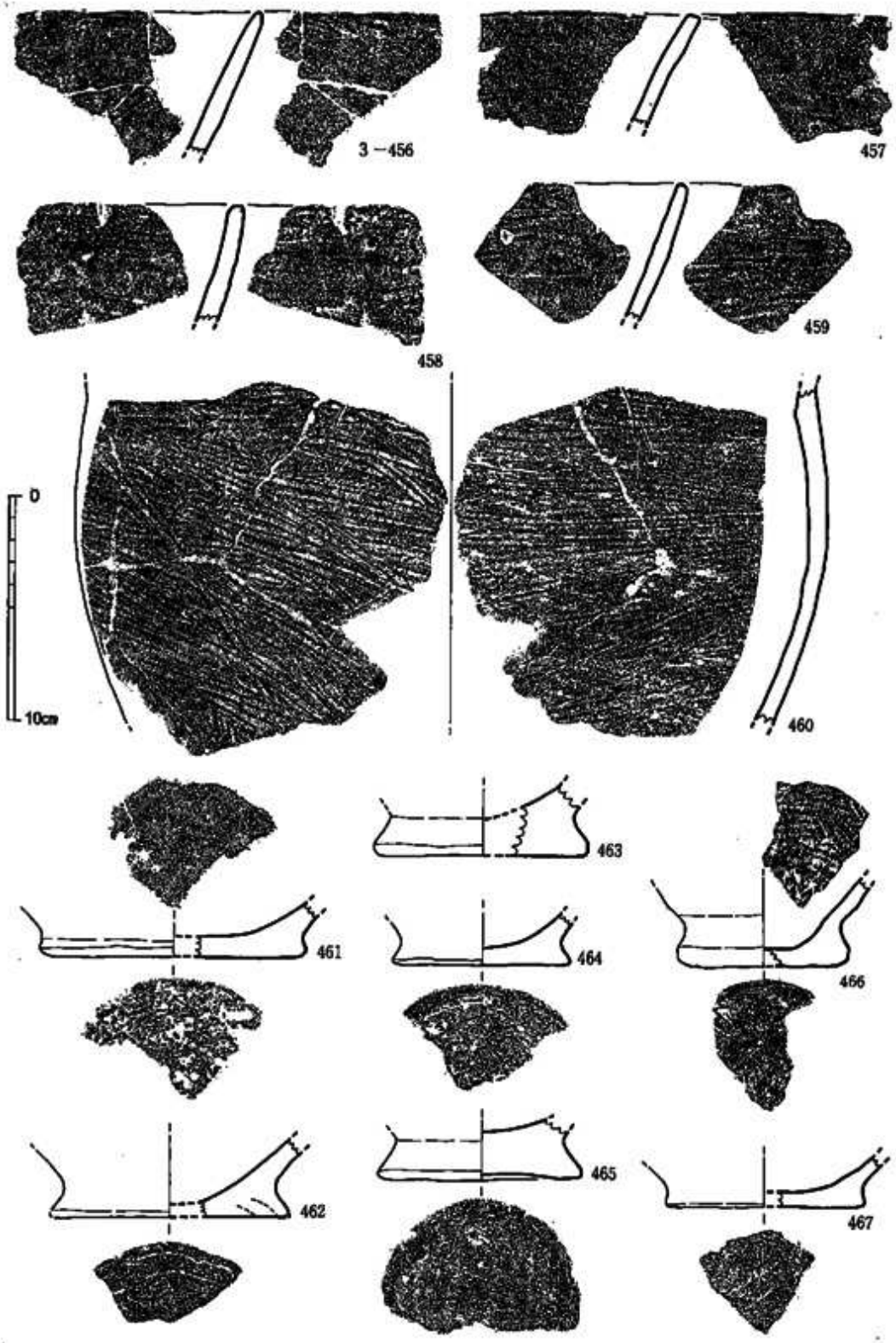
第173図　包含層出土縄文後晩期土器実測図２（1/3）



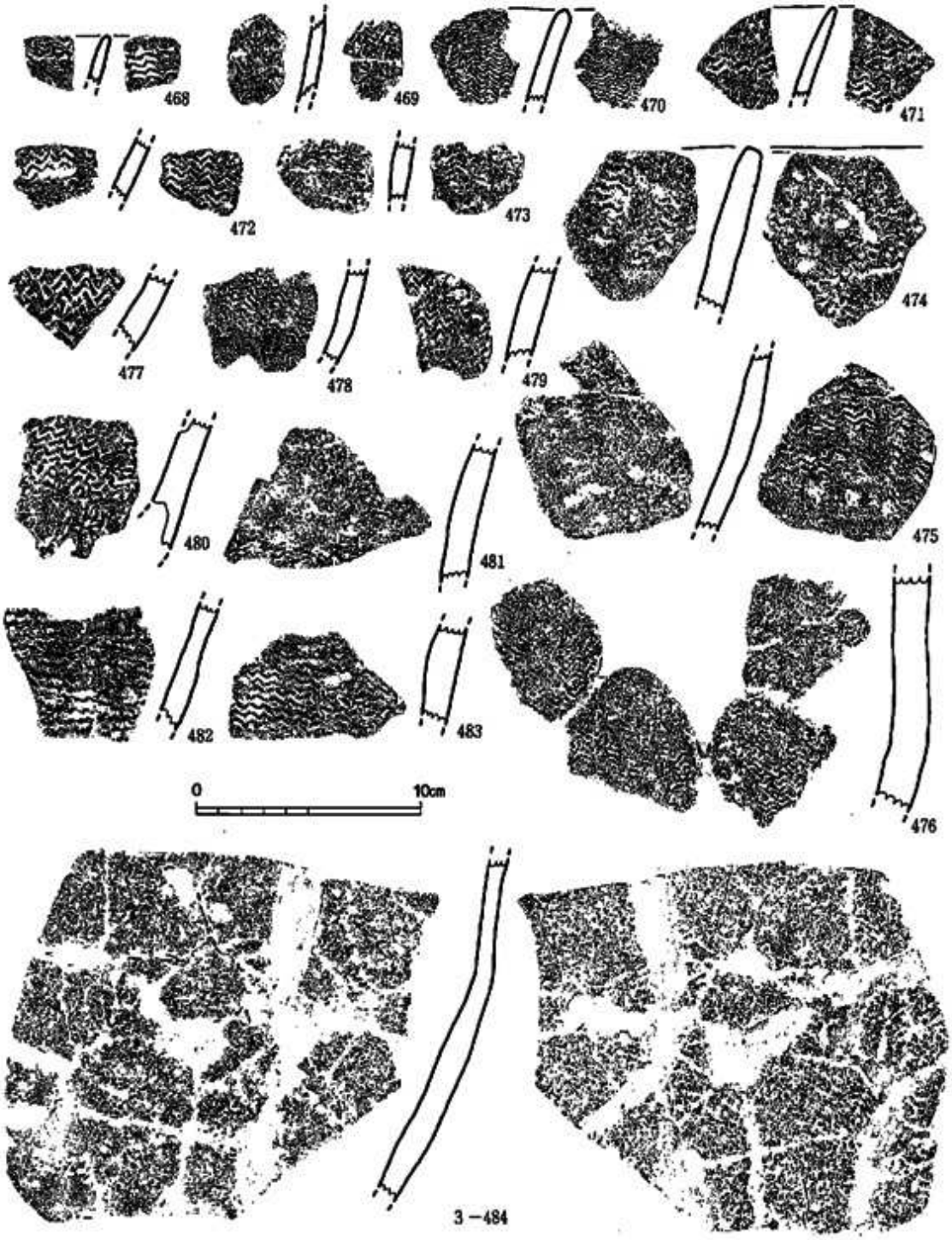
第174図　包含層出土縄文後晩期土器実測図３（1/3）



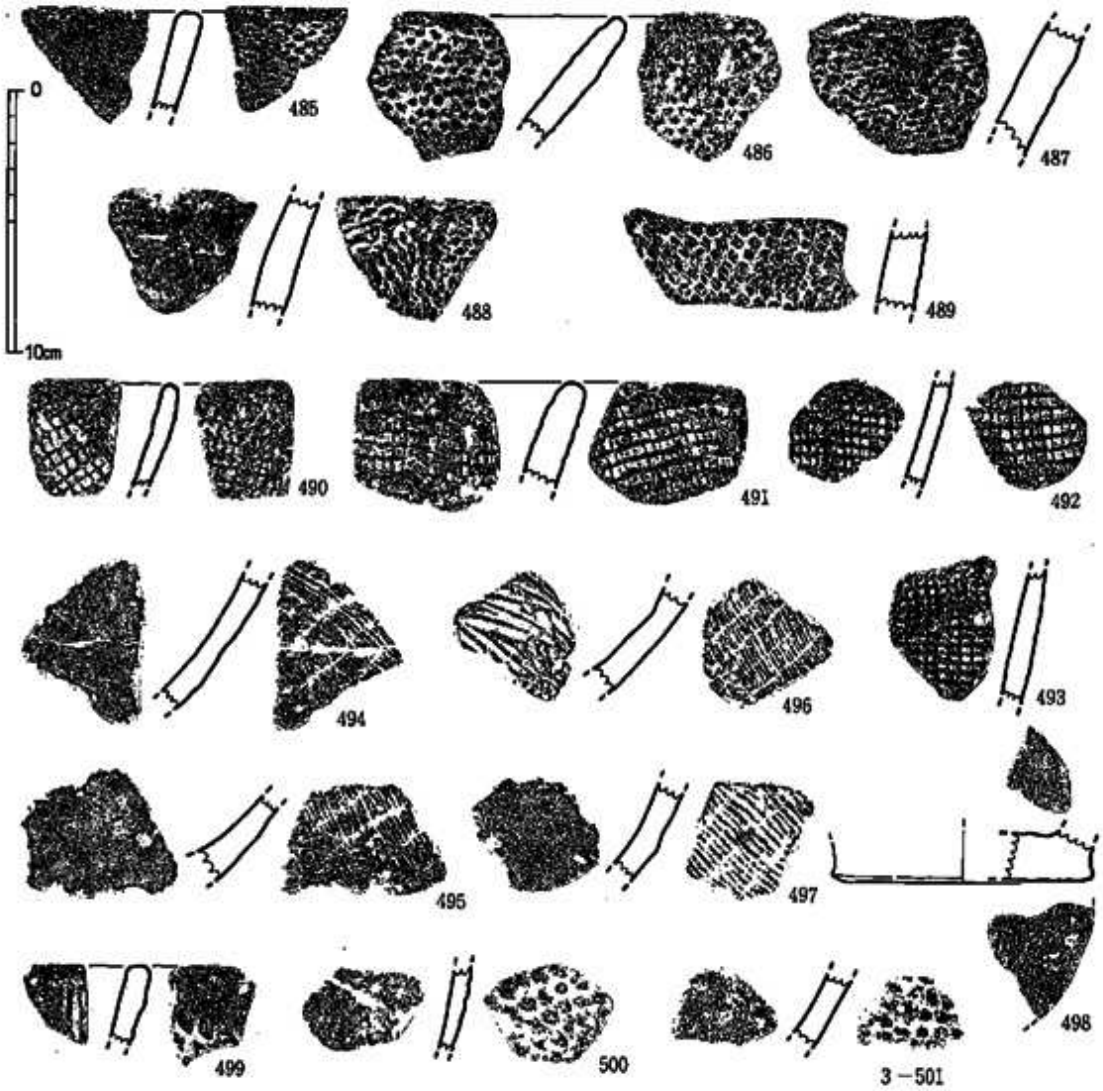
第175図　包含層出土縄文後晩期土器実測図４（1/3）



第176図　包含層出土縄文後晩期土器実測図５（1/3）



第177図　包含層出土縄文早期土器実測図１（1/3）



第178図　包含層出土縄文早期土器実測図２（1/3）

のように縦位と横位の異なった施文方向が共存する楕円文も存在する。490～493は格子目文が施されるが、先述したように格子目文の口縁部内面には必ず同じ格子目文が施される。494～497は付加縄文と考えられる。いずれも別個体である。内面は多くがナデであるが、496のように粗くて深い条痕も見られる。これらの付加縄文は１段のＲを軸縄として、それに単節ℓを付加として巻き付けているようである。

499～３－501は楕円文であるが、499のみ縦位の施文方向で内面には原体条痕が施される。498の平底は横位の押型文土器に伴うものであろう。（水ノ江）

第6表　縄文土器観察表

挿図	番号	出土位置	登録	外　面	外面色調	内　面	内面色調	備　考
126	0	土坑10	—	条痕	暗褐色	条痕	暗褐色	復原口径40cm　内外面炭化物付着
127	1	土坑10	147	条痕→ナデ	暗褐色	条痕→ナデ	暗褐色	復原口径22cm　外面炭化物付着
127	2	土坑10	149	研磨	黒褐色	研磨	茶褐色	復原胴径40cm
127	3	土坑10	150	条痕	灰黄色	条痕→ナデ	灰黄色	外面口縁部炭化物付着
127	4	土坑34	594	条痕	橙褐色	ナデ	灰褐色	復原底部径9cm
127	5	土坑23	1387	ナデ	黄褐色	ナデ	黄褐色	復原底部径10cm
127	6	土坑23	1527	ナデ	黄褐色	ナデ	黄褐色	復原最大径32cm
128	7	炉3	574	山形	赤褐色	山形	黄褐色	
128	8	炉4	—	山形	淡褐色	ナデ	淡褐色	
128	9	炉6	576	楕円	灰褐色	ナデ	淡褐色	
128	10	炉12	570	山形	橙褐色	山形	橙褐色	
128	11	炉12	579	ナデ	淡黄褐色	ナデ	橙褐色	
128	12	炉15	—	楕円	黄褐色	ナデ	黄褐色	外面炭化物付着
128	13	炉15	—	楕円	黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
128	14	炉17	—	山形	淡褐色	ナデ	淡褐色	
128	15	炉17	—	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
128	16	炉17	575	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
128	17	炉17	578	ナデ	黄灰色	ナデ	灰黄色	
128	18	炉23	581	山形	黄褐色	ナデ	灰黄色	
128	19	炉23	—	ナデ	橙褐色	ナデ	淡黄色	
128	20	炉28	577	山形	黄褐色	ナデ	黄褐色	
128	21	炉28	929	楕円	黄橙色	楕円	灰黄色	
128	22	炉30	—	ナデ	暗黄褐色	ナデ	暗褐色	
128	23	炉32	580	山形	黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
128	24	炉35	—	山形	淡橙色	ナデ	淡橙色	
129	25	集石1	—	ナデ	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
129	26	集石2	—	ナデ	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
129	27	集石2	573	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
129	28	集石7	1119	山形	暗茶褐色	ナデ	淡茶褐色	28～41は同一個体
129	29	集石7	1118	山形	暗茶褐色	ナデ	淡茶褐色	28～41は同一個体
129	30	集石7	1117	山形	暗茶褐色	ナデ	淡茶褐色	28～41は同一個体
129	31	集石7	1120	山形	暗茶褐色	ナデ	淡茶褐色	28～41は同一個体
129	32	集石7	1121	山形	暗茶褐色	ナデ	淡茶褐色	28～41は同一個体
129	33	集石7	1111	山形	暗茶褐色	ナデ	淡茶褐色	28～41は同一個体
129	34	集石7	1110	山形	暗茶褐色	ナデ	淡茶褐色	28～41は同一個体
129	35	集石7	1116	山形	暗茶褐色	ナデ	淡茶褐色	28～41は同一個体
129	36	集石7	1115	山形	暗茶褐色	ナデ	淡茶褐色	28～41は同一個体
129	37	集石7	1109	山形	暗茶褐色	ナデ	淡茶褐色	28～41は同一個体
129	38	集石7	1107	山形	暗茶褐色	ナデ	淡茶褐色	28～41は同一個体
129	39	集石7	1106	山形	暗茶褐色	ナデ	淡茶褐色	28～41は同一個体
129	40	集石7	1260	山形	淡赤褐色	ナデ	黄褐色	
129	41	集石7	1105	山形	淡赤褐色	ナデ	黄褐色	
129	42	集石9	—	山形	暗褐色	山形	暗褐色	
129	43	集石9	—	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
129	44	集石9	1256	山形	灰褐色	山形	黄褐色	
130	45	集石9	—	山形	暗褐色	ナデ	暗褐色	
130	46	集石9	—	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
130	47	集石9	—	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
130	48	集石9	1264	山形	黄褐色	ナデ	黄褐色	
130	49	集石9	1252	山形	灰黄色	ナデ	灰黄色	
130	50	集石9	—	山形	黄褐色	ナデ	黄褐色	
130	51	集石9	1267	山形	茶褐色	ナデ	黄褐色	
130	52	集石9	1254	山形	灰褐色	ナデ	灰褐色	
130	53	集石9	1262	山形	灰褐色	ナデ	灰褐色	
130	54	集石9	1261	山形	暗褐色	ナデ	黒褐色	
130	55	集石9	1266	山形	黄褐色	ナデ	暗黄褐色	55
130	56	集石9	1268	山形	黄褐色	ナデ	暗黄褐色	56～58は同一個体
130	57	集石9	1269	山形	黄褐色	ナデ	暗黄褐色	56～58は同一個体
130	58	集石9	1247	山形	黄褐色	ナデ	暗黄褐色	56～58は同一個体
131	59	集石9	1248	山形	黄茶色	ナデ	暗黄茶色	
131	60	集石9	572	楕円	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
131	61	集石9	1246	山形	灰黄色	ナデ	灰黄色	復原口径43cm
131	62	集石9	1255	ナデ	黄褐色	ナデ	黄褐色	
131	63	集石9	1257	ナデ	灰褐色	ナデ	黄褐色	
131	64	集石10	—	山形	淡褐色	ナデ	淡褐色	

131	65	集石10	1258	山形	茶褐色	ナデ	淡褐色	
131	66	集石10	1424	山形	暗黄褐色	山形	暗黄褐色	
131	67	集石10	1253	山形	茶褐色	ナデ	淡褐色	
131	68	集石10	—	山形	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	68～70は同一個体
131	69	集石10	—	山形	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	68～70は同一個体
131	70	集石10	—	山形	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	68～70は同一個体
135	71	5層2区939	1179	山形	暗茶褐色	山形・ナデ	茶褐色	復原口径36cm
135	72	5層2区4941	1245	山形・ナデ	茶褐色	ナデ	茶褐色	復原口径39cm
136	73	5層2区2512	1080	山形	茶褐色	山形	茶褐色	
136	74	5層2区5016	1316	山形	淡黄褐色	山形	淡黄褐色	
136	75	5層2区4655	1191	山形	暗赤褐色	山形	暗赤褐色	
136	76	5層2区4997	730	山形	暗黄褐色	山形	暗黄褐色	
136	77	5層2区2335	1447	山形	茶褐色	山形	茶褐色	
136	3－78	5層3区2	1325	山形	淡黄褐色	山形	淡黄褐色	
136	79	5層2区1435	818	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
136	80	5層2区3554	1176	山形	黄灰色	山形	黄灰色	
136	81	5層2区2085	1442	山形	黄茶色	山形	黄茶色	
136	3－82	5層3区2	1342	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
136	83	5層2区2751	686	山形	黄灰色	山形	黄灰色	
136	84	5層2区1699	833	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
136	85	5層2区1801	1151	山形	暗黄褐色	山形	暗黄褐色	
136	86	5層2区809	1092	山形	淡黄褐色	山形	淡黄褐色	
136	87	5層2区2167	1088	ナデ	黄茶色	山形	黄茶色	
136	88	5層2区1616	795	山形	淡黄褐色	山形	淡黄褐色	口縁端部内面刻目突文
136	89	5層2区1565	1230	山形	茶褐色	山形	淡茶褐色	
136	90	5層2区2502	1095	山形	淡黄褐色	山形	淡黄褐色	
136	91	5層2区2688	668	山形	暗茶褐色	山形	暗茶褐色	
136	92	5層2区816	670	山形	黄褐色	山形・ナデ	黄褐色	
136	93	5層2区3706	1193	山形	淡茶褐色	山形	淡茶褐色	
136	94	5層2区713	1454	山形	黄褐色	ナデ	黄褐色	
136	95	5層2区2882	1096	山形	暗橙褐色	山形	暗橙褐色	
136	96	5層2区2199	1438	山形	暗黄褐色	山形	暗黄褐色	
137	97	5層2区1539	1224	山形	茶褐色	山形	茶褐色	
137	98	5層2区7018	—	山形	暗茶褐色	山形・ナデ	暗茶褐色	
137	99	5層2区1504	1085	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	復原口径26cm
137	100	5層2区6066	1098	山形	暗黄褐色	山形・ナデ	暗黄褐色	
137	101	5層2区6070	1211	山形	暗黄褐色	山形	暗黄褐色	
137	102	5層2区921	1173	山形	黄褐色	山形	黄褐色	
137	103	5層2区767	1495	山形	灰褐色	山形	暗灰褐色	
137	104	5層2区2599	1223	山形	暗黄褐色	山形	暗黄褐色	
137	105	5層2区715	1157	ナデ	淡黄褐色	山形	淡黄褐色	
137	106	5層2区4153	1242	山形	暗黄灰色	山形	暗黄灰色	
137	107	5層2区582	1183	山形	暗赤褐色	山形	暗赤褐色	
137	108	5層2区5660	729	山形	茶褐色	山形	茶褐色	
137	109	5層2区234	1064	山形	暗黄褐色	山形・ナデ	暗黄褐色	
137	110	5層2区2658	1222	山形	黄褐色	山形	黄褐色	
137	111	5層2区2244	1219	山形	黄褐色	山形	黄褐色	
137	112	5層2区4241	1177	山形・ナデ	暗橙褐色	山形・ナデ	暗橙褐色	
137	113	5層2区3485	1148	山形	暗黄褐色	山形	暗黄褐色	
137	114	5層2区2200	1491	山形	黄褐色	山形	黄褐色	
137	115	5層2区5896	1198	山形	暗茶褐色	山形	暗茶褐色	
137	116	5層2区5080	1471	山形	茶褐色	山形・ナデ	茶褐色	
137	117	5層2区3600	1300	山形	暗灰褐色	山形・ナデ	暗灰褐色	
137	118	5層2区2141	705	山形	暗茶褐色	山形・ナデ	暗茶褐色	
138	119	5層2区2136	1055	山形	黄茶色	山形・ナデ	黄茶色	
138	120	5層2区3461	1144	山形	暗茶褐色	山形	暗茶褐色	
138	121	5層2区4527	1297	山形	橙褐色	山形・ナデ	橙褐色	
138	122	5層2区220	1171	山形	暗黄褐色	山形	暗黄褐色	
138	123	5層2区2052	1173	山形	暗黄褐色	山形・ナデ	暗黄褐色	
138	124	5層2区3356	1065	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
138	125	5層2区5305	1052	山形	黄褐色	ナデ	黄褐色	
138	126	5層2区3688	1492	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
138	127	5層2区1730	1226	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
138	128	5層2区3778	1486	山形	暗赤褐色	ナデ	暗赤褐色	
138	129	5層2区958	677	山形	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
138	130	5層2区1626	1220	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	

138	131	5層2区1301	1312	山形	暗茶褐色	ナデ	暗茶褐色	
138	132	5層2区698	1201	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
138	133	5層2区3417	1234	山形	茶褐色	ナデ	茶褐色	
138	134	5層2区4834	1204	山形	暗黄褐色	ナデ	茶褐色	
138	135	5層2区3410	1237	山形	黄褐色	ナデ	黄褐色	
138	136	5層2区2808	1299	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	外面炭化物付着
138	137	5層2区629	1229	山形	灰褐色	ナデ	灰褐色	
138	138	5層2区3972	1190	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
138	139	5層2区2045	1310	山形	黄灰色	ナデ	黄灰色	
139	140	5層2区756	709	山形	灰褐色	ナデ	灰褐色	
139	141	5層2区	689	山形	暗茶褐色	ナデ	暗灰褐色	
139	142	5層2区450	1464	山形	黄褐色	ナデ	茶褐色	
139	143	5層2区620	1217	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
139	144	5層2区3622	745	山形	暗灰褐色	ナデ	暗灰褐色	
139	145	5層2区5109	1051	山形	暗灰褐色	ナデ	暗灰褐色	
139	146	5層2区2293	692	山形	暗灰褐色	ナデ	暗灰褐色	
139	147	5層2区2491	693	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
139	148	5層2区4276	1216	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
139	149	5層2区4946	753	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
139	150	5層2区1135	1203	山形	茶褐色	ナデ	暗茶褐色	
139	151	5層2区4893	747	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
139	152	5層2区5594	1304	山形	暗茶褐色	ナデ	暗茶褐色	
139	153	5層2区1084	299	山形	暗褐色	ナデ	暗褐色	
139	154	5層2区1729	738	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
139	155	5層2区4949	1056	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
139	156	5層2区3357	1236	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
139	157	5層2区2022	1462	山形	茶褐色	ナデ	茶褐色	
139	158	5層2区4464	1199	山形	黄褐色	ナデ	黄褐色	
139	159	5層2区302	1313	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
139	160	5層2区587	1197	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
139	161	5層2区4031	1481	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
139	162	5層2区2818	1296	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
139	163	5層2区4468	1195	山形	淡茶褐色	ナデ	淡茶褐色	
139	164	5層2区2112	691	山形	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
139	165	5層2区1145	872	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
140	166	5層2区1132	746	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
140	167	5層2区4237	1161	山形	暗黄橙色	ナデ	暗黄橙色	
140	168	5層2区447	1436	山形	暗黄茶色	ナデ	暗黄茶色	
140	169	5層2区4275	741	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
140	170	5層2区3373	1239	山形	暗茶褐色	ナデ	暗茶褐色	
140	171	5層2区2712	671	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
140	172	5層2区1469	1463	山形	茶褐色	ナデ	茶褐色	
140	173	5層2区2458	1456	山形	暗茶褐色	ナデ	暗茶褐色	
140	174	5層2区133	1477	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
140	175	5層2区2484	1083	山形	暗黄橙色	ナデ	暗黄橙色	
140	176	5層2区2500	1227	山形	暗黄橙色	ナデ	暗黄褐色	
140	177	5層2区971	674	山形	黄灰色	ナデ	暗黄褐色	
140	178	5層2区3940	1474	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
140	179	5層2区3473	670	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
140	180	5層2区3451	1145	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
140	181	5層2区569	1233	山形	暗茶褐色	ナデ	暗茶褐色	
140	182	5層2区3370	676	山形	暗褐色	ナデ	暗褐色	
140	183	5層2区2099	1146	山形	暗茶褐色	ナデ	暗茶褐色	
140	184	5層2区4130	1489	山形	淡茶褐色	ナデ	淡茶褐色	
140	185	5層2区1068	1068	山形	茶褐色	ナデ	茶褐色	
141	186	5層2区1661	1221	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
141	187	5層2区993	1207	山形	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
141	188	5層2区3693	1494	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
141	3－189	5層3区14	1335	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	外面炭化物付着
141	3－190	5層3区101	1327	山形	暗橙色	ナデ	暗橙色	
141	191	5層2区2277	1163	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
141	192	5層2区3407	1142	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	外面炭化物付着
141	193	5層2区5244	1170	山形	暗灰褐色	ナデ	暗灰褐色	
141	194	5層2区3671	675	山形	橙褐色	ナデ	橙褐色	
141	195	5層2区4000	1476	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
141	196	5層2区4026	1490	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	

141	197	5層2区572	1437	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
141	198	5層2区668	1475	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
141	199	5層2区365	1478	山形	暗褐色	ナデ	暗褐色	
142	200	5層2区1330	—	楕円	暗黄褐色	楕円	暗黄褐色	
142	201	5層2区2800	965	楕円	淡黄褐色	楕円	淡黄褐色	
142	202	5層2区2677	945	楕円	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
142	203	5層2区5398	911	楕円	暗茶褐色	楕円	暗茶褐色	
142	204	5層2区620	991	楕円	淡橙褐色	ナデ	淡橙褐色	
142	205	5層2区5799	988	楕円	暗褐色	ナデ	暗褐色	
142	206	5層2区1151	1014	楕円	淡褐色	楕円	淡褐色	
142	207	5層2区5752	593	楕円	淡黄褐色	楕円	淡黄褐色	
142	208	5層2区1530	962	楕円	淡黄褐色	楕円	淡黄褐色	
142	209	5層2区4465	926	楕円	淡褐色	楕円・ナデ	淡褐色	
142	210	5層2区5816	939	楕円	淡黄褐色	楕円・ナデ	黄褐色	
142	211	5層2区2880	934	楕円	黄橙色	楕円・ナデ	黄橙色	
142	212	5層2区3408	1037	楕円	淡橙褐色	楕円・ナデ	橙褐色	
142	213	5層2区2360	901	楕円	暗黄褐色	楕円・ナデ	暗黄褐色	
142	214	5層2区5118	1013	楕円	淡黄褐色	楕円・ナデ	淡黄褐色	
142	215	5層2区539	841	楕円	淡黄褐色	楕円・ナデ	淡黄褐色	
142	216	5層2区5450	782	楕円	淡橙褐色	楕円・ナデ	淡橙褐色	
142	217	5層2区1301	1043	楕円	淡褐色	楕円・ナデ	淡褐色	
142	218	5層2区2480	917	楕円	暗黄褐色	楕円・ナデ	暗黄褐色	
142	219	5層2区3540	912	楕円	淡茶褐色	楕円・ナデ	淡茶褐色	
143	220	5層2区878	823	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
143	221	5層2区2681	996	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
143	222	5層2区998	882	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
143	223	5層2区2862	922	楕円	黄褐色	ナデ	黄褐色	
143	224	5層2区3615	914	楕円	淡茶褐色	ナデ	淡茶褐色	
143	225	5層2区4454	990	楕円	淡褐色	ナデ	淡褐色	
143	226	5層2区1432	1003	楕円	淡黄褐色	楕円・ナデ	淡黄褐色	復原口径28cm
143	227	5層2区3700	831	楕円	暗橙褐色	楕円・ナデ	暗橙褐色	復原口径24cm
143	228	5層2区5192	980	楕円	暗橙褐色	楕円・ナデ	暗橙褐色	復原口径18cm
143	229	5層2区375	762	楕円	淡黄褐色	楕円・ナデ	淡黄褐色	復原口径30cm
143	230	5層2区5701	880	楕円	淡褐色	ナデ	淡褐色	
143	231	5層2区1720	—	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
143	232	5層2区1122	859	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
143	233	5層2区843	959	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
143	234	5層2区838	975	楕円	淡灰黄色	ナデ	淡灰黄色	
143	235	5層2区1752	—	楕円	淡褐色	ナデ	淡褐色	
144	236	5層2区304	972	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
144	3－237	5層3区25	—	楕円	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
144	238	5層2区5456	938	楕円	暗灰黄色	ナデ	暗灰黄色	
144	239	5層2区5475	916	楕円	淡黄橙色	ナデ	淡黄橙色	
144	240	5層2区1603	865	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
144	241	5層3区1701	905	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
144	242	5層2区5558	925	楕円	黄褐色	ナデ	黄褐色	
144	243	5層2区901	863	楕円	淡橙褐色	ナデ	淡橙褐色	
144	244	5層2区3386	942	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
144	245	5層2区1915	932	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
144	246	5層2区2265	884	楕円	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	330と同一個体
144	247	5層2区2265	904	楕円	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	329と同一個体
144	248	5層2区3606	1125	格子目	淡黄褐色	格子目	淡黄褐色	
144	249	5層2区5037	1181	格子目	暗黄褐色	格子目・ナデ	暗黄褐色	
144	250	5層2区638	1131	格子目	淡黄褐色	格子目	淡黄褐色	
144	251	5層2区2057	1123	格子目	黄褐色	格子目・ナデ	黄褐色	
144	252	5層2区1506	1135	格子目	暗黄褐色	格子目	暗黄褐色	口縁端部内面刻目
144	253	5層2区1927	894	格子目	暗黄褐色	格子目	暗黄褐色	
144	254	5層2区1506	1129	格子目	淡黄褐色	格子目	淡黄褐色	
144	255	5層2区626	1133	格子目	暗黄褐色	格子目	暗黄褐色	339と同一個体
144	256	5層2区626	1137	格子目	暗黄褐色	格子目	暗黄褐色	338と同一個体
145	257	5層2区5975	587	格子目	暗黄褐色	格子目・ナデ	暗黄褐色	
145	258	5層2区3744	643	格子目	暗黄褐色	格子目・ナデ	暗黄褐色	
145	259	5層2区640	590	格子目	淡茶褐色	ナデ	淡茶褐色	
145	260	5層2区372	583	格子目	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
145	261	5層2区3740	1138	格子目	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
145	262	5層2区386	1134	格子目	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	

145	263	5層2区3612	1100	格子目	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
145	264	5層2区5017	589	格子目	黄褐色	ナデ	黄褐色	
145	265	5層2区3412	586	格子目	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
145	266	5層2区980	1126	格子目	黄褐色	ナデ	黄褐色	
145	267	5層2区4748	1124	格子目	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
145	268	5層2区2060	1127	格子目	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
145	269	5層2区961	2116	楕円・ナデ	暗黄褐色	原体条痕	暗黄褐色	
145	270	5層2区1599	2118	楕円・ナデ	淡黄褐色	原体条痕・楕円	淡黄褐色	
145	271	5層2区2106	928	楕円・ナデ	淡黄褐色	原体条痕	淡黄褐色	
145	272	5層2区2308	1303	山形	淡黄褐色	楕円	淡黄褐色	
145	273	5層2区6111	1466	楕円	暗黄褐色	山形	暗黄褐色	
145	3－274	5層3区692	－	撚糸	暗褐色	ナデ	暗黄褐色	
145	275	5層2区1825	1283	撚糸	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
145	276	5層2区2188	971	撚糸	淡褐色	ナデ	淡褐色	
145	277	5層2区606	585	撚糸	黄褐色	ナデ	黄褐色	
145	278	5層2区5796	1284	縄文LR	淡橙褐色	条痕	淡橙褐色	
145	279	5層2区3020	1285	縄文LR	淡橙褐色	ナデ	淡橙褐色	
146	280	5層2区5331	1293	ナデ	淡橙褐色	条痕	淡橙褐色	
146	281	5層2区2739	1290	条痕	暗褐色	ナデ	暗褐色	
146	282	5層2区1066	1292	条痕	淡黄褐色	条痕	淡黄褐色	
146	283	5層2区2806	1272	条痕	淡橙褐色	ナデ	淡橙褐色	
146	284	5層2区1474	1274	条痕	淡茶褐色	ナデ	淡茶褐色	
146	3－285	5層3区1748	－	条痕	暗黄褐色	条痕→ナデ	暗黄褐色	359と同一個体
146	3－286	5層3区1746	－	条痕	暗黄褐色	条痕→ナデ	暗黄褐色	358と同一個体
146	287	5層2区5328	1287	条痕	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
146	288	5層2区3335	1588	条痕	淡橙褐色	ナデ	淡橙褐色	
146	289	5層2区1776	582	条痕	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
146	290	5層2区2631	1277	条痕	淡茶褐色	ナデ	淡茶褐色	
146	291	5層2区2742	1276	条痕	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
146	3－292	5層3区4	1326	条痕	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
146	293	5層2区926	1270	条痕	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
146	294	5層2区3023	1273	条痕	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
146	3－295	5層3区1745	－	沈線	橙褐色	ナデ	橙褐色	
146	3－296	5層3区50	－	2単位刺突	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
146	297	5層2区4734	596	刺突・沈線	暗褐色	ナデ	暗褐色	
147	298	5層2区4980	－	ナデ	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
147	299	5層2区4855	－	ナデ	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
147	300	5層2区1536	1505	ナデ	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
147	301	5層2区2307	－	ナデ	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
147	302	5層2区3697	1525	ナデ	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
147	303	5層2区2296	1507	ナデ	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
147	304	5層2区3218	－	ナデ	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
147	305	5層2区5849	1513	ナデ	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
147	306	5層2区5606	1514	ナデ	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
147	307	5層2区2308	1517	ナデ	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	外面指頭圧痕
147	308	5層2区930	1515	ナデ	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
147	309	5層2区3706	－	ナデ	淡橙褐色	ナデ	淡橙褐色	外面指頭圧痕
147	310	5層2区1322	－	ナデ	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
147	311	5層2区4678	－	ナデ	淡褐色	ナデ	淡褐色	
147	312	5層2区3438	1524	ナデ	淡橙褐色	ナデ	淡橙褐色	
147	313	5層2区1938	－	ナデ	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
148	314	5層2区2108	－	ナデ	暗赤褐色	ナデ	暗赤褐色	
148	315	5層2区5192	1002	ナデ	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
148	316	5層2区1919	593	ナデ	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	1925と接合
148	317	5層2区4201	－	ナデ	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	復原口径36cm
148	318	5層2区1754	－	ナデ	淡橙褐色	ナデ	淡橙褐色	復原口径37cm
148	319	5層2区2399	592	ナデ	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	復原口径38cm
148	320	5層2区139	1516	ナデ	淡橙褐色	ナデ	淡橙褐色	復原口径46cm
149	3－321	5層3区1731	－	山形	淡黄褐色	山形・ナデ	淡黄褐色	
149	3－322	5層3区1726	－	山形	暗橙褐色	原体条痕	暗橙褐色	
149	323	5層2区187	907	山形	暗黄褐色	原体条痕	暗黄褐色	
149	324	5層2区4744	1306	山形	淡黄褐色	山形・ナデ	淡黄褐色	
149	325	5層2区1541	1228	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
149	326	5層2区5430	1090	山形	淡橙褐色	ナデ	淡橙褐色	
149	327	5層2区2077	698	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
149	328	5層2区2611	1049	山形	黄褐色	ナデ	黄褐色	

149	329	5層2区1444	1143	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
149	330	5層2区5254	1461	山形	橙褐色	ナデ	橙褐色	
149	331	5層2区1019	1169	山形	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
149	3－332	5層3区130	1351	楕円	淡黄褐色	原体条痕	淡黄褐色	
149	333	5層3区2872	759	楕円	淡黄褐色	楕円・ナデ	淡黄褐色	
149	334	5層2区5524	889	楕円	暗黄褐色	原体条痕・楕円	暗黄褐色	
149	335	5層2区1046	798	楕円	暗橙褐色	原体条痕	暗橙褐色	
149	3－336	5層3区1319	－	楕円	暗黄褐色	原体条痕	暗黄褐色	
149	3－337	5層3区115	1347	楕円	暗黄褐色	原体条痕	暗黄褐色	
149	338	5層2区2013	1038	楕円	淡黄褐色	原体条痕	淡黄褐色	
149	339	5層2区2238	－	楕円	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
149	340	5層2区1030	599	楕円	暗褐色	ナデ	暗褐色	
149	3－341	5層3区224	－	楕円	橙褐色	ナデ	橙褐色	425と同一個体
149	3－342	5層3区223	－	楕円	橙褐色	ナデ	橙褐色	424と同一個体
150	3－343	5層3区30	－	ナデ	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	復原底径8cm
150	344	5層2区360	642	不明圧痕	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	復原底径13cm
150	345	5層2区3837	1289	ナデ	淡赤褐色	ナデ	淡赤褐色	復原底径9cm
150	346	5層2区670	1162	ナデ	淡黄橙色	ナデ	淡黄橙色	
150	347	5層2区3107	1393	ナデ	暗黄橙色	ナデ	暗黄橙色	
150	348	5層2区3578	1522	ナデ	淡黄橙色	ナデ	淡黄橙色	
150	349	5層2区4575	－	ナデ	淡黄橙色	ナデ	淡黄橙色	
150	3－350	5層3区53	1337	ナデ	暗褐色	二枚貝条痕→ナデ	暗褐色	434と同一個体
150	3－351	5層3区53	1334	ナデ	暗褐色	二枚貝条痕→ナデ	暗褐色	433と同一個体
153	352	6層2区2763	1094	山形	淡黄橙色	山形	淡黄橙色	
153	3－353	6層3区1832	－	山形	淡橙色	ナデ	淡橙色	
153	3－354	6層3区1257	－	山形	橙褐色	ナデ	橙褐色	
153	355	6層2区6662	1075	山形	暗黄橙色	ナデ	暗黄橙色	
153	356	6層2区1896	－	山形	橙褐色	ナデ	橙褐色	
153	3－357	6層3区179	－	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
153	358	6層2区3863	1479	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
153	359	6層2区3262	1240	山形	暗黄橙色	ナデ	暗黄橙色	
153	3－360	6層3区	－	格子目	淡黄褐色	格子目	淡黄褐色	
153	361	6層2区5652	－	格子目	淡黄橙色	ナデ	淡黄橙色	
153	362	6層2区4504	1128	格子目	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
153	363	6層2区1894	－	楕円	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
153	364	6層2区5587	779	楕円	暗褐色	楕円	暗褐色	
153	3－365	6層3区1854	－	楕円	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
153	366	6層2区5116	948	楕円	暗褐色	楕円・ナデ	暗褐色	
153	367	6層2区5582	840	楕円	淡黄褐色	楕円・ナデ	淡黄褐色	
153	368	6層2区1332	－	楕円	橙褐色	ナデ	褐色	
153	3－369	6層3区165	－	楕円	暗橙褐色	ナデ	褐色	
153	3－370	6層3区556	－	楕円	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
153	3－371	6層3区151	－	撚糸	淡褐色	ナデ	淡褐色	
153	3－372	6層3区554	－	ナデ	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
153	373	6層2区5762	655	条痕	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
154	3－374	6層3区1303	－	撚糸	暗褐色	ナデ	暗褐色	
154	3－375	6層3区1334	－	ナデ	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
154	376	6層2区156	591	条痕	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
154	3－377	6層3区1833	－	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
154	378	6層2区1851	－	楕円	暗黄褐色	原体条痕・ナデ	淡黄褐色	
154	3－379	6層3区143	－	楕円	淡褐色	ナデ	淡褐色	
154	3－380	6層3区1872	－	楕円	暗橙褐色	ナデ	暗橙色	
154	3－381	6層3区141	－	楕円	橙褐色	ナデ	橙褐色	
154	3－382	6層3区143	－	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
154	383	7層2区1955	－	ナデ	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
154	384	7層2区	－	条痕	暗橙褐色	条痕	橙褐色	
172	385	住居13	651	凹点	暗赤褐色	ナデ	暗赤褐色	71・72は同一個体
172	386	住居13	652	凹点	暗赤褐色	ナデ	暗赤褐色	71・72は同一個体
172	387	5層混入	600	縄文RL	暗黄橙色	ナデ	暗黄橙色	
172	3－388	3区5層混入	1322	沈線・刺突	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	波頂部貫通孔
172	3－389	3区5層混入	1350	沈線	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
172	390	5層混入	659	沈線	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
172	3－391	3区5層混入	1348	巻貝条痕→沈線	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
172	392	5層混入	1333	沈線	淡褐色	ナデ	淡褐色	
173	393	表採	470	沈線文　研磨	黒褐色	研磨	黒褐色	
173	394	表採	319	沈線文　研磨	黒褐色	研磨	黒褐色	

173	395	表採	1554	沈線文　研磨	黒褐色	研磨	黒褐色	
173	396	表採	1540	沈線文　研磨	黒褐色	研磨	黒褐色	
173	397	住居12	88	沈線文　研磨	黒褐色	沈線文　研磨	黒褐色	
173	398	4層	－	沈線文　研磨	黒褐色	沈線文　研磨	黒褐色	復原口径18cm
173	399	5層混入	1549	沈線文　研磨	橙褐色	沈線文　研磨	橙褐色	
173	400	5層混入	1541	沈線文　研磨	黒褐色	沈線文　研磨	黒褐色	
173	401	炉9混入	1542	沈線文　研磨	暗橙褐色	沈線文　研磨	暗橙褐色	
173	402	住居3	628	沈線文　研磨	暗灰褐色	沈線文　研磨	暗灰褐色	
173	403	5層混入	1560	研磨	暗褐色	沈線文　研磨	暗褐色	
173	404	5層混入	645	隆帯文　研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	入組み隆帯文
173	405	5層混入	1553	研磨	暗褐色	沈線文　研磨	暗褐色	復原口径35cm
173	406	表採	－	研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	
173	407	表採	452	研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	
173	408	5層混入	1562	研磨	黒褐色	研磨	黒褐色	
173	409	5層混入	1536	研磨	暗褐色	研磨	黒褐色	復原口径26cm
173	410	表採	－	研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	復原胴径39cm
174	411	5層混入	1522	摩滅	淡灰褐色	摩滅	淡灰褐色	
174	412	古墳1	1548	研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	
174	413	5層混入	1537	研磨	黒褐色	研磨	黒褐色	波状口縁
174	414	表採	1545	研磨	淡褐色	研磨	淡褐色	
174	415	古墳3	315	摩滅	暗褐色	摩滅	暗褐色	
174	416	5層混入	1550	ナデ	暗褐色	研磨	暗褐色	
174	417	古墳9	296	ナデ	暗褐色	ナデ	暗褐色	
174	418	古墳3	262	摩滅	暗褐色	摩滅	暗褐色	
174	419	5層混入	1561	研磨	茶褐色	研磨	茶褐色	
174	420	土坑5	111	ナデ	暗褐色	ナデ	暗褐色	
174	421	5層混入	1539	研磨	淡褐色	研磨	淡褐色	
174	422	土坑7	618	条痕	茶褐色	ナデ	茶褐色	
174	423	5層混入	650	条痕	暗褐色	ナデ	暗褐色	リボン状突起
174	424	古墳1	－	ナデ	暗褐色	条痕	暗褐色	リボン状突起
174	425	古墳7	362	条痕→ナデ	黒灰色	条痕→ナデ	黒灰色	
174	426	ピット85	388	条痕	黒褐色	条痕	黒褐色	焼成前穿孔　口縁部刻み
175	427	住居3	601	条痕	暗褐色	ナデ	褐色	口縁端部刻み
175	428	5層混入	657	ナデ	淡黄褐色	ナデ	黄褐色	口縁端部刻み
175	429	5層混入	654	ナデ	淡黄褐色	ナデ	黄褐色	刻目突帯文
175	430	5層混入	661	ナデ	淡黄褐色	ナデ	暗黄褐色	刻目突帯文
175	431	古墳3	265	条痕	暗褐色	ナデ	褐色	刻目突帯文
175	432	古墳5	646	ナデ	淡黄褐色	ナデ	暗黄褐色	刻目突帯文
175	433	古墳3	658	ナデ	淡黄褐色	ナデ	黄褐色	刻目突帯文
175	434	古墳5	327	ナデ	淡黄褐色	ナデ	黄褐色	刻目突帯文
175	435	古墳3	318	ナデ	黄褐色	条痕	暗黄褐色	刻目突帯文
175	436	貯蔵穴2	204	ナデ	暗黄褐色	ナデ	黄褐色	刻目突帯文
175	437	5層混入	648	ナデ	黄褐色	ナデ	暗黄褐色	刻目突帯文
175	438	5層混入	595	条痕	茶褐色	条痕	褐色	口縁端部刻み
175	439	5層混入	597	ナデ	暗黄褐色	ナデ	黄褐色	刻目突帯文
175	440	5層混入	598	条痕	暗褐色	ナデ	褐色	刻目突帯文
175	441	古墳6	－	ナデ	暗褐色	ナデ	暗黄褐色	口縁端部刻み
175	442	土坑4	110	ナデ	淡黄褐色	ナデ	黄褐色	口縁端部刻み
175	443	古墳6	336	研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	
175	444	古墳3	471	ナデ	黒褐色	ナデ	黒褐色	
175	445	古墳3	263	条痕	褐色	ナデ	黒褐色	
175	446	古墳3	264	条痕	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
175	447	古墳7	351	ナデ	淡黄褐色	ナデ	黄褐色	
175	448	表採	469	ナデ	淡黄褐色	ナデ	黄褐色	
175	449	表採	489	条痕	褐色	ナデ	黒褐色	
175	450	表採	463	条痕	黄褐色	ナデ	黄褐色	
175	451	表採	491	ナデ	黄褐色	ナデ	橙褐色	
175	452	5層混入	890	条痕	茶褐色	ナデ	茶褐色	波頂部の近く
175	453	表採	488	ナデ	黄褐色	ナデ	黄褐色	
175	454	貯蔵穴2	202	ナデ	黄褐色	ナデ	橙褐色	
175	455	住居3	85	ナデ	茶褐色	ナデ	茶褐色	外面炭化物付着
176	3－456	3区5層混入	1349	二枚貝条痕	黒褐色	ナデ	黒褐色	
176	457	5層混入	1559	ナデ	黒褐色	研磨	黒褐色	
176	458	5層混入	644	ナデ	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
176	459	5層混入	649	研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	
176	460	5層混入	568	巻貝条痕	暗褐色	巻貝条痕	灰褐色	復原胴径34cm

176	461	5層混入	1534	ナデ	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	圧痕　復原底径12cm
176	462	古墳15	279	ナデ	暗黄褐色	ナデ	暗橙褐色	圧痕　復原底径11cm
176	463	住居3	1558	ナデ	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	復原底径9cm
176	464	5層混入	1535	ナデ	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	復原底径8cm
176	465	5層混入	1551	ナデ	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	やや上底　復原底径9cm
176	466	古墳5	647	条痕	淡褐色	ナデ	暗褐色	復原底径8cm
176	467	5層混入	1546	ナデ	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	復原底径9cm
177	468	包含層	1071	山形	淡黄褐色	山形	淡黄褐色	
177	469	包含層	1070	山形	淡黄褐色	山形	淡黄褐色	
177	470	包含層	623	山形	暗黄褐色	山形	暗黄褐色	
177	471	包含層	621	山形	淡橙褐色	山形・ナデ	淡橙褐色	
177	472	包含層	633	山形	橙褐色	山形・ナデ	橙褐色	
177	473	包含層	1150	山形	暗黄褐色	山形・ナデ	暗黄褐色	
177	474	包含層	1076	山形	暗橙褐色	山形・ナデ	暗橙褐色	
177	475	包含層	1153	山形	淡黄褐色	山形・ナデ	淡黄褐色	
177	476	包含層	1180	山形	橙褐色	山形	橙褐色	
177	477	包含層	639	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
177	478	包含層	1052	山形・ナデ	黄褐色	ナデ	黄褐色	
177	479	包含層	1053	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
177	480	包含層	1050	山形	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	尖底付近
177	481	包含層	1047	山形	淡褐色	ナデ	淡褐色	
177	482	包含層	1051	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
177	483	包含層	1054	山形	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
177	3－484	3区包含層	168	山形	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
178	485	包含層	270	楕円	橙褐色	ナデ	橙褐色	
178	486	包含層	610	楕円	黄褐色	楕円・ナデ	黄褐色	
178	487	包含層	606	楕円	暗橙褐色	ナデ	暗橙褐色	
178	488	包含層	614	楕円	淡橙褐色	ナデ	淡橙褐色	
178	489	包含層	607	楕円	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
178	490	包含層	660	格子目	淡橙褐色	格子目	淡橙褐色	
178	491	包含層	603	格子目	淡黄褐色	格子目	淡黄褐色	
178	492	包含層	626	格子目	暗褐色	格子目	暗褐色	
178	493	包含層	602	格子目	淡橙褐色	ナデ	淡黄褐色	
178	494	包含層	620	撚糸	淡橙褐色	ナデ	淡黄褐色	
178	495	包含層	612	撚糸	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	
178	496	包含層	604	撚糸	橙褐色	条痕	橙褐色	
178	497	包含層	615	撚糸	橙褐色	ナデ	黄褐色	
178	498	包含層	1527	ナデ	暗黄褐色	ナデ	暗黄褐色	
178	499	包含層	492	楕円	橙褐色	縄体条痕	橙褐色	
178	500	包含層	902	楕円	淡橙褐色	ナデ	淡橙褐色	
178	3－501	3区包含層	－	楕円	淡橙褐色	ナデ	淡黄褐色	
229	502	土坑10	－	条痕	暗褐色	条痕→ナデ	暗褐色	復原口径43cm　内外面炭化物付着

石　器　（図版89・92、第115図１・２　第170・171図262～289）

１は３層、２は４層、262～273は表採および古墳時代以降の遺構検出時に出土した石鏃である。１は脚部を欠損するが長脚鏃、２は有肩鏃。262・263は平基式の完形品。262は有肩鏃で重さ1.1ｇ、263の調整は急角度である。264～273は凹基無茎式。264は長3.1cm、幅2.6cm、重さ3.0ｇの大型品で浅い抉りを有す。266・268は横長の剥片を素材とし、268は大きく自然面を残す。270は細みの有歯鏃で、長2.75cm、重さ0.7ｇ。273は残長3.85cmを測る大型品で短く幅広の脚部を有す。267が安山岩製で、他は黒曜石製。274・275は円形の掻器。両者とも背面に大きく自然面を残す。276はエンドスクレパーで一端に部厚な刃部を有す。277は不定形な素材を用いた削器で、一縁に調整を加える。274～277は黒曜石製。278・279は石匙で押型文土器に多く共伴する石器であるが、当遺跡５・６層には出土していない。278は安山岩製の横型石匙のほぼ完形品。刃部は直線的で、幅広な摘み部を有す。幅7.8cm、重さ23.2ｇ。279は黒曜石製

第7表　Ⅱ区出土石器一覧表

番号	器種	地区	層位	長・幅・厚・重 g	石質	備考	登録番号
第155図 1	石鏃	2区 不明	3	2.4・1.5・0.35・1.0	黒曜石	両脚欠	
第155図 2	石鏃	C3－1	4	2.6・1.7・0.5・2.2	黒曜石	両脚欠	
第155図 3	石鏃	C2－2	5	2.0・1.4・0.45・0.95	黒曜石	凹基　撹土内	土坑24
第155図 4	石鏃	C2－2	5	2.1・2.0・0.42・1.65	黒曜石	凹基　撹土内	土坑24
第155図 5	石鏃	D4－4	5	3.2・1.5・0.4・1.4	黒曜石	凹基　片脚欠	炉30
第155図 6	石鏃	D4－4	5下	2.4・1.5・0.4・1.0	黒曜石	凹基　完形　炉35	5477
第155図 7	石鏃	C2－4	5中	1.8・1.8・0.35・1.0	黒曜石	有茎　脚	5177
第155図 8	石鏃	G4－3	5上	1.7・1.6・0.3・0.9	黒曜石	平基　完形	3960
第155図 9	石鏃	E1－1	5上	2.0・1.2・0.4・0.9	黒曜石	平基	1832
第155図 10	石鏃	C1－3	5上	2.2・1.2・0.4・0.8	黒曜石	平基　剥片	1311
第155図 11	石鏃	F3－2	5上	2.1・1.7・0.3・0.8	黒曜石	平基　完形	5980
第155図 12	石鏃？	G3－3	5上	2.0・1.4・0.5・1.1	黒曜石	平基	2476
第155図 13	石鏃	F2－1	5上	2.1・1.7・0.7・2.1	黒曜石	平基	1990
第155図 14	石鏃	F4－4	5下	2.7・1.2・0.5・1.9	黒曜石	平基	2965
第155図 15	石鏃	B2－1	5上	2.8・1.8・0.5・2.0	黒曜石	平基　完形	4456
第155図 16	石鏃	E3－3	5上	2.0・2.2・0.6・2.2	黒曜石	平基　頭部欠	3322
第155図 17	石鏃	E2－2	5上	3.0・2.0・0.6・2.8	黒曜石	平基　完形	1734
第155図 18	石鏃	H4－2	5上	2.4・2.0・0.65・2.9	黒曜石	平基　頭部欠	4142
第155図 19	石鏃	F6－3	5上	2.8・2.4・0.5・2.0	黒曜石	脚部欠	3081
第155図 20	石鏃	C2－2	5下	2.6・2.1・0.7・2.7	黒曜石	平基	4344
第155図 21	石鏃	B2－1	5下	2.6・2.0・0.5・1.8	黒曜石	凹基	4422
第155図 22	石鏃	E2－3	5上	2.3・2.0・0.6・2.5	黒曜石	凹基　略完形	1751
第155図 23	石鏃	H5－1	5上	1.6・1.2・0.6・1.7	黒曜石	凹基　先端欠	3112
第155図 24	石鏃	G3－2	5上	2.6・1.4・0.5・1.7	黒曜石	凹基　半欠	2835
第156図 25	石鏃	D4－3	5下	2.0・1.8・0.22・0.5	黒曜石	凹基　薄手	2135
第156図 26	石鏃	A3－3	5下	2.1・1.9・0.6・1.7	黒曜石	凹基　先端両脚端	4523
第156図 27	石鏃	D1－2	5上	2.3・2.2・0.8・2.1	玉髄	凹基　先端欠	1374
第156図 28	石鏃	D2－4	5上	2.4・1.7・0.7・2.0	黒曜石	凹基　両脚欠	5731
第156図 29	石鏃	A3－3	5上	3.0・1.8・0.45・1.8	黒曜石	凹基　両脚欠	4495
第156図 30	石鏃	D1－2	5上	2.0・1.6・0.5・1.3	黒曜石	凹基　両脚欠	862
第156図 31	石鏃	F4－1	5下	3.0・1.4・0.6・1.8	黒曜石	凹基　先端欠	5940
第156図 32	石鏃	E3－2	5上	2.4・1.5・0.4・1.0	黒曜石	凹基　両脚欠	1649
第156図 33	石鏃	D3－4	5上	1.3・1.2・1.35・0.4	黒曜石	凹基　小型両脚端	1060
第156図 34	石鏃	F4－3	5下	1.3・1.4・0.45・0.6	黒曜石	凹基　先端両端欠	2966
第156図 35	石鏃	F3－3	5上	2.1・1.4・0.3・0.55	黒曜石	凹基　略完形	3358
第156図 36	石鏃	B2－1	5上	2.3・1.5・0.4・0.8	黒曜石	凹基　片脚欠	1074
第156図 37	石鏃	F3－3	5上	1.8・1.7・0.3・0.75	黒曜石	凹基　ハート型	2038
第156図 38	石鏃	F4－4	5下	1.8・1.55・0.33・0.6	黒曜石	凹基　完形	5041
第156図 39	石鏃	A3－2	5下	1.9・1.8・0.35・0.6	黒曜石	凹基　完形	4529
第156図 40	石鏃	C1－1	5上	2.1・1.7・0.6・1.4	黒曜石	凹基　片脚欠	4829
第156図 41	石鏃	E2－1	5上	2.0・1.85・0.35・1.0	黒曜石	凹基　自然面残	869
第156図 42	石鏃	B3－1	5上	2.6・1.7・0.45・1.6	黒曜石	凹基　鍬形鏃	4758
第156図 43	石鏃	流路1	5	2.7・1.8・0.35・1.0	黒曜石	凹基　片脚欠	流路1
第156図 44	石鏃	D3－1	5下	2.6・2.1・0.55・2.0	安山岩	凹基　両脚先端欠	2885
第156図 45	石鏃	G4－2	5上	2.85・2.0・0.45・1.8	黒曜石	凹基　両脚欠	642
第156図 46	石鏃	H4－4	5上	3.2・1.3・0.5・1.6	黒曜石	凹基　片脚欠	4220
第156図 47	石鏃	D4－4　炉35	5下	2.85・2.08・0.5・1.9	黒曜石	凹基　略完形	5478
第156図 48	石鏃	G5－3	5上	2.85・1.9・0.42・1.65	黒曜石	凹基　大型	740
第156図 49	石鏃	H3－1	5上	2.9・1.8・0.5・1.6	安山岩	凹基　略完形	3022
第156図 50	石鏃	G5－4	5上	2.9・2.0・0.53・1.6	黒曜石	凹基　両脚欠	1242
第156図 51	石鏃	D4－3	5上	1.8・1.5・0.5・0.7	黒曜石	凹基　略完形	962
第156図 52	石鏃	F2－2	5上	1.7・1.5・0.3・0.6	黒曜石	凹基　片脚鏃	2667
第156図 53	石鏃	A1－1	5上	1.9・1.2・0.4・？	黒曜石	凹基　先端欠	4329
第156図 54	石鏃	G4－3	5上	2.05・1.8・0.32・0.55	黒曜石	凹基　有茎	3014
第156図 55	石鏃	C2－3	5中	2.3・1.0・0.4・0.7	黒曜石	凹基	5174
第156図 56	石鏃	D4－3	5下	2.25・1.3・0.45・0.75	黒曜石	凹基　細み略完形	2134
第156図 57	石鏃	流炉1	5	2.45・1.5・0.45・0.8	黒曜石	凹基　片脚欠	流構
第156図 58	石鏃	H2－4	5上	2.4・1.3・0.45・0.95	黒曜石	凹基　両脚端欠	3018
第156図 59	石鏃	E2－3	5上	2.5・1.65・0.4・1.0	黒曜石	凹基　略完形	1798
第156図 60	石鏃	B1－3	5上	2.5・1.2・0.4・0.8	黒曜石	凹基　片脚欠	4600

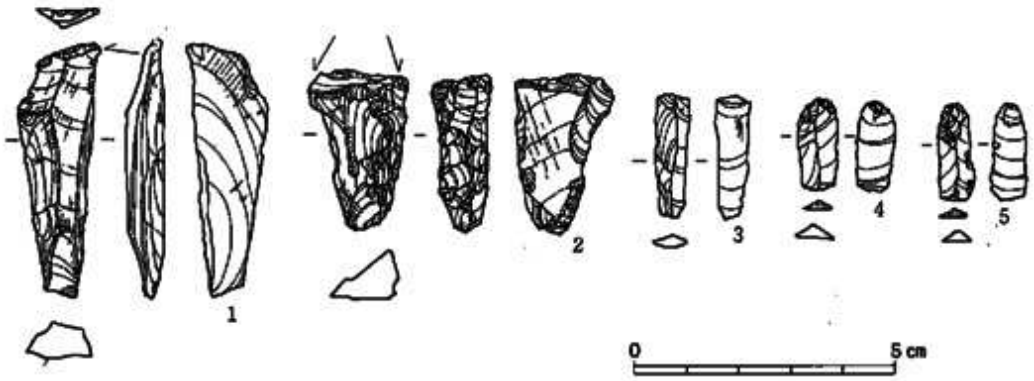
番号	器種	地区	層位	長・幅・厚・重 g	石質	備考	登録番号
第157図 61	石鏃	C2－3	5上	2.3・1.6・0.42・0.8	黒曜石	凹基 完形	4872
第157図 62	石鏃	B2－3	5上	2.3・1.6・0.44・1.0	黒曜石	凹基 両脚欠	1116
第157図 63	石鏃	D3－3	5上	2.65・1.3・0.35・0.65	黒曜石	凹基 組み片脚欠	1375
第157図 64	石鏃	F2－1	5上	2.3・1.4・0.4・0.8	黒曜石	凹基 片脚欠	2017
第157図 65	石鏃	E1－3	5上	2.75・1.3・0.4・0.9	黒曜石	凹基 片脚欠	2413
第157図 66	石鏃	D4－2	5下	1.8・1.4・0.4・0.8	黒曜石	凹基 先端脚欠	4711
第157図 67	石鏃	C2－2	5上	2.05・1.7・0.5・1.1	黒曜石	先端破損後再調整	2706
第157図 68	石鏃	C1－1	5上	2.0・1.6・0.3・0.9	黒曜石	凹基 両脚欠	2698
第157図 69	石鏃	F2－2	5上	2.7・0.9・0.4・0.7	黒曜石	凹基 片脚欠	2662
第157図 70	石鏃	D2－3	5上	2.6・1.45・0.32・0.9	黒曜石	凹基 先端片脚欠	1063
第157図 71	石鏃	B4－3	5上	2.75・1.3・0.35・0.55	黒曜石	凹基 片脚欠	3038
第157図 72	石鏃	F5－4	5下	3.0・1.4・0.43・1.3	黒曜石	凹基 片脚欠	2964
第157図 73	石鏃	B3－4	5上	2.6・1.5・0.5・1.25	黒曜石	凹基 長脚	3039
第157図 74	石鏃	E3－2	5上	2.7・1.5・0.34・1.1	黒曜石	凹基 片脚欠	1666
第157図 75	石鏃	F3－2	5上	2.2・1.6・0.5・1.3	黒曜石	凹基 両脚欠	3009
第157図 76	石鏃	F4－4	5下	2.6・1.3・0.5・1.0	黒曜石	凹基 有歯両脚欠	5961
第157図 77	石鏃	F4－3	5	2.8・1.2・0.4・0.8	黒曜石	凹基 両脚欠	2967
第157図 78	石鏃	G3－2	5上	3.2・1.2・0.5・1.5	黒曜石	凹基 有歯	4067
第157図 79	石鏃	E3－2	5下	3.1・1.5・0.4・1.4	黒曜石	有歯 片脚欠	5735
第157図 80	石鏃	G4－3	5上	3.3・1.5・0.46・1.2	黒曜石	長身 片脚欠	3013
第157図 81	石鏃	F4－3	5	3.3・1.9・0.4・1.5	黒曜石	有歯 大型片脚欠	2967
第157図 82	石鏃	F3－1	5上	3.6・1.65・0.52・1.75	黒曜石	長脚 片脚欠	3010
第157図 83	石鏃	C1－4	5上	1.5・1.5・0.4・0.7	黒曜石	脚部片	4737
第157図 84	石鏃	D4－1	5下	1.6・1.9・0.6・1.3	黒曜石	脚部片	4700
第157図 85	石鏃	G3－1	5上	2.0・1.55・0.3・1.1	黒曜石	基部欠	4029
第157図 86	石鏃	G3－3	5下	2.0・1.3・0.4・0.6	黒曜石	脚欠	3016
第157図 87	石鏃	F5－2	6上	3.0・1.85・0.45・2.0	黒曜石	平基	5646
第157図 88	石鏃	E4－4	6	1.6・1.3・0.25・0.5	黒曜石	凹基 横長剥片	902
第157図 89	石鏃	D4－4	6	1.7・1.65・0.3・0.75	安山岩	凹基 先端欠	5498
第157図 90	石鏃	D4－3	6	2.4・1.5・0.45・1.0	黒曜石	凹基 略完形	2755
第157図 91	石鏃	G5－3	6	2.5・1.4・0.45・1.2	黒曜石	凹基 先端脚欠	3183
第157図 92	石鏃	F4－3	6	2.5・1.6・0.55・1.6	黒曜石	凹基 片脚欠	5308
第157図 93	石鏃	C1－2	6	2.8・1.9・0.43・1.45	黒曜石	凹基 略完形	5387
第157図 94	石鏃	D4－4	6	3.0・1.5・0.45・1.6	黒曜石	両脚欠	5715
第157図 95	石鏃	F4－3	6	3.0・1.6・0.45・1.4	黒曜石	長脚 片脚欠	5368
第158図 96	ドリル	G4－3	5上	2.25・2.0・0.3・1.3	黒曜石	不定形剥片	3948
第158図 97	ドリル	F3－3	5上	2.5・2.4・0.7・3.2	黒曜石		3360
第158図 98	スクレパー	E3－2	5上	2.65・2.7・1.1・?	黒曜石	掻器	5907
第158図 99	スクレパー	C3－4	5上	1.35・1.5・0.4・1.0	黒曜石	削器 切断剥片	5633
第158図 100	スクレパー	H6－4	5上	3.0・1.3・0.5・2.2	黒曜石	削器 縦長剥片	2860
第158図 101	スクレパー	G4－3	5上	4.1・2.5・0.5・5.4	黒曜石	削器 縦長剥片	672
第158図 102	スクレパー	H6－4	5上	4.3・2.0・0.6・4.1	黒曜石	削器	2860
第158図 103	スクレパー	F4－4	5下	2.0・1.6・0.35・1.5	黒曜石	削器 三稜に調整	5970
第158図 104	スクレパー	D4－3	5下	2.8・1.8・0.7・2.6	黒曜石	削器	2145
第158図 105	スクレパー	E2－3	5上	2.05・1.8・0.45・1.2	黒曜石	削器 小型	1787
第158図 106	スクレパー	E3－2	5下	4.5・2.8・1.0・12.5	安山岩	削器 完形	5919
第158図 107	スクレパー	?	5		黒曜石	石刃 削器 完形	P429
第158図 108	スクレパー	D4－3	5下	2.3・2.8・0.55・3.9	黒曜石	削器 幅広剥片	2122
第158図 109	スクレパー	D3－2	5	2.4・2.0・0.4・2.4	黒曜石	切断 一縁	1024
第158図 110	スクレパー	H4－3	5上	4.1・2.5・0.5・5.4	黒曜石	削器 一縁	4124
第158図 111	スクレパー	E3－4	5上	2.0・2.2・0.35・1.8	黒曜石	削器 一縁	1636
第158図 112	スクレパー	F3－2	5上	3.0・2.8・0.5・5.3	黒曜石	削器	786
第158図 113	スクレパー	D3－1	5	2.1・3.0・0.7・2.3	黒曜石	ノッチ	1020
第158図 114	スクレパー	G3－2	5	1.4・2.1・0.3・0.9	黒曜石	削器 不定形剥片	4045
第158図 115	スクレパー	E4－3	6	2.45・2.6・0.45・?	黒曜石	掻器	5187
第158図 116	スクレパー	E4－3	6	1.7・1.5・0.45・0.8	黒曜石	削器	5191
第158図 117	スクレパー	C1－1	6	1.6・1.6・0.35・0.9	黒曜石	剥片の一縁	6112
第159図 118	UF	D2－4	5上	3.5・2.5・0.45・2.6	黒曜石	自然面残	1862
第159図 119	UF	B2－1	5下	4.1・2.7・0.6・5.7	黒曜石	縦長剥片	4443
第159図 120	スクレパー	D3－4	5上	8.2・5.9・1.4・64.4	黒曜石	削器 大型	854

番号	番種	地区	層位	長・幅・厚・重 g	石質	備考	登録番号
第159図 121	スクレパー	D1－4	5上	9.0・5.4・1.5・76.9	安山岩	剥離 大型完形	1846
第159図 122	スクレパー	G7	5	8.9・7.0・1.1・110	白雲母石英片岩		
第159図 123	磨製石斧	G3－4	5上	13.3・4.1・3.1・273.2	珪化デイサイト	乳棒状 敲痕あり	4108
第159図 124	打製石斧	D5－3	5下	9.8・7.8・1.2・75.2	白雲母石英片岩	撥形 片刃	4682
第159図 125	磨石？	C2－3	5上	5.0・4.7・3.3・97.4	輝石安山岩	小型円形	4905
第159図 126	磨石		5上	5.4・5.1・4.0・91.3	輝石安山岩	小型不整形	591
第159図 127	磨石	C2－3	5中	5.3・5.1・2.5・58.1	輝石安山岩	小型円形	5158
第159図 128	磨石	G3－1	5	6.4・4.0・4.0・126.5	輝石安山岩	半欠	3969
第159図 129	磨石	E3－4	5上	6.4・5.6・4.8・231.1	輝石安山岩	小型長円形	3317
第159図 130	磨石	F3－2	5上	7.1・6.6・3.2・213.7	輝石安山岩	小型完形	4303
第159図 132	磨石	F2－1	5上	7.2・6.4・4.0・240.9	輝石安山岩	小型長円形	2041
第159図 133	磨石	D4－1	5下	7.4・6.9・5.1・308.8	輝石安山岩	円形	2152
第159図 134	磨石	F3－2	5上	7.6・6.6・3.4・235.9	安山岩	長円形	5851
第160図 135	磨石	E2－1	5上	7.5・7.4・3.0・242.8	輝石安山岩	円形 完形	1731
第160図 136	磨石	A4－3	5上	8.0・7.3・3.0・259.1	輝石安山岩	長円形 完形	1490
第160図 137	磨石	E2－1	5上	8.0・7.3・4.0・345	輝石安山岩	円形 完形	1707
第160図 138	磨石	D4－2	5下	8.1・7.0・3.2・264.9	輝石安山岩	長円形 完形	2228
第160図 139	磨石	A3－1	5下	8.2・7.7・4.4・363.7	輝石安山岩	円形 完形 部厚	4520
第160図 140	磨石	G3－4	5上	8.0・7.6・3.9・354.3	輝石安山岩	不整形 完形	2428
第160図 141	磨石	F2－1	5上	8.0・7.8・4.5・368.3	輝石安山岩	円形 完形	2029
第160図 142	磨石	G5－4	5上	8.2・7.0・5.9・423	輝石安山岩	長円形 敲痕	1244
第160図 143	磨石	G4－1	5上	8.8・7.3・4.9・？	輝石安山岩	長円形 完形	1223
第160図 144	磨石	G4－3	5上	9.9・8.1・4.3・480.4	輝石安山岩	長円形 完形	3963
第160図 145	磨石	G2－2	5上	10.3・8.4・3.5・399.5	輝石安山岩	長円形 薄手	4247
第160図 146	磨石	G4－3	5上	9.0・6.3・4.0・380.9	輝石安山岩	長円形 半欠	729
第160図 147	磨石	F1－2	5上	9.1・7.8・4.9・424.8	輝石安山岩	不整円形 完形	2591
第160図 148	磨石	B3－3	5上	8.6・8.5・4.5・449.5	安山岩	偏球形	6022
第160図 149	磨石	B3－2	5上	9.4・8.5・3.9・417.9	輝石安山岩	長円形 完形	1208
第160図 150	磨石	G2－2	5上	8.8・6.4・5.1・328.6	デイサイト	半欠	4117
第161図 151	磨石	D4－3	5下	8.5・7.9・4.1・354.6	輝石安山岩	長円形 完形	2128
第161図 152	磨石	A2－1	5上	9.2・9.0・3.3・341.4	輝石安山岩	円形 敲痕	1383
第161図 153	磨石	D1－2	5中	9.5・8.5・4・431.4	輝石安山岩	長円形	5065
第161図 154	磨石	C1－1	5上	9.6・6.9・3.6・374.4	輝石安山岩	一部欠	1313
第161図 155	磨石	E5－3	5下	5.3・8.8・1.8・104.5	輝石安山岩	半欠 条線	2819
第161図 156	磨石	E5－4	5下	10.4・6.2・4.4・468.6	花崗閃緑岩	半欠	2810
第161図 157	磨石	H4－4	5上	8.6・7.4・3.5・244.7	輝石安山岩	半欠 側縁平坦	4225
第161図 158	磨石	B3－3	5上	10.4・9.0・3.8・552.4	デイサイト	長円形 側縁平坦	1158
第161図 159	磨石	B2－2	5下	10.5・7.6・3.0・415.8	安山岩系	一側辺に凹み	6085
第161図 160	磨石	C2－3	5	10.6・9.7・5.6・716.3	輝石安山岩	部厚	4825
第161図 161	磨石	F2－3	5上	10.8・8.0・4.0・439.2	輝石安山岩	長円形	2640
第161図 162	磨石	D5－3	5上	10.5・8.5・6.2・655.5	輝石安山岩	長円形 敲痕	2180
第161図 163	磨石	E3－4	5上	10.6・7.8・6.0・710.8	輝石安山岩	長円形 部厚	1678
第161図 164	磨石	F4－3	5下	10.8・8.7・4.8・576.6	輝石安山岩	長円形	5251
第162図 165	磨石	E4－3	5下	10.9・9.2・4.3・532.1	輝石安山岩	長円形 完形	3296
第162図 166	磨石	E4－1	5上	10.8・8.9・5.7・734.4	輝石安山岩	長円形 部厚	2863
第162図 167	磨石	B4－3	5上	10.9・8.7・5.1・723	輝石安山岩	長円形 完形	1356
第162図 168	磨石	D5－3	5上	10.9・7.8・5.0・538.4	輝石安山岩	長円形 側縁平坦	2180
第162図 169	磨石	D3－2	5下	11.2・8.4・3.9・566.4	輝石安山岩	長円形 完形	2884
第162図 170	磨石	C2－1	5上	11.0・8.4・4.1・612.6	輝石安山岩	長円形 完形	2717
第162図 171	磨石	E3－4	5上	11.3・9.4・5.5・771	輝石安山岩	長円形 完形	1677
第162図 172	磨石	E1－1	5上	11.0・9.0・5.9・739.2	輝石安山岩	3分の1片	4406
第163図 173	磨石	B2－2	5上	13.1・9.6・4.5・885.3	輝石安山岩	長円形 完形	1098
第163図 174	磨石	D4－4	6	5.1・4.6・3.9・132.9	輝石安山岩	小型 完形	2787
第163図 175	磨石	G5－3	6	10.0・5.4・4.8・301.3	輝石安山岩	長円形 半欠	3183
第163図 176	磨石	D4－3	6	9.65・8.1・4.2・474.8	輝石安山岩	長円形	941
第163図 177	敲石	G2－2	5上	7.05・6.0・2.4・139.5	輝石安山岩	不整円形	4246
第163図 178	敲石	G2－2	5上	7.9・6.6・3.7・245.0	輝石安山岩	長円形	4116
第163図 179	敲石	H4－3	5	8.6・7.2・4.5・400.4	輝石安山岩	長円形	4132
第163図 180	凹石	F2－4	5上	6.1・5.7・2.8・136.8	輝石安山岩	小型 完形	3354

番号	器種	地区	層位	長・幅・厚・重 g	石質	備考	登録番号
第163図 181	凹石	C4－4	5	9.6・9.4・4.4・476.6	凝灰岩	円型　完形	P379
第163図 182	凹石	B3－1	5上	9.4・7.5・4.0・302.8	輝石安山岩	長円形	1339
第163図 183	凹石	G2－2	5上	8.6・7.5・3.4・311.2	輝石安山岩	円形	2827
第163図 184	凹石	H6－4	5上	9.2・8.0・4.2・399	輝石安山岩	凹み2遺	3096
第163図 185	敲石・凹石	E3－3	5中	10.5・9.0・7.6・951.2	デイサイト	球形　部厚	5874
第163図 186	磨石？	B3－4	5上	8.5・6.5・2.7・178.5	白雲母石英片岩	石錘未製品？	1148
第163図 187	石弾	G4－1	5下	5.3・4.2・3.7・101.6	輝石安山岩	長円形　小型	3184
第164図 188	石皿	G4－1	5上	7.5・4.4・4.1・148.1	輝石安山岩		3190
第164図 189	石皿	E4－3	5下	10.9・6.7・4.3・369	輝石安山岩		3237
第164図 190	石皿	C2－3	5上	7.0・6.6・2.1・166.4	絹雲母石英千枚	小型	4878
第164図 191	石皿	E2－1	5上	13・11・3.7・582.2	絹雲母石英千枚	使用減り	1681
第164図 192	石皿	E4－3	5下	10.6・10.5・4.1・581.9	輝石安山岩		3236
第164図 193	石皿	G3－2	5上	13.3・10.5・4.6・760.7	輝石安山岩		4075
第164図 194	石皿？	F5－4	5下	13.7・13.1・4・1027	輝石安山岩	台石	3229
第164図 195	石皿	F4－1	5下	17.3・15.1・4.3・1954	絹雲母石英片岩		3529
第164図 196	石皿	D4－4	5上	16.1・11.5・4.5・981.2	絹雲母石英千枚		炉30
第165図 197	石皿	E5－3	5下	23.6・19.8・5.1・3.44kg	輝石安山岩	完形	5414
第165図 198	石皿	G5－4	5下	28.8・18.1・3.7・3.63kg	緑泥片岩		3530
第165図 199	石皿	D2－4	5上	24.1・22.1・8.5・7.5kg	砂質千枚岩	部厚	3862
第165図 200	石皿	G3－3	5上	30.6・23.6・5.7・4.98kg	絹雲母石英千枚	大型　使用減り	4037
第165図 201	石皿	C3－3	5上	25・20・4.3・2.81kg	砂質千枚岩	焼け　使用減り	4255
第165図 202	石皿	D4－3	5上	27.4・25.3・7.7・7.25kg	絹雲母石英千枚	使用減り	4707
第165図 203	石皿	D3－3	5上	37.2・32.2・6.9・1.2kg	輝石安山岩	焼け　使用減り	4254
第165図 204	石皿	F3－2	5上	24.9・23.8・6.4・8kg	絹雲母石英千枚	薄　大型	4305
第165図 205	石皿	F3－2	5上	26.4・14.0・3.8・1.83kg	絹雲母石英千枚	薄手	4304
第166図 206	石皿	B4－3	5上	34.5・34.8・11.5・20.5kg	絹雲母石英千枚	極大型	4773
第166図 207	石皿	H4－4	5上	21.1・14.7・6.0・2.62kg	輝石安山岩	焼けている	4260
第166図 208	石皿	F4－4	5上	22.1・18.7・4.3・3.34kg	白雲母石英片岩		3535
第166図 209	石皿	E4－4	5下	31・24.1・4.6・5.25kg	砂質千枚岩	板状	3861
第166図 210	台石	F4－2	5上	21.1・15.5・9.7・4.5kg	凝灰岩質砂岩	破片	4299
第167図 211	有孔石器	C1－1	5上	5.3・5.1・0.7・27.3	白雲母石英片岩	小型　完形	4775
第167図 212	有孔石器	F5－1	5下	7.4・7.2・1.0・83.5	白雲母石英片岩	不整円形	3515
第167図 213	有孔石器	E4－1	5下	10.3・9.8・1.5・214.1	白雲母石英片岩	完形	5054
第167図 214	有孔石器	F3－4	5上	10.7・10.0・1.4・270	白雲母石英片岩	完形　炉28付近	562
第167図 215	有孔石器	G3－1	5上	10.5・7.4・2.4・255.6	白雲母石英片岩	変形　未貫通	4314
第167図 216	有孔石器	F4－2	5上	9.6・8.5・1.3・158.9	絹雲母石英千枚	小孔　未貫通	3380
第167図 217	有孔石器	D4－3	5下	15.7・15・1.7・622.1	白雲母片岩	孔未貫通	3860
第167図 218	有孔石器	H3－2	5上	7.0・6.0・2.6・146.3	白雲母石英片岩	未製品　凹石？	4245
第167図 219	有孔石器	G5－3	5上	14・13.2・2.0・572.7	白雲母石英片岩	未製品	4250
第167図 220	有孔石製品	F3－1	5上	21.3・14.8・4.0・1.91kg	砂質千枚岩		3653
第167図 221	円形石器	F3－4	5上	13.5・10・2.1・409.3	絹雲母石英千枚	敲石としても使用	4308
第167図 222	円形石器	G2－2	5上	9.5・8.2・2.6・290.1	絹雲母石英千枚	周辺磨く	2425
第167図 223	円形石器	G5－1	5上	13・10・1.6・363.4	絹雲母石英千枚	周辺磨く	3103
第168図 224	UF	C1－2	5上	2.65・1.3・0.3・1.5	黒曜石	縦長剥片	4620
第168図 225	UF	F2－1	5上	3.4・1.7・0.4・1.6	黒曜石	縦長剥片	1976
第168図 226	剥片	A3－3	5上	3.6・2.0・0.5・4.1	黒曜石	縦長剥片	1424
第168図 227	縦長剥片	G5－4	5	3.0・2.6・0.35・3.3	黒曜石		3149
第168図 228	縦長剥片	E4－4	5上	2.85・2.0・0.35・？	黒曜石		2284
第168図 229	剥片	C1－1	5上	2.9・3.2・0.8・6.0	黒曜石	不純物含む	4867
第168図 230	縦長剥片	C2－2	5上	4.3・2.2・0.6・5.9	黒曜石	角礫	5183
第168図 231	縦長剥片	D5－4	5下	6.1・2.9・0.8・8.2	黒曜石	角礫	4716
第168図 232	縦長剥片	B3－2	5	7.0・2.0・0.68・8.3	黒曜石	縦長剥片	1167
第168図 233	剥片	D1－1	5下	5.0・5.7・0.9・23.8	黒曜石	幅広剥片	1630
第168図 234	石核	D3－4	5上	3・3.1・20	黒曜石		1513
第168図 235	石核	F5－1	5下	3.5・2.7・14.4	黒曜石		3216
第168図 236	石核	D2－2	5上	2.4・2.6・11	黒曜石	角礫	1512
第168図 237	石核	E2－1	5下	3.9・5.6・1.8・32.6	黒曜石		5881
第168図 238	石核	B2－3	5	6.9・7.1・2.35・150	黒曜石	角礫	P295
第168図 239	石核	E4－3	5下	6.2・7.0・2.0・83.3	黒曜石	角礫	2870
第168図 240	石核	D4－3	5下	9.2・7.5・3.3・246.5	安山岩	円礫	2129

番号	器種	地区	層位	長・幅・厚・重 g	石質	備考	登録番号
第168図 241	石核	C3－2	5上	9.5・5.4・4.0・212	黒曜石	角礫	4747
第168図 242	石核	D4－3	6	5.3・5.4・2.3・76.8	黒曜石	角礫 礫	2749
第169図 243	石核	F5－4	5下	5.0・6.9・2.2・121	黒曜石		5341
第169図 244	石核	H3－2	5上	6.1・5.2・2.95・63.3	黒曜石		765
第169図 245	石核	C2－3	5上	7.2・6.3・4.6・200	黒曜石	角礫	4824
第169図 246	石核	H3－2	5上	5.3・7.1・2.7・87	黒曜石	角礫	4239
第169図 247	石核	A2－3	5上	3.4・3.3・・26.6	黒曜石	角礫 打面調整	2567
第169図 248	石核	B1－1	5上	4.9・4.4・3.5・92.5	黒曜石	角礫	2526
第169図 249	原石	F6－3	6	5.2・5.1・4.0・142	黒曜石	円礫	3036
第169図 250	石鏃	B3－2	5上	3.9・3.7・0.7・15.2	白雲母石英片岩	破片	4924
第169図 251	石鏃	G5－4	5上	9.0・9.0・2.0・187.4	白雲母石英片岩	打欠石錘	3208
第169図 252	石鏃	D4－3	6	11.6・8.4・2.3・332.6	輝石安山岩	長円形 完形	2759
第169図 253	砥石	C2－1	5上	6.3・5.5・2.8・？	輝石安山岩	破片	5110
第169図 254	砥石	G3－1	5上	10.6・7.0・3.0・223	砂岩	荒砥 二次焼成	4285
第169図 255	軽石	流路1	5	4.0・2.8・2.3・8	黒曜石	雪色	流路1
第169図 256	軽石	A3－1	5上	5.0・5.7・2.85・23.7	軽石	暗茶褐色	1457
第169図 257	軽石	F5－2	6	6.0・3.7・3.3・37.5	軽石	淡茶褐色	5650
第169図 258	軽石	C2－1	6	5.5・5.3・2.6・46.1	軽石	淡茶褐色	5392
第169図 259	軽石	F5－2	6	5.6・5.5・3.5・53.4	軽石	淡茶褐色	5763
第169図 260	軽石	D1－2	7	5.3・3.8・2.4・29.5	軽石		5449
第169図 261	軽石	D3－1	7	2.2・1.6・2.1・4.8	軽石	淡茶褐色 滴	5446
第170図 262	石錐	17号墳周溝		2.2・1.3・0.39・1.1	黒曜石	五角形 完形	
第170図 263	石錐	17号墳周溝		2.25・1.6・0.5・1.9	黒曜石	平面 完形	
第170図 264	石鋸	G12	表土	3.1・2.6・0.55・3.0	黒曜石	大型 完形	
第170図 265	石鋸		表採	2.0・1.3・0.3・0.5	黒曜石	完形	
第170図 266	石鋸		表採	2.1・1.3・0.3・0.5	黒曜石	先端片脚欠	
第170図 267	石鋸		表採	2.0・2.3・0.4・1.0	黒曜石	両脚先端欠	
第170図 268	石鋸	3号墳西		2.0・1.6・0.35・1.0	黒曜石	表皮残す	
第170図 269	石鋸		表採	2.4・1.8・0.45・1.1	黒曜石	先端一部欠	
第170図 270	石鋸		表採	2.75・1.2・0.4・0.7	黒曜石	有茎 略完形	
第170図 271	石鋸	3号墳付近		3.1・1.8・0.5・2.1	黒曜石	両脚欠	
第170図 272	石鋸			3.5・1.8・0.5・2.4	黒曜石	片脚欠	±3
第170図 273	石鋸		表採	3.85・2.0・0.5・3.5	黒曜石	大型半欠	
第171図 274	スクレパー	2区	表採	2.5・1.9・0.7・3.3	黒曜石	掻器	
第171図 275	スクレパー	2区	表採	2.5・1.9・0.65・3.0	黒曜石	掻器	
第171図 276	スクレパー	2区	表採	3.0・3.0・1.15・10.3	黒曜石	掻器	
第171図 277	スクレパー	2区	表採	2.3・3.0・0.5・3.4	黒曜石 鉈鳥	削器	
第171図 278	スクレパー	2区		3.6・7.8・0.9・23.2	安山岩	横型石匙 完形	南ピット
第171図 279	スクレパー	11号墳主体部内		4.45・4.4・0.8・16.3	黒曜石	縦型石匙未製品	
第171図 280	縦長剥片		埋土	4.3・0.9・0.5・2.6	黒曜石		住3
第171図 281	磨製石斧	F3－3	5	12.1・5.7・2.5・267.7	ホルンフェルス	完形	P80
第171図 282	磨製石斧	5号墳周溝		14.7・6.0・4.9・659.8	輝石安山岩	片刃石斧	
第171図 283	磨石	2区	表採	10.6・10・5.8・873.5	輝石安山岩	円形 完形	
第171図 284	磨石	2区	表採	11.8・10.3・4・677	輝石安山岩	長円形	
第171図 285	石皿	D3－4	4	7.5・3.0・2.4・102.2	凝灰岩	小型石皿	5155
第171図 286	有孔石器	2区	表採	5.9・5.6・0.8・44.8	白雲母石英片岩	小型完形	
第171図 287	不明石器	2区	表採	22.1・4.6・2.6・423.6	白雲母石英片岩	棒状 磨く	
第171図 288	不明石器	7号墳周溝		11.5・4.2・1.6・124	絹雲母石英片岩	石刀？	
第171図 289	不明石器	1号墳内		25.9・6.4・3.0・852.8	白雲母石英片岩	板状 周辺磨く	

の縦型石匙の未製品で、刃部は自然面のままである。11号墳の主体部より出土した。長4.45cm、重さ16.3g。280は縦長剥片で、打面は自然面である。281・282は磨製石斧。281は鋭利な蛤刃で、片側は研ぎ減りする。側面の一部には整形時の敲打痕が若干残り、また、頭部付近は面取りされる。長12.1cm、重さ267.7gのホルンフェルス製。282は片刃石斧で刃部を欠損する。側面及び緊縛部には整形時の敲打痕を広い範囲で残す。裏面は石斧の柄に装着した面で、ほとんど平坦である。残長14.7cm、重さ659.8g、輝石安山岩製で5号墳周溝出土。283・284は磨石。



第179図　Ⅱ区旧石器時代の石器実測図（2/3）

283は円形に近く部厚い。285は４層出土の小型石皿片で上面は浅くへこむ。286は径5.6～5.9㎝、厚さ0.8㎝の有孔石器の完形品。周辺に凹部が目立つがほぼ円形に近い。中央に８～10㎜の孔を穿いた後、丁寧に磨く。重さ44.8ｇを測り、白雲母石英片岩製。287は棒状の白雲母石英片岩の両側縁を摩り先端部には磨痕が認められる。砥石として利用された可能性もある。重さ423.6ｇ。288も両側縁を磨くことから明瞭な稜線が走る。287に比べて薄手であり石刀の未製品かもしれない。289は断面が蒲鉾状を呈す石器。全体が磨かれ、端部は鈍い刃部状になり、下面は平坦である。長25.9㎝、厚さ３㎝、重さ852.8ｇを測る。287～289は白雲母石英片岩製。

（木下）

６）旧石器時代の遺物

石　器　（第179図）

第179図１・２は５層中より出土した旧石器時代に属する石器である。１は切断面端部よりファシットが入る彫器。黒曜石製で重さ5.0ｇを測る。２は厚い剥片の稜上からの面調整があり、上面端部よりファシットが入る彫器。重さ5.4ｇを測る。３・４は８層中からの出土である。３は背面の一部に稜からの剥離を行っている稜つきの細石刃である。４の頭部には複数の剥離面があり、打面部は不明。５はＰ1091出土。

（杉原）

3　Ⅲ区の遺構と遺物

1）遺構の概要と調査区の設定

Ⅲ区はⅡ区の東側にあたる調査区で、両区を縦断する町道原の東・木谷線によって分区され、発掘調査はⅡ区に準じたグリッドを設定し実施した。地形的にみると調査区西側（K～M、6～9区）はⅡ区から続く扇状台地の付け根の位置に当たり、標高は58～58.5mを測り、北・南側が高くL・M－8区方向に傾斜する。この地区からは古墳時代以降の掘立柱建物1棟、溝1条、縄文時代早期の石組炉2基・土坑4基や、押型文土器を主体とした多くの土器・石器が出土した。また、下層ではナイフ形石器を主体とする9a層以下5枚の旧石器時代の良好な包含層が確認され、集石3基・土坑1基を検出した。東側（Q～S、9・10区）は谷部となり西側との比高は2mである。東端は農業用水池（堤ノ池）となる。古墳時代以降の土坑1基、溝2条検出した。北側の調査区（M～P、6～9区）は62mから57mの等高線が密に走る北側からのやや急な斜面で、近世の溝のほか若干の柱穴を検出したに過ぎない。4・5号トレンチを設定し、下層の調査を行ったが、古墳時代を遡る遺物が出土しなかったので5層以下の調査はK～M、6～9区に限定した。

下層の調査区では各層位下面ごとに25cmコンタによる地形図を作成し、遺構と遺物の分布状況ならびに旧地形の把握に努めた。

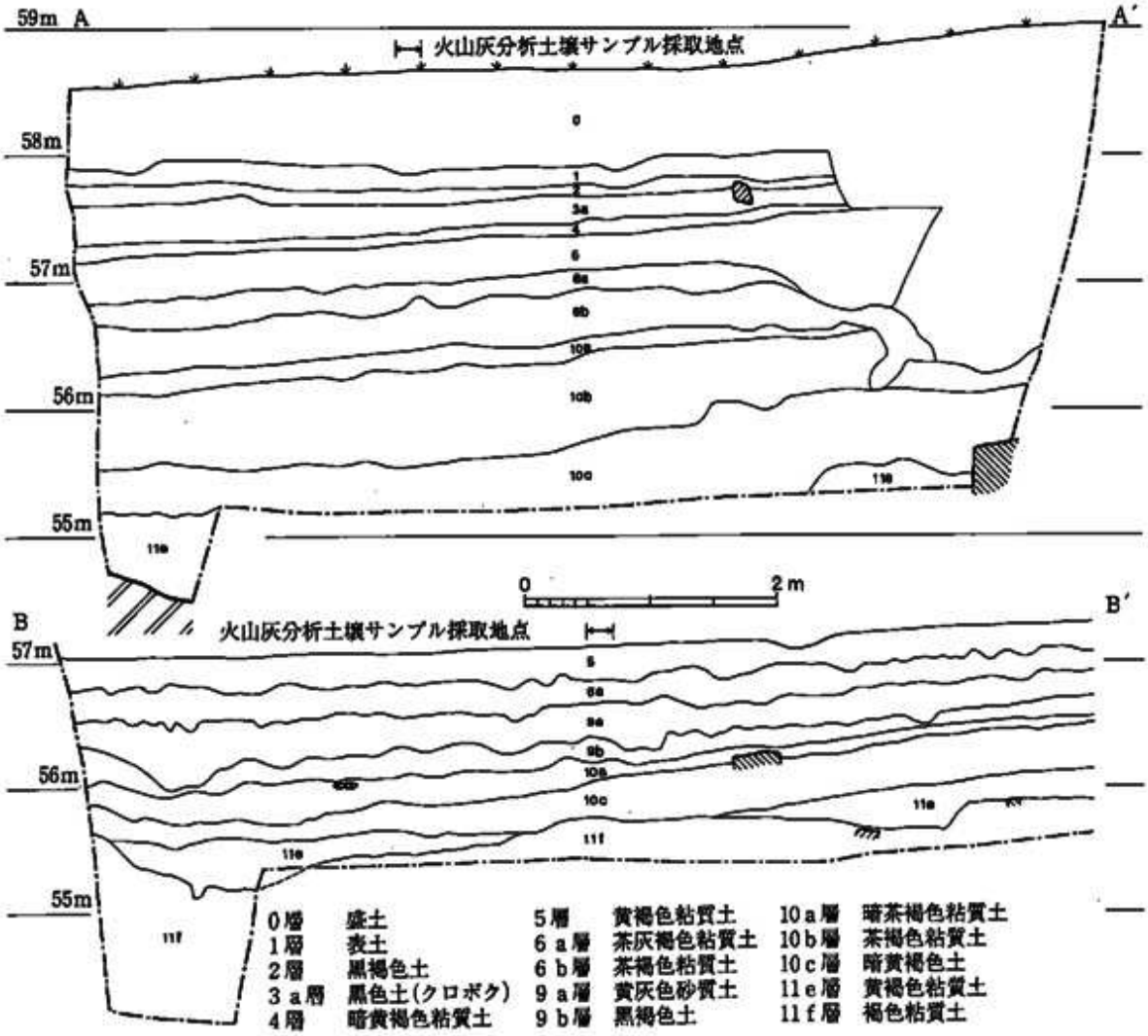
調査の結果、原の東遺跡の縄文時代早期の拡がりはⅡ区全域からⅢ区のM列までの東西130mの範囲で、Ⅱ区南側にさらに拡がることが判り、旧石器時代ではⅡ区Ⅰ列からⅢ区M列まで50mと狭い範囲に納まる（付図、第194・206・211・215・219図）。

2）層　序（図版82－(2)、第180図）

Ⅲ区の基本的な土層の堆積状態を図示した。A—A′は第2トレンチK6－1区西壁、B—B′は第1トレンチ南端L8－4区の西壁で、4層以上は調査の段階で既に削平している。調査区中にすべての土層が観察されるわけではなく、特に、先土器時代の調査にあたっては土層の把握に苦慮した。土層は地形の関係から大きく南側に傾斜するが、図示しなかった第2トレンチ南側K7区では、反対に北側に傾斜し、また、K・L7区ではⅡ区方向の西側に傾斜と複雑な土層の堆積状況である。原の東遺跡の火山灰分析はこの2ヵ所から採取した土壌で実施した。

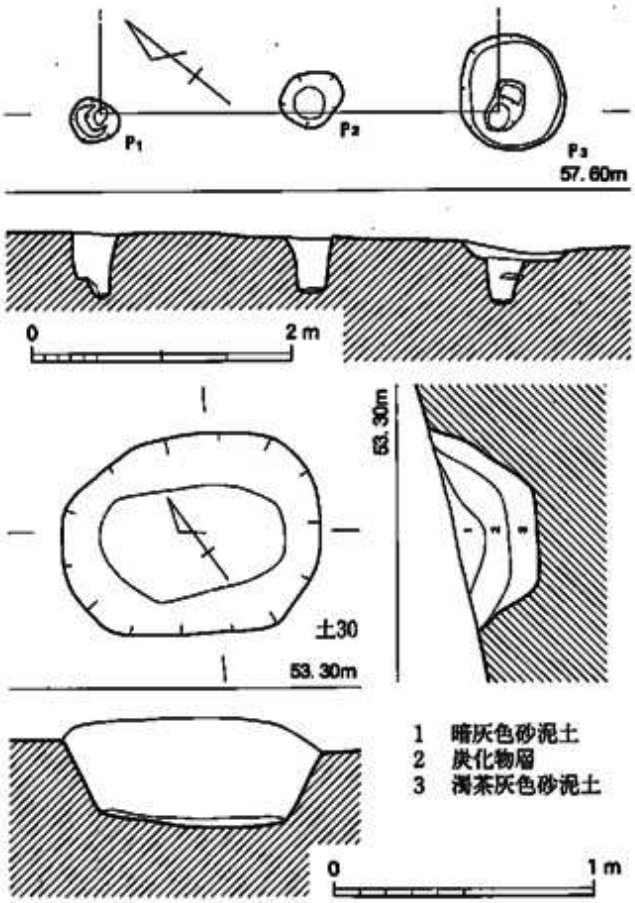
0層は盛土。1層は表土で現代の耕作土。2層は黒褐色土で、層厚7～15cm。3a層は黒色土で、クロボクと通称され古墳時代の堆積土。層厚13～40cm。掘立柱建物跡1棟、土坑2基、溝3条を検出した。4層は暗黄褐色粘質土で、層厚7～13cm。Ⅱ区で検出された弥生時代中期

から縄文時代晩期の遺構はⅢ区には拡がらない。５層は黄褐色粘質土で30～78cmと特に北側に部厚く堆積する。縄文時代早期の石組炉２基、土坑１基を検出した。６ａ層は茶灰褐色粘質土で、層厚15～30cm。縄文時代早期の土坑３基を検出した。６ｂ層はやはり縄文時代早期の押型文土器を伴う土層であるが、K列付近に堆積する。層厚32～42cm。Ⅱ区で観察された７・８層はⅢ区には堆積が見られない。９ａ層は黄灰色砂質土で、Ⅲ区の第２トレンチには堆積がみられない。層厚18～55cmを測り、南側に厚く堆積する。土坑１基を検出し、９ａ層以下10ｃ層には小型のナイフ形石器を主体とする良好な石器群が層位的に出土した。９ｂ層はふかふかした感じの黒褐色土で、南側に厚く堆積するが、９ａ層と同様に調査区西側には堆積しない。層厚



第180図　Ⅲ区土層堆積図（1/40）

14～24cm。集石１基を検出した。10ａ層は暗茶褐色粘質土。調査区全域に堆積し、Ｌ８区を中心に厚く堆積する。層厚８～32cm。10ｂ層は茶褐色土で極めて粘質に富み、礫等をほとんど含まない。層厚45～72cmに達するが、調査区西端の第２トレンチ付近から第Ⅱ区の東端部のみに堆積する。10ｃ層は暗黄褐色土で、層厚20～40cm。調査区全域に堆積し、北・東側に厚い。石英粒や１cm大の河原石を多く含む。11ｅ層は黄褐色土粘質土。11ｆ層は褐色粘質土で、上層との境には鉄分が沈殿し固く締まり、粒状の安山岩小礫を多く含む。11層では遺物の出土をみない。なお、第２トレンチでは標高55.7mで、片岩の岩盤に達する。



第181図　掘立柱建物、30号土坑実測図（1/30）

３）古墳時代以降の遺構と遺物

（１）掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（図版79－１、第181図）

Ｌ８－２区に位置する。全容は不明だが２間の柱間を持つ掘立柱建物跡と考えられる。

Ｐ１－Ｐ２間1.65m、Ｐ２－Ｐ３間1.45mを測り、深さ45～50cm。柱穴の埋土が第３層の黒色土であることから、遺物の出土を見ないが古墳時代後期以降の時期であろう。

（２）土　坑

２基検出した。

29号土坑（付図）

Ｍ８－１区、４号溝の中央部東側に位置し、不整円形を呈す。南北１m、東西0.9mを測り、南辺は直線的である。深さ30cm内外で、断面は浅いＵ字形。３層の黒色土を埋土とする。土坑内より土師器の小片が出土した。

30号土坑（第181図）

調査区の東側Q10区に検出された。東西方向の長円形を呈し、長径1m、短径0.76mを測る。床面は中央部が若干深くなり、深さ42cm。埋土は1層が暗灰色砂泥層、2層は炭化物層、3層は炭化物を若干含む濁茶灰色砂泥層。遺物は出土していないが、検出面から古墳時代以降の時期であろう。

（3）溝

3条検出した。いずれも埋土は黒色土（3層）である。

4号溝（付図）

M8－2区に検出された南北方向の溝。長さ11.5mで、南端は調査区域外に延びる。幅2～2.5mで、中央部がやや広い。断面はU字形を呈し、深さ25cm前後。レベルは北端より南端まで70cm下がる。

5号溝（付図）

調査区の東側、Q10－3区に検出された東西方向の溝で、6号溝の南側1mに位置する。長さ4.6m、幅30～50cm、深さ15cmを測り、西端は調査区域外になる。溝底は平坦で、東流する。

6号溝（付図）

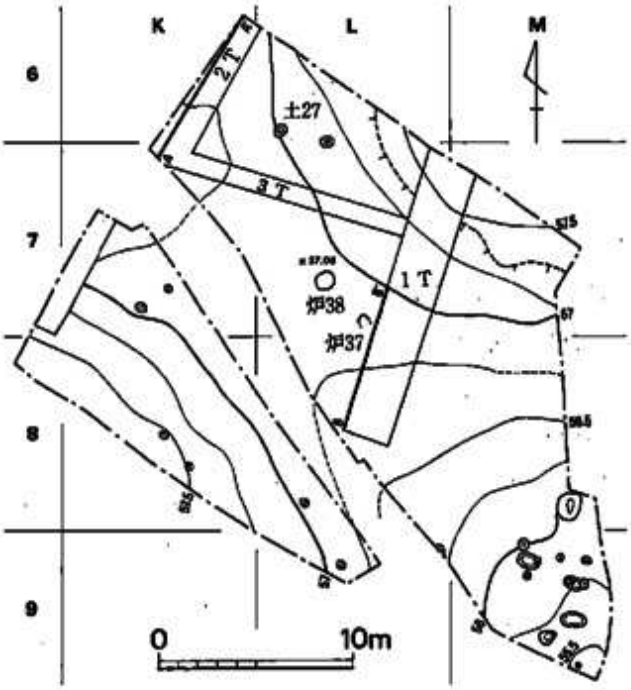
5号溝の北側に平行する東西方向の溝で、西側は調査区域外に延びる。4.3mを検出した。幅30～90cm、深さ15～20cmを測り、溝底は平坦に近い。

4）縄文時代（5層）の遺構と遺物

前述したように5層以下の調査は縄文時代早期の遺物が出土したK－M、6－9区に限定して実施した。

（1）5層の地形（第182図）

5層は調査区全域に堆積する。標



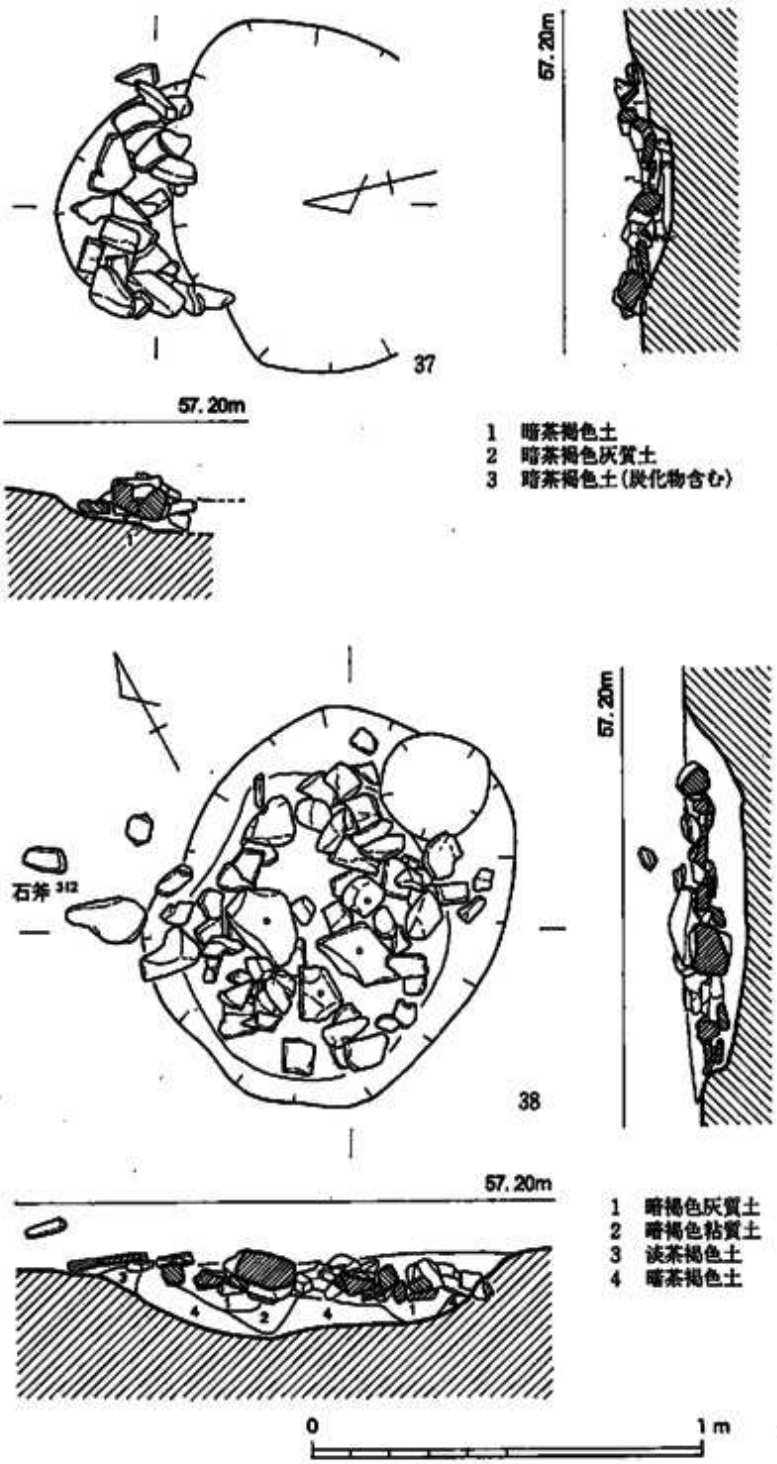
第182図　5層地形図実測図（1/400）

高57.5～57mの等高線は北側と南側に走り、56.75mの等高線は西、東側に分かれる。M8からM9区では徐々に南側に傾斜し、端部では55.5mとなる。5層の旧地形はK・L7区を中心に10m四方の平坦面が見られ、検出した石組炉2基、土坑1基はこの平坦面に築かれる。

（2）石組炉

37号石組炉（図版80―(1)、第183図）

原の東遺跡で検出された石組炉のうち最も東端L7－1区に位置し、南側の大半を破壊されている。B類で東西60cm、深さ7cmの掘方内に、床石を有す花弁状の石組炉である。石組炉に使用された石材は10cm大の絹雲母石英片岩、輝石安山岩である。石組炉下底部には灰層が認められる。1層は軟らか



第183図　37号・38号石組炉実測図（1/20）

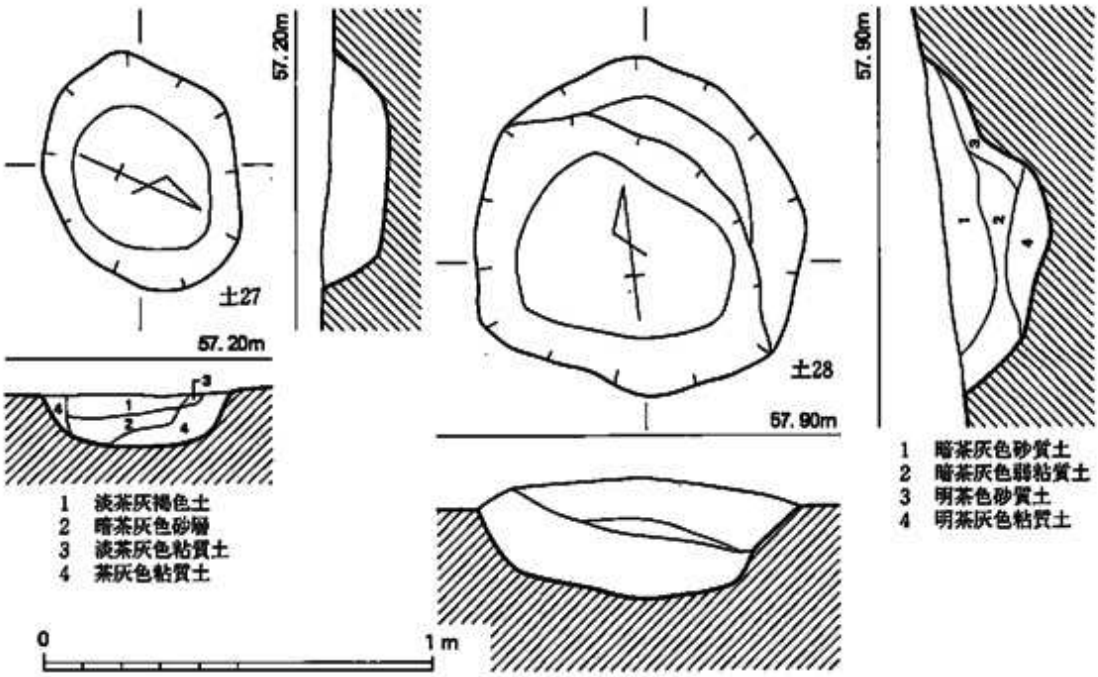
い暗茶褐色土、2層は灰を混入した暗茶褐色土、3層は炭の粒を少量含む暗茶褐色土。

38号石組炉（第183図）

L 7－2区に検出されたA類の石組炉で、105×84cm、深さ19cmの長円形の掘方を持つ。床面より10～13cmほど浮いて敷き石状に河原石や絹雲母石英片岩等が配置され、○印の石は焼成を受けている。石組炉内の堆積土は1層が暗褐色灰質土、2層は暗茶褐色土、3層は暗褐色粘質土、4層は淡茶褐色土。内部からは押型文土器や黒曜石の剥片が、炉外西30cmに磨製石斧、用途不明の石器が出土した。

石　器（第188・189図12・33）

13は砂岩製の磨製石斧。敲打調整後全体を研磨する。刃部は特に丁寧に研ぎ出され鋭利な鉈刃となり、片側は使用後に再研磨され研ぎ減りしている。長11.6cm、幅5.5cm、厚さ2.0cm、重さ239gを測る。33は靴底状を呈す扁平な石器で、周囲には調整痕が残るが、白雲母石英片岩の表裏を丁寧に磨く。用途は不明である。長20.8cm、幅10.8cm、厚さ1.5～2.4cm、重さ750g。

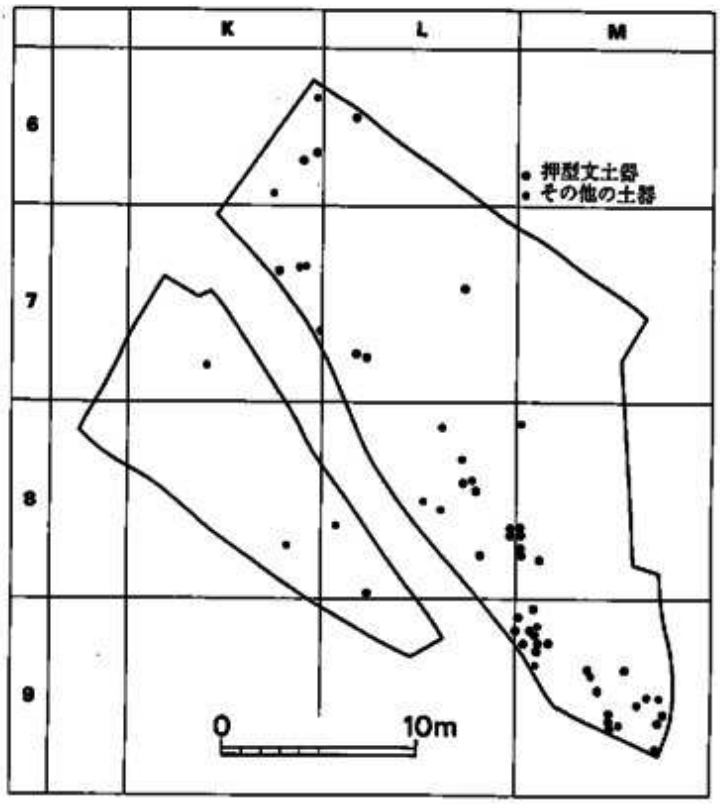


第184図　27号・28号土坑実測図（1/20）

（3）土　坑

27号土坑（第184図）

Ｌ６－２区の57mの等高線上に位置する。不整円形プランを呈し、長径62cm、短径42cm。床面はほぼ平坦で、全面熱を受け赤化する。深さ13cm。壙内の埋土は４枚観察され１層は淡茶灰褐色土で炭、焼土粒を多量に含む。２層は暗茶灰色砂層で、炭化物を若干含む。３層は淡茶灰色粘質土、４層は茶灰色粘質土。遺物の出土はない。　（木下）



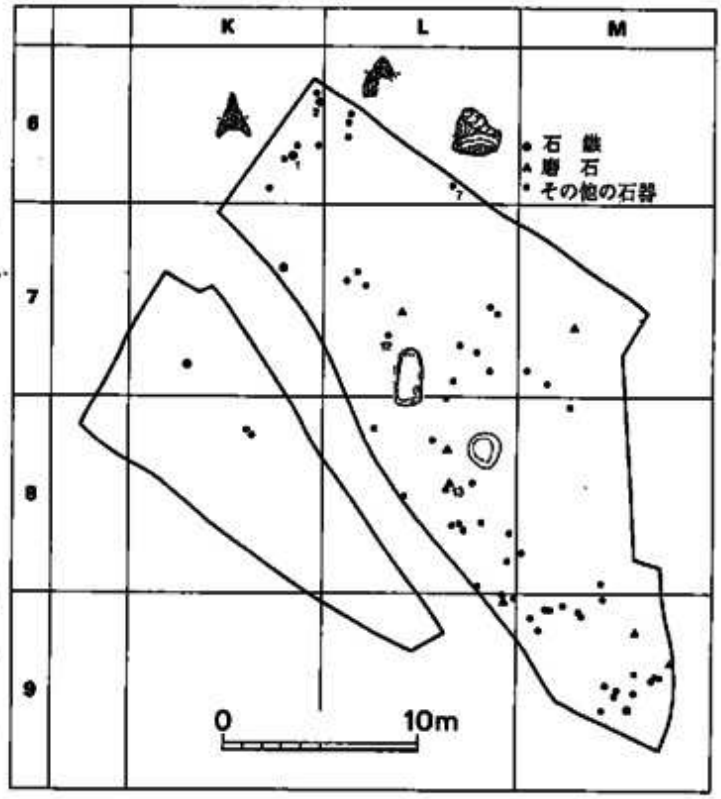
第185図　５層出土押型文土器分布図（1/400）

（4）５層出土の遺物

第185図・第186図は５層出土の土器・石器分布状況である。遺物の分布はＫ・Ｍ８区を除くと２基の石組炉や土坑の位置に拘わらず普遍的である。

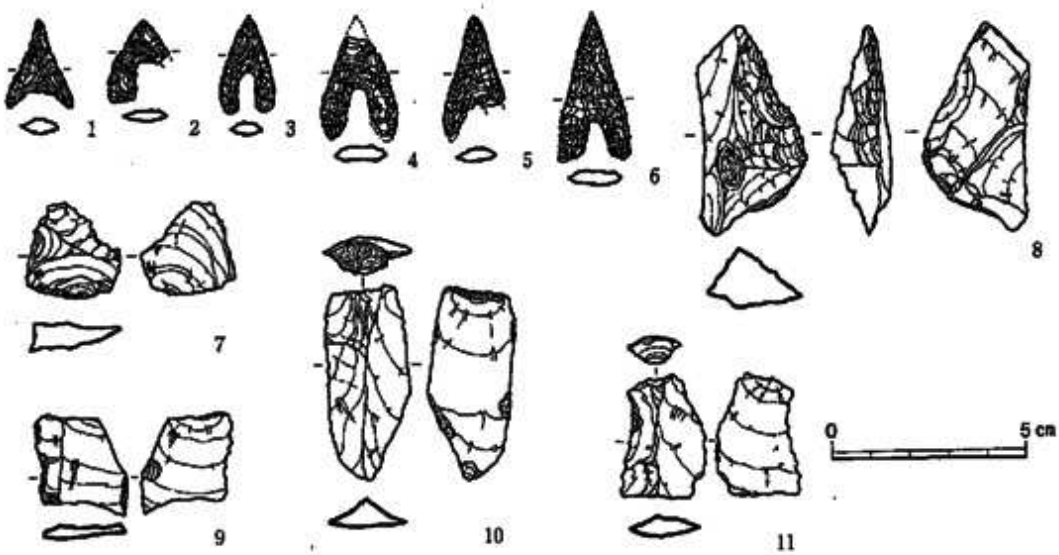
土　器（図版85～88、第135～150図78・82・189・190・237・274・285・286・292・295・296・321・322・332・336・337・341・342・343・350・351）

Ⅲ区の５層出土縄文土器実測図については編集の都合上、まったく同一層であるⅡ区の５層出土縄文土器実測図と共



第186図　５層出土石器分布図（1/400）

に割付・編集したので、そちらを参照していただきたい。概要としてはⅡ区とまったく同様で、78・82・189・190・237・274・285・286・292は弘法原式とされる古手の押型文土器で、78・



第187図　Ⅲ区出土石器実測図１（1/2）

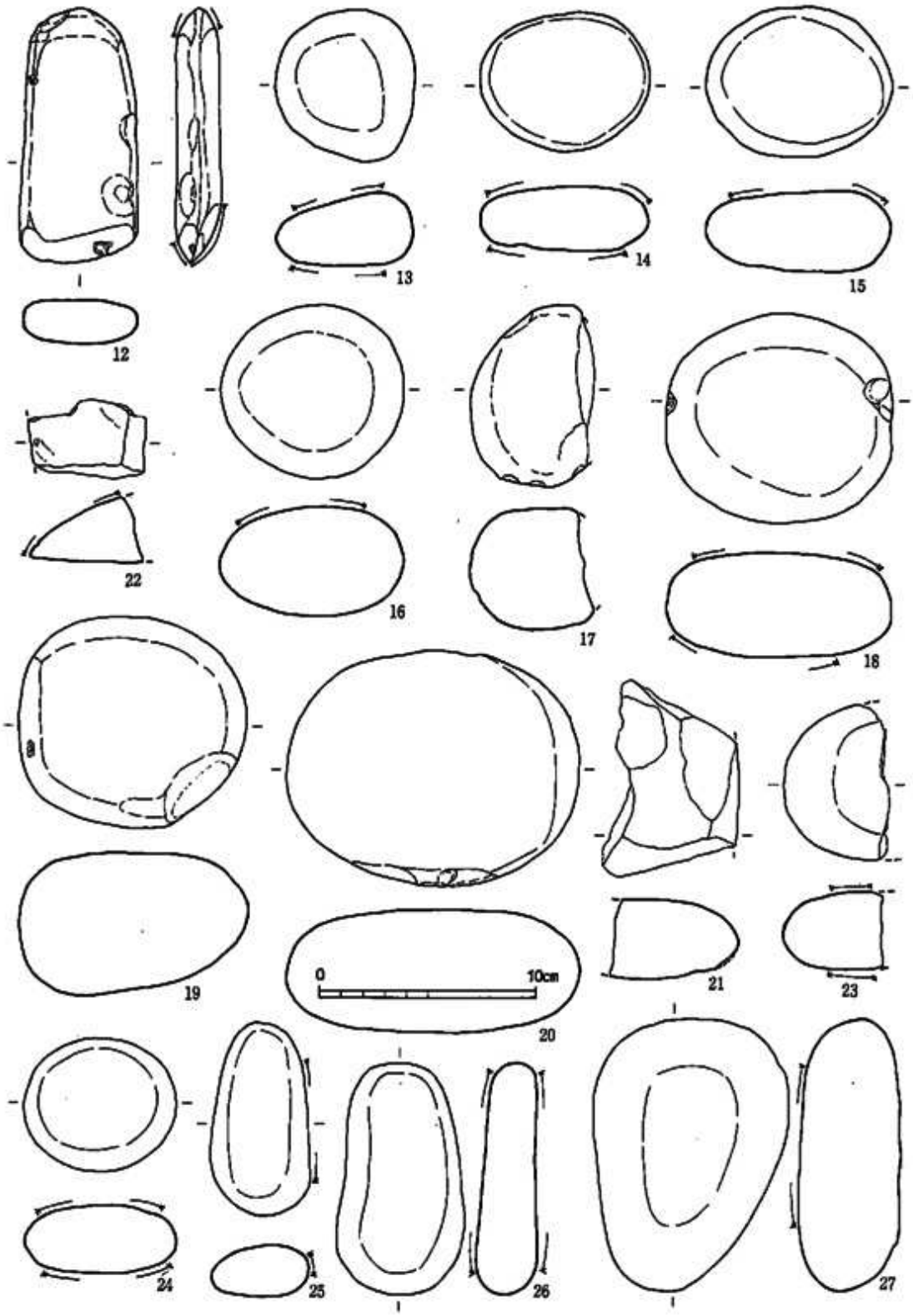
第８表　Ⅲ区５・６層主要石器グリッド別一覧

	K6	K7	L6	L7	L8	L9	M7	M8	M9	合計
石鏃　5層	2	2							1	5
6層				2	2			2		6
スクレパー6層					2				1	3
石斧　5層				1						1
6層									1	1
磨石　5層				1	2	1	1	1	2	8
敲石　6層	1	1		1					4	7
凹石　6層					1				1	2
礫器　6層								2		2

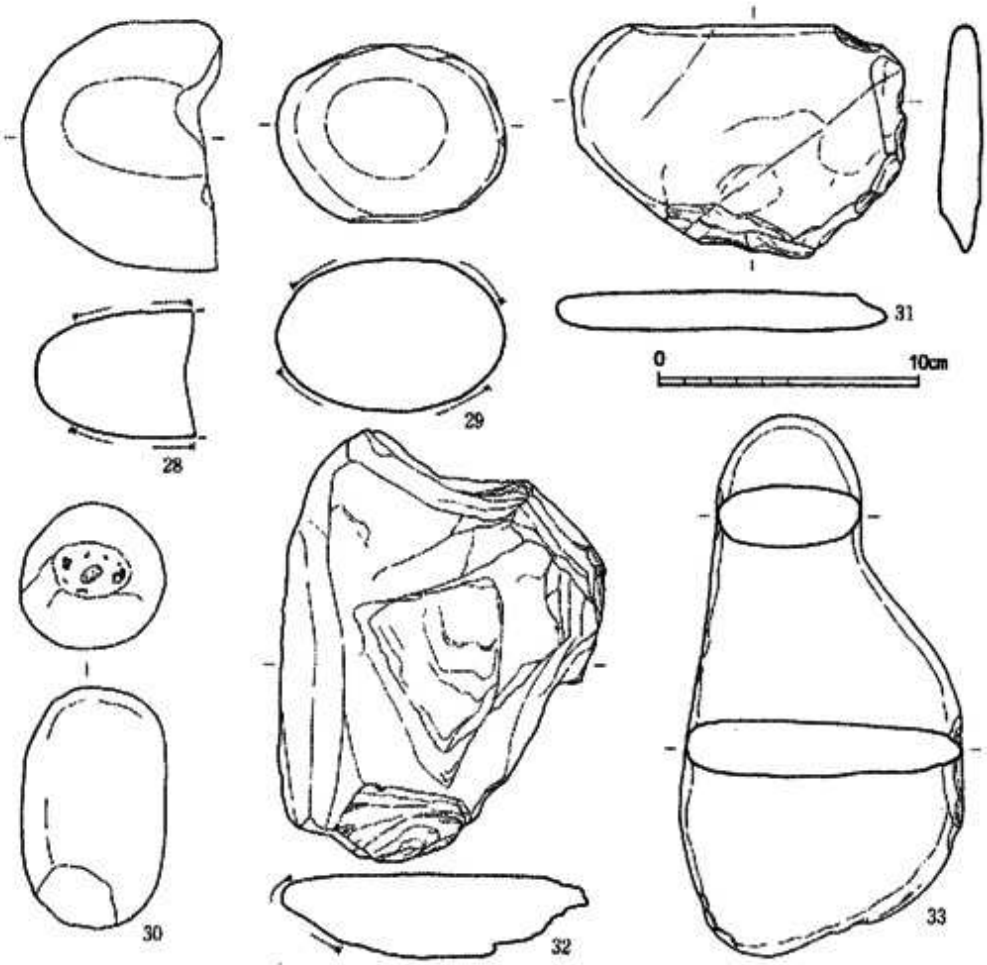
82・189・190は山形文、237は楕円文、274は撚糸文、285・292は条痕文である。295は沈線文、296は２本単位刺突文でいずれも平栫式になろうか。321・322・332・336・337・341・342は田村式とされる比較的新しい段階の押型文土器で、321・322は山形文、332・336・337・341・342は楕円文になる。343・350・351の無文土器は押型文土器に伴うものであるが、弘法原式になるのか田村式になるのかは不明。　（水ノ江）

石　器（図版93、第187図１・２・７、第188・189図13～21）

１・２は石鏃。１は浅い抉りを有す安山岩製の関係品で、両側縁が内弯する。長2.5cm、重さ1.1g。２は幅広で全長の半分以上に達する脚部を有す。７は不定形の剥片の打瘤部に微細



第188図　Ⅲ区出土石器実測図２（1/3）



第189図　Ⅲ区出土石器実測図３（1/3）

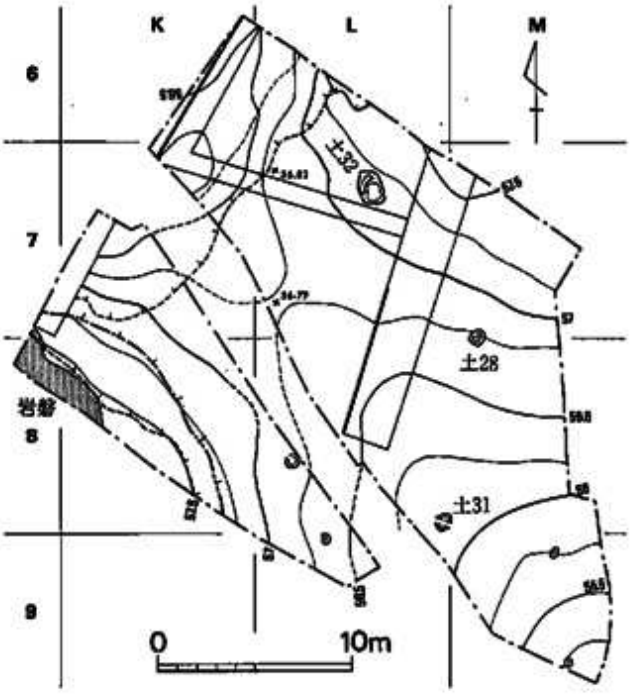
な歯こぼれが観察される。13～21は磨石で、形状は円形（13・16）ないし長円形を呈す。また、断面の厚みが薄いもの（13～15）と、厚いもの（17・19）がある。19・21の上面は平坦に近く磨り減っており、また19は二次的に加熱を受けている。14は長7.8cm、幅6.3cm。厚さ２cm、重さ186.4ｇ。19は長10.5cm、幅9.7cm、厚さ6.6cm、重さ916.5ｇを測る。石材は17が玄武岩、他は輝石安山岩である。

層序の調査風景

5）縄文時代（6層）の遺構と遺物

（1）6層の地形（第190図）

6層はK7－2区からK8－1区にかけての標高57.25m等高線東側にかけて堆積し、その西側では片岩の露頭となる。56.75mの等高線がL7－2区でほぼ接し、西、東に各々傾斜する。西側では50cm下がり、東南方向では1.5m傾斜している。3基の土坑が点在して検出された。



第190図　6層地形実測図（1/400）

（2）土　坑

28号土坑（第184図）

M7－2区の56.75mの等高線上に位置する。不整円形を呈し、北側中位に小さなテラス面を有す。東西0.84m、南北0.86mを測り、中央にやや下がる床面は深さ31cm。埋土は4層あり、1層は暗茶灰色砂質土で、部分的に粘質。2層は暗茶灰色弱粘質土で、わずかに黄茶色粘土を含み、押型文土器の小破片が出土。3層は明茶色砂質土。4層は明茶灰色粘質土。

31号土坑（第191図）

L8－1区に位置する。土坑の中央は排水管により未掘であるが、プランは不整台形である。長辺3.05m、短辺1.96～2.35m、深さ18cmを測る。床面はほぼ平坦で、東側に若干傾斜する。埋土上部から石鏃が出土。

出土遺物

石　器（第187図5）

5は黒曜石製の有茎鏃で、脚端部が屈折する。残長3.4cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ1.4g。

32号土坑（第191図）

L7－3区に位置する。東西方向の不整長方形を呈し、北側下位に傾斜した大きなテラス面

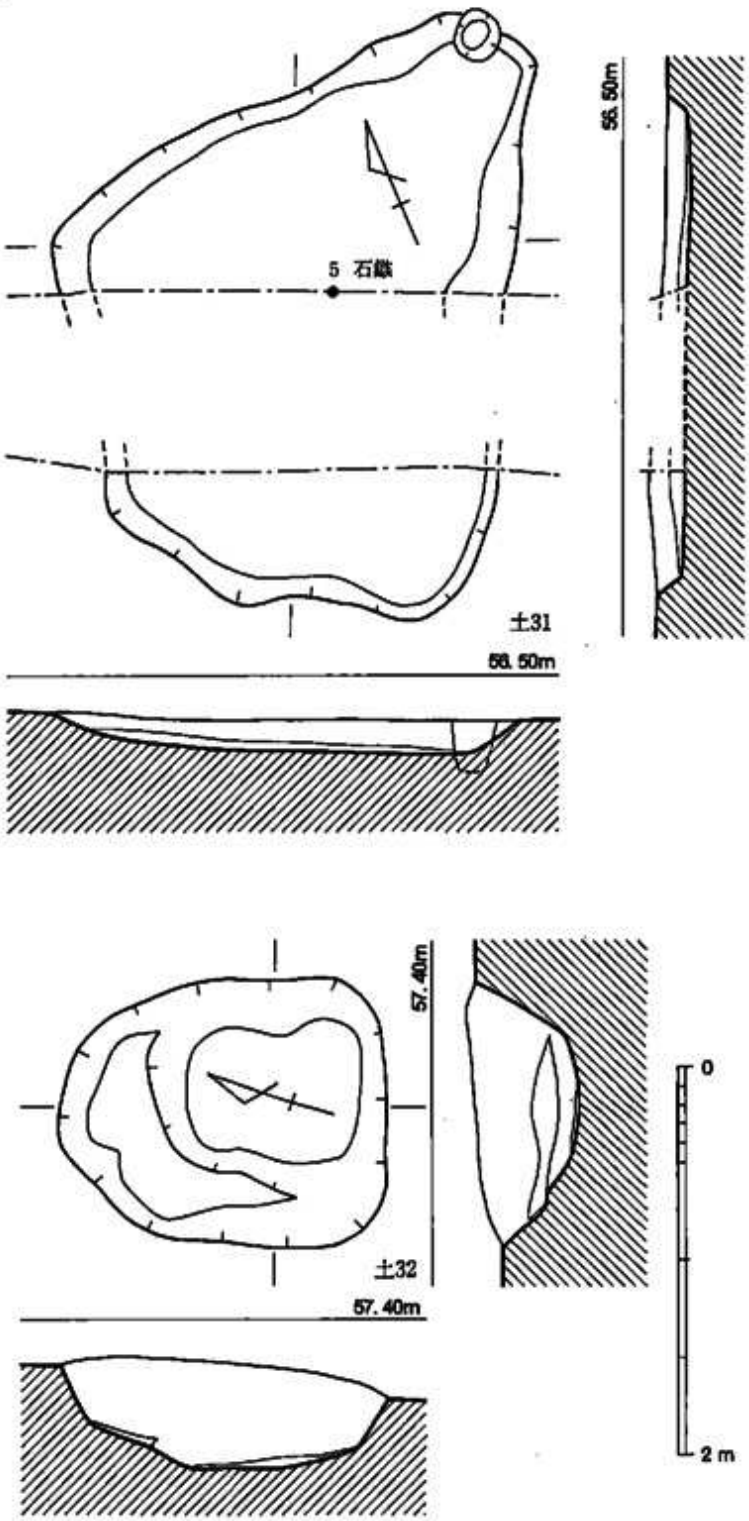
を有す。長径1.68m、短径1.2～1.4m、深さ0.53mを測る。風倒木穴の可能性がある。遺物の出土はない。

（木下）

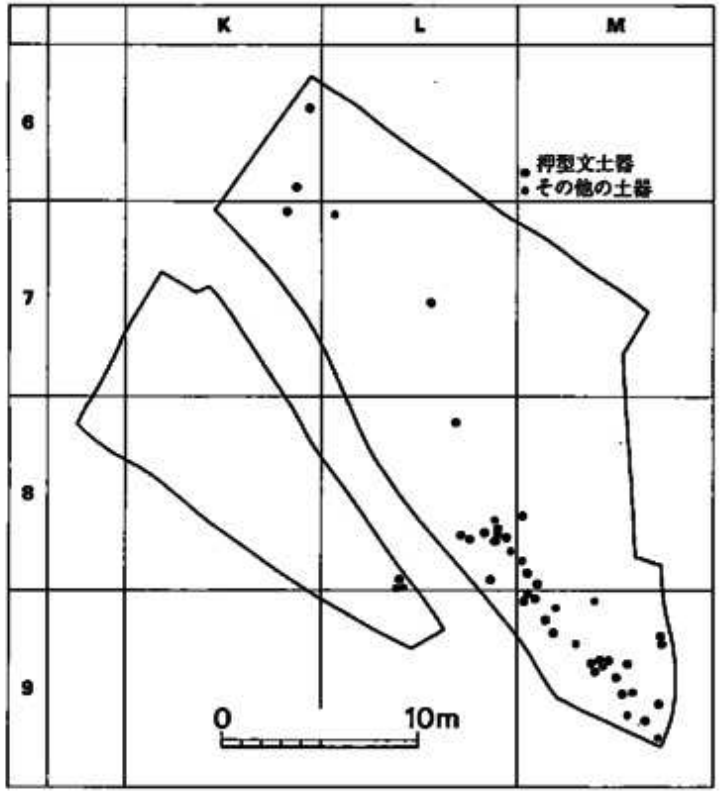
（3）6層出土の遺物

第192図・第193図は6層の土器・石器の出土分布である。押型文土器はL8－1区からM9区に集中部が見られる。一方、石器の分布はL7・8区からM8・9区に拡がる。L8－1区に位置する31号土坑周辺は土器・石器とも集中して出土する。L7区の平坦面に石鏃3点が出土した。また、M9区では多くの剥片や砕片が出土したことは、地層の傾斜に関係するものと考えられる。

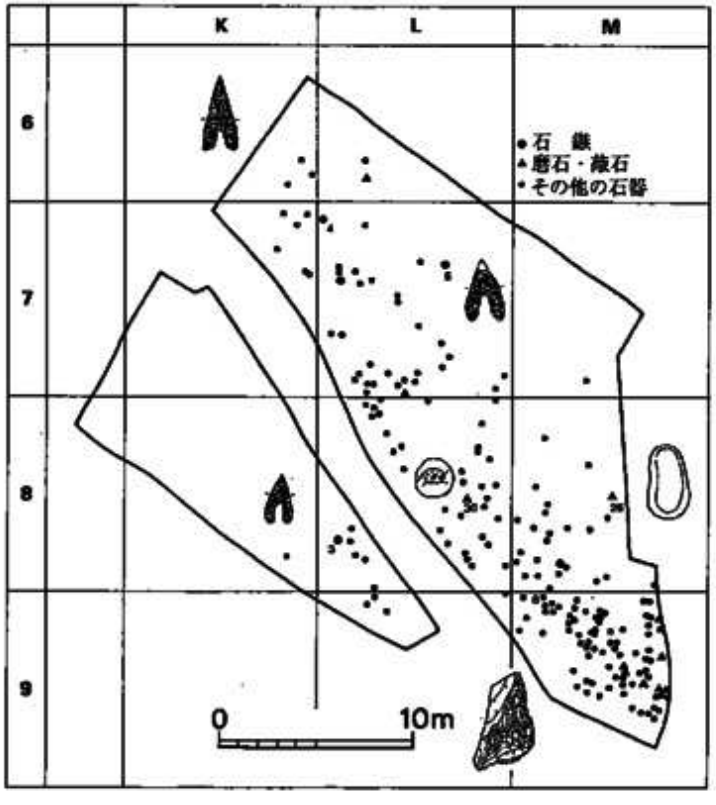
土　器（図版87・88、第153・154図353・354・357・360・365・369～372・374・375・377



第191図　31号・32号土坑実測図（1/40）



第192図　6層出土押型文土器分布図（1/400）



第193図　6層出土石器分布図（1/400）

・379～382)

Ⅲ区の6層出土縄文土器実測図については編集の都合上、まったく同一層であるⅡ区の6層出土縄文土器実測図と共に割付・編集したので、そちらを参照していただきたい。なお、Ⅲ区出土の縄文土器については、番号の前に「3－」を付している。

概要としてはⅡ区とまったく同様で、353・354・357・360・365・369・370は弘法原式とされる古手の押型文土器で、353・354・357は山形文、360は格子目文、369・370は楕円文、371は撚糸文である。 (水ノ江)

石　器（図版93、第187～189図3～6・8～11・23～28・30～32）

3～6は石鏃。いずれも長脚で、3は鍬形鏃。5・6は有歯鏃で、5は31号土坑出土。8・9は削器。8は部厚な剥片の一縁に調整を加え、刃部とする。安山岩製で、長さ5.3cm。9は縦長剥片の一縁にノッチ状の刃部がある。10・11は縦長の剥片で、10は自然面を打面とする。23～28は磨石で、形状は長円形（23・24・28)、棒状（25・26)、不整形（27）を呈す。特に25・26の棒状磨石は5層では出土を見ない。なお、25は下端部に敲痕がある。24の長7cm、幅6.1cm、厚さ3.1cm、重さ186.4g。25は長8.9cm、幅4.5cm、厚さ2.4cm、重さ134.5g。30は断面円形の輝石安山岩製の敲石。上下両端の平坦面に敲痕が明瞭に残る。重さ381.5g。31は白雲母石英片岩製の礫器。2辺に荒い打ち欠きが見られる。重さ272g。32も白雲母石英片岩製の礫器で31に比べて分厚い。 (木下)

6）その他の遺物

5・6層以外から出土した縄文時代の遺物である。

土　器（図版88、第172図388・389・391、第176図456、第177図484、第178図501）

Ⅲ区の5・6層以外から出土した縄文土器実測図については編集の都合上、Ⅱ区の5・6層以外（包含層）出土縄文土器実測図と共に割付・編集したので、そちらを参照していただきたい。なお、Ⅲ区出土の縄文土器については、番号の前に「3－」を付している。

概要としてはⅡ区とまったく同様で、388・389・391後期前葉の、456は晩期前葉の縄文土器である。484は山形文でも弘法原式に相当する押型文土器、501は楕円文でも田村式に相当する押型文土器である。 (水ノ江)

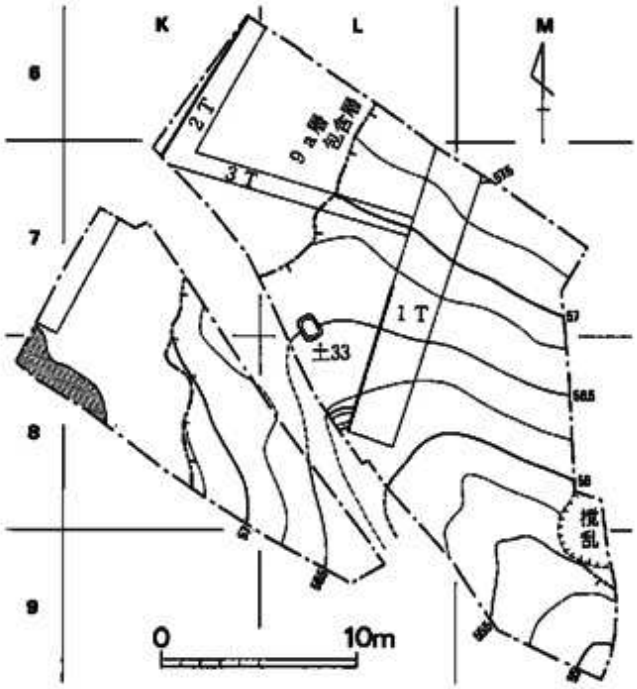
石　器(図版93、第188・189図22・29)

22は4層出土の安山岩系磨石で、断面が蒲鉾状を呈す。特に上面は磨痕が著しい。29も磨石で、重さ442.6gを測り、輝石安山岩製。

7）旧石器時代の遺構と遺物

（1）9a層の遺構と遺物

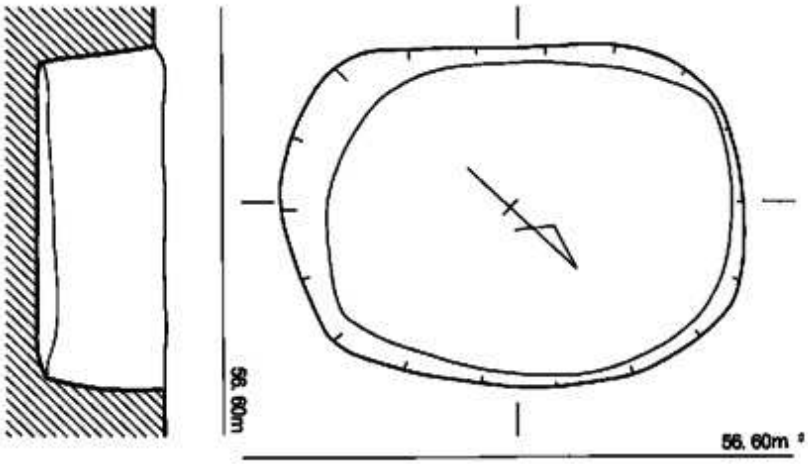
第194図は9a層の地形図である。調査区の西側L6～K8区にかけて土層の堆積は見られず、57.5m～55mの等高線が調査区を巡る。遺構は土坑1基が中央部から検出されたのみである。



第194図　9a層地形実測図（1/400）

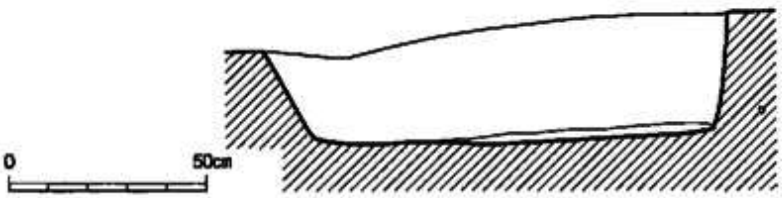
33号土坑（第195図）

L7－2区に位置し、標高56.5mの等高線上に検出された。長円形を呈し、壁は直に近く立ち上がる。床面は平坦だが、東側に若干傾斜する。長径1.18m、短径0.88m、深さは東側に浅く20cm、西側30cmを測る。壙内より安山岩製の小剥片が出土。埋土は9a層の単一層である。　（木下）



遺物の出土状態（第196図）

遺物は地形にそって、北西から南東にかけてやや散漫な分布をしめす。このような傾向は谷部に向かって包含層が落ちていく10a層まで続いており、斜面による包含



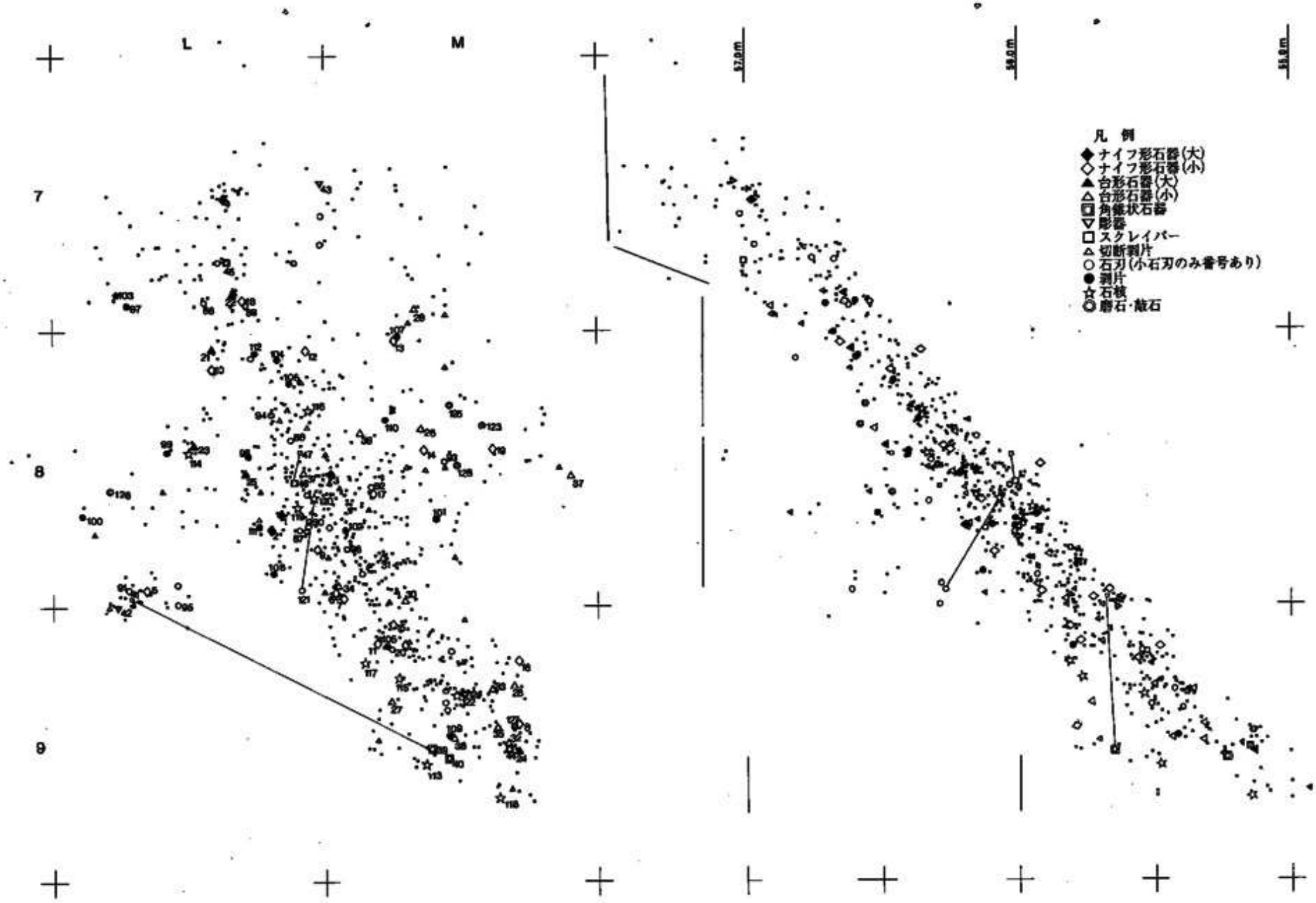
第195図　33号土坑実測図（1/20）

層の残り具合いも考慮した場合、これらをブロックとして認定するには躊躇する。また、各層における石器群の器種構成を見ても時期的分離は容易ではなく、出土石器群の一括性の認定にはさらなる手続きを必要している。そのような事情を前提として敢えて9a層の主要石器について見てみると、原の辻型台形石器を主体とする黒曜石製台形石器の一群は、平面的にも垂直的にもまとまりをもつ。一方、石刃・剥片を切断などして素材獲得に共通点をもつ小型ナイフ形石器や小型台形石器は、南東斜面側においてまとまっている。

石　器（図版94・95、第197～205図）

ナイフ形石器（1～20）　1は底面を持ち背部加工があるが、背面に翼状剥片の剥離痕跡はなく「国府型」とは認め難い。2は「ノ」字剥片を素材とする今峠型ナイフ形石器である。打面部から背面へにかけてと、左側縁部にかけて二次加工をしている。3も今峠型ナイフ形石器で左側縁部を大きく整形加工している。針尾産系黒曜石使用。4は石刃素材のナイフ形石器で打面側を先端部に設定している。先端はわずかに欠損し、樋状剥離が入る。5～7は小型の石刃を素材とした二縁側加工のナイフ形石器である。6には「稜上」調整が入る。7は打面をわずかに残す。8はやや幅広で厚みがあるものを素材としている。9は小型石刃を素材とし、先端にポジ面を取り込みながら素材端部と打面部から両側縁を整形加工する。10・11もおそらく小型石刃を素材としているのであろう。12は厚みのある幅広剥片を素材とする。13・14は素材の厚みは違うがどちらも小型石刃を切断し、素材ポジ面を先端に取り入れながら二次加工を行う。15は下段切断面にも加工を施している。16は基部から側縁部にかけて加工をおこなっており、打面は残っていない。17は横長剥片の厚みを残す端部付近を二次加工している。18は不定形な幅広剥片打面部を除去している。19は小型石刃を素材としている。20は切断剥片を素材とし、刃部と反対の側縁を加工している。刃こぼれは切断面にも及ぶ。

台形石器（21～38）　21～23は原の辻型台形石器である。右側縁にある幅広剥片の打面部を背面側から除去し、その剥離面を打面として、背面に平坦ぎみの調整を行う。左側縁は素材腹面側からの剥離によって大きく抉りを入れて加工をする。21は典型なタイプで左側の抉りが大きく肩を持つ。これらの原の辻型台形石器に対応する素材剥片は100や101である。24は厚い剥片の両側縁を急角度の剥離によって整形加工を施し、端部を刃部としている。25～27は切断した剥片の打面部を腹面から除去している。28・29は石刃状の剥片の中間部を素材としている。30は背面に礫面を残し、打面部側から加工を施す。31は打面を切断し、端部の側縁のみ加工を施す。32・33は石刃状の剥片を素材として打面側には切断面を残し、片側の切断面のみ加工する。34は貝殻状の幅広剥片を素材とし打面部と端部を加工する。35は素材端部のみ加工している。36は剥片の中間部を素材としている。だが、わずかな調整加工が素材剥離以前か、以後かはかなり微妙である。37は切断のみだが、素材の形状をかなり意識して刃部を側縁にのみ残す。



第196図　9 a 層出土石器分布図 (1/200)

38は切断剥片の端部を素材としているが、切断面については加工せず、そこを打面として背面に平坦剥離を行っている。

角錐状石器（39～41）　39は先端部から胴部を大きく欠損する。また腹面には大きく素材面を残す。背面に素材面を残すことから厚い板状の素材が考えられる。この角錐状石器には、41の底面を持つ調整剥片が接合する。40は厚い不定形の剥片を素材とし、尖頭部の作出が入念でない。むしろ小型ナイフ形石器として分類したほうが良いのかもしれない。

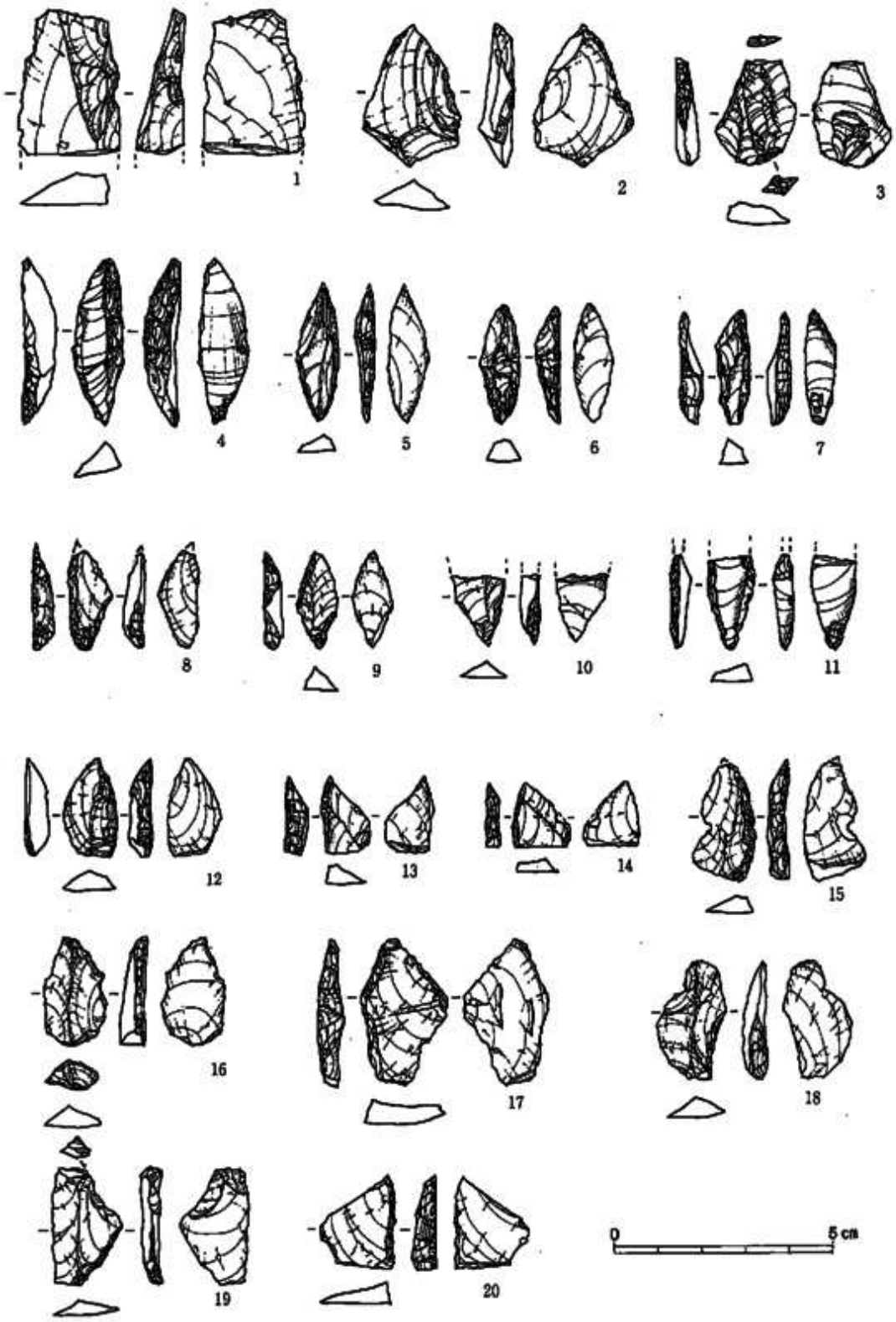
彫器（42・43）　42は認定に躊躇するが、剥片下端を切断したのち、側縁部からファシットが入る。43は厚い剥片の打点部付近を意図的に両縁より剥離を行っているが、樋状剥離ではない。石核ブランクの可能性も考えられる。

スクレイパー（44～47）　44は端部付近に刃部加工を施す。また背面に大きく伸びる数条の稜から小型石核を転用した可能性もある。45は交互剥離を行ったサヌカイト製の剥片石核を転用している。端部に刃部加工を施す。46・47は接合する。石核ポジ面を取り込んだ縦長剥片の側縁部に刃部がある。使用後の分割である。また、この剥片に対応する石核は接合しないが113である。

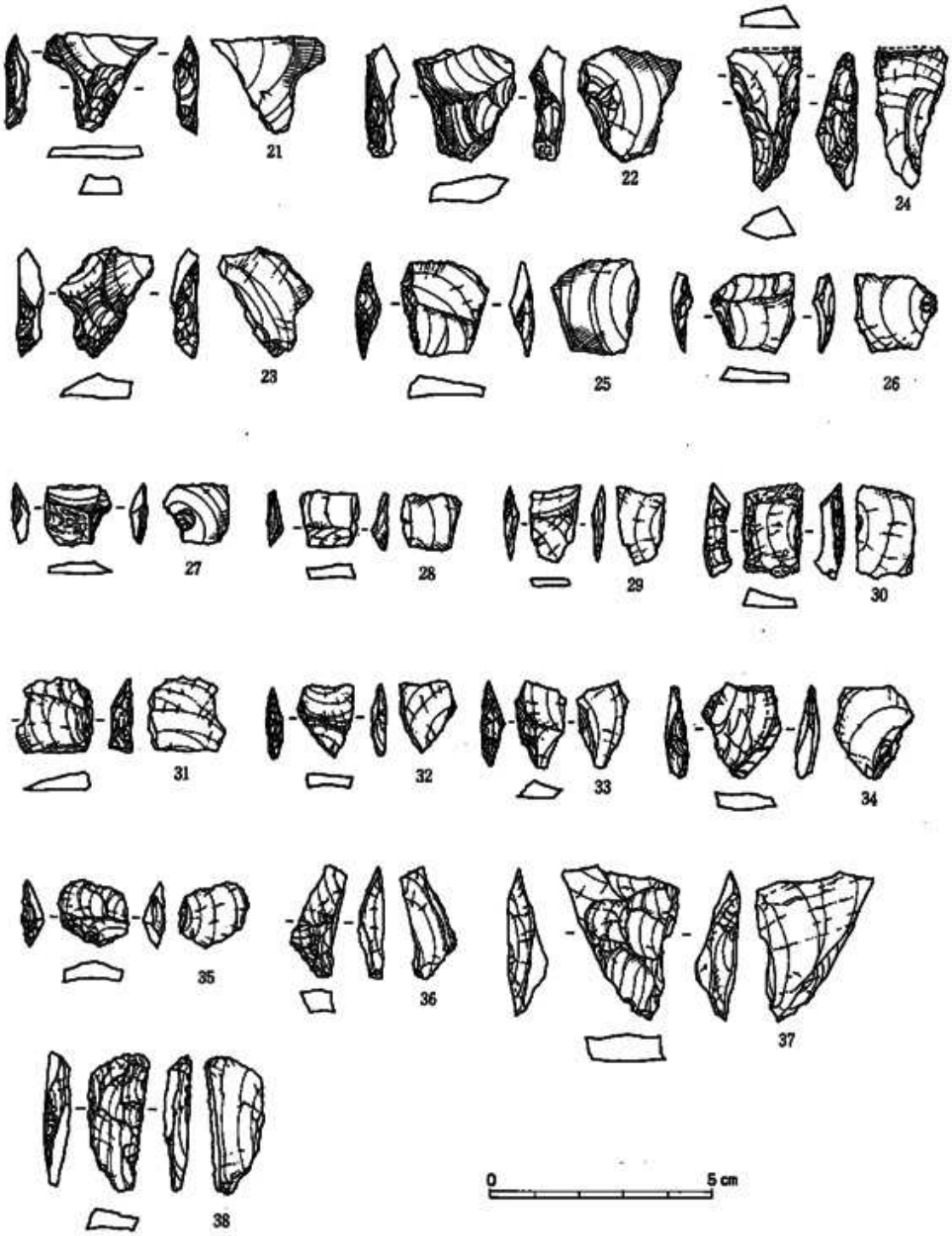
「切断」剥片（48～76）　本層からはかなりのまとまりをもって、切断面を持つ剥片が出土している。これらが、人為的な切断によるものか、製作時の折れなのかは現時点では判断できない。ここでは「切断」剥片として報告する。48～55は胴部以下を欠く上部資料で51を除けば、概ね石刃素材である。切断面も背腹両面からの力により剥離されている。55～69は胴部片で、概ね石刃を素材としている。中には、66・67のようにかなり厚いものもある。また、68・69のように胴部が細く折りとられているものもある。70～76は下部片である。素材の形状は概ね、上部、中間部と同じである。70は三分割にされた可能性があるが、その他は２分割にされた下部片とみられる。

石刃・石刃状剥片（77～96）　77～85の大型の一群と86～96の小型の一群という、大小２つのグループに分けられる。85は頁岩を使用し、背面にポジ面を取り込むかたちで剥離されている。比較的薄手のものが多いが、81や89のように大きさに対し、かなり厚いものもある。これらは、表皮を残し、小口から剥ぎとられたものである。また、背面には１～２条の稜をもつ。打面調整については、ほとんどが無調整と考えられるが、なかには80のようにわずかに行うものもある。

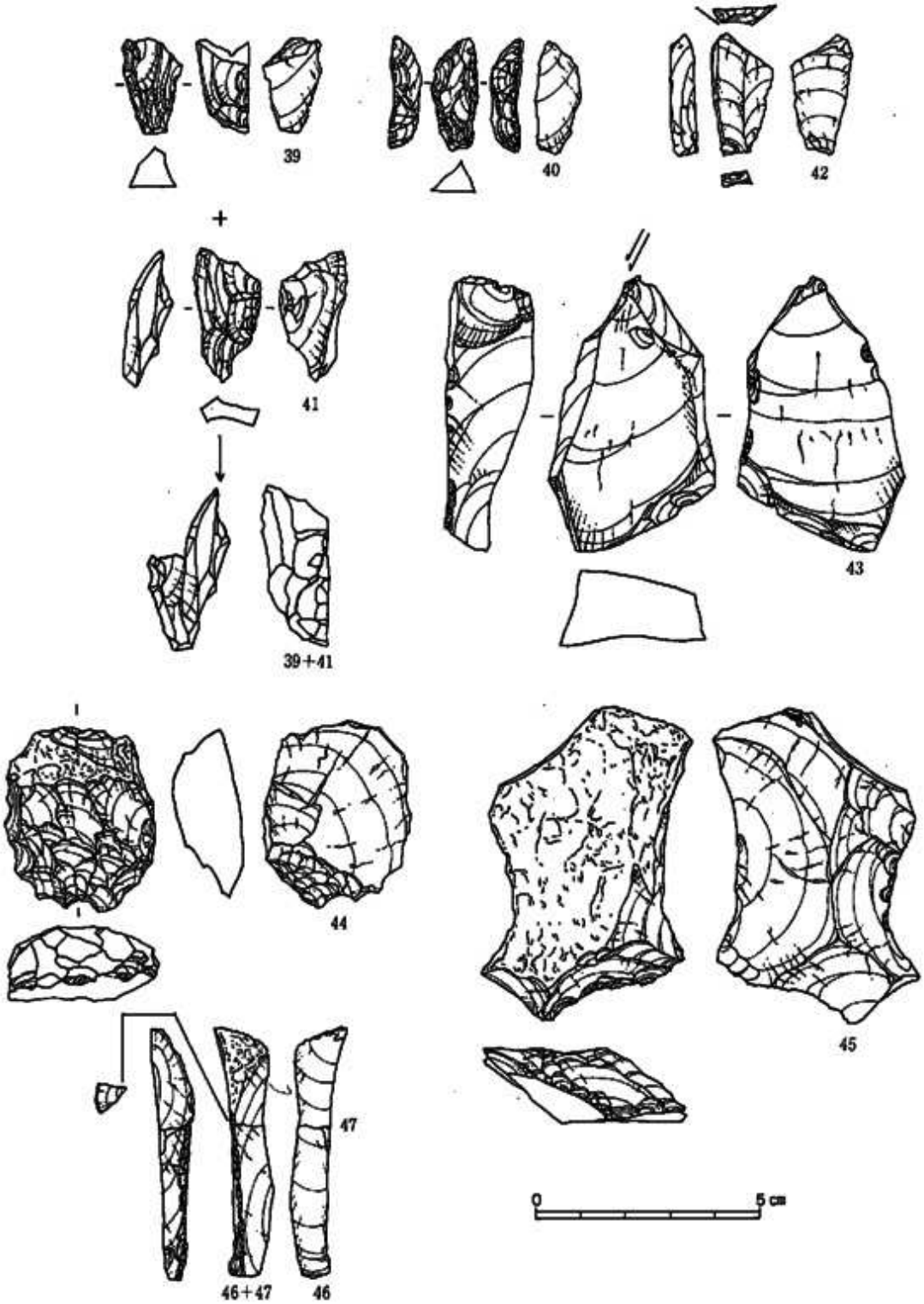
剥片（97～112）　97・98の背面の観察から、無調整の平坦打面を軸がずれるように加撃した剥離技術の存在がわかる。今峠型ナイフ形石器製作に関わるものであろう。99は、打面転移を行いながら山形の稜を加撃し剥離された剥片の一つである。100・101は背面から側縁端部にポジ面を取り込んだ幅広剥片で原の辻型台形石器の素材となるものであろう。102～104の背面の観察により、求心状に交互剥離を行う技術の存在が判る。これらの剥片は、いずれも風化が



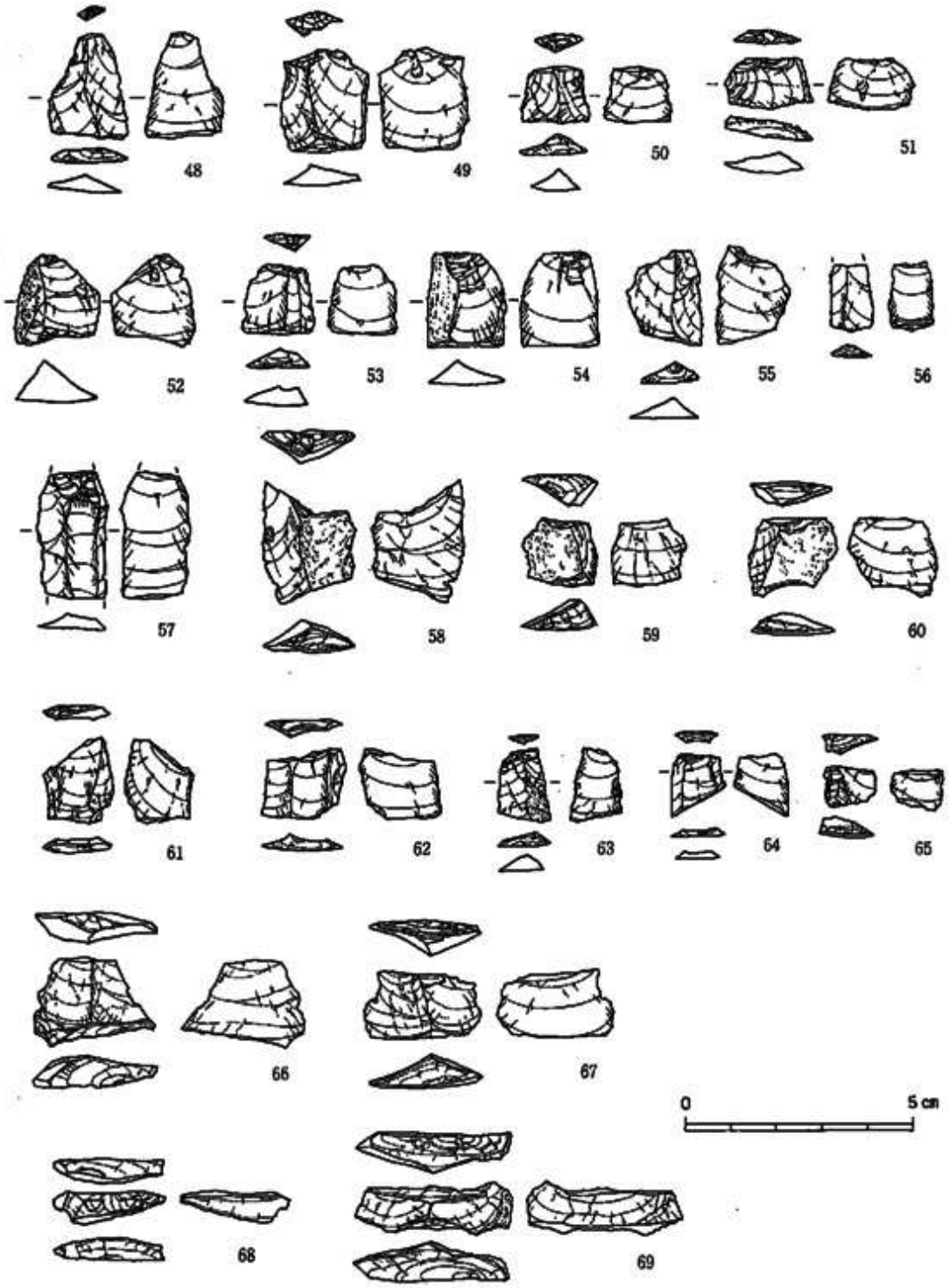
第197図　9 a 層出土石器実測図 1 (2/3)



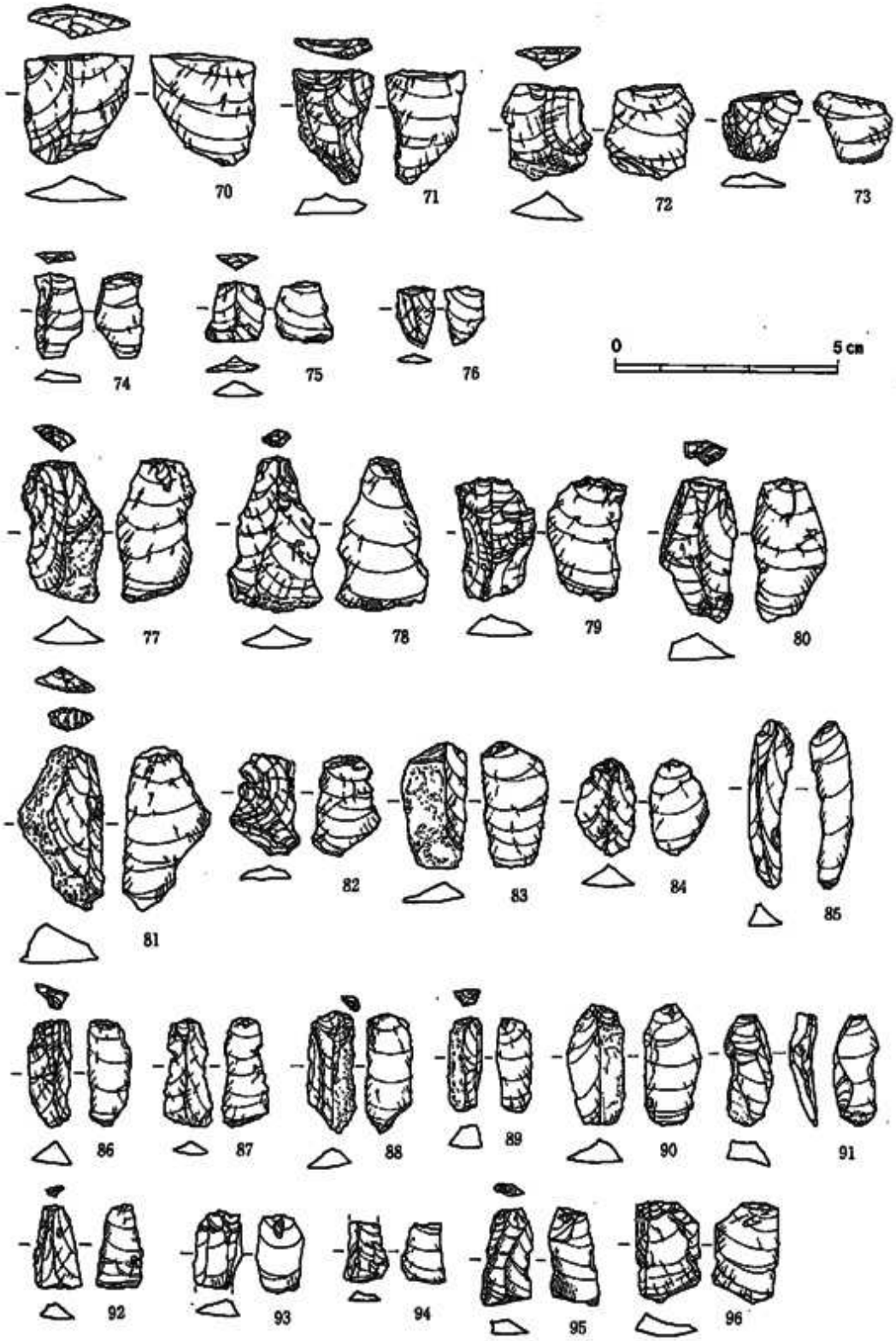
第196図　9 a 層出土石器実測図 2 (2/3)



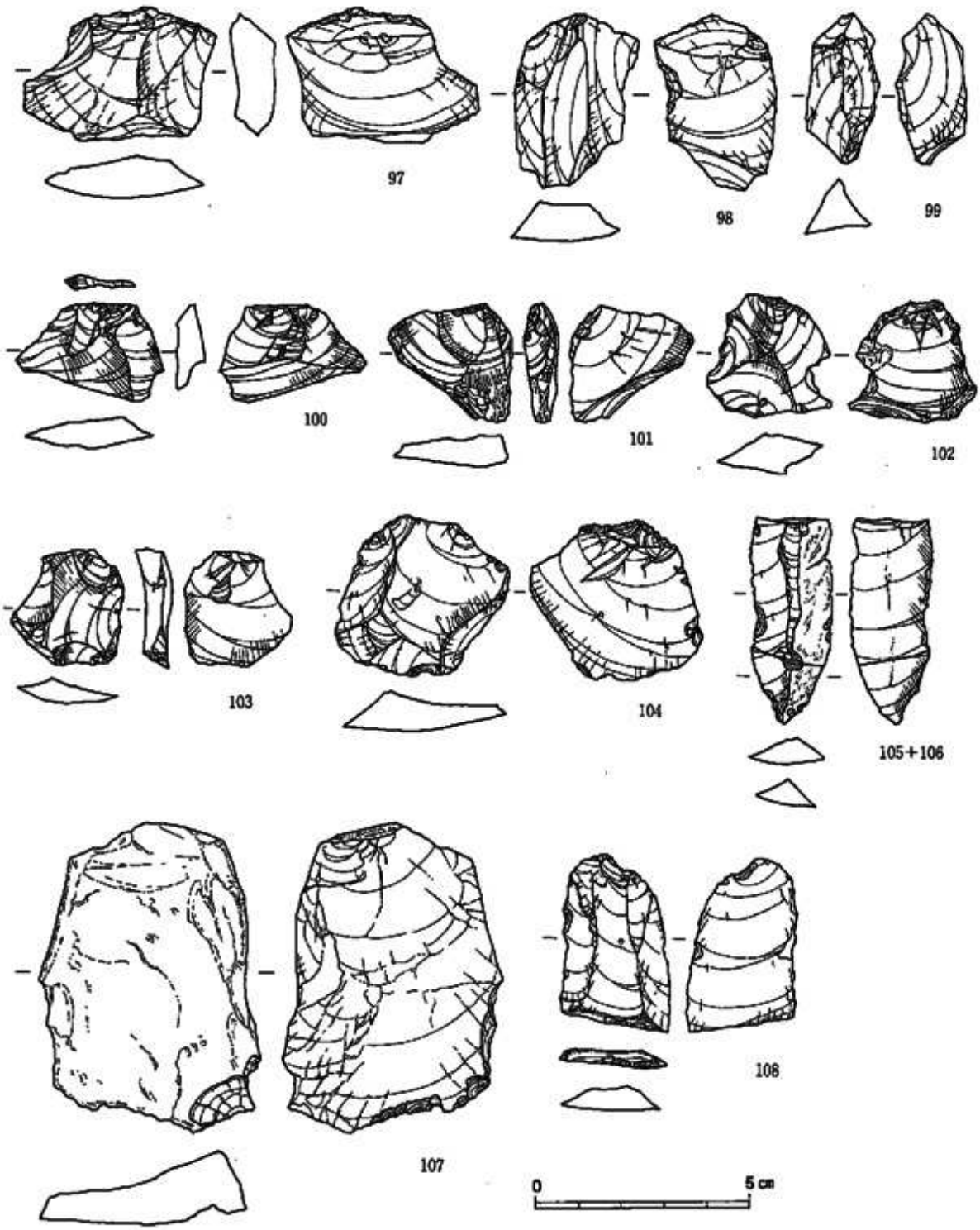
第199図　9 a層出土石器実測図3 (2/3)



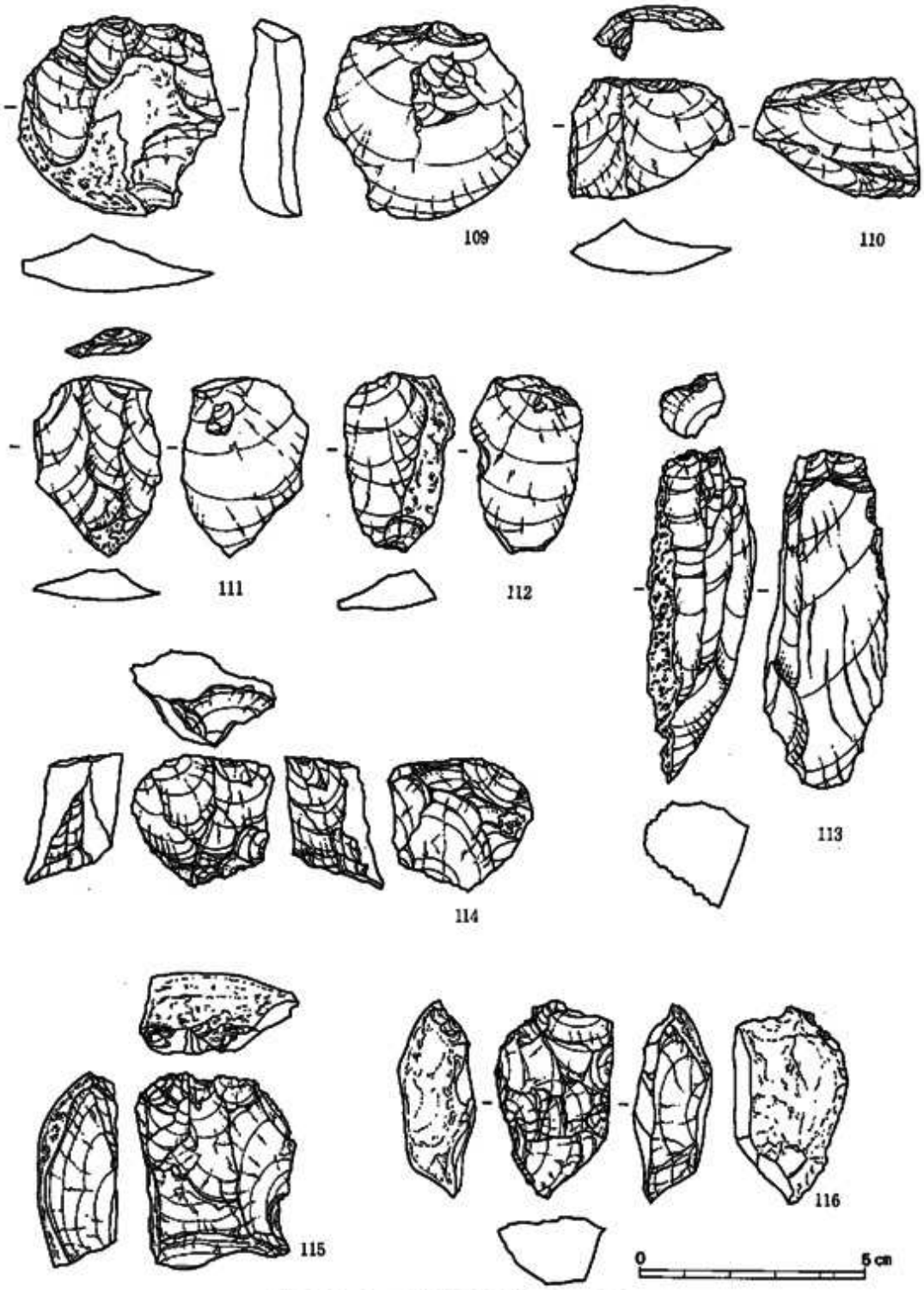
第200図　9 a 層出土石器実測図 4 (2/3)



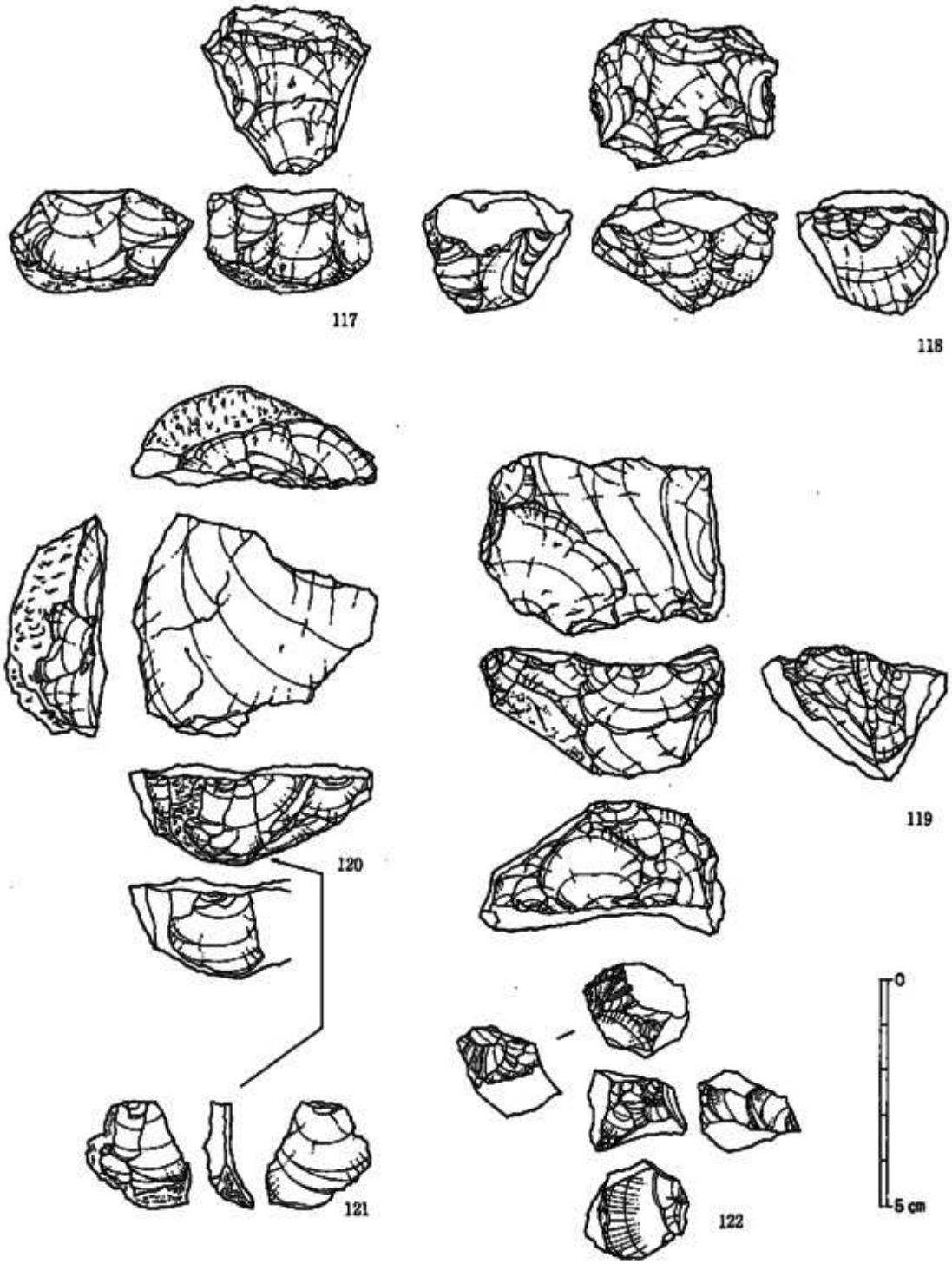
第201図　9ａ層出土石器実測図５（2/3）



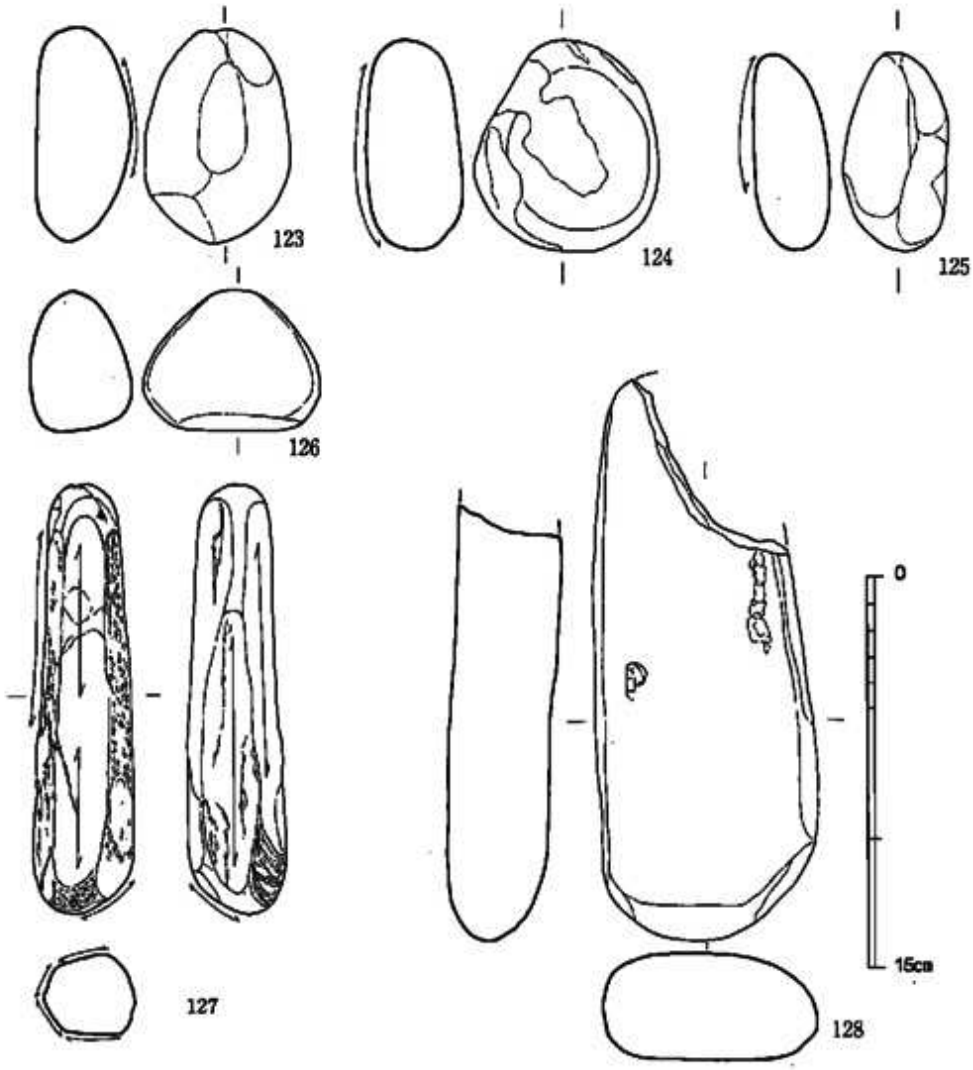
第202図　9 a 層出土石器実測図 6 (2/3)



第203図　9 a 層出土石器実測図 7 (2/3)



第204図　9 a 層出土石器実測図 8 (2/3)



第205図　9 a 層出土石器実測図 9 (1/3)

すすんでいる。104の打面調整は入念である。105・106は石刃の切断剥片である。頭部を含め3分割されたのであろう。107は流文岩製でほかに同じ石材はなく、搬入品であろう。108は切断面端部に微細剥離が連続的に残る。109は平面円状でやや厚みのある剥片で背面には数枚の剥離面があり、石核として使用された可能性もある。110はかなり厚みを持った寸づまりの剥片である。111は風化がすすむ。112の打面は、無調整である。

石核（113～122）　113は分割した厚い大型のサヌカイト剥片の一端に打面を設定し、素材にポジ面を取り入れるかたちで小口より剥片剥離を行っている。打面調整はない。114は剥片石核で、113と同じく単設の無調整打面の小口から剥片を剥離する。115は分割礫片を素材とし

て小口より剥片剥離をおこなっている。角度のある礫打面である。設定作業面幅が広いためか、数枚の剥離面が一面に観察できる。116も一面に作業面を設定しているが、剥離作業は求心状にめぐる。側面の分割面は115とかわらない。117は分割面を打面に、側面を作業面とし、周辺をめぐるかたちで剥片剥離作業を行っている。打面調整はない。118も分割面を打面として作業面が周囲に回る。ただし、こちらは入念な打面調整をおこなっている。119は分割剥離面を打面とし、無調整打面より剥片剥離を行っている。一応剥片剥離は全周に及ぶが、一部の作業面には細かい剥離を集中しておこなっている。120も分割面を打面としている。打面調整はない。121の幅広剥片が接合する。122は黒曜石製で分割面を打面に設定し、細石刃剥離を行っている。また、打面を縦横に転移している。

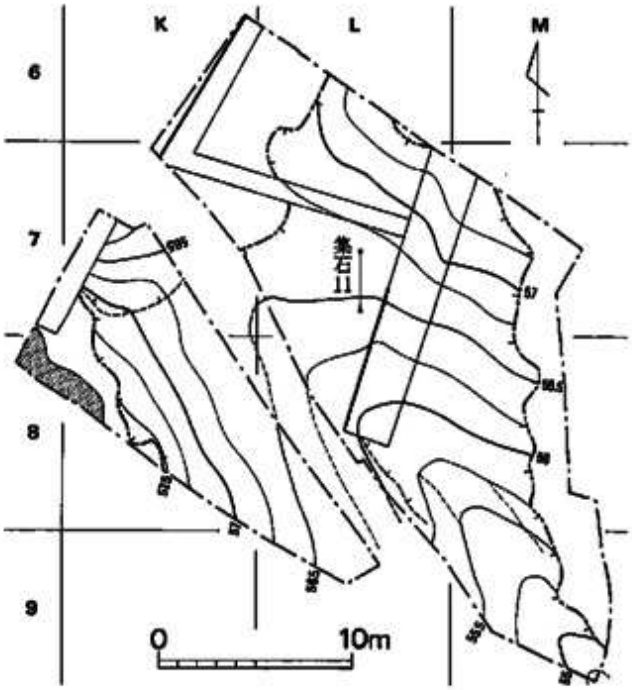
磨石・敲石（123～128）　123～126は径４～５cm程度に収まる磨石である。それぞれ、片面あるいは両面に磨面が観察される。127は、丸柱状の敲石で下端部を中心に敲打痕が観察できる。128は磨石などに関わるものであろうが、明確な使用痕は観察できない。　（杉原）

（２）９ｂ層の遺構と遺物

９ｂ層は９ａ層に比べＫ７区に堆積状態が拡大し、標高57.5mが巡るが、この土層は調査区東側全体には拡がらない。55m～56.5mの等高線は９ａ層より幅が狭くなり、谷状を呈するようになる。また、56.75mの等高線は北と南に分離されＬ７区に小さな平坦部を持ち、11号集石が検出された。

11号集石（図版80―(2)、第207図）

Ｌ７－１区の９ｂ層上面に検出された。南北３ｍ、東西2.2mの緑泥片岩、河原石による集石で、南北２ヵ所に集中部分がある。特に南側の集中部は40×50cmの範囲に30石が纏まり、厚さ２～４cm、10cm台の大きさの扁平な石材で２段組の平坦な床石状となる。一部の石材が焼成を受けているだけで、焼土、炭等は認められない。

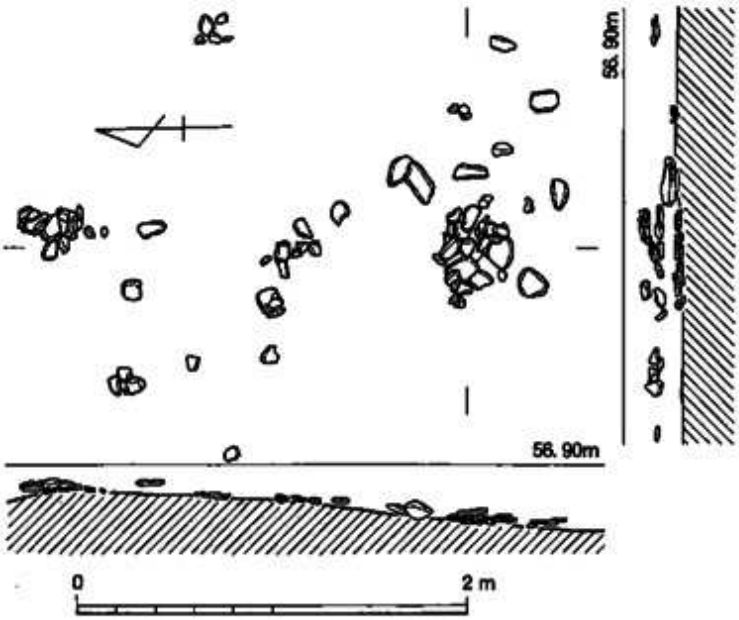


第206図　９ｂ層地形実測図（1/400）

遺物の出土状態（第208図）

遺物の分布は、9a層と同じく、南東斜面谷部に向かって落ちている。遺物の出土量もほかの層に比べ少ない。遺物の垂直分布も谷地形にそっているが、大きくはない。

(木下)



第207図　11号集石遺構実測図（1/40）

石　器（図版96、第209・210図）

ナイフ形石器（129～135）　129は右側縁に急角度で粗い側縁加工を行い仕上げている。黒曜石製で、風化が著しく熊本県象ヶ鼻D遺跡で使用される黒曜石に酷似する。130は、背面に石核ポジ面を取り込んだ小石刃を素材とし、両側縁の二次加工によって打点部を除去している。131は、寸づまり剥片の端部に二次加工を行っている。132・133はポジ面を取り込む剥片を切断し、その端部片を素材としている。134は131と同様の寸詰まり剥片を素材としている。135は上部を欠損。

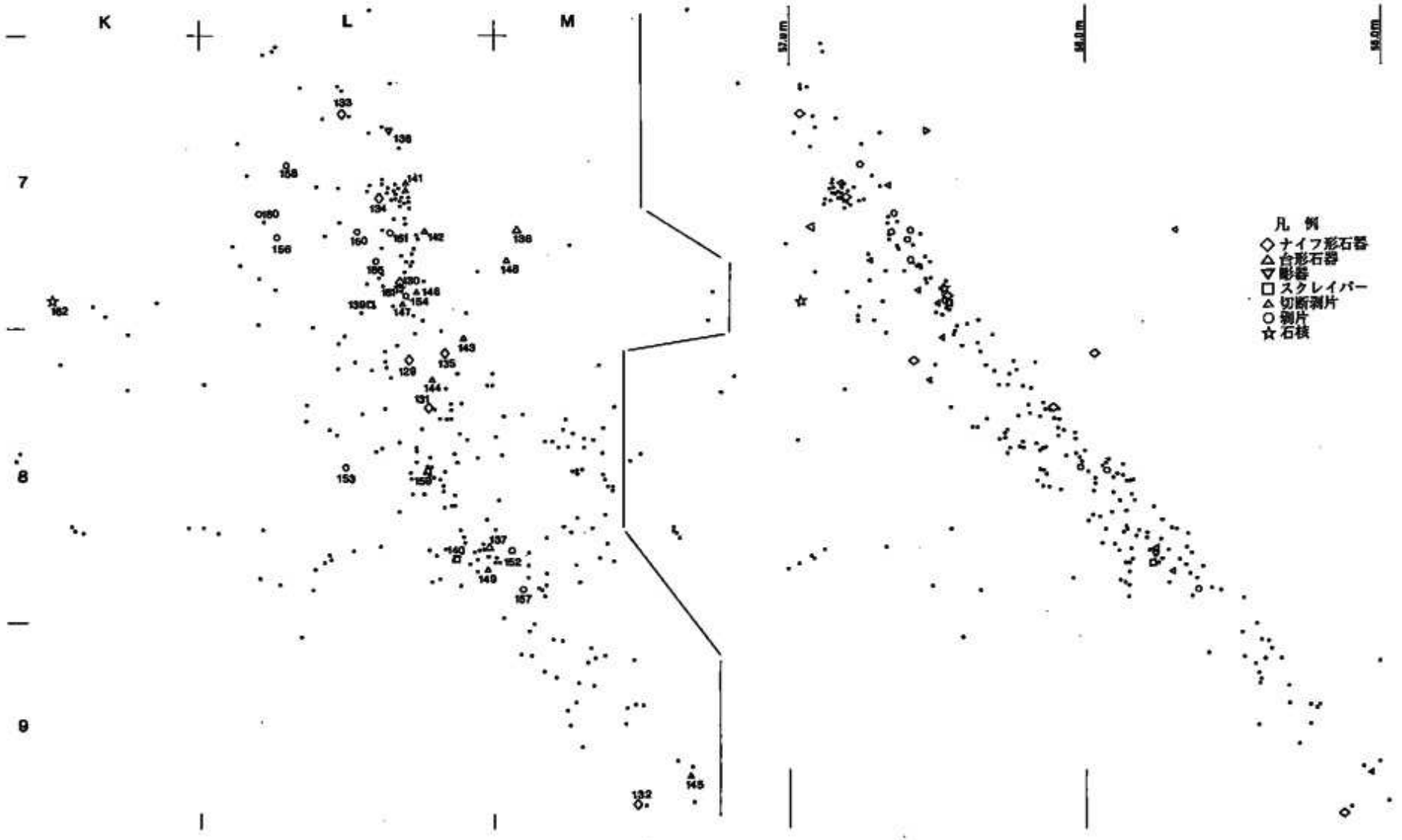
台形石器（136・137）　136・137ともに剥片の端部に二次加工を行い、切断面についてはそのまま残している。136は端部の形状を利用し二次加工をおこない、平面形はバチ状気味になる。

彫器（138）　左側打点部と端部よりファシットが入る。端部には二次加工を行う。

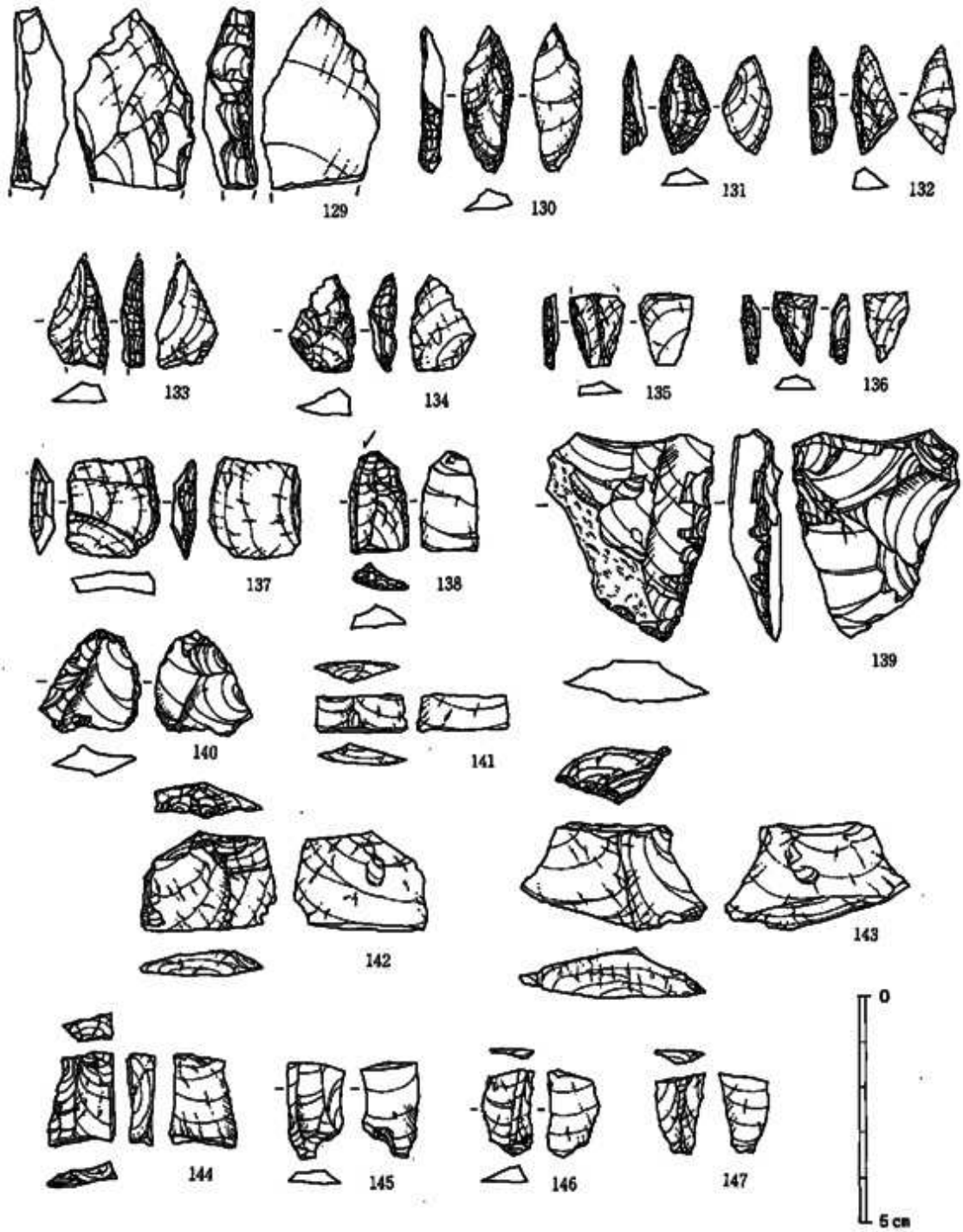
スクレイパー（139・140）　139は右側縁から端部かけて刃部加工をする。140は剥片の側縁部に大きくノッチ気味に刃部加工を行う。

剥片（141～160）　141～147は切断面のある剥片である。141は上下両端を切断しているが、その他は、どちらか端部だけである。142と143は腹面から力を加えて切断している。148～150は剥片端部に丸みを持つ。151～160は小石刃だが、特に153～155は背面に石核ポジ面を取り入れ、少し厚いが、比較的整った剥片である。

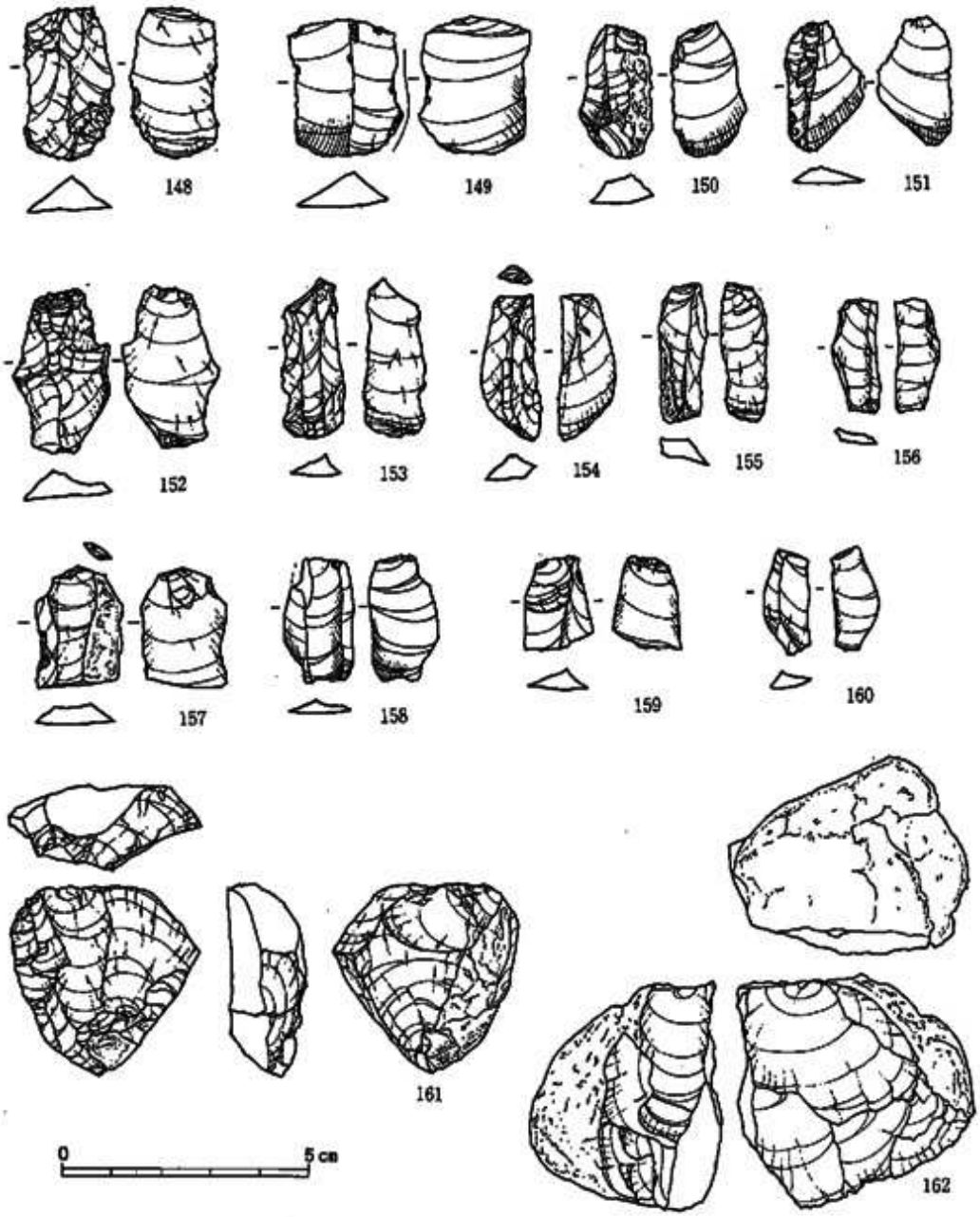
石　核（161・162）　161は厚く広い剥片の剥離面を作業面に設定し、ポジ面を取り込む形で小石刃を剥離している。打面調整は行わない。161は、大型の分割剥片の側面から小口へ作業面を移動し剥離を行っている。打面調整は積極的ではない。　(杉原)



第208図　9ｂ層出土石器分布図（1/200）



第209図　9ｂ層出土石器実測図１（2/3）



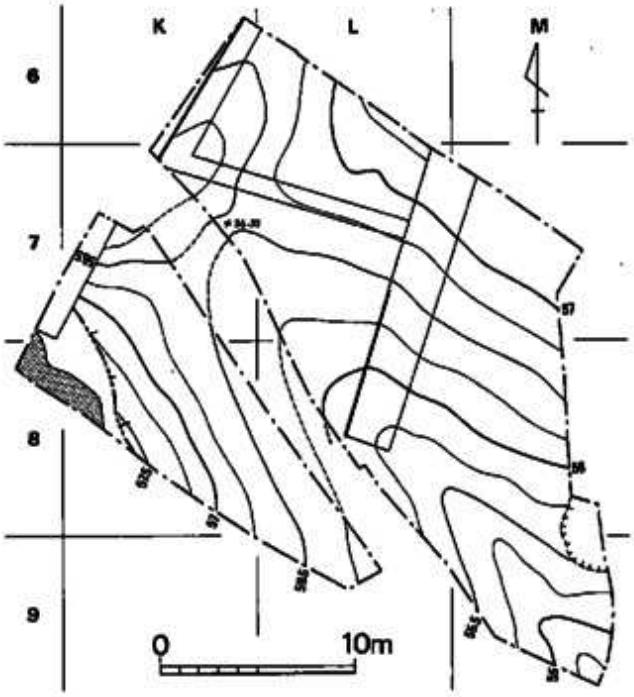
第210図　9 b 層出土石器実測図 2 (2/3)

（3）10ａ層の遺物

Ｋ８区を除いた調査区全域に分布を拡げる。56.75mの等高線で南北に分かれ、東西方向の56.5mの等高線はＫ７区で接近するが、交わることなく両方向に傾斜する。Ｍ９区南東端部は54.75mで頂点からは1.75m低く、等高線の形態も９ｂ層より狭くなる。遺構はない。

遺物の出土状態（第212図）

遺物の出土分布は９ａ・９ｂ層などと同じく、地形にそって南東方向に落ちていっている。ただし、９ｂ層に比べ遺物の集中箇所は上位に移る。



第211図　10ａ層地形実測図（1/400）

石　器（図版96、第213・214図）

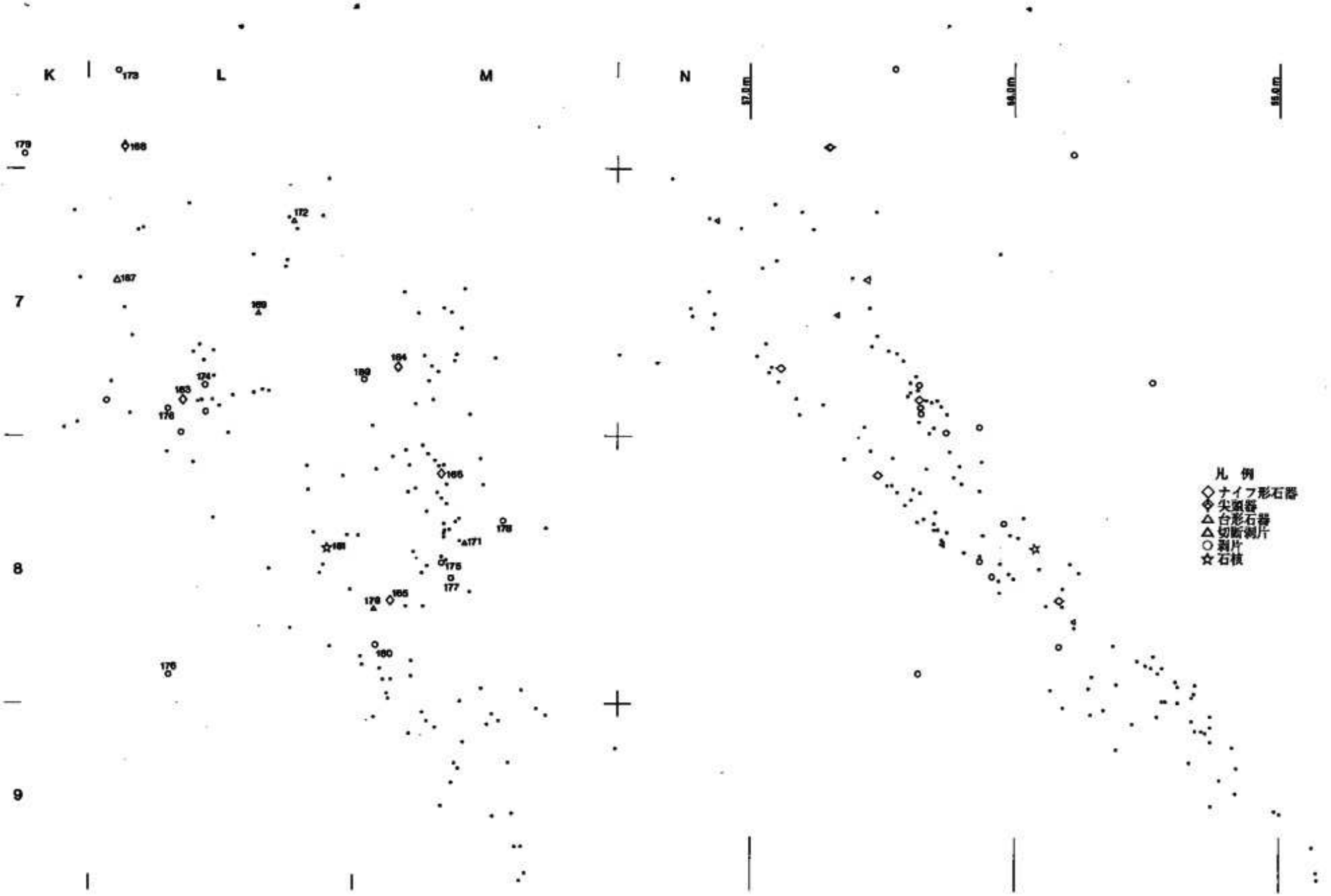
ナイフ形石器（163～166）　163は石刃素材の二側縁加工のナイフ形石器である。打点部分を除去しており、打面形状は不明。玉髄製。164は石核ポジ面を素材に取り込み、剥離軸もやや斜め方向にあるが、欠損のため打面形状は不明。水晶製。165は不定形の剥片を素材とし、二側縁加工を施す。166は、剥片の両端を折り取り、刃部の一側縁に二次加工を行っている。

台形石器（167）　167は原の辻型台形石器で、左側縁基部付近が使用のためか潰れている。

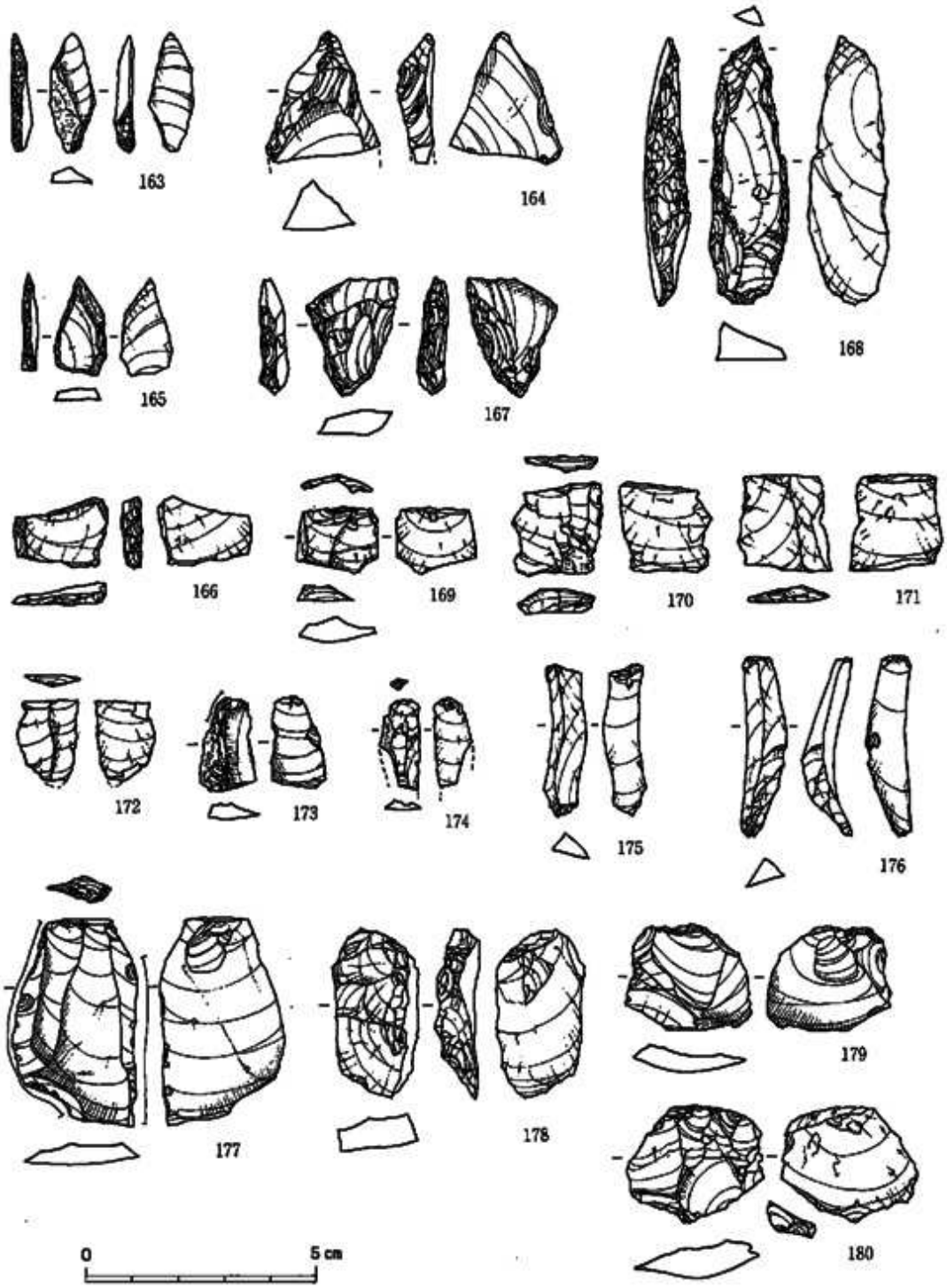
周縁調整尖頭器（168）　背面と剥離方向が同一の横長剥片を素材としている。周縁に対し尖頭部の調整は丁寧で、基部は平坦な剥離により薄く仕上げている。

剥　片（169～180）　169～172は切断剥片で、169は下端部を、170・171は上端部を切断している。173は頭部に微細剥離が認められる。175・176は小口から剥ぎ取られた小石刃で、片面に石核ポジ面を取り込んでいる。177は周縁に微細剥離が連続する。178は背面と腹面で剥離軸が90度違う。179・180は、背面に求心状の剥離面を残し、交互剥離が行われたことがわかる。

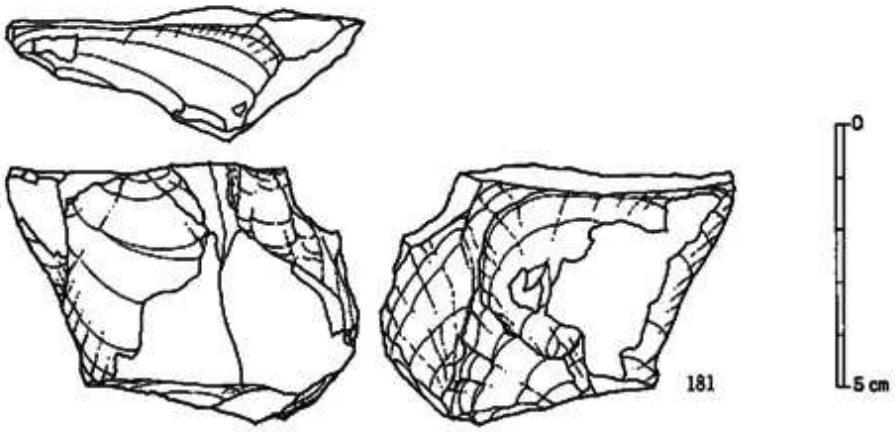
石　核（181）　分割礫が素材と考えられ、単設の無調整打面より、厚手の幅広の剥片を剥離している。



第212図　10ａ層出土石器分布図（1/200）



第213図　10ａ層出土石器実測図１（2/3）



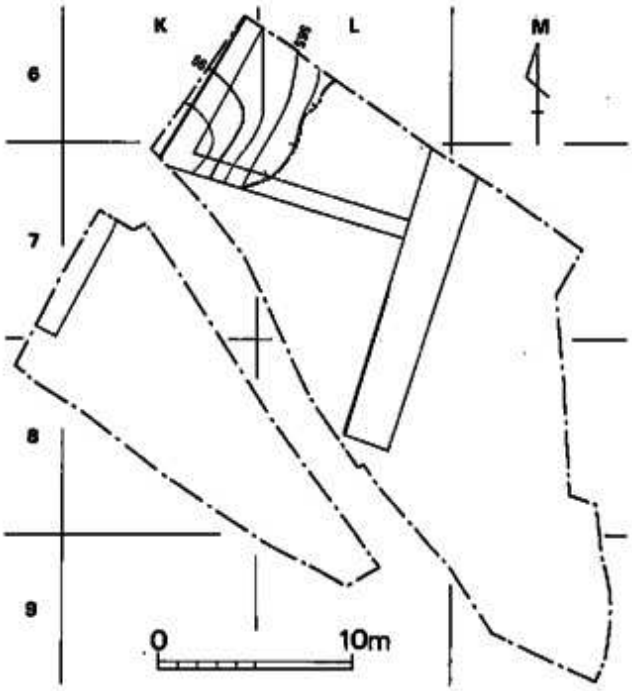
第214図　10ａ層出土石器実測図２（2/3）

（４）10ｂ層の遺物

Ｋ６－４区からＬ６－２区の限られた範囲に堆積しているが、Ⅱ区の東側にも堆積が確認されている。56.75mを頂部に55.75mまでの５本の等高線が密に巡る。

遺物の出土状態（第216図）

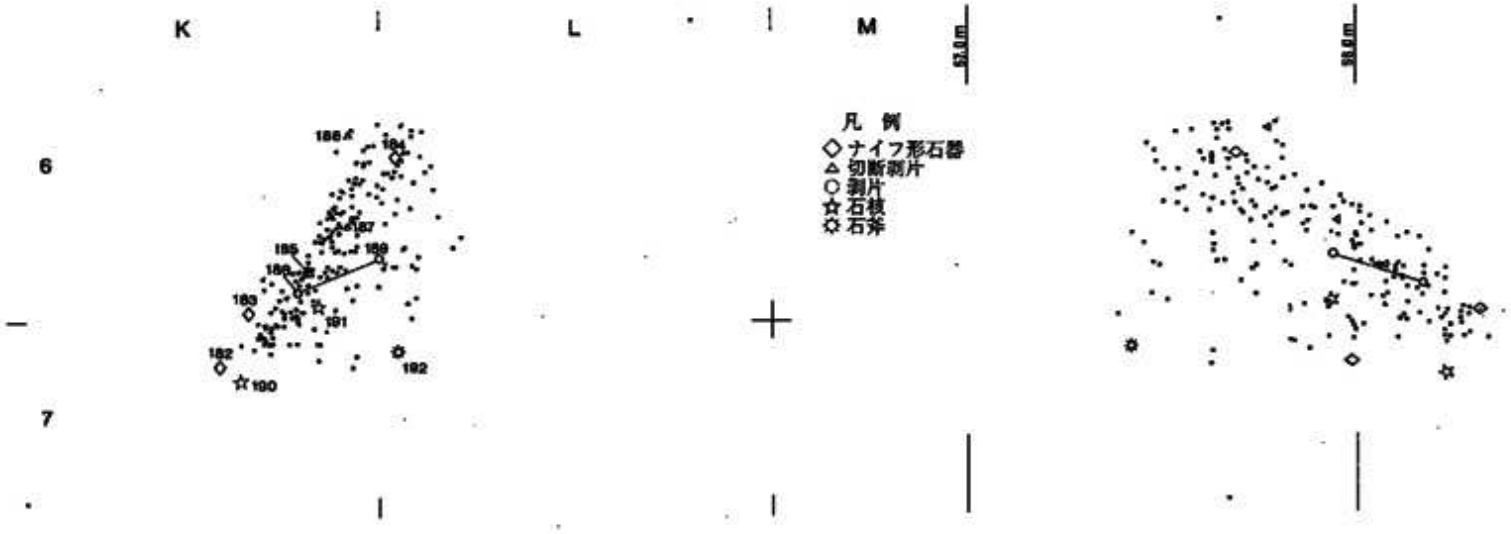
遺物は、上層に対し反対の北西側に落ちていくやや急な斜面部に集中箇所がある。このため、平面のまとまりに対し、垂直分布ではかなりの上下差がある。底面を持つ横長剥片どうしが、10ｃ層にまたがり接合する。



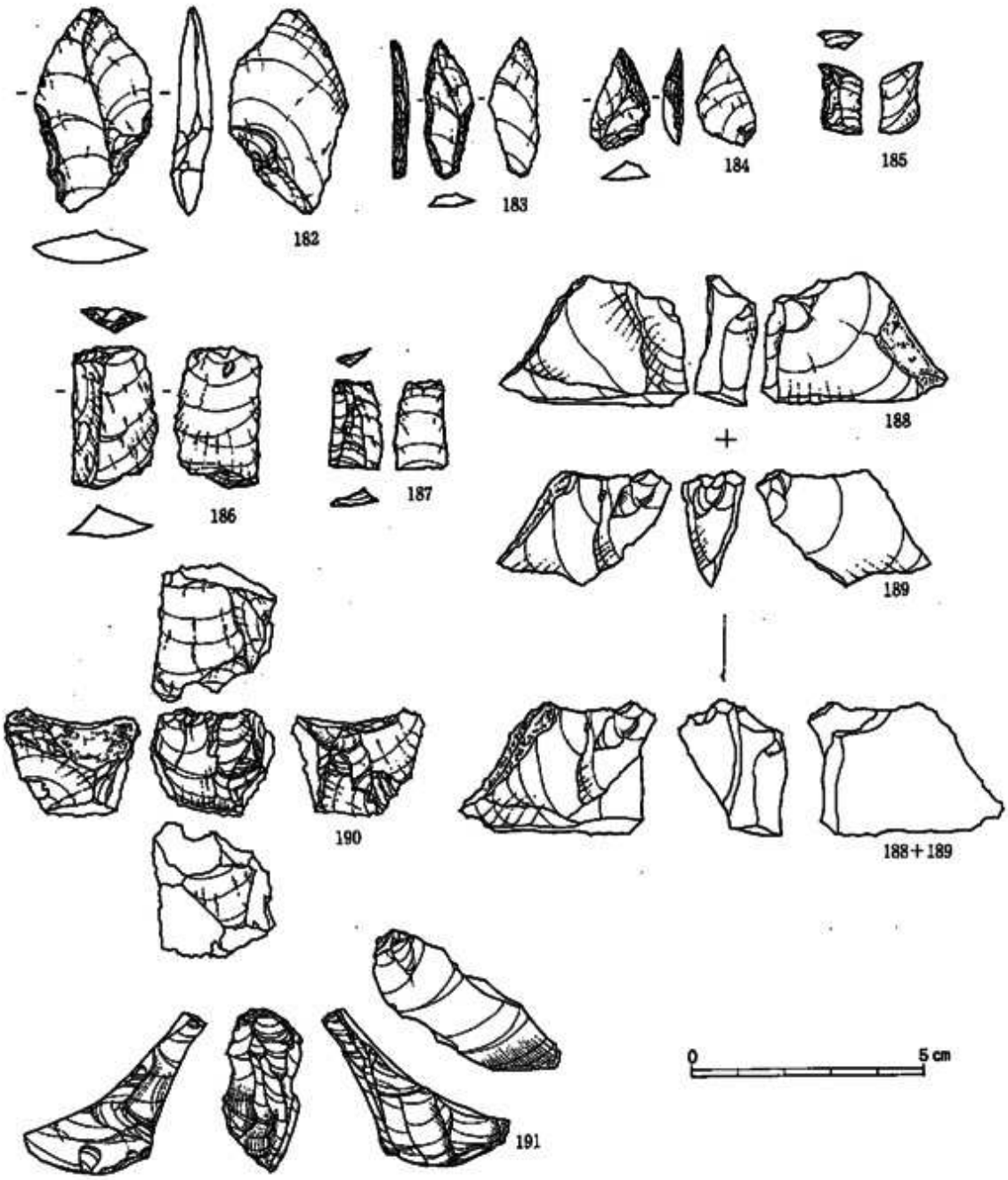
第215図　10ｂ層地形実測図（1/400）

石　器（図版97、第217・218図）

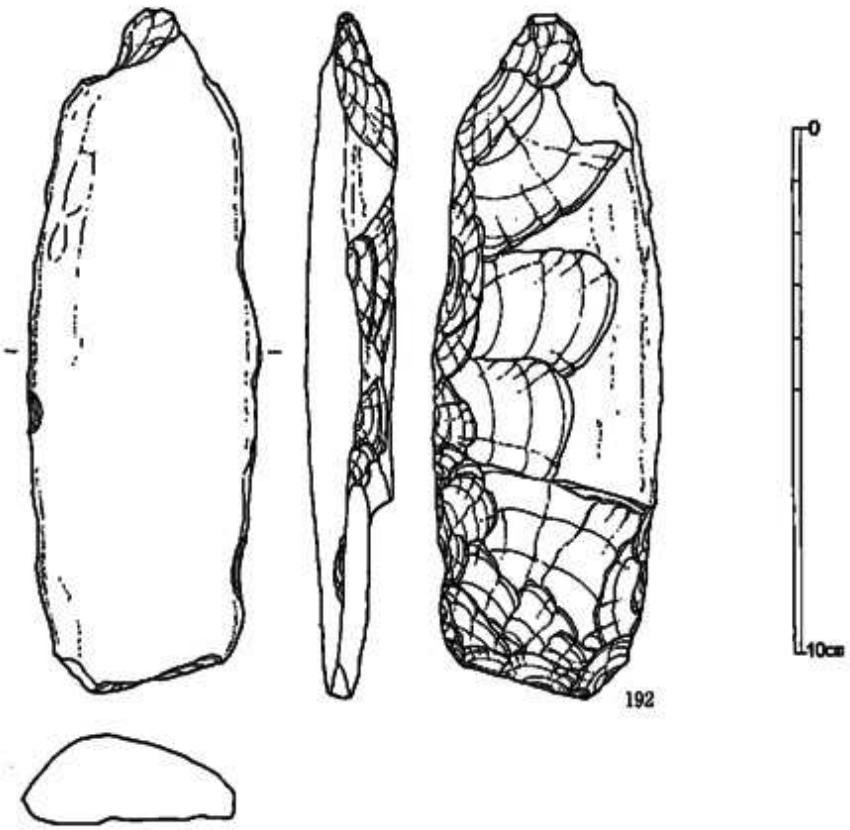
ナイフ形石器（182～184）　182は背面に石核のポジ面を取り込んだ「ノ」字状剥片を素材とした今峠型ナイフ形石器である。打面部と左側縁に二次加工を施す。183は小型石刃を素材とし、二側縁加工を施したナイフ形石器である。184はやや寸づまりの剥片の側縁から端部に



第216図　10b層出土石器分布図（1/200）



第217図　10b層出土石器実測図1 (2/3)



第218図　10b層出土石器実測図2（2/3）

加工を行い尖頭状に仕上げたナイフ形石器である。

剥　片（185～189）　185は両端を切断しており、左側縁に細かい連続剥離がある。186は背面の稜からの打面調整があり、背面の片面には石核ポジ面を取り込んでいる。下端は切断。187は両端切断。188・189は接合資料で、背面からの打撃によって打面調整を行い、わずかに加撃軸をずらしながらポジ面を刃部に取りこみ剥片剥離を行う。234・235と同一母岩と考えられる。

石　核（190・191）　190は、サイコロ状に分割された礫の一面に作業面を設定し、平坦打面を加撃し小型剥片を剥離している。打面調整はない。191は初め図右の側面を作業面として、小石刃剥離を行っているが、その後その石核を分割している。そして、残った厚い剥片の打面の小口より小石刃の剥離を行っている。

石　斧（192）　片岩製の柱状の礫の側縁と裏面に人為的な剥離と考えられる剥離面が観察される。明確な使用痕は、確認できないが、ここでは可能性も含めて「石斧」で報告する。

（杉原）

（5）10ｃ層の遺構と遺物

10ａ層と同様に再びＫ８区を除いた調査区全域に分布を拡げる。Ｌ・Ｍ７区の等高線は間隔が拡がりフラットな地形を形成するが、55.5m以下の等高線は密集し、幅も極めて狭く溝状を呈す。第220図はＭ９区の東西方向の土層図で、図の中央部の10ａ・10ｃ層が前述したように溝状に深く堆積していることが判る。Ｌ７区から西側では５ｍの距離で56.5m～55.25mの等高線が走り、急傾斜で西北方向に落ち込む。Ｌ６区からＫ７区にかけては大きな地形変換線があり内側にも細かな変換線が認められる。

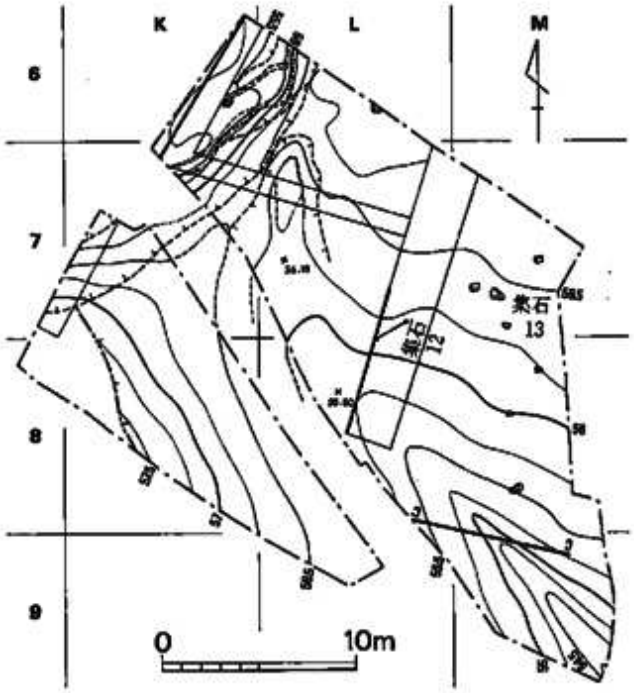
検出した遺構は集石２基で、Ｌ・Ｍ７区の傾斜の緩い箇所に築かれる。

12号集石（図版81－(1)、第221図）

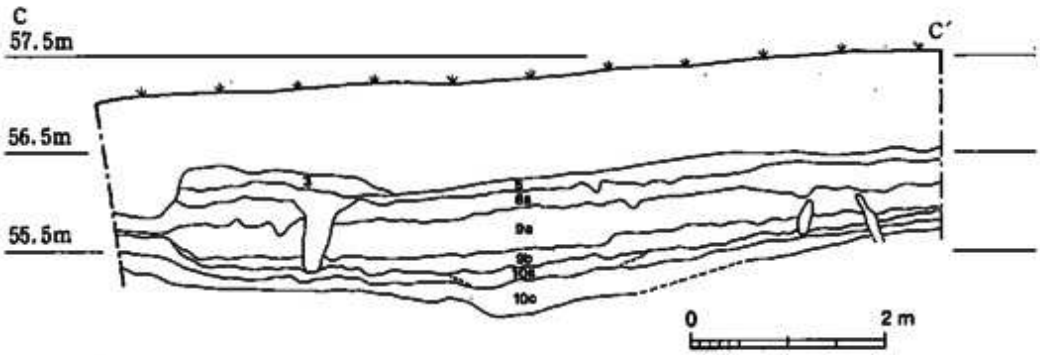
Ｌ７－１区の絹雲母石英片岩による集石である。厚さ３～５cmの扁平な３石の上を30×45cm、厚さ５～９cmの大きな石材が覆う。石材に熱変化は認められない。

13号集石（図版81－(2)、第221図）

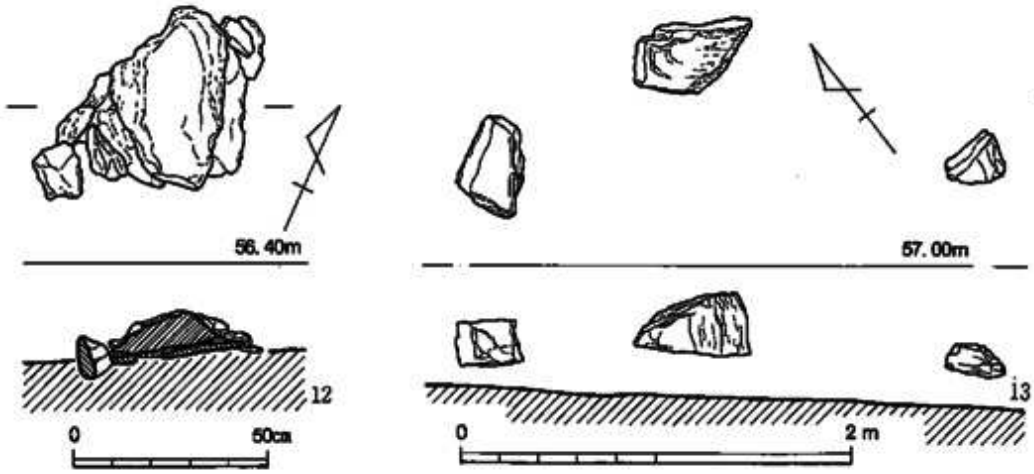
Ｍ７－２区に検出された集石で、３ｍの範囲に散在する大きな３石よりなる。１は長方形を呈し45×32cm大で、厚さ22cmを測る。上下面とも平坦で台石として使用された可能性



第219図　10ｃ層地形実測図（1/400）



第220図　Ｍ９区土層断面実測図（1/80）



第221図　12号・13号集石遺構実測図（1/20・1/40）

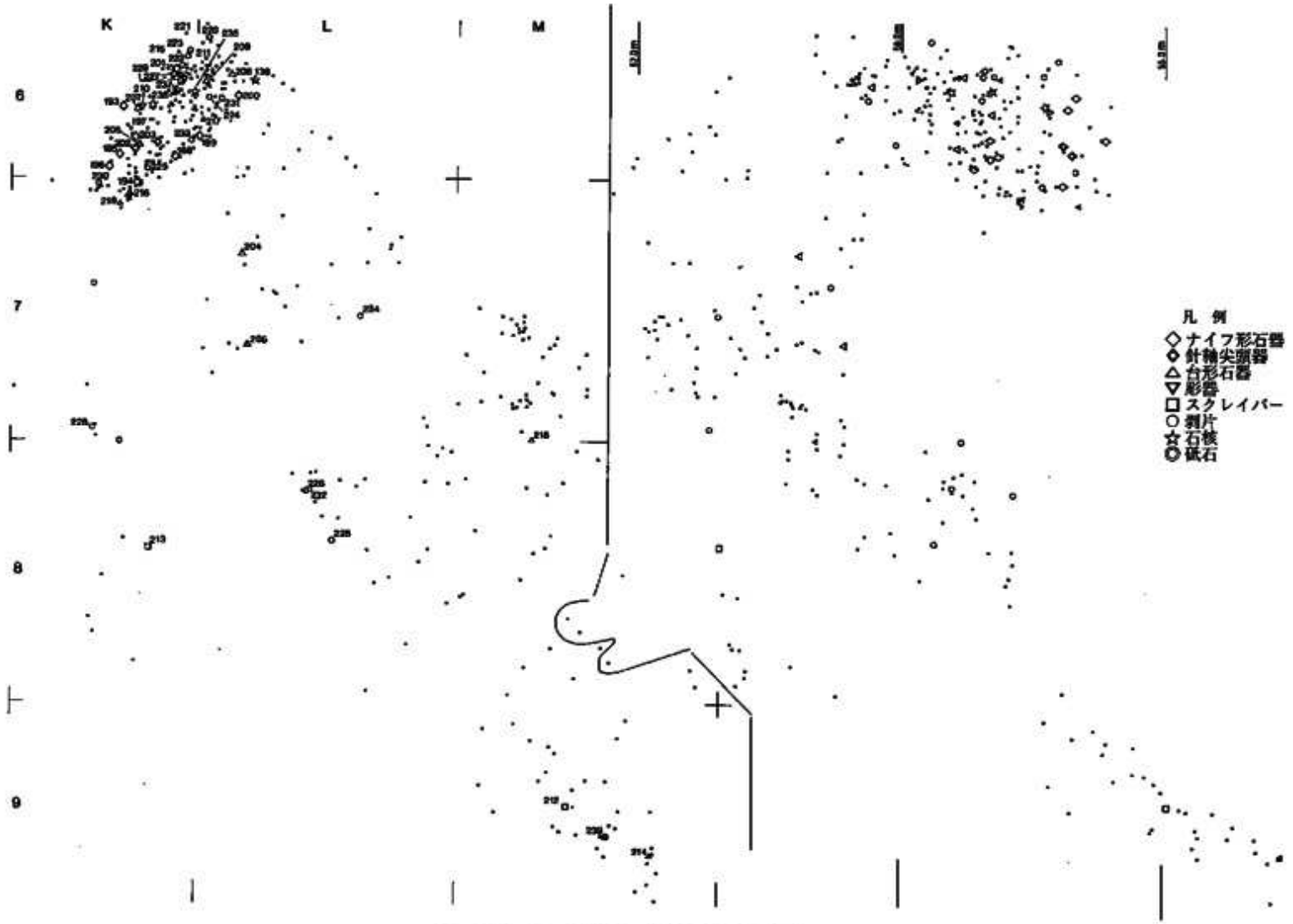
がある（図版81－2）。この石材は取り上げ後に県立甘木資料館に展示している。3点とも熱変化は認められない。石材は石英を貫入した絹雲母石英片岩。　（木下）

遺物の出土状態（第222図）

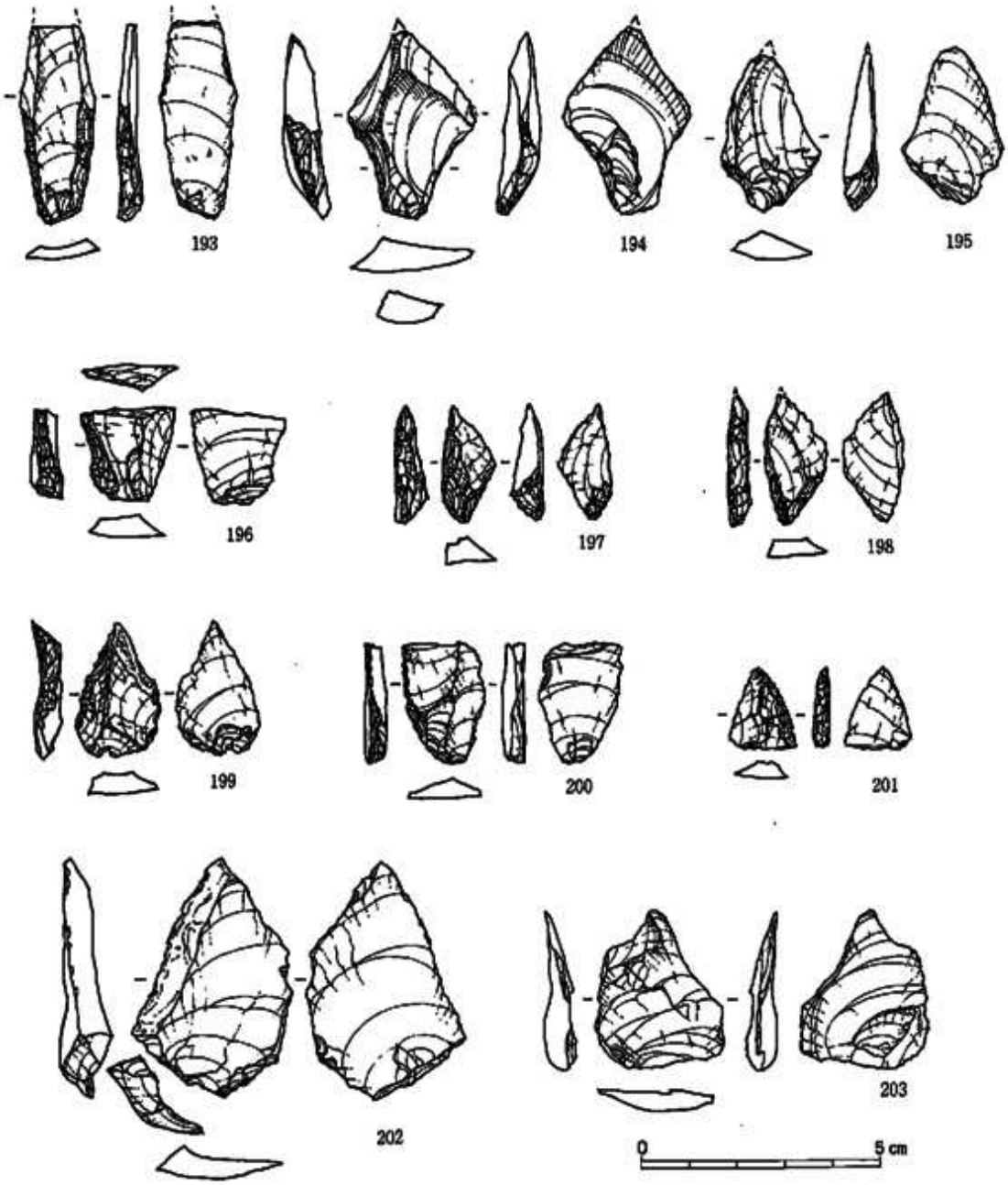
遺物の分布は地形に沿うように北西側に向かって落ちながら広がっている。おそらく調査区外にも及んでいるのであろう。10c層における遺物の上下の分布幅は大きく、それぞれにまとまりを持つことから、大きく上部、下部とに分けられる可能性が高い。また、最下層においては、いわゆる〝斜軸剥片〟の範疇に含まれる可能性のある剥片が2点出土している。

石　器（図版97－3・4・98、第223～227図）

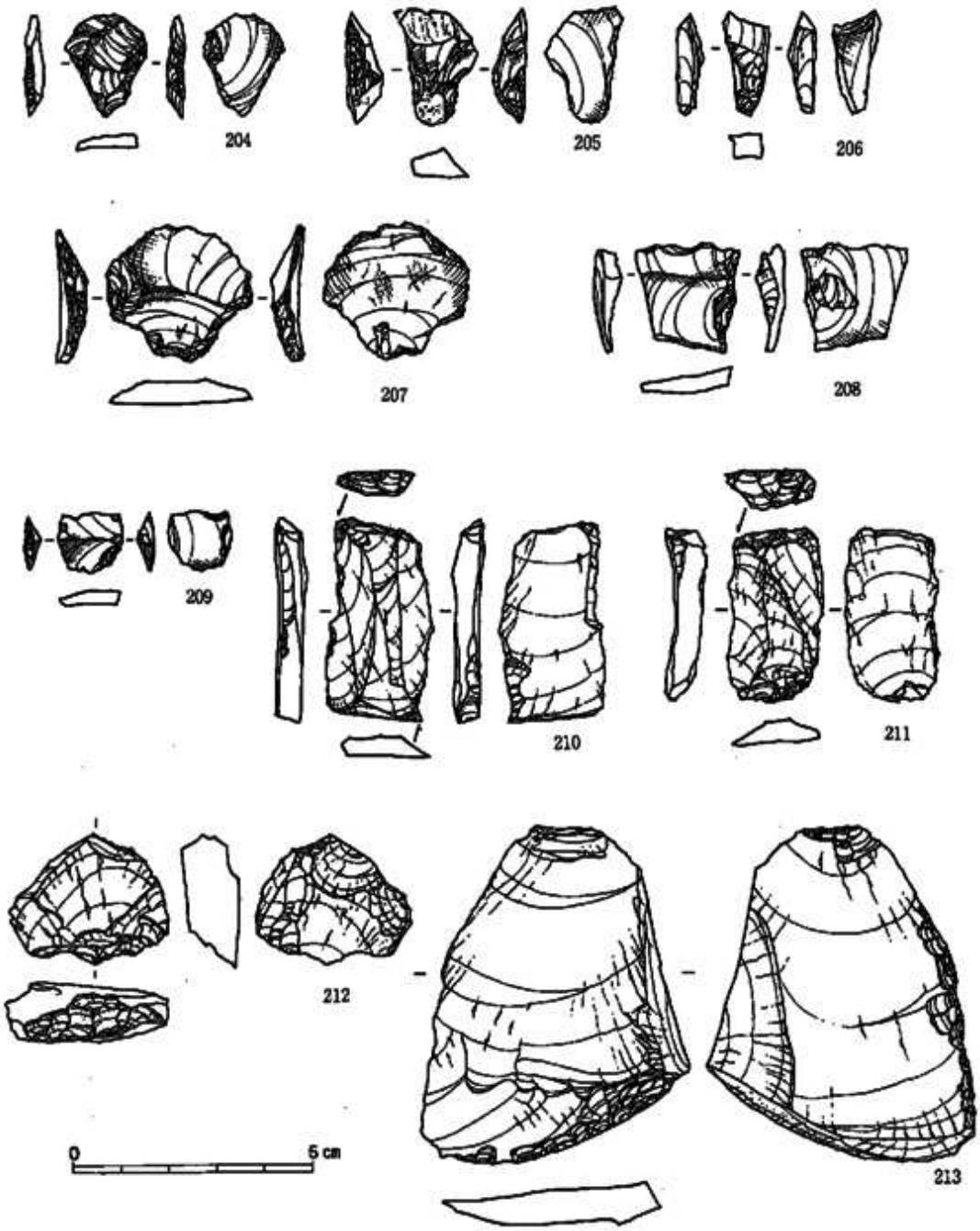
ナイフ形石器（193～203）　193は石刃の両側縁の基部付近のみ加工を施している。打面は礫打面。194はポジ面を取り込みながらの「ノ」字状の剥片素材の獲得は、今峠型ナイフの製作技術に通じる。しかし、二次加工は明らかに基部の抉りを意識しており、形だけなら剥片尖頭器に酷似する。おそらく、時期的にも両石器と接点を持つ時期のものであろうが、剥片尖頭器の定義からはずれる資料であり、ここではナイフ形石器として報告する。195は基部の一部に加工を施した今峠型ナイフ形石器。196は胴部から先を欠損。197は厚手の剥片の側縁を刃部とし急傾斜の丁寧な調整を施す。198は幅広の剥片を素材としている。199は剥片端部の形状を利用し二次加工している。200は左側縁部に加工を施す。201は欠損資料。202と203は最下部より出土した。これまでの上層石器群とは使用石材が明らかに異なり、硬質のチャートを使用している。202については、打面の稜の部分を加撃している。主要剥離面の剥離軸と背面の剥離軸の〝ズレ〟から古い技術の所産である「斜軸尖頭器」の可能性もある。



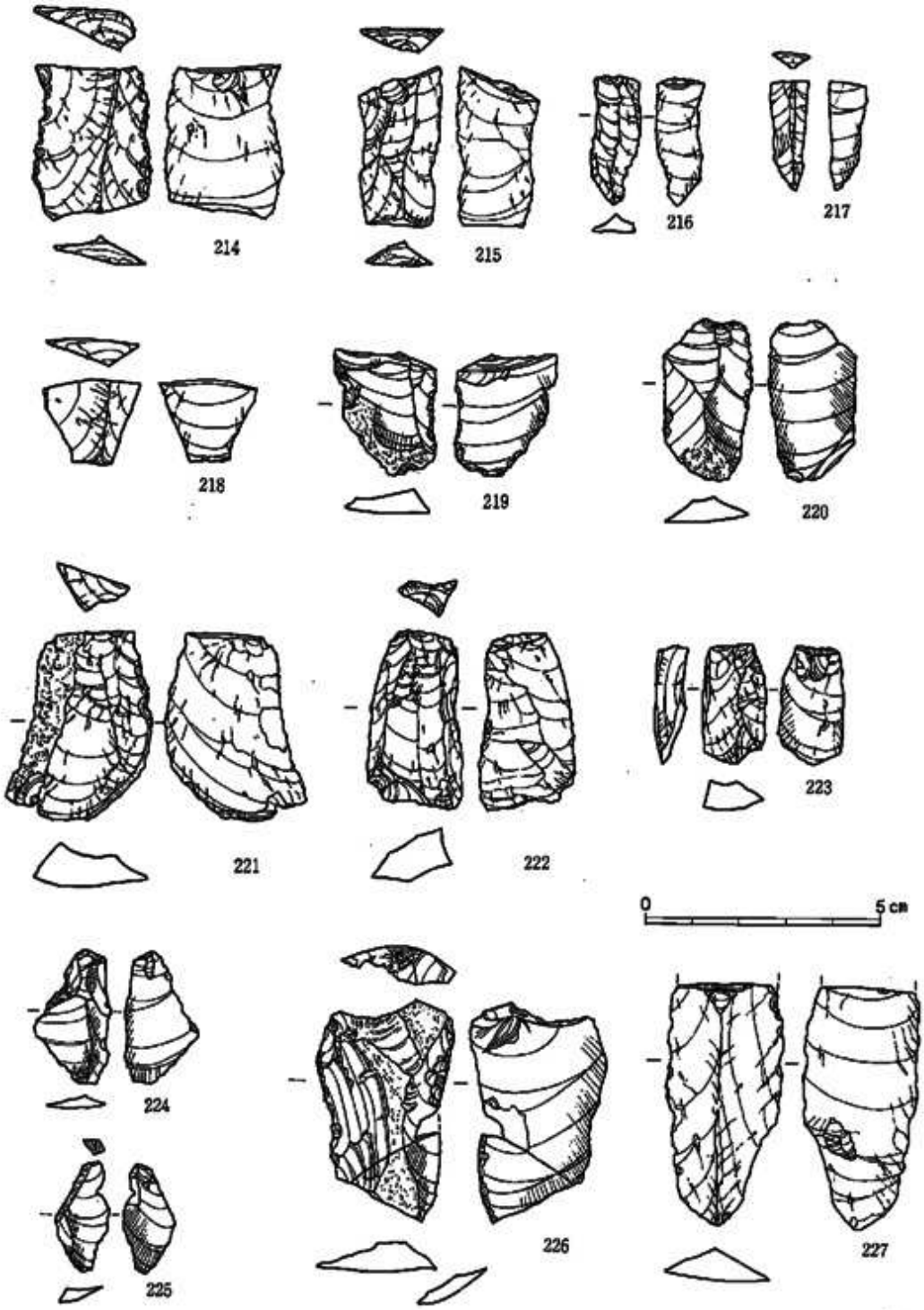
第222図　10ｃ層出土石器分布図（1/250）



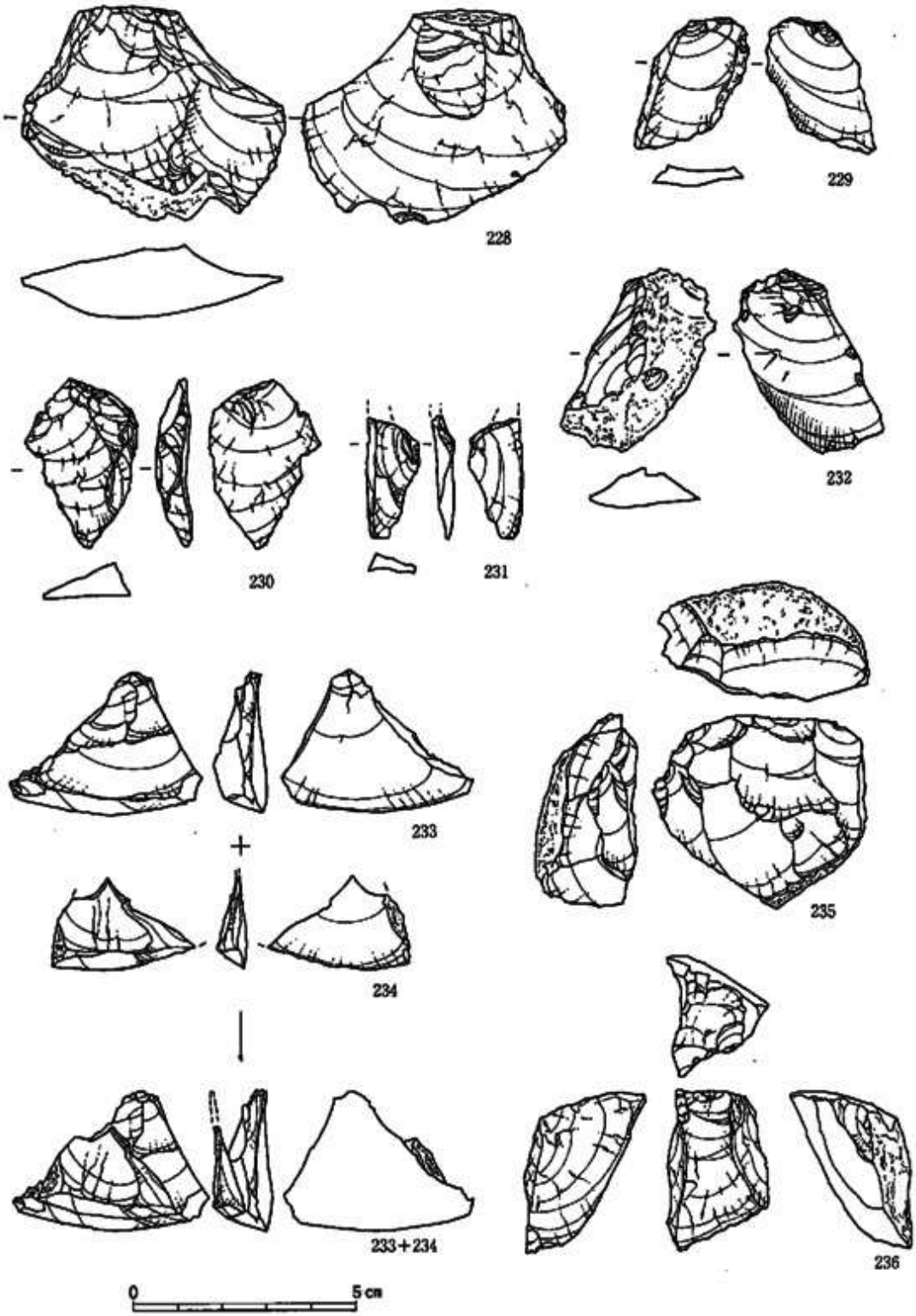
第223図　10ｃ層出土石器実測図１（2/3）



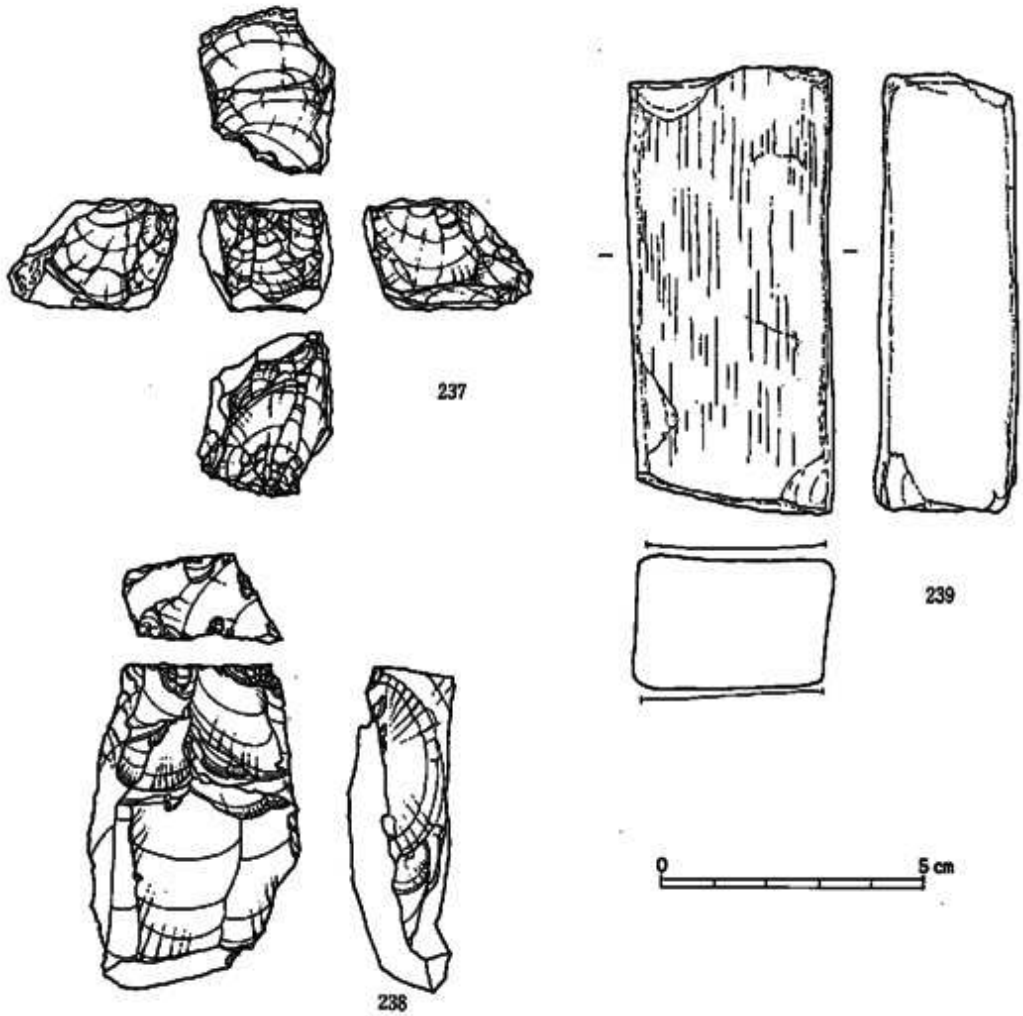
第224図　10ｃ層出土石器実測図２（2/3）



第225図　10ｃ層出土石器実測図３（2/3）



第226図　10c層出土石器実測図4（2/3）



第227図　10ｃ層出土石器実測図５（2/3）

台形石器（204～209）　204は剥片の打点部と末端部に加工を施す。205は厚手の剥片を素材とし、腹面からの丁寧な剥離により仕上げている。台形様石器の可能性が高い。206は切断剥片の背面に平坦に近い調整がある。207は幅広剥片の端部を刃部としている。208は背面の一部に調整あり。209は小石刃の切断剥片を素材とする。

彫　器（210・211）　210、211ともに剥片の端部に腹面からの丁寧な調整によって打面を形成し、その側縁部にファシットを入れている。210は折れ面端部にもファシットが入る。

スクレイパー（212・213）　212は分割された厚い剥片の打点部に鋸歯状に近い刃部加工を行っている。213は大型で薄い剥片の端部と側縁部に刃部加工を行っている。

剥　片（214～234）　214～219は切断面を持つ剥片である。214は背部からの力が加わり折

れている。219、220は側縁や端部に微細剥離が連続する。221～224は比較的整った剥片だが厚い。222や223のように側縁に石核側面をそのまま取り込んでいることから、作業面がそう広くない石核からの剥離が考えられる。227は中央に稜を取り込み、剥片尖頭器の素材になりうるような石刃である。228は礫打面である。礫を分割する際の調整剥片であろう。229は剥離軸が斜めとなり剥片は「ノ」字状となる。230については、背面と腹面の剥離軸はずれる。231は欠損資料だが、山形打面の稜を加撃した底面のある剥片で一応翼状剥片の基準を満たす。232は黒曜石製で剥離軸は「ノ」字に近い。233、234は接合資料である。軸をわずかにずらしながら、ポジ面を素材の刃部に取り込むような剥離を行っている。

石　核（235～238）　235は厚い分割礫の大きな剥離面を作業面とし、それに鋭角に直交する剥離面を打面に設定している。打面調整を行わず作業面をいっぱいに使い剥片剥離を行っている。236も同じく分割礫を使用しているが、剥離面幅が狭いためか、やや小口から剥片剥離を行うかたちとなり、一部に石核のポジ面を取り入れている。得られる剥片はポジ面を持った厚みのある剥片と考えられる。また、わずかな打面調整も認められる。237は、作業面を一箇所に固定し、小型の石刃を剥離している。打面調整はない。238はチャート製で、単設の無調整平坦打面より大型の石刃を剥離している。素材となる剥片は遺跡内より出土していない。

砥　石（239）　硬質砂岩製で角柱状を呈している。表裏面にわずかではあるが、所々磨れた面があることから砥石と考えられる。

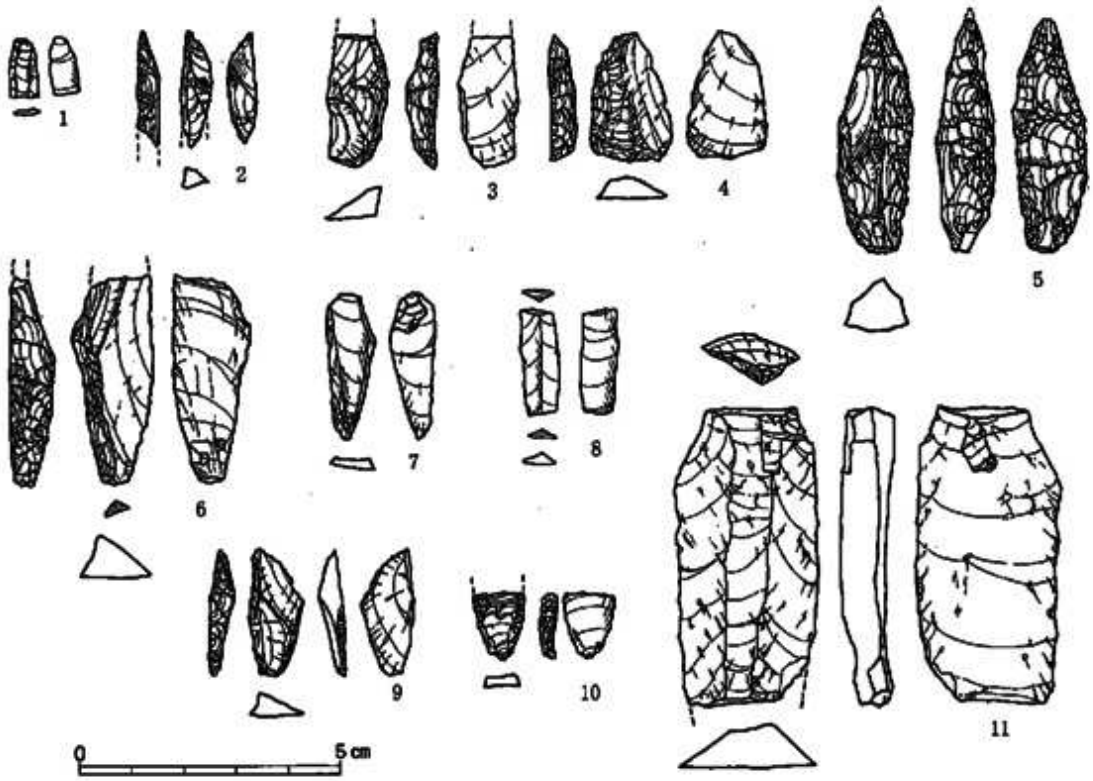
（6）その他の遺物

表土や6層までに出土した遺物である。

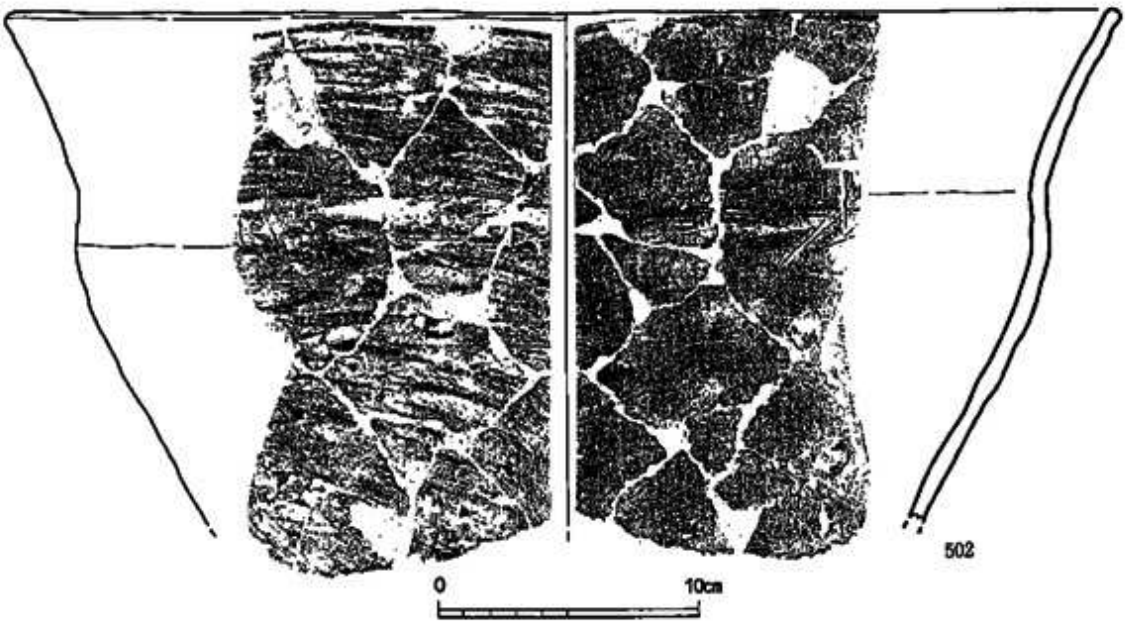
石　器（図版98、第228図）

1は、5層中より出土した、黒曜石製の細石刃で下端を欠損する。2～7は6層中からの出土である。2は不定形の素材の黒曜石製小型ナイフ形石器で、下端部を大きく欠損する。先端部の調整はやや入念である。重さは、0.40gを測る。3は、縦長剥片素材のナイフ形石器で、背面の剥離方向は、横軸で主要剥離面の軸とは違う。重さは、1.60gを測る。4は、縦長剥片の一側縁を加工したナイフ形石である。重さは、1.90gを測る。5は、黒曜石製の角錐状石器で、31号土坑より出土した。先端部は欠損するが、側縁部は丁寧な調整によって仕上げられている。重さ6.3gを測る。6はサヌカイト製で4.50gを測る。7は、サヌカイト製の小石刃で、0.7gを測る。8は、黒曜石製の細石刃で、両端に、古い折れ面がある。0.30gを測る。8～10は表採資料である。9は、横長剥片の側縁部を刃部として二側縁加工を行い、切り出し状に仕上げている。デイサイト質安山岩製で0.80gを測る。10は、黒曜石製で風化がすすんでいる。0.90gを測る。11の打面は、稜頭部からの調整が行われている。サヌカイト製で17.2gを測る。

（杉原）



第228図　その他の出土・採集石器実測図（2/3）



第229図　10号土坑出土縄文土器実測図（1/3）

第9表　Ⅲ区出土石器一覧表

番号	器種	地区	層位	長・幅・厚・重 g	石質	備考	登録番号
第187図 1	石鏃	K6－1　3区	5	2.5・1.9・0.5・1.1	安山岩	完形	3－29
第187図 2	石鏃	K6－3　3区	5	2.3・1.7・0.33・0.8	黒曜石	脚端部平坦	3－763
第187図 3	石鏃	L8－2　3区	6	2.7・1.55・0.4・1.1	黒曜石	完形　柳形鏃	3－548
第187図 4	石鏃	L7－3　3区	6	2.8・2.2・0.45・1.8	黒曜石	先端欠	3－74
第187図 5	石鏃	M8－1　3区	6	3.4・1.7・0.4・1.4	黒曜石	有茎　片脚欠	土31－2
第187図 6	石鏃	L7－4　3区	6	4.0・2.0・0.4・2.5	黒曜石	長身有茎　先端欠	3－69
第187図 7	UF	K6－1　3区	5	2.3・2.4・0.7・3.3	黒曜石		3－104
第187図 8	スクレパー	M9－4　3区	6	5.3・2.8・1.5・15.3	安山岩	削器	3－150
第187図 9	スクレパー	L8－1　3区	6	2.6・2.1・0.3・2.6	黒曜石	縦長剥片　折断	3－161
第187図 10	剥片	M9－3　3区	6	4.9・2.2・0.9・8.3	安山岩	縦長剥片	3－1868
第187図 11	剥片	M9－3　3区	6	3.1・2.2・0.8・4.1	安山岩	縦長剥片	3－1907
第188図 12	磨製石斧	L7－2　3区	5	11.6・5.5・2.0・239	砂岩	完形	炉38
第188図 13	磨石	L8－3　3区	5	7.0・6.4・3.3・205.3	安山岩	不整円形　完形	3－66
第188図 14	磨石	M9－3　3区	5	7.8・6.3・2.0・186.4	輝石安山岩	長円形　完形	3－1729
第188図 15	磨石	M8－2　3区	5	8.6・6.8・3.7・265.9	輝石安山岩	長円形　完形	3－120
第188図 16	磨石	L9－3　3区	5	8.4・8.0・5.0・447.6	輝石安山岩	長円形　完形	3－1697
第188図 17	磨石	Q10区　3区	5	8.3・5.7・5.6・368.6	玄武岩	南斜面　半欠	南斜面
第188図 18	磨石	M7－2　3区	5	10.6・9.6・4.7・680.9	輝石安山岩	完形　両端敲痕	3－59
第188図 19	磨石	L7－2　3区	5	10.5・9.7・6.6・916.5	輝石安山岩	焼けている　部厚	3－108
第188図 20	磨石	M9－3　3区	5	13.5・10.9・5.7・1226	輝石安山岩	長円形　完形	3－2164
第188図 21	磨石	M9－3　3区	6	9.0・6.2・3.7・240.4	輝石安山岩	半欠　平坦面	3－1880
第188図 23	磨石	L6－2　3区	6	7.2・4.8・3.6・169.0	安山岩	半欠	3－76
第188図 24	磨石	L7－2　3区	6	7.0・6.1・3.1・186.4	安山岩	長円形　小型完形	3－187
第188図 25	磨石・敲石	M9－3　3区	6	8.9・4.5・2.4・134.5	輝石安山岩	棒状　完形	3－1877
第188図 26	磨石	M8－1　3区	6	10.6・5.9・2.7・267.7	安山岩	棒状　完形	3－203
第188図 27	磨石	M9－3　3区	6	12.4・8.9・4.5・743.4	安山岩	不整円形	3－1855
第189図 28	磨石	P101　3区	6	9.6・6.9・4.9・507.9	輝石安山岩	半欠	3－220
第189図 29	磨石	3区	表土	8.3・6.8・5.8・442.6	輝石安山岩	長円形　完形	P121
第189図 30	敲石	L8－1　3区	6	9.7・5.5・5.6・381.5	輝石安山岩	丸棒状	3－197
第189図 31	凹器	L8－1　3区	6	12.8・8.6・1.5・272	白雲母石英片岩		3－199
第189図 32	凹器？	L8－1　3区	6	16.5・12.3・3.2・793.7	白雲母石英片岩	大型	3－198
第189図 33	不明石器	L7－2　3区	5	20.8・10.8・2.4・750	白雲母石英片岩	周辺磨く	炉38

第10表　9 a 層出土石器観察表

No	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	出土地区	標高(m)	登録番号
1	ナイフ形石器	Sn	(3.30)	2.30	1.15	7.30	下端欠　頭部系	L8－1	55.932	3－1431
2	〃	〃	3.25	2.20	0.80	4.10	今鉢型	L7－1	56.806	3－433
3	〃	Ob－2	2.40	1.80	0.60	2.20	〃	M8－2	56.205	3－381
4	〃	Ob－1	3.80	1.15	0.75	2.60		L7－1	56.964	3－1231
5	〃	Sn	3.00	0.90	0.45	1.20		L8－2	55.675	3－1574
6	〃	An(D)	2.65	0.90	0.65	1.00		M8－2	55.722	3－1537
7	〃	An	2.60	0.75	0.55	0.90		〃	55.916	3－1536
8	〃	An(D)	2.20	1.15	0.50	0.90	先端欠	M9－3	55.288	3－1994
9	〃	〃	2.30	0.90	0.55	0.60		L8－1	56.086	3－1447
10	〃	Ob－2	(1.50)	1.20	0.45	0.60	上部欠	L8－3	56.452	3－2152
11	〃	Ob－1	(2.10)	1.10	0.45	1.00	〃	M9－4	55.771	3－1948
12	〃	An(D)	2.35	1.25	0.60	1.50		L8－3	56.357	3－507
13	〃	〃	1.85	1.15	0.55	1.10		M8－4	56.656	3－351
14	〃	〃	1.50	1.30	0.35	0.60		〃	56.264	3－622
15	〃	〃	2.70	1.40	0.55	1.70		M9－4	55.813	3－1927
16	〃	〃	2.50	1.40	0.65	2.00		M9－3	55.550	3－2000
17	〃	〃	3.20	2.00	0.65	3.30		M8－2	55.625	3－406
18	〃	〃	2.70	1.60	0.60	1.80		L7－1	56.633	旧－29
19	〃	〃	2.60	1.60	0.50	1.50		M8－4	56.251	3－487
20	〃	〃	2.10	1.70	0.60	1.60		M9－4	55.480	3－2109
21	台形石器	Ob－1	2.20	2.55	5.50	2.00	厚の辻型	L8－3	56.446	3－2148
22	〃	〃	2.10	2.30	0.80	3.20	〃	L7－1	56.632	3－2137
23	〃	〃	2.20	(2.20)	0.80	2.20	〃	L8－3	56.481	3－2128
24	〃	Ob－3	2.05	1.60	0.90	3.20	小国系黒曜石？	M9－1	55.135	3－2014

No	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	出土地区	標高(m)	登録番号
25	〃	Ob－1	2.15	2.00	0.50	1.90		L 8－1	56.161	3－328
26	〃	Sn	(1.80)	1.80	0.45	1.40		M 8－2	56.528	3－343
27	〃	Ob－1	1.30	1.50	0.40	0.60		M 9－4	55.730	3－1957
28	〃	An(D)	1.25	1.25	0.35	0.50		M 9－3	55.505	3－2003
29	〃	Sn	(1.75)	1.05	0.30	0.60		M 7－2	56.850	3－253
30	〃	An(D)	2.10	1.30	0.60	1.70		M 8－2	55.829	3－1473
31	〃	〃	1.65	1.70	0.50	1.40		〃	55.895	3－1503
32	〃	Sn	1.65	1.25	0.35	0.70		M 9－3	55.320	3－1993
33	〃	An(D)	1.90	1.15	0.45	0.80		〃	55.309	3－2053
34	〃	〃	(2.05)	1.75	0.50	1.80		M 8－2	55.924	3－1461
35	〃	An(D)	1.60	1.50	0.50	1.00		M 9－3	55.310	3－1990
36	〃	〃	2.50	1.20	0.55	1.40		M 8－4	56.366	3－365
37	〃	〃	3.50	2.65	1.00	5.80	切断のみ	L 8－1	56.243	3－523
38	〃	〃	5.10	1.35	0.55	2.10		M 9－4	55.431	3－1971
39	角錐状石器	Sn	2.10	1.30	1.20	2.60	上部欠、41と接合	M 9－4	55.645	3－1586
40	〃	An(D)	2.40	1.00	0.90	1.80		M 9－2	55.245	3－2094
41	〃（調整剥片）	Sn	1.50	2.00	1.10	2.30		L 8－2	55.672	3－1573
42	彫器	An(D)	2.65	1.35	0.65	2.10		〃	55.638	3－1564
43	〃	Sn	6.10	4.75	2.00	44.10		L 7－3	57.054	旧－43
44	スクレイパー	An(D)	4.10	3.35	1.65	23.90		M 9－1	55.115	3－2124
45	〃	Sn	7.00	4.70	1.80	49.80		L 7－1	57.006	3－2032
46	〃	〃	5.40	0.45	0.70	2.20	+47 113と同一母岩	L 8－1	58.656	3－534
47	〃（剥片）	〃	2.30	1.10	9.00	2.00		L 8－3	56.178	3－297
48	『切断』剥片	An(D)	(2.35)	1.80	0.50	1.40	下端欠	L 8－3	56.235	3－501
49	〃	〃	(2.20)	1.95	0.60	2.10	〃	M 8－4	56.614	3－347
50	〃	〃	(1.20)	0.53	0.53	1.00	〃	L 8－1	55.918	3－530
51	〃	〃	(1.10)	2.00	0.50	1.20	〃	M 8－2	56.195	3－384
52	〃	〃	2.00	1.80	0.90	2.60	〃	M 9－4	55.701	3－2019
53	〃	Sn	2.65	1.60	0.50	1.20	〃	L 8－3	56.481	3－2127
54	〃	〃	(2.05)	1.75	0.55	2.00		L 8－1	56.193	3－324
55	〃	An(D)	(2.15)	2.65	0.50	1.00	両端欠	M 8－2	55.824	3－1549
56	〃	Sn	(1.45)	1.00	0.25	0.40	〃	M 8－4	56.282	3－483
57	〃	An(D)	(2.80)	1.55	0.40	1.80	〃	〃	56.268	3－356
58	〃	〃	(2.60)	2.00	0.65	2.90	〃	M 9－4	55.645	3－1562
59	〃	〃	(1.40)	1.60	0.70	1.50	〃	M 8－2	55.860	3－1479
60	〃	〃	(1.70)	1.90	0.50	1.50	〃	M 7－2	56.779	3－252
61	〃	〃	(1.80)	1.50	0.35	0.90	〃	M 8－4	56.131	3－374
62	〃	〃	1.50	1.80	0.35	0.90	〃	M 8－2	55.917	3－578
63	〃	〃	(1.40)	1.20	0.25	0.40	〃	L 7－1	56.725	3－2138
64	〃	〃	(0.85)	1.15	0.45	0.40	〃	M 8－2	55.829	3－1473
65	〃	〃	(1.60)	1.10	0.40	0.70	〃	M 7－2	56.905	3－259
66	〃	〃	(2.00)	2.65	0.70	2.70	〃	L 8－4	56.538	3－476
67	〃	〃	1.60	2.60	0.80	2.60	〃	L 8－3	56.247	3－279
68	〃	〃	(0.60)	2.45	0.53	0.90	〃	〃	56.468	3－271
69	〃	An(D)	(1.10)	3.40	0.90	3.30	〃	M 8－2	55.965	3－1523
70	〃	〃	(2.40)	2.35	0.75	3.20	上端欠	M 9－3	55.706	3－1530
71	〃	〃	(2.50)	1.80	0.60	2.30	〃	M 8－2	55.950	3－425
72	〃	〃	(2.10)	2.05	0.80	2.80	〃	M 9－4	55.699	3－1952
73	〃	〃	(1.55)	1.75	0.35	0.90	〃	M 9－3	55.110	3－2056
74	〃	〃	(1.90)	1.00	0.35	0.50	〃	L 8－3	56.363	3－283
75	〃	〃	(1.35)	1.30	0.40	0.60	〃	M 8－4	56.328	3－353
76	〃	〃	(1.25)	0.90	0.20	－	〃	M 8－2	55.778	3－1491
77	石刃・石刃状剥片	〃	3.30	1.90	0.70	3.10		L 7－1	56.750	旧－37
78	〃	〃	3.45	2.10	0.70	3.00		L 7－1	57.03	3－243
79	〃	〃	2.70	1.80	0.60	2.50		〃	56.958	3－244
80	〃	〃	3.20	1.70	0.65	2.90		〃	56.673	3－2044
81	〃	〃	3.00	1.90	0.95	5.20		M 9－4	55.429	3－2064
82	〃	〃	2.20	1.55	0.40	1.00		M 8－2	56.18	3－396
83	〃	〃	2.75	1.50	0.55	2.10		M 9－4	55.532	3－2076
84	〃	〃	2.10	1.35	0.45	1.00		M 9－4	55.802	3－1929

No	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	出土地区	標高(m)	登録番号
85	〃	Sh	3.75	1.00	0.60	1.40		L 8 − 1	55.990	3 −1441
86	〃	A(D)	2.35	1.00	0.55	1.10		L 7 − 1	56.539	3 −435
87	〃	〃	2.40	1.00	0.40	0.90		L 8 − 1	56.001	3 −1439
88	〃	〃	2.70	1.00	0.50	1.30		L 8 − 3	56.160	3 −291
89	〃	〃	2.05	0.80	0.70	1.20		L 7 − 1	56.620	旧−28
90	〃	Chs	2.65	1.40	0.50	1.50		L 8 − 1	56.16	3 −317
91	〃	〃	(2.45)	1.05	0.65	1.30		L 8 − 2	55.924	3 −594
92	〃	〃	(1.85)	1.10	0.40	0.70		M 8 − 2	56.287	3 −391
93	〃	Ob− 1	1.70	1.00	0.35	0.60		M 8 − 4	56.323	3 −354
94	〃	〃	(1.30)	1.00	0.25	−		L 8 − 3	56.346	3 −288
95	〃	〃	(2.15)	1.15	0.43	0.80	右側縁に微細剥離	L 8 − 2	56.283	3 −2183
96	〃	〃	2.20	1.45	0.50	1.30		M 8 − 2	55.827	3 −1544
97	剥片	Sn	3.10	3.95	1.05	13.70		L 7 − 2	56.602	3 −447
98	〃	〃	4.10	2.00	1.25	12.60		L 8 − 3	56.405	旧− 2
99	〃	〃	3.45	1.65	1.35	5.60		L 8 − 4	56.402	3 −2162
100	〃	Ob− 1	2.25	3.40	7.00	4.50		L 8 − 2	56.518	3 −591
101	〃	Ob− 2	2.70	2.85	0.80	5.20		M 8 − 2	55.059	3 −420
102	〃	Ob− 1	2.80	2.90	1.10	7.70		〃	56.09	3 −401
103	〃	Ob− 1	2.70	2.60	0.90	4.60		L 7 − 2	56.581	3 −448
104	〃	Sn	3.70	4.00	1.10	14.00		L 8 − 3	56.595	旧−18
105	〃	Ob− 1	3.00	1.90	0.80	4.80		M 9 − 4	55.828	3 −1924
106	〃	Ob− 1	(1.60)	1.20	0.75	1.10		L 8 − 1	56.123	3 −1452
107	〃	Rhy	7.25	5.20	1.95	67.60		M 8 − 4	56.656	3 −350
108	〃	Sn	5.10	2.55	0.60	7.30	端部に微細剥離有	L 8 − 3	56.473	3 −273
109	〃	An(D)	4.35	4.55	1.40	25.50	石核？	M 9 − 4	55.412	3 −1969
110	〃	〃	2.70	3.80	1.25	10.50		M 8 − 4	56.371	3 −364
111	〃	〃	3.95	2.85	0.75	8.30	風化激しい	L 8 − 1	56.103	3 −1428
112	〃	〃	3.90	2.45	1.00	9.20	縁→作業面　原→実行面	L 8 − 3	56.581	旧−16
113	石核	Sn	7.50	2.30	2.70	48.60		M 9 − 5	55.485	3 −1532
114	〃	An(D)	2.95	3.20	2.20	15.90		L 8 − 3	56.339	3 −2129
115	〃	〃	4.30	3.60	1.80	31.50		M 9 − 4	55.765	3 −1954
116	〃	〃	4.30	2.50	1.70	17.50		L 8 − 3	56.350	3 −277
117	〃	〃	2.30	2.70	3.60	14.10		M 9 − 4	55.813	3 −2024
118	〃	〃	2.70	4.10	3.20	33.90		M 9 − 1	55.140	3 −1942
119	〃	〃	2.90	5.40	4.10	54.20		L 8 − 1	55.947	3 −588
120	〃	〃	2.20	5.40	4.80	48.10	121と接合	〃	56.063	3 −528
121	〃（剥片）	〃	2.30	2.30	0.40	2.80	120と接合	L 8 − 3	56.268	3 −298
122	〃	Ob− 1	1.80	2.20	2.10	7.30	細石刃核	M 9 − 4	55.544	3 −1975
123	磨石	Gr	8.15	5.50	3.40	165.30		M 8 − 3	56.558	3 −377
124	〃	An	8.00	6.00	3.70	269.80		M 9 − 3	55.387	3 −2055
125	〃	Gr	7.55	4.00	3.10	111.00		M 8 − 4	56.564	3 −345
126	〃	〃	5.30	6.80	3.90	138.00		L 8 − 4	56.465	3 −482
127	敲石	Sch	11.00	3.90	3.80	296.80		M 9 − 3	55.135	3 −2048
128	〃	San	21.30	8.50	4.50	1134.20	使用痕不明	M 8 − 4	56.293	3 −2244

第11表　9b層出土石器観察表

No	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	出土地区	標高(m)	登録番号
129	ナイフ形石器	Ob− 4	(4.00)	2.63	1.10	10.8	下端欠	L 8 − 3	56.344	旧−17
130	〃	An(D)	3.25	1.10	0.60	1.80		L 7 − 1	56.497	3 −2174
131	〃	〃	2.20	1.05	0.55	0.90		L 8 − 3	56.112	3 −667
132	〃	〃	2.35	1.10	0.60	0.90		M 9 − 2	55.136	3 −2245
133	〃	〃	(2.35)	1.30	0.50	1.40	下端欠	L 7 − 4	56.970	3 −689
134	〃	〃	2.10	1.50	0.60	1.60		L 7 − 1	56.810	3 −1291
135	〃	〃	1.60	1.15	0.30	0.50	上端欠	L 8 − 1	55.907	3 −679
136	台形石器	〃	1.55	1.00	0.40	0.60		〃	55.764	3 −1605
137	〃	〃	2.20	2.00	0.50	2.70		M 7 − 2	56.934	3 −603
138	彫器	〃	2.15	1.25	0.60	1.70		L 7 − 1	56.543	3 −702
139	スクレイパー	Sh	4.60	3.70	1.15	16.0		L 7 − 1	56.461	3 −698
140	〃	Ob− 2	2.25	2.00	0.70	2.40		L 8 − 1	55.771	3 −1597
141	剥片	An(D)	(0.75)	2.00	0.55	0.90	「切断」・両端	L 7 − 1	56.827	3 −1297
142	〃	〃	(2.25)	2.95	0.95	5.80	〃　・下端	〃	55.700	3 −1109
143	〃	〃	(2.40)	4.05	1.35	9.70	〃　〃	L 8 − 3	56.419	3 −646

No	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	出土地区	標高(m)	登録番号
144	〃	〃	(2.05)	1.45	0.65	2.00	〃 〃	L 8 − 3	56.265	旧−11
145	〃	Ob− 1	(2.05)	1.25	0.25	0.90	〃 ・上端	M 9 − 1	55.040	3 −2207
146	〃	An(D)	(1.85)	1.05	0.35	0.70	〃 ・〃	L 7 − 1	56.566	旧−30
147	〃	〃	(1.75)	1.05	0.35	0.50	〃 ・〃	〃	56.500	3 −2176
148	〃	〃	(3.00)	1.80	0.85	3.70	〃 ・上端欠	M 7 − 2	56.742	3 −602
149	〃	Ob− 1	(2.95)	2.30	0.80	4.50	〃	L 8 − 1	55.705	3 −1606
150	〃	〃	2.65	1.50	0.80	2.50		L 7 − 1	56.587	3 −706
151	〃	〃	2.55	(1.55)	0.35	1.60		〃	56.645	3 −705
152	〃	An(D)	3.25	1.95	0.70	3.30		M 8 − 2	55.761	3 −1613
153	〃	〃	3.15	1.30	0.45	1.60		L 8 − 4	56.405	3 −2208
154	〃	〃	2.70	1.20	0.60	1.60		L 7 − 1	56.477	3 −2175
155	〃	〃	2.90	1.0	0.65	1.60		〃	56.600	3 −703
156	〃	Sn	(2.25)	1.95	0.40	0.70		L 7 − 4	56.582	3 −716
157	〃	〃	(2.40)	1.75	0.45	2.30		M 8 − 2	55.620	3 −1618
158	〃	Ob− 1	2.50	1.35	0.25	0.70		L 7 − 4	56.769	3 −1301
159	〃	Sn	(1.85)	1.40	0.45	0.90		L 8 − 3	55.939	3 −670
160	〃	〃	2.05	0.95	0.40	0.60		L 7 − 2	56.720	3 −714
161	石核	An(D)	3.80	3.80	1.65	23.90		L 8 − 3	56.480	3 −2182
162	〃	An	4.70	4.70	3.90	104.10		K 7 − 2	56.926	3 −739

第12表　10a 層出土石器観察表

No	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	出土地区	標高(m)	登録番号
163	ナイフ形石器	Cha	2.55	1.00	0.45	1.00		L 7 − 2	56.367	3 −952
164	〃	Cr	(2.80)	2.45	0.75	4.40		M 7 − 2	56.887	3 −1047
165	〃	An	2.10	1.05	0.35	0.80		M 8 − 2	55.839	3 −1100
166	〃	An(D)	1.50	2.00	0.45	1.30		M 7 − 2	56.570	3 −1060
167	台形石器	Ob− 1	2.55	2.00	0.70	2.80		L 7 − 4	56.555	3 −1324
168	周縁調整尖頭器	Sn	5.75	1.70	0.95	8.40		L 6 − 2	56.700	3 −599
169	剥片	An(D)	(1.90)	1.80	0.60	1.40	「切断」・下部	L 7 − 1	56.675	3 −1305
170	〃	〃	(2.00)	2.00	0.50	2.20	〃 ・上部	M 8 − 2	55.710	3 −1099
171	〃	〃	(2.15)	2.00	0.45	2.10	〃 ・両端	M 8 − 4	56.159	3 −1082
172	〃	〃	(1.75)	1.35	0.35	0.70	〃 ・上部	L 7 − 2	56.957	3 −393
173	〃	Ob− 1	2.00	1.20	0.40	0.90	微細剥離有	L 6 − 2	56.455	3 −793
174	〃	An(D)	(1.90)	0.65	0.30	0.30	下端欠	L 7 − 2	56.352	3 −976
175	〃	Cha	3.30	0.90	0.50	1.40		M 8 − 4	56.132	3 −1084
176	〃	〃	3.90	0.90	0.70	2.00		L 7 − 2	56.363	3 −953
177	〃	Ob− 1	5.50	2.70	0.65	6.80		M 8 − 2	56.080	3 −1105
178	〃	Ob− 5	3.65	1.90	1.00	7.20		〃	55.932	3 −1108
179	〃	Ob− 1	2.15	2.70	0.60	3.70		K 6 − 1	55.774	3 −874
180	〃	Ob− 2	2.50	2.90	0.85	5.10		M 8 − 2	55.483	3 −1627
181	石核	Tuf	4.90	6.80	2.50	66.50	軟質	L 8 − 3	55.92	3 −1094

第13表　10b 層出土石器観察表

No	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	出土地区	標高(m)	登録番号
182	ナイフ形石器	Sn	4.35	2.50	0.80	7.10	今峠産	K 7 − 3	56.021	旧−88
183	〃	Sn	2.90	1.05	0.35	1.20		K 6 − 1	55.990	旧−52
184	〃	An(D)	2.15	1.30	0.45	0.90		L 6 − 2	56.310	3 −946
185	剥片	〃	(1.50)	1.90	0.45	0.60	両端欠・微細剥離有	K 6 − 1	55.932	3 −831
186	〃	〃	(3.25)	1.85	0.90	6.80	両端欠	〃	55.930	旧−101
187	〃	〃	(1.90)	1.10	0.50	1.00	下端欠	〃	56.05	3 −904
188	〃	Sn	2.80	4.10	1.40	10.10	189	〃	55.838	3 −878
189	〃	〃	2.50	3.70	1.30	5.40	188(10a 層出土)と接合	〃	56.062	3 −1027
190	石核	An(D)	2.30	2.60	2.90	14.10	長→高・厚→奥行き	K 7 − 3	55.774	旧−44
191	〃	Ob− 1	3.50	1.70	4.00	10.40	〃	K 6 − 1	56.076	3 −819
192	「石斧」	Sch	13.00	4.40	1.75	117.30	「刃部」欠	L 7 − 4	56.577	3 −785

第14表　10c 層出土石器観察表

No	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	出土地区	標高(m)	登録番号
193	ナイフ形石器	Sn	(5.05)	1.55	0.50	3.20	先端欠	K6－1	55.375	旧－90
194	〃	Ob－1	3.85	2.65	0.95	5.40	先端わずかに欠	K7－3	55.392	3－1183
195	〃	Sn	(3.20)	2.10	0.75	3.50	〃	K6－1	55.643	旧－57
196	〃	An(D)	(1.90)	2.00	0.70	2.30	先端～刃部欠	〃	55.728	旧－54
197	〃	〃	2.40	1.10	0.65	1.30		〃	55.230	旧－92
198	〃	〃	(2.70)	1.30	0.50	1.50		〃	55.676	3－1161
199	〃	〃	3.80	0.60	1.75	2.40		L6－2	56.672	3－1202
200	〃	〃	(2.45)	1.75	0.60	2.20	先端～刃部欠	〃	56.342	3－1044
201	〃	〃	(1.70)	1.40	0.35	0.80	刃部以下欠	K6－1	55.806	旧－80
202	〃	Che(R)	5.00	3.30	1.10	10.30	「斜軸尖頭器」	L6－2	55.352	3－1206
203	〃	Sn	3.35	2.75	0.70	4.70	〃	K6－1	55.393	3－1214
204	台形石器	Ob－1	2.10	1.70	0.40	1.10	「台形様石器」	L7－4	56.606	3－1158
205	〃	〃	2.40	1.70	0.70	2.00	〃	L7－2	56.213	3－1387
206	〃	〃	(2.15)	0.95	0.60	1.10	〃	K6－1	55.796	旧－63
207	〃	〃	2.80	3.00	0.70	4.60	〃	〃	55.653	旧－68
208	〃	〃	2.25	2.20	0.60	2.00	〃	L6－2	55.76	3－1228
209	〃	〃	1.25	1.30	0.35	0.60		〃	56.105	3－1034
210	彫器	Sn	5.20	2.25	0.70	8.00	上下端にファシット	K6－1	55.41	旧－95
211	〃	An(D)	3.60	2.00	0.85	5.60		K6－1	55.935	3－1020
212	スクレイパー	〃	2.75	3.30	1.75	10.80		M9－4	54.991	3－2264
213	〃	Sn	7.00	5.50	1.15	33.60		K8－3	56.688	3－959
214	剥片	An(D)	(3.25)	2.50	0.90	6.80	「切断」・両端	M9－1	54.555	3－2281
215	〃	〃	(3.35)	1.75	0.50	3.70	〃	K6－1	55.637	3－1177
216	〃	〃	(2.70)	(1.00)	0.60	1.00	〃　・上部	K7－3	55.546	3－1114
217	〃	Ob－1	(2.30)	1.85	3.50	0.40	〃	L6－2	55.781	3－1188
218	〃	Sn	(1.75)	2.10	0.55	1.50	〃　・両端	M7－2	56.322	3－1651
219	〃	Ob－1	(2.60)	2.20	0.65	3.09	〃　・上部	K7－3	55.302	3－1207
220	〃	〃	2.80	1.65	0.30	1.00		L6－4	55.893	3－990
221	〃	An(D)	4.00	3.00	1.15	13.00		K6－1	56.14	3－1024
222	〃	〃	2.89	2.05	1.15	9.60		〃	55.793	旧－81
223	〃	〃	2.50	1.30	1.30	2.70		〃	55.342	3－1213
224	〃	Ob－1	2.80	1.65	0.30	1.00		L6－2	55.694	3－1192
225	〃	〃	2.30	1.15	0.35	0.60		L8－3	55.8770	3－2215
226	〃	Ob－1	4.70	2.85	0.90	8.50	折れ	L8－4	55.764	3－1781
227	〃	Sn	(5.15)	2.45	0.75	5.00	刃部以上欠	K6－1	55.691	旧－99
228	〃	An(D)	4.80	5.90	1.65	38.90		K7－1	56.716	3－962
229	〃	Che(R)	2.90	2.50	0.70	3.60		K6－1	55.462	3－1223
230	〃	An(D)	3.70	2.50	1.10	5.30		K7－3	55.417	旧－50
231	〃	Sn	(2.65)	1.15	0.30	1.10	「異状剥片」	L6－2	56.156	3－1149
232	〃	Ob－1	4.05	3.35	1.05	9.40		L8－4	55.805	3－1780
233	〃	Sn	3.10	4.40	1.20	9.60		K6－1	56.009	3－1131
234	〃	〃	(2.10)	(3.20)	0.70	3.30		L7－1	56.821	3－1294
235	石核	An(D)	4.20	4.80	2.40	48.00		K6－1	55.802	3－1139
236	〃	〃	3.60	2.30	2.75	15.30		〃	55.470	旧－97
237	〃	〃	2.10	2.50	3.25	19.10		〃	55.654	3－1174
238	〃	Ch	6.20	4.10	2.00	63.30		L6－2	56.176	3－998
239	「砥石」	Sa	8.50	4.90	2.75	131.2		M9－1	54.650	3－2251

<凡例>

Ob－1	腰岳系黒曜石	Cha	玉髄
Ob－2	針尾島系黒曜石	Che	チャート
Ob－3	小国系黒曜石	Che(R)	赤チャート
Ob－4	阿蘇系黒曜石	San	砂岩
Ob－5	産地不明黒曜石	Sh	頁岩
An(D)	デイサイト質安山岩	Cr	水晶
An	安山岩	Tuf	凝灰岩
Sn	サヌカイト	Sch	片岩
Rhy	流文岩	Gr	花崗岩

第15表　原の東遺跡旧石器石材総重量

黒曜石（西北九州産）	105.7	デイサイト質安山岩	1988.6
黒曜石（小国）	95.2	サヌカイト	255.5
黒曜石（阿蘇）	7.8	その他	102.1
黒曜石(ASo－4)	15.1		
赤チャート	84.0		
メノウ	108.3		
玉髄	53.4		

※　重量は全てg

Ⅳ　自然科学の調査

1　原の東遺跡の古環境復元

パリノ・サーヴェイ株式会社

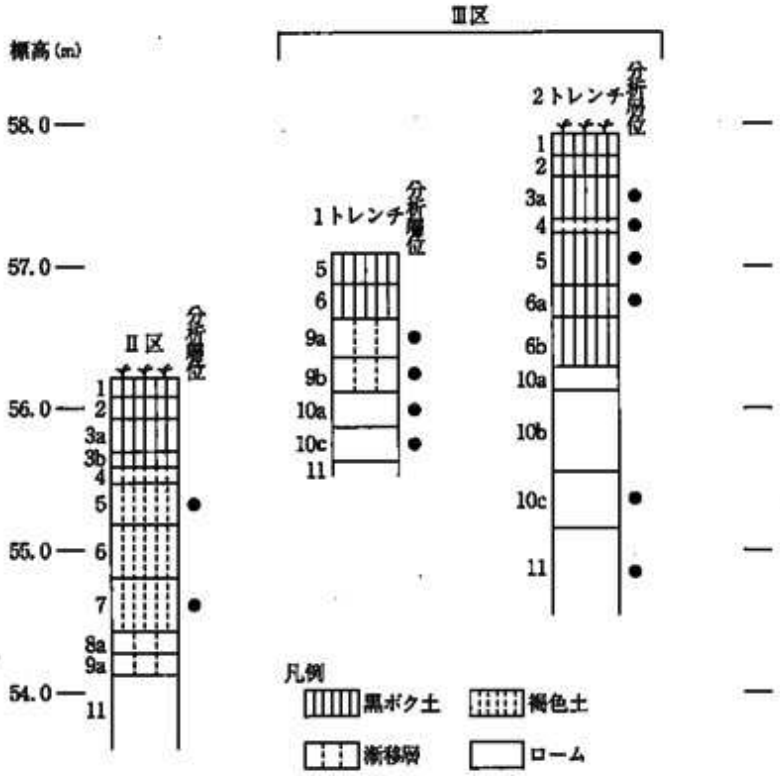
はじめに

福岡県原の東遺跡は、九州北部をほぼ東から西へ流れる筑後川の中流域に分布する台地上に位置する。発掘調査では、台地の表層に堆積する厚さ２～３ｍほどの土壌層から、旧石器時代から飛鳥時代までに至る遺物や遺構が層位的に出土、検出されており、筑後平野における人間の活動の歴史を知る上で重要な成果が得られている。

本報告では、調査区内各地点で作成された土層断面の各土層中における指標テフラの産状を調べることにより、その層序対比を検証する。また、土壌層中に残存する植物珪酸体の産状から、過去における環境の一部である古植生について考察する。

１）周辺の地形・地質概観

原の東遺跡の位置は、筑後川の中流域に形成された筑後平野の北東部に相当する。この地域の筑後平野の北部には中生代に形成された主に結晶片岩からなる三郡変成岩や主にカコウ閃緑岩からなる白亜紀深成岩類が分布する三郡山地（日本の地質九州地方編集委員会，1992）が広がっている。筑後平野の北縁部には、この三郡山地から筑後平野に流れ込む筑後川の支流が形成した開析扇状地が分布している（経済企画庁，1970）。原の東遺跡が位置する台地は、筑後川の支流の一つである妙見川が形成した開析扇状地に相当する。筑後平野北縁部の扇状地は段丘化しており、その形成年代により高位、中位、低位というように区分されることが多い。経済企画庁（1970）では筑後平野北縁部の開析扇状地のほとんどが中位砂礫台地に分類されているが、有明海研究グループ（1969）による分類では低位段丘面に分類されている。原の東遺跡が位置する台地の標高やローム層および黒ボク土層の厚さなどの記載は、有明海研究グループ（1969）の中位段丘に近い。したがって、遺跡の位置する台地は、中位段丘に対比される可能性がある。中位段丘の形成年代については、同じ記載により、段丘礫層直上に堆積する八女粘土層より出土した炭化材の放射性炭素年代が約3.3万年前であることから、後期更新世の後半であると考えられる。すなわち、遺跡の位置する台地が中位段丘面に対比されるとすれば、その段丘化した年代は３万年前よりは古く、低位段丘に対比されるとすれば、３万年前よりは新しい可能性がある。後者の場合、遺跡が位置する段丘の形成年代は姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ：町田・新井，1976）降灰後であることも考えられるが、現時点では調査報告例はない。



第230図　Ⅱ・Ⅲ区の模式土層断面および分析層位

2）試　料

層序対比および植物珪酸体分析の対象とした土層断面は、Ⅱ区、Ⅲ区１トレンチ、Ⅲ区２トレンチの３ヶ所である。調査区内の層序は、現地所見により上位より１層から11層まで区分され、状況により各層が細分されている。発掘調査による遺構、遺物の出土状況は概ね以下の通りである。１層は現表土、２層は飛鳥時代の住居跡や土坑が検出されている。３層は３ａ層と３ｂ層とに細分され、上位の３ａ層では古墳が構築されており、下位の３ｂ層では弥生時代前期～中期の住居跡や貯蔵穴、土坑などが検出されている。４層では縄文晩期の貯蔵穴および土坑が検出され、５～６層は縄文時代早期の石組炉や土坑、押型文土器などが出土している。７層からは縄文草創期の土器が出土している。１層から７層までは、黒色また暗褐色を呈する火山灰質土壌いわゆる黒ボク土層に相当する。なお、その中で４層はやや褐色味が強い。７層の下位の８層からは、旧石器時代の細石刃が出土しており、さらに下位の９層～11層では旧石器時代のナイフ形石器を中心とする石器が出土している。10層より下位の土壌は、褐色火山灰質土のいわゆるローム層であり、８層および９層は、黒ボク土層からローム層に至る漸移層に相当する。

試料が採取された上記３カ所の断面では、いずれも全ての層が区分されているわけではない。

各地点の土層を柱状図にして図示する（第230図）。試料は各層より１点ずつ採取され、Ⅱ区５層、Ⅱ区７層、Ⅲ区１トレンチの９ａ層、９ｂ層、10ａ層、10ｃ層、Ⅲ区２トレンチの３ａ層、４層、５層、６ａ層、10ｃ層、11層の合計12点である。

３）分析方法

（１）テフラ分析

試料を適量蒸発皿に取り水を加え、小型超音波洗浄装置により分散、泥水を流し去る。この操作を繰り返すことにより、泥分を除去する。得られた砂分を実体鏡下で観察し、スコリア、火山ガラス、軽石の産状および特徴を調べる。

（２）植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，１分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

４）結　果

（１）テフラ分析

各試料の分析結果を第16表に示す。

Ⅲ区２トレンチ11層を除く11点の試料には、微量～多量の火山ガラスが認められた。火山ガラスは、細砂径から試料によっては粗砂径のものまである。無色透明でつなぎ目のある平板状のいわゆるバブル型が非常に多く、少

第16表　テフラ分析結果

調査区	トレンチ	層名	スコリア	火山ガラス			軽石
			量	量	色調・形態	粒径	量
Ⅱ区		5層	－	＋	cl・bw〉〉cl・pm〉br・bw	f.s.	－
		7層	－	＋	cl・bw〉〉cl・pm〉br・bw	f.s～m.s.	－
Ⅲ区	1	9ａ層	－	＋＋＋	cl・bw〉〉cl・pm〉br・bw	f.s～c.s.	－
		9ｂ層	－	＋＋＋	cl・bw〉〉cl・pm〉br・bw	f.s～c.s.	－
		10ａ層	－	＋＋	cl・bw〉〉cl・pm〉br・bw	f.s～c.s.	－
		10ｃ層	－	＋	cl・bw〉〉cl・pm〉br・bw	f.s.	－
	2	3ａ層	－	＋＋	cl・bw〉〉cl・pm〉br・bw	f.s～c.s.	－
		4層	－	＋＋＋	cl・bw〉〉cl・pm〉br・bw	f.s～c.s.	－
		5層	－	＋＋＋	cl・bw〉〉cl・pm〉br・bw	f.s～c.s.	－
		6ａ層	－	＋＋＋＋	cl・bw〉〉cl・pm〉br・bw	f.s～c.s.	－
		10ｃ層	－	＋	cl・bw〉〉cl・pm〉br・bw	f.s.	－
		11層	－	－	－	－	－

凡例　－：含まれない　＋：微量　＋＋：少量　＋＋＋：中量　＋＋＋＋：多量
cl：無色透明　br：褐色　bw：バブル型　md：中間型　pm：軽石型
f.s.：細砂 m.s.：中砂　c.s.：粗砂

量の発泡した軽石型火山ガラスと微量の褐色を帯びたバブル型火山ガラスが混在する。火山ガラスが特に多く含まれていたのは、Ⅲ区２トレンチ６ａ層であり、Ⅲ区２トレンチ５層や４層、Ⅲ区１トレンチ９ａ層、９ｂ層にも比較的多くの火山ガラスが含まれる。スコリアおよび軽石は、どの試料でも全く認めることはできなかった。

（２）植物珪酸体分析

結果を第17表に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が極めて悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められ、検出個数も概して少ない。そのため、植物珪酸体組成が歪曲される可能性があり、検出個数を一覧表に示すにとどめる。以下に、各地点毎に結果を述べる。

・Ⅱ区

５層と７層では、タケ亜科やヨシ属、ウシクサ族がわずかに認められる。

・Ⅲ区

１トレンチの９ａ層、９ｂ層、10ａ層、10ｃ層、２トレンチの４層、５層、６ａ層、10ｃ層、11層では、タケ亜科やウシクサ族がわずかに認められるに過ぎない。

２トレンチの３ａ層では、タケ亜科の産出が目立ち、この中にはネザサ節も多く見られる。また、ウシクサ族やヨシ属、イチゴツナギ亜科なども見られる。なお、栽培植物のイネ属がわずかに認められる。

第17表　植物珪酸体分析結果

種類	地区名	Ⅱ区		Ⅲ区									
				１トレンチ				２トレンチ					
	層名	5層	7層	9a層	9b層	10a層	10c層	3a層	4層	5層	6a層	10c層	11層
イネ科葉部短細胞珪酸体													
イネ族イネ属		−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
タケ亜科ネザサ節		−	−	−	−	−	−	23	−	−	−	−	−
タケ亜科		7	1	5	8	9	2	114	11	3	6	1	−
ヨシ属		−	−	−	−	−	−	4	−	−	−	−	−
ウシクサ族ススキ属		1	−	3	2	2	−	16	4	2	3	−	−
イチゴツナギ亜科		−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	−	−
不明キビ型		1	2	1	3	1	−	13	−	1	−	−	1
不明ヒゲシバ型		2	−	−	1	−	−	7	−	1	1	−	−
不明ダンチク型		2	1	−	−	−	−	21	2	1	−	−	−
イネ科葉身機動細胞珪酸体													
イネ族イネ属		−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−
タケ亜科ネザサ節		−	−	−	−	−	−	21	−	−	−	−	−
タケ亜科		5	2	4	2	1	2	68	5	5	6	1	−
ヨシ属		1	1	1	−	1	−	1	1	−	−	−	−
ウシクサ族		2	−	−	−	−	−	17	2	−	1	−	−
不明		−	−	−	1	1	−	21	2	−	1	−	1
合計													
イネ科葉部短細胞珪酸体		13	4	9	14	12	2	202	17	8	10	1	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体		8	3	5	3	3	2	130	10	5	8	1	1
総計		21	7	14	17	15	4	332	27	13	18	2	2

5）考　察

（1）層序の検討

試料中より検出された火山ガラスのうち、褐色を帯びたバブル型火山ガラスは、その形態と色調および産出層位と遺跡の地理的位置から、約6,300年前に九州南方の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K－Ah：町田・新井，1978）に由来する。一方、火山ガラスの主体を占める無色透明のバブル型火山ガラスは、広い層位にわたって比較的多量に拡散していることからK－AhおよびATの両者に由来する火山ガラスが混在している可能性がある。

両テフラの火山ガラスを識別する方法の一つとして屈折率の測定がよく用いられるが、本分析でも上記のような火山ガラスの産状であることから、古澤（1995）の温度変化法による屈折率測定の概査を行った。最近の測定例では、K－Ahがn1.508－1.516であり、ATがn1.498－1.501とされている（町田・新井，1992）。今回の概査では、Ⅲ区1トレンチの9b層およびⅢ区2トレンチの6a層にはATに由来する火山ガラスが多く、Ⅲ区2トレンチ4層の火山ガラスにはK－Ahに由来する火山ガラスが多い。これらのことから、Ⅲ区1トレンチの9a層および9b層の層位中にATの降灰層準がある可能性が高く、Ⅲ区2トレンチの4層にK－Ahの降灰層準がある可能性が高い。Ⅲ区2トレンチにおけるATの降灰層準は、同区1トレンチの産状から推定すれば、6a層よりも下位の6b層から10a層にかけての層位にあると考えられる。

上記両テフラの降灰層準と遺構・遺物の検出、出土層位との関係では、4層のK－Ahの下位に5層以下の縄文時代早期の層位があり、ATとほぼ同層位および下位にナイフ形石器の出土層準がある。また、縄文時代草創期の7層および細石刃の出土する8層は、ATとK－Ahの間に入ることになる。

Ⅱ区5層と7層については、K－Ahの降灰層準より下位になると考えられるが、ATより下位になるとは考えられない。Ⅱ区の5層と7層においてⅢ区2トレンチのようにATより上位の層位でも多量の火山ガラスが含まれていないのは、Ⅱ区の5層から7層にかけての土壌層の形成過程において削剥と再堆積が繰り返されるなどⅢ区とは異なっていたことを示唆している。

（2）古植生について

Ⅱ区およびⅢ区試料の植物珪酸体の検出個数は概して少なかったが、産状を見る限り、11層～4層の各層が堆積する頃には少なくとも検出されたタケ亜科やウシクサ族、ヨシ属などが生育していたことがうかがえる。

古墳が確認されたⅢ区2トレンチの3a層ではタケ亜科の産出が目立ち、この中にはネザサ節も多く見られた。ネザサ節は、地面に光の射す開けた場所に生育する（室井，1960）ことが知られていることから、調査区周辺が開けた場所であったことがうかがえる。また、下位の層

と同様にウシクサ族やヨシ属なども見られ、同様なイネ科植物が生育していたと思われる。

なお、本層からは栽培植物のイネ属がわずかに認められた。このイネ属が土層中に混入した要因については、畑作を含めた稲作に由来すること、燃料材などの利用のために持ち込まれたこと、後代の撹乱による落ち込みの可能性が考えられるが、現段階では判別できない。今後、同層位を含めた堆積層でのイネ属の産状を複数地点で確認することにより、検討できよう。

ところで、多くの場合、黒ボク土層中では植物珪酸体は比較的多く産出するが、Ⅲ区２トレンチ３ａ層以外の層ではその産出が非常に乏しかった。これらの層のうち、縄文時代とされるⅢ区６ａ層～４層および縄文時代の土層の可能性のあるⅢ区１トレンチ９ａ層や９ｂ層については、前述のようにＫ－Ａｈに由来する火山ガラスなどの砕屑物が多いことから、これらの砕屑物により土壌中の植物珪酸体が希釈されたことが考えられる。また、Ⅱ区の土層については、層序の項で述べたように土層自体が削剥と再堆積により形成された可能性があるから、当然のことながら植物珪酸体の残存状況も悪いことが考えられる。

引用文献

有明海研究グループ（1969）九州地方の第四系．地団研専報15　日本の第四系，ｐ．411－427.

古澤　明（1995）火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101，ｐ．123－133.

経済企画庁総合開発局（1970）土地分類図40　福岡県.

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，ｐ．31－64.

日本の地質「九州地方」編集委員会（1992）日本の地質９　九州地方．371ｐ．，共立出版.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良Ｔｎ火山灰の発見とその意義－．科学，　46，ｐ．339－347.

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰．第四紀研究，17，ｐ．143－163.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．276ｐ．，東京大学出版会.

室井　綽（1960）竹笹の生態を中心とした分布．富士竹類植物園報告，ｐ．103－122.

2　原の東遺跡出土遺物の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

原の東遺跡では、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代の遺物・遺構が確認されている。今回は出土した遺物のうち、石器石材の産地に関する基礎資料を蓄積することを目的とした自然科学分析調査を実施する。

調査内容は、まず岩石肉眼鑑定を実施し、石材の傾向を把握した。この段階で安山岩質の石器と黒曜石の石器を選択し、前者については岩石薄片作製鑑定、後者については蛍光X線分析を実施し、岩石学的な検討を行った。この調査成果に基づいて、石材産地に関する検討を行った。なお、今回の調査では、調査目的を考慮して、参考資料として九州各地で採取された岩石についても分析を実施した。以下に調査結果について報告する。

1　安山岩製石器の薄片作製鑑定

1）試　料

安山岩を材質とする石器３点の岩石学的性状を明らかにするため、試料を切断し、0.03mmの厚さに研磨して薄片を作製した後、顕微鏡観察を行った。また比較試料として、佐賀県多久の２点と福岡県星野村の１点についても実施した（第18表）。以下にその結果を報告する。

第18表　ガラス質安山岩試料表

遺跡・調査地点名	試料名	出土層位	時代観
原の東遺跡	3－2241	10c層	旧石器時代
原の東遺跡	3－1592	8層	縄文時代草創期
原の東遺跡	2－5913	5層下部	縄文時代早期
佐賀県多久東ノ原	多久東ノ原		
佐賀県多久老松山	多久老松山		
福岡県星野村大草平	星野村大草平		

2）結　果

鑑定結果を第19表に示す。

（1）原の東遺跡３－2241

岩石名：含角閃石ガラス質安山岩

岩石の組織：ガラス基流晶質組織（ハイアロピリティック組織）

斑晶

斜長石：少量存在し、粒径1.1～0.10mmの板状または柱状を呈し、大型のものは不規則な虫食い状の融食組織を有している。一部に集片双晶および累帯組織が発達している。

第19表　顕微鏡観察一覧表

試料名	斑晶				石基							岩石の組織
	Pl	Ho	Cpx	Opx	Pl	Ho	Cpx	Opx	Op	Xt	Gl	
3－2241　含角閃石ガラス質安山岩	△	＋			△	＋			＋	○	◎	ガラス基流晶質
3－1592　含角閃石ガラス質安山岩	△	＋			△	＋			＋	○	◎	ガラス基流晶質
2－5913　ガラス質単斜輝石斜方輝石安山岩	±		＋	△	±		＋	＋		○	◎	ガラス基流晶質
多久東ノ原　斜方輝石単斜輝石安山岩			△	＋	△～＋		＋	＋		○	◎	ガラス基流晶質
多久老松山　ガラス質単斜輝石安山岩	±		＋	＋	○～△		△	△			◎	ガラス基流晶質
星野村大草平　含角閃石ガラス質安山岩	△	△～＋			△	±			＋	○	◎	ガラス基流晶質

注
鉱物略号　Pl：斜長石　Ho：角閃石　Cpx：単斜輝石　Opx：斜方輝石　Op：不透明鉱物　Xt：晶子　Gl：火山ガラス
量比　◎：多量　○：中量　○～△：中量～少量　△：少量　△～＋：少量～微量　＋：微量　±：きわめて微量

角閃石：微量で存在し、粒径0.65～0.10mmの自形～他形粒状を呈し、淡褐色～緑褐色の顕著な多色性を有する。一部に単純双晶が見られる。

石基

斜長石：少量存在し、長さ0.10～0.05mmの半自形柱状で石基中に散在する。

角閃石：微量存在し、粒径0.10mm以内の柱状・粒状を呈し、石基中に点在する。

不透明鉱物：微量で存在し、粒径0.13～0.01mmの自形粒状を示す。黒色鉄鉱物で、形状から磁鉄鉱が大部分であると判定される。

晶子：中量存在し、長さ0.03mm以下の針状で石基ガラス中に析出している。形状からその大部分は斜長石と判定される。

ガラス：多量存在し、石基の最も重要な構成物となっている。無色透明であるが、無数の晶子と析出しているためにやや濁った色感を与える。

（2）原の東遺跡3－1592

岩石名：含角閃石ガラス質安山岩

岩石の組織：ガラス基流晶質組織（ハイアロピリティック組織）

斑晶

斜長石：少量存在し、粒径0.40～0.10mmの自形板状または他形破片状を呈する。一部に集片双晶および累帯組織が発達している。

角閃石：微量で存在し、粒径0.42～0.10mmの自形～他形粒状を呈し、淡褐色～緑褐色の顕著な多色性を有する。一部は骸晶質である。

石基

斜長石：少量存在し、長さ0.10～0.05mmの半自形柱状で石基中に散在する。

角閃石：微量存在し、粒径0.10mm以内の長柱状・短柱状を呈し、石基中に点在する。

不透明鉱物：微量で存在し、粒径0.20～0.01mmの自形粒状を示す。黒色鉄鉱物で、形状から磁鉄鉱が大部分であると判定される。

晶子：中量存在し、長さ0.03mm以下の針状で石基ガラス中に析出している。形状からその

大部分は斜長石と判定される。

ガラス：多量存在し、石基の最も重要な構成物となっている。無色透明であるが、無数の晶子と析出しているためにやや濁った色感を与える。

その他

本試料は前項の３－2241　含角閃石ガラス質安山岩の斑晶鉱物の組み合わせと特徴、並びに石基の組織が同一で、同一岩体に由来したと判定される。

（３）原の東２－5913

岩石名：ガラス質単斜輝石斜方輝石安山岩

岩石の組織：ガラス基流晶質組織（ハイアロピリティック組織）

斑晶

斜方輝石：少量存在し、粒径0.90～0.03mmの半自形柱状または半自形～他形粒状を呈し、しばしば外縁には単斜輝石のリムが見られる。エンスタタイト質で、薄片の色は無色で多色性は認められない。直消光し、正の伸長性を示す。

単斜輝石：微量存在し、粒径0.30～0.05mmの半自形柱状または粒状を呈する。斜方輝石と共在し、しばしば斜方輝石の外縁にリム状で析出している。薄片の色は無色で多色性はなく、斜消光する。

斜長石：きわめて微量で存在し、粒径最大0.15～0.10mmの半自形薄板状を呈する、

石基

斜長石：きわめて微量で存在し、粒径0.10mm以下の薄板状または長柱状を呈する。

単斜輝石：微量存在し、粒径0.02mm以下の柱状および粒状を呈する。色調は斜方輝石ともどもほとんど無色で、斜消光する。

斜方輝石：微量存在し、粒径0.02mm以下の短柱状を呈する。直消光することで単斜輝石と区別される。

晶子：中量存在し、長さ0.02mm以下の針状を呈する。斜長石の微晶と判定される。

ガラス：多量存在し、石基の大部分を構成する。無色透明で、斑晶・石基鉱物の粒間を充填し、晶子を析出している。

変質鉱物：本試料はきわめて新鮮で変質鉱物は見られない。

（４）多久東ノ原

岩石名：ガラス質斜方輝石単斜輝石安山岩

岩石の組織：ガラス基流晶質組織（ハイアロピリティック組織）

斑晶

斜方輝石：微量存在し、粒径0.90～0.03mmの半自形長柱状または半自形～他形粒状を呈し、外縁には単斜輝石のリムを伴う。エンスタタイト質で、薄片の色は無色、多色性は認めら

れない。直消光し、正の伸長性を示す。

単斜輝石：少量存在し、粒径0.90～0.05mmの半自形長柱状または粒状を呈する。斜方輝石と共在し、柱状の斜方輝石の外縁にリム状で析出するもののほかに半自形を示す板状の輝石が見られる。薄片の色は無色で多色性はなく、斜消光する。

石基

斜長石：少量～微量で存在し、粒径0.10mm以下の薄板状または長柱状を呈するものと、晶子が長さ0.05mm程度の針状で斜長石の光学性が判別される程度に成長したものがある。

単斜輝石：微量存在し、粒径0.02mm以下の柱状および粒状を呈する。色調はほとんど無色で、斜消光する。

斜方輝石：微量存在し、粒径0.02mm以下の短柱状を呈する。直消光することで単斜輝石と区別される。

晶子：中量存在し、長さ0.02mm以下の針状を呈する。斜長石の微晶と判定される。

ガラス：多量存在し、石基の大部分を構成する。無色透明で、斑晶・石基鉱物の粒間を充填し、晶子を析出している。

変質鉱物：本試料もきわめて新鮮で、変質鉱物は見られない。

その他

本試料は前項の試料２－5913と輝石類の産状および石基の組織が類似している。おそらく同一岩体からもたらされた岩石であろう。

（５）佐賀県多久老松山

岩石名：ガラス質単斜輝石斜方輝石安山岩

岩石の組織：ガラス基流晶質組織（ハイアロピリティック組織）

斑晶

単斜輝石：微量で存在し、粒径1.2mmの他形粒状を呈するものがあり、外縁は斜方輝石のリムが生成されている。一般には0.10～0.55mmの自形～他形で粒状を呈するものが多い。

斜方輝石：微量存在し、粒径0.20～0.04mmの半自形柱状または粒状を呈する。

斜長石：きわめて微量で存在し、長さ0.18mmの柱状を呈する。

石基

斜長石：中量～少量存在し、長さ0.03～0.02mmの針状に伸長した晶子質斜長石として石基ガラス中に散在している。

単斜輝石：少量存在し、粒径0.02mm以下の柱状および粒状を呈する。色調は斜方輝石ともどもほとんど無色で、斜消光する。

斜方輝石：少量存在し、粒径0.02mm以下の柱状または粒状を呈する。直消光することで単斜輝石と区別される。

ガラス：多量～中量存在する。褐色を呈する火山ガラスで、石基の大部分を形成している。

（6）福岡県星野村大草平

岩石名：含角閃石ガラス質安山岩

岩石の組織：ガラス基流晶質組織（ハイアロピリティック組織）

斑晶

斜長石：少量で存在し、粒径1.13～0.15mmの半自形～他形板状を呈し、一部は粒径1.3mmの集斑状で、虫食い状の融食組織を有し、一部には累帯組織が発達している。

角閃石：少量～微量で存在し、粒径0.35～0.10mmの自形粒状～他形柱状を呈し、一部は骸晶質である。淡黄褐色～褐色の多色性が顕著である。

石基

斜長石：少量存在し、長さ0.10mm以下の長柱状を呈し、石基中に散在する。

角閃石：きわめて微量で存在し、粒径0.10mm以下の柱状で石基中に点在する。

不透明鉱物：微量で存在し、粒径最大0.10mmの自形で四辺形を呈する黒色鉱物である。形状から磁鉄鉱と推定される。

晶子：中量存在し、長さ0.03mm以下の針状を呈して、石基ガラス中に析出している。形状からその大部分は斜長石と判定される。

ガラス：多量存在し、無色透明で石基の大部分を構成する。無色透明のガラスであるが、中量の晶子を析出しているために濁った色感を与える。

その他

本試料は試料3－2241および3－1592の含角閃石ガラス質安山岩と同質で、斑晶鉱物の組み合わせと特徴、並びに石基の組織が同一である。

3）考　察

観察試料はいずれもガラス質安山岩であるが、斑晶および石基鉱物の相違と、石基組織から次の3グループに区分される。

1）斑晶鉱物として特徴的に角閃石を含み、輝石類を含まない含角閃石ガラス質安山岩で、原の東遺跡3－2241，3－1592，および福岡県星野村大草平の3試料がこれに属する。原の東遺跡3－2241と3－1592は岩相がきわめてよく相似し、同一岩体に由来すると判定される。福岡県星野村大草平の含角閃石ガラス質安山岩も、原の東遺跡試料と類似した岩相を有している。この種の安山岩は産出例が少なく、特定の地域に限定されると考えられるので、今後も注目していきたい。

2）原の東遺跡2－5913と佐賀県多久東ノ原のガラス質斜方輝石単斜輝石安山岩は、多量の無色透明な火山ガラスを主成分とし、斑晶となる斜方輝石の結晶外縁に単斜輝石がリム状に伴い、

ガラス中に無数の晶子を析出している点で共通した岩相を有している。同一岩体に由来している可能性が、きわめて高い。

3）佐賀県多久老松山の試料は、ガラス質単斜輝石斜方輝石安山岩と前項の2試料と同一の岩石名が与えられる。しかし、石基ガラスの色調・組織に相違が認められ、異なる火山岩岩体に由来していると考えられる。

2　黒曜石製石器の成分分析（蛍光X線分析）

1）試　料

分析試料は6点であり、その出土層位、時代性および肉眼鑑定の結果は第20表に示す通りである。その中で、対照試料とした2点は露頭で採取された黒曜石であり、1点は福岡県八女郡星野村大草平産、もう1点は佐賀県腰岳産である。

第20表　黒曜石製石器の成分分析試料

試料名	出土層位	時代観	肉眼鑑定結果	産地
3－851	10b層	旧石器時代	黒曜石	
3－249	7層	旧石器時代	黒曜石	
2－2274	5層	縄文時代晩期	黒曜石	
3－98	5層	縄文時代晩期	黒曜石	
対照試料1	表採		黒曜石	福岡県八女郡星野村大草平
対照試料2	表採		黒曜石	佐賀県腰岳

注）対照試料の試料名はパリノ・サーヴェイ㈱が報告の便宜上記したものである。

2）分析方法

（1）試料調製

試料を振動ミル（平工製作所ＴＩ100；10ml容タングステンカーバイト容器）で微粉砕し、105℃で4時間乾燥させた。

乾燥試料について、ガラスビートを以下の条件で作成した。

溶融装置；自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー（3491Ａ1）

溶剤及び希釈率；融剤（メタホウ酸リチウム）5.000ｇ：試料0.500ｇ

剥離剤；LiＩ（溶融中1回投入）

溶融温度；1200℃　約7分

（2）測定装置

理学電機工業社製ＲＩＸ1000（ＦＰ法グループ定量プログラム）

（3）測定条件

Ｘ線管；Cr（50Kv－50mA）

スペクトル；全元素Ｋα

分光結晶；LiF、PET、TAP、Ge

検出器；F－PC、SC

計数時間；Peak40～100sec、Back10～50sec

（4）測定項目

主成分10元素；SiO_2 TiO_2 Al_2O_3 Fe_2O_3 MnO MgO CaO Na_2O K_2O P_2O_5

微量成分３元素；Rb Sr Zr

3）結　果

分析結果を第21表に示す。各試料とも主要成分の含有量はケイ酸（SiO_2）が74～77%と最も高く、次いでアルミニウム（Al_2O_3）12～13%、カリウム（K_2O）４～５%、ナトリウム（Na_2O）３～４%、鉄（Fe_2O_3）１%の順である。

この主要成分含量は、第22表に示す日本地質調査所（GSJ）岩石標準試料のJR－１（長野県和田峠（北）産；流紋岩）の成分含量に類似し、各試料が黒曜石（流紋岩～デイサイトに相当するガラス岩石）の成分をよく示している。

対照試料と遺跡出土試料の主成分を比較すると、対照試料でケイ酸が約２%、アルミニウムが約１%低く、強熱減量（LOI）が約３%高い傾向が共通して認められる。

遺跡出土試料４点の比較では、主成分では特徴的な差異は認められないが、微量成分において３－249試料が他の試料に比べてルビジウム（Rb）で約40mg/Kg低く、ストロンチウム（Sr）で約20mg/Kg高い特徴が認められる。

対照試料２点の比較では、主成分は対照試料１（星野村大草原）のチタン（TiO_2）が約0.1%、カルシウム（CaO）が約0.2%対照試料２（佐賀県腰岳）より高く、カリウム（K_2O）が約0.6%低い。微量成分は対照試料１のルビジウム（Rb）が約50mg/Kg低く、ストロンチウム（Sr）が約80mg/Kg、ジルコン（Zr）が70mg/Kg高い。

第21表　原の東遺跡黒曜石成分分析結果

試料名		SiO_2 wt%	Al_2O_3 wt%	Fe_2O_3 wt%	TiO_2 wt%	MnO wt%	CaO wt%	MgO wt%	Na_2O wt%	K_2O wt%	P_2O_5 wt%	Rb mg/Kg	Sr mg/Kg	Zr mg/Kg	LOI wt%
3－851	10b層	74.39	12.82	1.13	0.03	0.05	0.63	0.00	3.83	4.55	0.00	184	27	72	2.57
3－249	7層	74.78	12.67	1.20	0.04	0.04	0.67	0.00	3.97	4.43	0.00	149	44	77	2.20
2－2274	5層	74.23	12.73	1.11	0.03	0.04	0.63	0.00	3.84	4.60	0.00	189	29	66	2.80
3－98	5層	74.55	12.79	1.12	0.03	0.05	0.63	0.00	3.84	4.57	0.00	191	28	65	2.44
対照試料１	（星野村大草平）	76.78	13.34	1.17	0.14	0.07	0.81	0.00	3.71	3.99	0.00	142	109	137	0.00
対照試料２	（佐賀県腰岳）	75.77	13.22	1.12	0.03	0.04	0.63	0.00	3.63	4.56	0.00	194	27	64	0.00

＊単位：乾物あたりのwt%（重量%）、mg/Kg

第22表　日本地質調査所(GSJ)岩石標準試料JR－１の主成分化学分析値（1995）

試料名	SiO2 wt%	Al2O3 wt%	T-Fe2O3 wt%	TiO2 wt%	MnO wt%	CaO wt%	MgO wt%	Na2O wt%	K2O wt%	P2O5 wt%	H2O+ wt%	H2O－ wt%	TOTAL wt%
JR－1	75.45	12.83	0.89	0.11	0.099	0.67	0.12	4.02	4.41	0.021	1.16	0.20	99.98

4）考　察

黒曜石製石器の産地に関する情報を得るために、黒曜石製石器４点と産地のあきらかな黒曜石２点の成分分析（主成分10、微量成分３）を行った。その結果、まず対照試料の黒曜石では、産地の違いによって成分に特徴的な差が認められる。この差から黒曜石石器を分類すると、試料３－851、２－2274、３－98の３点はあきらかに佐賀県腰岳に分類される。しかし、試料３－249はルビジウム、鉄の成分では星野村大草平に分類される含量であるが、チタン、カルシウム、カリウム、ストロンチウム、ジルコン成分はどちらかと言えば佐賀県腰岳に近く、２点の対照黒曜石の分類からはずれる。

今回の分析により、本遺跡から出土した黒曜石製石器の産地に関して、ある程度の情報が得られた結果となった。しかし、生成される岩石の多様性を考えた場合、対照試料２点だけの比較では、分類精度に信頼性が低いと言わざるを得ない。したがって、今回の結果は産地推定の一情報として位置づけ、今後当社で分析される全国各地の標準黒曜石の成分分析結果と再度比較し、分類評価したいと考える。

また、黒曜石製石器では、強熱減量（LOI）が対照試料あるいは岩石標準試料JR－１に比較してあきらかに高く、特徴的成分として認められる。強熱減量は一般に化合水（H_2O^+）や炭酸（CO_2）などの気散物質の含量とされるが、今回の分析ではその成分内容はわからない。一般的に黒曜石ではそのほとんどが結晶化合水（H_2O^+）とされるが、この点については元素分析（C/H/N/S）によって明らかにする必要があろう。

引用文献

理学電機工業株式会社（1982）『蛍光Ｘ線分析の手引』.

3　Ｃ－14試料による年代測定

Ⅱ区の33号石組炉から検出された炭化材について、日本アイソトープ協会に年代測定を依頼し、下記の報告を得た。

社団法人　日本アイソトープ協会

昭和63年３月30日に受け取りましたＣ－14試料の測定結果がでましたのでご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	Ｃ－14年代
Ｎ－5371	ＫＯＦ４ＮＯ，８	8820±915yB.P.（8560±890yB.P.）

年代は^{14}Ｃの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（yearsＢ．Ｐ）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、^{14}Ｃ年代がこの範囲に含まれる確率は約70％です。この範囲を２倍に拡げますと確率は約95％となります。なお、^{14}Ｃ年代は必ずしも真の年代とひとしくない事にご注意ください。

図版１　砂分の状況および火山ガラス

1. 砂分の状況（Ⅱ区５層）

0.5mm

2. 砂分の状況（Ⅲ区９ａ層）

1mm

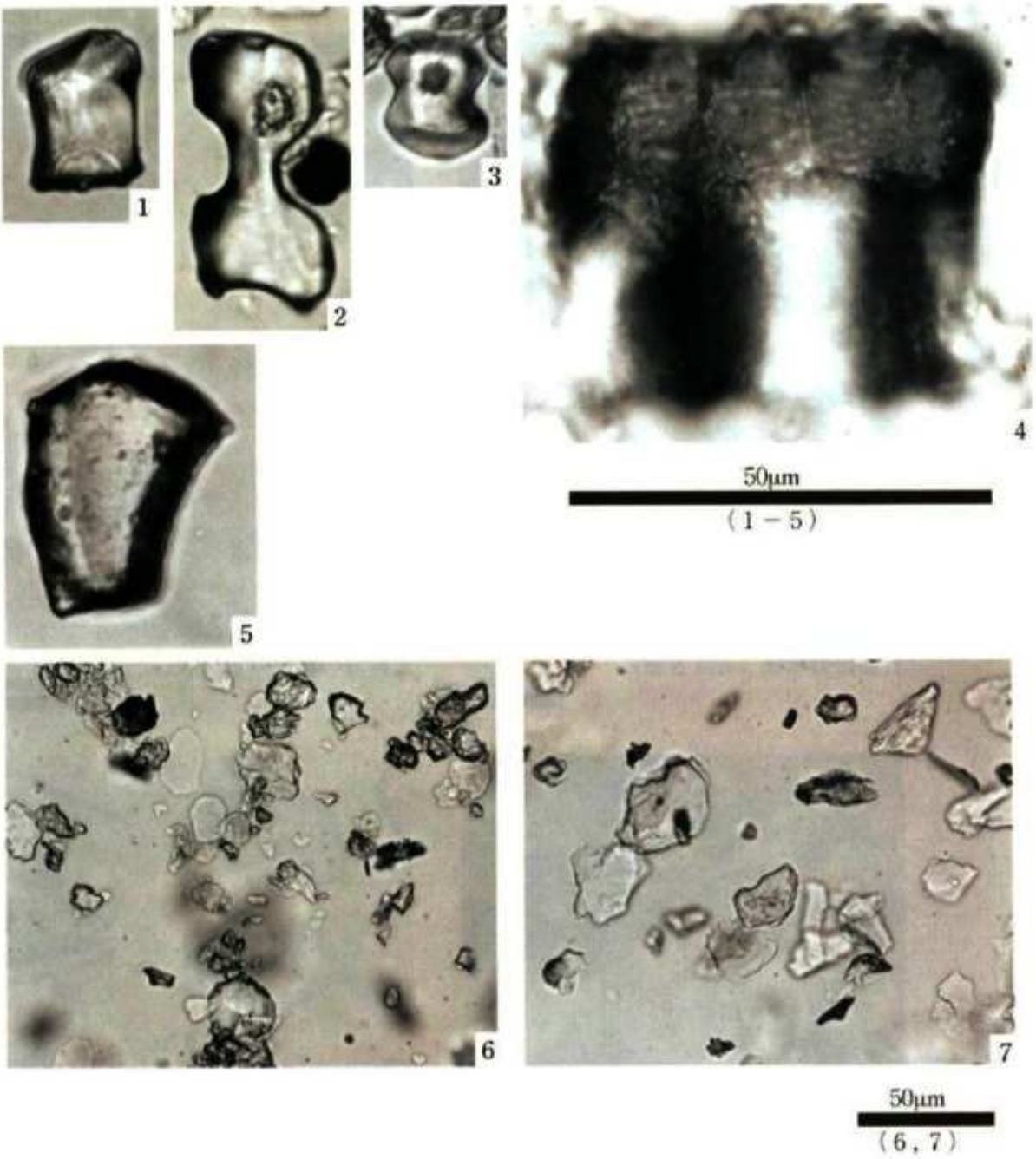
3. 砂分の状況（Ⅲ区11層）

4mm

4. K-Ａｈの火山ガラス（Ⅲ区９ａ層）

0.5mm

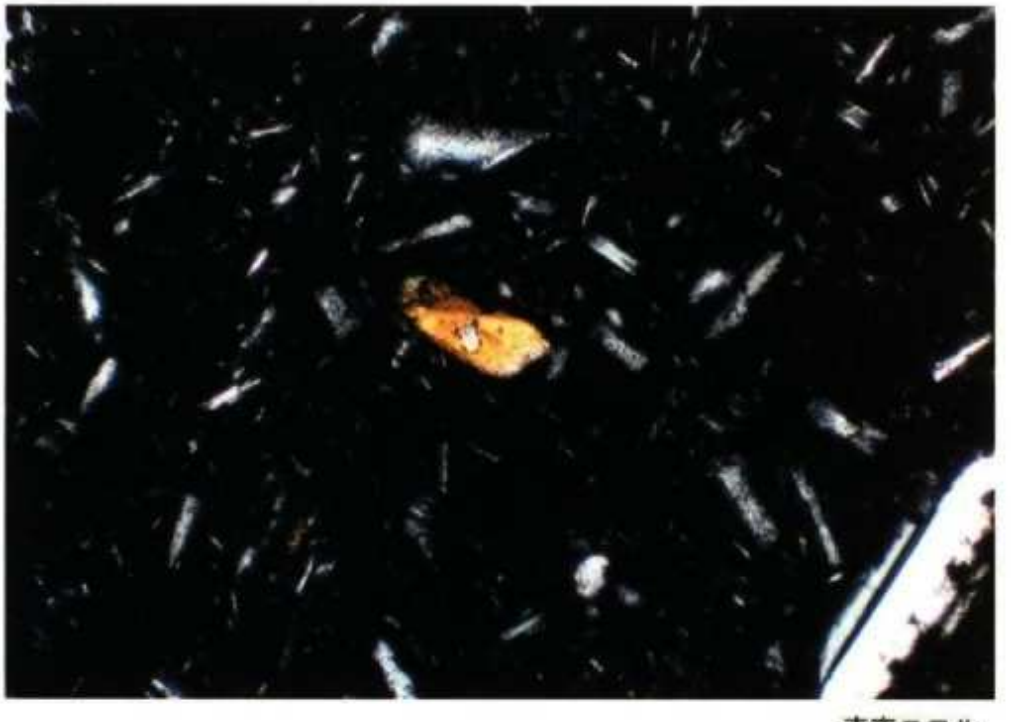
図版２　植物珪酸体



1. タケ亜科短細胞珪酸体（Ⅲ区３ａ層）
2. ススキ属単細胞珪酸体（Ⅲ区３ａ層）
3. ヨシ属短細胞珪酸体（Ⅲ区３ａ層）
4. ネザサ節機動細胞珪酸体（Ⅲ区３ａ層）
5. ウシクサ族機動細胞珪酸体（Ⅲ区３ａ層）
6. 状況（Ⅲ区９ａ層）
7. 状況（Ⅱ区７層）

図版３　岩石薄片顕微鏡写真

平行ニコル



直交ニコル

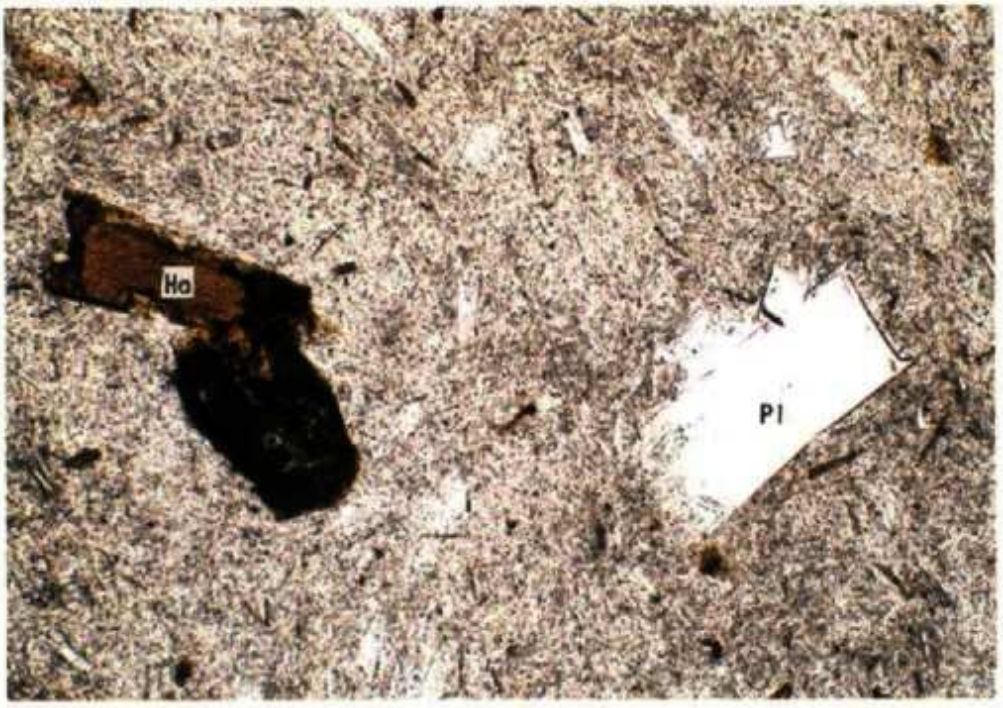
0　0.2mm

鉱物等略号

Pl：斜長石　Ho：角閃石　Cpx：単斜輝石　Opx：斜方輝石　Gm：石基　P：孔隙

原の東遺跡　３－２２４１

図版４　岩石薄片顕微鏡写真



平行ニコル

直交ニコル

0　0.2mm

原の東遺跡　３－１５９２

図版５　岩石薄片顕微鏡写真

平行ニコル

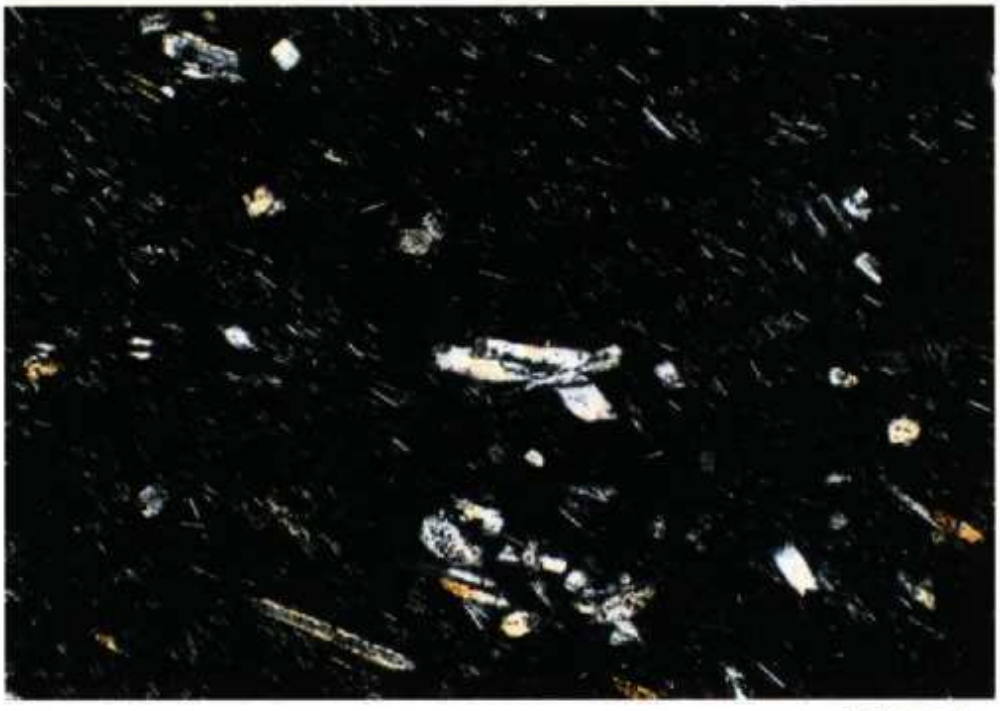
直交ニコル

0　　0.2mm

原の東遺跡　２－５９１３

図版6　岩石薄片顕微鏡写真

平行ニコル

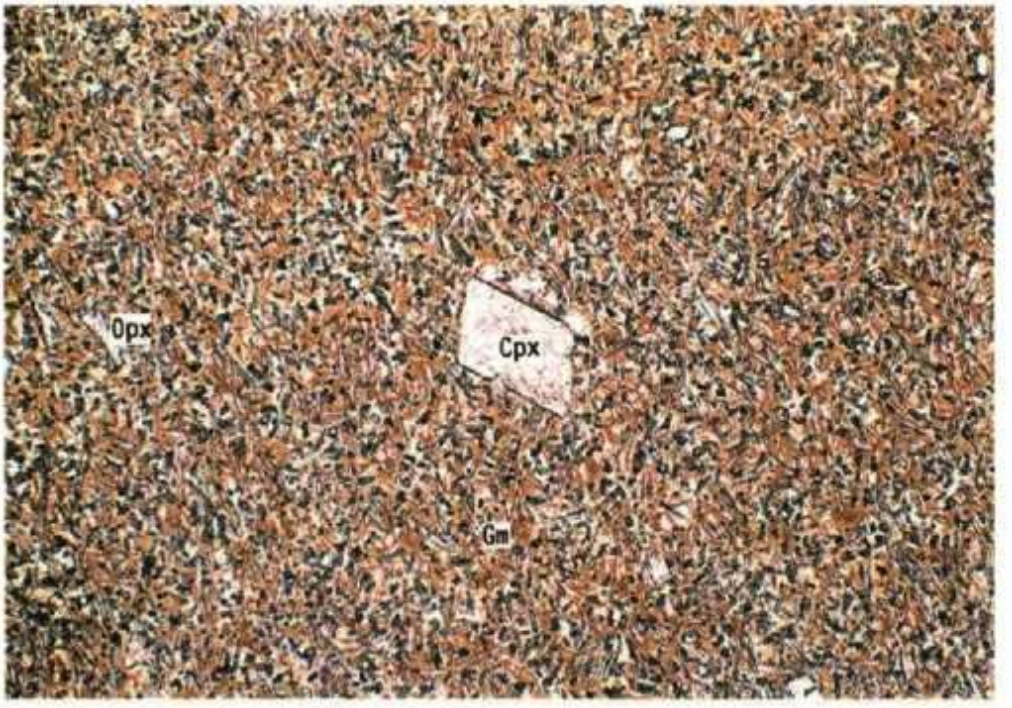


直交ニコル

0　0.2mm

佐賀県多久東ノ原　対象試料

図版７　岩石薄片顕微鏡写真



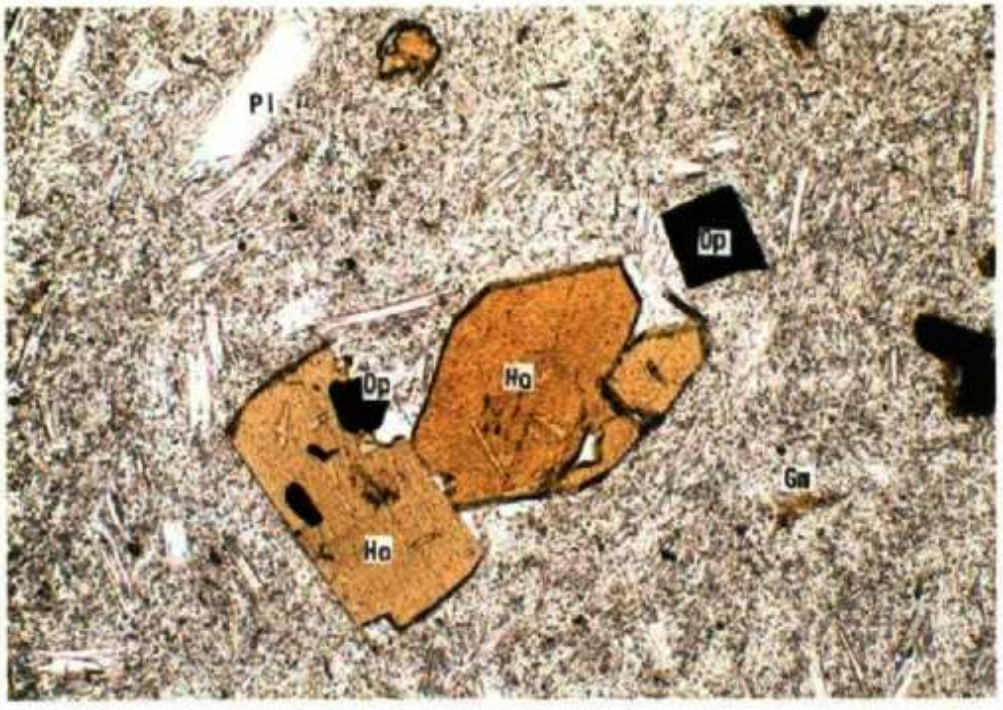
平行ニコル

直交ニコル

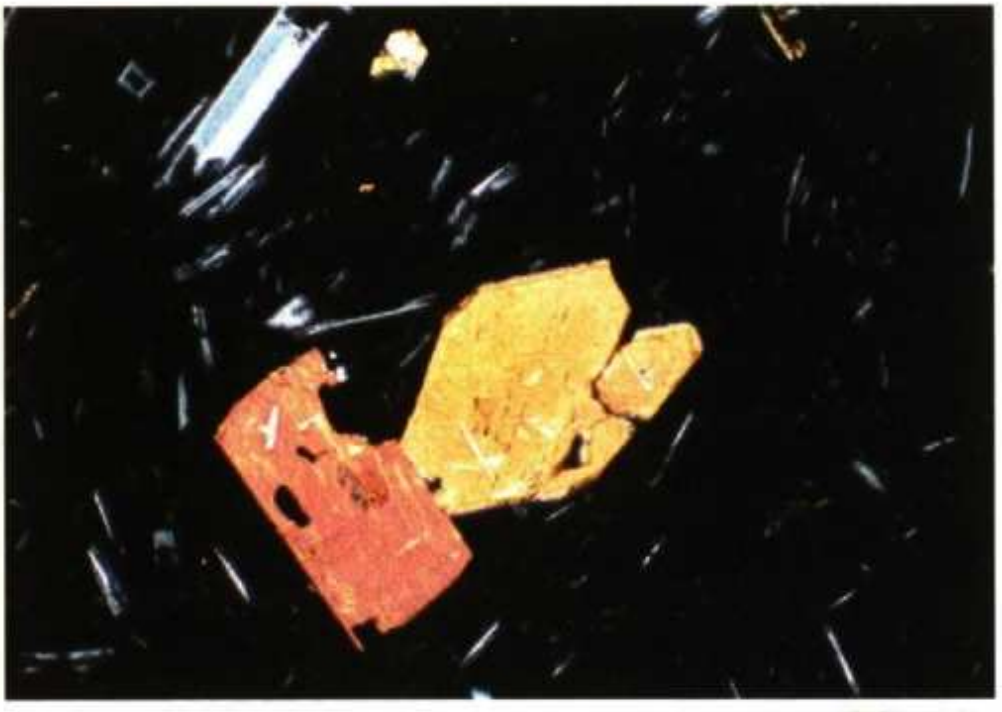
0　0.2mm

佐賀県多久老松山　対象試料

図版８　岩石薄片顕微鏡写真



平行ニコル



直交ニコル

0　0.2mm

福岡県星野村　対象試料

V 総　　括

原の東遺跡は、時期別文化層で７世紀後半代→５世紀代→弥生時代中期→弥生時代前期→縄文時代晩期→縄文時代早期→縄文時代草創期→旧石器時代の８期にわたって遺構が検出されまれにみる複合遺跡であることが判明した。この項では各時代ごとに若干の考察をし、まとめとしておきたい。

1　古墳の築造と変遷

当該地区の古墳時代の墓地については、古くは昭和39年の福岡県立朝倉高等学校史学部による妙見古墳群の調査例がある。妙見古墳群は、原の東遺跡の東側に位置する八手状に広がる標高80.0mの丘陵上にあり、この時の調査では、６世紀後半頃から７世紀にかけての円墳31基と若干の箱式石棺墓、石棺系竪穴式石室が確認されている。その後柿造園のためにこれらの古墳は破壊され消滅した。

その後、九州横断自動車道建設に伴い昭和62年に調査した妙見墳墓群と妙見古墳群（６号・７号墳）の調査地点が一部重複していることが判明した。この結果から、八手状に展開する丘陵上には後期古墳の下には４世紀代の墳墓群が数多く分布していることが推測される。

また、昭和58年に調査した堤古墳は、原の東遺跡の東南約120mに位置し、５世紀前半頃の石棺系竪穴式石室が構築されていた。

このように妙見川の東側の中位段丘上には４世紀代から６・７世紀代にかけての一大奥津城が形成されていたことが判明した。

この墓地群の上限が４世紀代から始まるのか３世紀代にまで遡るのかが現時点では不明であるが、まず、妙見墳墓群の古い段階の墳墓群が丘陵上に築造される。墳墓形態は方形周溝墓状あるいは単独墓をなし、主体部は箱式石棺と岩盤刳貫墓が主体で若干の木棺墓と石棺系石室が存在し、墳墓群の中で石棺系石室が構築されているのは１基のみで、主体部形態では新しい範疇に入るが概ね４世紀代の墳墓群と位置付けられる。

５世紀代になると原の東遺跡に円墳や方墳が築造される。しかし、原の東遺跡は５世紀前半代から始まり、４世紀末から５世紀初頭頃の古墳群が確認されておらず、恐らく、妙見古墳群の築造された丘陵上に存在する可能性が指摘できよう。

５世紀前半代から中頃には墓地群は丘陵南側の台地上に築造されるようになる。原の東遺跡や堤古墳が相当するが、原の東遺跡の古墳群と堤古墳とは直線距離にして120mほどの距離に

あり、両者は一大集団墓内の異なる小集団墓と推測される。堤古墳の周辺にも原の東遺跡と同様の古墳群が形成されている可能性が強い。

調査した5世紀前半代の古墳は円墳や方墳が重複することなく築造され、その主体部は竪穴式石室・石棺系竪穴式石室・箱式石棺などが採用されている。古墳群の中では一段と規模の大きい3号墳と17号墳が注目されるが、17号墳については主体部を確認していない。3号墳は激しい盗掘を受けてはいたが、豊富な副葬品が出土しており、17号墳に追随する立場の被葬者が埋葬されていた可能性が指摘できる。

さらには、11号・15号墳（12号も可能性がある）は古墳群の中でも新しい竪穴系横口式石室が導入されており、これらは当然5世紀前半代の古墳群よりは後出する古墳で、出土土器がなく不明瞭であるが、5世紀前半から中頃に位置付けられると考えられる。

5世紀後半から6世紀中頃の古墳群が把握されていないものの、6世紀後半から7世紀にかけての古墳群は再度東側の丘陵上に築造される。これらの古墳群は4世紀代の墳墓群を破壊しており、明らかに墓地群の存在とは関係なく築造をしている。このように、当該地域は4世紀代から7世紀代にかけての地域集団の累代の奥津城を形成していたことが判明した。

2　弥生時代の遺構について

原の東遺跡の弥生時代は、第1次調査を含めて前期末から中期中頃を中心とした竪穴住居群と中期前半代の甕棺墓を主体とする墓地群を検出した。

前期末から中期前半にかけての竪穴住居は、Ⅰ区で1軒、Ⅱ区では明確なのが7軒で出土土器がなく不明な住居が5軒（前期末～中期初頭の可能性が強い）、Ⅳ区で1軒を検出した。この住居群に伴う墓地群がⅠ区で検出した甕棺墓・木棺墓・土壙墓で所謂縦列埋葬の墓地群であり、朝倉郡では弥生時代中期初頭頃から知見される形態である。

墓地と集落の位置関係では、中位段丘の西端に北東から南西方向に墓地群を形成し、その東側に集落を構成する。Ⅳ区で検出した中期初頭から前半頃の竪穴住居から、墓地群の北限はⅠ区で完結しているようである。この中で、第1次調査で検出した1号住居と墓地群との関係であるが、両者があまりに近接している点が指摘できる。住居は出土遺物や墓地との重複がないことから中期初頭から前半頃に比定され、墓地群の時期とは並行しており、墓地と直接関係した施設の可能性が考えられる。

さらには、すべてではないものの竪穴住居には1基乃至2基の屋外貯蔵穴を付設しており、竪穴住居、墓地群、貯蔵穴の3点セットが揃った恰好の資料といえよう。

（佐々木）

3　石組炉と集石遺構

原の東遺跡Ⅱ・Ⅲ区５層から38基の石組炉と９基の集石遺構が検出された。その一覧は第23・24表に示す通りである。石組炉は基本的に掘方を有し、その内部に石材を配したもので、形態からＡ～Ｄ類に分けられる。Ａ類は敷石状を呈す石組炉で、28・38号の２基、Ｂ類は花弁状を呈し床石を有す石組炉で30基と石組炉全体の79％を占める。Ｃ類はＢ類と同様に花弁状を呈すが床石を持たない石組炉で11・30号の２基である。Ｄ類は深い掘方内に多量の石材が見られるもので17・22・25号の３基であり、36号石組炉は集石遺構に含めた方が妥当であろう。

Ｂ類の石組炉の大きさは10号炉が最も小さく33×23cm、次いで23号炉が42×25cmで50cm以下が７基、最大は４号炉で90×68cm、31号炉は85×40cmを測るが、主体は50～60cm大である。深さは４号炉が25cmで最も深く、15cm前後が大半である。

Ｂ・Ｃ類の炉石材内面はほとんど熱を受け赤変し、４号炉のように内部には10cm大の焼けた石材が投入されるが、12号炉に炭が若干認められたほか、Ｂ類の４・５・９・10号炉、Ｃ類の11号炉石材間に灰が残り、Ｃ類の30号炉には灰層があるが、内部で石材を焼成した場合当然残る炭化材や炭化物はほとんど残存しない。従って、石組炉内での焼成は基本的に行われなかったと考えられ、当該遺構は石蒸し調理遺構といえよう。なお、Ｂ類の31号炉床石下には炭化物・焼土・灰層が、33号炉では炭化物・焼土・炭化種子が堆積するが、これは石組炉を構築する段階で意識的に敷いたものと思われる。なお、４号集石遺構でも灰が検出された。Ｄ類は深い掘方の内部に10cm大の河原石が詰まり、25号炉のそれは強く焼け、下層には灰層も見られる。蒸し焼きに用いる石材を保管した遺構の可能性がある。

県内の押型文土器を出土する遺跡では、31基の石組炉が検出された筑紫郡那珂川町深原遺跡や、５基の石組炉を検出した春日市原遺跡でも、住居跡は認められない。原の東遺跡でも住居跡はない。しかし、熊本県狸山遺跡では石組炉の集中地点と場所を異にして住居跡が検出されていることから、住居跡が存在しなかったとは考え難く、キャンプサイト的な遺跡であったのであろう。

石組炉、集石遺構に使用された石材鑑定については、大川高校の城戸道男、朝羽高校の平田昌之両先生にお願いした。その結果、石材は遺跡の西側を流れる妙見川に普遍的に見られる厚さ５cm弱の絹雲母石英片岩が大半であるが、一部は緑泥片岩（８号石組炉）や英彦山系の輝石安山岩（６・８・13号石組炉、１・４・８号集石遺構）、石英斑晶が多い玄武岩質安山岩（４号石組炉、８号集石遺構）、珪岩（10号集石遺構）が用いられているとの指摘を受けた。

原の東遺跡の５層の主要石器の組成は、石鏃が圧倒的に多く37％、磨石25.1％，スクレパー9.7％、石核10.2％を占める。一方、押型文土器に多く共伴する石槍を欠き、石匙も表採で２点出土したに留まり、礫器も欠く。特徴的な石器としては片岩製の有孔石器が上げられる。大

第23表　Ⅱ・Ⅲ区石組炉一覧表

番号	地区	層位	分類	掘方（長×短・深）	炉(上端×床面・深)	出土遺物	備考
1	F4－2	5	B	99×96・22	63×33		
2	E1－2	5	B	79×75・13+α	47×35		移築　甘木資料館
3	E1－2	5	B	89×83・28	52×33	押型文土器	
4	D4－4	5	B	105×99・25	90×68・25	押型文土器	35号を切る　灰
5	D4－4	5	B	83×60+α・13	35+α×25+α・13		29号石組炉を切られる　灰
6	D3－2	5	B	81×73・19	52×41・19		29号石組炉を切る
7	D3－4	5	B	90×78・16	53×40・12	楕円押型文土器	
8	F3－1	5	B	83×60+α・13	46×35・13		一部破壊
9	C2－2	5	B	105×80+α・10	58×36・10	土器	2基の可能性あり　灰
10	C1－1	5	B	74×65・18	33×23		一部破壊　灰
11	C1－1	5	C	63×63・15	40×21・15		灰
12	B3－2	5	B	103×95・20	83×61・20	山形　無文土器	一部削平　炭少量出土
13	B3－2	5	B	85×77+α・13	43×23・13		一部破壊
14	A3－1	5	B	100×90・26	65×35	土器	
15	D3－2	5	B	93×88・20	65×43		34号炉を切る
16	D2－1	5	B？	60×35+α・11	－		12号土壙に切られる　半壊
17	D4－4	5	D	128×121・41		山形　楕円　無文土器	一部破壊
18	E3－4	5	B	95×85・20	45+α×30+α・10		一部破壊
19	E3－3	5	B	87×84・13	65×－	土器	
20	D2－1	5	B	71×64・14	45×21		
21	D2－3	5	B	80×55・16	45×30		テラスあり
22	C1－1	5	D	78×72・18			灰
23	B3－3	5	B	74×65・14	42×25	山形　無文土器	
24	D5－4	5	B	73×72・12	47～70×45		
25	E3－1	5	D	153×115・55			灰層あり
26	D3－1	5	B	81×80・12	60×48	土器	掘方削平
27	E2－4	5	B	52×30+α・14			11号住により破壊
28	F3－4	5	A	80×59・20	55―	山形　楕円　黒曜石	付近に有孔石製品
29	D3－2	5	B	108×78・25	74×48・16		5号炉を切り、6号炉に切られる
30	D4－4	5	C	109×92+α・42	75×55	無文土器　石鏃	15号炉に切られる　灰層
31	A3－1	5	B	107×96・20	85×40・15		床面下に炭化物、灰層、焼土
32	E3－4	5	B	62+α×58・16	30+α×20	山形	一部破壊
33	A3－2	5	B	102×91・25	73+α×66		床面下に炭化材・焼土・炭化種子
34	D3－2	5下	B	85×65+α・21	67×46・14		年代測定
35	D4－4	5下	B？	85×？・34		石鏃　土器	4号炉に切られる　破壊
36	D4－4	5下		63×51・8		付近から石鏃	8号集石に切られる　集石
3-37	L7－1	5	B	60×28+α・7			大半破壊　灰
3-38	L7－2	5	A	105×84・19		土器　付近に石斧	骨粉

第24表　Ⅱ区集石遺構一覧表

番号	地区	層位	規模（長×短）	出土遺物	備　考
1	G5－4	5	92×78	無文土器	
2	E1－3	5	185×70	山形　無文土器	
3	欠番				
4	C2－1	5	93×83		浅い掘方有り　灰　炉A類
5	C2－1	5	93×76		浅い掘方有り
6	C2－3	5	82×60		
7	E1－1	5	140×95	山形　楕円	
8	D4－4	5	115×95		
9	E2－1	5	95×70	山形　無文土器　黒曜石	土器数個体投棄
10	D1－4	5	125×105	山形	テラス　土壙

小の２種類あり、両者とも扁平な石材の中央に一孔を有す。大型品は周囲は打ち欠いたままで、小型品は丁寧に磨きをかける。大型品は一見すると押型文土器にたまに共伴する環状石斧に近似するが、刃部を持たないことから性格を異にする石器であろう。

当遺跡の最大の特色は38基と多く検出された縄文早期の石組炉で、その関連から考えれば磨石・敲石・凹石・石皿を合わせた食料加工具が35％に達することは、遺跡の性格を的確に表しており、わずか２点ではあるが石錘の出土は味付けである。直径３ｍの礫層空白部に築かれた21号石組炉は、炉を囲む人々の姿を彷彿とさせる。（木下）

4　原の東遺跡出土の縄文土器

（草創期）

本遺跡で草創期に属すると考えられる縄文土器は、第150図３－350・351の１個体分だけである。これを草創期とした根拠は、太くて大きな刻目、わずかに内傾はするがほぼ直線的に立ち上がる口縁部とそれから予想される砲弾形的な器形、口縁の先端部が舌状に仕上げられる特徴等が、北部九州の早期以降の縄文土器には見られないことである。また、全体にナデが施されてはいるが、内面には二枚貝によると考えられる条痕文の痕跡も興味深い。対比すべき類例が少ないだけに注意を要するが、実態がほとんど分かっていない北部九州の草創期隆起線文土器を考える上で今後無視できない資料となろう。なお、福岡県甘木市柿原Ⅰ遺跡出土の縄文土器（Fig28－11　中間研志編『柿原Ⅰ縄文遺跡　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告第37集』福岡県教育委員会　1995）も刻目こそは施されていないが、本例と同様の一群と考えられる。

（早期）

早期は本遺跡の縄文時代で主体をなす時期である。その中でも大部分は早期中葉～後葉に位置付けられる押型文土器である。押型文土器もほとんどは横位に施文する一群で、縦位施文するものも含まれるがその比率はわずかに数パーセントしかない。横位の押型文土器の文様の粒は小さく、口縁部内面の文様も外面と同じ原体による押型文が大部分を占め、わずかに見られる原体条痕も幅が狭くて長さも短い。これらの特徴は従来は稲荷山式として、九州では古式の押型文土器として位置付けられてきた。しかし、器壁が厚く直線的に口縁部が立ち上がったり、または平底である特徴は稲荷山式が設定された東九州では見られないものである。筆者はかつて九州全体の押型文土器の地域性を検討した際に（水ノ江和同「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器－論攷編－』九州縄文研究会　1998）、東九州以外では稲荷山式はほとんど見られずに、平底で厚い器壁と直線的に立ち上がった口縁部がそれに年代的に併行することを確認し、「弘法原（こうぼうばる）式」として位置付けた。今回、本遺跡で出土した横位の押型文土器は

この弘法原式に相当するが、明らかに稲荷山式とも見られる押型文土器も存在するようである。このことから、本遺跡がより東九州に近いという地理的環境にあることが大きく関係していると考えられる。

ところで、横位押型文土器についてはその文様が山形文・楕円文・格子目文の３種類に限られ、その比率は７：２：１になるが、これは当該期の押型文土器の特徴をよく表している数値である。口縁部内面の施文については、外面が山形文や格子目文の場合はほとんどすべてに同じ山形文や格子目文が施文されるのに対して、外面が楕円文の場合は約４割が無施文であることも注意を引く特徴である。押型文土器に伴う無文土器は器壁が厚く胴部がやや膨らむものもあり、また器形自体が大きく、成形段階で押型文土器とは異なった意図で製作されたことが明らかである。ただし、無文用の土器に押型文を施したものも数点見られるが、これらはすべて山形文の場合に限られる。条痕文や撚糸文や縄文が数点見られるが、これらについては近年北部九州で押型文土器以前に位置付けられつつある一群に含めるよりも、西日本一帯の古式の押型文土器に共伴するそれらと同一のものとして位置付けることが、点数の少なさから判断しても妥当と考えられる。縦位の押型文土器はいずれも粒が大きく所謂「田村式」に相当しようが、第149図321については「手向山式」の可能性が高い。

第146図295～297は沈線文や刺突文によって文様が構成されるが、これらについてはおそらくは「平栫式」に属するであろう。

（後期）

第172図385・386は同一個体で、斜位の凹点文の特徴から中期ではなく後期初頭の阿高式系「坂の下式」に属しよう。３－338～392は後期前葉～中葉の小池原上層式と鐘崎式の新しいものであるが、387の磨消縄文はおそらく後期中葉～後葉に属するものであろう。393～401については、従来は晩期初頭～前葉に位置付けられてきた一群であるが、以前筆者が検討したように（水ノ江和同「北部九州の縄文後・晩期土器」『縄文時代』第８号　縄文時代文化研究会 1997)、全国的な年代観から判断するならば確実に後期末に位置付けられる。

（晩期）

晩期土器は点数が少ないながらも、年代的には幅広く出土している。この中でも注目すべきは第173図404の入り組み状の突帯文が貼りつけられたもので、器形はおそらく比較的深いボウル状の鉢になる。この器形と文様には強い相関関係があり、また点数は少ないながらも広く九州一円に分布していることから、今後当該期の年代的な併行関係を追及する場合には有効な手段となろう。第175図427～440の刻目突帯文土器を縄文晩期とするか弥生早期とするか意見の分かれるところであるが、本遺跡から出土した刻目突帯文土器については口縁端部に近接して刻目突帯文が貼りつけられるのが特徴となるようである。（水ノ江）

5　旧石器時代の石器群について

今回の調査では、旧石器時代に関する遺物はⅢ区の９ａ層から10ｃ層の５枚にわたって層位的に出土した。遺物の分布や個別の石器を見る限りでは、各層より出土する石器群がすべてプライマリーな状態にあって時期的にまとまるのではなく、混在した状態にある。そのため、出土量と内容に隔たりがある９ｂ層～10ｂ層における石器群については全容を知ることは難しく、個別石器を評価するほかないであろう。

９ａ層石器群に組成する主要石器には、「国府系」ナイフ形石器（１）、今峠型ナイフ形石器（２・３）のほか、石刃素材やそれに近い剥片を素材とするナイフ形石器（４～７）、小型ナイフ形石器（８～20）などがある。台形石器には、西北九州産黒曜石を使用した原の辻型台形石器（21～23）のほか、切断剥片を素材とする小型台形石器（27～36）の一群がある。ほかには、角錐状石器がある。特徴ある小型ナイフ形石器群の散漫な「ブロック」については、平面的、垂直的な広がりからみて、ほかのナイフ形石器との分離は可能であろう。また、台形石器についても、原の辻型台形石器と小型台形石器群とは平面的にも垂直的にも分離できる。よって９ａ層では、これらを除いた、小型ナイフ形石器や台形石器が主体の石器群が考えられる。

一方、10ｃ層では、ナイフ形石器については、193、194、195のようにＡＴ降灰後の石器群の系譜がたどれるものがある。台形石器については、210を除けば、必ずしも新しい時期とは言えず、一部は台形様石器として捉えることもできる。このほかにも、最下部では古い様相を示すものも含まれている。203・204は「斜軸尖頭器」の可能性もあり、その場合後期旧石器文化以前としてとらえられる。

ところで、９ａ層では小型ナイフ形石器と台形石器の共存が、おそらく本来の石器群の姿としてとらえられる可能性を述べた。その製作についてみてみると、ナイフ形石器の素材となるのは、切断した小石刃や不定形剥片であり、台形石器については石刃を切断したものである。これらは同層で多量に出土した小石刃や切断剥片に求められる。そして、それらの素材を剥離した石核については、114～118などが対応する。次にこれらの石器群の時期的位置づけについて考えてみたい。９ａ層で分離した他の示準石器がいずれもＡＴ降灰後のものであることから９ａ層の小石刃、不定形剥片素材とする小型ナイフ形石器や台形石器の一群は斜面堆積を考慮してもＡＴ降灰後とみてよいであろう。北部九州地域において、ＡＴ降灰後に小石刃を剥離する技術を保持する石器群については、周辺では、大分県大野川流域の岩戸遺跡６層上部石器群があり、ナイフ形石器文化終末期に近い段階に位置づけられる。本石器群も、この岩戸６上石器群と同様に剥片素材石核の小口から「ポジ面」を取り入れながら小石刃剥離を行うなど、技術的に共通する要素をもつ。また、石刃を切断しての台形石器製作は西北九州のナイフ形石器文化終末期石器群の技術的特徴でもある。以上のことから、９ａ層の小型ナイフ形石器・台形

石器の一群はナイフ形石器文化終末期段階の石器群として位置づけられる可能性が高い。そして、今後は本石器群の分析を通し、ナイフ形石器文化終末期の問題について、さらに深化させる必要があろう。 (杉原)

6 おわりに

九州横断自動車道関係の発掘調査は昭和54年度に甘木市から開始し、平成2年度まで12ケ年に亘って実施した。調査は交差する九州縦貫自動車道鳥栖ジャンクションから朝倉郡杷木町間の73地点、調査面積457.188㎡に達する。調査報告書の作成は昭和54年度の上々浦遺跡を第1集として刊行し、当初は平成6年度をもって終了する予定であったが、10号線椎田バイパス開通に伴う調査が優先され、関係者が昭和63年～平成元年まで当バイパスの発掘調査に従事し、その調査報告書を平成2・3年に刊行した。日本道路公団との協議の結果、九州横断自動車道関係の報告書の作成は椎田バイパスに費やした期間の4年間を先送りし、平成10年までに終了することで合意した。

今年度は第53集－原の東遺跡Ⅱ、第54集－金場遺跡、第55集－長島遺跡Ⅱ、第56集－畑田遺跡の4冊の報告書を刊行し、九州横断自動車道関係の調査は昭和54年の調査開始以来20年間をもってすべて完了した。

最後になりましたが、長期間に亘った九州横断自動車道関係の発掘調査から調査報告書作成等にご理解いただいた日本道路公団、同福岡管理局、ならびに、発掘調査に従事された地元の皆様、報告書作成などに携わった方々、および、ご教示をいただいた調査関係各位に深甚より感謝の意を表します。 (木下)

図　　版

図版1　原の東遺跡俯瞰（気球写真より）

1

2

図版２　(1)　原の東遺跡Ⅱ・Ⅳ区俯瞰（気球写真より）

(2)　原の東遺跡Ⅱ区西側俯瞰（気球写真より）

1

2

図版 3 (1) 1号竪穴住居跡（北から）
(2) 4号竪穴住居跡（東から）

1

2

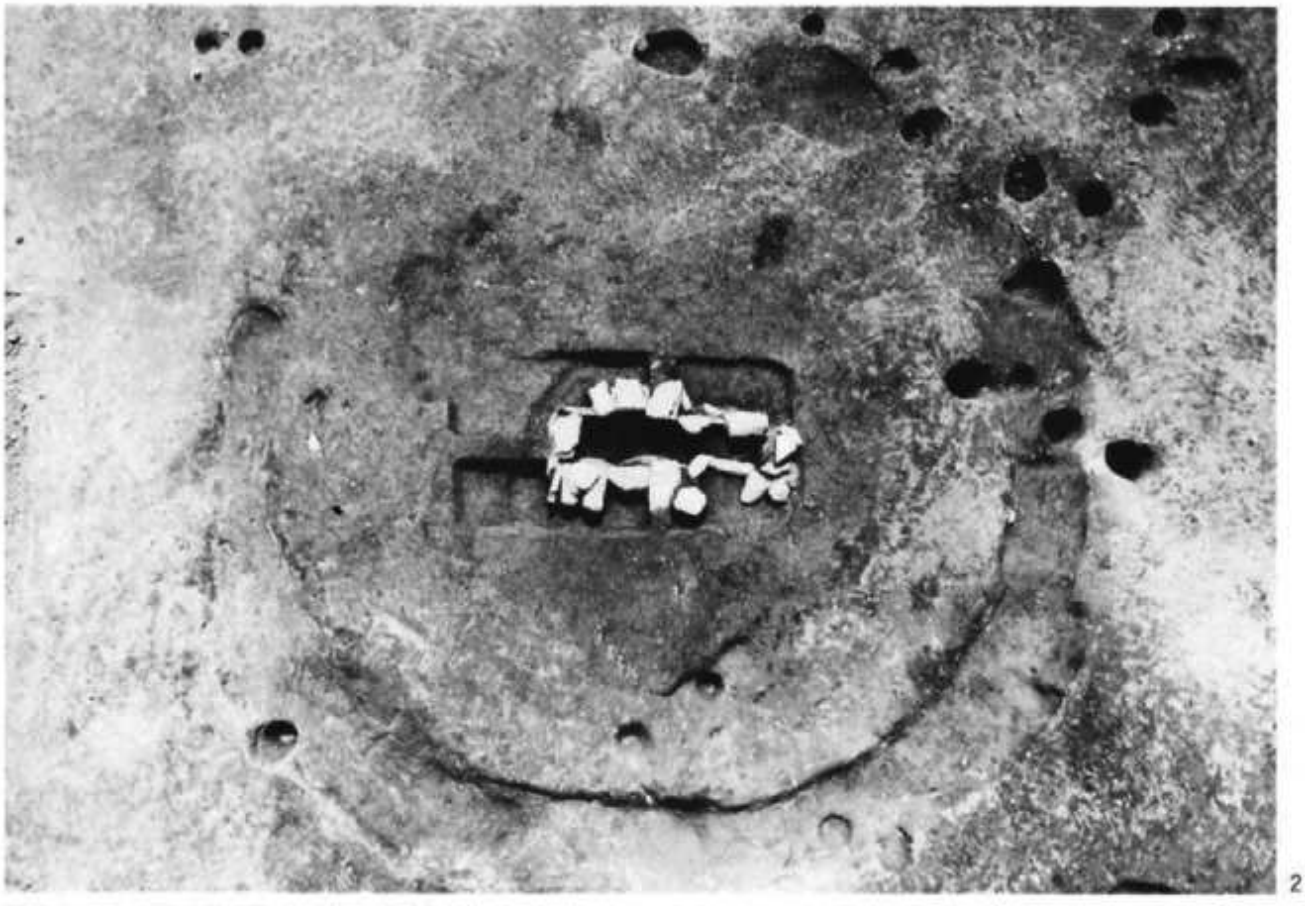
図版4 (1) 1号・2号土坑（北から）
(2) 3号土坑（北から）

1

2

図版5 (1) 1号墳俯瞰（気球写真より）
(2) 1号墳主体部（南東から）

1



2

図版6 (1) 1号墳周溝内土器出土状態
(2) 2号墳俯瞰（気球写真より）

1

2

図版７　(1)　２号墳主体部（南東から）
　　(2)　２号墳主体部細部

1

2

図版8 (1) 3号墳俯瞰（気球写真より）
(2) 3号墳主体部（南から）

1

2

図版 9 (1) 3号墳主体部遺物出土状態（南から）

(2) 3号墳主体部鉄器出土状態

1

2

図版10 (1) 3号墳主体部鉄器出土状態

(2) 3号墳主体部鉄器出土状態

1

2

図版11 (1) 3号墳主体部東隅鉄器出土状態

(2) 3号墳周溝内土器出土状態

1

2

図版12 (1) 4号墳俯瞰（気球写真より）

(2) 4号墳主体部（南から）

1

2

図版13 (1) 5号・8号墳，4号土坑俯瞰（気球写真より）

(2) 5号墳主体部（北から）

1

2

図版14 (1) 5号墳周溝内土器出土状態

(2) 5号墳周溝内勾玉出土状態

1

2

図版15 (1) 5号墳周溝内土器出土状態

(2) 6号墳俯瞰（気球写真より）

1

2

図版16 (1) 6号墳主体部（北から）

(2) 6号墳主体部鉄器出土状態

1

2

図版17 (1) 6号墳主体部鉄器出土状態
(2) 7号墳俯瞰（気球写真より）

1

2

図版18 (1) 7号墳主体部（南から）
(2) 7号墳主体部西側小口部

1

2

図版19 (1) 7号墳主体部側壁と小口部

(2) 8号墳主体部（南から）

1

2

図版20 (1) 9号墳俯瞰（気球写真より）
(2) 9号墳主体部（南から）

1

2

図版21 (1) 9号墳主体部鉄鋼出土状態

(2) 10号墳主体部（北から）

1

2

3

図版22 (1)~(3) 10号墳主体部鉄器出土状態

1

2

図版23 (1) 11号墳俯瞰（気球写真より）
(2) 11号墳主体部（南から）

1

2

図版24 (1) 12号墳衛殿（気球写真より）

(2) 12号墳主体部（南から）

1

2

図版25 (1) 13号・14号・16号墳俯瞰（気球写真より）
(2) 13号墳主体部（南東から）

1

2

図版26 (1) 13号墳周溝内土器出土状態

(2) 14号墳主体部（東から）

1

2

図版27 (1) 15号墳主体部（西から）
(2) 15号墳主体部閉塞状態

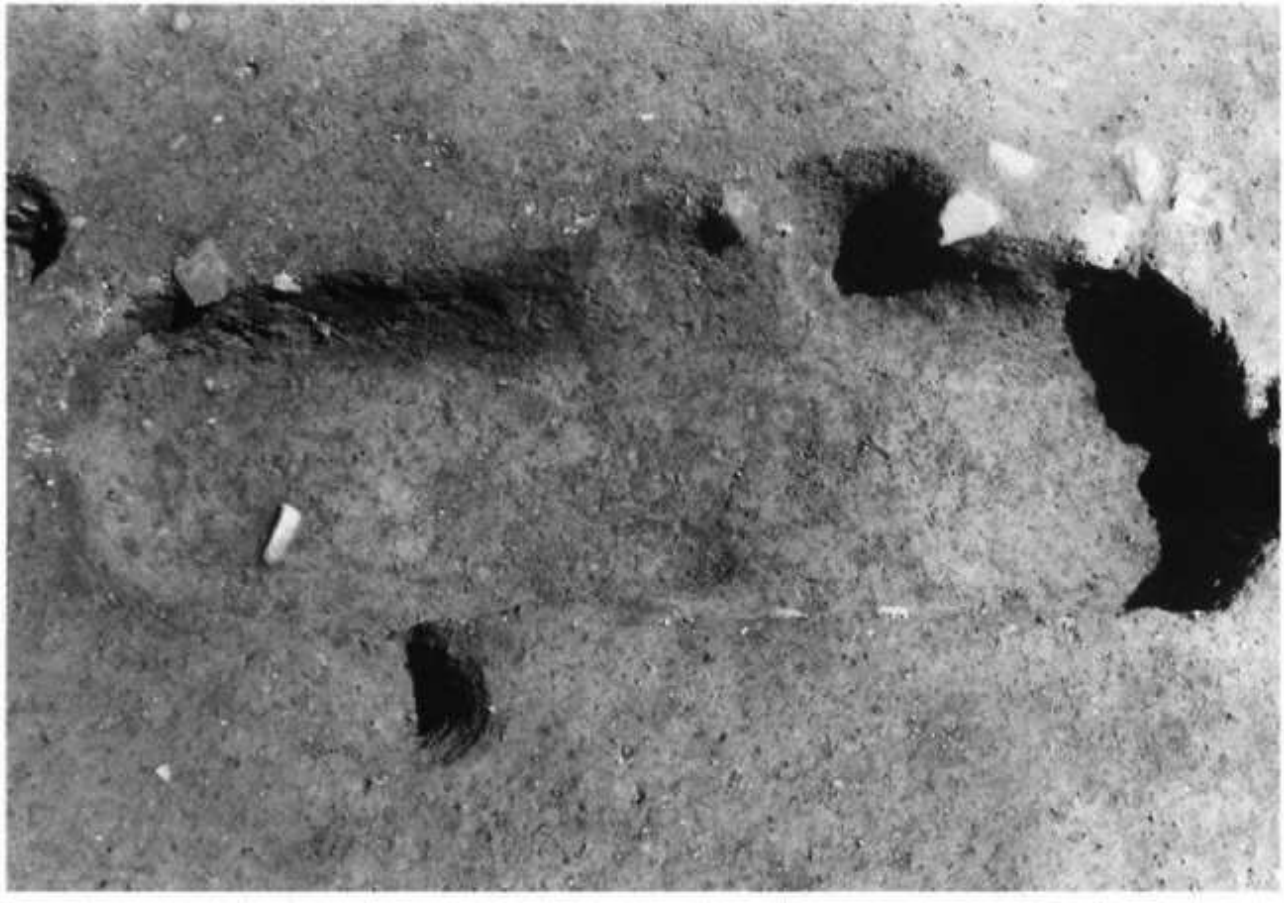
1

2

図版28 (1) 16号墳（南東から）

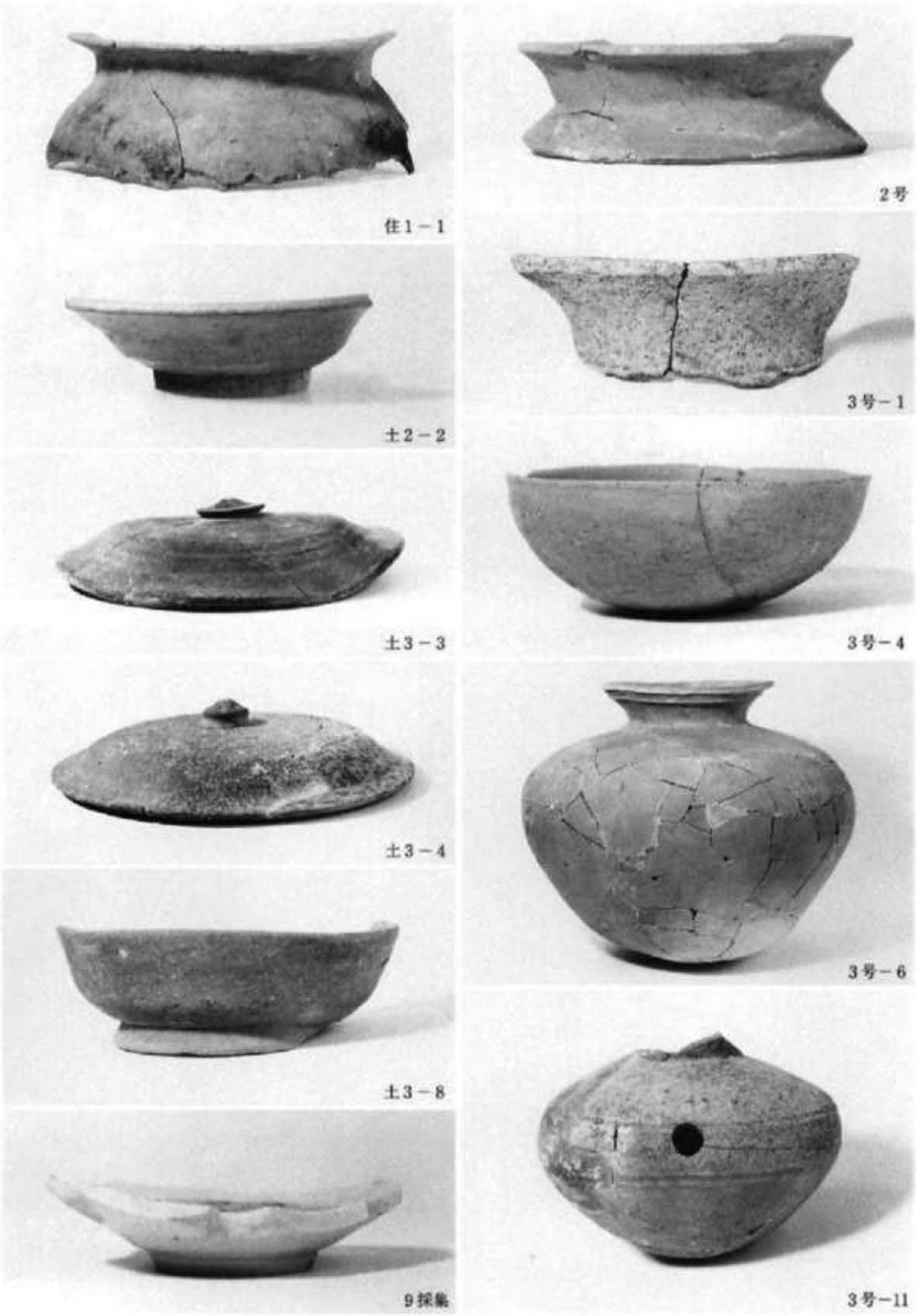
(2) 16号墳主体部（南東から）

1



2

図版29 (1) 17号墳俯瞰（気球写真より）
(2) 12号土壙墓（南から）



図版30　1号竪穴住居跡、2号・3号土坑、2号・3号墳出土と採集遺物

3号－12

5号－8

3号－14

5号－10

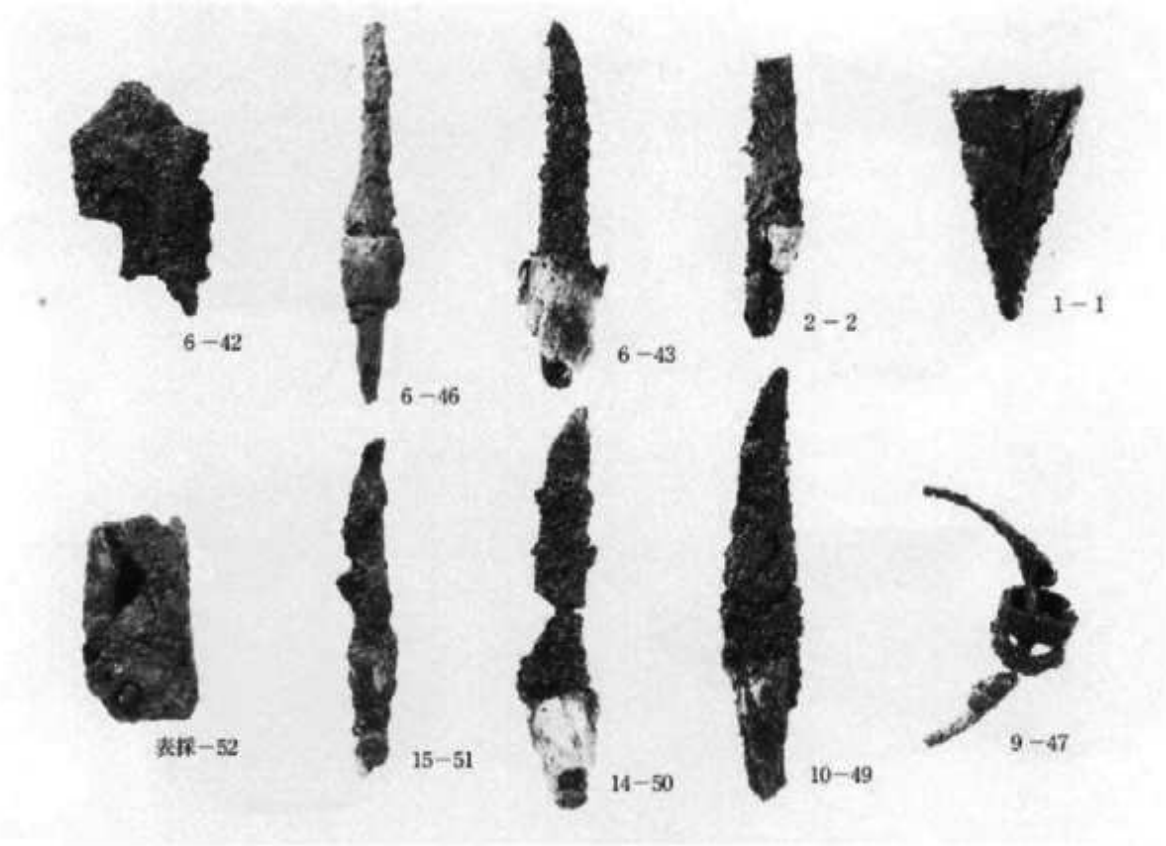
4号

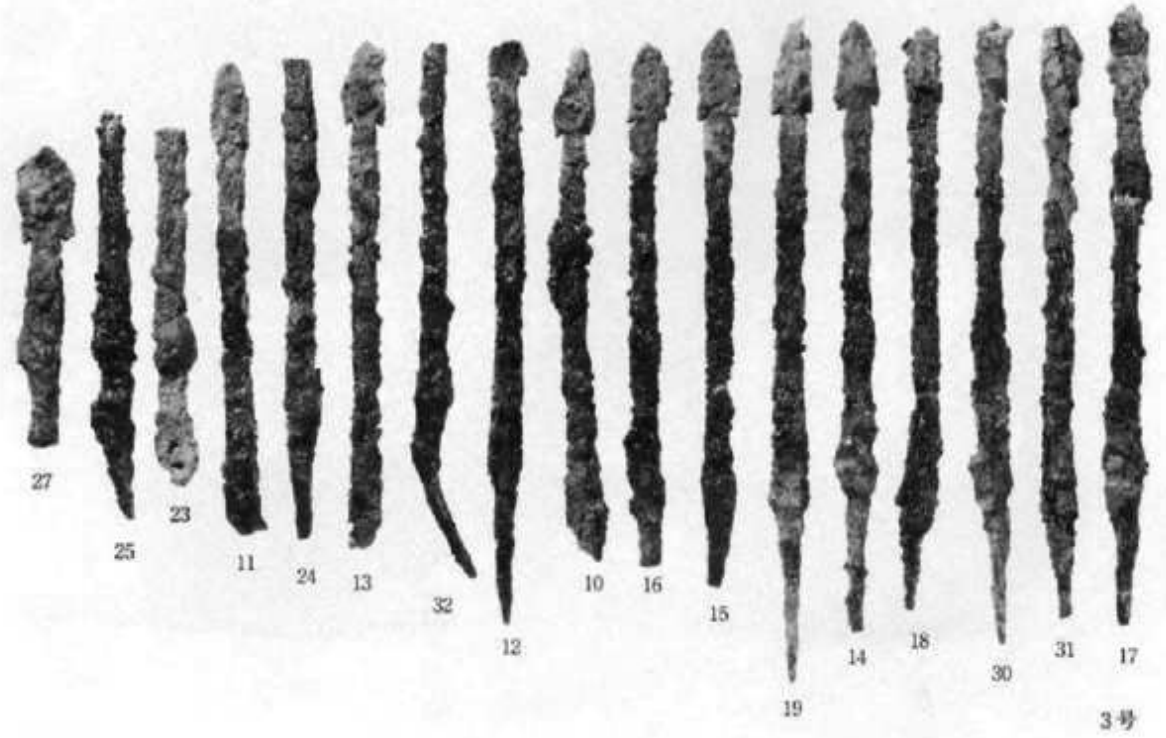
7号－3

5号－5

13号－1

図版31　3号～5号・7号・13号墳出土遺物





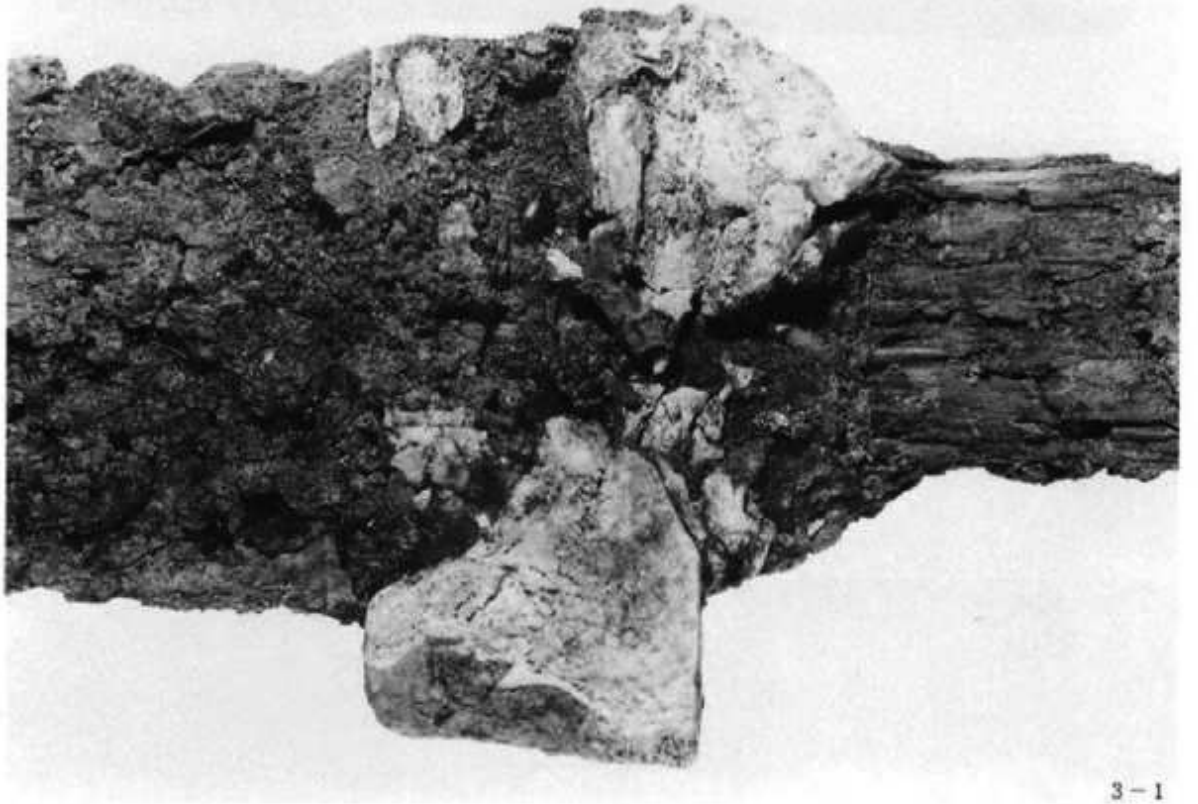
図版32　1号～3号・6号・9号・10号・14号・15号墳、表採出土鉄器

3－38

3－1

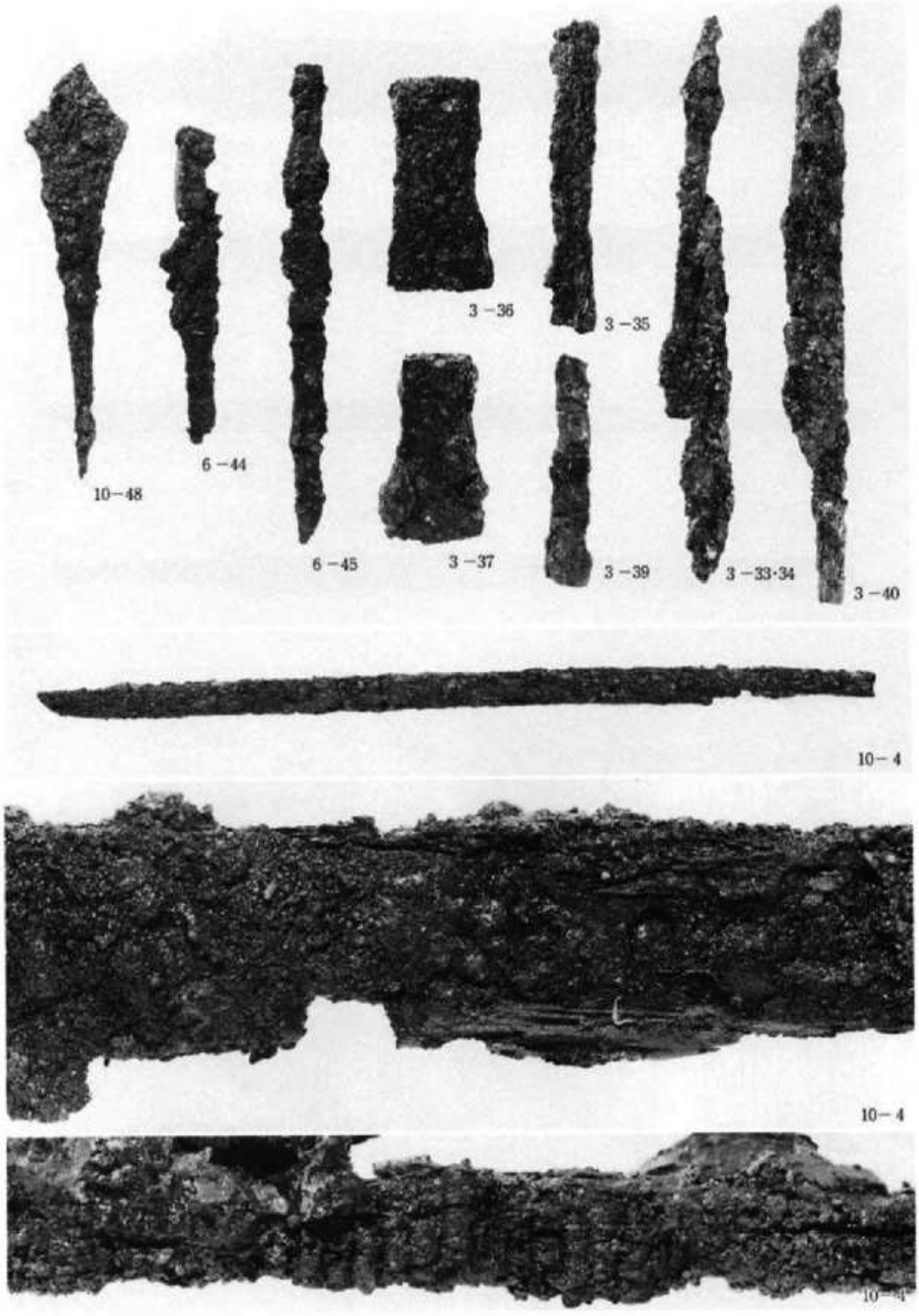
3－3

3－2

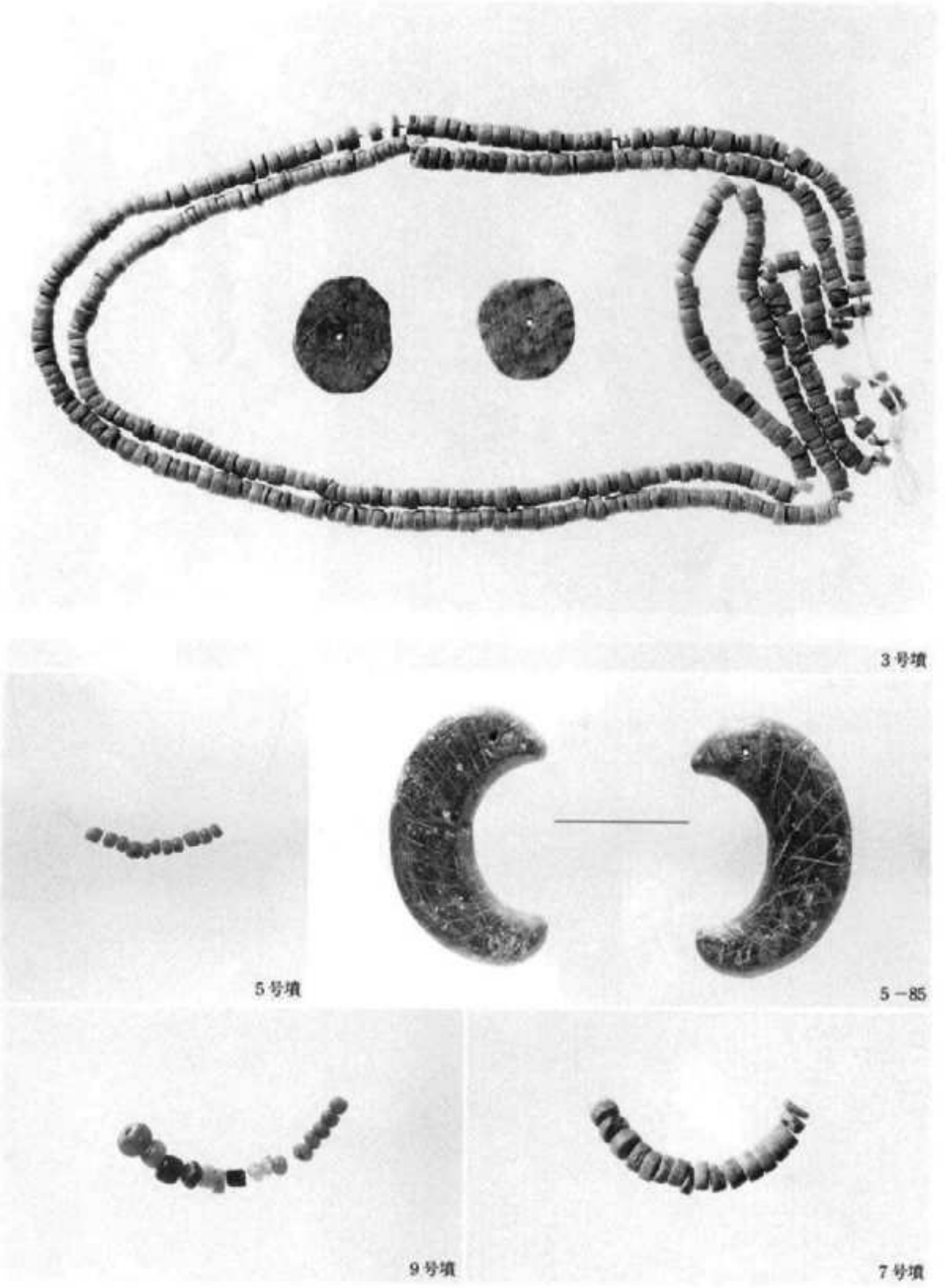


3－1

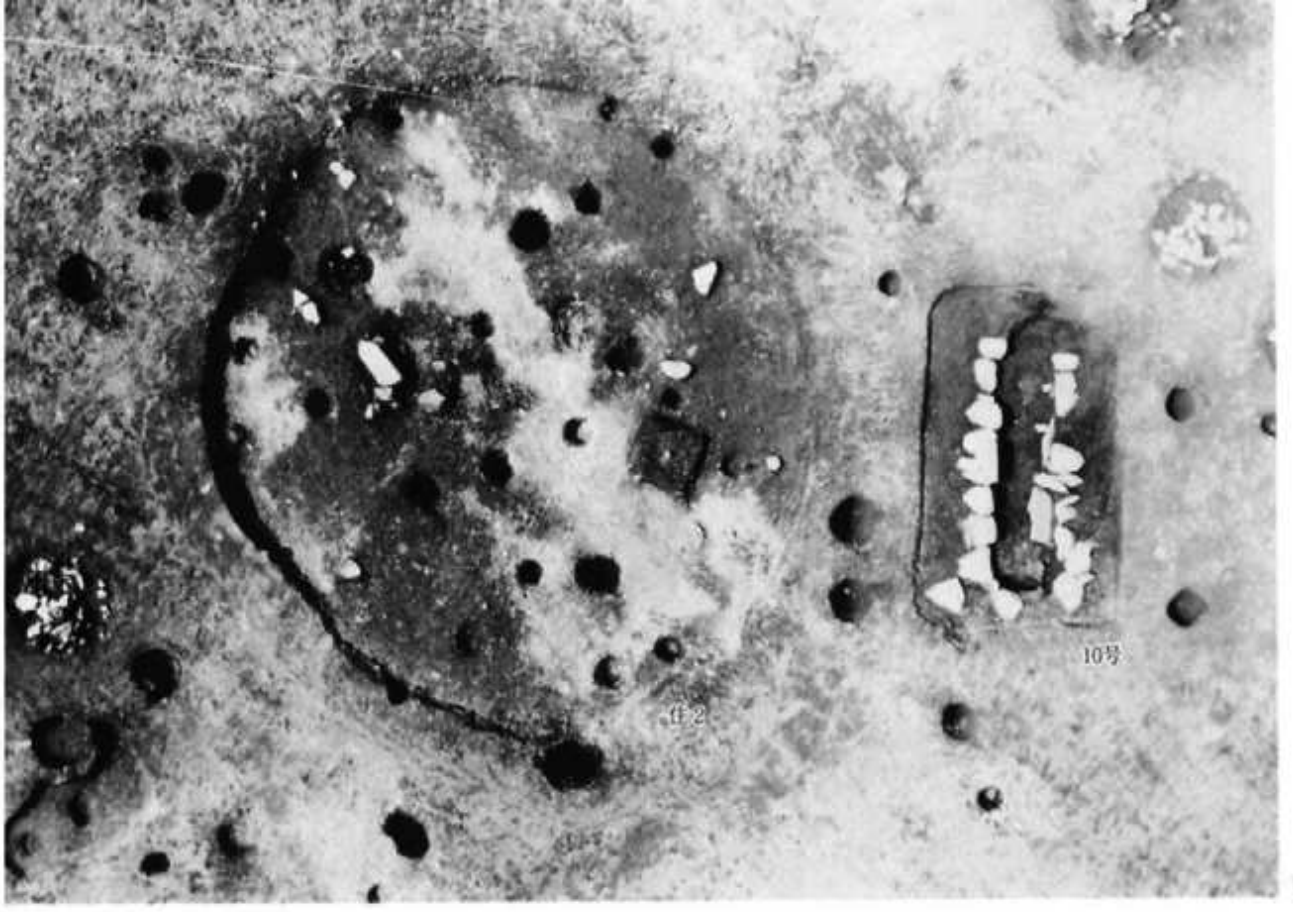
図版33　3号墳出土鉄器



図版34　3号・6号・10号墳出土鉄器



図版35　3号・5号・7号・9号墳出土玉類



1

2

図版36 (1) 2号竪穴住居跡、10号墳俯瞰（気球写真より）

(2) 2号竪穴住居跡石皿出土状態

1

2

図版37 (1) 3号竪穴住居跡、12号墳俯瞰（気球写真より）

(2) 5号竪穴住居跡（東から）

1

2

図版38 (1) 6号竪穴住居跡、16号土坑（西から）
(2) 10号竪穴住居跡俯瞰（気球写真より）

1

2

図版39 (1) 11号・12号竪穴住居跡俯瞰（気球写真より）
(2) 12号竪穴住居跡俯瞰（気球写真より）

1

2

図版40 (1) 12号竪穴住居跡中央土坑遺物出土状態

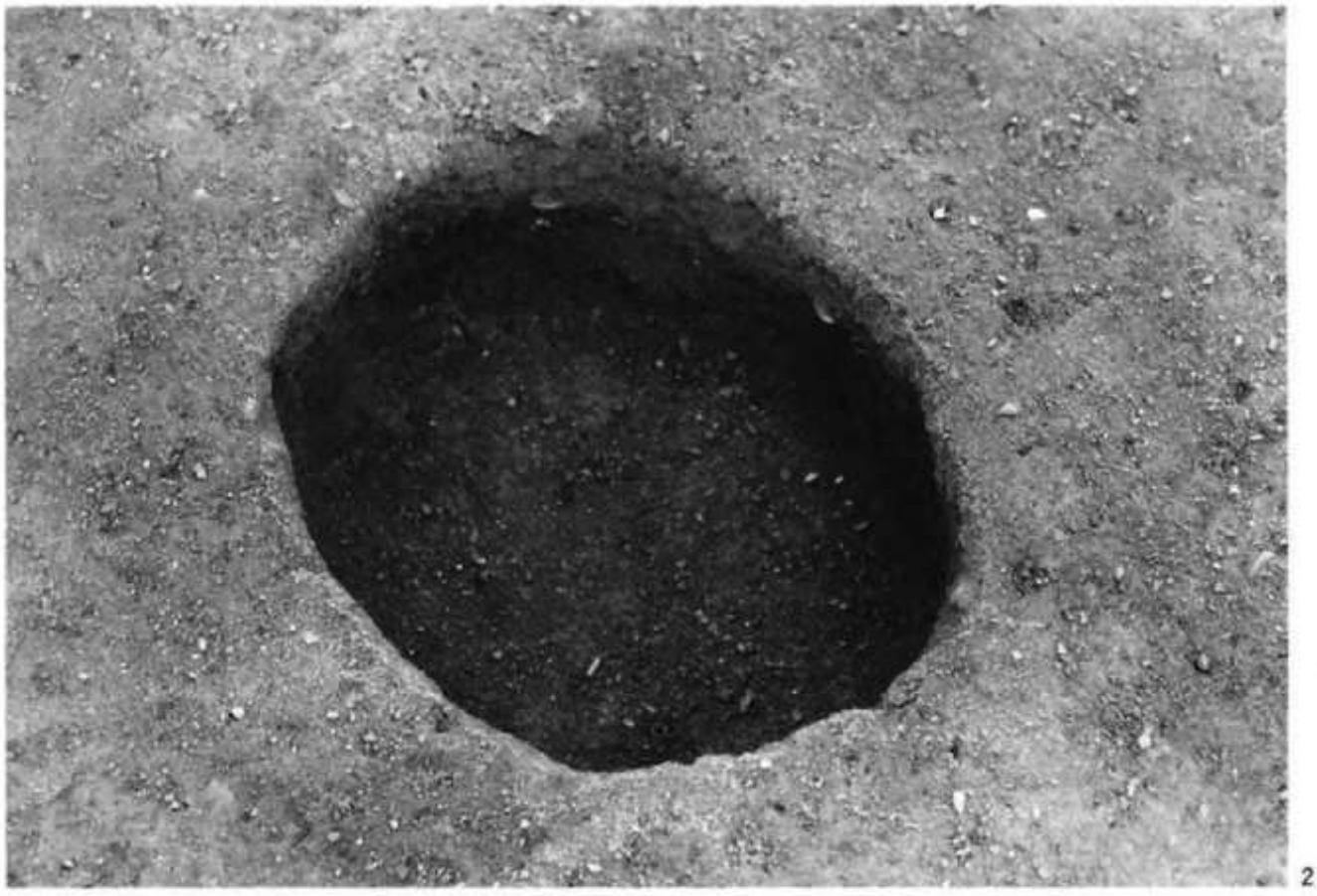
(2) 1号貯蔵穴（北から）

1

2

図版41 (1) 2号貯蔵穴（南東から）
(2) 3号貯蔵穴（北から）

1



2

図版42 (1) 4号貯蔵穴、14号土坑（西から）
(2) 5号貯蔵穴（西から）

1

2

図版43 (1) 6号貯蔵穴（西から）
(2) 4号土坑（北から）

1

2

図版44 (1) 5号土坑（北から）

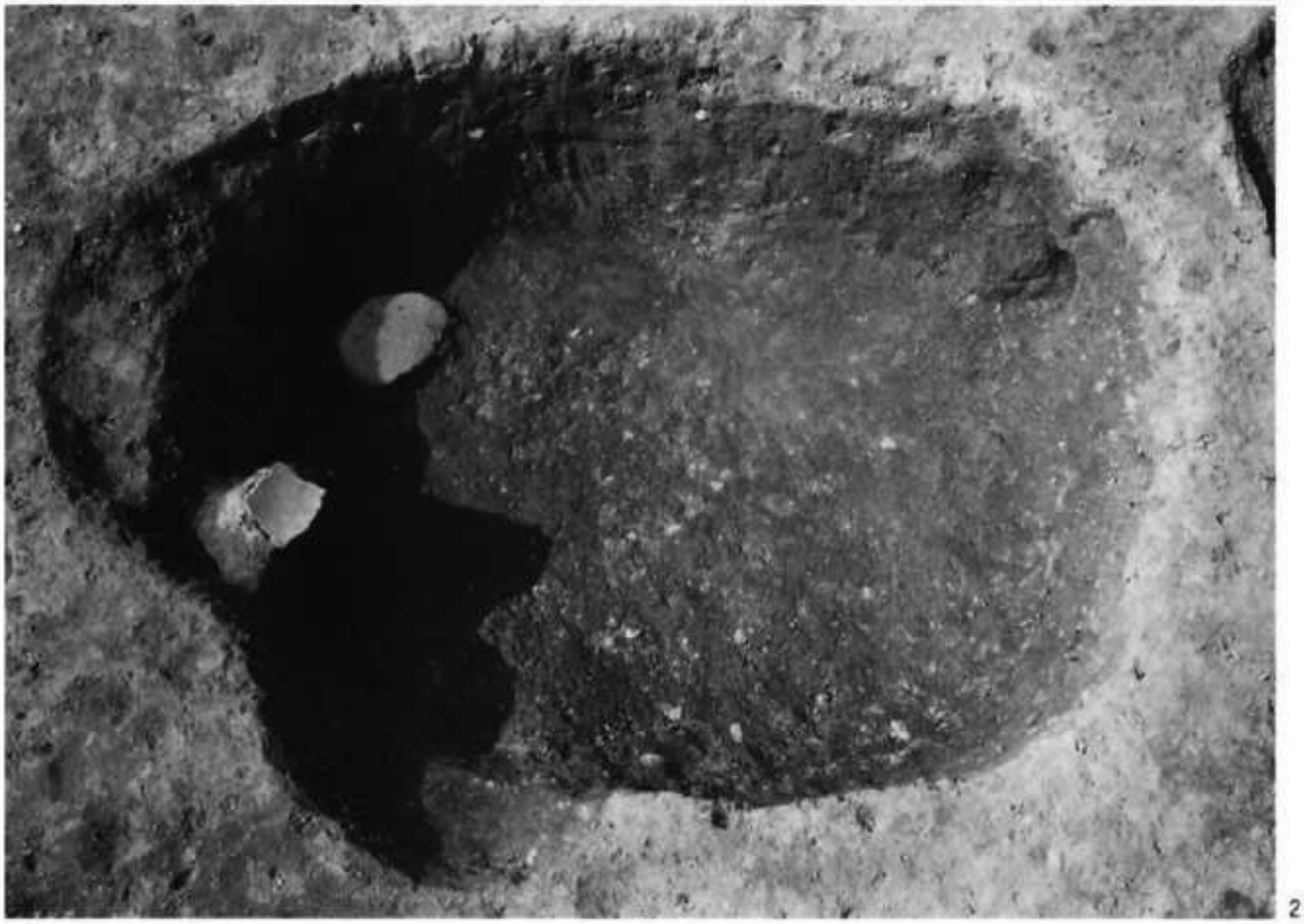
(2) 6号土坑遺物出土状態（南東から）

1

2

図版45 (1) 6号土坑遺物除去後の状態（南東から）
(2) 7号土坑（東から）

1



2

図版46 (1) 8号土坑（東から）
(2) 9号土坑（南から）

1

2

図版47 (1) 10号・11号土坑遺物出土状態（南から）
(2) 10号・11号土坑遺物除去後の状態（北から）

1

2

図版48 (1) 15号土坑（北から）
(2) 17号土坑（東から）

1

2

図版49 (1) 20号土坑（北から）
(2) 22号土坑（東から）

住2－7

住2－8

住2－18

住3－10

住3－6

住6－1

図版50　2号・3号・6号竪穴住居跡出土遺物

住12－6

貯1－2

住12－7

貯1－4

住12－8

貯1－7

貯1－1

貯2－2

図版51　12号竪穴住居跡、1号・2号貯蔵穴出土遺物

貯3－8

貯4－1

貯3－17

土1

貯3－18

土5

貯3－21

土6－3

図版52　3号・4号貯蔵穴、1号・5号・6号土坑出土遺物

土6－16

土15－1

土6－17

土16－2

土6－19

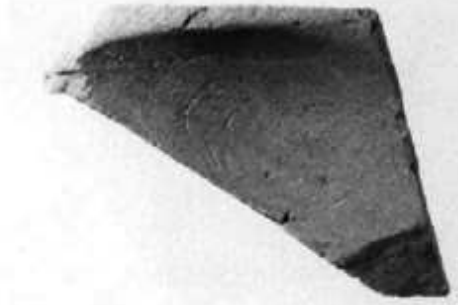
土17－4

土7－4

土11－2

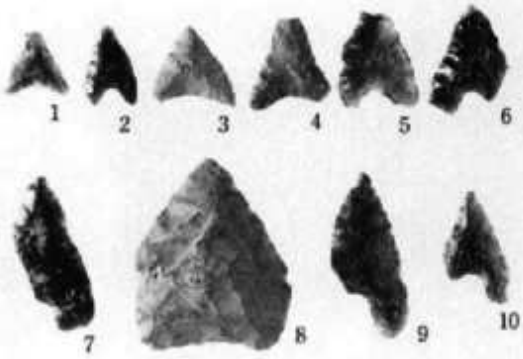
土22

図版53　6号・7号・11号・15号～17号・22号土坑出土遺物



1（住2）

4（3号周溝）



5（5号周溝）

土1

6（5号石室周辺）

3（表採）

8(P118)

図版54　2号・3号・11号・12号竪穴住居跡、3号貯蔵穴とその他の出土石器・土製品

図版55　原の東遺跡下層グリッド俯瞰（気球写真より）

1

2

図版56 (1) 34号土坑（東から）
(2) 石組炉群（北から）

1

2

図版57 (1) 1号石組炉（北から）
(2) 2号・3号石組炉（東から）

1

2

図版58 (1) 4号石組炉（北から）
(2) 5号・6号・29号石組炉（北から）

1

2

図版59 (1) 7号石組炉（北から）
(2) 8号石組炉（西から）

1

2

図版60 (1) 9号石組炉（東から）

(2) 10号石組炉（南から）

1

2

図版61 (1) 11号石組炉（東から）
(2) 12号石組炉（北西から）

1

2

図版62 (1) 13号石組炉（北から）
(2) 14号石組炉（北東から）

1

2

図版63 (1) 15号石組炉（北から）
(2) 16号石組炉（北西から）

1

2

図版64 (1) 17号石組炉（北から）
(2) 18号石組炉（西から）

1

2

図版65 (1) 19号石組炉（東から）
(2) 20号石組炉（北から）

1

2

図版66 (1) 21号石組炉（南東から）
(2) 22号石組炉（北から）

1

2

図版67 (1) 23号石組炉（北から）
(2) 24号石組炉（北東から）

1

2

図版68 (1) 25号石組炉上層（西から）
(2) 25号石組炉下層（南から）

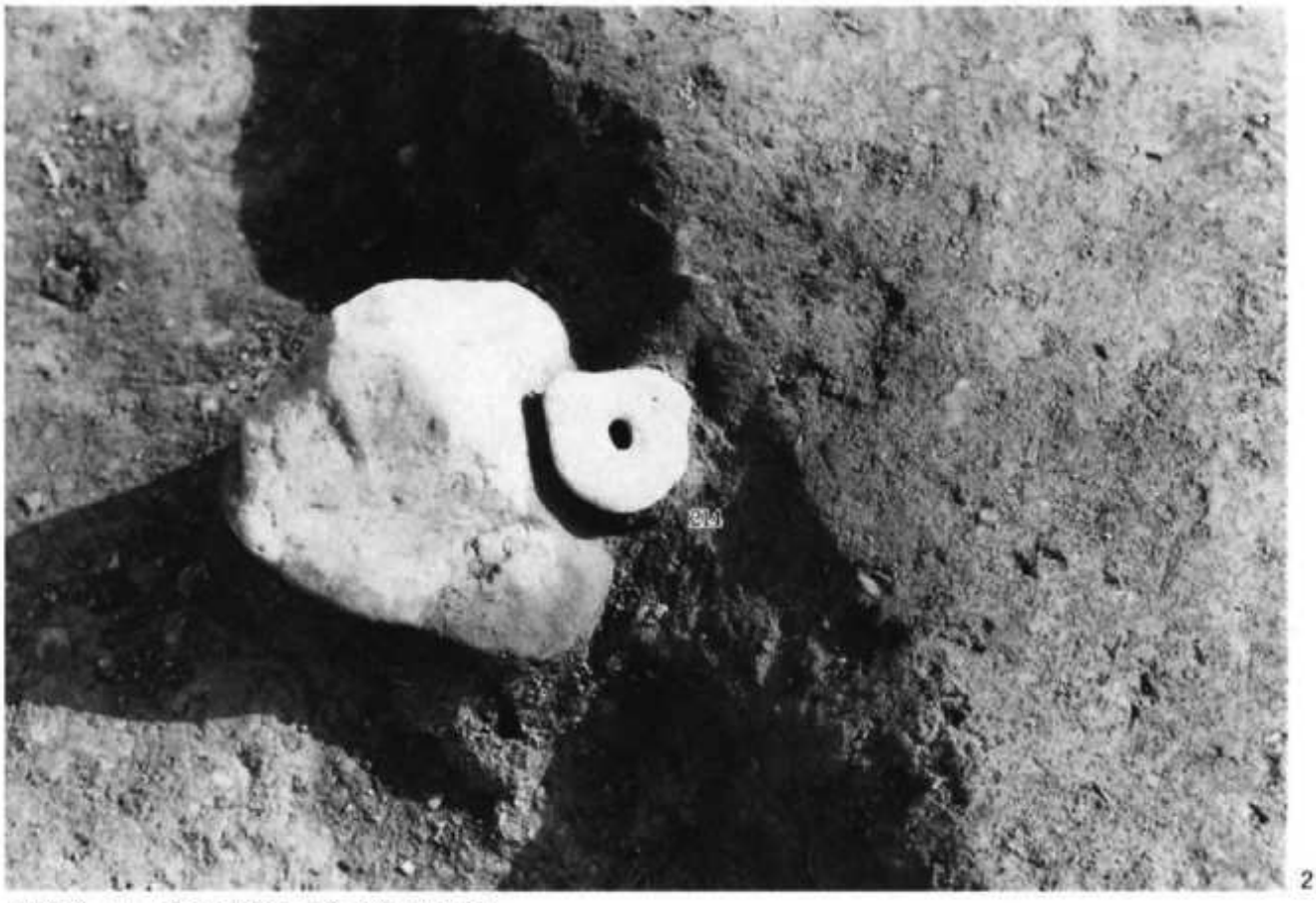
1

2

図版69 (1) 26号石組炉（北から）

(2) 27号石組炉（南から）

1



2

図版70 (1) 28号石組炉と有孔石器（西から）

(2) 有孔石器出土状態

1

2

図版71 (1) 30号石組炉（南東から）
(2) 31号・33号石組炉（南東から）

1

2

図版72 (1) 31号石組炉上層堆積状態

(2) 32号石組炉（南東から）

1

2

図版73 (1) 34号石組炉（北から）
(2) 35号石組炉（東から）

1

2

図版74 (1) 36号石組炉（南東から）

(2) 1号集石遺構（北東から）

1

2

図版75 (1) 2号集石遺構（南西から）
(2) 4号集石遺構（北西から）

1

2

図版76 (1) 5号集石遺構（東から）
(2) 6号集石遺構（南から）

1

2

図版77 (1) 7号集石遺構（西から）
(2) 8号集石遺構（南東から）

1

2

図版78 (1) 9号集石遺構（東から）
(2) 10号集石遺構（北から）

1

2

図版79 (1) Ⅲ区上層俯瞰（気球写真より）
(2) Ⅲ区下層俯瞰（気球写真より）

1

2

図版80 (1) 37号石組炉（北から）
(2) 11号集石遺構（西から）

1

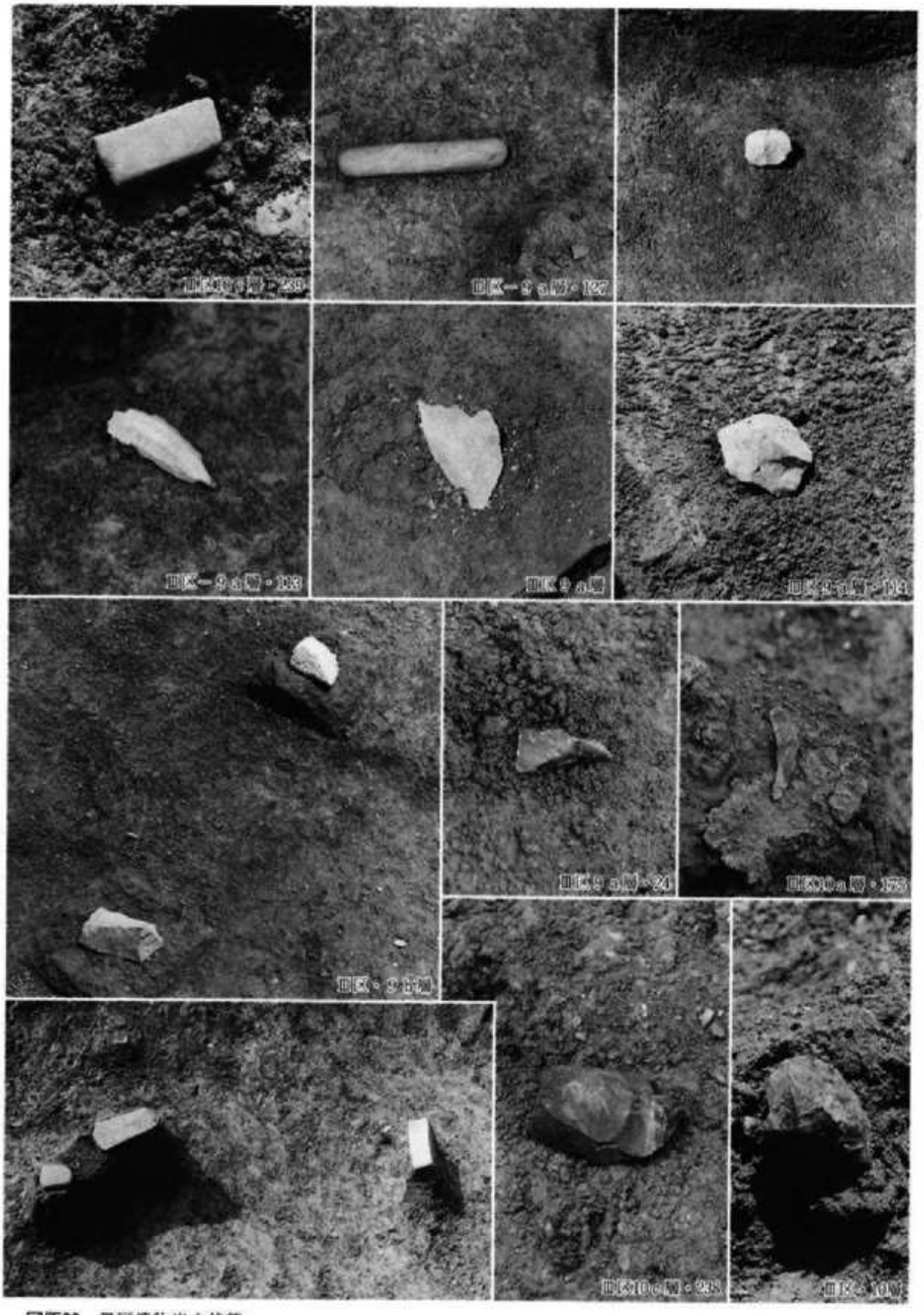
2

図版81 (1) 12号集石遺構（南東から）
(2) 13号集石遺構（西から）

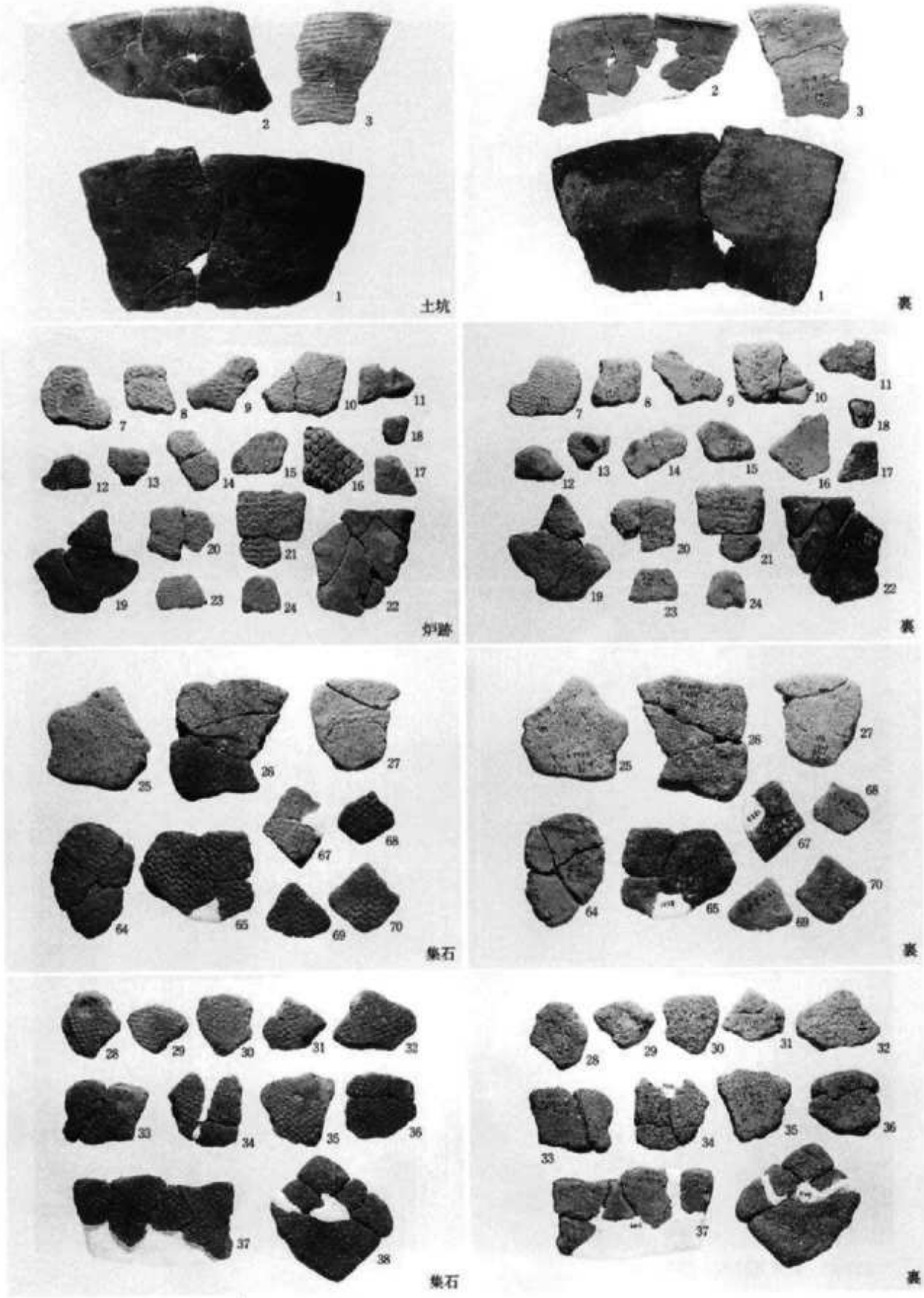
1

2

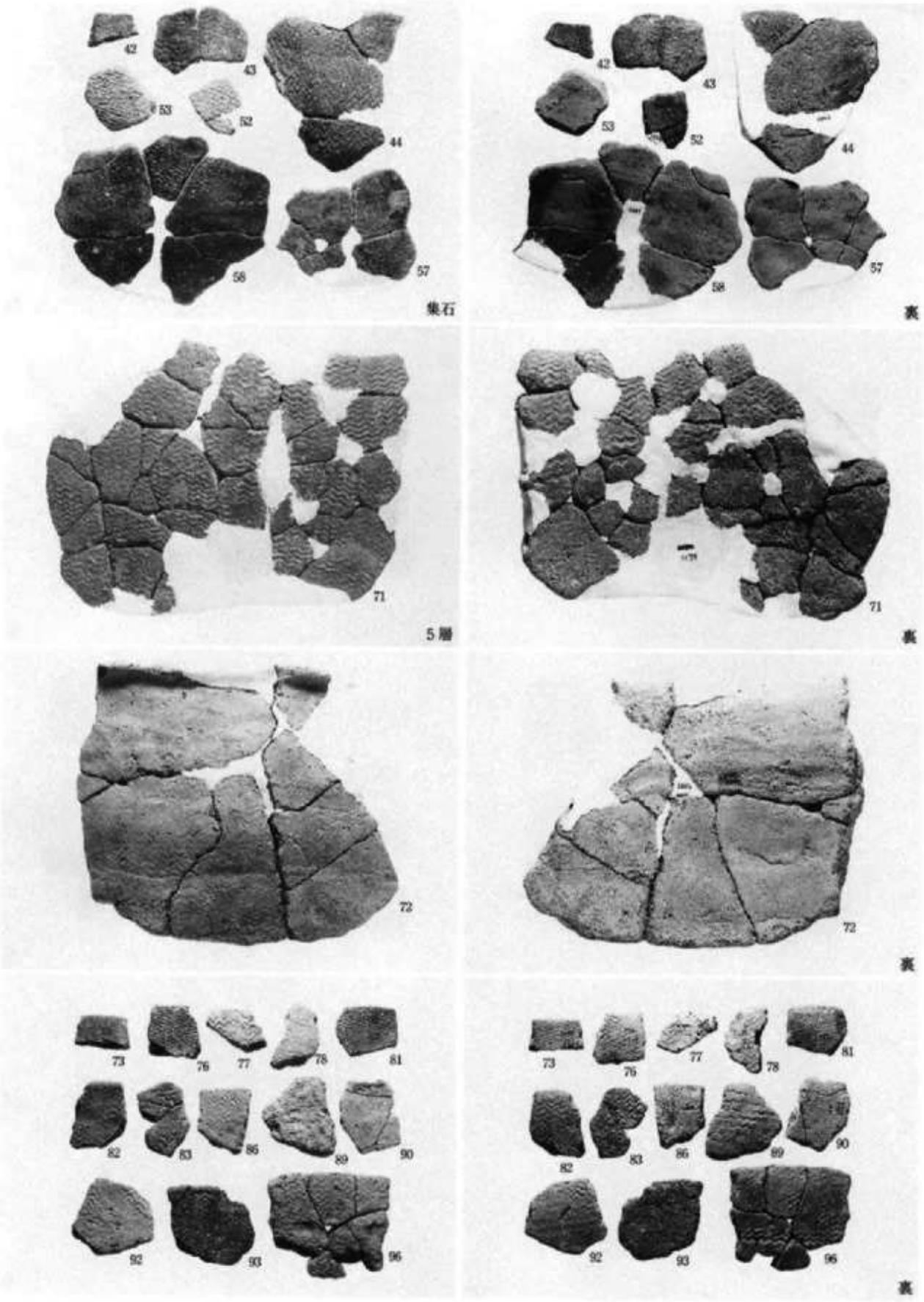
図版82 (1) Ⅲ区1Ｔｒｅ９ａ層遺物出土状態
(2) Ⅲ区Ｍ９区土層堆積状態



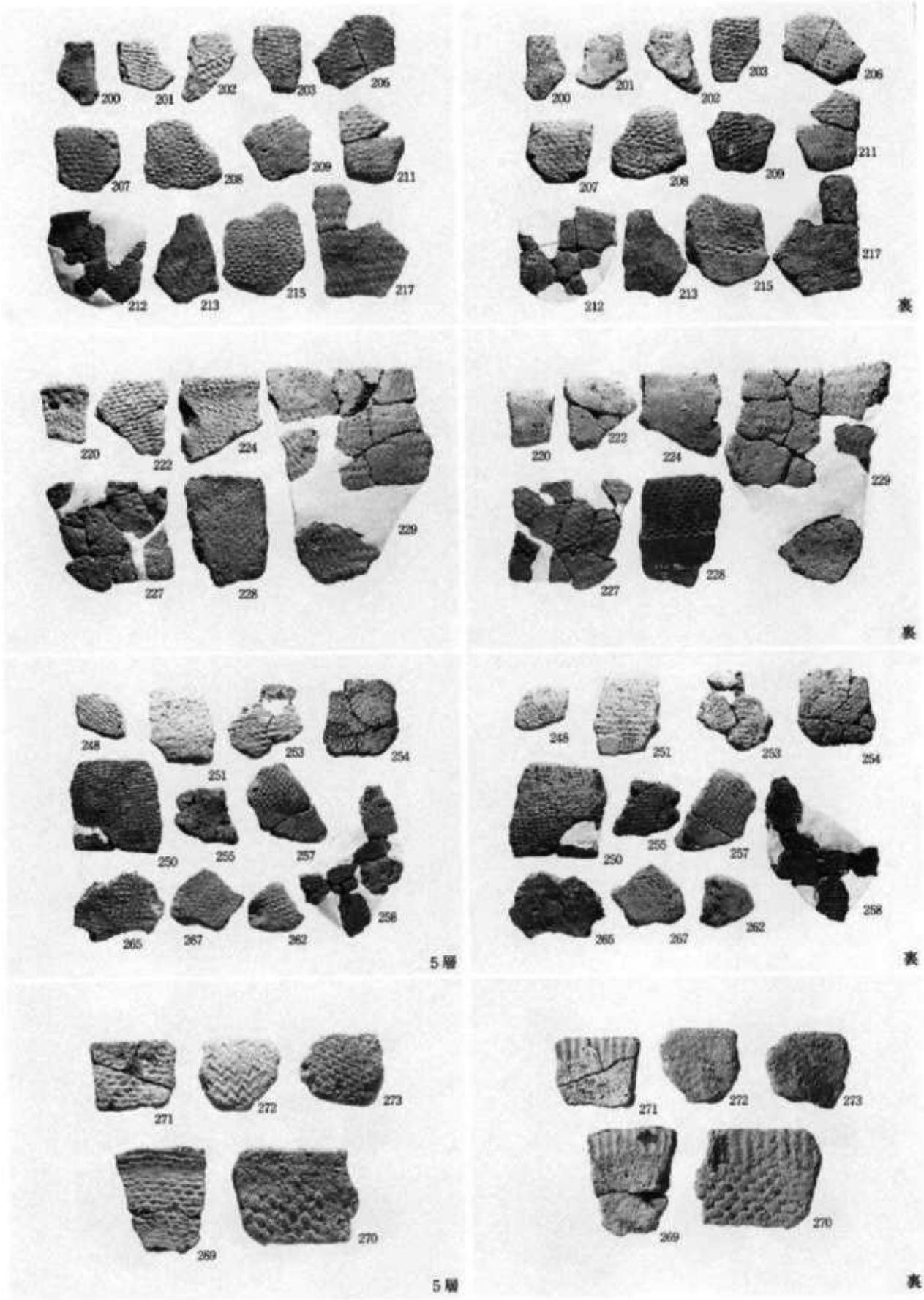
図版83　Ⅲ区遺物出土状態



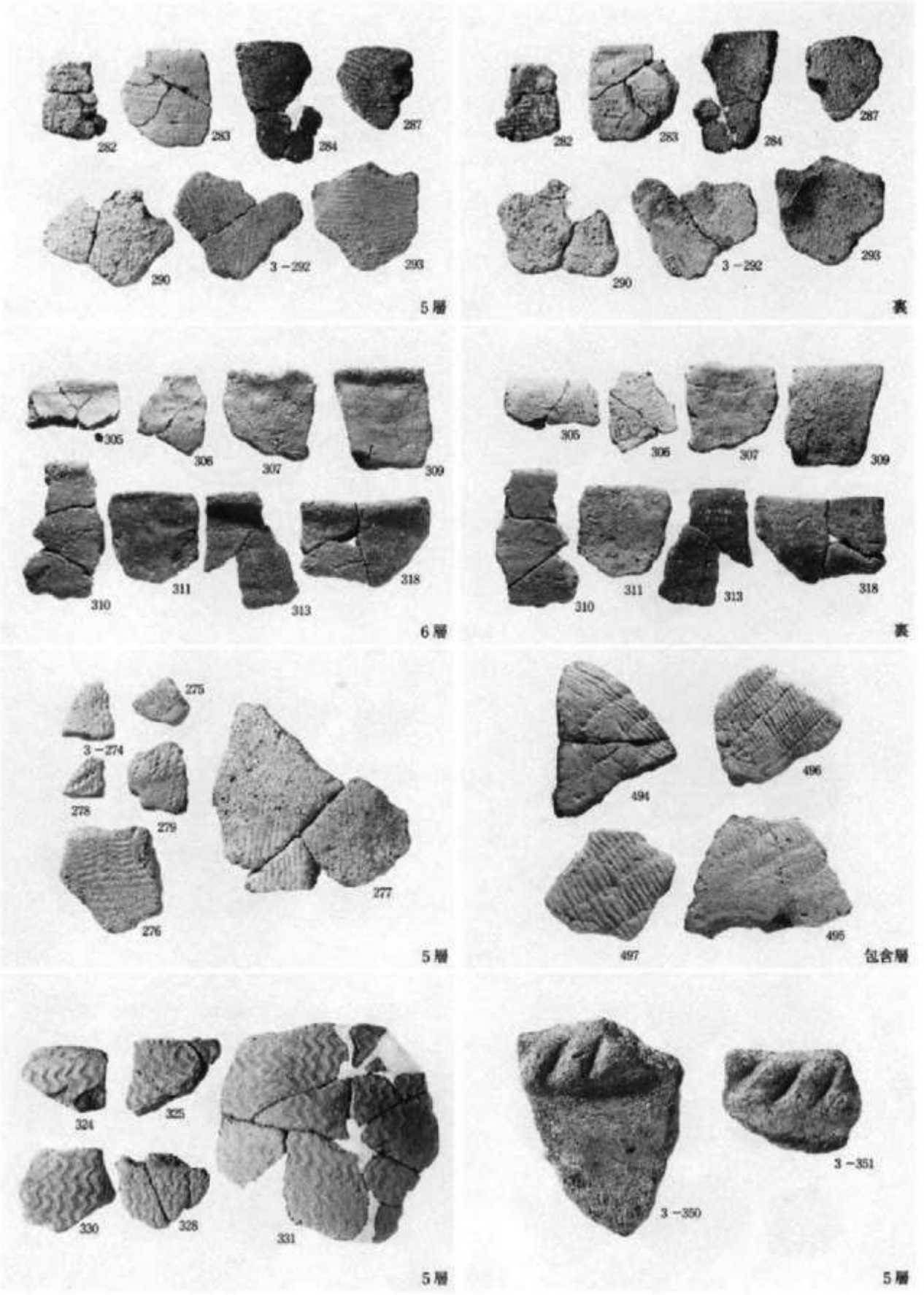
図版84　土坑・炉跡・集石出土縄文土器



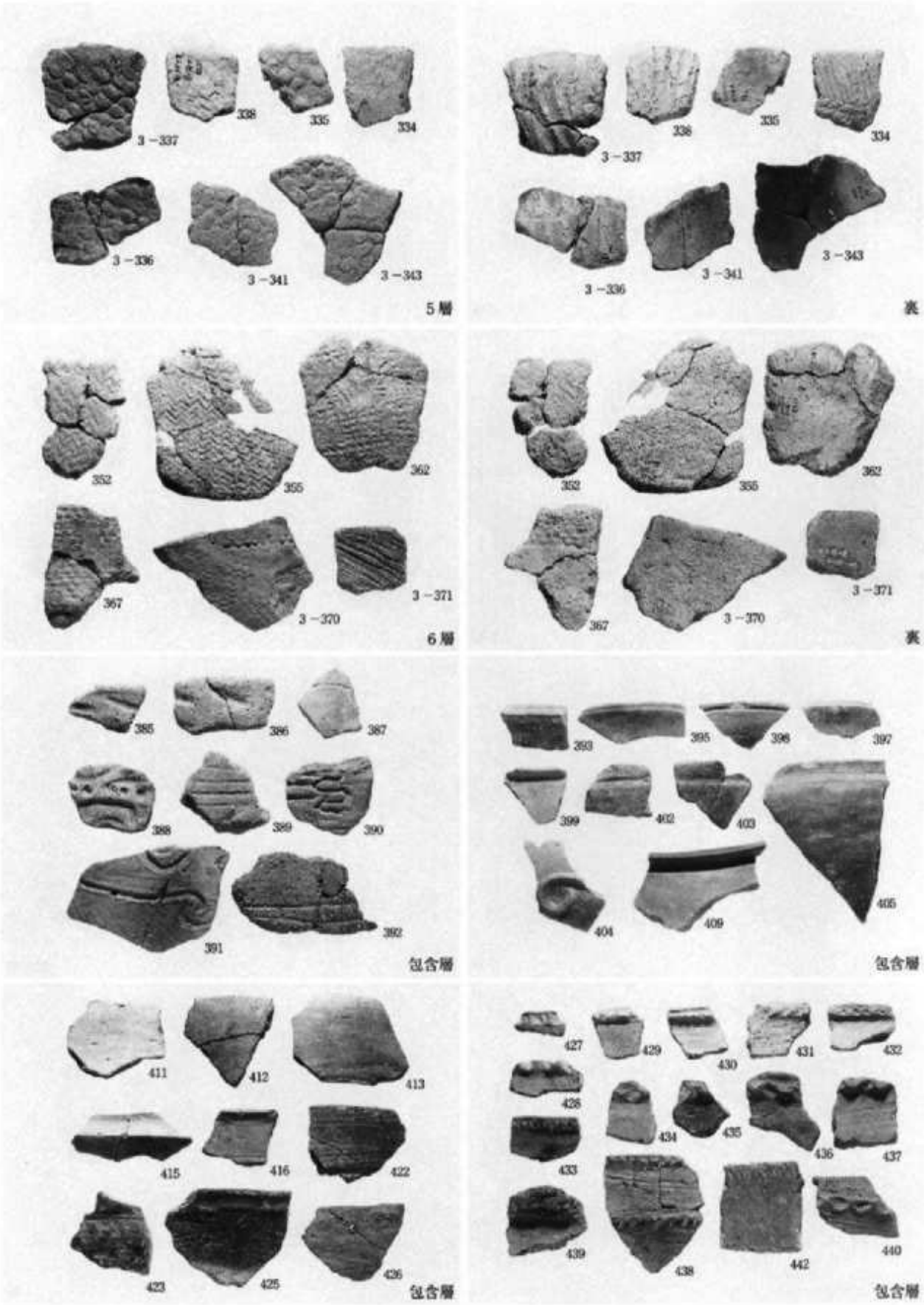
図版85　集石、Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器



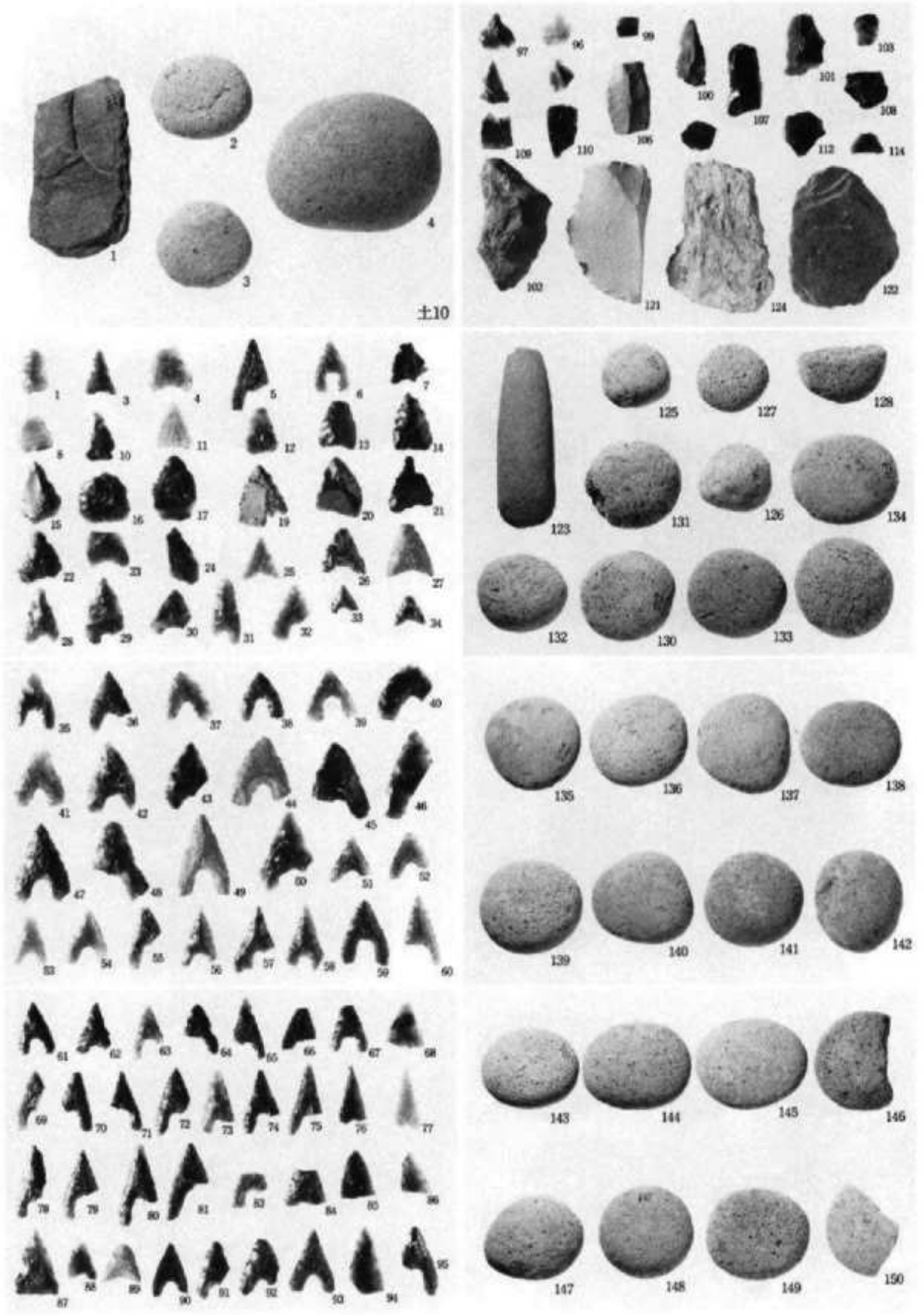
図版86　Ⅱ・Ⅲ区5層出土縄文土器



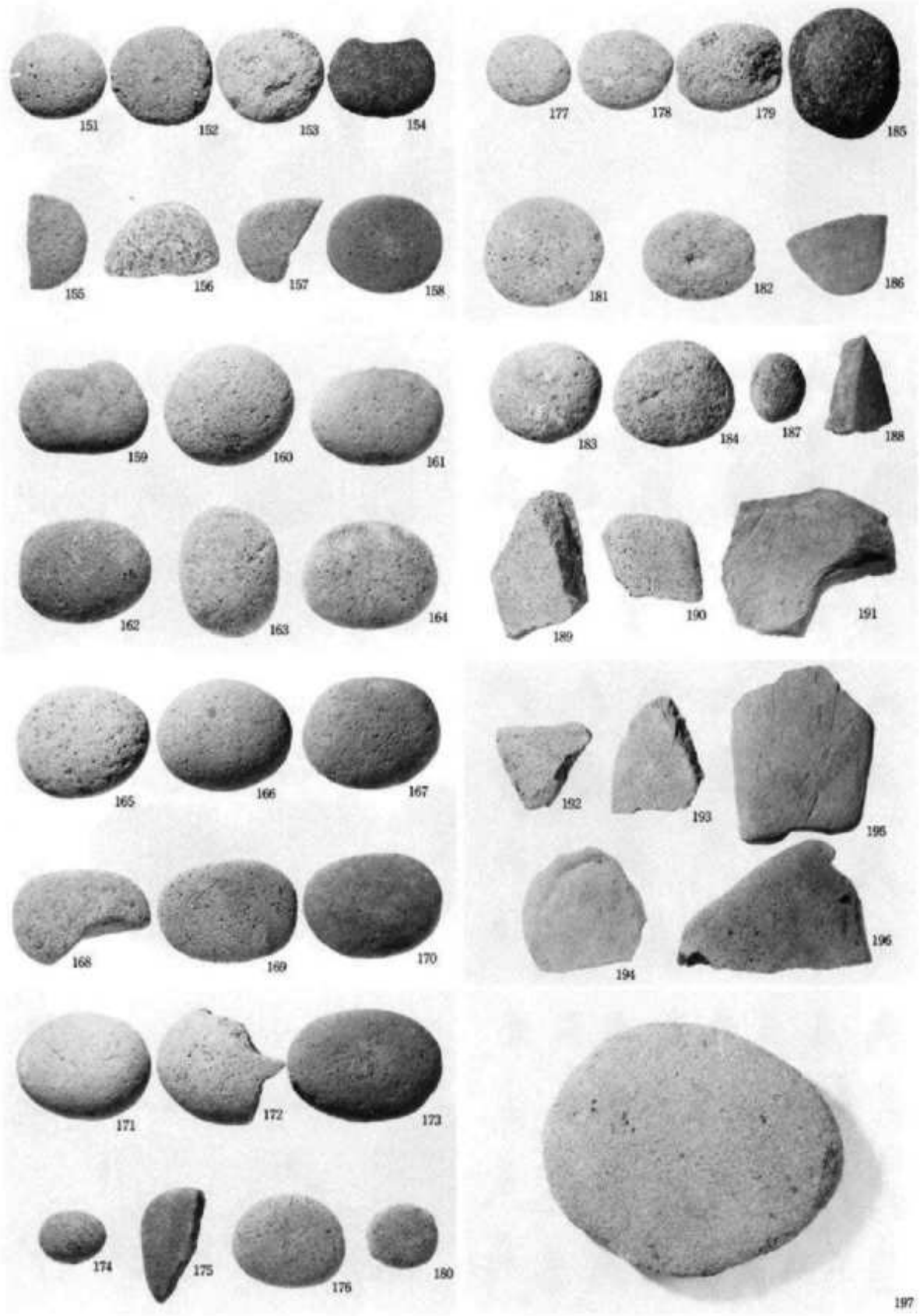
図版87　Ⅱ・Ⅲ区5・6層、包含層出土縄文土器 1



図版88　Ⅱ・Ⅲ区5・6層、包含層出土縄文土器 2



図版89　Ⅱ区出土石器 1



図版90　Ⅱ区出土石器 2

198

199

200

201

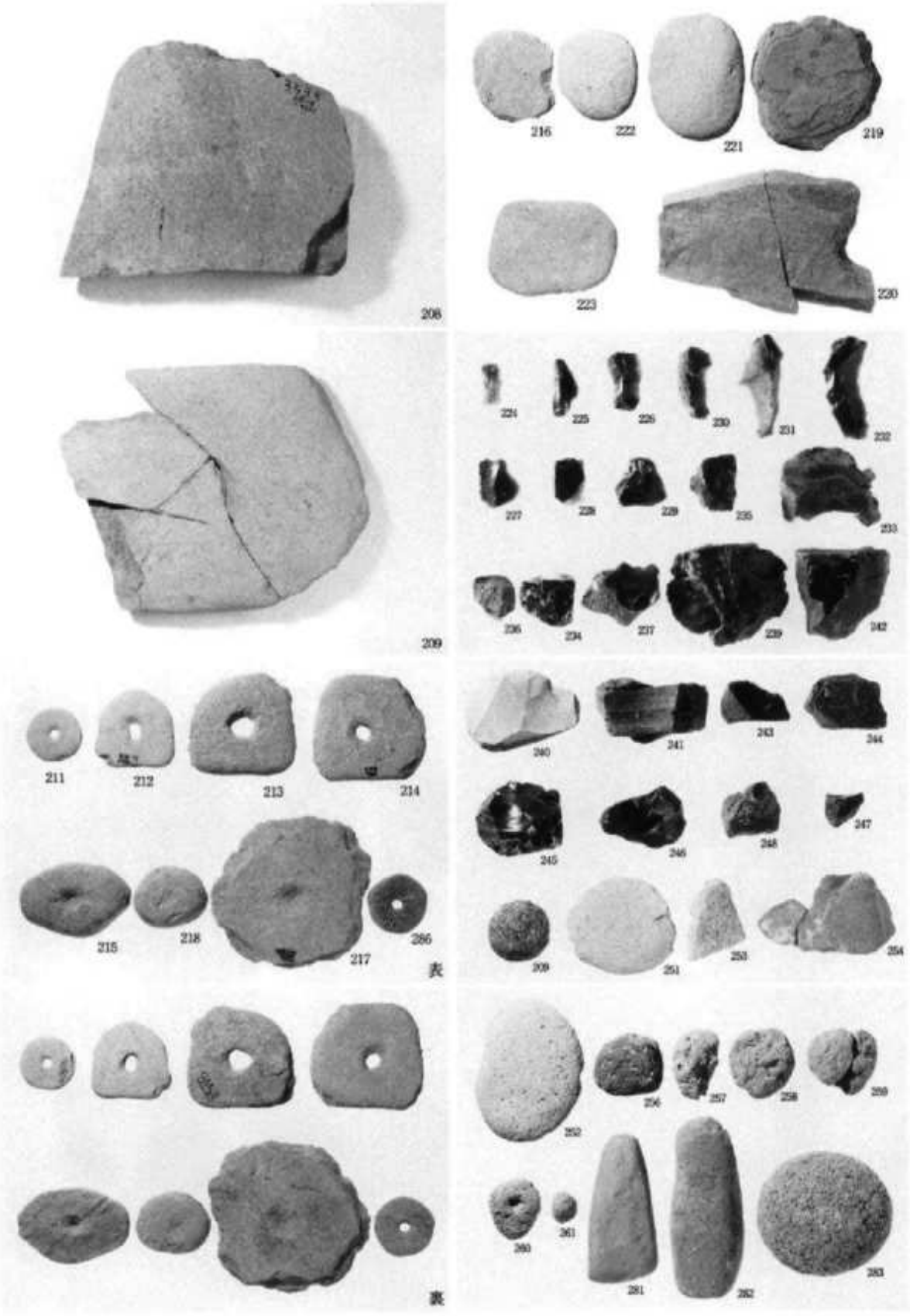
202

203

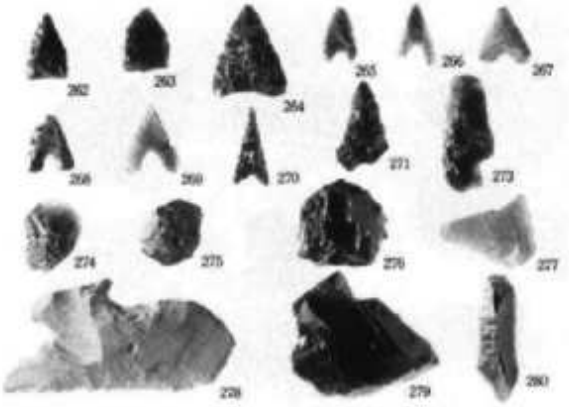
204

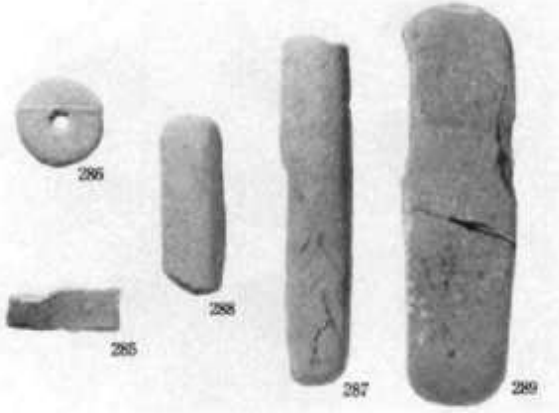
205

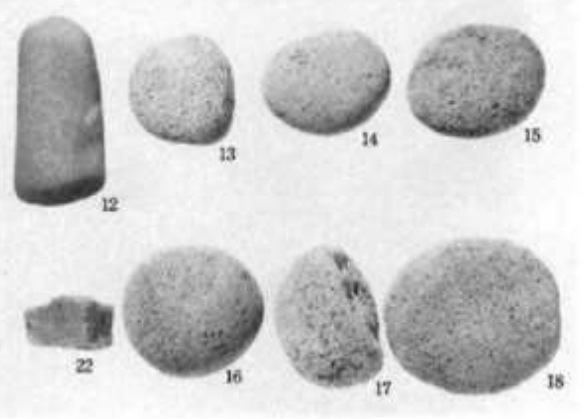
図版91　Ⅱ区出土石器 3



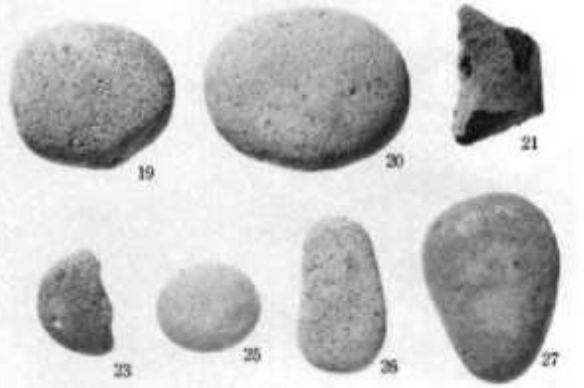
図版92　Ⅱ区出土石器 4

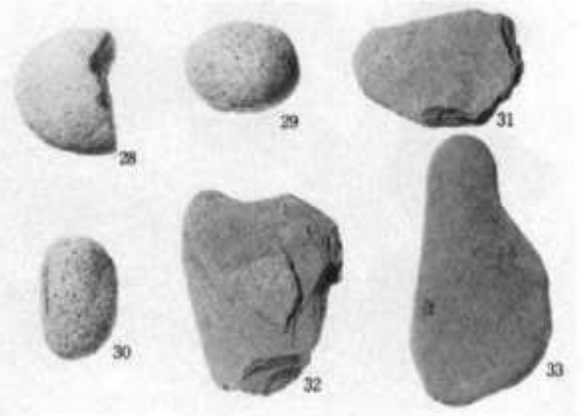




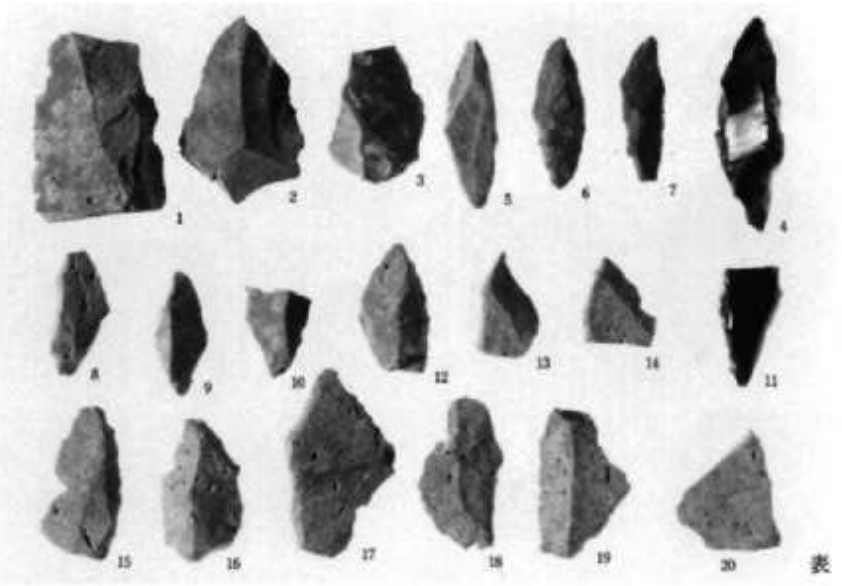


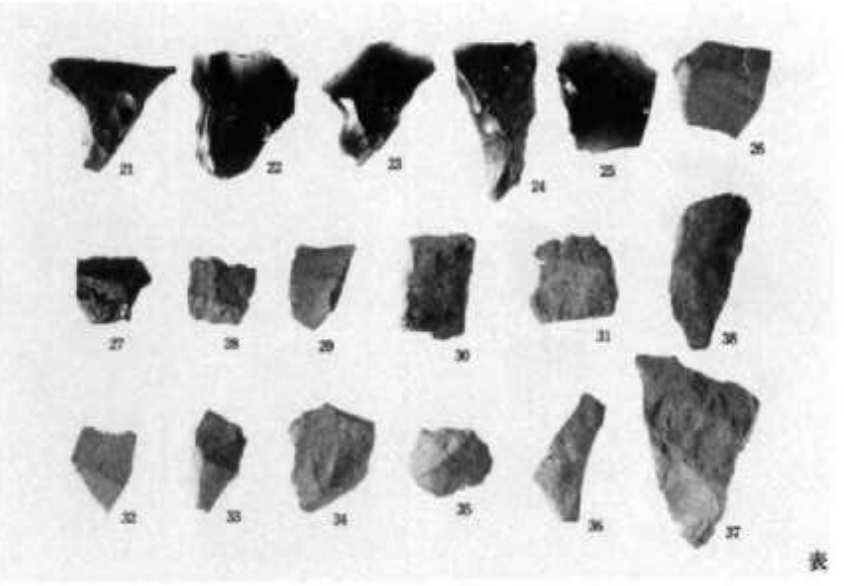
黒曜石原石

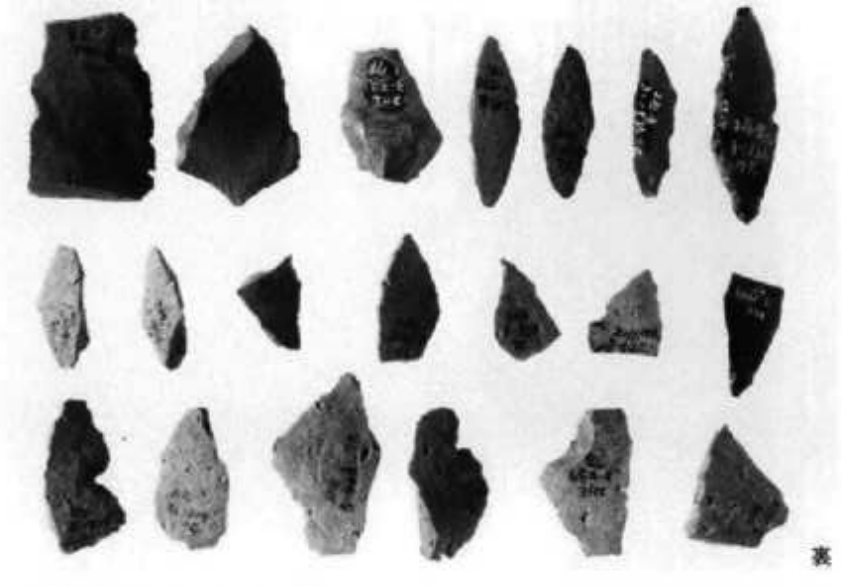




図版93　Ⅱ・Ⅲ区出土石器

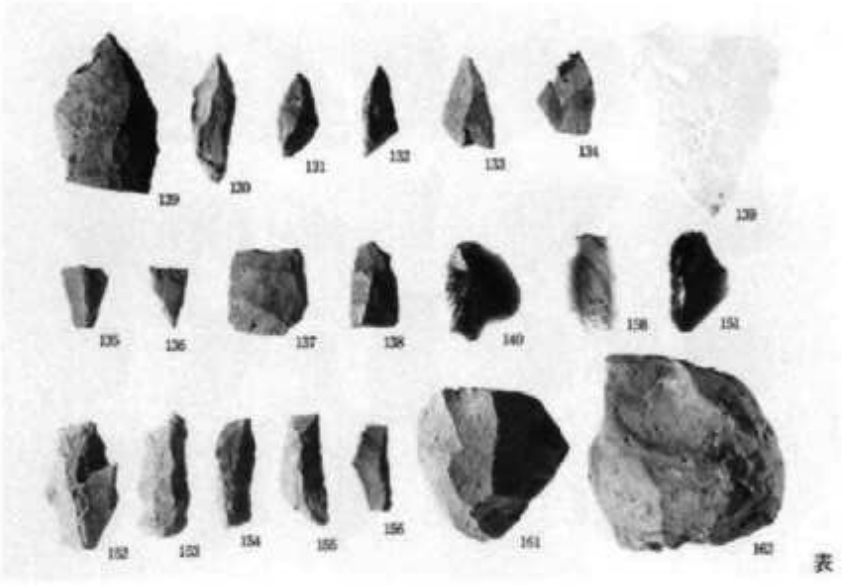


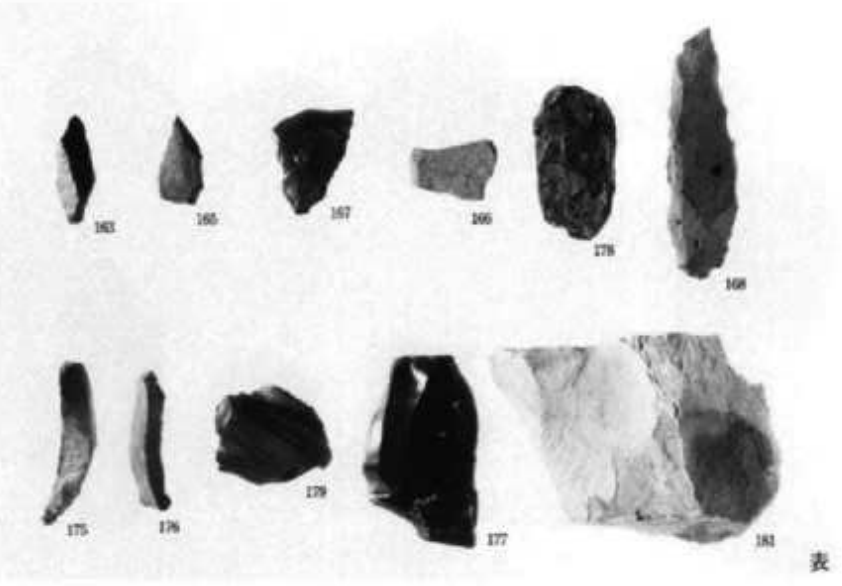


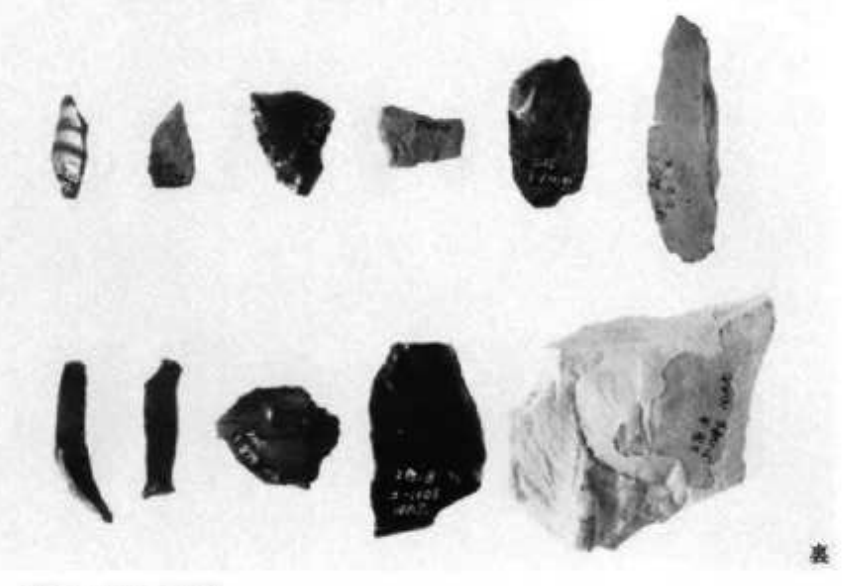


図版94　Ⅲ区9a層出土石器

図版95 Ⅲ区6a層出土石器

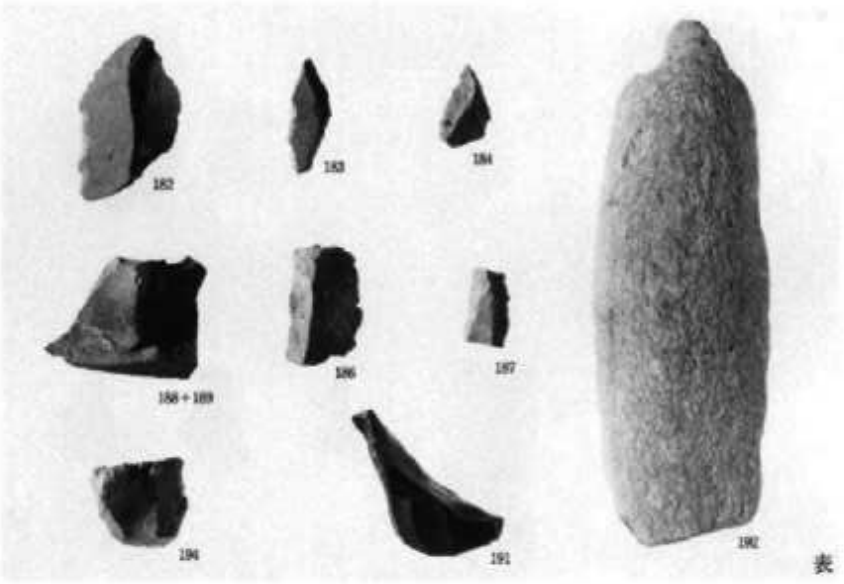


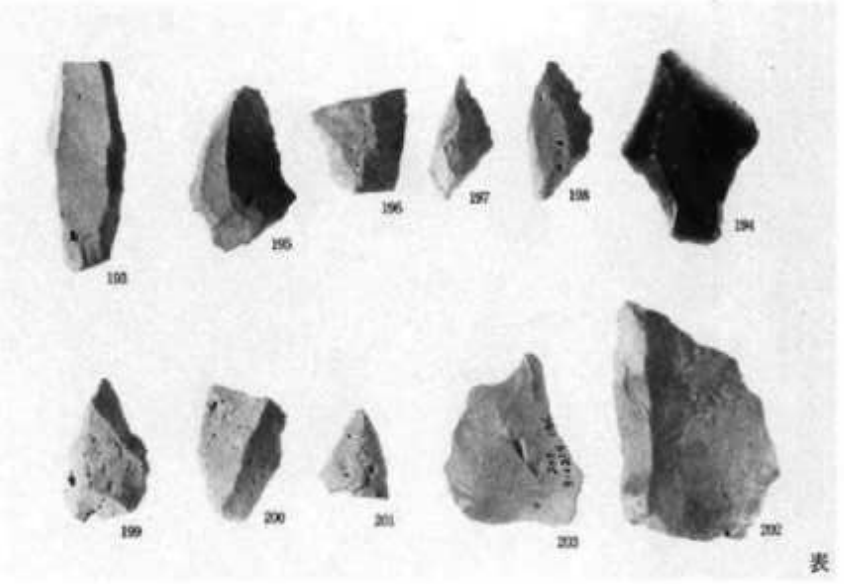


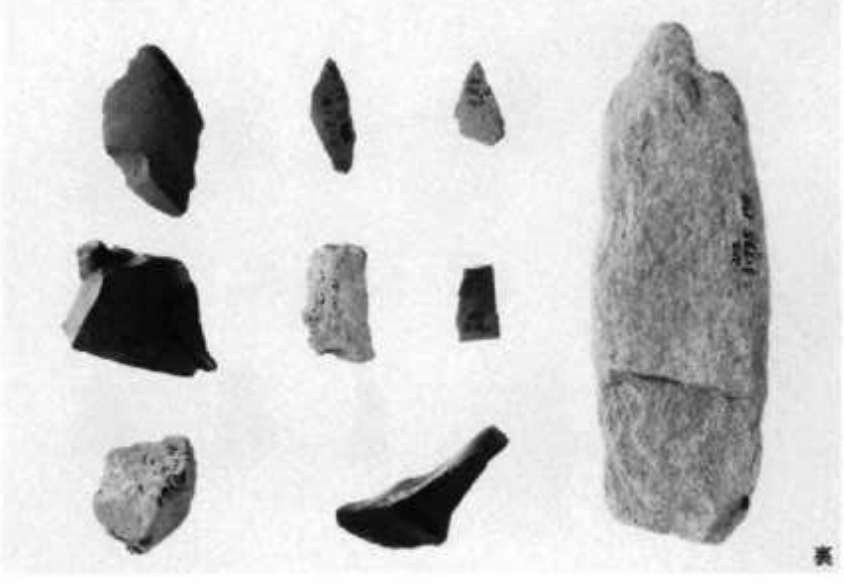


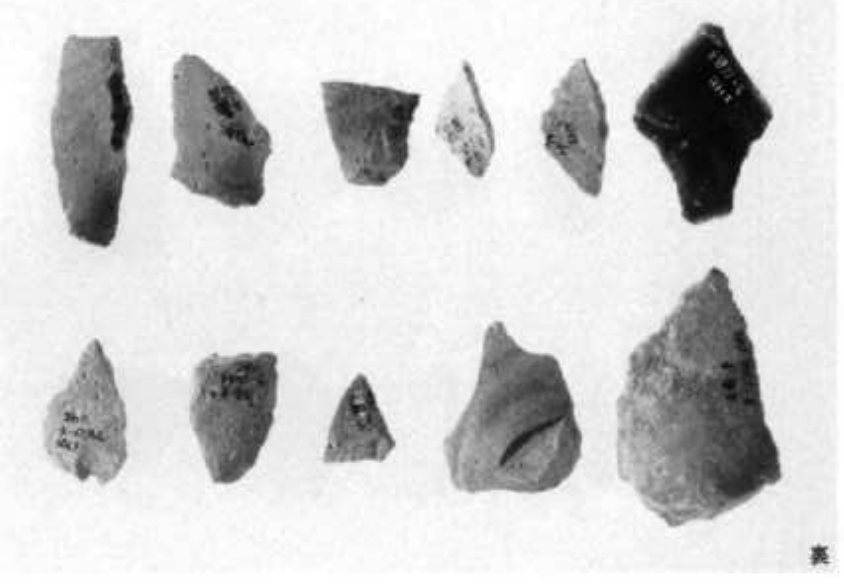
図版96　Ⅲ区9b層出土石器

Ⅲ区10a層出土石器



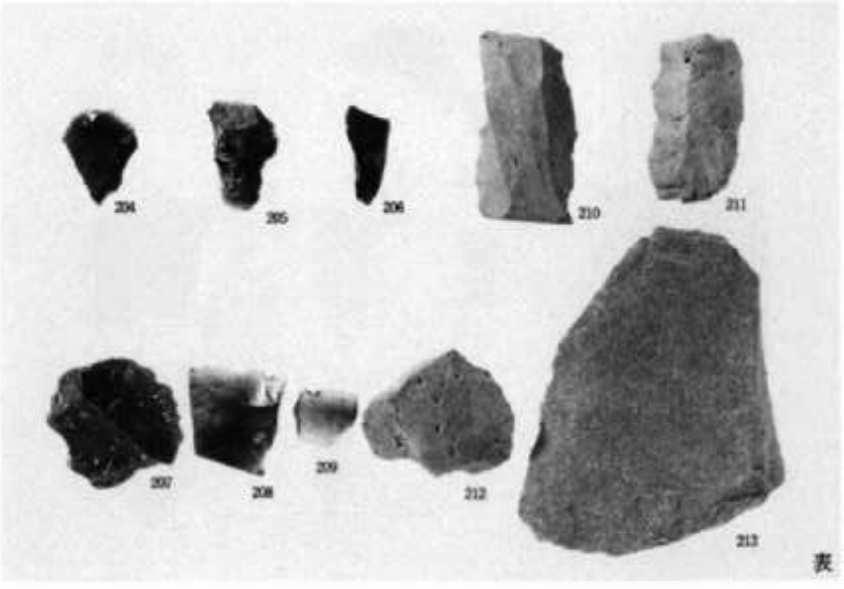


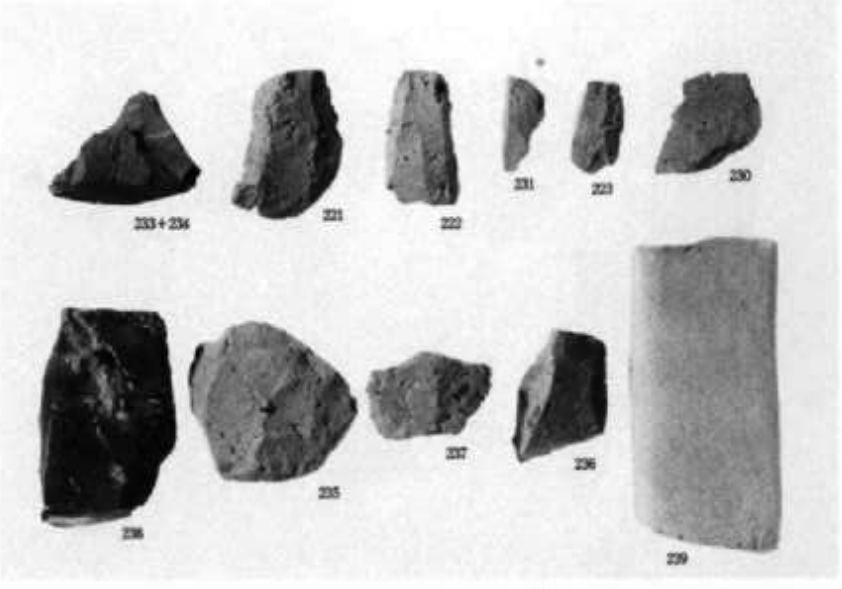


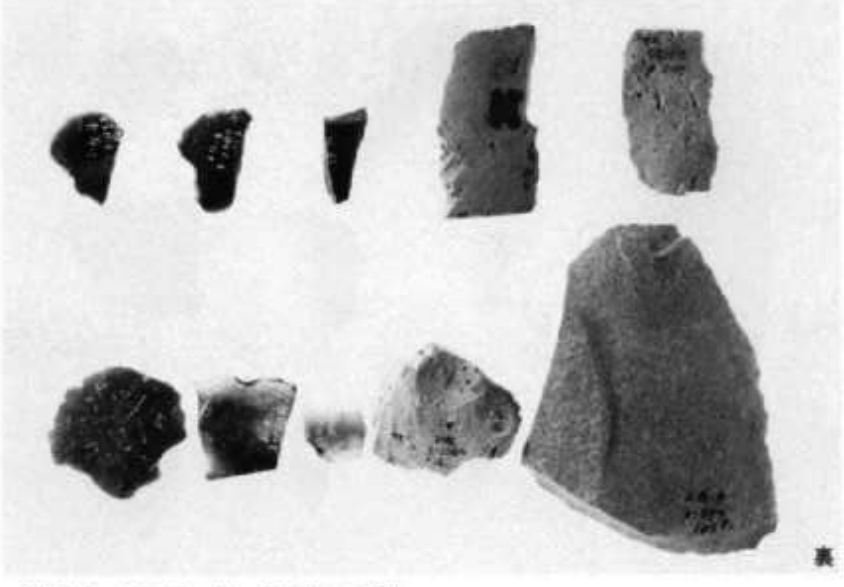


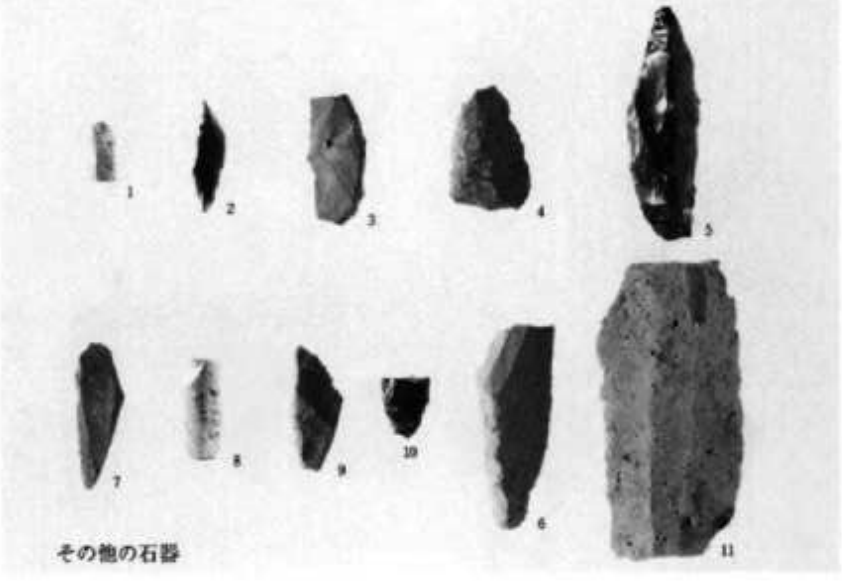
図版97　Ⅲ区10ｂ層出土石器

Ⅲ区10ｃ層出土石器









図版98　Ⅲ区10ｃ層・その他の石器

報告書抄録

フリガナ	はるのひがしいせきⅡ
書名	原の東遺跡Ⅱ
副書名	朝倉郡朝倉町菱野所在原の東遺跡の調査Ⅱ
巻次	
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	−53−
編著者名	木下　修・佐々木隆彦・水ノ江和同・杉原敏之
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812−8575　福岡市博多区東公園7−7
発行年月日	西暦　1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
はるのひがし 原の東遺跡	朝倉町大字菱野原の東遺跡	404420	570368	33°22′40″	130°44′55″	19870609〜19880326	7,340	九州横断自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の東遺跡	集落	古代	竪穴住居跡 2 掘立柱建物 1 土坑 3 溝 4	土師器・須恵器	
	墓地	古墳時代	円墳・方墳17 土壙墓 3	土師器・須恵器・鉄器・装身具	銅線入ガラス玉
	集落	弥生時代	竪穴住居跡12 貯蔵穴 6 土坑 15	弥生土器・石器・土製品	
		縄文時代	土坑 10 石組炉 38 集石遺構 9	押型文土器・石器	稀にみる石組炉群
		旧石器	集石遺構 3 土坑 1	石器	多量の石器

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
—53—

平成11年3月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷　株式会社　西日本新聞印刷
福岡市博多区吉塚8丁目2番15号

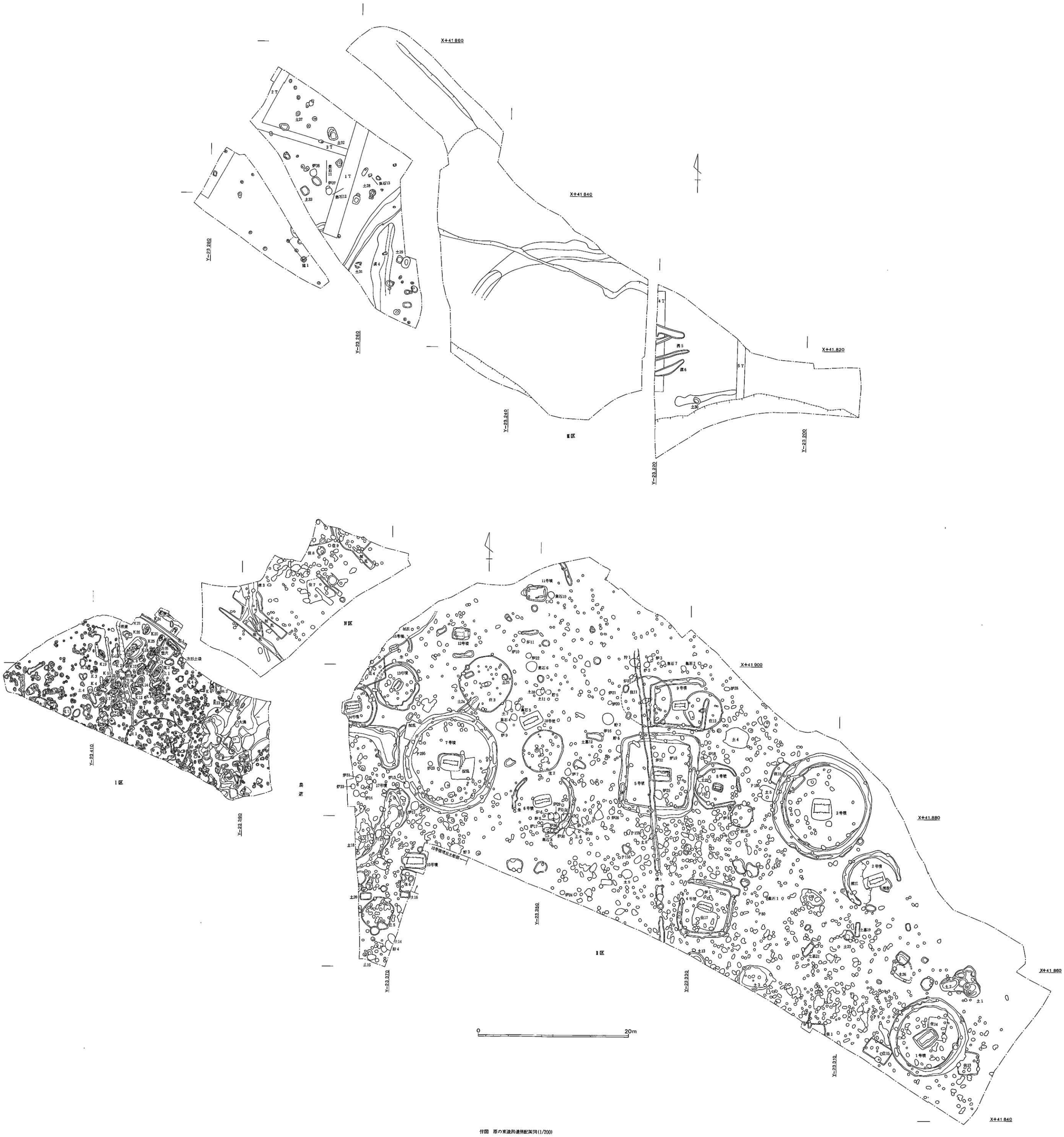
福岡県行政資料

分類番号	所属コード
JH	2133051
登録年度	登録番号
H10	8

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
—53—

朝倉郡朝倉町大字菱野所在原の東遺跡の調査II

付　図



付図　原の東遺跡遺構配置図(1/200)